EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03033 3405

昭和五年九月七日印刷
昭和五年九月十日發行

有朋堂文庫
狹衣物語（非賣品）

編輯者　東京府下大久保町西大久保二百三十六番地
塚本哲三

印刷兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地
三浦捷一

印刷所　東京市神田區錦町三丁目九番地
有朋堂印刷所

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地
有朋堂書店

不許複製

こそ見え給へれ。

狹衣物語終

御衣のつま―女二宮の・

女郎花の云々―「人の見る事や苦しき女郎花秋霧にのみ立ち隠るらん」たちかへり云々―女二宮を女郎花に比したる也

と宣はするまゝに、御簾の内に半は入らせ給ひ、御衣のつまを引寄せて、泣き歎かせたまふ涙のしづくのところせきも、恐しくわりなきに、院の御方より、「道たど〳〵しからぬ程に歸らせ給ひね。みだり心地も、いまなむ消え侍るやうに思ひたまへらるゝ」と聞えさせ給へるを、聞かせたまふ御心地ども、さま〴〵に亂れて、ものも覺えさせ給はぬに、右大將參りたまひて、御輿寄せたるよし奏し給へば、出でさせ給ふ御心地、なかなかおぼつかなくて過させたまひし月頃よりも、飽かずあはれに思召されて、御輿にもたてまつりやらず。御前の花さかりに咲きみだれて、夕露重たげにて紐ときわたしたる色色、いづれともなく見おきがたき中にも、女郎花の、人の見ることや苦しからむ、霧の絶間わりなげなる氣色にて、たち隠れたるは、なほいと過ぎがたく思召さる。

狹　たちかへり折らで過ぎうき女郎花なほやすらはむ霧のまぎれに

とながめ入らせたまへる御容貌の夕榮、なほいとかゝるためしはあらじと見えさせ給へるに、世とともに物をのみ思して過ぎたまひぬるこそ、如何なりける前の世の契にかと

今はいかで―狹衣の心
かけ〲しき―好色がましき
見直され―女二宮の自分に對する感情を直す
この御心地―嵯峨院の御病狀
すくよかに―謹直に
げにかたはらいたく―女二宮の心
なほ人よりは―狹衣の心
斯くしなし―斯く尼にして仕舞ふたかと
あさましく―心外なる隔てがましき御待遇の依つて來る所を思へば皆自分の過なれば
あらぬ處もがな―世を離れたる處に行つて仕舞ひたしの義歟
死にもせじ―引歌未詳

き御心なり。今はいかで、かけ〲しき氣色も見えたてまつらで、たゞかゝる方につけても、見直され奉るわざもがな、思ひいでもかひあるべき御樣にもあらぬを、など強ひておぼし慰めつゝ、この御心地のことなどを、すくよかに聞えなさせたまへば、げにかたはらいたく聞き苦しき事にはあらねど、はか〲しく答へ聞えさすべき事も覺えさせ給はねば、たゞうち歎かせ給へるも怪しく、なべてならず物哀げに、心苦しき御けはひ、なほ人よりはことに思さるゝを、斯くしなし奉りけむよと思しつゞくるにぞ、忍びかへさせたまひつる涙、もり出でさせ給ひぬる。狹「あさましく覺束なき御もてなしを思へば、すべて身より外につらき人なければ、なほいかで疾く、あらぬ處もがなと願ひ侍るも、いざや、さてもかく憂きものに思しはてられながら、何處にもありがたくや。後の世も、いたづらとかやになし侍らむこそいみじけれ。死にもせじとか。實に身をこそ思ひ給へ侘びにたれ。

消えはててかばねは灰になりぬとも戀のけぶりはたちも離れじ」

入道の宮―女二宮
寄らせたまひて―狹衣が
九重の―汝が一向宮中へ來ぬも此野邊の景色の美しさでは道理なり
例の心づくしなる―狹衣の不相應なる戀情を中納言のすけが珍しく思ひて
物おぼし亂るゝ―女二宮が
おはします所―狹衣の
然にやとおぼゆる―女二宮かと思はるゝ
うれしきに―狹

たまひても、こゝを荒さで、かならず住みたまへ」など申し置かせたまへば、何事も、思しおきてむに違へさせ給ふまじき由を、聞えさせたまふに、暮れぬれば、歸らせたまひなむとて、入道の宮のおはします、中隔の障子口に寄らせたまひて、御扇をすこし鳴らさせ給へれば、中納言のすけ聞きつけて參りたるも、むかしの心地せさせたまひて、いとゞ物哀なり。狹「九重の宮づかへのむげにおろかなるも、この頃はいと理と見ゆる野邊の景色かな」と宣はせて、狹「かゝる序などに、みづから聞えさせでは、また何時かは」と、例の心づくしなる御けしきも、めづらしくて參りきこえさすれば、常よりも物おぼし亂るゝところにて、女二「何事をかはきこゆべからむ」とて動かせ給はぬを、院も聞かせたまひて、嵯峨「みづからなほ聞えさせたまへ。人づてには有るまじきことなり」と御消息あれば、いと初々しくつゝましけれど、やがておはします所近きほどなれば、すこし寄らせたまへるを、然にやとおぼゆる御匂のうちかをりたるも、まだならはせ給はざりつることとなれば、心騷してうれしきに、胸さへおどろ〳〵しく鳴るも、人わろ

とまり給はむ宮達―あとに生き殘るわが娘どもを世話してくれるのが何よりの有難さ
徒には―ゆく〳〵は帝位をもつがせてくれるならんと
この世を別れむ―父皇と共に死にゆきたしと女二宮が願ひ

を待ち侍りてなむ今日までも」など宣はするさまも實にいと頼もしげなく弱らせ給ひにけると、いと悲しく見たてまつらせ給ふ。狹「いと斯ばかりにならせ給ふまで、御祈なども更にせさせ給はず、音なくて過ぐさせ給ひつらむこそ、いと悪しきことに侍れ。すこしも例ならずおはしまさむ折などは、明暮つかうまつるべきものと思う給へし本意なく、今まで見たてまつらざりける事」とて、うち泣かせ給ふを、いと辱くあはれに思召さる。嵯峨「なにかと惜むべき齢にも侍らず。なからむ後に、このとまり給はむ宮達をとぶらはせ給はむのみこそ、うれしきことに思う給ふべき。兵部卿の宮は、今はさりとも徒にはなさせ給はじと、御志の程も頼もしく思うたまへ侍れば、いと心やすくなりて侍り。入道の宮こそ、この世を別れむことも諸共にとおぼしねがひ、又自らも、とどめむは心ぐるしき事に思ひたまへれど、つひにはその思ひ違ひぬべきに侍るめるを、おぼし怠らず訪らはせたまへ。公にならせ給ひては、なか〳〵かやうに、寂しきやどを思しやらむことは難くこそ侍れど、御心のほどを見おきて侍れば、頼もしくなむ。位を去らせ

この御料の―故姫君の爲功德になるべき事は

●嵯峨院御病、狹衣の御見舞、狹衣女二宮に對面

かくこそ―斯く斯くと知らせもせず

うちはへたる―引續きて御食事も

御散飯―佛神に供する飯

風のいもひ―引風に對する手當位にて

元よりあるべきほどの―尋常の父子の情以上の厚き御中なれば

いみじき御盛りにて―狹衣が

今日やとのみ―今日は死ぬかとのみ

させ給ひて、此御料の功德は、そこにてぞ月日に添へて作りかさねさせ給ひける。

嵯峨の院の御心地なやましく思し召されて程經にければ、かくこそなども宣はず、うちはへたる御齋も、御散飯ばかりとらせたまひつゝ、風のいもひばかりにて、阿彌陀佛に向ひきこえさせ給うて、たゞ疾くむかへさせ給へと念じ入らせ給へるに、此十餘日となりては、をさ〳〵え起き居させ給はずならせ給ひにたるにぞ、誰も見たてまつり騷ぎける。一條院の后、兵部卿の宮なども、この頃は一所に集らせ給ひて、おぼし歎く樣どもいと心ぐるしげなり。帝も元よりあるべきほどの御志ばかりはあらぬ御中なれば、おぼつかながり聞えさせ給ふを、院よりも、今一度の對面は必ずあるべき樣にきこえさせ給へれば、八月一日行幸あり。院いみじく思しよろこびて、あながちに起き居させ給ひて、御對面あり。見たてまつらせ給ひし頃よりも、いみじき御盛りにて、あるべき限ねびとゝのはせ給へる御樣、まことに見たてまつらば命も延びぬべきを、まづうち泣かせ給ひて、院「月ごろもいと心ぼそくて、今日やとのみ思う給へつるを、かゝる行幸

⦿狹衣がかの遺愛を經紙にすかせて經文を書寫し常磐の家を寺にして人々の菩提を弔ふ
ひきこめて―仕舞込みて
自らならざらむ―手づから見せるのでなければ
見るほどの―我命のある内の志としては

ぐらし、泣きくらさせ給ふさま、いと心苦しげなり。

上はひと所おきふし御覽ずるに、海山なみ風のけしきよりはじめて、女のしわざとも見えず、書きすましたる筆のながれ、ひきこめて止みなむは口惜しう、をかしさもあはれさも、見知らむ人に見せまほしきを、齋院ばかりには、いみじく御覽ぜさせまほしけれど、自らならざらむかぎりは、さすがに目はなちがたきものを、心のどかにおきたらむも、明日もありとは思ふべくもあらぬ世に、見るほどの志には、これをだにも弔はむあるに任せてありぬべかりける身のほどを、たゞ我故こそは、この世をいとひ捨て、あの世の妨ともなるらめ、と思召せば、わが御許に殘しおかせ給ふもいとほしく思召されて、

狹　過ぎにけるかたを見るだに悲しきに繪にかきとめて別れぬるかな

などおぼしめせど、ありし扇ばかりを殘させ給ひて、皆細々となして、經の紙に加へてすかせ給ひて、金泥の涅槃經、御手づから書かせ給ひけり。彼常磐をば、やがて寺にな

御覽じ—狹衣が

さくりもよゝ—しやくりあげて泣く有樣

かすめよな—わかりにくき歌也、故姫君に死おくれたるが悔しき由なるべし

かの人—故姫君

いとゞかゝりぬべき—「かゝりぬべき」は「なりぬべき」の誤なるべし

涼しき道のしるべ—故姫の極樂往生のための追薦

心のどかに—かの畫卷をゆつくり見られなかつた事を

故姫 おくれじとちぎらざりせば今はとてそむくも何かかなしからまし

と、あるを御覽じ出づるまゝに、さくりもよゝとかや、亂れがはしき淚の氣色を、中將が近くて聞くらむ事も、あまり心弱きやうなり と思しつゝめど、泣くよりほかの事なし。

狹 かすめよなおもひ消えなむ烟にも立ちおくれてはくゆるならまし

狹 おちたぎつ淚の水脈ははやけれど過ぎにしかたにかへりやはする

など、書きつけさせたまひても、かへす〴〵かひなく思召さるゝことかぎりなければ、宮には、狹「御覽ぜむ度每に、なか〳〵淚の催ともなりぬべく、またかの人のほだしにも、いとゞかゝりぬべきものにて侍るめるを この一卷ばかりは、涼しき道のしるべにもなし侍らむ。今は、とてもかくてもかひなき事を、過ぎぬる方のこと、な思しものせさせたまひそ」など、きこえ慰めさせ給ひて、この繪ひとつを取らせ給ひて渡らせ給ひぬるを、宮は、心のどかに見ずなりぬる事と、あかずくち惜しう覺えさせたまひて、日

この宮―一品宮
御迎に―以下日記の中の一節の趣なり
物がたり高やかに―赤子即ち一品宮が
御心地―故姫君の
平かに―無事でさへ居れば
行末を―我が餘命も長からずと思はるゝに此の赤子に別るゝことよ
宮の―一品宮の
尼になり―是も日記の一節の趣なり
尼になり―故姫が
言ひ契り―狹衣と

この宮うまれ給ひて後、いとゞ物思はしさまさりて、いといみじく、心地も生くべうも覺えざりければ、一品の宮にわたしたてまつりてむと、思ひなり給ひけるありさま、悲しともよのつねなり。御迎に、乳ある人など賜はせたれば、心地のくるしさを念じて、いだき取りたてまつるに、何心なくうち笑みつゝ物がたり高やかにし給ふを、顏に涙のとりもあへず、ほろ〳〵とこぼれかゝれば、袖を顏にふたぎて、えだに見たてまつらぬに、尼君、「御心地いとゞくるしきに、いと斯くな思し入りそ。平かにものしたまはば、忍びつゝは常に見たてまつり給ひてむ。行末長くこそ思さめ。なあゆゝし」とて抱き取り奉るを、「なほ暫しは」などもえ宣はず、

故姫　行末をたのむともなきいのちにてまだ岩根なる松にわかるゝ

とあるを見給ひつらむ宮の御心地、げにいかばかりか思されつらむ、とおぼしめすに、また尼になり給ひにけるにも、言ひ契り給ひし事ども、まづ思ひ出でられ給ひて、いみじう泣き居へる所に、

我が世に―姫君自身御一生に

時々も御覽じ―狹衣が折々通ふ樣になりて以來の記事には

逢ふことなくて―實際の通りに書きて

とゞめつ―こゝに書く事をやめたり

常磐にかへりて―故姫君がくち惜しかりける―以下故姫の心

我とは―自分から狹衣に知らせる譯にはゆかず

わすれずば―狹衣がもし我を忘れぬならば我を尋ねてくれゝばよいに、身を投げて死にたりとのみ思ひ居るならん

めでたき中にも、我が世にありけることども、月日たしかに記しつゝ日記して　さるべき所々は繪に畫きたまへり。わが時々も御覽じ初めしほどよりの事どもは、今すこし目のみ留らせたまひて、あはれに悲しくおぼしめさるゝこと限なし。みづからの有樣御かたちなども逢ふことなくて　うち忍びつゝ立ち寄り給ひし夜な〳〵の月のひかり、風の音なひ、宵曉の空のけしきなども、我が心にをかしくもあはれにも、目とまり心なしめ給ひけるをり〳〵を、書きあらはしたまへる、萬よりも、彼の、心にもあらず筑紫へ下りたまひける程のありさまは、目のみ霧りふたがりて、はか〴〵しくだに御覽じやらず。歌どもは、扇にかゝれたりしなど、同じことなればとゞめつ。常磐にかへりて、心地すこし落居るまゝに、思ひつゞくる事おほく、くち惜しかりける身の宿世いとかなし、我とはおどろかし奉るべきやうもなく、人は底の水屑とのみこそは聞きなし給はめ、いまは世にあるものとも思さじ、忘れ給ひぬらむかし、など思ひ給ひける程にや、

故姫　わすれずば端山しげ山わけは來で水のしたにや思ひいるらむ

怪しがらせ―狹衣が

かたはらいたければ―一品宮が

思しぬべき―それは一品宮が感動せられる筈ぢや

昔の人―故飛鳥井

わき葉―「若葉」歟

限のほど―常磐の尼の臨終の折

そこの―汝の

この御有樣も―一品宮も尼君を非常になつかしがり居たるものを

見ればはかなし―未詳

みづから―故姫君自身

給へり。あまり怪しがらせたまふもかたはらいたければ、中將ぞ、「かの常磐にさぶらひし老人の、むかし見え侍りけるあやしの反故どもを取りおきてさぶらひけるを、亡せ侍りし後、御覽ぜさせよといひ置き侍りしを、思うたまへ出でて、徒然のなぐさめに取り出でて侍りつる。あはれげなる事どもさぶらひけるにや」と奏すれば、帝「實にも思しぬべきことにこそは。昔の人のかはりには、笹のわき葉にてもたのむべきさまに言ひ契りしかひなく、限のほどをしも知らざりけるこそ本意なきことなれ。後にこそ、道季も言ひ出でたりしか。日ついでなど撰りけるとか。いま一度消息をだにせで、くち惜しきことなりや。そこのさぶらはぬは、常の里がちに目なれて、とがめざりけるよ。この御有樣も、いみじくゆかしげにものせしものを」など宣はせて、ありつる小唐櫃ひき寄せさせ給ひて、帝「これや昔のあとならむ。見ればはかなしとかや、光源氏の宣ひけるものを」とは宣はすれど、御覽ずるに、みづから書きあつめ給へる繪どもなりけり。世になべての人のすることとも見えず、有難かりける筆のたちどは、いづれも見どころありて

のどむばかり―自ら氣を以て直して和らぐる事の出來る位の年齡になりてこそ
上のふと―狹衣が不意に來られし故
聞きどころあるばかり―聞きごたへのある位の伎倆に仕立てたいものぢや
例ならぬ御氣色―一品宮が例ならず―御病氣か
昔の人―母の御君にそつくり也

思さるゝに、

飛鳥井 人知れぬ入江のさはにしる人もなく／＼きする鶴の毛衣

とさへ、書きつけられたるを見つけたまへる、如何ばかりかは思されつらむ。いと心ぐるしき御けしきを、中將は、何しに御覽ぜさせつらむ、今すこしおとなびさせ給ひて、物のあはれものどむばかりにてこそ、取り出づべかりけれ、とさへ思へど、我も忍ばれずかなしきこと多く、見どころある繪どももゆかしければ、片端づつひろぐる程に、音なくて、上のふとわたらせ給へば、何となく取入れて、中將は退きぬるに、近う物せさせたまひて、狹「いと徒然なりつれば、御琴もひかせ奉らむとて、參り來つるなり。いかで同じくば、聞きどころあるばかり、教へなしたてまつらむ」など宣はすれど、例ならぬ御氣色にてまぎらはさせ給へば、驚かせたまひて、狹「例ならず思さるゝかな」と聞えさせたまへど、御いらへも無くて、たゞうち臥させ給へるに、こぼれかゝりたる御髮のかゝり、顏やうなど、いとゞらうたげさ勝らせたまへるも、たゞ昔の人とおぼえさせ

㊁狹衣故飛鳥井姫君の日記の畫卷を得て悲む
宮―飛鳥井腹、一品宮
むかしの人―故飛鳥井姫君
その人の―亡母の事を一品宮が丸で知らぬよりは
女に―女は小宰相、一條院の侍女
まゐりたる―中將が一品宮へ
畫きたまひし―故飛鳥井が
聞かせ給ひて―一品宮が
ゆかしと―かの日記の畫卷を
かばかりの程―之を著る位の幼稚な中に我を他人にあづけたる時の悲しさ

常磐の尼君は、亡せにしぞかし。心地かぎりに覺えける折、いと小くをかしげなる小唐櫃を取出でて、尼君「これ、あなかしこ、疎かにし給はで、忍びて宮に御覽ぜさせたまへ御産衣、むかしの人の書きすさびたまへりし繪どもなどの、破り捨てむが惜かりしどもを、取り置きたりしなり。むげにその人の御有樣とて、聞かせ給ふことなからむよりは、物の心知らせ給ひなむに御覽ぜさせむとおもひしぞ」とて、女にあづけたりけるを、亡せて四十九日など果ててまゐりたるに、御前に人がちにも無ければ、尼君のゆかしがり申しつゝ、なくなりにし有樣など聞えさするついでに、中將「しかぐ\の物こそさぶらへ」と申し出でたるを、繪をなむいみじく畫きたまひしなど、さきぐ\も聞かせ給ひてあれをだに御かたみに見ばやなど、思しねがひつれば、いみじうゆかしと思したるも理なれば、御几帳近くひきよせなどして、取り出でたり。御産衣のありけるを先取りて御覽ずるに、我が著たりけむものとも思されず、物げなく哀げなるにつけても、かばかりの程を、ひき放ちてもてさすらはし給ひけむ程の、悲しさ怨しさも、言ひ知らず悲しく

斯うにこそ—實際の關係がわかりたる也
(頭)道成大宰大貳になりて筑紫に下り、上京して故姫君に對する過を後悔す
母北の方—大貳の乳母、獨存の乳母
思ふ樣にて—得意にて
樣かたち—飛鳥井故姫君の
上りあひて—恰も道成上京中に
言ひさだむるに—人々が語り合ふに
心の中に—道成心中窃に恐縮して
思ひ出で忍ぶ—心中に飛鳥井姫君を慕ふは勿體なしと思ふ樣になれり

にこそありけれなど、ことわりに思ひける。

かのゆくへも知らず果も無くおぼし惑はせし三河守も、その後人知れぬ御心のうちばかりには、こよ無くおぼし隔てしかど、母北の方、おぼえの勝れたるゆかりには、何しにかは思ふことの少しもたがはむ、年はいとわかくて、大貳にもなりにければ、やむごとなき妻ども、數多ひき具して思ふ樣にてくだれど、昔の事ども思ひ出でて物哀なるに、唐泊にてはた、言忌もしあへず打泣かれて、

道成 歸り來しかひこそなけれからどまりいづら昔の人の行方は

ものの折每には、ありがたかりし樣かたちなどを、うち解け語らふことだに無くてやみにしくち惜しさ、また人を徒になしてし罪ふかさなども忘れぬに、この御裳著のほどに上あひりてか、く皆なべての世にも、然にこそありけれ、など言ひさだむるに、あさましかりける過も思ひあはせられて、今しも、心の中にかしこまり歎きつゝ、かけてだに思ひ出で忍ぶことをし、辱しと思ひなりにけり。

故宮―義妹故一品宮

おぼし合する―狹衣が

いでや―狹衣の心

我が御心のほどよりは―自分の了簡としては故一品宮に對する仕方が我ながら餘りにどうしてよいか分らなすぎたり

かやうに思ひ出で―今自分が一品宮を思ひ出す樣に

思し立つ―一品宮の裳取を

明日の淵瀨を―後來の成行が安心ならぬ目下に於ては急に緣を定める心も起らぬ

いとしもなかりし―故一品宮を狹衣が其程寵愛もせざりしに

とりむすめ―養女、飛鳥井腹

は御使しげく參りつゝ恨み聞えさせたまへれど、故宮の御有樣などを、おぼし合するも、いでやなほ宮たちは、たゞ心にくゝてやみなむのみこそ、めやすかるべけれ、我が御心のほどよりは、我ながらくらべぐるしく、心ぐるしかりし心の中ぞかし、まいてかう長からざりける御命のほどにては、かやうに思ひ出でたてまつる人なくて過ぎ給ひなまし、如何にめでたからまし、とおぼしめせば、すが〲と思し立つべきさまにもあらざりけり。さるは御母方などにつけても、たのもしく思ひ後見たてまつり給ふべき人もなくて、ゆくすゑ心苦しかりぬべきさまなりと、明日の淵瀨を知らぬほどは、何かいと忽にとしも急がせ給はむ。御乳母たち、さぶらふ人々よりはじめ、心ばせすぐれ、後安かりぬべきさまなどなるを、御あたり近くもさぶらはせ給ひなどして、大方いと氣高くもてかしづき聞えさせ給へる樣、なべてならず。いとしもなかりし宮の御思なりしかど、とりむすめの御事をさへ、かくもてなし聞えさせ給ふことと、一條院をはじめ奉りて、世の人もありがたきことに聞えさせしかど、この御裳著のほどよりぞ、斯う

かひ〳〵しく―あてになる返事をせぬ
あまり定まり―若い中より一人の女を守る事は自分も窮屈に思ひし事なれば
自らも―一宮自身も
桐壺を―一宮の居所にあてゝ
堀川院にも―堀川方にても曾て独衣の居られし御殿を其儘一宮の居間にして
一品の宮―飛鳥井腹
二所―一宮と一品宮
二の宮の―藤壺腹を最も愛して居れども
一品宮を春宮など懇望すれども許されず
一品の宮―飛鳥井腹

がひしくぞいらへさせ給はざりける。「いと若きほどは、あまり定まり居むことはくるしうおぼえしを、いま今年來年過ぎなば、自らも斯くてもあるまじければ、さやうの程に、誰も〳〵參らせ給へ」などぞ宣はせける。桐壺を、女宮の御しつらひのやうに、めでたく淸らにせさせ給ひて、女房など、かたち心勝れたるかぎり、數多さぶらはせ給ひてぞ、おはしまさせ給ひける。堀川院にも、上の早うおはしましゝ方に、おなじさまにて、出でさせたまふ折々は、もてかしづき聞えさせたまへる樣、斜ならず。中宮もかの御志ありてつくらせ給ひし三條殿に、今は出でさせ給へば、この院には、一品の宮のおはしまし所をぞ、かへす〴〵磨きたてて、朝夕のいとなみには、この二所の御事をおぼしめしたり。さるは、わたくしの御心どもには、二の宮の御思ひには、竝び給ふべき樣もなけれど、兵部卿の宮の御ことを、內裏のなほ勝れておもひ聞えさせたまへれば、上べばかりは、おとさせ給ふことはなし。

一品の宮もいまはおとなびさせ給ひにたるを、春宮は、昔よりの御志かはらず、いま

ぐれ給へるを、大納言は、「いかにまれ、春宮に奉りてかならず后にすゑてむ」と思し宣ふを、母君は、今姫君「むかし本意たがひて、帝をもえ見たてまつらず、疎々しくなりにしかはりに、この宮をだに、けぢかくてこそ在らせ奉らめ」と、からうじて御心づよう宣へば、稀々はか〴〵しく思しよらむことを違へきこえじと、大納言も思ひよりたまへるにや、一品の宮の御方より、傳へ奏せさせたまひける。かの几帳のほころび爭ひしけはひどもも、唯昨日今日のことにのみ思ひ出づるを、我も人もかやうの事言ひかはすばかりの末々、あまたたち出で給ふまでなりにけるよ、とあはれにもをかしくもおぼし出でらるゝ。心の限もてかしづかるらむ、姫君の有樣などもいかならむ、大納言は、大方のおきてばかりこそあらめ、内々のこと、母君の敎のまゝにぞあらむかし、それを見ぐるしと思はむには、大納言まではありなむや、何事もあら〳〵しく心をやりて、うちはやりたる人がらなればぞかし、と思しやらるゝだに、いとうしろめたくわりなきに、琵琶の音ひき傳へてやあらむと、思ひやらせ給ふは、ひとり笑せられさせ給ひて、かひ

―今姫君の心
本意たがひて―自分が御奉公の志遂げずして
けぢかくて―帝の御側に近く
稀々―稀に今姫君のまとまりたる考案を出したるを
几帳のほころび―狹衣が今姫君を訪ひし時の事
末々―子供
心の限―狹衣の心
大方のおきて―子を育つるにつきて大體を取締るのみに止るならん
大納言までは―大納言になるまで辛抱は出來ぬ筈
何事も―大納言の人柄をいふ
琵琶の音―今姫君の覺束なき琵琶をひきし事前にいへる狹衣が訪問の處にあり

居る稍もなければ□□ぬ態して過ぎしは　この方ざまー女の方　見奉り初めしー花方に逢ひ初めてからは　止々不須說ー止みね〱說くべからずの意、法華經方便品に舍利弗が一佛乘の法門を說かんことを乞ひし時の佛の詞

四 大納言姫女を一宮にあらんとして聽かれずん　內裏にもほのめかしー女を一宮に□□□たきに□□□□をにふ□□し　吉野川あまたたびー吉野川あまた□□に狹衣を惱ましたる川の歌にて狹衣　御よすがー御聟　いりもまれーいじめられ　そのあたりをー　母代の手許より今姫君を引取りて　頑しかりし御心

しけれ。昔よりして、今日今にも、この方ざまにつけては、生きながら佛になりぬべかりけるものを、見奉り初めしよりこそは、この世を捨てがたきものと思ひなりにしか。あはれにあぢきなき事なりや。かゝればこそ、佛も止々不須說と宣ひけれ」とてぞ涙ぐませ給ひぬる。

兵部卿の宮は、月日のすぐるまゝに、上の御かたち有樣にたがひ聞えさせ給ふところなく、めでたくおはすれば、春宮にまゐらせむとおぼしつる人々の御女どもかゝる御かたちありさまを、餘所にはいかゞ見たてまつらむと思しなりつゝ内裏にもほのめかし申し給ふ。中にも、かの吉野川あまたたびいさめたまひし、今姫君の御よすがとなりたまひし宰相の中將は、このごろ一の大納言にて、春宮の大夫かけてものし給ひける、西國の受領とて、母代にいりもまれ給ひしかど、やがてそのあたりをとりはなちて、又類なくあはれなる志に、思ひかしづききこえ給ひしかば、頑しかりし御心も、自らもてかくされて、あまた年も過ぎにければ、いとをかしげなる御子ども多かる中に、大君す

「昔せしわがかね言の悲しきはいかに契りし名殘なるらん」—近く寄らせ—狹衣がならはし—それに我を馴れさせんとするかありつる—狹衣の心あまり紛るゝ—一筋に其事のみ思ひ居る故心中を中宮に見知らるゝ也と今さらに—女二とは一、疎遠なれば今更に戀ふる害もなし見とがむべき—別に氣にする程の御歌ではなけれどかやうに—狹衣の心、本來ならば女二はかく人にも噫させ我もつまらぬ口ずさび位にすべき人にあらずと思へはあながちに—我を酷く愛せられし餘りに御祕藏の女二宮の壻にせんとせられしを、長く此世に

ひきつけて、御座の下にさし入れさせ給ふを、狹「かばかりなる中らひにさへ、なほはかなき事につけても、へだて顏なる御心はあまりなるを、ならはし給ふなンめりな」とて、ひき出でて御覽じて、ありつる忍びごとどもの、御耳止まる事や交りたりつらむ、あまり紛るゝ方なければ、心のうちも見知られ奉るぞかし、と思し知らる。

狹今さらにえぞ戀ひざらむくみも見ぬ野中の水のゆくへ知らねば

と書きつけさせ給ひて、狹「見とがむべき御筆のすさびにはあらざンめれど、思ふわが心には、何ごとかはと、心ときめきして、書きて侍るぞ」とて見せたてまつらせ給ふものから、かやうに人にも言はせたてまつり、我もはかなき口ずさびにあるべかりし人の御事かは、などおぼすに、我が過のいとほしさも、例の罪さり所なく、涙さへ落ちて、人にも咎められさせ給ひぬべきまぎらはしに、狹「嵯峨の院、あながちに思しだりしあまりに、なべてならず思ひかしづき給へりし宮の御後見にとさへ思したりしかど、今まで世にあるべきものとも思はざりしかば、見知らぬさまにてやみにしこそ、思へばひが〱

ありつるもの—文かひ〴〵しき—餘り色よい御返事もなかりし事と思はるゝ様子なるも　大方につけても—體の關係から言ひても今は斷りて構はぬといふ害はなし　と　いかで今より—どうかして以來は此位の音信もすまいと　さしむかひ—眼前に居る一宮を可愛く思へばそれにつれて女二がゆかしく　なほたちかへる—矢張昔を慕はずには居られぬ「内にはなほ立歸る哉」嬉しき事にも物言はせで」　もて離れ給ひつる—狹衣と女二とは今でも無關係では無いわい　と　立ちかへり—昔の關係は又復活したれど上べはそうは見えぬ　如何に契りし—

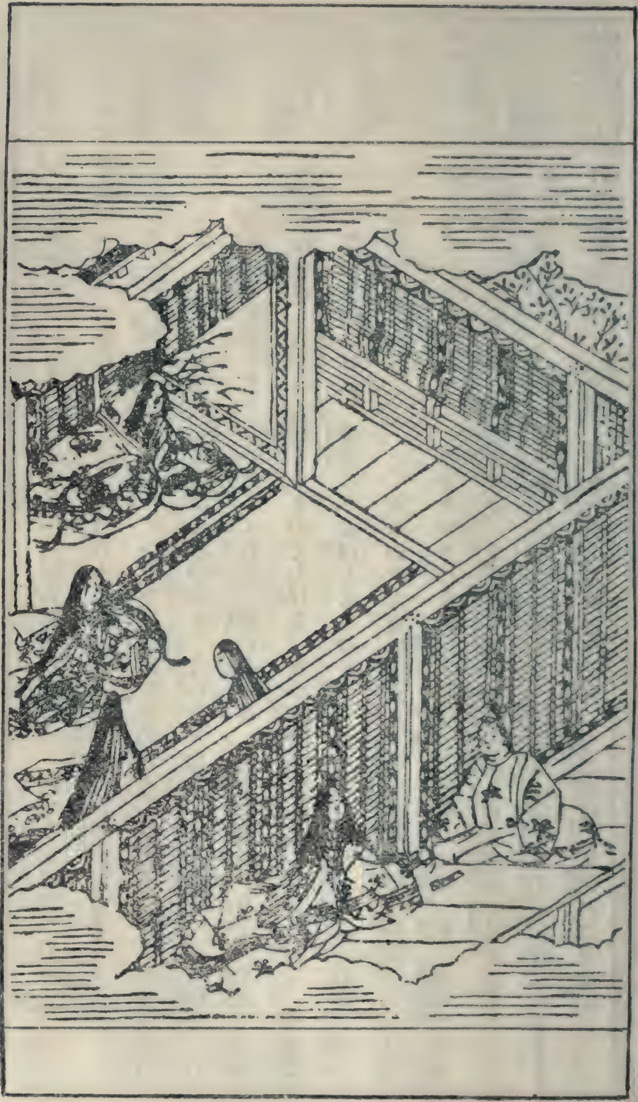
こえむも、恥かしく思召さるれば、例のやうに、内に入り給へとも宣はず、狹「ありつるものは、如何なりぬる」など、しのびてぞ聞えさせ給ふ。一宮「まゐらせ侍りぬ」とばかりにて、かひ〴〵しき御氣色もなかりけると見ゆるけしきも、常の事なれど、大方につけても、今はいと斯うしもひたやごもりに、情なくやはもてなし給ふべき、と人わろきまで、つらう思召さるゝに、いかで今よりだに、かばかりも聞えさせおどろかさじと、かへす〴〵思しかたむれど、たゞ今もさしむかひ給へる御有樣の斜ならぬ哀れのゆかりには、などかそれしも戀しく、いかゞ思しいで聞えさせ給はざらむ。とばかり物も宣はで、うち眺めさせたまひて、狹「なほたちかへる心かな」と、御心にもあらず忍びやかに、いはれさせ給ひぬるを、中宮はほの聞かせ給ひて、なほもて離れ給ひつる御中にはあらざりけりと、心得させ給ひて、

藤壺　立ちかへりしたはさわけどいにしへの野中の水は水草ゐにけり

「如何に契りし」など、手習に書きすさびさせたまへるに、近く寄らせ給へば、墨を黑う

今日の御樣―一宮が元服後の容貌
こと人とさへ―別人と思はれぬ程―一宮が狭衣に似たる
見知り―一宮が
今日は―今日は必ず御返事を取り來れと
くるしう思い―一宮が
見たてまつり知り―實際の事情を心得居る故
うらめしう―一宮が
藤壺にぞ―狭衣が
御覽じ入れさせ―文を
うつくしと―一宮を
こよなう勝らせ―狭衣の愛情が
程よりは―年齢よりは
このわたりに―女の中へ入るゝは遠慮あるべく狭衣が思はれて

今日の御樣は、いとゞこと人とさへおぼえ給はぬ面影の、はづかしささへわりなくて、御覽ずべきやうもなきに、まして今日しもあはれ添へさせ給ふべきにもあらず。前々は、ひたぶるに責め聞えさせ給ひし御かへりも、今はかうのみ苦しげなる御けしきを見知りたまへば、なほともえ申したまはぬものから、今日はかならずと宣はせつるものを、いかに本意なく思召さむ、と方々にくるしう思いたるを、出雲乳母ばかりぞ、見たてまつり知りたれば、人知れぬ涙どももおとしける。世の中いとうらめしう思されて、内裏にかへりまゐり給へれば、藤壺にぞおはしましける。やがて其方に參りたまへれば、端つ方に出でさせたまひて、狹「さて院はいかゞ宣はせつる。宮の御前には、御覽じ入れさせ給ひつや」など宣はせて、つきせずうつくしと思ひ聞えさせ給へる樣、院の思召したるよりは、こよなう勝らせ給へるを、ものの心知り給へるまゝに、我が心もおろかならずおぼし知らるべし。御いらへ聞えさせ給ふさまも、程よりはおとなしく、今より恥かしげなるさまにて、いたうしづまり給へる氣色なども、今よりは、このわたりに馴らしき



上ミの有様—笑止の説
あはれを添へて—昔の恨を忘れて情を交す様にし給へ
例の—例の通窃に女二に渡せと一宮にいふ也
かくては—元服しては一宮が彌狹衣にそつくり入るを見て
天照神の—一宮が狹衣の子なる内記宣の中にありし也、以下嵯峨院の心
故宮—嵯峨院の故后
例の作法—父子の禮によりて
ありつる文—狹衣に托せられし文
かゝること—狹衣と一宮との關係のあやしき由を思しなげく—女二が

哀なること多くなどやうにて、

狹 年つもるしるしことなる今日よりはあはれを添へてうきは忘れね

さりともと見え侍るありさまを、今日は御覽じ入れざらむも、あまり人目わかく〳〵しう。

など書かせたまひて、狹「例の忍びてを」と、聞えさせたまへば、ひきかくして、立ち給ひぬる名殘も、涙ほろ〳〵とこぼれて眺めさせたまふ。嵯峨の院にも待ちうけ奉らせ給ひて、いかゞは斜に見たてまつらせたまはむ。かくては、いとゞ内裏のうへに露ばかり違ひきこえさせ給へる事なきを、あさましく、天照神のほのめかし給ひけむことも、あるやうありける事にこそ、と思しやる方樣にも、故宮の御爲ぞいとほしかりける。例の作法に拜したてまつらせ給ひて、入道の宮の御方には、たゞ參りてさぶらひ給ふぞあはれなるや。忍びて、ありつる文まゐらせたまふを、かゝることをほの〴〵聞え出で、さゞめき怪しがる人々多くなりにたるに、いとゞ樣々ものを思しなげくこといみじきに、

如何はせむに―どう仕様もなきれ往生して見奉りし人―子どもをさへ一品宮一人にまかせて
㊃一宮嵯峨に行く、狭ハ宮に女二宮に消息す
さりともむげには―狭衣の心、いくら何でも女二が丸で一宮を構はぬといふ事はあるまじと心強くは思ふものの
如何ばかりの―狭衣の心、女二はどれ程の氣強さで依然として我につらきならんと
細やかになりぬ―心の中のやゐ方なされ思はず文も細々と認むる樣になりたり

世には」とかやありし夢さめて、もし如何樣なることのありけるぞとはじめて心得がたう思ひまどひし曉よりうちはじめて、我がものと見るべきやうもなかりしにより、如何はせむに思ひよわりて、見奉りし人さへ一人にうちまかせて、我は亡せたまひぬるも、思へば樣々にはかなう、あはれなる世なりや、など取りあつめ、涙こぼれぬべきを、忌々しうおぼしかへすべかめれど、何事のをりも、まづ心の中ものあはれなる事ぞ、絕ゆべくもあらぬ御樣どもなり。

一の宮をば兵部卿の宮とぞ聞ゆべきなゝめる。またの日ぞ嵯峨の院へはまゐり給へる。御前にて、萬につくろひ聞えさせたまへる御樣のうつくしさ、更にねびゆかむ御末おしはかられて、あまりゆゝしきまで御覽ぜらるゝを、さりともむげには、見はなち聞えたまはじと、たけう思さるゝものから、如何ばかりの心にて、年月ふれどかはらぬ御心のつらさなるらむ、と今日は今すこし恨めしさも類無ければ、雲の通路あと絕えて後は、いとゞやるかた無き心のうちばかりに、細やかになりぬ。よべの有樣ひとり見はべりしも

一の宮—一品宮
かたみにも—一品宮の紀念として見るべきは此人の外になしと
あげまさり—元服して器量のあがりたる事
御志—狹衣の御有樣を—飛鳥井腹の容儀のすぐれたるを愛でて
道行きずりに—通りすがひに
見給はぬ—飛鳥井姫君が
この世には—飛鳥井姫君が身を投げし時の夢中の歌

にも、一の宮のあはれにおぼし扱ひたりしこと、御覽じ知りにしかば、かたみにも誰をかはとおぼしめして、かゝる御いそぎをも、聞きはなたせ給はず、心殊なる御裝束、扇、薫物などやうのものをぞ、御志のしるしことにて、奉らせ給ひける。その夜の有樣、書きつゞけずとも思ひやるべし。二の宮の御袴著も今宵なりければ、萬さしあひて樣々のめでたき事のみあまりなれば、少々にまねびたらむは、なか〳〵損はるゝこともありなむかし。よろづの事淸らなる中にも、さま〳〵おとなびさせ給へる御有樣ども、なほすぐれて見どころ多く見えさせ給ひける。その中にも、一の宮の御あげまさりのゆゝしさは、なほ何處いかなりし人ぞと、胸うちさわぎて、あはれにあさからぬ御志すぐれたり。この道芝の露と數ならずおぼしあなづりし名殘とも、見えぬ御ありさまを、今宵やがて一品になしたてまつらせたまひつ。思ひかけずあさましかりし道行きずりに、心憂かりし法師の足許など、たゞ今の心地して、めづらかにも哀にも、おぼし出でらるゝこと多かるに、今宵の御有樣を見給はぬくちをしさをぞ、なほえ飽かず思召さるゝ。「この

方々につけつゝ—色々の點で
㊄女二腹の一の宮元服、飛鳥井腹姫君裳着、藤壺腹二宮袴著
姫君—飛鳥井腹
宮—一品宮
いとはかなう—つまらぬ飛鳥井姫君の遺子として等閑視する譯にはゆかず
御名ざしをも—「御もてなしも」の誤ならん歟
御裳着—飛鳥井腹の裳着の祝
おはやけ樣に—表向帝の儀ではなく
尼君のむすめ—一條の女院に仕ふる小宰相
宮の御もてなし—一の宮の飛鳥井腹に對する待遇

るにつけても、わが御宿世のめでたかりけるは、方々につけつゝ斜ならずおぼし知らるゝものから、御心の中は、更にやすかるべくもなかりけり。

弘徽殿にひとり住み給ふ姫君の御ことは、心苦しうおぼし扱ひつるに、宮亡せ給ひて後は、堀川院にも大宮も、つねに渡らせたまひつゝ見たてまつらせ給ふに、いとはかなう聞かせ給ひし道芝の露のかたみと、紛らはすべうもあらずなまめかしうをかしげなり。御かたちは、肖たりけむ母君の御樣さへおぼしやられて、いとあはれにかたじけなう御覽ぜらるれば、今まで輕々しき御名ざしをも、あるまじき事なるを、一の宮の御元服おるべきに、やがて御裳着のことおぼし急がせ給ひけり。何事も、おほやけ樣にあらず。堀川の院の御いそぎなれば、世の例にもすばかりなる御急ぎのありさまなり。常磐の尼君のむすめ、乳母たちより外には、宮の御もてなしの、いと侮らはしげに思しめしたりしかば、さぶらふ人々も、内々には、なま如何にぞや思ひたりしかど、今は上下さながらこの御方に參りあつまりて、いとやむごとなくて誠しき人々あまたさぶらふ。一條院

いとゞ一方にのみ—齋院といふ戀人の居る處なれば狹衣はいよいよ其方ばかりを眺めたり
神がきの—三輪のしるしの杉ではなけれど紅葉の色も思ふ人の居る方は著しく目につく「わが宿は三輪の山本戀しくばとぶらひ來ませ杉たてる門」
ひきよがぬ—齋院の側を素通りせぬ仕方があればよい
何事をして—齋院が
あれと見る—「あはと見る」の誤か
こはゆけるかは—是では我が心が滿足したとは言はれぬ
かつ見る人—宮の女御

とゞ戀しきことおほく御覽じわたすに、齋院のわたりの紅葉も、いみじう盛りにて、いろいろの錦を引きちらしたる樣に見えわたされたるに、峯の嵐あら〲しく時々吹きわたして、散りまがひたるなど、繪に畫かまほしきを、さしも思ふあたりならずとも、心ばかりはあくがれぬべきを、いとゞ一方にのみながめ入らせ給へり。

狹　神がきの杉のこずゑにあらねどももみぢの色もしるく見えけり

と御覽ずるにもかひなし。船岡の明暮さしむかひたりしを、めづらしき友とおほし慰めて立歸らせたまふも、飽かずわりなくて、ひきよがぬわざもがな、たゞいま何事をして、如何樣にてかおはしますらむ、など見奉らまほしう思召さるゝに、魂も早くあくがれぬらむとまでぞ、かへり見させ給ふ。

狹　あれと見る身は船岡にこがれつゝ思ふこゝろのこはゆけるかは

などやうに、野山川のそこを御覽ずるにつけつゝも、おぼし染みにし方ざまのことは、さらに忘れさせたまはず、かつ見る人の御ありさまの、めでたく思ふさまに御覽ぜらる

あるまじき様に―帝王の位に登られたる
一方しも―斎院への思が叶はずなりし事ばかりは
上の御社―上賀茂
言ひつゞくる―神官が
さしも長うとは―其様に長く位を保たんとは思はぬ狭衣の心には、「思しめさぬを」の「を」は衍文なるべし
八島もる―斎院に逢ふ事叶はずして戀しさのみ勝る樣にとは祈らざりしは神も御承知の筈
袖濡す宰相―此時の小說中の人物なるべし

斯うあるまじき様にさへ、しなし給へる神の御心は、思へばかたじけなく有難く思ひ知られたまふを、一方しも見がたうのみなり給ひにけるのみぞ、なほ更に恨めしくおぼえさせ給ふ。上の御社に御はらへ仕うまつるにも、過ぎにし年立て給へりし御願かなひ給ひて、今日まゐらせ給ひたるさま、今よりのち百二十年、代をたもたせ給ふべき有様など、聞きよく言ひつゞくるは、實に天照神たちも、耳立て給ふらむかしと聞えて頼もしきを、さしも長うとは思しめさぬを、御心の中には嬉しかるべくぞ聞せ給はざりける。

狭　八島もる神も聞きけむあひも見ぬこひまされてふ禊やはせし

そのかみに思ひしことは、みな違ひてこそあゝめれ、とぞ思召しける。

十月かみの十日は、平野の行幸なりけり。この度は紅葉さかりにて、柞原をかしうわけ入らせ給ふに、山はみな紅なるを、見わたさせたまふは、北山のあたり報恩寺とか。袖濡す宰相の通ひ給ひし所などはをかしかりしも思し出でらるゝに、梢の色も心殊に見やらるゝを、煙もところ〴〵に立ち、麓をこめたる霧の隔もたど〳〵しきは、中々い

心はゆかず―狹衣の心

駕輿丁の聲々―川をわたるに過失を戒むる聲々なるべし

身もなげつべき―歎に堪へずして此川に身をも投げんかと思ひしも珍しからぬに

なめげなる心―齋院に戀をしかくる樣な無禮至極なる我不埒は

ずくち惜しかりぬべき御時なればにや、あながちに物好みする人のみおほくなりて、上達部殿上人などの、馬鞍のかざりも、舍人馬添のなりかたちなども、世にめづらしき樣にもと、誰も思ひ營みたまへれば、見所はこよなきを、いかなる人か見ぬはあらむ。堀川の院に渡らせ給ひし程だに、立ち込みたりし物見車のこちたさなれば、まいて度每にあかず見奉らまほしきまゝに、例にもたがひて、心あわたゞしき道大路のさまなり。賀茂の行幸は、九月晦日なれば、野邊の草どもも、みな枯々になりて、道芝の露ばかりぞ、見しにかはらぬ心地しける。心はゆかずながらも、あまたたび行きかへりしそのかみは、何事をかは思ひけむ、と戀しく思し出づるに、例のかきくらさるゝ御心のうちをも知らず、川渡らせたまふ程は、駕輿丁の聲々も聞きにくきに、身もなげつべき川の契を、などかく言ふらむと聞かせ給ふ。

狹　思ふ事成るともなしにいくかへりうらみわたりぬ賀茂の川波

なめげなる心のほどは、來しかた行末、こよなく覺ゆるを、露ばかりおぼしとがめず、

むとけで―遂に中が直らずして薨去せられたるを
などてさしも―なぜあの樣につらくあたりしならんと
さのみ―狹衣がいくら情が深いといふても
樣のものと―同じ樣にいつまでも
露ばかり―少しも宮の女御の外に愛を分たず
この御幸―宮の女御の仕合
國處々の祭の行幸
御はて―周明
少しも斜―物がすべて善美を盡さねば此帝につりあはず不滿足に感ぜらるゝ故
かして

裏にも、かへす〴〵くち惜しくあはれに思召すに、いくらばかりの日かずも經で、亡せさせ給ひぬれば、いとあさましくかなしくおぼしめす中にも、内裏には心とけで過ぎたまひぬるを、心ぐるしく、かばかり短かりける御命のほどを、などてさしも見え奉りけむ、など例の過ぎにし方忍ぶ御くせなれば、常よりは異なる御涙もろさなり。されど宮の女御后になしきこえさせ給ひて御覽ずるには、さのみ心深き御こゝろといひながらも、樣のものと、いかでか沈み入らせ給はむ。露ばかりわくる心なくて、この世には過ぎはてて後の世にもおなじ蓮にとのみ、言ひ契らせ給ひつゝ、明暮さしむかひて、たゞ人のやうにて過ぎさせたまふ御有樣、古にたとしへなきも、たゞこの御幸の斜ならざりけるとぞ、餘所の人言ひおもひける。

月日もはかなく過ぎて、宮の御はてなど言ふことども過ぎて、又の年の秋冬は、大原野、春日、平野などの行幸あり。はじめてめづらしき御行幸なるに添へても、帝の御顏かたちありさま、此頃さかりにねび整ほりはてさせたまひて、少しも斜ならむことは、飽か

あるべきものを―「忘れてもあるべきものを此頃の月夜よいたく人なすかせそ」

一の宮―女二腹

おなじ樣にて―一の宮と

ものと知らず―上の狹衣の歌「こはまだ思ふものと知らぬを」

見おき難く―狹衣が捨ておきて立離りにくゝ

わかれ―「わかれ」は「別當」を寫し誤れるならん

加階―陞位

㊀一品宮出家、次いで薨去、宮の女御殊寵を受く

すもくるしくて、尻目ばかりたゞならで過ぎさせ給ふを、實に「あるべきものを」と、なかなか飽かずくち惜しく思さるゝ人々ぞ多かりける。待ちつけきこえさせ給へる院の中にも、上下めづらしき御行幸を見たてまつり喜ぶに、まいて大宮は、忌々しきまで涙もろくおはします。何やかやと御物語しばしばかりにてぞ、若宮見奉りにはわたらせ給ひける。「言ひ知らずうつくしき御顔つきなど、一の宮に違ひきこえさせ給はず。おなじ樣にてうち臥させたまへるは、「ものと知らず」とかや宣はせしかど、實にこれもおろかには思ふまじかりけりとぞ御覽じける。女御は、惱ましげなる御氣色にて、あえかに細り給へる、いとゞ心ぐるしく、あてにらうたげなる事まさり給ひて、見おき難く思しめさるれど、暮れぬればかへらせ給ひぬ。院のわかれ、家司どもなど、例のことなれば加階しけり。

かく思ふ樣にめでたき御ことをきかせ給ふにも、一品宮は、物をのみ思しなげくけにや、御心地もまことしう苦しがらせ給ひて、つひに尼にならせ給ひぬるを、一條の院にも内

理ぞかし—狹衣の心

誰に似—父母のどちらに似ても何事も不十分な筈はない

この御心にも—此子にも實際の事情を打明けて話すまじ

いと難ければ—かゝる機會でてもなければ

行幸—堀川の院へ

妹がすみか—馴染の女の住宅

さばかりにやと—誰それならんと思はるゝ

り侍りなむかし」とて、うちそばみて書き給ふ手つきなど、女宮にぞせまほしき。

若宮　ことわりも知らぬなみだやいかならむ我より外の人をおもはば

と書きたまへる御手のうつくしさを、理ぞかし、誰に似たまひてか、何事もなのめに、と御心にもことわられ給ふに、この「知らぬ涙」ぞあはれに思しめさるれど、嵯峨の院のおはせむほどは、この御心にも言ひ知らせたてまつらじ、と思すなるべし。

さしも御心とまらぬわたりにだに、男御子うまれ給へるに行幸ある事は常のことなるに、これはまいて、大宮を見奉らせたまはむこともいと難ければ、さま〴〵に心もとながらせ給ひて、七日過ぐるまゝに行幸あり。ひさしく見たてまつらぬことをなげく人、たかきも下れるも數多ありて、この程にと立込みたる物見車ども、かち人ども、こちたきまで多かり。久しく御覽ぜざりつる賤の菴ども、もしは又、たまさかに立寄りたまひし妹がすみかのまきの戸ども、あはれに過ぎがたく見入れさせたまふに、故なからぬ氣色しるく、さばかりにやと見ゆる棧敷、車どものまへは、如何につらき心と見るらむと思

膝が
ひきよせて奉り—「て」衍文歟
この宮—藤壺腹
ほのかなりし火影—燈下に仄に見たる女二の容貌
かゝる人—子ども
憂き世と—一筋に此世を厭はしくのみ思ふべき筈もなきに
御硯の—硯のあいて居る中より筆を取りて
こは—子は、是は
これには—我が歌は必ず狭衣の書きたるに劣るべし

で給へるを、ひきよせて奉りたまへば、ゆら〳〵と女のやうなる御髪の淸らなるをかき撫でて、狭「堀川の院には、この宮をうつくしがりかしづき給ひて、宮をば久しく見たまはぬこそ心憂けれ。まろより外に限無く思ひきこゆる人の無きこそあはれなれ」と宣はするを、年のほどよりもこよなく大人びしづまり給へるけにや、けにとおぼすに、すこし涙ぐみて、まゆのあたりもうち赤みて、うつぶし給へる頭つき、髪のかゝり、額つきなどは、かの昔のほのかなりし火影にも、いとよく覺えたまへりかし、と御覽ずるに、我も涙こぼれさせ給ひぬ。かやうなる有樣につけても、さりとも見なほしたまふ心のほどもありなましものを、行末はたかゝる人もあれば、憂き世とのみおぼさるべくも無かりけるものを、いかにしなしてし我が心ぞ、と昨日今日のやうに、悔しくあはれなる事ぞなほ限なきを、御硯のあきたる筆を取らせ給ひて、

狭 悲しさもあはれも君につきはててこはまた思ふものと知らぬを

と書かせ給ひて見せ奉りたまへば、さすがはうち笑み給ひて、若宮「これには必ずおと

物いひも叶ひぬべき—世の噂の通り此皇子が春宮に立たるゝかも知れぬと思はる
一の宮のをり—女二腹出生の折には
鶴の一聲—はじめて若宮の泣聲を聞きたる「いはけなき鶴の一聲きゝしより葦間になづむ舟ぞえならぬ」
かばかりも—今位にでもとにかく女二腹を我物の樣にし得るは饒倖なり
あはれに辱く—女二腹の關係よりしても源氏宮を思切れぬ方よりしても此女二腹は行末迄如何なる者にも替へて大事にせねばならぬのに
今より—今から已に女二腹は藤壺腹に壓倒さるべしなど噂あるを女二の方で聞きて何と思ふならん
さし出で—女二

斜ならむにてだに、内々の事知らせ給はぬ御心どもには、實に行末も思ひおとしきこえさせ給ひ難げなる御けしきも、ことわりなる。たゞ大宮、院などの御膝の上に、とりかへとりかへ扱ひ聞えさせたまへる樣、實に世の人の物いひも叶ひぬべきにやと見えたり。大貳の三位など内裏に參りつゝ、かゝる御けしきになど奏するを聞かせ給ふにも、一の宮のをり、餘所のことにうち聞きて過しゝに、まれ〳〵中納言のすけのほのめかし出でたりしより、淺ましくかなしく、うつし心も無くなりそめて、かの鶴の一聲聞きつけたりし雪の夜の事も、まづおぼし出でらるゝに、かばかりも我が物と見たてまつるは、あるべかりしことかは、我が年ごろ、心ひとつにあはれに辱く心ぐるしき方にも、又あかずくち惜しき人の御ことの、年月經れど、すこしも思ひなほされぬこゝろの中のかはりにも、とりあつめて、今ゆくすゑいみじき人出で來とも、等しうだに思ふべくもあらぬものを、今より斯くさへ人のいふらむを、若し耳とゞめて、かのわたりにも聞き給ふやうもこそ、と心苦しう思しつゞくるをりしも、ひかるばかりなる御顏附にてさし出

ひきつれて—昔は我も此の行列にかはりしものを、加はれぬ今は注連の外なり
壺宮の女御皇子を生む、狹衣堀川院に皇子を見る
御氣色—御産の樣子
はじめたる事—是がはじめての狹衣の御子と思ふ故
いみじく—春宮の地位につきての世人の噂
若宮の御おぼえ—女二腹の人望は昔の通りにはゆくまじ
坊に—今帝の第一の皇子を差置きて若宮が春宮に立つ譯にはゆくまじ
嵯峨の院には—是も實際を知らぬ故心配せらるる也
この宮—藤壺腹の皇子

狹 ひきつれて今日はかざしゝあふひさへおもひもかけぬ注連の外かな

とおぼしつゞけて、ながめさせ給へる御まみなどの、なほ國王と聞えさするにあまりて、氣だかくなまめかしく見えさせ給へり。

斯くて藤壺の女御御氣色ありとて、院の中ところ無きまで、法師も俗も、世にあるかぎりは立ち込みて、ゆすり滿ちたるに、內裏の御つかひ、雨のあしよりはしげけれど、行きかへるほども心もとなく、いかに〳〵と思召しやらせ給ふに、いと平かに男御子にて、など聞かせ給ふ御心地おろかならむやは。まいて目にちかく御覽じあつかひ聞えさせたまふ堀川の院の御氣色、理も過ぎて、かぎりなき女御の御幸と見えたり。一品宮の姬君の御ことだに世の人は知らねば、たゞこれをはじめたる事と思ふに、「いみじくとも、若宮の御おぼえは今はいかにぞ。坊に居給はむ事も、さはいふともまことの當代今上一の宮をば、おとしきこえ給はじ」など、まだしきに、聞きにくゝ定めきこえさするを、嵯峨の院には、實にいかゞときかせ給ふぞ、をこがましきや。この宮の御うつくしさの、

院―堀川
御料―齋院の用ふべき分
思しやらせ―狹衣の推量通り
あまり―公の贈品としては餘り奇麗すぎると
御前の―齋院の分
いとかばかり―堀川は狹衣の戀が久しきものなる事を知らねば
珍しからむ―珍らしい人の書いたもの〻樣に
あふぎてふ―扇のあふといふ名を實にせんとて今更從來の態度を改めて君に逢ふことも出來まじ
御覽じても―狹衣がしたてて―行裝を整へて

と御料なるは、別なるつゝみ紙に書附けさせ給ひても、院などもこそ御覽じつくれ、とおぼしかへせど、しどろもどろにや思しなりぬらむ、引きも替させ給はずなりぬ。御使は五位の藏人にやあらむ。思しやらせ給ひしもしる　院のおはします頃なれば、御使かひ〴〵しくもてはやさせ給ふ。扇どもの目も及ばぬを、あまり公しからぬものかなと愛でさせ給ふに、又別に心ことなるは御前のと見ゆるに、書附けられたる事ども御覽じつけたれば、いとかばかりおほくの年月を經て、おぼしこがれ給ふ御心とも知らせ給はねば、たゞおほかたの事を宣はせたるとのみ御覽じて、御手をのみ、珍しからむ人のやうに、袖のいとまなく押拭ひつゝ愛で居させ給へり。齋院はなま苦しくおぼしめさるれど、堀川「御かへり疾く〳〵」とのみ聞えさせ給へば、思しもあへず　たゞ

齋院あふぎてふ名をさへ今はをしみつゝかはらば風のつらくやあらまし

とあるを御覽じても、例の心をのみぞつくさせ給ふ。祭の日、近衞づかさの使のしたてて參るをも、うらやましく見送らせ給ひて、

ゆるし難げなる―御暇を
紛るゝ方無きは―外に寵愛の女もなきは
㊤賀茂祭の前、狹衣人々に扇を贈る
みづからの―齋院が自分の持料には狹衣の特に注意して贈りたる扇をのみつかひたれば
公しき―表向繪所などにて造りたる如き粗製のを用ひず
名をゝしみ―あふといふ名に空しく人に希望を持たしむる扇かな
我と齋院とは今はあふを取る事すら出來ぬ中なるに

狹「などかく安からぬ身となりけむ」とのみ、おなじことを宣はせつゝ、ゆるし難げなる御けしきなれど、實にかぎりある御事なれば、さのみもえ惜みはてさせ給はで、まかで給ひぬるなごりも、いとわりなきぞ、あまり紛るゝ方無きは、なぐさむかた無き事にこそと思し知られける。

はかなく年もかへりて、賀茂のまつりの程にもなりぬれば、御禊の御前ども、使などさだめさせ給ふにも、過ぎにしかたの事どもおぼし出でられて、齋院のわたり、常よりもこひしく思しやられたまふに、おほかたの殿上人などの心得にしつゝ、あまた參らせし扇をば、さるものにて、みづからの御料などは、わが御こゝろ留めさせたまひつゝ奉らせ給ひしをのみ、持たせ給ひしかば、公しき繪所などにての、あらく〳〵しきにはあらで、さるべき藏人ども承りて、日毎にかはるべき女房の料どもなど、樣々にせさせ給ふさま心ことに、めでたしなども世の常ならぬ樣にしたてさせ給ひて、

狹 名をゝしみ人だのめなるあふぎかな手かくばかりのちぎりならぬに

すこし心にくき―少しでも善さそうな女はあさり盡して別に氣に入りたる者もなかりし事なれば

それをなど―誰それの女を入内せしめよ杯と選拔する譯にもゆかぬ故

いと怨めしく―狹衣が

いとかく―狹衣の心

かゝる大方なる―かく十把一からげに斷りて仕舞ふのでは無いにと流石氣の毒に

いでや―狹衣の心

思し侘びつゝ―狹衣が

き賜はる人々おほかかりけり。その中にも人知れぬさまにて絶えたまひにしも、又さまではあらねど、さやかなりし月影、もしは燈火の光などやうにても、すこし心にくきあたりどもは、おぼつかなきもなく、ゆかしき事なかりし御心のうちなれば、かくていつしかと、輕々しくそれをなど取分かせ給ふべきならねば、唯狹「かくても、長くしもえ有るまじき有樣なれば、何事もつゝましきを、今しばしもながらへて、左樣にて」などいらへさせ給ふものから、人知れぬ心の中どもは、いと怨めしく思ひ出で給ふわたりもあらむかし。いとかく物歎かしき身ならざらましかば、などかは、かゝる大方なる有樣にては見ざらまし。とさすがに心苦しく思しやらるゝ所々あれど、いでや此世もあの世も思ひし事は違ひはてぬるかはりには、斯うながらも、さやうに亂れがはしく心をわくる方だに無くて、今二三年だに過しては、いみじからむ絆どもをふり捨てて世をそむきなむ、と思しける。

霜月には、五節などいふ事どもにより、女御まかで給ひぬべきを、口惜しう思し侘びつゝ、

くらべ苦しき―どちらをどちらとも定め難きうち悩み―宮の女御の
立ちならぶ人々―宮の女御の外に然るべき女御更衣などがあらば
ことをぞいたく―誤あらん歟
㊉人々爭ひて娘を入内せしめんとす
通はし見奉る―狹衣を我が娘の許へ通はせたしと
おほやけ樣に―天子になられては娘の入内を願はば聽届けらるゝ事もあるべし
煩はしかりつる―邪魔なりし
あこの―お前の、娘に對していふ
御けしき賜はる―狹衣の御機嫌を伺ふ

たがりて、この世の中ながら見奉らずなるべしとは思ひかけざりしわざかな、と思しつゞくる程は、かばかり見れどもあかぬ御有樣をさしおきて、つく〲とながめ入らせ給ひても、

狹　かく戀ひむものと知りてやかねてより逢ふことたゆと見て歎きけむ

と思さるゝにつけても、くらべ苦しき心の中はなほいとわりなし。さるは樣ことにうち悩みたまへる氣色の、らうたげさなどにも、立ちならぶ人々あらましかば、如何に心より外にくるしくむづかしからまし。ことをぞいたくふるさずなりにけるも、來し方さへうれしきまで、立ち離れず、起臥しかたらひ聞えさせ給へり。

年ごろ、如何樣にまれ、たまさかに通はし見奉るわざもがな、と思ひ願ひ給へる上達部御子たちなど、「かくおほやけ樣にならせ給ひては、否び給はぬやうもありなむ。煩はしかりつる一品宮さへ、かく世を背き給ひぬべかゝなるは、あこの御宿世のめでたかるべきなり」と、おの〱女どもをいとゞもてかしづきて、大貳の三位などして、御けし

このしのぶ事—大宮は後鳥羽院の事とは知り給へれども、この宮の事は知らぬ故
目に近く—眼前に宮の女御の懐胎を見聞して
この御事—宮の女御を得てより狭衣の落着かざりし心も直り
院—堀川
參りたまへる—宮の女御入内
みたらし川—齋院
うらめしく—狭衣が
御かたちけはひ—齋院の

らせたまはぬに、かう目に近くあざやかなる御ことを、めづらしく嬉しく、いかでかは思召さゞらむ。この御事の後よりこそ、あさましく思し浮れたりし御けしきも少しなほり、かくありがたき御位にもさだまり給へるに、いとゞ疎ならざりける御宿世のほどさへ、見附くべきことゝ、院などの思しよろこびたる樣ぞ、今よりいとこちたかりける内裏にもかくと奏せさせ給ひければ、いとゆかしき事をさへ添へて、おぼつかなさ、理なくおほしめせど、この月は忌むべしなどあれば、しのび過させたまひて、十月にぞ神事などしげけれど、あながちなる間に參りたまへる。御つぼねは藤壺なり。墨染にやつれたまへりし御有樣だに、みたらし川のかげにもならひ聞えさせ給ひぬべく、ありがたかりしを、紅葉の錦にたちかへて參りたまへれば、今一入の見どころも增りたまへるにおぼつかなくて過ぎさせたまひつらむ日數も、うらめしくぞおぼえさせ給ひける。かゝるほどは、すこし御心も慰むやうなるに、又いかにぞや、唯それかとまで、覺えたてまつりたまへる御かたちけはひも、ふと思ひ出でられさせ給ふかたつかたは、先づ御胸ふ

たち舞ふべき―物思ふに立舞ふべくもあらぬ身の袖打振りし心知りきや・源氏物語の歌

㊇一品宮出家の心情―もとより―狭衣は元より物思ひに惱む癖ある上宰相妹の入内せめ沖左樣にくよして居らるゝならんと一品宮た思ふかくあさましく―一品宮・入内せぬは以の外にて不本意千萬なりとの趣を御物恨みの―入内を溢るは恨めしさ故ばかりにはあらず、死去されたる方々の御樣子に似てぶらぶらと煩はるゝ事珍らしからぬ故さればこそ―一品宮の心

㊈宮の女御（宰相妹入内藤壺に居る女御―宰相の妹

大宮―狭衣の母

ぬ世のなげかしさを思しあつかひしに、今はいとゞ、樣々につけて、たち舞ふべき心地ぞせさせ給はざりける。

かやうなる御氣色を、一品宮の御かたに心寄せまゐらする上人などは、つき〴〵しう見なし奉りつゝ、あはれげにかたり聞えさすれど、もとより物思はしげなりし人癖に、いとゞ宮の女御の參らねばにこそと、をこがましくぞきかせ給ひける。御使も絶えず參りつゝ、かくあさましく本意無きことをきこえさせ給へど、御物恨みのかぎりにもあらず、過ぎにし御有樣どもの樣に、いつとなく惱ましうおぼさるゝをり〳〵あれば、さればこそ、え長くしもあらじものをと心細くて、御かへりなどばかりは、なか〳〵なつかしげに聞えさせたまへど、參り思はむことはいとおぼし絶えて、樣替へさせたまはむことをぞ思しいそぎける。

宮の女御の御心地、たゞならぬ樣に、人々見奉り知りて、大宮にも啓してければ、このしのぶ草の御ことばかりをこそ、さばかりも聞かせたまへ、若宮の御ことなどはた知

思召しやらせ―齋院が待ち見たまはむ―狹衣が齋院の返事を

いとゞ戀しく―狹衣が齋院を

燕子樓の中―「燕子樓中霜月夜、秋來唯爲一人長」白氏文集の句

丑四と申す―近衛の武官が時刻を奏する也

心やすかりし―平人たりし時さへ

などやうにて、殿上の童を齋院にたてまつらせ給へれば、實に雲の上はまいて如何にと思召しやらせたまひつる秋の月かげなれば、をかしき御消息なれば、待ち見たまはむ御けしき、恥かしくおぼしやらせ給へど、今は人傳に聞えさせ給はむもあるまじき事なれば、

齋院 あはれそふ秋の月かげそでならで大方にのみながめやはする

とばかり仄かなり。御つかひに、菊のふたへ織物の袿たまはせたるを、かづきながら參りたるかしらつきなど、月にはえて美しきに、めづらしき御移香さへ、なべてならぬ匂にうちかをりたるぞ、いとゞ戀しくおぼえさせ給ひて、人目も知らず引きよせて、涙もおとしかけつべくおぼしめさる。文のけしきなども、唯おほかたに思はせたるなつかしさをば、疎ならぬさまにいひなさせ給へる樣なども、さし向ひきこえさせたる心地のみせさせ給ひて、いとゞ御殿籠るべうもなければ、狹「燕子樓の中」と、ひとりごたれ給ひつゝ、「丑四」と申す迄になりにけり。心やすかりし御ありさまにてだに、身を心ともせ

なぐさの濱—宰相の妹をいふ

參らせ奉り—妹を入内せしめよと

例ならず—懷胎也

心もゆかざりし—故飛鳥井姫君を見つけし最初の時の事

㊆月夜狹衣齋院と歌の贈答

御覽ずる—狹衣が月を

夜な〳〵—源氏宮の歌前にあり

やどる袖—月影のやどる齋院の袖

ぐさの濱にも、今まで御覽ぜぬは、いとゞ御心も紛るゝかた無う、もの歎かしきを、今はさりとてもあらるべきことならねば、宰相中將にも、參らせ奉り給ふべきさまにのみ、宣はすれど、例ならず惱ましげにしたまへば、如何にと見たてまつり給ひて、さやうに奏し給ふを聞かせ給ひても、いとゞしづ心無う、おぼつかなく思召さるゝまゝに、とみに夜の大殿にも入らせたまはず、はかなき琴笛、さるべき文どもなど御覽じつゝこよ無う更しても、御殿籠るやうなれど、心もゆかざりし道のほとりどもさへ思し出でられて、明しがたし。

月いとあかき夜、端つ方におはしますに、隈なうさし出でたるを御覽ずるにも、かの「夜な夜な袖に」と宣ひし御けはひ、まづ思ひ出させ給ひて、いみじう戀しくおぼえさせ給ふに、月影も、やがてかき曇る心地せさせ給ひて、いとゞ心もそらになりぬ。

狹　戀ひて泣く涙にくもる月かげはやどる袖もやぬるゝがほなる

村雲はれ侍るめるを、いかやうにてか、唯今も御覽ずらむと、ゆかしう。

宮の—一品宮が
いともの しう—甚だけしからん
案外なる御心なり
御心地—御病氣故參内せざりし杯讒事したり
うらみ聞え—入内せぬ恨を一品宮へ申越されたれど
弘徽殿—太后
わたらせ—飛鳥井殿の方へ
彈きとらせ—彈き覺え
あらましかば—附の飛鳥井姫君が存命ならば、以下狹衣の心
宰相中將の妹君懷胎によりて入内延引
この御參—一品宮が快く入内せぬ

たり、いとつれ〴〵げなるべきを、こゝろやり所にも人の思ふばかりにもてなしてむ」など、御乳母たちにも宣はせて、いと心ぐるしげにぞ思ひ聞えさせ給へる。斯く宮のとまらせ給ひにける事を、一條院も聞かせ給ひてげれば、一條「いとものしう、おもはずなる御心」と、かへす〴〵聞えさせ給ひけれど、いかにも〳〵思し初めつることをば直らぬ御癖なれば、一品「御心地いとなやましう思されて」などぞ、きこえさせ給ひける。内裏よりも、日を經てうらみ聞えさせたまへど、かやうにもてなさせ給ひて、をさ〳〵御かへりも無かりけり。弘徽殿には、日々にわたらせ給ひつゝ、琴など教へ奉らせたまふに、いと敏くうつくしう彈きとらせたまひつゝ、何事もすぐれて、見所あるさまに生ひ出で給ひぬべきを、あはれにうつくしう思しめさるゝにつけても、あらましかば、心安きわたくしものにて、交らはましものをなど、わすれがたう思ひ出でさせ給ふ事、いや勝りなり。

斯うのみ此の御參の、すが〳〵しからず、煩はしかりつるにはゞからせ給ひて、かのな

つらき所—「宿かへて待つにも訪はずなりぬればつらき所の多くもある哉」

とまらせ—一品宮が殘りたるをも

例の御けしきの—例の通り一品宮の御機嫌の面倒なる事ならんと思ひながら

思はずに—意外に

御心ばへ—一品宮の

送りおかれ—一人送り附けられたる姫君が可愛相故、狭衣が行きて見たり

思し讓りければ—一品宮が我に托して仕舞ひたれば

だし奉らせ給へば、いとむづかしく思し歎かれて、その夜にもなりぬるに、つらき所多くはなさじとやおぼしけむ、姫君をかはりに、乳母たちなど添へたてまつらせ給ひて、まゐらせ奉りてけり。侍ふ女房なども、はか〴〵しく知らねば、まいて殿人などは、とまらせ給ひぬるも、え知らざりけり。帝は、例の御けしきの煩らはしげなるを、いかにと思しながら、樣かはりたる有樣をいかゞ見給はむと、恥しき方にも、心ゆるびなう思ひ聞えさせ給ひつゝ、心殊にひきつくろひて待ち聞えさせ給へるに、「御心地例ならで留らせ給ひにける御かはりに、姫君なむ一所まゐらせたまひける」と奏するを聞せ給ふに、いとあやしく、本意なき心地せさせ給へど、いでや、いと思はずに、かど〳〵しき御心ばへは、見ま憂くのみ覺えさせ給ひにけり。送りおかれ給ひつらむ御有樣の、あはれにゆかしう思しやらるれば、やがて渡らせ給へり。雛するゐたる樣に、小く美しげにて居給へるを、御覽じつけたる、まづかきくらさるゝ心地せさせ給ふ。狭「いかゞはせむ、かくまで思し讓りければ、いとゞ疎ならずこそは思ひ聞えさせめ。住む人無くて、内裏わ

つ、出で入りもしたまひつる人々は、あさましくのみ思さるゝに、見なしにや、御かたち有樣、かくては又樣かはりて、めづらしき光さし添ひ給ひて、たゞ人にて過させ給ひけむこと辱くぞ見え給ひける。大殿も、關白をば左大臣にゆづりきこえさせ給ひて、おりゐの帝の位にさだまり給ひて、堀川の院ときこえさす。母宮は、皇太后の宮とぞきこえさせ給ひける。

かう思しかけざりし御有樣どもも、然るべきとは言ひながら、一條院の御志おろかならずおぼし知らるれば、一品の宮をなほおろかに思ひきこえさせ給ふまじく、堀川の院にはきこえさせ給ひつゝ、とゞまらせ給ふべくきこえさせ給へど、一品「心よりほかに、時々見え奉りしだに安からざりしを、今は、何しにかは、雲の上まで、人笑はれに、をこがましき有樣をあらはし果てむ。うき世の中も、かゝる序にこそは、思ひ離れめ」など宣はせて、まゐらせ給はむ事は思しもかけ給はねば、一條院聞かせたまひて、一條「いとおるまじく、なほ〳〵しき御心なり」とむづかり聞えさせたまひて、たゞいだしにい

かくては—帝にならるゝと又
大殿—堀川
おりゐの帝—太上天皇
㊄一品宮入内せば、養へる飛鳥井腹の姫君を發らす
一條院の御志—畢竟一條院の御志の深き故の事と思ひ居る故
一品の宮を—一品宮を疎末にせぬ樣に狹衣を戒めつゝ
とゞまらせ給ふ—狹衣に伴ひて宮中に住む樣にと勸むれど
見え奉りし—狹衣に逢ひし
まゐらせ給はむ事—入内の事
なほ〳〵しき—いやしき

戀草つむべき—「戀草を力車に七車積みて戀ふらく我が心から」

御車—狹衣の

思ふ方ざまへと—我が戀人の方へ行く車と思へば

さしも思ひ知らぬ—當人は一向氣がつかぬ

㊃狹衣受禪

ひとつに—狹衣を常人と同樣に思ふ人はなかりしかど

おなじ樣に—日頃狹衣と同輩の附合をしたる人人は

おぼしつれど、明けにけるなるべし、路のほどに、戀草つむべき料にやと見ゆるちから車どもも、數多おしやり續けつゝ行きちがふ。御車なども、いたうやつし給ひて、人少なればにや、はゞかる氣色も無く、近きほどに乘りながら過ぐるも、おそろしきまでに思さるれど、思ふ方ざまへと御覽ずれば、目とまりたまひて、なほ見おくらるゝに、何のすがたも見えず物狂ほしげなる樣どもを、さしも思ひ知らぬに、安らかに乘りなして、このごろ童べの口の端にかけたる怪しの今樣歌どもを、いとしら／＼しき聲にて、うたひて過ぐる氣色、心をやりてないがしろに、思ふ事無げなるにつけても。

狹　七車つむともつきじ思ふにも言ふにもあまるわがこひ草は

とぞ思しける。

かくて八月廿日、御國讓ありける。かねてより、珍しかるべき事に天の下言ひ古しつれど、今はとかはり居させ給ふほどの有樣などは、なほ現とぞおぼえざりける。何事も、ひとつに思ひ聞えさする人は無かりつれど、事限あれば、おなじ樣にうち連れたまひつ

かぎりある世の|意通じ難し、誤あらん歟
月だにも|故障さへ無くば今後も折々御目にかかりたし
思ひ離れぬ|齋院を思切れぬ
さぶらふ人々などをも|狭衣の心
出で給はず|狭衣が
世にめづらしき|帝位に上らるる目出たさとも思はれず
あかさせ給はむと|「と」は「も」の誤なるべし
御こゝろ猶|「御こゝろは」の誤なるべし
芹つみし|「芹つみし昔の人もわが如く心に物の叶はざりけん」

つゞけて、月の顔のみ眺めさせ給ひけり。

狭 めぐりあはむかぎりだになき別かな空行く月のはてを知らねば

とて、押當てたまへる袖のけしきも、かぎりある世の命ならぬは、實にとや思召さるらむ、餘にまばゆければ、御几帳をひき寄せさせ給ひて、やをら入らせ給ふ紛らはしに、

齋院 月だにもよその村雲へだてずば夜な〳〵袖にやどしても見む

と、なほざりに言ひ捨てさせ給ふ慰めばかりも、實になか〳〵なるを、思ひ離れぬほだしともなりぬべし。さぶらふ人々などをも、御覽ずることの絶えはてなむをあはれに思すに、頓にも出で給はず、はかなし事もなつかしう聞かまほしき御けはひにて、あはれに心細げなることなどを宣はすれば、見たてまつる人も、かう世にめづらしき御よろこびともおぼえず、袖も濡れわたりつゝ、月も入りがたになりにけり。今はかう輕々しき御歩行も、いとあるまじき事なれば、さのみあかさせ給はむと便なくて、出でさせたまふ御こゝろ猶、芹つみし世の人にも問はまほしくおぼされける。まだ夜は深からむと

おぼつかなくては―逢ふ事が出来なくては　御前―齋院　見るを逢ふにて―齋院の心、只面會するだけで居たしと思ひ居しに狭衣、今度帝にならるゝは丁度よい都合とは思へど「袖ぬれて蜑の刈干すわたつみの見るを逢ふにてやまんとやする」　覺束なさは―今逢ふ事のならぬ不足は尤と　わが御心―狭衣の心　心づくしに―狭衣が　桂男―月　等覺の位―佛道の悟りの階級の名、将に佛にならんとする前の位、狭衣の心　かけ〳〵しき―好色がましき方の希望は　水の白波なる―跡もなきの意なるべしといふ　ながらへぬべからむ―只暫時の命の間だけでも

り知りたるに、まいてこの御有様は、おぼつかなくては實にすぐしがたう思ひ聞えさせたまふらむ、理ぞかし、など、あはれにぞ見たてまつる。御前にも、見るを逢ふにては止むべきものと思しめしつるを、思ふさまにうれしき御有様ながら、覺束なさは實にとばかりは、耳とゞまらせ給へれど、例のごと、つゞけてあるべかしき御答も無ければ、わが御心のうちは、はるべき樣も無し。あきらかならぬ空のけしきも、なほ心づくしに見まゐらせたまへるを、桂男も、おなじ心にあはれとや見たてまつるらむ、暑げに立曇りたりつる村雲はれて、月影はなやかにさし出でたるに、御几帳にはづれて、けざやかに見えさせ給へる御髪のかゝり、つらつきなど、等覺の位にさだまるとも、見奉らずなりなむことは口惜しかるべきを、まして元より、この世の榮耀はことに好まずなりにし御心なれば、いかでか斜には思されむ。あさましき御心のうちの、かけ〳〵しき方ざまをば、今は如何なりとも思し寄るべきならねど、水の白波なる御有様を、雲のよそにのみ思ひやり聞えさせ給はむには、ながらへぬべからむ命の程なりとも如何、と思し

思しわびて―狹衣が
御前にも―齋院にても
ゐざり出で―齋院が
思ひかけず―狹衣が
御けはひ―齋院の
世にえ長からぬ―長くは生きて居られぬ
見奉り知りたる―侍女等が

されど、帝の御心地まことしう重らせ給ひて、一條の院にわたらせ給ひぬれば、逃れたまふべき樣も無うなりぬるに、思しわびて、今は御ありきもあるまじけれど、齋院に、夕さりつかた忍びてまゐり給へり。

常よりもあつさ所せき年にて、御前にもなやましく思召さるゝに、からうじて夕風すゞしく吹き出でたれば、人々端に出で居つゝ月の心もとなさを待ちわたるほどのたどたどしさに、紛らはさせ給ひて、少しゐざり出でさせ給へりけるなりけり。思ひかけず音無うて參らせ給へれば、ふともえ入り果てさせたまはぬ御けはひの、常よりはちかき心地するにも、いとゞこゝろの中はかき亂り、忍びがたし。狹「かやうにまゐり侍らむことも、今よりはあるまじきさまに承れば、今宵ばかりもなほ見たてまつりてこそはとてなむ。いとあまり思ひかけぬ有樣に侍れば、宿世なども盡きて、世にえ長からぬやうも侍りなむ。また然らずとも、見奉らむこと、今宵ばかりこそは限にも侍らめ」と、えも言ひやり給はず、いとあまりなる御氣色をも、斯くのみ限なき御中らひどもと見奉

わが御子に―狹衣の帝の御養子にして

（三）世間の驚き、狹衣齋院を訪ひて告別す

みじかき―卑しき人

自らの―狹衣自身の

おぼしたちし方樣―出家の志

此の世に―狹衣の心、世間の評判通り我が帝位にとゞまるといふは不都合の事故かかる未練も出るのかしら

え保つ―我は到底帝となりてやりきれぬのかしらと

いと心あわたゞしく思召されて、先わが御子になさせ給ひて、八月にぞ御國ゆづりあるべき定になりぬ。

ちかき世に、かゝる例もことに無き事なり、公を誹りたてまつるべき樣もなけれど、なほ如何なることかあらむ、と言ひなやむ人多かるに、道理をたどり知らぬなどは、高きもみじかきもたゞ、時々も見たてまつらむ事の絶えぬる事と思ひなげくさま、世に亡くなり給ひつらむ人のやうに、あまりゆゝしきまでぞありける。自らの御心にもおぼしたちし方樣、いとかけ離れはてて、今更にいとあわたゞしく、ありつかぬ心地ぞし給ふべければ、ふさはしからぬ身の宿世と、思し歎かるゝなかにも、齋院を見たてまつり給はむことの、今はあり難うなりぬべきくち惜しさは、今さらに言ひやるべき方なければ、此の世に言ひあつかふらむ樣に、實にえ有るまじきことなれば、いと斯うしも覺ゆるにやあらむ、またえ保つまじかりけるにやと、流石なるをこがましさを現はしはててむことよ、など方々にさへ安からず、わりなき御心の中、來し方にもいやまさりになりたり

知りたまはめ—天位に即くべき筈
さらでは—狹衣を帝位に即けずば
奏せさせ—齋宮が
あやしう—若宮は帝の御子と誰も思ひ居れば也
然るまじき程の事—狹衣即位の事

たち身の才よりはじめ、この世には過ぎて、たゞ人にはありがたげなる宿世ある樣なンめるを、公の知りたまはであれば、世はあぢきなきなり。若宮は、その次々にてゆくすゑこそ知りたまはめ。親をたゞ人にて、帝に居たまはむことは、あるまじきことなりさらでは、おほやけの御爲いと惡しかりなむ。やがて一度にくらゐを讓り給ひてば、御命もながくなり給ひなむ。このよしを、夢の中にもたび〳〵知らせたてまつれど、なほ心得たまはぬにや」などやうに、さだ〳〵と宣はすること多かりけれど、餘りうたてあれば漏らしつ。かゝる由を、忍びて、内裏にも大殿にも奏せさせ給へるに、聞きおどろかせ給ふことかぎりなし。若宮の御ことをぞ、誰も心得ずあやしう思しける。大殿上などの御心の中ぞ、言ひつくすべき方無きや。あらたなる神の御心寄とは、さだかに聞きながらも、あまりに然るまじき程の事は行末も如何と、恐しきかたも、さま〴〵心靜ならずおぼさるれど、斯う聞きたまひて後は、思ひ寢にやあらむ、帝の御夢にも、殿の御夢にも、「疾く代りゐさせ給はずば、惡しかりなむ」とのみ、うちしきり御覽ずれば、

おり居させ給ふべき―御隠居あるべき
さかりの御齢―帝の御年齢が
やむごとなくおはせし后腹―女二腹を母后腹の皇女と信じ居る故に斯くいふなり
あるまじかりし―先に平人にしたるが不都合の趣なり
思しはなれにし方様―御出家の上は世俗の事は放擲したる譯なれど
齋宮―嵯峨院皇女
さとしがちにて―神佛の示現多く
さだ〳〵と―分明に
大將は―示現の詞狹衣は

帝もいとゞなやましくのみなりまさらせ給へば、なほわが世は盡きぬるなゝめりと思召して、昔の一條院におり居させ給ふべき定になりぬ。年ごろも、次のおはしますまじきにやと、くち惜しきことに明暮おぼしめしつれど、さりともある樣あらむなど、たのみ過させ給へるを、昨日今日となりては、なほいと本意無きことにおぼしめすこと限なし。世の人も、「未ださかりの御齢なり。父帝だに、たゞ人になしきこえさせ給ひてし宮を、またとりかへし坊にするゝ給ひて、位を去らせたまふことは、あるまじきこと」と惱めど、大殿などは、「さばかりやむごとなくおはせし后腹に、なのめにだにあらぬさまにて生れ給ひしものを、あるまじかりし事ぞかし」など宣ふを、いとをこがましと大將は聞き給ふ。嵯峨の院にも、思しはなれにし方樣のことなれど、斜にもいかでかは思されむ、命の長かりけるが嬉しき事とよろこばせ給ふに、齋宮もあやしうさとしがちにて、宮もなやましげにし給ふよしきこゆれば、嵯峨の院なども思しなげくに、天照神の御けはひ、いちじるくあらはれ出で給ひて、さだ〳〵と宣はする事どもありけり。「大將は、かほか

この人―大貳
なき御かげ―女二の母宮
かくし忍ばせ―母宮が
この御あたり―齋院側
知り給ひたるらむ―女二と狹衣との關係を
末の世にも―若し自分が女二と狹衣との祕密を口外したらば
この御事―女二と狹衣との祕密
㊂天照大神の御告により狹衣受禪の事決す

て、とやかくと、互に心の中をも聞え合する世なくて過ぎなむは、なほかへす〳〵思ふにも言ふにもあまりて、くちをしう心憂くおぼされけり。中納言のすけ、大貳のめのとおなじ同胞といへど、同じ身をわけたるやうに、かたみに思ひかはしたれば、この人の露ばかりも漏らしたることをば、心よりほかに散らすべきならねど、なき御かげの御覽ぜむこともあり、さばかりかくし忍ばせ給ひて過ぎさせ給ひしを、心よりほかに、わが心得知り初めし事だに、かたはらいたかりけり。また入道の宮、この御あたりにはのこり無く知り給ひたるらむと、さばかり思召しうたがひたるものを、末の世にもおのづから聞きあはせ給ひて、思ひの外なりけりと思召されめ、とてもかくても、今は若宮の御爲に、誰もおろかに思ひ聞えさせ給ふべくは無かりけり、とおもへば、大貳にも、この御事をかけても語らざりけり。

夏深くなるまゝに、世の騷がしさもいやまさりにて、たかきも卑しきも、殘る人すくなげになりつゝ、月日天星のけしき、雲のたゞずまひも靜かならず、あわたゞしきまゝに、

おのづから―自然の事にして別に帝の徳不徳の致す所に非ず
思召さるらむ！早く閑散の身になりて身を養ひたしとの御考に對しては依然御在位は不都合なれど
あまり物騒がしき樣に―今御譲位ありては
實に―堀川の心
若宮―女二腹
女帝も―狭衣の心
峯のわか松―女二腹の生れし時の狭衣の歌
まことに叶ふべき―縁起を祝ひしが眞になりて春宮にも立つ事もあらば
かのつれなき―女二の心にも
さしむかひて―女二宮と

にても、心のどかなる樣にもなりなまほしくなむ」と宣はするを、いかゞは、ふと許きこととしも思されむ、堀川「世の中の靜かならぬ事は、おのづから然のみこそ侍れ。おのおの前の世の契のほども聞きいれさせたまふべきにも侍らず。思召さるらむこそ不便にさぶらふことなれど、そは御祈などせさせ給ひて、なほ靜かに、試みさせ給はむこそよく侍らめ。あまり物騒がしき樣にさぶらひなむ」と奏し給ひても、實に坊に居たまふべき皇子のおはせぬは如何なることにか、と思しなげきけり。内々には、若宮の御宿世のいと辱かりける事と、もてかしづき聞えさせ給ふを、大將殿は、あるまじき事かなと聞きたまへど、いかでか然も聞えたまはむ、女帝も、かゝる折や、昔も居たまひけむ、いかなるべき世にか、と人知れずおぼすにも、かの「峯のわか松」とかや、いはひ置きたまひけむ生先の、まことに叶ふべきやうもあらば、いかなる心地しなむ、さる事のあらばしも、まことに生けるかひありける身とは覺えなむかし、かのつれなき御心にも、さりとも如何でか、いとむげには思されむ、など心一つにおぼすにつけても、さしむかひ

一帝禪位の志、堀川大臣の諫言、女二宮腹の若宮春宮に立てられんとす

ゆゝしきもの多く—盜賊などをいふ

心得ぬさまの夢—合點のゆかぬ夢の告

次—御子

大殿—堀川

若宮—女二腹

くゝまれ—包まれ

おほいまうち君—堀川大臣が春宮になるよりも

狭衣物語　巻第四之下

そのころ世の中いと騒がしうて、道大路にゆゝしきもの多く、やむごとなき人もあまた亡うなりなどし給へば、あはれにはかなき事を誰もおぼさる。帝も例ならず思されて、心得ぬさまの夢さわがしう見えさせ給へば、我が世の盡きぬるにやと、こゝろ細くおぼしめさるゝにも、次のおはしまさぬことを、いかでか口惜しう思さゞらむ。大殿まゐり給へるに、御物語こまやかにきこえさせ給ひて、帝「命も宿世も盡きにたる心地するを、知らず顔にてのみ過して、此の世を別れざらむことの、罪ふかう口惜しかるべきを、大將のあづかりの若宮、たゞ人になさむの本意ふかしと聞きしかど、襁褓にくゝまれ給へる女帝にゆづりおき、もしは、一世の源氏の位につくためしを尋ねて、年高うなり給へるおほいまうち君の、坊に居むよりは、あへなむとこそ思ふはいかゞ。さのみ言ひつゝ位を惜むとも、かぎりの命のほどは、心にもかなふべきならぬを見るをりに、なほ一日

なか〳〵なる形代―なまじひなる齋院の模型、宰相の妹をいふ
忘るゝ心―齋院を忘るゝ樣には神もしてくれぬのかしら
空目にや―宰相妹が似て居ると思ふは見違ひか如何と
大貳が―齋院の心
御答―齋院の
おほかたは―齋院を見ても心は慰まずして却て想を增す、名草の濱は紀伊
漏し出で給ふ―戀情を漏す
心づき無う―齋院が
くやしう―狹衣が

あらぶる神も、ことわり知り給ふわざに侍るなればにや、とは思う給へながら、なかなかなる形代をこそ見たまへしか。いでや、されど、しばし忘るゝ心は神もつき給はぬわざにや、今少しあやかりやすになりて侍る。空目にやと、いかで、御鏡のかげに御覽じくらべさせむ」とて、うちほゝ笑みたまへる御氣色、大貳がいふとて、上の宣ひし人の事にや、と聞かせ給へど、御答も無ければ、うち泣きつゝ、

狹　おほかたは身をやなげまし見るからになぐさの濱も袖ぬらしけり

とて、はては例の、忍びがたげに漏し出で給ふ涙の氣色に、またかきつくし心づき無う思しなられて、なほ眠たげなる氣色にもてなして臥させ給ひぬるも、中々何しに聞えさせ出でつらむと、くやしう思す。

うち身じろきて―齋院が寢返りして狹衣と顏を見合せたる也
あさましき―齋院の心
恥かしく―齋院が
一日もまゐり―一日御目にかゝらねば
例よりはあやしう―珍らしき御遠々しさとは思ひしかど御病氣の事は知らざりき
宮も―若宮も久しく來られぬはどうした事ぞ
例よりは―狹衣の心
心ことなる人！宰相の妹を得たる爲の無沙汰と思召すならんと

思しつゞけて、長押に寄りかゝりたまひて、つく〴〵と居給へるに、うち身じろきて見あはせ給へるも、あさましき寢ぎたなさを、いかに見たまひつらむ、と恥かしく思しめされて、御顏もいとあかうなり給ひて、やう〳〵几帳にまぎれ入らせ給ひぬるも、いと口惜し。人々今ぞ起きつゝ、少しゐざり退きなどしつれば、狹「常よりもいと堪へ難きみだり心地に、まかり歩きもえし侍らで、久しくまゐり侍らでなむ。さるは一日もまゐり御覽ぜられぬは、いとくるしく思ひ給へらるゝにこそ。御前には、さしも思召いたらぬものを」など申し給へば、齋院「例よりはあやしう程經つれど、御心地はえ知らざりけり。などか宮もひさしくは」と宣はするを、例よりは待遠におぼしめしけるよ、かう心ことなる人のしるしとぞ、おぼしつらむかし、と胸うち騷ぎ給ひて、苦しうおぼさるゝぞあぢきなき。狹「宮は、いみじう參らまほしうし給へど、上の、やがて今日明日わたらせ給はむにもろともに、とのみ聞えさせ給へれば、今日も内裏よりやがてまゐり侍れば」など申し給ひて、狹「まことや人知れずこゝろひとつに思うたまへあまる事こそ侍りつれ

ちかく參りよりて—狹衣が齋院の居所に近く　つゆかくれ無きに—隱れなくよく見ゆるに　いと斯ばかりなる—以下狹衣の心・　逢ふにしかへば—「命やは何ぞは露のあだ物を逢ふにしかへば惜からなくに」といふ歌も是程の美人に對して咏みたるにもあるまじ　心清う—さつぱりと思ひ切りたる我心強さは頗大體の事では無かつた　人をも身をも—我身をもと齋院の身の上をも顧みなければ、今でも齋院を我物に出來ぬ事もなどいと

御前に二三人さぶらひける人も、皆うち臥して寝入りたるに、やをらちかく參りよりて、御几帳のそばより見いれ給へば、御前にも御殿籠りたるなりけり。二藍の羅をたてまつりて、ひきかづかせ給へれば、御顏も身もつゆかくれ無きに、御髪は、ゆくへも知らず、つや〳〵とたゞなはり行きて、額がみのすこしかへりたる分目、かんざしなど、なかなかいとかう細には、久しう見たてまつり給はざりつれば、めづらしく嬉しくて、つくづくとまもりきこえさせ給ふに、昔よりなほ、おほろげならず思ひしみ聞えさせてしけにや、いと斯ばかりなるにほひは、更に竝びきこえさすべき人こそなかりけれ、いでなほ、我が宿世の口惜しうもありけるかな、これを我がものと見奉らずなりにけるよ、逢ふにしかへばとかや、いとかばかりなりけむ人をしも、言ひおかざりけむかし、この御身にかへむ命は、さらに惜からざりけるものを、心清う見ない奉りける我が心は、おぼろげならず心づよくもありけるかな、今とても、人をも身をも一向なきものに思ひなさば、難うしもやはあるべき、など月頃すこしおぼし紛れつる心のうちも、かきくらし

互に—狹衣と女一宮と
昔も—狹衣が飛鳥井を思ひ出さぬ事なし
數ならぬ—飛鳥井姬君をいふ、以下狹衣の心
めでたき人—宰相妹
漏り出でて—狹衣の心中の煩悶が自ら外にあらはれて
ならはばと—馴れたらば次第に隔もなくなるべしと宰相妹が當にして居た效なく
姬君—宰相妹
口惜しき事と—宰相妹に今に面會せぬが殘念なりと
あるやう侍れば—あるやう侍る故暫時御待ち下されと
（田）狹衣齋院に參る、胸中の煩悶
思ふあたりの—好いた女の側の涼しく思はれる故離れて外へは行きにくくて
おぼつかなき—無沙汰の

には、いかでかはあらむ。互にこゝろの中ども、爽ならず思ひなし、心苦しく思さるゝ度ごとには、また昔もおぼし出でぬをりなし。數ならぬ際と、侮らはしかりしかど、かかる人のたぐひもことに無かりければ、行末は、强ひてもえおとしめざらましものを、など、大方過ぎにしかたをわすれぬ御癖の涙もろさは、絕ゆべき世もなし。飽かぬことなくめでたき人を見たまひながらも、かやうなる心のうちども、絕えずならひにける忍びがたさの、物歎かしさなどは、おのづから漏り出でつゝ、ならはばとのみ思ひ聞えさせ給へるかひなく、姬君も、うちとけにくゝ、隔多かりぬべき御心と、人知れず見知られ給ひけり。大殿にも、姬君をゆかしく口惜しき事と、常に聞えさせ給へれど、狹「なほあるやう侍れば、今は、つひには御覽じてむ」などのみ申しつゝぞ、過し給ひける。

暑き程になりては、いとゞ思ふあたりの涼しきより外には、立ちはなれがたくて、起臥もろともに亂れすぐしたまふ程に、齋院にも、例ならずおぼつかなき日數隔たりにけるを思し出でて、すゞしき夕風待ちつけてまゐり給へれば、人少にしづかなる心地して、

べくもあらず、大將殿にもうち覺えたてまつり給ひて、なのめに人の思ひきこゆべくもおはせぬ有樣なれど、宮は心づきなきゆかりと思せば、心ひとつに任せて、あはれに思し扱ふべきこととも思さず、かばかりまでほのめき給ふも、たゞ此のゆかりと心得たまへば、世を背きなむ後まで、名殘もとゞめま憂きを、たゞあらはして渡しやしてましと思すをも、知り給はず、何ごころ無き樣のうつくしさを、流石にあはれにも、人知れず思しけり。かやうなる内々の御けしきを、御乳母たちなどは見知りたれど、殿にも露きこえさすべき御樣にもあらず、はづかしげなる御けしきなれば、たゞあはれに心苦しき御ことを、おの〳〵言ひ合せつゝ過しける。大將殿も、すこしは心得そめたまひにし御氣色なれば、實にいかにせましと思すをり〳〵はありながら、今更に如何にしてかは、外ざまへもてなし聞えたまはむ、おほかたの有樣などは、とかく聞えあらはし給はねど、斜ならずもてなし思ひきこえさせ給へれば、かゝりとても、口惜しう飽かぬことありぬべき御行末ならねど、へだてなき御なからひに、同じ心にもてかしづかれ給ふやう

ろち覺え—假て居て
心づきなき—いやな女の子と思へば
あはれに思し—可愛がるべきものとも思はず
かばかりまで—狹衣が稀にでも來るのは此子の居る故なりと思へば
あらはして—表向に此の子を返して仕舞はんかと
知り給はず—飛鳥ヶ腹が殿にも—狹衣にも
すこしは—稍一宮の心を悟りたれば
今更—今更飛鳥井腹を外へ置く譯にはゆかぬ
斜ならず—女一宮が大事にする故
かゝりとても—此儘女一宮に置きても
へだてなき—夫婦中よき家庭にて育てられる樣には勿論ゆかぬ

姨捨山の—「我心なぐさめかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」
きこえさせ給はぬも—久しく御無沙汰して居るをも
すこしほのめかし—少し戀の心を仄めかしたる歌を齋院に贈れり
おほせ書—命を受けて書きたる手紙
こはかゝる—狹衣の心、我と齋院とは戀愛をかはすべき中ならず
㊤一品宮やうやく飛鳥井腹姫君を愛せず
姫君—飛鳥井腹

づかぬ心のくせども思しやすらむと、思ふ方も慰められしを、この頃は、姨捨山の月にはあらぬわが心にも、きこえやらむ方無くて、久しくさへきこえさせ給はぬも、また如何樣にかおぼしならむと、人やりならず歎かしくて、御方に獨りながめ臥したまへる夕ぐれの空の氣色、とりあつめていと忍びがたきに、思しあまりて、例の心ときめきに、すこしほのめかし給へり。

狹　ながむらむゆふべの空にたなびかでおもひのほかに烟たつ頃

ときこえ給へり。されど、例の中納言のすけの、おほせ書ばかりにて、かひ無きも常のことにて、目なれたまひぬべけれど、こはかゝるべき中のちぎりかは、などかは、我が心のつらきぞかしと、いひやるべき方無う、わりなき心ぐるしさなどは、たゞ昨日今日のことのやうに、かきくらされ給ふほどは、かゝる獨居をしたまひつゝ、身をこがしたまふ事絶えざりけり。

一品の宮に生ひ出で給ふ姫君、おとなび給ふまゝに、けになべての人のゆかりとは言ふ

譲りたてまつらむ―春宮の御子望まれさせ給はゞ譲り奉るが本意
庭たづみ―宰相の中將に春宮への歌にあり
我がものに―春宮が御身を
こよなう―御身を春宮と我とに待遇を殊にせしなれば、今我方に來たるを運の拙き事と思ふならん
さらでも―春宮の妃にならずとも
⊕以下衣は齋院を思ひ切り得ずして懊惱す
御懐あらそひ―女二腹が狭衣に抱かれて寢たがるをいふ
物哀なる心の內―齋院を戀ふる心
とざま―以下狭衣の心
見え奉りて―齋院に見せて
知り給ひなむ―齋院が
見しにも似たる―齋院の歌前にあり

りや。あやまりても譲りたてまつらむこそ本意にて侍るべけれ。庭たづみ見つけたりし口なども、我がものに思いたりしものを。又こよなう取分き給へりしも、人知れずくち惜しき宿世のほどとは、おぼし知るらむかし。さはありとも、今は、何かはさも思す。さらでもかひ無からぬやうもありなむ」など、細やかに打語らひきこえ給へる御あはひ、見るかひありてめでたき例にしつべし。

かやうに、斜ならず見るかひある人を、朝夕に見なづさひたまふには、過ぎにし方の物なげかしさもわすれ給ひぬべけれど、若宮の夜の御懐あらそひの若々しさをなぐさめ給ふ度ごとにも、まづかきくもり物哀なる心の中は、つゆばかり、ありしにかはる事なかりけり。とざまかうざまにつけつゝ、あさましう思はずなる心のほどを、見え奉りても止みぬるかな、一品宮にまゐり初めしころほひは、心のうちの焦れまどひしほどを、夢のうちにもかよふ魂あらば、おのづから知り給ひなむと頼まれしを、いとど、「見しにも似たる」とありし御手ならひは、いとほしく悲しかりしものから、又なべて、よ

思ひし事は―狹衣の心
神山のまどひ―源氏宮への戀
あるべかりし事―けしからん事
行方無う―御行方が知れず案じ居しに、兄の宰相より近き處即ち狹衣の邸に居る由を聞きて安心はしたれど
川ぞひ柳―前に歌あり
おなじくば―同じ事なら春宮に參らずしてなぜ狹衣にはゆきしぞ

て書い給へるすみつき、文字樣などの、まことしう勝れてをかしげなるを、うちかへしうちかへし見たまふにも、思ひし事は叶はぬにはあらずかし、この神山のまどひは、まめやかにはあるべかりし事かはと思しなす。御硯に、梅がさねの紙の、なべてならぬ、重ねておし卷かれたるがあるを、取りて見給へば、皇后の宮の文なり。

皇后日ごろは、行方無うおほつかなきことをおもひ侍りつるに、ひと日ちかきほどにと宰相のものせしかば、心やすくなりて侍れど、川ぞひ柳は、なほいかにぞや侍りける。

とて、

皇后おなじくば木だかき枝に木づたはでしづえの梅に來居るうぐひす

とあるを、うちほゝ笑みつゝ見給ひて、狹「この下枝は、他人の言はむやうに、いと辛きことも宣はせたるものかな。御返事は、如何きこえ給ひつる」ときこえ給へど、はかぐ\しういらへ給はねば、まめやかに、狹「春宮如何に安からずおほすらむ。あさましき事な

ましよせ—頻に
示して
なげき給ひて—
其方が
まことならば—
仰説が眞實なら
ば
御爲恐ろしかン
なる事を—懷胎
は
思ふ人に—源氏
宮に
志もまさる—頻
に對する愛情が
増す
かばかりを—似
た女を得たるに
滿足しておけと
いふ佛神の計に
やと思へば
片つ方のむねは
—一方源氏宮に
對する心は
たづね見る—源
氏宮に似たる女
を探しあてはし
たれど、矢張源
氏宮を慕ふ心は
失せぬを如何に
せん

かさねて、上にも、おなじ色の無紋の織物などかさなりたるも、いとこは〴〵しく榮なかるべきを、あくまで花やかにたを〳〵と、にほひおほく著なし給ひて、手ならひして添ひふし給へる御うしろでは、吹きよらむ風の心もうしろめたう、心苦しかりぬべう思さるれば、この杖もさしよせ、狭「これ見たまへ。今まで子もたずとなげき給ひて、まろが腰打てとて、若宮にとらせ給へりければ、わびしう痛き目をこそ見つれ。まことならば御爲恐ろしかゝなることを、むづかしきわざかな」と宣へば、御顔をいみじう赤くなして、いとゞうつぶし給へるが、世に知らずうつくしげなるも、なほあさましきまで、思ふ人に似たまへりけるなど見給ふに、いとどあさからず、志もまさるものから、かばかりを慰にてやみねと、神佛のおきてたまへりけるにこそはと、片つ方のむねは、なほうち騒げば、女君の持ち給へる筆をとりて、

狭　たづね見るしるしの杉もまがひつゝなほ神山に身やまどひなむ

など、人見るべうもあらず書き汚したまふ。女君の、眞字や假名や、さま〴〵うちとけ

すまひ思はく――競爭心
子はまうけむ――粥杖にて女の尻を打てば其女子を生むといふ俗說ある也
いとふとも――「いたうとも」の誤なるべし
打ちたてまつり――狹衣を
宮の――女二腹の姫君は我子としては勿體ないと思ふ處へ
申し取り――粥杖を若君より乞ひ取りて
手かき――手を振る
新しき年の――新年なれば喪服を忌みたるにや、以下宰相妹の服裝をいふ

群れ居つゝ、をかしげなる粥杖ひきかくしつゝ、かたみにうかゞひ、また打たれじと用意したる、すまひ思はくどもも、おの〳〵をかしう見ゆるを、大將殿は見給ひて、狹「まろを集りて打て。さらばぞ誰も子はまうけむ。まことにしるしある事ならば、いとふとも念じてあらむ」など宣へば、みな打笑ひたるに、「いとゞ今は、さやうなるあぶれもの出來まじげなる世にこそ」とうちさゞめくもありけり。わか宮ぞ、ちひさき粥杖を、いとうつくしき御ふところより引き出でて、打ちたてまつり給へば、うち笑み給ひて、狹「あな嬉しや。宮のあまりかたじけなくおぼえ給ふに、わたくしの子まうけつべかりけり」と、かひ〴〵しくよろこび申し給ふもをかし。やがて申し取り給ひて、ひき隱して、女君のおはする几帳のかみより、やをら覗きたまふを、をかしと誰も見たてまつりつゝ、忍びてわらへば、狹「あなかま、あなかま」と手かきたまふ。辨のめのとは、嬉しきながら、さすがに危げにおぼえて、顏うち赤めたるぞをかしかりける。新しき年の忌々しさにや、いと黑きなどは無くて、あさぎの濃き薄きなど、珍しきさまに、數多うち

かはらぬ樣にて―尼にもならずに　たち替ふまじく―此儀脱ぐまじと決意して　わたり給へる―狹衣が來たる時も　心とまる―狹衣の　姫君ふところに―女二腹の姫君を狹衣が抱寢し「給ふ」は「給ひ」の誤なるべし　見まくほしさに―姿常の妹に逢ひたさに「徒にゆきては來ぬるもの故に見まくほしさに誘はれつゝ」　つくろひやり―體裁をつくりて行かずにも居られぬを　泣きしづみ―一品宮が　⑨正月粥杖の祝、狹衣宰相の妹と語る　花やかならねど―喪中なれば也

されむさまの、人わらはれに心憂かるべきを、またさりとて、つひには絶えはてむ有樣、かはらぬ樣にて見はてむも、今すこしをこがましく、わが心のうちも慰む所なかるべし、など思しなりて、薄墨染をば、やがてたち替ふまじくまうけさせ給ひて、わたり給へるをりも、すべて隱れつゝ、さらに見えたてまつり給はぬなりけり。過ぎにし方は、かやうなる夜な〳〵も、さして心とまる方の無かりしかばこそ、姫君ふところに臥させたてまつり給ふ。またわかき人々と、はかなき物語などうちし給ひつゝ、まぎらはし明したまひしか、今はよろづに思しつゝめど、見まくほしさにはいざなはれ給ひて、さのみもえつくろひやり給はぬを、いとどあさましとのみ、御心にあまるをりは、二三日なども起きあがり給はず、泣きしづみ給へり。

かやうにて年もかへりぬれば、大將殿の御方には、女君の御姿などこそ、改るしるしとでも花やかならねど、殿の御方に元よりさぶらひし人々は、衣の色ども、春の錦をたちかさねたり。さま〳〵祝ひ過しつゝ、はての十五日には、わかき人々、こゝかしこに

―知らぬ傍に―一品宮が宰相の妹の事を丸で知らぬ振して居たらば　なか〳〵に―狭衣が　ゆるぶ夜もなく―引緩きて　うとく―一品宮が狭衣を　思の外に―思も寄らず疑しくとりて　見おこせ―一品が狭衣の方を　打語らひ―狭衣が一品宮と　かたみに―狭衣と一品宮と　女宮―一品宮　おぼしながら―狭衣の心を　たゞ心の―一品宮の心、狭衣のつれなきは性癖なるべし　まだ知らず―一方に珍しい中のよきを評判さるゝ宰相の妹が出來たる故　御はて―忌あけ

にもてなしてものし給はば、なか〳〵に、心ぐるしう辱きかたには思ひきこえさせ給ふべきを、あさましうゆるぶ夜もなく、うとく恥かしうつらきものにのみ思して、はかなき言の葉のいらへも、まれ〳〵は思の外にとりなして、言ずくなに答へない給ひつゝ、恥かしげにらう〳〵しげなる御眼尻に、こゝろよからず見おこせ給へば、月日に添へて、煩はしさのみまされば、かやうの事も、とやかくやと打語らひ、言ひもなぐさめ奉り給ふべうも無ければ、唯かたみにおしこめて、谷のうもれ木にてぞすごし給ひける。女宮も、年頃は、あさましう見まうき心とおぼしながら、流石に、その事とりたててなめげに見え聞ゆる事もなければ、たゞ心の癖にこそは、身こそつらけれ、と思し知りて、人のつらさは咎むまじきに思召しつるを、いとかう、まだ知らずめでたき御なからひの例に言ひたてらるゝ片つ方さへ、出で來にたれば、いとゞ言ふかた無うのみおぼされてやがてこの御はてのほどに、尼になりて見えずなりなばや、と人知れずおぼせど、それにつけても、人をも身をもうらみ給ひて身を捨てつるためしに、いま行末までも言ひな

一品宮に｜狹衣が一品宮に疎遠なるを
なほ人目｜餘り人の目にあまちぬ樣にして一品宮にゝ時々は行き給へと
人を｜誤りあちん
おぼす事｜父に言はるゝ事は皆自分も考へ居る事なれど
まめだち｜眞面目になり
さぞ思す｜狹衣の心中は斯く斯くならんと父が見て居りては
あぢきなや｜堀川の心
斯うまで｜此位狹衣が本性に戻るべしとは思はざりき
これよりあるまじき｜是以上の不埒を働いても
かけてだに｜ふつつりとも小言を言はぬ
通ひまゐり｜狹衣が一品宮へ
かくて後｜宰相の妹と同接して後も

まひけり。
大殿は、かくもてかしづき給ひても、一品宮にまゐり給ふことの難きを、いとかたじけなう、あるまじき事に思さるれば、さるべきをり〳〵に、御氣色とり給ひつゝ、なほ人目こよなかるまじき樣にもてなし聞えたまふべく、をしへ聞え給ふ。人をみづからの御心にも、心にまかせては、えあるまじき身ぞかしと、みなおぼす事なれど、打聞くには、いでや、とてもかくても、身の苦しかるべき宿世ぞかし、とおぼすに、ものも申したまはず、かしこまりてまめだち給へるを、又さぞ思すらむかしと、見たてまつり給ふには、あぢきなや、斯うまでうつゝ人にて見るべかりし人かは、これよりあるまじき心をつかふとも、露ばかり心にものしくおもはむことを、言ふべきならず、など思せば、たゞすこし物思なぐさめたる御けしきなるを、めでたく嬉しと誰もおぼして、かけてだに聞えたまはざりけり。されど、もとより通ひまゐり給ひし夜かずは、かくて後とても、かはることも無うもてなし給へるを、たゞ常のことにて、今はたゞあてやかにて、見知らぬ樣

かの御心—狹衣一人で
みづからこそ—狹衣自身は
そこにさへ—汝迄が知らん顏をして居る筈は無い
伴にあるらむ人—辨の乳母
齋院の御志—源氏宮に對する注意
宮おはして—以下宰相の心、父存命にて妹を宮仕に出したりとも斯く迄の幸はあらじと思ふ樣に—滿足に
きゝはて給ひにし人—亡き母、「きゝはて」は「消えはて」の誤なるべし

りけるを、今まで知らざりけるがあやしさ。かの御心ひとつに、思ひあつかひ給ふらむも、本意なきことや」と宣へば、いみじう聞きおどろき給ひて、堀川「すべて、大貳が心なむくち惜しきなり。みづからこそ、内裏に聞かせ給はむことなどによりて、然もつゝみ給はめ、さりとても、それに從ひて、そこにさへ知らず顏つくりてあるべきかは。その伴にあるらむ人も宰相も、如何にあやしく思の外なるやうに思ふらむ」とて、いみじうむづかり給ひて、さるべき人々召しつゝ、御しつらひ、物の具、調度なども、ひきかへ改むべきさまに宣はせなどして、思しおきて、もてかしづき聞えさせたまへる樣、限なきものに思ひきこえさせたまへる、齋院の御志におとり給ふべくもなかりけり。とまりし人々も、また然らぬも、心ことなるも、數知らずまゐりつどひ、宰相も思ふさまに出で入り見たてまつり給ふに、宮おはして、かぎり無き内裏參に、おぼし立ちたらましも、え斯うしもや、と思ふ樣に思さるゝにも、うしろめたくいみじきものに見おき奉りて、きゝはて給ひにし人の、御こゝろの中思しいづるは、いとくちをしう覺えた

懷にも―狹衣が
上―狹衣の母
聞えさせて―大貳が語りて
宣はすれば―狹衣が
物憂げに―狹衣が
御かたち―宰相の妹の
みづから一人には―我一人だけには
思したらむは―狹衣が
つゝましくのみ―宰相の妹が

む。されば、まろをば、懷にもよるは寢させず」と、恨めしげにおぼして宣ふを、あやしあやしと聞き給ひて、大貳のまゐりたるに、上、「まことか。さる事や」と、問ひたまへば、はじめよりの事どもを聞えさせて、大貳「問はせ給はざらむかぎりは、なにか申す善からぬことゝこそ、さいなみ給はめ、と宣はすれば、え聞えさせでなむ。宮には、いとゞ物憂げにおぼしめして、よしなし歩きなども、今はせさせ給はずこよなう世づきたる御氣色に見えさせたまへば、うれしく見たてまつり侍るなり。御かたちなどこそ、いとよき御あはひに見えさせ給へ。齋院にぞ、あやしきまで似たてまつらせ給へる」など語りて、いとめでたしと思ひきこえたるを、聞き給ふ御けしきも、げにいと嬉しげなり。母「など、然宣ふとも、みづから一人には、今迄宣はざりける。數ならざらむ人のきはにてだに、すこしもあはれと思したらむは、疎にも思ふまじきを、まいていと心ぐるしき御ことにこそあンなれ。俄にわたり給ひて、いかにつゝましくのみ思さるらむ」と、きこえあつかひ給ふほどに、殿わたり給ひて、「何事」と宣へば、母「しか〴〵の事あ

こゝら見る人ー｜御乳母の心
この御顔ー狹衣の容貌
わが君ー宰相の妹
見奉りて後はー姫を引取りて後は狹衣が夜も家をあけず
明しもー夜の中に歸つて來る
月草にー移り氣なる樣に聞きて狹衣の意中を危ぶみ居たりしに拘はらず
㊅堀川夫妻姫君を歡待よ、狹衣益一品宮に疎し
御氣色のー此頃狹衣が姫を得て後機嫌のよきを見て
宮ー一品宮
若宮ー女二腹
似たてまつりたる人ー宰相の妹君

給ふかた樣も、あけくれ向ひ見奉らまほしきものに思はれたまひて、もてかしづかれ、いつかれ給へる有樣、いつくしうめでたきをばさるものにて、こゝら見る人の中にも、この御顔かたち、けはひ有樣に、夢ばかりにても、うちなずらふべきが、この世に無かりけるよ、と明暮過ぐる日かずに添へつゝ見奉るたび每に、わが君の御宿世は人にはまさり給へりけり、とのみ思ひ知らるゝに、見奉りて後は、夜のほどだに立ちかくれ給ふをりもなく、まれ〳〵一品宮ばかりに打通ひまゐり給ふも、明しもはてぬに、晝間の程も暮しがたげなる御けしき見るに、月草に聞きたてまつりし御心の、うしろめたさなれど思ひしよりも過ぎたる心地のみするに、人々の、過ぎにし方の物語などを聞くにぞ、なほいと危くも又頼もしくもありける。

殿上は、御氣色のすこし世のつねなるを、たゞ御祈どもの叶ふなンめりと、嬉しうのみおほさるれば、宮に夜むけにとまり給はぬことも、内々には歎きたまひつゝ、え申し給はぬに、若宮、「大將の御方には、齋院に似たてまつりたる人ぞある。宮の姫君にやあら

女房曹司―「女房の曹司」なるべし
身の上になりて―自分が其の生活をする樣になりて
身をかへたる―生れ變りたる
立ち違ひつゝ―入代り立代り
御覽じ入れられむと―狹衣の御氣に入らんと
言ひ觸れたまふを―狹衣が詞をかけらるゝを
まづ／＼と―狹衣への奉公を先にせんと
この御方―此御邸の中にても特に狹衣の方を
まことしき方―實用向の用事

かたの女房、曹司、さぶらひ、藏人所などにせさせ給へるなるべし、庭のまさごの白銀かと見えたるに、木草のたゝずまひまでも、なべてならず見ゆる枝ざしに、吹きよる風の音なひも、面白くいみじうて、この世とはおぼえぬ松の木立ありさまを、御門の外より見いれても、この中にあけくれさぶらふ人の、何事を思ふらむ、いかなる樣なる人、かゝる有樣すらむ、など思ひやられしを、身の上になりて見出したるは、身をかへたる心地のみぞする。高きもくだれるも、天の下にすこし人なみ／＼にかぞへ知らるゝ際の法師俗は、あけくれ立ち違ひつゝ、如何なるわざをして、いさゝかも御覽じ入れられむと、心をつくして、朝夕のいとなみにまゐり仕うまつりても、何ばかりのめでたき事なく、たゞ一言葉も、ものなど言ひ觸れたまふを、かしこく嬉しき事にて、やむごとなき上達部なども、內裏わたりの宮仕よりも、まづ／＼とまゐり給ひつゝ、日をくらし夜をあかし給ふにつけては、又いま少しこの御方に、參りようし給ふぞ理なるや。あそび給ふにつけても、またまことしき方、物をならひ、おの／＼身のうれへ思ひをかなへ

わづらふこと—懐胎せる事をいふ

いとゞあらし—久しく行かぬをいふ

などか御前には—我の参上するを特に勘當侍るまじうは袮仰せらるゝ譯はなしと也

文侍る—兄君より手紙来たり

我は—辨自身は

今朝化粧したれど

みつばよつばに—「此殿は宜も富みけりさき草のみつばよつばに殿造りせり」

大殿の—こゝは狭衣の父の御殿とは別棟にて

し、内裏などに聞かせたまはむことも便なかるべければ、ことさらに忍びたる様にもてなさむとし給ふならむ、と思せば、返にも、

宰相月頃わづらふこと侍りつる人の、この五六日は、いたうくるしがり侍れば、見たまへあつかひて、故郷もいとゞあらし侍りつるに、立ち寄らせ給ひけるをなむ、おどろき思う給ふる。さても、などか御前には召すまじき。

などきこえ給へり。辨のめのとの許にも、宰相「俄にわたり給ひにける。あさましく」など宣はせて、藤衣なれど、なべてならず淸らなるどもたてまつれたまへり。姫君にも、

辨「かうなむ文侍る」など聞えさせて、いみじう泣きしづみ給へる、著かへさせ奉りなどす。我は今朝とりつくろひたりつれど、みつばよつばに輝くやうなる殿づくりの、しつらひ有様よりはじめ、さぶらふ人々のなりかたちなどの、おぼろけの人さし出づべくもあらずめでたければ、我はたゞ、水鳥の汀に立ち出でたる心地して、いとわりなし。大殿のおはします方よりは別に、五間四面なり。寢殿、對、廊、渡殿など、みなこの御

―宮仕に出よとの御沙汰　わかぬ御事―わけのわからぬ事になりて　みづからの―辨自身の仕方が惡いから斯もなりし也などと言はるゝ樣にもならんかと不安心なるに　下くづれたる―安心の基礎がくづれたる　おぼろげに―狹衣が姫を引取りたるは大抵の御決心にはあるまじ　わたり給はず―妹の處へ行かざりしを　とみには―今日を除きてはよき日も急にはなき故　渡しきこえ―姫を引取り　勘當侍る―此處遷を御咎めなくば　いでさばれ―宰相の心

けにおぼしさだめたる御心には侍らじ。よし見たてまつり給へ。春宮にまゐらせ給ひつらむに劣りたる御ありさまに、よもてない奉り給はじ」など、心をやりて言ひちらしつゝ、御髮をうちもおかずめで居たり。

まことや宰相は、昨日はわたり給はずなりにしを、おぼつかなさに、文たてまつれ給ふほどに、大將殿より御文あるをまづ見たまへば、

狹俄なるやうにと思ひ給へしかど、とみには日次もよろしからず侍りしかば、昨夜なむこの侍る所に渡しきこえさせてし。辨など、騷がれ聞えなむとて、いみじう憚ぢ侍りしかど、心やすくふみわけ給へる跡とも見え侍らざりし庭のけしき、見おきがたく思ひ給へられしかばなむ。勘當侍るまじうは、夕つかた立ちより給へ。みづから聞えむ。

などやうにぞ宣ひける。さこそはと思ひつる事なれど、いと俄に輕々しきさまにて、わたり給ひにければ、くちをしく覺ゆれど、いでさばれ、なかなか任せたてまつりてむか

君の御心―狹衣の心
實に―辨の乳母の心
明日の淵瀨は―明日は狹衣の心ゝどうかはるか知らねど
いかなる御宿世―如何なる宿緣ありて我が姬は斯く人にも注意せらるゝ程狹衣に思はれしならんと
然ばかりなら行―昔程な狹衣の氣のふさがすつかり直る事はあるまじ
かやうなる御氣色―狹衣が姬をはしがれど
きしのまゝ―誤脫あるべし、末對
思しつゝむ―姬が狹衣に隨はずに居る中に
うち捨て―狹衣が姬を
あくがれ出で―姬が狹衣に誘はれてこゝに來れるをいふ
ほれ〳〵―途方にくれたる
きこえ給ふやう

つれ」など、君の御心のうかれ惑ひて、つゆばかり心とゞめ給ふ人もなくてさわがれ給へる、年ごろの御物がたり、こまやかに語り出でて喜ぶに、實にかばかりまで思し留むること無かりつらむに、明日の淵瀨は知らず、今日ばかりにても、いかなる御宿世にてかは、人もかう見知りたまふばかりの御氣色にも、と嬉しさもおろかならねど、辨「いと然ばかりならむ御心のうち、名殘なきやうは有難くこそ侍るべかンめれ。年頃もかやうなる御氣色とは承りながら、きしのまゝたづね取るらむあまたの列にては本意なしやとのみ、思しつゝむめりしほどに、あさましくうち捨てきこえさせ給ひてし後、いくらばかりの程をだにも經ず、あくがれ出でさせ給ひぬる、いかなる事にかと、ほれ〳〵しき心地し侍りてなむ。皇后宮よりも、きこえ給ふやうも侍りしを、かうわかぬ御事にしものせさせ給ひて、つひに如何なること侍りて、みづからのあさましうもてなしきこえたるにかなり侍らむと、安きそら侍らぬに、いとゞこの御物語どもに、下くづれたる心地し侍る」といふさまも、いとめやすき人樣なり。大貳「あなまが〳〵しや、おほろ

すそ—姫の髮の先

驚きこゆる—大貳の乳母が姫の髮を驚嘆する樣子を聞き附けて

殿の御けしき—此姫を迎へて後の、狹衣の御樣子が、未だ見し事もなき程の上機嫌なるを不審して

ちかう—姫の傍に

理にこそと—狹衣の御執心も最もと

わたくしの—我我召使の女ども迄狹衣の妻の定まらぬを心配して

御祈のしるしにや—此姫を迎へたる事か

おはせむ人をかくまでもてなし給はじとは思ひつれど、うち見るはなほ驚かるれば、寄りて引き延べて、すそうち遣りたるに、まことに、おくれたる筋なしとはこれをいふにやと見えて、取る手もすべるつや、筋の美しさなどの、齋院の御髮にいとよく似たまへり。長さぞまだ少しおとりてやと見ゆるは、御年のほどに隨ひたまへるにやと見るに、かう驚ききこゆるけはひを聞きて、辨のめのとも寄りたれば、大貳殿の御けしき、まだ見たてまつり知らぬさまに、見えさせ給へるがめづらしさに、おどろかれ侍りて、ちかう參り侍るに、理にこそと、この御髮ばかりに先思ひ給へなりぬ。世とともに世の中をたどよはせ給ひて、あけくれ、殿上の御前よりはじめまゐらせ、わたくしの心肝を惑はしはべりて、たゞ少のほだしに、思しとまりぬべからむ人を、見聞きいではやと、唐國までも尋ねまほしげに思しさわぐめる、御祈のしるしにやと、かへすぐ胸やすまる心地し侍りてなむ。まいて上の御前など聞せ給はば、如何ばかりおぼし喜ばせ給はむものを、一品宮わたりに聞かせ給はむに、このごろは折さへいとほしう、などこそ宣はせ

ひとり立ちかへりて—宰相の妹が
迎へたるぞ—此邸へ姫を引取りたるぞ
上—狭衣の母
宮—一品宮
老人—辨の乳母をいふ
ありつくべき様に—此處に落著き得る様に
何しにか—何の小言を仰しやりませう
如何にも〳〵—どんな女でも狭衣の氣に入りたる女ならば妨げぬと
ちかくまゐりよりて—姫君の處へ
うづもれて—姫が
いで—大貳の心

たる氣色も、げに氣高うめでたし。狭「かの聞えしわたりの故里に、ひとり立ちかへりて、心細げなれば、今日やがて迎へたるぞ。問はせたまはざらむ限は、上などにもなにか申さるゝ。宮のわたりにもいと折惡しきころなれば、善きこととも宣はせじ。三條にわたろまでは、たゞ忍びやかにてと思ふなり。老人ひとりぞ具したるを、ありつくべき様に物せよ」と、宣ふを聞くほどは、たゞ打笑みて、大貳「殿うへも何しにかきこえさせ給はむ。如何にも如何にも、御心とゞめさせたまはむ人をば、いかでか、とこそ宣はすれ。まいて、あな辱や、いかにおぼしめし喜ばせたまはむものを。あなうれしや、思ふことこそ無くなり侍りぬれ」ときこゆれば、狭「こゝろ留まるなど、たちまちに定むべきならねど、心ぼそげなゝめる人なれば、何かは、心やすからず物むづかしき世の中の慰にもと思ふなり」と、かたらひおきてわたり給ひぬる間にぞ、大貳ちかくまゐりよりて、御几帳のかたびら引揚げて見れば、御ふすまの下にうづもれて、人おはすとも見えぬに、御髮ばかりぞ、こちたげにたゝなはりゐて、いと所狹げなり。いで、よも何ごとも斜に

堅紋—かたく縫着けて浮かぬ樣にしたる紋柄
かへり—色のかはりたる意歟
こと更に—わざと此樣にして著たく思はれる程
すこしあがり—少しあみだかぶりになりたるなり
あはひ—未詳、誤あらん歟
うちの御まかなひ—譌脫あらん歟、又手まはりの世話をする義歟
召すに—父が呼ばるゝ故其方へ參らん
ぬり侍りぬ—未詳
心もとなくば—自分を危く思ふならば汝が我が代りをつとめよ

給へ」など言ひ戲れたまふ御けはひの　聞かまほしうめでたければ、辨のめのとも、獨笑せられて、几帳のほころびより覗けば、紅の御衣どもの、綿すこしふくらかなるに、うす色の堅紋なるなど、重なりたるいろあひ、なべてならず淸らかに見ゆるに、昨夜の雪にところ〴〵かへり萎みたるさへ、こと更にかくてこそ著めと、なまめかしくめでたし。烏帽子の額もすこしあがり、鬢莖しどけなげにて、まだいと眠たげなるまみ、色のあはひなど、雪にいとどもてはやされ給ひて、あたりまでこぼるゝ心地する御匂ひ愛敬などを、大貳のめのとが、うちの御まかなひして、つゝましげならず、さしむかひ奉りて、打笑みつゝ見たてまつる氣色のめでたさこそは、げに思ふこと無げに生けるかひある人とぞ見ゆるや。御手水ばかりを召して、狹「まづ、召すにまゐらむ」とて、裝束しどけなげにして出でたまふを、大貳、「ぬり侍りぬ。まづなほ〳〵」ときこえさすれば、狹「今さへ餘りねぢけがましくならはし給ふぞ。心もとなくば、まづ代してよ」と宣へば、大貳「いでや、何事も、惡しうならはしまゐらせたりとも思ひ侍らぬものを」などうち笑ひ

ひきつくろひて—辨の君が支度して同車せり
㊆狹衣頓君を伴ひ歸る、辨の乳母殿中の華麗なるに驚く
我下り給ひて—狹衣が先に下りて
この人—辨の乳母が落附かぬならん
何かと—人の世話をやき給ふな
するなど—辨の乳母を置きなどして世話やく
君は—狹衣は
いづくに—狹衣は何處に居ると父が問はるゝ故
おろかなりと—私が不注意なりとて
入りと入りぬる—「如何ばかり戀の山路のふかければ入りと入りぬる人惑ふらん」
隨身してを—隨身へ舍人になりて不斷ついて歩け

し給へば、いとゞ心あわたゞしき心地して、とまる人々によろづは言ひおきて、ひきつくろひて參りぬ。

殿におはして、まづ我下り給ひて、御几帳ども、取り出でなどして、例のおろしたてまつりたまひぬ。辨も下りぬれば、道季に、狹「この人ありつかず思ふらむ。局などあるべかしうしつらへ」など宣はすれば、道季「なにかと人なおぼしめしそ。今いとよくありつかせ給ひなむ」といひて、實にいと思ふさまなる局し出でてするなど、扱ひありく。君は心やすく思ふさまにおぼされて、日たかくなるまで御殿籠りたるに、殿の御かたより、「たゞいまわたらせ給へ」ときこえさせ給へるにぞ、辛うじて起きいで給へる。大貳のめのと參りて、大貳「昨夜もいづくにおはしますぞと問はせ給ふに、知り侍らぬ由申しはべりしを、おろかなりとさいなみ給ひしこそ、わりなく侍りしか。なほ歩かせたまはむ所知らせさせ給へ」と申せば、笑ひたまひて、狹「入りと入りぬる人まどふなる山道なれば知らせきこゆとも、たづね給はむこと難くこそあらめ。おなじくば、隨身してをありき、

それにやとーこれが姫即ち御身ならんかと思ひうつりぬー御身をすてゝ母君の方を戀すべく心動きしかど思ひしのびてー我慢してその夜のー隙見せし夜ながし添へー姫が涙をさま〴〵にー姫の心よそながらー狹衣に無關係にして行きし母の道になればよかりしに、かく泣き殘るはつらしかき抱きー狹衣が頭をかやうにてもー此儘邸に居らるゝがーいにならはぬー頭をこゝにおきて頭来て出れぬ早起をして歸るがしき故賞を添れて行くのちや一人ばかりー侍女の中誰か一人

の音きゝしさまなど、語りきこえ給ひて、狹「思はずにをかしかりし火影は、それにやと、思ひよそふるまでありがたうものし給ひしかな。ほど〳〵思ひうつりぬべかりしを、思ひそめつること變らぬくせなれば、かしこくぞ思ひしのびてやみにしか。あの梢どもは、その夜の心地してあはれなるを、なほ見給へ」と、切におこし聞え給うて、

狹ゆきずりの花のをりかと見るからにすぎにし春ぞいとゞ戀しき

と宣ふに、いとゞかごとがましく、ながし添へ給ふものから、この御言には耳とゞまり給ひて、さま〴〵に恥かしくもありける事かなと聞き給ふに、

姫よそながら散りけむ花にたぐひなでなど行き止る枝となりけむ

など、心のうちにくち惜しうおぼさる。御車擡げたれば、いと輕らかにかき抱きたてまつりて、乘せたてまつり給へるを、辨など、「いと俄にこそ侍るべけれ。暫しはかやうにてもおはしましなむものを。宰相殿もいかに怪しく思さむ」と聞えさすれば、狹「ならはぬ曉起もくるしかるべければなり。まづたゞ一人ばかり、疾く乘りたまへ」といそが

紐を結びて分るゝ門もやゝら縁のきれたる樣に思はれて戀しさ堪へ難し

御物思―姫の御心惑―不意に狹衣に襲はれての悶え

見もき難きを―狹衣が捨てゝおけぬを

暮るゝ待つ間の―狹衣の心

さしむかひて―姫と

わすれ草生ふる―母を亡ひたる悲を忘るゝ

いづれを梅と―「雪ふれば木毎に花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきて折らまし」

目とまりし火影―すき見せし折の事

あまりなる心いられも、如何ならむとゆゝしければ、言ひ消ち給へど、辨の乳母は、めでたしとぞ、聞きける。月ごろの御物思にいとゞしき御心惑さへたぐひなくて、泣きあかし給へる涙の淵も、實に身をながさぬわざにや。いみじう心ぐるしう見おき難きを、暮るゝ待つ間のおぼつかなさもわりなかるべく、又さりとて、いつしか顯はれ出でて人にもてあつかはれむも、ならはぬ心地には、なほいかにぞやつゝましく思さるゝを、たゞ宰相にも知らせで渡してむ、明暮さしむかひて言ひ慰めまぎらはさば、おのづから心より外に、わすれ草生ふるやうもありなむ、とおぼして、狹「その車こゝに寄せさせよ。心地のいみじく惱ましければ、出でぬなり」と宣へば、御格子一間ばかりあけて、御車寄せさす。二十餘日の月なれば、月もまだいとあかきに、雪の光さへ隈なくて、晝のやうなるに、をとこ君、枕がみなる几帳をおし除けて見いだし給へれば、いづれを梅とわくべくもあらず、降りかゝりたる枝ざしども、かのありし行きずりの梢にいとよく似たるも、思の外に目とまりし火影、おぼし出でられて、いみじくあはれなれば、女君に琴

内外はし侍らむ―暫く自由に出入する筈はなし
あさましく―今夜は何の用意もなく油斷してありしに、乳母等の言
ありしまろ寝―此前嵯峨に泊りし時の事
おぼし煩らひぬ―狭衣が
昔のさむしろも―嵯峨に宿りし時の事
まださは―「さは「夜は」の誤なるべし
葛城の神―葛城の神は己の貌の醜きが見らるゝを嫌ひて夜の明くるを厭ふ神なれば夜明けぬ先に人を歸したく思ひてけたりとさかしらするといふ意歟
樣あしき心の程―外聞惡きまでに戀人の情の切なるは
解きわびし―下

ば、狭「宰相の許さゞらむには、いかでか内外はし侍らむ。たゞ心やすく思ひ給へ」と、つれなく宣へば、又聞えさせむ方なくて、「あさましく打解け給へりつるものを」など、歎く歎く退きてうち臥しぬ。

ありしまろ寝の、心づくしなりしを、今宵は心やすく、解き散らして打臥し給ふに、女君はいとゞ懼ぢまさり給ひて、心ぐるしげなる御さまに、おぼし煩らひぬ。されど今宵は、苔のさむしろも思しやられず、いと疾う明けぬる心地して、鳥の音のつらさも、今朝ぞ思し知られける。辨の乳母参りて、「明け侍りぬとは知らせ給はぬにや。いとはしたなき程になりぬと、なげく聲し侍る」と、聞えさすれば、狭「まださは深からむものを、葛城の神の、さかしらにや」とは宣へど、からうじて起き給ひて、指貫の腰引きゆひ給ふも、へだて多く、心細くおぼえ給ふも、いとかく樣あしき心の程は何時のほどに習ひけるにかと、我ながらもどかしきまで思さる。

狭解きわびしわが下ひもをむすぶ間はやがてたえぬる心地こそすれ

やをら入り—狹衣が

おとなもすきぬ—老人にても漫に興を催す夜なるにの意歟

此方參るべきか—此方へ參るのがよきかと存じて參りたり

心さかしら—自分だけの分別だてを知らせる積にや

宰相どのよ—乳母などの言ふなり

今はこと樣にと—今では狹衣以外の人に嫁せしめる積はなきに

にやをら入り給ひぬれど、知る人もなし。おとゞ西おもてに行きて、「いづら」など尋ぬれど、いらへする人もなければ、歸り來て、辨「あやしきわざかな。ありつる僧も去にけり。また人もすべて無し。いかなる事ならむ。妻戸はいとひろぐ開きて、雪のみぞ降り入りたる、月はなけれど、外はいとあかくて、をかしき夜のさまかな、風はおこるともおとなもすきぬべかりけるものを、如何なる懸想人たづね來て、音無うは立ちかへりぬるならむ。くちをしきわざかな」といひて、皆笑ふに、帳のかたびらをやをらかゝげて、狹「いと久しく待ちきこえつるに、音もしたまはで紙燭の見えつれば、此方參るべきかとてなむ。まことは、身もみな凍みはてて、今宵はかへり侍るまじきを、疾く入らせ給ひね」とて、いと馴れがほに女君を引き入れたまへば、人々あさましくあきれたる心地して、物をだに言はれず、又とかく聞ゆともかひあるべきならねば、たゞみづからの心さかしらにや、「宰相どのよ如何におぼさむと、いとほしきわざかな。いとかく心あわたゞしく侍らずとも、今はこと樣にとは聞えさせたまはず侍るめるものを」など、獨言て

このせうしが—「せうし」は承仕なるべし、雜役をつとむる僧、以下辨の君の心

さるべき人—今明訪ひ來べき人

この御殿油—隙見せられんかと氣遣ふ也

佛の御かをりも—さる上き香のするは佛の御香かも知れぬ

かくれみのの中納言—かくれみのの物語の主人公なるべし、此物語今傳はらず

り來て、辨「かの西の渡殿に、やむごとなき人のおはして、おとゞに逢はむとなむ宣ふ」と、このせうしが只今いふは、誰にかあらむ。さるべき人こそおぼえね。もし大將殿のおはしましたるにやとおもへど、昨日の御文にも、さも宣はせざりしものを。いかにもたづね侍らむ」とて立てば、またある人、「もし然にもこそあれ。この御殿油あかゝりける。御格子にあなもあらむものを」とて、すこし取り除けつれば、君もちひさき几帳ひきよせて、臥し給ひぬめり。辨「人々近うさぶらひ給へ」など言ひおきて、こなた樣に來るまゝに、辨「人も久しうおはしまさぬこの御方にしも、おぼえなき匂こそすれ、あなむつかし。紙燭やさゝまし。いと暗し」とて、立歸りたれば、わかき人々いみじう懼ぢ騒ぐをおとなしき人々は、「いとゞ、さばかり物恐ろしげにおぼしめしたるに、など斯う物狂ほしうおはさうずらむ。鬼は臭うこそあンなれ。佛の御かをりもあらむ」といへば、また「かくれみのの中納言やおはすらむ」など、口々たはぶれに言ひなせど、君はまことに物恐ろしくて、顏ながらひきかづきて臥し給へり。めのと、紙燭さして來れば、帳の內

姫君の御乳母の—辨の君は

すく〳〵と—ずかずかと

こなた枕—狹衣の居る方を枕にして寢て居るなり

たゞそれかと—丸で源氏宮かと思はれる程

みたらし川—源氏宮に今齋院なれば也

おとゞと言ひつる人—辨の君

僧の、御あかしの消えたる燈しつくとて、わづかに出來たるを呼びよせて、狹「宰相はおはせぬか」と問ひ給へば、僧「昨日出でさせ給ひしまゝにおはします。大納言殿の姫君なやませ給ふとて、稀にのみこの殿にはおはします」と申せば、狹「辨の君といふ人に對面せむといふ人なむあると、ものせよ」と宣へば、僧「姫君の御乳母のおとゞにこそおはすなれ」とて、立ちぬるまゝに、僧の出でつる妻戸によりて引き給へば、かけざりけるにや、開きぬ。入りて見給へば、こゝにも念誦堂いと尊くしおかれて、行ひつとめ給ひける人の跡と見ゆ。それよりやがて火の光見ゆるかたへすく〳〵とおはすれど、殊更になよゝかにしなし給へる御衣の音なれば、心あわたゞしき風のまぎれにて、聞きつくる人もなし。母屋の中の戸よりとほりて、帳のそばなる屏風より覗き給へば、こなた枕にてよく見ゆ。火をつく〴〵とながめつゝ添臥し給へる、ふと見つけたるに、たゞそれかとまで、思ひ出でられさせ給ふ。みたらし川のおもかげさへ立ち添ひて、心さわぎするに、やがてかのかたはらに立出でなまほしきに、おとゞと言ひつる人にや、北おもての方よ

たゞ一人の―兄宰相一人の

かく渡り―姫君が本宅に歸れりとは聞けども

わかき人―姫君

姫　ことわりの年のくれとは見えながらつもるに消えぬ雪もありけり

などやうに、はかなきことの葉をのみ、昔のかたみには思しなぐさめける。日の暮るゝまゝに、風の音なひもあらくて、横ざまに吹き入る霰の音も、もの怖ろしうなりぬれば、御格子どもいそぎまゐりて、女房どちさし集ひて、もの心細く思ふに、姫君は况て、たゞ一人の御蔭にてこそ、雨風のおともふせぎ給ひしか、いひ知らず心細う思いたるもことわりにて、宰相の君を誰もうらめしう思ひきこゆ。

大將は、かく渡り給ひにけりと聞き給へど、日ついでも惡しくて、あからさまにもえものし給はず、心もと無うおぼすに、院の御忌も果てて、よろしき日なりければ、風のまよひにわたり給ひにけり。とかく立ちやすらひたまへど、山里の御棲所にもことわりかはること無う、人目まれにて咎むる人もなし。雪ばかりあるじ顏に降りつみたる庭の面、はるばると心細げなるを見わたし給ふに、わかき人の思ひはなるゝ方無う、ながめつくし給ふらむ心の中いかならむと、いと哀におしはかられ給ふ。御堂のあづかりだちたる

めづらしき様の心地に―按察使大納言の御懐胎の様子にて

かよひ給はむ―宰相が按察使大納言の方へ

大納言殿の君―宰相の妻

わたり給ひ―姫が本邸に歸りたる也

姫君まだ―妻なる大納言の娘がまだ引移り來ぬ故

㊅狹衣雪夜姫君を訪ひ、途に竊に伴ひ出づ

なごりのところにだに起き臥さまほしくおぼせど、宰相も、この春つ方より、按察使大納言の御あたりに通ひたまへる、めづらしき様の心地に、なやましげにし給ふを、かくたえこもりて過し給へるおぼつかなさも、何時しかとおぼせば、今さへかう靜心なくかよひ給はむも、いづかたも心ぐるしかるべければ、大納言殿の君をも、同じ所にて、こゝろのどかに見む、と思すなりけり。年の果になりてぞ、わたり給ひける。御しつらひなども、ありしながらなるに、ひとり立ち歸りたまへる心地のかなしさも、世の常ならむやは。明暮さしむかひ聞えたまへりし俤ばかりは、身に添ひたるやうなれど、おきふしにつけて、物のみおそろしく、心ぼそき心地のみしたまひて、さらにえながらふまじく思いたるを、宰相もいとことわりに心ぐるしけれど、姫君まだわたり給はねば、夜などはとまり給ふことかたかりけり。

日ごろ降る雪、年の殘り少うなるまゝに、いとゞ降り重りつゝ、消えやるべくもあらずしみわたるを見出し給ひても、

などおぼしつゞけらるゝ日數もあさましくて、袖をかほに押し當てて泣きたまふ。いとくろき御衣に、いとゞもてはやされたる御頭つき髮のかゝりなども、繪に畫き取りて人に見せまほしかりけり。

大將殿は、三條にわたし奉り給はむ日など定め給ひて、今はたゞ迎へきこえてむと思すに、女院つひに亡せさせ給ひぬれば、いとゞ絶え籠りたまひぬるも、いとくちをしう侘しくおぼさるゝことかぎりなし。斯くのみおもふ日かずの過ぎつゝ、違ふやうにのみあるは、つひに如何なるべきにか、とおぼすも靜心なく、うしろめたなきまゝに、文ばかりは、日に二たび三たびも、打ち頻り聞えさせ給へど、御返りはつゆなかりける。宰相にも、本意なくて過ぐる日數を、心もとながり給ひて、狹「この御忌過して、むかへ聞えさせむ」など宣ひたれば、實になにかは、今はまかせ聞えてこそは見めなど思せば、宰相「まづ今日明日例の所にわたり侍りて、有樣にしたがひ侍りてこそは、左樣にも」などぞきこえ給ひける。姫君は、ふる里に立ちかへり給はむ事ももの憂く、なほ今しばし

㊄女院の崩御によりて姫君引取の事延引、姫君舊邸にかへり住む
侘しく—狹衣が
本意なくて—姫を迎へ取る事が運ばずして
この御忌—女院の忌中
實になにかは—宰相の心
例の所に—本宅に

切に戀しく—姫が亡き母を

おこなひ給ひし—亡き母が

薬師には—薬師佛に願ふは只其方の身の上ばかり

甘露法々—佛法の功徳を甘露の味に喩へたるなり

おはしにけむ—母の死に行きたる所へ我を引取りくれよかし

泣き伏したまへるを、誰もきこえわづらひぬ。かういふ〳〵も、名残止れる心地する日數の程は、日々にあらはれ出でたまふ經ほとけなどを、かたみに見たてまつり、なぐさめ給ふを、その程も過ぎぬれば、御しつらひなども、例のやうにあきらかにもてなさるるにつけても、今ひとかへり、悲しさのかず添ふ心地したまひて、いとゞ危きまでなりまさり給ふを、宰相は、誰によそへてかと、悲しくいみじく、おもひほれ給へり。切に戀しくおぼえたまふ夕暮に、もしもや慰むと、うつくしう心ことにつくり置きたてまつり給ひて、つねにむかひ給ひつゝおこなひ給ひし十體の佛たち見たてまつり給ふにも、「薬師にはたゞ御事をのみ申す」と、つねに言ひ知らせたまひしを思し出づるに、甘露法薬のくすりも、今は何にかはすべき身にもあらぬを、たゞおはしにけむかたへおくり給へかし、さばかりのことは、難くしもあらじ、光明不絶とかや宣へる誓ぞ、叶ひ難かりける、など人知れず思しつゞく。

姫　夢さむるあかつきがたを待ちし間に七七日にもやゝ過ぎにけり

皇后宮などの―皇后宮は初より姫を春宮へ宮仕させる積なれは也
の四十九日―母尼
わたしきこえ―引取らんことを
山里―姫の居る嵯峨
憂かりける―宰相の妹におくれる也
萬とりまかなひ―姫は萬事につけて世話しくれし亡母の事のみ思はれて
一くだりも―一行の文も書く氣になれぬ故

ひけり。皇后宮などの聞かせたまはむ事のいとほしさぞ、苦しく思さるれど、さりとて今はゆづり聞えさせむことはあるまじければ、四十九日など過ぎなば、わたしきこえ給はむことを、思しいそぐに、女院、御物怪だちて、いとおもくわづらひ給へば、行幸などありて、大方の世の人だに、心のいとまなきころなれば、まいて大將殿はあからさまにもえ立出で給はぬまゝに、山里のおぼつかなさを、いかに〳〵と、靜心なく思ひやり給ひて、

狭「憂かりけるわが中山のちぎりかな越えずば何にあひ見初めけむ

餘りおぼつかなきもこゝろ憂く。昔の御事をおぼし出では、かくやはもてなし給ふべき」など、恨みきこえ給へるを、宰相も、「實にいとあまり物おぼし知るまじき御程にもあらず。かばかり有難き御こゝろを、あながちに疎々しうもてなし奉らむことも、いとほし」など聞え給へど、萬とりまかなひつゝ、きこえ知らせ給ひし御有樣のみ、おもかげにおぼえ給ひて、一くだりも引きつゞくべき心地もしたまはねば、いとゞ引きかづきて

思さるらむにも
―君の歎にも
厭はしう―我出
家の志をもやめ
て
亡き御かげ―死
者に對しても賴
みがひなき奴と
は思はれじと思
ふに。
賴もしげなく―
姫の病氣が惡い
樣に
わかしきま
で―浮り子供ら
しと思はるゝ樣
妹が歎きに沈み
て
はかしから
ぬ―役にも立たら
ぬ私だけが息災
でもつまらぬ
「樣にぞ」のぞ
は「て」の誤歟
うしろめたう―
妹の身の上が氣
づかはしけれ
ど、狹衣の心
㊃、樂中なる三
條邸、狹衣の熱
心なる經營、姬
の悲歎
この御料―狹衣
の住居にとて
ありあけの月―
宰相の妹

ひなさへ聞き侍りしかば、その思さるらむにも、ことに劣るまじき心地し侍りて、なな、
厭はしう思ひ侍りしことも、今はいかでながらへてなど思ひ給ふべきに　あらまし事も
見え奉らで止みぬるこそ、いみじう本意なけれ。亡き御かげにも、かひ無きものには見
えたてまつらじ、と思ひ侍るを、いと頼もしげなくのみ聞きたてまつるこそ、なほ世に
侍るまじきにやと、心ぼそくなむ」と、打ち歎き給へるけしき淺からず。宰相「あながちに
わか〳〵しきまで思ひ惑ひて侍る有様の、更にながらふべくも侍らざめれば、はか〴〵
しからぬ身しも、かはらぬ樣にぞ、さて何にかはし侍らむなど、思うたまへなりてなむ」
とて、いたく思ひなげきたるを見給ふに、いとゞうしろめたうゆゝしけれど、參りて自
らなど宣ふべきにもあらざめれば、甲斐なくて、立ち煩ひてぞ歸り給ひける。
三條わたりに、いと廣くおもしろき所、この御料とて、大歸心ことにつくり磨かせ給
ふを、いでや何にかはせむと、御心にも入れ給はざりつるを、ありあけの月すませ給は
むに、かひありぬべく見なしたまひて後、我が御心添へて、なべてならぬ樣に急がせ給

後の御事―葬式法事など

たてまつり―狹衣より

㊂狹衣喪中の宰相中將を訪ふ

有明の月かげ―有明の月光にて見し姫の俤

あやしう―源の事が氣がかりなれば

かゝる中と―親子の中とは言ふものゝ

かひある樣をだに―我身の出世をも母に見せる事能はずして

いまはのとぢめ―母の臨終

はざらむと念ぜられ給ひて、例の細やかなるかたにおぼし頼む御祈の師どもに語らひ給ひて、祈どもなどせさせ給ひけり。後の御事など、宰相の一人あつかひ給ふに、忍びたれど、山邊のおくりの人々多くたてまつり給へり。その程の御あつかひ、思し至らぬ事なく、細にとぶらひきこえ給ふを、宰相は、まことに有りがたく思ひ知られ給ふ。

日數の過ぐるまゝにも、有明の月かげは、面影に戀しくて、忍びありきもことにし給はず、流石にあやしう思さるれば、

狹かたしきにかさねぬ衣うちかへしおもへば何を戀ふる心ぞ

などきこえ給へど、宰相「更に日を待つさまにて」などのみきこえ給へば、おぼし侘びて、忌の程もえ待ちたまはず、忍びてわたり給へり。宰相の君對面し給ひても、盡きせずあはれなる氣色にて、かゝる中といひながらも、尋常にはあらざりつる志のほどをかたりつゝ、宰相「露ばかりはか〴〵しうかひある樣をだに見えで、おくれはべりぬる事」と言ひ續けて、いと忍びがたげなり。狹「いまはのとぢめにしも參りて、哀れなりし御けは

中將―宰相中將
かひなき事をば―母の死は仕方がないとして
後るまじき―續いて死にそうに愁む妹を持餘す
かゝる中の―狹衣の心
おなじ煙―狹衣が見舞に行きし時の母の詞
無下におぼつかなからましかば―丸で見ず知らずならば
これをさへ―姫をまで失ひては
越えもせぬ―眞の契もかはさで一夜を共に明したのが我戀の頂上でありしか

じめ、昨夜のけはひの哀なるなども、おぼし出でらるゝに、さらに餘所の事ともおぼえ給はず哀にて、中將の君の許に、こまやかに弔ひ聞え給ふ事おろかならず。御返は、

宰相 今はかひなき事をばさるものにて、後るまじきさまに侍る人を見給ひあつかひてなむ。打續きいみじき目を見侍らむ事の、心憂き事。

とあるを見給ふに、かゝる中のかなしさは、何れもおろかなるべきにはあらぬ中にも、「おなじ煙にも」と宣ひし氣色は、なべての中とは見えざりしを、げに如何に思すらむと思ひやらるゝ氣色も、無下におぼつかなからましかば、いとさしも覺えざらましを、ほのかなりし手あたりけはひの、隈なかりし月影も、さしも心にとまりしは、物思ひの花の枝さし添ふべかりける宿世にや。これをさへかひなく聞きなして、如何なる心地せむと、此頃は他事なくぞ思し歎きける。

狹 越えもせぬせきのこなたにまどひしや逢坂山のかぎりなるらむ

と思しつゞくるもいとゆゝしう、いかで、さりとも神佛世におはせば、さる目は見せ給

御心地の―母君の御心持如何など尋ねて

げに煩ひては―狹衣の心

露のかごとを―前の母君の返歌

あはめ給へりつるも―我をやりこめ給へるも

いと忽に―狹衣の心、姫君を思ひ掛くれども其も今急に引取らんなどとも思はず

につく人出で來なば、かゝる心地は止みなむと、常に宣はするを、あるまじきこととのみ聞きつれど、げにさもありぬべきことなりけり、とぞ思し知らるゝ。やがて寢られ給はで、つとめてもいと疾く、御心地の覺束なさなど聞え給ひて、

狹　さても今朝は、例ならぬ心地にまどひ侍りて、

おもかげは身をぞ離れぬうちとけて寢ぬ夜の夢は見るとなけれど

などやうにきこえ給へる。御使かへり參りて、「たゞいまなむ亡せたまひぬるとて、ののしり侍りつれば、御かへりもえ聞えさせで參りぬる」と申すを聞き給ふ御心地、いとあへなく、あさましとも世の常なり。げに煩ひては程經ぬれど、「露のかごとを」と、あはめ給へりつるも、只今の事ぞかし、など哀にはかなき世のありさまも、いとゞおぼし知られて、又いともろき涙かごとがましく漏り出でぬ。いと忽に、思ひ急ぐ一方にしもあらず、このほどは、あまた度行きかへるべき路と思ひつるを、忌の程などは、ふとしもえ通はずや、と思すも、誠にいとゞ心もとなくわりなし。花のたよりの火影よりは

ひとり聞くは—取次の侍女がまねび—母君に云ひ聞かせたれば
草枕—只一夜位の事を言ひぐさになさる御積りか
くはや—さあ行かう
㊂母君逝去、姫君を案じて狹衣僧に祈禱を命ず
面影山—面影を地名に取りなしたる也
まことしう—狹衣の心、眞の夫婦になりても猶此通りの戀しさならば出家も出來まじと
我等をば—以下堀川夫妻の常にいふ言ひぐさ

ふを、ひとり聞くは飽かずやおぼえけむ、まねび聞えければ、

母君 草枕ひと夜ばかりのまろねにて露のかごとをかけむとや思ふ

とぞきこえ給へる。籬の霧のいとゞひまなく立ちわたりて、月かげも中々曇らはしくなりぬれば、いとゞ立ち出でがたう思さるゝに、道季御靴もて參りて、道季「霧はれ侍らば、京の中見苦しくこそなりさぶらひぬべかりけれ。御車率てまゐれとや仰せ遣はすべき」と心もとなげに思ひて申せば、狹「くはや、いたうな憎みそ」とて立ち出で給ふまゝに、

狹 葛のはふまがきの霧もたちこめてこゝろもゆかぬ路のそらかな

とはやすらひ給へど、露のいとしげき中を、指貫けしきばかり引上げてあゆみ出で給ふを、人々はのぞきて見奉りつゝ愛でまどふ、理にぞありける。

殿におはしつきても、面影山は、まめやかに戀しう思ひ出でられ給へば、まことしうむつまじき有樣になりて、このまゝの心地せば、思ひはなるゝかひなう棄てがたうもあるべき世かな、と思しつゞくるにも、殿上などの、我等をばほだしにも思ひたらず、心

御有樣を—頬の容色を斷て見たらば
心より—意外に淺ゝな女かも知れぬ抔と疑ふ餘地はなき場合なれば
月かげもいかゞ—月影で見たる姫の容色を狭衣が何と思ひしか
かゝる御消息—此御口上では姫が近くて見劣りしたる事もなかりしならんと
道のほど—御歸の途中
外にもあらぬ—外にては斯る假寐はならはねども

しろめたうあはれなる御有樣を、すこしも氣近くて見たまひては、さりともあはれとは御心とゞめ給はざらむやは、心より外にあはく〳〵しきさまにてやなど、思し疑ふべきところならねば、など思しながら、この月頃、あけくれ音をのみ泣きしづみて、いみじう痩せそこなはれ、打ち解け給へるを、程なき軒の月かげもいかゞありつらむ、すこしも斜ならむことは、いみじう恥かしげなる御有樣にこそと、思しあかしつるに、かゝる御消息も、近劣りし給はぬにや、と胸うちさわぎて嬉しくおぼさるゝぞ哀なるや。母「よべはいたく更け侍りにしを、あら〳〵しき風のけしきにつけても、道のほどうしろめたなう、思ひやり聞えさせしに、泊らせ給ひにけるも知らず、例よりもまどろみ入り侍りにけるも、げに御いのりのしるしにやと、今よりは、さらば草の枕もこゝろし侍りぬべうこそは」と、聞えさせ給へるを、

狭「とけて寢ぬまろがまろ寢の草枕一夜ばかりもつゆけきものを

外にもあらぬならはしも」と、すこしほゝ笑みたる聲にて、わざと御かへりともなく宣

にて見奉らばや。この御心地のすこしよろしくだにならせ給へかし」など、ちかくうち臥したる御乳母などは言ひあはする。扇をすこし鳴らし給へれば、參りたるに、狭「夜のほど御心地はいかゞ。夜もすがら念じあかし侍りつるしるしは、さりともこよなう侍らむかし」と宣へば、侍女「御心地は同じさまにぞ。このおはしましどころの見ぐるしさをぞ、苦しがり明かさせ給ひて」と聞ゆれば、狭「人々の惡しう聞えなしたるにこそあらめ。物狂ほしう思ひやり無き樣に、聞かせ給ふらむこそ恥かしけれ」と宣ひて、狭「夜のほどもうしろめたげなりし御けはひの心苦しさに、宰相の御代とて、此御簾の前にて、明し侍りつるに、嶺の嵐もはげしくて、みだり心地もなやましければ、そなたにもえ參らで、急ぎまかり出でぬ、と聞えさせたまへ。今よりは入道もまめやかにつとめ侍るべければ、無量劫を經ても、さりとも願は叶ひ侍りなむ、と賴もしきを、私の御こゝろよせも、なほたすけ果てたまへ」など、なつかしく語らひたまへる御けはひ、外に見ない奉らむは、口惜しかりぬべかりけり。上はよべも聞きたまひしかど、何かはいとう

この御心地―母君の病氣
すこし鳴らし―狭衣が人を呼びたる也
念じあかし―我が佛を終夜念じたる效はあるべしと也
このおはしましどころ―狭衣の居所
物狂ほしう―大病人の所へ來ながら女にぴろつく故也
夜の程も―以下「まかり出でぬ」迄母君への口上を賴む也
宰相の御代―姫の兄が京へ行きて留守なれば
入道も―誤あるべし
願は―姫君を手に入るゝ願
私の御こゝろよせ―汝等も内々骨を折つてくれよ
上は―母君は
何かは―以下母君の心

なげきわびー今夜の月にて君を見れば、わが年來戀ひ慕ふ源氏に似たる哉
如何にぞー狭衣の心
宿世などー緣ありて此の姫が他人に嫁す樣にもならば如何すべき
明日の淵瀬もー近き將來の成行も心配なれば
あらましごとー豫約
かばかりはー今夜位の淺瀬は
霧のまよひー霧の霽れぬ中に共に此處を出行かんと思ふ
まことにー姫君の心
かはほりの宮ー古物語なるべし未詳
いつしかー早く常に此樣な中を見る樣にしたし

出で給へるにや、と思し寄るにも、あぢきなく涙ぞこぼるゝ。

狭 なげきわび寝ぬ夜の空に似たるかな心づくしのありあけの月

ときこえ給へど、答へきこえ給はぬぞ。いとくちをしかりける。如何にぞ。かばかりまで見たてまつり初めて、宿世などいふなるもののことざまになり給はゞいかゞすべき、さてもや、なほ世にながらへむなど明日の淵瀬もうしろめたう思さるゝまゝに、あらましごとを、うち返しうち返しきこえたまふほどに、まことに明け行く氣色なれば、御伴の人々立ちやすらひつゝ音なふなれど、狭「今より後のおぼつかなさは、なか〳〵わりなかるべきを、如何すべき。かばかりは、何時も難くしもあらじを、隔多くもてなし給はむこそ、本意なく心憂かるべけれ。さらば、霧のまよひたど〳〵しきほどに、もろともにとこそ思ひ侍れ。いかに〳〵」ときこえ給へば、まことにさもやと、あさましくわびしきに、まいて何事かは言はれたまはむ。姫「あなおぼつかなのわざや。かはほりの宮にや」なんど、うち笑ひ給ふけはひも、いと聞かまほしくめでたきを、「いつしかかやう

御心地はのどまりて—姫君の

時の間も—姫の心、自分が付き切りにして居ればこそ強ひて湯なども呑むに、今は母はどうして居るならん

押し遣り—格子を

さし入り—月が

引きかづき—衣を

たまのをの姫君—古物語なるべし、未詳

彼の御有樣に—源氏宮の御有樣に少しでも似たる器量の女ならば

音聞も—人に聞かれても差支なき家に心やりになる女の見つかりたるも

など萬はおぼしのどめて、たゞ來し方ゆくすゑの心の中など、なつかしくきこえ知らせ給ふにぞ、御心地はのどまりて、取りあへずこぼれ出づる涙も、堰きとゞめ給へれど、時の間も立ちはなれたまはず、見奉りたまふにぞ、あながちなるさまにて、湯なども見入れ給へば、いかにものし給ふらむ、かゝる事をも、いかにあさましく聞き給ふらむなど、思しやらるゝより外に、つゆばかり耳とゞまるべきことぞ無かりける。ありあけの月も出でにけり。格子のひまどもより、所々漏り入りたるが、いとゞ心づくしなるに、思し侘びて、格子のもとのかきがねを放ちて、押し遣りたまへれば、殘無うさし入りたるを、女君いとゞわびしくて引きかづきたまへるを、とかく引きあらはしつゝ見奉り給ふに、齋院にぞいみじく似たてまつり給へりける。たまのをの姫君のやうなるかばねの中にても、彼の御有樣に、すこしもおぼえたる玉の光だにかよはば、袖につゝみても見まほしく思し願ひつるに、かう音聞も物むづかしかるまじきわたりに、すこしの慰め所のありけるも、唯あながちなる心の中をあはれと見給ひて、かゝる形代を、神の造り

一所の御事—姫が母の病氣を案じ居る中に同じくお氣になり
たゞ斯ばかりにて—只斯樣して居る丈ならば
障子よりこなた—障子の内に
當得みづ—未詳
世に類なき—源氏宮の御有樣
年頃などて—独なの心、なぜ早く手に入れざりしならん
この佛の御前を—寺ならぬ外の處へ姫を連れ行くべき筈なれども
片時の程だに—片時も側を離れては心配になる程の母の大病なれば
如何にも—どうするにも病人の樣子に見定めがついてからの事と

もなければ、侍女「一所の御事を見たてまつりなげかせ給ふほどに、おなじ様にのみ沈ませ給ひて、さらに何事も聞きわかせ給ふべくもおはしまさゞめるものを」など歎くけはひ、この御乳母やうの者にやとぞ聞ゆる。独「たゞ斯ばかりにて侍らむは、御心地も何ばかりかは苦しく思されむ。歸らむにはいたく更けぬれば、月待つほど斯うて侍らむ」とぞ宣ふ。侍女「さらば、此方にこそ入らせたまはめ。餘りなめげに侍り」ときこゆれは、障子よりこなたに、女君を入れたてまつり給ひつ。當得みづの心地して、汗もこちたくながれ給へる、けはひ肌つきなどのうつくしさは、世に類無きものに思ひしめ聞えたまへる御有様に、おとり給ふまじかりけり、と思ひ合せ給ふに、いとゞ殘ゆかしうわりなし。年頃などて、心のどかにのみ思ひて過しつらむ、あながちに思ひ入れましかば、などかことの外にしも人の思ひ給はまし。過ぎにし方もくやしきに、今宵の中に、この佛の御前をゐて出で給ひぬべけれど、片時の程だに、おぼつかなく思ひみだれ給はむ御有様も、ことわりに心ぐるしかるべきころなれば　如何にもこの御こゝち見定めてこそは、

ちかう引寄せ—狹衣が姬君を

有るか無きかなる心地—姬君の心地

なめげなる—手ごめにする抔の無禮はすまじ

かばかりの疎ましさは—此位の禍ある仕方は母君も許し給へりと聞き居る故君も憚るに及ばず

この殿にて—侍女の心

御心地も—姬君の

ぶし給ひて、音もしたまはぬを、この具したまへる兒君は、「疾く〳〵」といひ侘びて、さしよりて見るに、男の居たれば、これもいみじく驚きたるけしきにて、立ちかへり入りぬれば、障子も引き立てて、いま少しちかう引寄せたてまつり給ふに、月頃ものを思して有るか無きかなる心地には、息も絶えはてぬべき樣に見え給ふを、狹「佛に怖ぢたてまつる方は、人よりもまさりて侍れば、なめげなる心はよもつかひ侍らじ。心やすく思せ。たゞかばかりの疎ましさは、上の御心も、ことの外には侍らず、とうけたまはりぬれば、さしもなどか思さむ」など、きこえ給ふほどに、兒君の告げけるにや、大人しき人のけはひにて、この障子を引開けて、「こは誰がものし給ふぞ。佛の御前とは知り給はぬか。いと便無きわざかな」とて、探り寄れば、うちわらひ給ひて、狹「佛のみちびき給へればこそは、斯うねがひのまゝには赴き侍りぬれ」とて、障子口のたゝみに、假初にぞ寄り臥したまへりける。この殿にておはしけりと思ふに、胸は落居ぬれど、をり惡しく御心地もいかに、いとゞ思しまどはるらむ、と侘しけれど、とかく聞えさすべき樣

客人―狹衣をいふ

立ちたまへる―狹衣の

この渡殿は―此處は召使の寢所なるに姫君が此處に臥し居るは狹衣の來れるに憚りていつもの所に寢ず假に此處に寢たるならん

人出で給ひぬ―客人出れり

引きとゞめ―狹衣が姫君を

のけはひのするを、立止まりて聞き給へば、「いづら。御殿油まゐれ」などぞ言ふなる。火影に見し兒の聲にて、「客人は出でたまひぬ。今はわたらせたまへ、ひめ君の御前こそ」と言ふまゝに、この立ちたまへる妻戸を引き開けて入りぬるに、いと嬉しくて、やをら入りて見たまへば、佛の御前の御燈の光ばかりほのかにて、はか〴〵しうもの見えぬに、今ぞ小やかなるわらは、火ともして持て來たる。ことにしつらひも無くて、几帳ばかりある、引き寄せて臥したるは姫君ならむ、少し退きて、人二人ばかりぞ居たると見ゆるほどに、この戸のあきたるより、にはかに風あら〳〵しう吹きたるに、火の消えぬれば、「紙燭もて參りたまへ」などいふ。この渡殿は、人々のうち休むところにてあるに、知らぬ人の、け近うものし給へるが、つゝましさに、暫し寄り伏し給へるなるべし人出で給ひぬと聞き給へば、渡り給ひなむとて、やをら起きあがりて、兒君を供にて、障子より、こなた樣にゐざり出でたまふに、引きとゞめ聞えたまへれば、思寄らずうち見かへりたまへるに、星の光に烏帽子のふと見えたるに、心惑したまひて、やがてうつ

の御志と承知して誠に頼もしく思ふ、とをち―十市、遠―同じ煙に―共に死んで行きたい位に

われもまた―「ねぬなはの苦しかるらん人よりも我ぞ益田のいけるかひなき」を本歌にてよめり

たえぬべき―生けるかひなしと歎き給へど、娘と君との縁は續きそうもなくのみ思はれて心配なり

見置きがたけれど―見棄て去りがたけれど

常にも―不断御尋ね申すべし

がれ侍るめれば、いかゞ」ともつゞけやらず、泣いたまふにやと聞ゆるけはひ、むげにたのもしげ無きを、聞く人もかなしきに、まいてかの御心の中おぼしやるぞ、さま〴〵いと忍びがたき。狹「ことわりの御事といひながら、あまり然思し入りたるを、見奉りたまへれば、御心地もいとゞ苦しう思さるらむものを、なほ思しなぐさむべうこそ、人人も敎へ聞えさせ給はめ」など、おとなしうすくよかに聞えなし給へど、

狹　われもまたますだの池のうきぬなはひとすぢにやは苦しかりける

と言ひ消ち給ふけはひは、なほ聞き知らむ人に聞かせまほしき、さまことなる御心の中をば、いかでか知り給はむ。

母　たえぬべき心地のみするうきぬなはますだの池もかひなかりけり

とにや、絶え〴〵にていと心ぼそげなるは、なか〳〵見置きがたけれど、長居せむも、苦しくやおぼされむとおぼせば、狹「今よりは、たど〳〵しからぬ心地し侍りぬべかゝめれば、常にも」などきこえ置き給ひて出でたまふに、やがて此のつゞきたる渡殿に、人

いと斯からざりつらむ|斯う重病にならぬ前に、狹衣の心

經にける年の|此には年來御懇意をひかりし方より言へば、今始めて御目にかかる機には思はれねど

頼もしげなる|「頼もしげなき」の誤なるべし

かばかりまでの|狹衣に是程の深き志ありと知りたらば疾に娘を此人に預くべかりしにと

かなしき人|娘の事

あるはあるとも|「かつ見れどもあるはあるにもあらぬ身を人の人とや思ひなすらん」

昨日今日とは|今日の臨終を

見ゆづる方なき人|娘

行きもやられ|死ぬ事も出來ぬ

かゝるとをちの|此樣な遠方迄御尋ね下さる程

でながらへ侍りけるも嬉しく」と宣ふ御けはひ、いと弱げなるしも、見し俤にかはら
ず、若うをかしげなるを、いと斯からざりつらむほどを、聞かずなりにけるも悔しきに、
つひに空しう聞きなしてむは惜しかるべき人樣なれば、うちつけにあはれも淺からずぞ
思さるゝ。狹「經にける年のしるべには、是をはじめに思ひ給へらるべくも侍らざりつれ
ど、有り〳〵て、斯う頼もしげなる御けはひをしも承るこそ、過ぎぬる方のくちをし
さも恨めしさも、みづからのあやまち顏に思う給へらるれ」とて、打泣きたまへる氣色
など、伏しまろび泣きまどはむ人よりも、淺からぬ心のほど見ゆるを、かばかりまでの
心の程と知らましかばなど、うしろめたうかなしき人の御事は、先忍びがたうおぼえ給
ひて、母「あるはあるとも思う給へずながらも、いと斯う昨日今日とはおもひ侍らで、
過し侍りける悔しさを、さま〴〵思ひたまへる中にも、露ばかり見ゆづる方なき人のう
しろめたさに、行きもやられ侍らぬを、かゝるとをちの里も尋ねさせたまひぬべかりけ
りと、見置き侍りぬるこそ頼もしく、さるは、同じ煙にたぐひなまほし氣にぞ、思ひこ

體うちふるまひ給へるさまなど、あなめでたと見え給へるに、風にしたがひて、くゆり入りたるにほひさへ、げにこそはなべての人にはまさりけれ。よろづ思ひやり聞ゆるよりも、今少しめでたく恥かしげなる御ありさまを、さもやなど思ひ寄りけるに、負氣なくいとつゝましく覺えらるゝものから、また、かゝらむ人をこそ、年に一夜の渡りにても、待ちつけて見るべかりけれ、見つる世に、などてはか〴〵しき御有樣にもてなし聞えずなりぬらむ、と苦しき御心地にも、いとゞ胸さわぎまさりて、せちに頭もたげて見やりたまふ。狹「日頃いかでと思う給へながら障ること侍りて、今までになし侍りぬるも、心の中よりは疎かなるさまにやと、今宵も月も待たずいそぎ侍りて、あさましくたどたどしう思ひ給へられつる道の空を」など宣ふ聲けはひも、かぎりなき物に思ひきこえ給ふ。宰相の御有樣などには、似るべくも無かりけるかな。人傳に聞え給はむもいとかたじけなき心地し給へば、切にためらひ給ひて、少しまろびよりて、母「たび〳〵訪はせ給ふをだに、おろかならず思う給ふるに、わざと尋ね入らせたまへるにこそ、今日ま

よろづ思ひやり―母君の心
さもやなど―娘の聟にせんかなど
かゝらむ人を―此樣に勝れた聟をこそ假令年一度でも通はせて見たし
はか〴〵しき御有樣に―精一杯鄭重に取扱はざりしが殘念
心の中よりは―心に思ひ居るよりは外形が冷淡に思はれはせぬかと心配して
かぎりなき―母君の心
似るべくも―狹衣の方がずつと立勝りたる也
人傳に―取次にて御返事申上ぐるは無禮なく思ふ故
訪はせ給ふ―御見舞の使を下される

八重葎―「八重葎しげれる宿のさびしきに人こそ見えね秋は來にけり」の詞をとりて書けり

いなおほせ鳥―未詳の鳥

おどろき―母君が

御容體―狹衣の

淺茅がはらも殊に尋ぬる人もなかりけると見えて、心のまゝに、色をつくしてみだれ合ひたる前栽どもに、露の白玉のみ處得て、蟲の音も、外よりは耳のいとま無かりけり。軒をあらそふ八重葎も、實に人こそ見えね、秋のけしきは疾く知られぬべかりけり。稻葉の風も、耳近くは聞きならひ給はぬに、いなおほせ鳥さへ音なふも、さま〴〵にさまかはりたる心地して、もの心細げなり。されど此處には人あるけしきもせで、九體の阿彌陀おはする御堂に、やがておはするなりけり。堂のかざりなど、極樂も斯くやとおもひ遣られて、いときらゝかに尊かりけるを、など今まで見ざりつらむとくちをし。坊どもに、小法師ばらの物誦じなどする聲ばかりは仄にきこえて、例ならずわづらふ人のあたりともおぼえず、しづかに心細げなり。懺法阿彌陀經などの聲ばかりぞきこゆる。人のこゑする所に寄りて、道季、斯くなむと聞えさすれば、おどろき給ひて、やがて、臥したまへる母屋の御簾の前にしとね打ち敷きて入れたてまつり給へり。月は無けれど星の光ばかりさやかなるに、軒ちかくて、いたくたど〳〵しき程にもあらねば、大方御容

露よりも—やがて死すべき樣子の見ゆる
みづから—狹衣自身
宰相—姫君の兄
こと問ふべき—路を聞くべきよしも分らぬ故
ながき世の—末長く住處と思ひ構へたる樣に見ゆるにも注意を惹かれて
こほりの橛—氷りつきたる嚴寒の頃は
居給へる—宰相中將の母の
帶にせる—「眞金ふく吉備の中山帶にせる細谷川の音のさやけさ」此歌の詞をとりて書けり

じつゝ行ひ給へど、露よりもさきにやと見ゆるをりがちになりまさり給ふ。
大將は、日ごとに、いとねんごろに訪らひ聞えたまふを、ありがたく嬉しき御心と、よろこびきこえさせ給ふに、みづからも忍びてわたり給へり 宰相も、あからさまに京に出で給ひにけり。二十日なれば、月さへ遲く出づる頃にて、こと問ふべき垣根もおぼつかなければ、此處彼處たゞずみつゝ見めぐり給ふに、いと大きなる堂どももあまたありて、三昧つとめ行ふけしき尊げにて、僧坊ども、あまたつゞきなどはせで、此處彼處竹の林ばかり、小暗うしなしつゝ、ながき世の住家と思ひたるも目とまりて、あはれに羨ましくおぼさる。山よりわづかに落ちくる水を、おの〳〵竹の筧どもを蜘蛛手にまかせやりつゝ待ち受けたる樣も、こほりの橛かためたらむ頃ほひは如何と心ぼそげなる樣かぎりなし。居給へるところと見ゆるは、寺よりは少し退きてぞありける。帶にせるほそ谷川の音さやかに流れて、おなじき岩のたゞずまひも、心ある氣色しるく 時をりふしの花紅葉の木どもも、かずを盡したると見えて、見どころ多くぞしなされたりける。されど

（一）宰相中將の母龜山の麓の寺に移る、狹衣見舞に行き姫君の臥せる邊に宿る
故宮—式部卿宮
消えもはてなむ—宰相中將の母が
いとゞ枯れ果てなむ—訪ふ人も無くなりし時分、以下母君の心
ながめくらし—姫君が
いかで—母君の心
むげに—丸で仕方のなき者になり下る程の頃の人となりとも思はれず
四十九日—四十九日の念佛歟
あはれなることども—有難き說法
などて—母君の心

狹衣物語　卷第四之中

龜山のふもとに、慈心寺などいふわたりに、故宮のいかめしき寺建てたまひて、ともすれば籠りつゝ、不斷の念佛など行ひ給ふを、この秋は御心地くるしうて、えわたり給はざりつれば、九月だにまぎれなく念佛もして、やがて消えもはてなむ、と思してわたり給ふなりけり。葛這ひかゝる松かげのけしきも、久しう見たまはざりつる程に、いとゞ寂しさまさりけり。いとゞ枯れ果てなむ頃ほひ、いかやうにながめくらし給はむと、見ずなりなむ世の事のみ心にかゝり給ひて、うしろめたういみじく思さるゝに、いかでかくしも思はじ　さりとも、むげにいたづらになり給ふべき御有樣にはあらぬものを、我身のゆき惑はむ道のほだしは、いといみじかるべきを、とかつは思し慰めつゝ、四十九日はじめ給ひて、日々に尊くあはれなることどもを聞き給ふまゝに、などて年頃も、ただ疾くかやうになりて、罪をすこし失はざりつらむ、と悔しければ、苦しきもせちに念

限の路のわかれ
—死別

かたのやうにて
—只形の如くに
書いただけで
待ち見給ふとこ
ろ—狹衣
隙あるさま—病
苦の間隙ある樣
に
聞えさせし—曾
て申上げし

て、頭もたげつゝ、尼「なほ」など聞え給へば、泣く〳〵起きあがり給へるつらつき、髪のかゝりなどをはじめ、たゞ餘所の人にてだに、見そめては、限の路のわかれもえ行きやるまじげなる樣を、まいて如何ばかりかは、うしろめたう悲しとおぼえ給ひけむ。

　妹 うきものと今ぞ知りぬる限あれば思ひながらもそむきぬる世を

などやうに かたのやうにて出し給へれど、待ち見給ふところには、珍しきけにや、いとど見ではえ止むまじう、しづ心なきまで、御心にかゝりまさりけれ、又立ちかへり聞え給へれど、宰相「今朝はすこし隙あるさまに見え侍りつれど、なほさのみ難げにのみ見え侍れば、聞えさせし山寺に、只今わたし侍る」など、宰相ぞ聞えさせ給ふめる。

忌むこと—尼になりて受戒したる間と見えて
御心樣—狹衣の
思ふ人だに—母君に心ありしをこゝにてほのめかしたる也
聞えでのみ—返事をいつもせぬのも
うしろやすく—御身の身の片附をも見て安心して死にたしとは思へど
かたちをかへ—まだ剃髪はせざる
思はずなる—飛んでもなき身分になりて
侍らずなり—我死後も狹衣に身を任せよと思ふ故
見侍る折—我が見て居る所で
御髮を—姫の
取りよせ—母が

ことのしるしにや、今日はすこし物おぼえ給ふさまなれば、かくなむと見せ奉り給ふ。

尼「實に飽くまでなさけ有りぬべかりける御心樣を、くちをしく見奉りおかずなりなむ事」など、弱げながら宣ふ。今一つの御文には

狹 われのみぞ憂きをも知らず過しける思ふ人だにそむきける世に

とぞありける。かく常に宣ふを、聞えでのみあるも、もの思ひ知らぬやうに思すらむかしと、姫君の、御かたはらに同じ樣にてのみ臥ししづみ給へるを、尼「この御かへり聞え給へ。うしろやすく見置きたてまつりて後、かたちをも變へ、かぎりの命も絶え果てむとこそおもひ侍れど、かなはぬわざなりければ、つひに見奉りおく事もなくて止みぬべきを、思はずなる有樣にて、人にもあは／＼しき心の程を、知られ給はむよりは、侍らずなりぬとも、この人の御もてなしにしたがひ給へとぞ思ひ侍れば、斯く見侍る折に、うとうとしからぬ樣にも聞えならひ給へかしと思ふなり」と、御髮を搔きやりつゝ聞え知らせ給ふに、いとゞ涙のみながれ出でて、起きも上り給はねど、硯など取りよせ給ひ

一かたに—どちらか一方にきめて仕舞へば我も其、積になるべきに春宮と我とどちら付かずにして氣を揉ませるは何故ぞ
此の御事を—娘の姆をあけておかんと
忍び給ひて—窮に派手ならず趣ある様にして狭衣との婚禮を調へんと
え待ちつけ—其迄がつゞかぬかも知れぬと思はるゝ程
若ううつくしげなる—母の
わかれ—死別るべきものとは氣がつかぬにや
跡かたなく—我が死後の娘の悲を思ひやれば
かくと—母尼になれりと
やつしがたかりし—やつしても美さはかくれぬ
母君の容貌を
例の御文—懇想文
上の御方—母の尼の方

もあるを知り給はで、大將どのより、御心地のことゝぶらひ聞え給ひて、
狭 一かたになりなばさてもやむべきをなどふたみちに思ひなやます
とあれど、苦しうし給ふほどにて、御かへりなし。日にそへて、いと弱くなりまさり給へど、たゞ此の御事を見おかむと、萬まぎらはして、忍び給ひて、事々しからねど、をかしき様にと思しおきつれど、なほえ待ちつけ給ふまじきにやと、限のさまに見え給へば。尼になり給ひぬ。いとゞ若ううつくしげなる御様を、さぶらふ人々も、さかりの御身をやつし給はむ心地して、飽かずかなしう思ふべし。姫君は、やがてわかれまでも思しよらぬにや、悲しさも類なげにおぼして、泣きしづみ給へるを見給ひても、まいて跡かたなく見ない給ひてむ後の御ありさま思しやるに、見すてがたき心地し給ふ。大將殿かくと聞き給ふにも、やつしがたかりしかたちおぼし出でられて、變らぬさまを又見ずなりぬることゝくちをしう思しけり。宰相の御許に、あはれなる御とぶらひ、懇にきこえたまひて、例の御文もあれば、やがて取り具して、上の御方にまゐり給へり。忌む

思ひぐまなうては—若しもの望さへ無くては

己がやうならむ—私如き上達部へ嫁しては

この殿—狹衣。

實にさもや—そうもしやうかと母の心が折れて來る

㈣宰相中將の母病の爲に尼になる、妹を狹衣に嫁せしむるに決す

さるべき—母の心　嫁入盛なるに

人にまかせられ—自分一身すら人任せなる今の身の上なれば

一日にても—母の心

我が見る世に—我が存生中に

はめ、思ひぐまなうては何のかしこかるべきぞ。又己がやうならむ上達部は、すきまなき樣にても、猶口惜しき御有樣にこそ侍らめ。この殿は、一品の宮おはするにても、うちうちの御心ざしなどを見侍るに、などかはとこそは見侍れ。餘所の思ひやりたるほどよりは、名殘なき物忘れなどし給ふべくもなき御心を、たゞ時々にてもうち通ひ給はむは、いけるかひあるべきわざかな」と聞え給ふを、實にさもやなどおぼし弱る。

夏つ方より、母上なやましげにし給ふを、例も暑氣にはさのみこそはと、見奉る人も自らもおぼしたるに、うらめづらしき風のけしき、待ちつけ給ひてしも、いとゞ苦しがりまさり給ひて、もの心細くおぼさるゝ儘に、たゞひめ君の御事をおぼすより外の事なし。さるべき樣に見奉るを、斯く我さへたちまちに亡くなりなば、いかにし給はむ、宰相もわが身ひとつだに人にまかせられたまへり、いみじく思ひきこえさせ給ふとも、いかゞはし給はむと、思しつゞくるがいと悲しければ、一日にても我が見る世に、大將にやゆるし聞えてまし、ある人々の心も後めたきにと、くるしきに添へても、思しいそぐ事

宮ニ遣る文の中にノれても—取りかへても—春宮への御文を取りかへて我方へ下されよ

聞えかはし—狭衣との音信も不似合にもあらねど、着當り春宮への御返事を書く樣に頻には勸むる故、そう方方への文を書かずに譯にもゆかぬとて母が代筆する

徒になし—捨てたと思つて
許し聞え—狭衣にあげ給へ
この殿の—狭衣の

姫君—女二宮
參り給ひなむ—春宮へ宮仕に
きしろひ—さすれば何と思うても妹が之と競爭はできぬ
さやうの—宮仕する以上は、宮仕きぬ迄も皇后にもなれる望があつてこそ辛抱も出來る

狭「くらべみよあさまの山の煙にも誰かおもひのこがれまさると

さりとて類あらじとこそ思ひ給へらるゝな　今日ばかりは、なほ取りかへても賜はせよかし。

とある御書樣はしも、げに類なげなる　聞えかはし給へらむも、似げなかるまじけれど、さし放ちがたき御かへりを、先と勸めつゝ、書かせ奉り給ふに、いかゞさまぐ\に聞えたまはむとて、例の上ぞ書きたまふ。

母「あさましやあさまの山のけぶりにはたちならふべき思とも見ず

とぞありける。宰相の君は、なほ、宰相「さはれ、徒になし聞えつるとおぼしなして、かく誠しく宣ふをりに、許しきこえ給ひてよ。春宮にも、この殿のむすめとて、一品の宮に生ひいで給ふ姫君、今よりことに思ひきこえ給ふめる、今二三年過ぎば參り給ひなむとすなり。いみじくともきしろひ聞え給ひなむや　さやうの御まじらひは、あらぬまでも。上なき位にやなり給はむのたのみをかけてこそ、うちくの苦しさをば慰めても過し給

外ながら｜離れ居ては稍まれても別に世話の仕様もなければさやうにて｜春宮へ宮仕に上げられよなどと　親ざまに｜親の丸でろちまかせん　大方ならむ｜大抵の宮仕では出す氣にならむ　このふる人｜宮中に仕ふる老女　類なかりし｜宰相の妹の小供の時は無類の美しさなりしが　語りきこえ｜春宮に　おもはぬ方｜狹衣が横取でもしたらば　きしろひ顔｜春宮と競爭の形に見ゆべければ　その中｜中將への手紙の中に妹への分を入れてやる也　怨み給へる中にて｜中將へ恨を

きを、同じくばさやうにて、など聞ゆれど、かの母君、いかにもく、後安からむ人に、親ざまにあづけて、われは跡たえたる住家に、籠り居む、と宣ふなれば、大方ならむまじらひはと聞くを、このふる人どもの、類なかりし兒ざまを、如何に生ひなりてか、など語りきこえさせたれば、わかき御こゝろには、ゆかしく思したるにこそあゝめれ、實にこそ、さばかりの兒は世にあらじと思ひ出でられ、いかでか唯迎取りてしがな」と、宣はするさまも、おもはぬ方に爲しきこえたらむは、人聞もびんなく、此の御心どもにも、いかゞおぼさむ、といとほしかりぬべけれど、斯くのみ斜ならぬありさまを、むかしより聞き初めて、つひに見ずなりなむは、なほいと本意なかりぬべければ、かく懇におぼしたることと見て後も、え思し絶えざりけり。ふみは、わざとの使たてまつり給はむも、きしろひ顔なるべければ、宰相中將のもとに、隙なく責めおこせ給ひつゝ、その中にぞ入れたまひける。春宮より御使まゐりぬと見置きたまひて、出でたまふまゝに、例のこまやかに怨み給へる中にて、

物言ひの一我が無搭にりをきかず聴つて我に御ゞ遣の無用なる事は前々の照し宮ても御承知の害なるにさて一宮の独たの心なこ！の事を言暗らして我につきゝ出をきせたそは誰の叫び爲ぞと反問したし取りもつめ一又我が浮名を立てんとして我が隠すの文を後から覗くのかと也ねたがり一撫大納言が、宰相中將を介して其母國衣を挑む中將に妹を狭衣に嫁せしめん事を勸むたゞみ一前の宰相の妹の歌むつまじき一狭衣の心后宮などに勸めたらば其意向を憚りて春宮の方へ定りる様になるべむしきこえさせ給ふ一文を遣る

物言ひのうしろやすさは、思し出づる事もあらむを、たゞやは見せさせ給はぬ」と、むつれよりて、切にさがすを、さて言ひ出して、わびしき目は誰が見するぞと言はまほしき、

狹「取りあつめ又もなき名をたてむとやうしろのをかにかりせしや君

たゞすの神にも、憂へ奉らまほしかりしものかな」とて、これは例の宣旨書と見給へば、あながちにもゆかしからで、こま〴〵と引き破りてさしやり給へるを、ねたがり腹立つさまも、ひとへに華やかなるさまにて憎からず。

庭たづみ見たまひて後は、いとゞ外ざまに聞きなし給はむ事口惜しきを、むつまじき御中にて、后宮などまことしく宣はせば、おもひつゝむ方おほからむ、我が方ざまには、よも思ひならじ、と思すぞくちをしきを、いかやうに思したるよ、御氣色もゆかしければ、后宮の御かたに參り給ひて、物語などきこえ給ふついでに、御子のおとなしき御心つかせ給ひて、式部卿宮の姫君にきこえさせ給ふことなど啓し給へば、后「故宮の、唯この君のことをのみ返す〴〵言ひおき給ひしかど、外ながらは、其の志のしるしも無

すげなくて—狹衣はすまして

生女の—つまらぬ女の手に合ひそうな奴をさがしあてゝ

なほし給ふ—狹衣が

心得ずもおぼしたる—春宮が

知らせ—狹衣が

ありつる返事にや—先程宰相の妹にやりし文の返事ならんかと狹衣が思ひて

引きひろげ—狹衣が文を

水あさみ—君の隱してする行は我が殘らず見知り居るぞと也

解け難く恥かしきものにぞ、思ひ聞えさせ給へる。いとすげなくて、狹「世の中ありにくくのみ思う給へらるれば、いかゞはせむとて、生女のあはれに爲つべき案内し得て、かたらひ侍るぞ」と啓し給へば、いみじく笑はせ給ふ。かく參り給ふをり〳〵は、さるべき文ども取り出させ給ひつゝ返しどもなどの、しどけなくならはしきこえたる所々、なほし給ふ。心得ずおぼしたる文字など、こまかに知らせ奉りなどし給へば、今日もあまたの文ども取り散らしつゝ、おもしろくうち誦じつゝ、ならはし聞えさせ給ふに、藏人まゐりて氣色立つは、ありつる返事にや、と思して立ち給へるに、それなりければ、かくれの方にて、引きひろげ給へるを、もの言ひさがなき權大納言、ふとさし覗き給へれば、引きかくし給ふを、例の眼の疾さは見てけり。權大「いでや、今さへ斯かればぞかし」とうめきかゝるを、狹「これはあやめ給ふべきにもあらず。娘のひとつ書きなれば、散らさじとて」と宣ふ。

權大「水あさみかくれもはてぬにほ鳥のしたにかよひしそこも見しかば

斯く何事も―斯ういふ萬事缺點なき女を相手にせられてはやがて差上げんと思ふ私の事などは見おとさるべしと思へば迷惑なり
これは―宰相の妹は
引きそばみて―側を向きて狹衣が手紙を書くは
ことわり知らぬを―春宮へは親しく宮に疎きは其筈の事と思ひ切れぬ自分の心
くちをしや―段が方へは一向文もよこされぬに春宮の方へは頻に音信せらるゝは口惜し
打ちさくじり―差出がましく
此ゝ殿―狹衣

かなか心やすきかたにても、理ぞかしと思すものから、狹「かばかり見所おほかるを、今まで見せ給はざりけるぞ恨めしき。これはいとをかしげに侍るものかな。むすめの手本に取らせまほしう侍れど、あはく〵しきやうに侍る」とてまゐらせ給ひつ。狹「斯く何事もめでたき人を御覽じ初めては、思しおとさむと思ひ給ふるこそ、いと辛かるべけれ」と啓し給へば、御顏うちあかめて、春宮「これは參らせむとも無かゝなるものを」とて、生苦しとおぼしたるを、あな幼の御心ざまやと、をかしく見奉り給ふ。御硯紙など申し給ひて、引きそばみて書き給ふは、やがて此の宮へなるべし。

狹いつまでと知らぬながめのにはたづみうたかたあはで我ぞ消ぬべき

ことわり知らぬをなぐさめ侘びてなむ。

くちをしやをだえのはしはふみみねど雲井にかよふあとぞひまなき

など書き給ふを、春宮「いづくへぞ。賜べ。見む」とは宣はすれど、打ちさくじり引き奪ひなどはし給はず。今よりいとうるはしくけだかき御心ばへなるに、此の殿をばいと打

結びめ―結び文にしたる手紙が今他より來たばかりと見ゆるを狹衣が見たがる故

申しつらむ―どの樣なうまい事を宣旨が敎へ申せしかとて

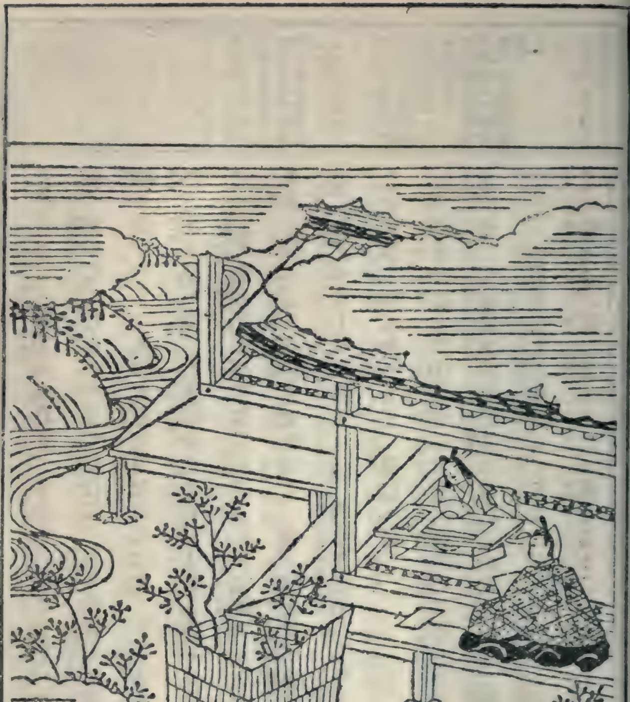
のどかにも―春宮の御文に對する宰相の妹の返歌也。

未だいと―狹衣の心

まだしきに五月雨がちにて、ものむづかしき晝つ方、大將殿、春宮の御方に參り給へれば、御手ならひなどせさせ給ひて、色々の紙なる文ども取りちらされたり。狹「などか、時々はかやうのものも見せさせたまはぬ。いとうるさき事どもには召しまつはして」と、怨じ聞え給へば、なま恥かしとおぼしたる御けしきにて、中々ふともえ取隱させ給はぬに、紫の紙のなべてならぬさましたる結びめなども、たゞ今のと見ゆるを、ゆかしがり申し給へば、え惜ませ給はで、春宮「式部卿の宮の姫君にきこえよと、大宮の宣ひしかば、宣旨がをしへつるまゝに、書きて遣りつる」とて、賜はせたり。狹「如何にはかく〴〵しき事申しつらむ」とて、見給へば、

妹　のどかにもたのまざらなむにはたづみ影見ゆべくもあらぬながめを

とかや　所々ほのかなる墨つきたしかならねど、母君のに、いとよく覺えて、思ひなしにや、いますこし若やかに、らうたげなる筋さへ添ひぬ。いままで見ざりけることさへくち惜しく、打ち置きがたう思さるゝこと限なし。未だいとをさなげなる御手などもな



この母宮―春宮の母皇后
兒顏の―式部卿宮の姫は
宮にも―東宮にも
ことの外に―凡て取りあはぬもので
他に然るべき親族もなき事故にくし、どう挨拶したものであらうなどと
わが本意―宰相中將の出家の望
たゞ見せ奉り給へ―思ひ切りて狹衣に嫁せしめ給へ、狹衣ならば似合の夫婦なるべし
わざと―狹衣が實際それ程熱心である樣にも見えず
西の山もとに―女二宮に

は、えおどろかさせ給はざりしに、この母宮も、「兒顏の、世に知らず美しうものし給ひしをいかやうに生ひなり給ひぬらむ」など宣はせ出でて、宮にもそゝのかさせ給ひて、御ふみなどは、常に奉らせ給ふなりけり。かの宮にも、かゝる御消息などを、ことの外にもて違へても、また頼もしき御ゆかりなどもなき御身なれば、いかやうにかはもてなし聞えむなど、思しながらも、さてはわが本意のむげにたがひ果てぬべきを、いかさまにかはと、思ひ亂れ給ひつゝおくりむかふる年月のみ過しつゝ、姫君もやう〳〵さかりになり給ふまゝに、帝春宮と聞えさすとも、此御ありさまになずらへなるべきやうも見え給はぬを、宰相「大將殿、ほのめかし給うて程經ぬるに、たゞ見せ奉り給へ。その御樣ばかりや似つかはしからむ」と、宰相中將つねに聞え給へど、さすがにわざと下り立ちたる御こゝろざしとは見えず、ともすれば、西の山もとに心かけたまひて、夜とともにあくがれ給へるを聞く〳〵、なほいと危くつゝましき心地してすごし給ふに其の年も過ぎて、夏のはじめにもなりぬ。

今は誰かは―女一宮出生の上は院の女御を中宮に立つるれ、内々争心をいだく考もあるまじとて

春日の神も―皇后中宮は藤原家より立つが例なれば、斯く引續き皇族より立たることを藤原家の氏神は如何に思召すならんと

すまひの頃―相撲節會、七月の末に行はる

春宮、狹衣、宰相中將の妹を挑む

あそび敵には―遊相手には不似合に春宮が思召すのかして

故宮の―式部卿宮が春宮へ宮仕に差上ぐべしと申置きしを

おぼすべし。今まで后の居給はざりつるに、女一の宮の御めづらしさに、今は誰かは思しきしろはむとて、遂に院の女御ゐ給ひぬ。うちつゞき、春日の神もいかゞおぼさむと世の人々はなやめど、それによるべきならねば、やがて堀川の院に出で給ひぬ、御しつらひありさま引き返し、宮づかさども、樣々になりなどして、めでたき御有樣などもつねの事なれど、目近く見るには、なほ女子をかやうにて見ざらむは、生けるかひなくもあるべきかな、とぞ覺えける。春宮の御母宮をば、皇后宮と聞えさせける。七月すまひの頃ぞ、今の中宮、儀式ことにて參り給ひける。

春宮には、御元服の夜參り給ひし右大將の御むすめ、麗景殿の女御ひとりぞさぶらひ給ふも、こよなうおとなび給ひて、あそび敵にはあはずやおぼさるらむ、大將殿のいたう賞め聞え給ふ姫君の御事を、今より御心に入れさせ給へど、まだいと待遠なる程と聞かせ給ふに、心もとなくおぼされける。式部卿宮の姫君を、故宮のかならず御覽ぜさせむと、申しおき給ひてしを、おとなびさせ給ふまゝに、おぼし忘れずながら、御心一つに

を產む、次いで中宮となる

同じくば―同じくむなら男の子であればよいにと

御產養―御產後の饗膳

參り給ひぬ―赤子を參內せしめたる也

らうがはしき―大小便などの世話迄なさるゝ

思ふさまにて―望の如く男子であつたならば

唯この方にのみ―帝が院の女御の方にばかり居らるゝを

などかと、嵯峨の院などには、いと口惜しく聞かせ給へど、內裏にはまだならはせ給はぬ事なれば、御佩刀やなにやとあつかはせ給ふも、めづらしう嬉しき事にぞおぼしめしたる。御湯殿の儀式ありさま、九日の夜までの御產養ども、書きつゞけずとも思ひやるべし。よろづ大殿、大將殿など、もてはやし、侍き聞えさせ給へるありさま、なのめならねば、思ふさまならぬ御事とも見えず、めでたき御宿世とのみ見ゆ。內裏には、心もとなくゆかしくおぼしめしつゝ「疾く〱」とのみ宣はすれば、御五十日ほどに參り給ひぬ。いつしかとめづらし人見奉らせ給ふに、目なれたらむ人の目にだに、かゝる類はありがたくやと見ゆる、御うつくしさなれば、まいて、時のまも御目はなたせ給ふべくもおぼしめされず、御膝のうへにて、日ぐらしまもり聞えさせ給ふほどに、らうがはしき事どもをさへ、もてあつかはせ給へる御けしき、忝くめでたきに、まして、思ふさまにてものし給はましかばと、女御はあかずくち惜しくおぼしけり。もとよりだに取分きたりし御おぼえなれば、唯この方にのみおはしますを、御方々にはやすからぬ事

御心―狹衣の
數ならざらむ―人數ならぬ妹杯が當にする事は勿論できぬと
宮の御爲―狹衣が一品宮に疎遠なるを
道芝の露は―飛鳥井姫君、前に「誰にとはまし道芝の露」の歌をよみし事あり
ありつる御かへり―宰相中將の妹へやりたる文の返事
かくのみ―斯う暇のなき程女との關係多くては
かゝへなど―持煩ふ躊躇
ひとゆきに―一息に
よべの火影―母君
宣旨がき―母の代筆
㊄院の女御女宮

ざゝめり。あまり心やすげに宣はする御心も、數ならざらむ人は、まいていかゞはと、いみじうつゝましく思ひたまへらるゝ」など、宮の御爲おろかなるを、ためしに言ひ出づるぞあぢきなきや。道芝の露は、そでにかけ給はぬ日なく、わすれ給はざりけるものを、まことありつる御かへりもて參りたるを、中將見て、中將「さりや。かくのみ暇なからむにはいかゞ」と、煩はしがるもをかしくて、引きそばめて見給へば、

散る花にさのみ心をとゞめては春より後はいかゞたのまむ

とあるは、よべの火影なるべし。いとつゝましげにかゝへなどはせで、ひとゆきに、ひき渡されたる筆のながれ、文字やうなど、これを上手とはいふべきぞかしと見えて、いとめでたし。何事も世にすぐれたる人の古めきにけるぞ、いと口惜しく思さるゝ。中將ほの見て、「すかさせ給ふにこそ侍りけれ、いとふるめかしき宣旨がきは、又むづからせ給ひぬべかゝめり」といふも、いとしたり顔なり。

四月ついたちに、院の女御、いたくもなやみ給はで、女宮うみ奉り給へり。同じくば

春宮に―春宮へ宮仕に出す積の所へ、自分如き者が手を出すは不都合　思したゝむ―君が出家しても、妹の宮仕して居るを構はぬ譯にはゆくまじ　眞心なる―狭衣自身をいふ　かの御ため―妹の爲めに御安心と迄はゆかずとも　うしろめやすく―「うしろやすく」の誤なるべし　思し疑ふらむ―御懸念の御妹御と我との中の將來の破綻は　ならはぬ事なれば―自分がしつけぬ事なれば　名殘なき心の―初の熱心が丸で跡形なくなる樣の事は無い害　見ゆづる方なく―外に世話を頼む所もなく氣掛りな妹君の樣子を　宮へ參り―春宮へ宮仕の事は

れなり。狭「春宮になど思しおきてむを、かけてだに、かく聞えさせむは、いと便なき事にこそ侍るなれ。さはありとも、その思したゝむ都の外にも、左樣の御まじらひを見はなち聞えては、あり難くこそ侍らめ。かく眞心なる後見まうけ給ひては、後の世のつとめども、紛なくこそはものし給はめ。かの御ため目安しとまでこそおほされざらめ、たださる方に、うしろめやすく心やすき方にはなどてかは、とこそは思ひ侍れど、その思し疑ふらむのちの悔しさなどは、いさや心をはかるものなれば、我ながら知りがたう侍れど、人をも身をも、かへり見ぬあだ〳〵しさなどは、ならはぬ事なればなどかさしもあらむとこそ思ひ侍れ。ひが〳〵しきまで世を思ひすてて、聞きにくきまで、誰にも騒がれ奉るありさまなどは、聞き給ふらむな。まれ〳〵、かう心に入れて聞えそめてむ事を、名殘なきこゝろのほどなど見え奉るやうは、いかでかあらむ。見ゆづる方なく、心苦しからむ御ありさまを見初めては、惜しからぬ命も、あやふくなどこそおぼえめ」と、こまやかに語らひ給へば、宰相「いでや、まいて宮へ參り給はむことは思ひかけ侍ら

谷の下水—妹を日かげ者にして仕舞ふなと

後見なき—確としたる後楯なき女が宮中の附合はむつかしからんと御返事は申上げながらも

此の有樣を—妹の身の上を

見さだめてば—妹の身の納まりを見たらば

見おきてむ—「む」は衍文なるべし

見はなつ—一切構はずに相手の男に任せきりにする事も出來難かるべければ

見侍らむも—傍イ見て居てもさぞ心配なものなるべし

啓しおき給ひけることもあり。なほさやうなる谷の下水にはなさでをとのみ、中宮よりせめ宣はすれど、後見なき人のまじらひは、思ひたち難かるべきよしを、聞えさせながらも、げにさのみいひても遂にはいかゞは、などやうに、たゞ此の有樣を明暮のなげきにて、すが〳〵と此の世も背きやり侍らぬにこそ。いかにもいかにも見さだめてばやがてこもり居なむと、思ひおきたる所も侍るめり。さりとても、まして形のやうなるありさまに見おきてむ、心やすく、ふつと見はなつばかりの事は、いとあり難かるべければ、猶ながき世のほだしとはなるべきに侍るぞかし。男こそやすく侍れ。つかさ位などいふことも、めやすき樣ならねども、唯おほやけの思し捨てぬ事ばかりをかしこきにて、おのづから過し侍りぬべかりけり。世の中に棄てられなば、出家をしても、此の世にこそ思ひいでなからめ、佛にならむ事思へばやすく侍るかし。女の、思ひかしづく人なくさるまじき有樣をして、身を思ひむすぼほれむは、見侍らむも、いかばかりか易からざるべき」とて、果は涙ぐみぬるけしき、心ことに思ひおきてたる妹の君と見えてあは

さしもあらじなど、そうもあるまいと　いさや―御心中も察しかねる故出來にくい　いみじく否び―私は非常に對したとと　更に〳〵―以來は決して此筆の御返事は上げさせますまい　容をかへて―私が出家して　世に知らずおぢて―妹が出家の形したる人を恐れて　山のあなたの―「三吉野」の山のあなたに宿もがな世の憂き時の隱家にせん―　心苦しき樣―氣の毒な妹と　故宮―父式部卿宮が宮仕の事を賴みおきし也

つけてかは。思し數まふばりはあらむ。さるものからおのれ等をも思しうとみ、かはらむ御心も、かゝる習に悔しくこそはあらめ、我が心にもつらき方に思ひなし聞えさせてむは、本意なくや」など、つゝましげにのみものし侍るめるを、さしもあらじなど、強ちにすゝめ侍らむ事も　いさや御心の煩はしければこそ。宣旨がきは、仰せられぬさきにも、いみじく否び侍れど、自らはいとつゝましきことに思ひて、さらに聞き侍らぬに、老人も行に暇なしとて、唯やがて聞えさせよとのみ、讓られ侍るぞや。今よりは更に更に」など聞えて、まめやかに、宰相「女子こそ人の持ち侍るまじかりけれ。親の心をみだり侍ることとも、男子はさしも侍るまじかりけり。故宮のかくれ給ひし折、やがて容をかへて、都の外のすみかにと思ひたち侍りしかど、をさなく侍りし折柄、かゝる容の人を、世に知らずおぢて、斯くなむと聞えて後は、立ちも離れず泣きくらして侍りしかば、するするともえ背きやらず。又いづくも同じ寂しさといひながらも、山のあなたの家居にも心苦しき樣を引きこめむもいかゞなど、思ひたゆたひ侍るを、今は又春宮に、故宮の

―我むを自ら思はるゝと共に姫君の娘の方へかゝる風には善けども內々はへの懸想も交つて居るらしい
思ひもかけぬ―狹衣の心は
火影には―燈火にて見たる丹の容貌には
聞ゆる事―宰相の妹に添はせよと望む形
むすび留めむと―前にありし宰相の歌
宣旨がき―代筆の返事
さりとても―假令見苦しき事とは思ひながらも文をやらずには置かれぬ
まことしう―本氣に狹衣が懸想し出したるかと思はるゝは
かやうになど―狹衣が斯く〳〵の仰なりと言ひ聞かすれど
あさましく―以下「本意なくや」迄母の詞、古風な內の娘を何が御氣に入らうぞ

などぞありける。をりしも宰相中將まゐり給へるを、さま〴〵思し離れがたきゆかり懷しくて、常よりも細やかに語らひ給ふついでにも、琴の音聞きしさまは言はまほしけれども、思ひもかけぬ程のありきしけりと聞かれじ、いまより後も、さるべき隙あらば見定めて、まことしく思ひさだめむ、など思せば、言ひもいで給はず。中將のかたちのいと清げなれど、火影には、流石に似ざりけりなど思し出でられて、うちまもり給ふも、いかでかは知らむ。狹「さても聞ゆる事は、聞き給はでやみぬべきか。むすび留めむとかや、ありし一言に、今までながらふるを、などかおなじくば助けはて給はぬ。先この宣旨がき、なか〳〵心やましう腹立たしとよ。人の許さぬあたりに、身の程しらぬ文などの落ちちるは、をこがましき事と思ひにしかど、身の上になり侍れば、さりとてもえ思ひやむまじきわざなりけり」とて、いとつゝましと思したる氣色まことしう思しなりにけるにやと見るは、人知れず嬉しけれど、宰相「心一つにはえ任せ侍らねば、母に侍る人に、つねにかやうになどものし侍れど、あさましく古めかしき有樣を、何ごとに

彼處にも―右近君が致仕大納言の家に親しく出入する故語らひ給ふ―狹衣がありがたきに―しにくきに中宿―式部卿宮にてかいゞ見し北方唯こゝ許と―つい此近處なりといふ故つたへの人―中に立ちたる人げにをかしげなり―其姫君を隙見して見れば成程美しとは言ふべけれど、齋院に似たる點は全くなき故失望して歸れり⑩狹衣宰相中將の妹な挑む、中將狹衣と閑談ありがたかりつる佛―珍しき美人と思ひ込みたるかの式部卿宮北方の佛世づかぬ心の中―年も釣合はぬ年増女を思ひ込む世間並はづれたる我心なぐさめがてら

近君といふ人語り聞えて　彼處にも、さるたよりありて親しく通へば、ほのかに見せよと、語らひ給ふを、親たちに知られては、流石にありがたきに、今宵はさりぬべくやありつらむ。案内聞えさせたるなりけり。中宿に心とまり給ひて、いとゞものうく思さるれど、唯こゝ許と申せば、なほ誠にやと見あらはさまほしき方あれば、え過ぎやり給はず。つたへの人のもとに、消息いひ入れ給へるに、「たゞ疾くいらせ給へ」と聞えたれば入り給ひぬ。人目なき方より、帳のうしろに導き入れて、火などおぼつかなき程にはあらずしなしたるに、げにをかしげなりなども言ひつべかりけれど、かけても思ひよそへ奉るべき方は、あるべくもなかりければ、いとすさまじうて出で給ひにけり。

夜もすがら思はずにありがたかりつる俤は、わすれ給はず　かく世づかぬ心の中をもげに知らせぬが口惜しければ、なぐさめがてら、れいの姫君の御かたに聞え給ふやうなれど、ことざまの心も添ひたるべし。

狹　ちりまがふ花に心をそへしよりひとかたならずもの思ふかな

わが御母上を—狭衣がこれに似給ひて—狭衣の心、此母に似て若き姫君は、恐らくは我が理想に叶ひたるものならんかと

此の見る人をも—親に似て居る此女をも、只見ただけにて止むべき心持にはなれぬを

あり〳〵て—狭衣が自ら評する詞、今まで女撰みをし來りて此大年増に込むとは餘り物好すぎる

(九)狭衣致仕の大納言の娘を覗き見、興さめて歸る

上の御方—堀川上、狭衣の母

兒の七つ八つばかりなるを、經讀みさしつゝ、いとうつくしと思ひて、うち笑み給へるけしきなどの、中將の母にやと見ゆるに、あまり若くをかしげなるを、いと怪しと見給ふ。わが御母上をこそ、類なくめでたき御ありさまと見奉り給へるに、さはかゝる人もある世にこそとおぼすにも、これに似給ひて、いま少しきびはに若からむ姫君の御有樣は、わがおもふことの叶ふべきにや、と嬉しきをばさるものにて、此の見る人をも見さして、出づべき心地のし給はぬを、あり〳〵ていと頑しきわざかな、我が年の程よりもおとなしき宰相中將のありさまを、など思ひあはせ給ふにぞ、いと似げなうあるまじき事かなと、獨笑せられ給ひけり。

狭　折り見ばや朽木の櫻ゆきずりにあかぬにほひはさかりなりやと

ひとりごちて出で給ふも、我ながら物狂ほしくぞ思し知らるゝ。

志し給へる所は、致仕の大納言ときこゆる人、唯ひとりかしづき給へる御むすめ、限なくをかしげにて、齋院になむ少し似奉り給へると、上の御方に古人にてさぶらふ右

心とけても―身にしみても彈かずして

宰相の弟の―狹衣の心

なほもあらず―唯も居られず

經よむ人―式部卿宮の北方也

まことしく―最らしく

これや―狹衣の心

年のほどとは―聞きし姬の年輩とは非常の相違也

誦ずる―經よむ

たぐひなきものに思ひ聞ゆるを、これは今少しあいぎやうづき　面白きかたはすぐれてや　とまで聞ゆるに、いとゞ御心とまりぬれど、心とけても彈き給はで止みぬるは中々なるに、萬いとゆかしうなりぬれど、少し物のけしき見ゆべきやうもなければ、歸りいで給ふに　西面のかたに、いとをさなき聲にて「有漏無漏法」と誦する聲の、いとうつくしう聞ゆれば、宰相の弟の法師になるべきありと聞きしなるべしと思す　格子のひまより火の影見ゆる所を、なほもあらず、やをら立寄りてのぞき給へば、几帳どもあまた見ゆれど　押遣られなどして　おくまで見とほされたり。帳の前に、脇息におしかゝりて經よむ人、三十には足らぬほどにやと見えて、いみじう氣高うあいぎやうづき、見まほしきさまなど、こゝら見つる人になずらふべくもなし。白き衣どもに、うす色などのいと鮮かにはあらぬを著て、顏などもつくろひたるとは見えぬに、髮のかゝり色あひなど、まことしくをかしげなるを、これやさは姬君ならむと思すべけれど、さすがに聞く年のほどとはいふべくもあらず、もてなしなども、おとなしく安らかにて、この誦ずる

あきらかなりし佛―初瀬にて幻に拜みし佛の姿

宰相中將―式部卿宮の子

はしがくしの間―正面の階段のつきあたりの一間

入道の宮の―狹衣の心

みぬべきにや、かのあきらかなりし佛は、さりともと賴もしかりしを なぞやかくよしなしありきも、數つもれば、いと有るまじき事ぞかし、とおぼし出づれば 物すさまじうなりて、引きかへす心地し給へば、しばしおし留めさせ給へるに、築土所々くづれて、花のこずゑども、おもしろう見入らるゝ所あり。道季召して、狹「如何なる人のすみかぞ」と問ひたまへば、道季「故式部卿宮にさぶらふ。宰相中將も、こゝになむおはする」と申せば、いま少し御心とまりて、ちかく遣りよせて見給へば、門はさしてけり。風にしたがひて、柳の絲おきふし亂るゝに、花のこずゑも、見るまゝに殘すくなげになるは、いと見すてがたきに、琵琶箏の琴などひき合せてぞあそぶなる。有樣もゆかしきわたりなれば、下り給ひて、くづれよりやをら入りて 琴の聲する方にたづね寄り給へり。寢殿南おもてのはしがくしの間、一間ばかりをあけて、人はあるなるべし。ちかき透垣のつらに寄りて聞き給へば、琵琶はたゞこの御簾のもとにて彈くなりけり。箏の琴はおくの方にぞ聞ゆる。これや姫君ならむと、耳とゞめ給へるに、入道の宮の御琴を

皆のぼり—鞠場より殿中に入りたる也

御前にては—齋院の前で琴ひく

さくら人—催馬樂の曲名

ほそなが—おくびなき衣、女の着物

㊇狹衣歸路に宰相中將の家を過ぎて琴の音を立聞し、故式部卿宮の北方を覗き見る

思ひたち—出家の望

る。

日暮れぬれば、皆のぼりぬるに、いつしかと夕月夜さし出でて、梢どもいと面白う見えわたされたり。さま〴〵の御琴ども、みすの中より出させ給へば、とり〴〵にゆづり給ひつゝ 大將は手も觸れ給はぬを、大納言、「あるまじき事なり」とて、琴をせめて奉り給へば、狹「御前にては更にめづらしげなく、中々に侍り」と宣ひて、たゞ扇うちならして、「さくら人」うたひたまふ御聲のおもしろさに、勝ることなかりける。をかしき程にしばし遊びて、人々まかで給ふに、織物のほそなが、小袿などやうの物ども、賜はせけり。

大將も出で給ふに、日ごろかたらひ給ふことある人の參りあひて、「今宵なむさりぬべき」と聞ゆれば、さらば如何はせむ、いとかく物むづかしき心も、もし慰めやすると、そなた樣へやらせ給ふ。うす霞にくもりたる月影、さやかにはあらぬしも、いとゞもの心細げなる空の氣色を、道すがらながめ給ひても、思ひたちし本意は、やがてたがひて止

心ことなる用意―來會の男等特別に容儀に氣をつけて
數―鞠の數
おりたちぬべき―自分も一所になりてやつて見たき心地す
さらばしも―狹衣が鞠の仲間に入りたらば鞠の爲に花が散らされても惜しからず
たて奉らまほしげなる―狹衣を鞠場に出したき
屈したる名ざし―まめ人の大將といはれたる其名が我には相應なるべし
かうりたま―未詳
櫻はよぎてとて―此事前になきをありし事として書きたるなるべし

されば、心ことなる用意どもにて、花のしたにさまよふ姿ども、いづれとなくをかしき中に、宰相中將を、大將殿のしひてすゝめさせ給へば、宰「わかく〳〵しきわざかな」とはすまへど、げに人よりは、をかしくなまめかしき樣かたちにて、數もこよなう多くあぐるを、大將殿なども興じ給ひて、狹「やゝもすれば、おりたちぬべき心地こそすれ。など今しばしは、若くてあらざりけむ」と宣へば、みすの內なる人々、「まめ人の大將はおはせずやは侍りける。さらばしも、花の散るも惜からじかし」など、口々いとたて奉らまほしげなるけはひどもなり。狹「そのいたう屈したる名ざしこそ、よそへつべかめれ。こよなく見くらべ給はむがねたければ」とて、うち笑み給へるあいぎやうは、花のにほひよりもこよなう勝りたまへり。花のいたう散りかゝるを見給ひて、狹「かうりたまかへりて、あとなるはふかし」と、忍びやかに口ずさび給ひて、勾欄におしかゝり給へるまみけしき、御聲などは、かの「櫻はよぎて」とて、花のしたにやすらひ給へりし御樣を、その折はをかしと見しかど、この御ありさま、類なげにぞ、何事の折にも見ゆ

隙を見て手折つて行かぬといふ答はない
ひとりしも—君一人そう言つてくれるは有難し
逢ふにしかへば—「命やは何ぞは露の仇物を逢ふにしかへば惜からなくに」
さきの聲—前駆の人拂の聲
大納言—一品宮の濡衣を言ひ出したる人、太政大臣の子
情おくれたる事—蹴鞠が

さまでは、なでふいさめ侍らむ」と聞ゆれば、うち笑ひ給ひて、狹「ひとりしも思しとがむるこそいとほしけれ、さらばいかゞすべき。かの東の對に、むかしもさる事ありけるは」と宣へば、少將「逢ふにしかへば、ましてかばかりの身は、何か惜しう侍らむ。この世の面目にこそは」など、わらゝかに戲れきこゆるを、若き人々は、あへなく汗あえてぞ聞きける。

さきの聲あまたきこゆれば、誰ならむとおぼすに、かの物言ひあしかりし大納言は、この院の別當ぞかし、そのおとゝの新中納言の中將といひしも、今は宰相中將とぞいふかし、それより下の若君達など、鞠もたせて參りたるなりけり。狹「花のために情おくれたる事なれど、何となくこゝろゆきて見所あることなり」など宣ひて、狹「いづら〳〵」と宣へば、色々の姿ども脫ぎこぼして、足許したゝめつゝ、あまたうち連れて步み出でたり。御簾の中よりわざとなく所々漏り出でたる袖口ども、例の事なれど、內裏わたりのこのもしく思したる御かた〴〵よりも、なほこよなう心にくゝ、ゆゑふかく見えわた

狹「はかなしや夢のわたりのうきはしをたのむ心の絶えもはてぬよ浮木にあはむことよりも、難き事どもかな」と、忍びて聞えたまへど、惱ましきさまにてもなさせ給ひて、寄り臥させ給ひぬれば、はしたなくて出で給へるに、東のすみの間に、花見るとて、人々あまた居たる所に寄り居給ひて、狹「君だちさへ、あまりに愼み給ひて、今は目も見入れ給はねば、いみじうつれ〴〵にこそなりにたれ」と宣へば新少將とておとなしき人、「ものにもがなやとこそ、皆思ひたるけしきどもに侍れば、まして何かは見入れまゐらする人も侍らむ」ときこゆれば、狹「心憂の事や。もの怖ろしからで過しゝ末の中頃、くやしうこそ思ひ出でらるれ」など、いづれとなく言ひたはぶれ給うて、

狹みかきもる野邊のかすみもひまなくて折らで過ぎ行くはな櫻かな

わざと無くいひすさび給へば、少將、

少將「花ざくら野邊の霞のひま〳〵に折らでは人の過ぐるものかは

はかなしや今も浮―君との深瀬を―にもと頼む心の絶えぬは我ならつまらぬ望なるよ浮木に―盲が浮木にあふよりはむつかしき望なる哉惱―しき―齋院が出で給へる―狹衣がはかなき今は目も見入れ！源氏宮が齋院になりて後は君宮に沈も我にかまはぬものにもがなや―「取」すものにも、なや世の中をありしながら、我身と思へば」まして―況や是は神前なればものの怖ろしからで―神に對する憚なくてみかきもる―神前の嚴重なる故に女に手も出せ花ざくら―餘り見過し給ふな

なべてならぬ樣に―秘藏にしたりしを
かひなき樣に―尼になりしをいふ
心は先だち―雖も出家の志はありながら、前世の宿縁もある事かと斯く決行はし兼ねるものなる
山がへるとかや―出家して山に入らんとしかけて又歸りたれば山がへるといふ仇名をつけられたりと也
如何なりし夢ぞと―どういふ事情で出家を思ひ立ちしぞと尋ねても下されぬはつらい御心ぞ
いさむる道―神の嫌ひ給ふ佛道のつとめ
御覽じける―神が
實に神の―賀茂の神が實に我を守り給ふならば御身と縁をつなぎて下されてこそ夢の瑞相が叶ふと言はめ

とりわきて、なべてならぬ樣にかしづき聞えさせ給へりしものを、それしも、この世をかひなき樣になり給へるこそあはれなれ。後の世はしも、すぐれ給ひぬべかゝめり。心は先だちながらも、先の世のつとめからにや すがやかに人の思ひたゝざゝなるすぢを、何ばかり深くしもおぼし取るらむ事ものし給はざりけむものを、限りなくおこなひつとめ給へるさまこそ、羨ましげに侍るめれ。山がへるとかや、いと聞きにくき名をさへとどめ侍りぬるよ。さても如何なりし夢ぞとだにこそ承らね。人こそものゝあはれ知る事はかたく侍りけれな。限なしとかや、いさむる道のつとめは、いかでかは、神のありがたく哀と御覽じ知らぬやうの侍らむ。つひにはおもふことなかるべき身ぞと、御覽じけるとかや。帝にや、院などこそ皆おぼし合せたゝめれ。おのづから見聞く人あらば、如何ばかりをこがましく、ためしにもならせ給はむとあはれにぞ。さても心の中は思ふ事なくしも侍らじものを、實に神の御心寄殊ならば、ことざまにてぞその御夢かなふには侍るべき」とて

様殊なる—又一段の美しさを増したりと

文字様など—女御の書の批評

入道宮の—之に比較して女二宮の勝れるを狹衣が思ひ出したる也

何ごとも—狹衣の心、劣れる此女御さへ此の如く重く取扱はるるに、勝れる女二宮を尼にして仕舞ひしは我罪なりと思ふに

ざりつるけにや、様殊なる御にほひにこそならせ給ひにけれと、頓に花もうちおかれず、つく〴〵とまもられて、涙のこぼれぬべきを、人々のあやしくや見むと思ふに、しひて侘しければ、ありつる女御殿の御かへりの、硯のうへにうち置れたるを、とりて見給へど、いとゞかくけぢかき程の心の中は、なほさらにまぎれがたし。文字様など、わざと上手めかしくはなけれど、すみつき筆のながれも、あやしくなべてならずなまめかしき氣色に、書きながし給へる。入道宮の、あくまで美しうらうたけなるものから、上手めき、文字様などは、すぐれ給へるものを、先ぞおもひ出でられ給ふ。何ごとも此の御有様は、こよなうおとり給へりしだに、かやうに斜ならぬさまに、もてなさせ給ひけるものを、とおぼすに、わがあやまちの心ぐるしさも、おろかならずおぼし知るべし。狹「齋宮の御手など、いづれかすぐれて侍らむ。えこそ見定め侍らね」と申し給へば、齋院「いづれもをかしげにこそ見ゆめれ」とぞ宣はするにも、あぢきなく、狹「あはれ」とひとりごたれて、狹「いづれもめやすかりける御有様にこそ。この御中にも、入道の宮は、院の

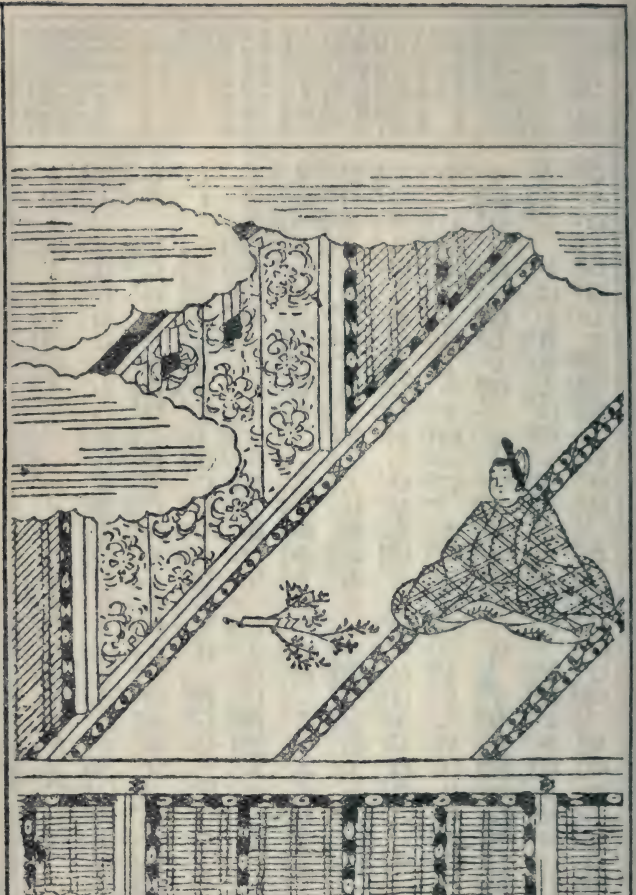
この御有様—齋院の身の上
此花—齋院の床しがる八重櫻を差上げられしか
かはらぬ色の—齋院の事のみ心にかゝりて
昔の御名殘—狹衣と女御とは從兄妹なれば昔より馴染ある也
㊆狹衣櫻を折りて齋院を訪ふ、躑躅著紋の備
女御殿の—院の女御へ齋院が此櫻を見たき由御申遣しありし故持參せり
見苦しかりける—齋院の心、あの手紙を見られたのかと
花を入れさせ—及びこしに扇にて花を受取るらんとする様也
久しく—狹衣の心

思さるゝまゝに、殿の宣ふ事どものみ、耳に留り給ひて、この御有様をうらやましくぞ思されける。狹「此花奉らせ給ひつらむや。いかやうにか」と、ゆかしげに聞えさせ給へど、かはらぬ色のあはれのみ心にかゝりて、女御「花の色はいかゞ聞えさせ侍らむ」と、しどけなげに言ひまぎらはし給へる御けはひのをかしさを、昔の御名殘かはらぬ御心にて、なまゆかしき方ざまに、うち交りたる御中にぞありける。

大將殿は、すぐれたる枝折らせて、齋院にもて參り給へり。御前には琴の御琴彈きすましておはします。御几帳より、琴のつまばかりさし出でて、櫻もえぎの三重の御衣どもに、くれなゐの擣ちたるかば、櫻のふたへおりものの小袿など、かさなりたる御袖ばかりぞ見ゆる。狹「女御殿の御前に、ゆかしげに聞えさせ給へりつれば」とて、まゐらせ給ふを、見苦しかりけることを見給ひけるにやと、中々知らぬ人よりも恥かしくおぼしめすに、御顏いとあかくなりて、御扇をさしやりて花を入れさせ給ふとて、すこし傾かせ給へるに、はら〳〵とこぼれかゝれる御額髮のかゝり、御つらつきなど、久しく見奉ら

命のかぎりは｜齋院は生涯此頃閑なしに氣樂に暮すべければ世に侍らず｜我が死後も
三十二相も｜齋院の容貌の缺點なきをいふ
ほとけの御用意も｜心迄も佛らしかるべく見ゆる
大將殿｜狹衣
式部卿宮の上｜中務宮の妹
なほすぐれて｜齋院の方が
何事も｜堀川さへ然見るに、況や何事につけても最上と惚れ込み居る狹衣の目には
まゐらせ給ひつ｜文をかへした[illegible]

とかく亂るゝ心地なくて、心のどかにてすぐし給ふべかゝめれば、世に侍らずなりなむ後も、あながちにうしろめたき事も侍らざりけり。たゞ佛の御かたざまを背き給へるのみぞ、後の世のため口惜しき事に侍り。それも女の御身は、齋宮齋院にさだまり給はずとも　三千大千世界を照す玉の行くへ知らずば、佛になり給はむことかたくこそ侍らめ。さるは三十二相も、いとよく具り給ひて、ほとけの御意も用くはへたまひつべき樣ぞ見え給へる」など宣ふほどに、大將殿參り給へれば、このふみ見せ奉り給ひて　堀川「ただいま、この御手ばかり書く人は誰かある。式部卿宮の上こそ名高くものせらるれど、文字やうのこまやかにをかしげなる樣などは、なほすぐれてこそ見ゆるは、思ひなしにや、いかゞ」とさゝめき給ふに、まいて、何ごともたぐひなき物に、思ひしめ聞え給へる御目には、珍しく樣ことにのみおぼえ給へば、うちも置かれずまもりたまへり。狹「今も昔も、かばかりなるは難くやさぶらふらむ」とばかり申させ給へど、わがものと見ずなりぬる口惜しさは先胸さわげば、まゐらせ給ひつ。女御は、わが御身の行末心ぼそく



おぼろげならむは―大抵の手では　御住居ども―女御も齋院も　あまたの中に―多くの櫻の中の中にて　我がことと―齋院が特に自分の物として世話したりしに　何ごとも―齋院の人々の勝れたるは、身にて過さしめんには餘り殘念なるなりしかば　思ひたつ事―后にもしたく思ひしに　しめの外に―別世界の人となりしも運命ならんと（齋院になりしをいふ）　たゞ一筋に―男の關係によりてのみ　我がこゝろと―誰も好みて身を苦しむる積では無けれど　はて〳〵は―終には泣きを見る事になるが常なるに

見給へるけしき、おぼろげならむは恥かしげなるを、めでたしとおぼしたる樣ぞ斜ならぬ。堀川「げに思ひかけざりし御住居どもなりかし。あまたの中に、高き八重のをば、をさなくより我がことと取りわかせ給ひて、しづ心なげにおぼし扱ふめりしを、いかにゆかしくおぼし出づらむ。何ごとも、世の中ばかり思はずなるものは侍らざりけり。まいてこれより年つもりぬる人、如何なることを見侍りぬらむ。何ごとも見る人なくて、過ぎ給ひなむは、かへりて口惜しき樣にものし給ひしかば、思ひたつ事侍りしかど、かく引きかへ、しめの外になり給ひにしも、これこそはあるべき事と思ひ給へながら、なほしばしは本意無き心地し侍りきかし。されど昨日今日思ひ給ふるには、いとめやすき御宿世とぞ思ひ給へる。女は高きもいやしきも、たゞ一筋によりてこそ、心よりほかに人にもどかれ言はれ、さるまじき心の程をも、見え知られ侍るかし。我がこゝろと、あはあはしく身をほだす心なけれど、おのづからそれに隨ひて、あらず侍る人なくなりぬれば、身を心にまかせぬやうにて、はて〳〵は思ひ歎きあつかふめるに、命のかぎりは、

時知らぬ―今はいつも同じ常磐木なる榊をのみ眺めて故郷の花を餘所に思ひ遣る身となれり
かはらぬ色―「時知らぬ」の歌をいふ
過ぎにし方―自分が齋院でありし當時
なべてならぬ枝―一きは美しき櫻の枝
此方に―院の女御の方に
上―帝
そのかみの―齋院たりし當時を思ひ出さしむる此榊に對しては

齋院 時知らぬさか木のえだにをりかへてよそにも花を思ひやるかな

榊の枝につけさせ給へり。おぼしやるも著く、殿の櫻は、峯つゞきもかうやと見えて、散るもさかりなるも樣々めでたきを、女御は惱ましき御心地のまぎらはしにも、ながめいださせ給ひける程に、このかはらぬ色めづらしう思されて、過ぎにし方いとゞ戀しく思し出でさせ給ひけり。

女御 さか木葉になほをりかへよさくら花又そのかみの我身と思はむ

なべてならぬ枝に、さしかへてぞ奉らせ給ひける。大殿、内裏より出で給ふまゝに、まづ此方に參り給ひて、ちかき御几帳のもとにて、上の御せうそこなど聞えさせ給ふに、ありつるさか木の御前なるを見給ひて、堀川「そのかみの心地し侍る枝ざしは、思しめし出づる事も侍りけるにや」と、きこえさせ給へば、女御「齋院より賜はせたりつる」と宣へば、堀川「さて如何樣にか」と、ゆかしがり聞え給へば、ありつる文をさし出させ給へるを、とりて見給ふまゝに、堀川「あなをかしげの御手や」とうち笑みつゝ、うち返し〱

齋院院の女御と歌の贈答

もてはやしたる―櫻の美しさを引立たせたる

故郷―堀川大臣邸

一重をだに―八重の中の一重だけでも

かく疎々しからぬ御中らひに成り增り給ふを、うれしとおほして、文などと、[illegible]々はかよはせ給ひけり。御手などのなべてならぬにつけても、いかならむ世に隔なく見奉らむと昔の友には、餘所ながらも思ひきこえかはさせ給へり

彌生の朔日頃、齋院の御前の櫻いみじきさかりなるを、つれ／＼なる晝つ方、御髪あげの間にゐざり出でさせ給ひて、見いださせ給へるに、空の色あさみどりにて、うら／＼のどかなる野邊の霞は、御垣のうちまでつゞくめれど、なほこぼれたるにほひ所せげなるに この對の御まへなる櫻のにほひえならぬかたはらに、榊の青やかにもてはやしたるなど、外の木だちには似ず樣かはりて、をかしく御覽ぜらるゝにつけても、明暮御覽じなれし故郷の八重櫻いかならむと思召しやりて、一重をだに今は見るまじきぞかしと、花の上にはなほ口惜しき御心の中なり。

齋院　ひとへづつにはひおこせよ八重櫻こち吹く風のたより過ぐさず

など、思召すも待遠なれば、女御殿に聞えさせ給ふ

㊄院の女御もとの源氏宮の邸に棲む
院の女御—前齋院，女一宮
堀川の院—堀川大臣の邸
大殿—堀川大臣
思ふ樣—皇子を御懐胎あらば
取りはじめさせ—運の開けたる
斯くしなし—悲慘な運命に陥れし事
宇治の川長—「さし歸る宇治の川長朝夕の雫や袖をくたし果つらん」
取分けまつはし—若宮が特別に齋院になつき居れども
今は御あたり—齋院になりてからは身分がら故若宮の傍にも滅多に寄られぬを

狹　手になれし扇はそれと見えながら涙にくもる色ぞことなる

と片假名に書きつけて、もとの樣におき給ひつ。

まこと院の女御は、五節のほどに、堀川の院に出で給ひにきかし。齋院のおはしまし方にぞおはしける。大殿のもてなしかしづき聞え給ふさまを、嵯峨の院にも、いかでかおろかには思ひ聞えさせ給はむ。まいて思ふさまにだにしいで給へらばと、何處にも何處にも、御祈どもとり〴〵に、御心をつくさせ給へるさまなど、行末は知らず、たゞ今はめやすく、取りはじめさせ給へる御宿世と見奉るにつけても、入道の宮を斯くしなし奉りけむ事と、大將殿はなほ心苦しうも、つらき方にも、こゝろにはなれず思ひ聞え給ふまゝに、宇治の川長にさへぞなし奉り給へる。齋院は、女御の御母宮の、今はのきはまで、あはれなりし御消息なども、忘れがたう思ひ聞えさせ給へば、若宮をかぎりなく思ひきこえさせ給へるを、をさなき御心にも、取分けまつはしまゐらせ給へれど、限あれば、今は御あたり近くもえまゐりより給はぬ、口惜しうおぼしたり。この女御も、

すゝむる心地―出家を促さるゝ心地
同じ樣にて―出家もせずして
然までの事―出家までする事は
かゝる方樣につけても―若宮の事につけても是非御世話を頼まねばならぬ譯なるに
人知れぬ御心―女二宮の心
かひなき方樣―女二に對する叶はぬ戀
さばかりだに―せめて女二が其位にでも思つてくれると思へば出家も思ひ立ちもすまじ
聞きにくゝ―一品宮と婚したる事
薄香―丁子色の薄き色

どすゝむる心地して、ひとへに思ひなりにしかど、憂きはかぎりも誠にあるまじきにや、今日までも同じ樣にて、聞かれ奉るこそ恥かしけれ」とて、泣き給へば、「いでや、いと心憂き御心にこそ侍りけれ。若宮を思ひ聞えさせたまはば、さりとも、いと然までの事は、えおぼし寄らじとこそおもひ給へしか。行末はおのづから、かゝる方樣につけてもえさりがたくのみ聞えさせ給へるさまにも、侍りぬべかゝめるものを、いとゞ思はずに心憂しとこそは、人知れぬ御心にも思ひ聞えさせ給はめ」と、きこゆれば、狹「いでや、かひなき方樣をばさるものにて、たゞさばかりだに思したると思はましかば、などてかは、忽にかうまでも思ひよらまし。いと聞きにくゝいひ定めらるゝも、いかに本意なく聞かせ給はむと思ふのみこそ、よろづにすぐれて口惜しく侍るべけれ。かゝる方樣にさへ、御心にたがふ宿世よ」など盡きせぬ御涙なり。薄香なる御あふぎのあるを、切におよびてとりよせ給へれば、なつかしき移香ばかりは昔にもかはらぬ心地するに、華やかならぬ下繪などの樣變りたるは、なほいと哀に飽かず悲しく思されけり。

限の道—死の道
御ありきも—比頃に御出歩きを禁ぜられて居る様に承り居る故
板田の橋—「小墾田の板田の橋のこぼれなば桁より行かむな戀ひそわぎもに
ひきかづき—簾内に半身を入れたる也
押しやりて—狹衣が
ありし夜—狹衣がはじめて女二宮に忍び入りし夜
思ひたちながら—出家の事を
ありし夜—女二宮に此儘にては再び見えじといひし時の事なるべし

宮の御ありさまを見奉り捨てて、限の道にもいかでか」など申し給ふ。おほやけ私の御物語、例のこまやかにて、日も暮れぬれば、出で給ふさまに、入道の宮の御方にまゐりたまへり。宮は御念誦堂におはしましければ、やがてそなたの御簾のまへに、近くさぶらひ給ふに、中納言のすけもさぶらふ程にてすけ「御ありきもいとゞありがたげに、承るを、思ひかけぬ程には、いかでか」と聞ゆれば、狹「などてか常よりもかたく侍らむ。板田の橋よ、いかにとかや」とて、御簾をひきかづき給へば、人々も皆すべり入りぬるに、御几帳も押しやりて見給へば、御經筥も開きたり、法華經なるべし、巻々あまた軸のもとまで巻きよせられて、御數珠は脇息にうち懸けられて、しきみの香はなやかなるに、さま〳〵のうつり香どもにはやされて、哀になつかしきにも、ありし夜の手さぐりまづ思ひ出でられて、たゞ今さしむかひ奉らまほしきに、例の涙こぼれぬべき氣色にて、つく〳〵と見わたし給へるまみなど、盡きせずものあはれと思したり。狹「年頃は萬に思ひたちながら、思ふこと一つにせかれつゝ過しゝを、ありし夜ののちは、いと

斯迄に思つて居れど親ではきゝめの無いものと見える
四狹衣若宮を伴ひて嵯峨院に參る、女二宮方にて扇に歌を書く
されば よ—狹衣の心
出で來ぬる事—「事」の下に「と」あるべし
參り給へり—狹衣が嵯峨院へ
珍しき—狹衣の容姿
まもらせ—嵯峨院が狹衣を見つめ
ほだし—若宮など
山がへる—出家しそこねたる人を嘲る此頃の諺なるべし

ふ樣ども、いとあはれに苦しげなり。

かゝる事を、嵯峨の院にも聞かせ給ひて、いみじく恨みなげかせ給ふよし聞きたまひて、されば よ、いと聞きにくき事さへ出で來ぬる事、むづかしく思さるゝものから、なげかせ給ふなる樣も辱くあはれなれば、殿に御いとま聞え給ひて、若宮具し奉り給ひて參り給へり。御覽ずるたびに、珍しき樣にのみねびまさりたまふを、かゝればいとあやふきぞかしとまもらせ給ふに、先御涙こぼれさせ給ひぬ。嵯峨「いはけなくものせられしより、大臣にも劣らず思ひそめてしを、今となりては、いと樣々のほだしをさへ讓りてしかば、所せき齡の程をも、いかにして、やがてとこそ思ふを、いと本意無く、いとひ捨てらるゝ樣に聞くも、いとたふとき事にはあれど、恨めしき方に」など宣はするも、げにいと辱ければ、狹「如何なりけるひがごとどもを、聞かせ給ひけるにか さらに思う給へかけさぶらはぬ事を、かく持騷がれて、山がへるなどいふ名もとまりさぶらはばはしたなき樣にや思ひなり侍らむ」とすこしうち笑ひ給へる、愛敬はこぼれ給へり。狹「若

神もいとゞ―神官の祝詞の趣意
行方―「行末」の誤なるべし
思しおきつるに―堀川の希望通りになるべし
聲引き―祝詞を讀むに聲の尻を引くことなるべし
神もなほ―神も此世の榮華をのみ守らず未來をも助かる樣に力を添へ給へ
宮に參りそめ―狹衣が一品宮と結婚後は
このおはし所―狹衣の他の通ひ所は一切なき樣に仕向けて
如何なるわざをして―どうしたらば狹衣の出家の望を躊へさせる事が出來ようか、以下堀川夫婦の相談の辭
男はさてこそ―男といふ者は思ふ女が出來れば其で出家の心は無くなるものぢや
いとかばかり―

み給ひける。まゐらせ給ふ日の事どもなど、推しはかるべし。いつ如何なりし御願ども果させ給ふにかと、御社の神人どもおどろくに、神もいとゞ御心ことにまもりはぐくませ給ひて、夢の中に告げ知らせ給ひけむ。行方の御ありさまも、思しおきつるに違はず、と返す〴〵申しあぐる聲引きの、いと頼もしげなれど、自らの御心の中には、

かみもなほもとの心をかへりみよこの世とのみは思はざらなむ

日ぐらし面白うめでたき事どもは、まねびつくすべうもあらず。かやうにいのり聞え給ふさま、過ぎぬる方よりもこちたし。宮に參りそめ給ひては、このおはし所も、わざとも無き樣にもてなし聞え給ひて、稀々たちとまり給ふ夜な〳〵をも、いさめ聞えさせたまへれど、今はいにしへの樣にみがきたてて、明暮たゞ女の御身をおぼしかしづかむやうにて、父母「如何なるわざをして、この御心をおぼし直させむ。少しも心留め給へらむ人もがな、限あれば、男はさてこそあくがるゝ心もとまるらめ。いとかばかり思ひまどへど、親をばほだしとも思はざりけり」と、いひ合せ給ひて、二所してたづね歎かせ給

ままでも—出家せんと泣み、ひ詰めしならんと
わたらせ給ふ—一品宮が狹衣の方へ
過し給ふ—狹衣が
阿私仙—故飛鳥井姫君の兄の僧、彼に出家を約束したれば也
つれなしづくり—平氣を裝ひ
㊂堀川大臣賀茂
げにさしも—狹衣の心
かた〳〵につら—色々の點につけてつらしと感ずる情のみ勝ちたり

までも思ひなるにこそはあらめと、いとゞ恥かしく見えにくゝおぼさるれば、わたらせ給ふこともいと稀なるを、とやかくやと、なつかしく聞えあきらむべき方もなければ、たゞ心得ず見知らぬやうにて過し給ふに、あまりうちしきる獨寢は、いとゞ目もあはず思ひつゞけられ給ふことおほかる中にも、阿私仙の待遠に思ひおこすらむぞ、なほいと本意なき心地し給ひて、枕も浮きぬべき。

狹　このごろは苔のさむしろ片敷きて岩ねのまくら臥しよからまし

など、やすげなく思しやられける。晝はつれなしづくり給ふにこよなく紛るゝを、夜々ぞ、かくてのみは、ながらへむ事ありがたく思されける。

殿の御賀茂詣ちかくなりぬれば、舞人にさゝれたる殿上のわか君達など、心ことに思ひいそぎたり。大將殿には、ありし御夢の事など、上ぞ委しくかたり聞え給ひける。げにさしも確に御覽じけむよ。しづめがたき心の中をおぼし咎めず、しひてうき世に在らせまほしくおぼすらむ神も、御心のありがたきものから、かた〴〵につらきかたにぞすゝ

いかばかり—我如く一方ならぬ苦勞をした者でなければ此世を出離する事は出來ぬ

見しやうに—狹衣が見た樣に言ひやりし後は

この後は—此一件ありし以後は狹衣の出家を思ひ立ちたるも畢竟一品宮との關係を面倒に思ひての事かと父母などが考へて少しも言ひ出さず

宮も—一品宮も

思ふ筋—我より外の女を思ひ込み居る狹衣を

いひしにかはる心の程を、いとゞいかにと恥かしきまで。

など書きつくし給へるを、例のほのうち見給うて、

女二　いかばかり思ひこがれしあまならでこのうき島を誰かはなれむ

など思しつゞけらるれど、はかなかりし筆のすさびも、見しやうに聞え給ひしのちは、うしろめたうて、御心のうちよりも漏し給はざりけり。一品宮に參り給はぬことをば、誰もいみじく聞え給ひしかど、この後は、さやうの事を、くるしく思しけるにやと、かけてもえきこえ出で給はず。晝のほどをだに、出で給ふをばいとうしろめたげに思ひきこえさせ給へれど、さのみ籠りゐ給ひたらむも、音聞き見ぐるしかるべければ、一品宮ばかりには參り給ひて、まぎらはしきありきもし給はざりけり。されど世の中かくれなくて、おのづから聞く人々もありて、まことしく剃りやつし給へらむやうに、惜みかなしがり聞ゆれば、宮も聞かせ給ひて、いとゞ心憂く思召すことかぎりなし。思ふ筋ことなりける人を、おとゞなどの强ちに言ひつゝ、斯ばかりもあらすれば、思ひわびて、さ

かつは―祈禱僧どもの心

いとさしも―其迄熱心に出家を思ひ立たれしならん

おくらかし給ふな―我をおいて行くな

思ひかけざりし―出家などは思も寄らぬといふ風にのみ

後の世にさへ―死後迄も君に棄てらるべき運命にや

いそげども―我はもがきても中々此世が離れられぬに、君は如何にして容易く遁れしならん

みな驚きつゝ、心をいたし祈り給ひながらも、又、かつはさるべきにてこそはかばかりめでたき御身ながら、いとさしも思さるらめ、佛はいかゞ御覽ずらむ、と哀にぞ思しける。その後は、いとゞ片時のほども、うしろめたく危きものに思ひ聞え給ひて、ありきなどもせさせ奉り給はず、たゞ、堀川「今しばし待ち給へ。あなかしこ。おくらかし給ふな」と宣ふまゝに、涙をながし給へば、いと心苦しく、又世の人の聞きつたふらむ事の、かへりては心あさう、物狂ほしかりぬべければ、思ひかけざりし樣をのみ、かへすがへす上にも聞え給ひて、いかでか物思のさまを見え奉らじと、萬にもてなし給へば、げに中々、過ぎにし方よりも、上べばかりははれ〴〵しくなり給へれど、心のうちの口惜しさは、なほ得思しなほされず、いみじく思しなげかるゝ慰には、入道の宮にぞ、狭「後の世にさへ棄てられ奉るべき宿世にや。あさましう本意無きこゝろの中」など、すこし漏し給うて、

狭 いそげども行きもやられぬうき島をいかでかあまのこぎ離れけむ

の餘りに悪しき時には佛が方便を以て其相應の法を説く事　誠におぼえ—狹衣が思ひかけぬ—出家を思立ちたる事はなき旨を　出で立ち給ひにける—狹衣出での用意せる樣子など　院の御前—齋院　さらば—齋院の心　㊁狹衣齋固の殿しきに苦む、女二宮と歌の贈答、從一品宮に疎し　御夜中ありき—　堀川の參らせ給ふべき—狹衣の賀茂に參詣すべき日　この御料と—狹衣の爲と

のうちはいとゞ亂れまさりて、胸もつとふたがり給へり。あかうなりぬれば、殿は、上の御もとに、出で立ち給ひにける樣など、こまかに書きて奉り給ひけるを御覽ずるには、いかでかは神の御心おろかには思ひ聞えさせ給はむ。院の御前ばかりには、此御夢をかたり申させ給ひけり。堀川「神殿に入らせ給ひて、いよ〳〵かゝる心思ひなほるべきさまに申させたまへ」など聞えさせ給ふ。さらば、かく思してや、琴の音も例ならず心とゞめ給ひけむ、さもなり給ひなましかば、如何にあさましからまし、と思召す。殿には、思ひかけざりつる御夜中おりきよりはじめ、例ならぬ御氣色などを、心得ず如何なるにかと人々は思ふに、上などもわたらせ給ひて、やがて其日より、賀茂の御社にてはじめさせ給ふ御祈ども、いとこちたし。まゐらせ給ふべき日など、定めさせ給ふさまなど、何事のいかなりけることぞと、世の人も聞き驚きけり。大方の御祈ども、いつとても、この御料とおぼしいたらぬ事なき中にも、取りわきおぼし頼ませ給へる御いのりの師どもに、くはしく宣はせつゝ、一心にいのり申すべきよし、泣く〳〵宣へば、

さまでは―其樣に法、出家などとまで
つれなう―空とぼけて
心憂くて―畑川が心憂く思ひて
且はいでや―以下川の心
つれなき心の―我心をつれなしと狭衣が思ふならん
淨藏―淨藏淨眼は兄弟にて共に恩王妙莊嚴王の子也、母と共に悟を開き父を開悟せしめん爲に神通を願はし往反遊行して見せければ父之に歸依して聖者となり化德菩薩となれりといふ
先なりなまし―先に出家すべきか
つひには―到底引留めおほする事は出來まじ
例ならぬ―以下狭衣の樣態
あらしにたぐへ―暴き風にあたらせ
刧濁亂時―人間

にさまでは思ひ給へならむ」と、つれなう聞え給ふも、いとつらく心憂くて、袖をえ引きはなち給はぬを、且は、いでや、むげに後の世もかへりみず、つれなき心のほどと見給ふらむかし。淨藏淨眼の徃反遊行し給ひけむを見給ひてよりこそ、妙莊嚴王も、心ぎよき三昧どもをつとめ給ひて、花德菩薩ともなり給ひけれ、まことに、かゝる序に我や先なりなまし、かばかりに思立ち給ひにければ、つひにはえ妨げ聞えじ、などは思しなりぬれど、例ならぬ狩裝束にやつれ給ひて、いかにぞや思ひみだれ給へる御樣の、ほのかなる空の光にゆゝしく見え給ふを、あさましき四方のあらしにたぐへ、こけの衣にやつし聞えてば、更に皆成佛道にも心ぎよからずやと、うちまもり給ふも、なほけに刧濁亂時諸佛方便もかひなくありけるかなと、返す〴〵も、悲しくもはづかしくもおぼし知られけれ。夜も明けぬるまで、うちもやすみ給はず、なほ思しむせびたる御氣色の、いと心苦しく、罪うらむかしと誠におぼえ給へば、思ひかけぬ樣をのみ、かへす〴〵聞え給ひ慰め給うて、れいの御方にわたし聞えなど、さりげなくもてなしたまへど、御心

御心の亂ながらは—今の樣に子故に煩惱を懷き居ては、同じ極樂淨土へ生るゝ事はむつかしかるべし

かばかりまで—是程に自分が出家を思ひ立つたるが自分でつらく

今しばしは—此分では今暫くは出家は出來ぬらしいと

心得ぬさまに—合點のゆかぬ振をして

ことにもおはしまさず—格別の御容態でもない樣に

いとかゝる御心の亂ながらは、おなじところに逢ひ見奉らむ事、かたかるべかゝめり」と、いみじき事どもを、泣く〳〵言ひつゞけ給ふを、つく〴〵と聞きたまふに、人知れぬ心の中を、如何にして見あらはし給ひけるぞ、と思すにも、げにこゝらの年頃、この世もかの世も、露ばかりおもひ殘すことなく思し棄てつれど、たゞ今いとかゝる御心惑を見奉り給ふには、いとかばかりまで思ひあくがれにけむ心のほどぞ、我ながらつらくいふかひなく、思し知られける。げにまいて上の御こゝろの中思しやるは、今すこし心ぐるしくて、人やりならず袖もぬらし給ふものから、かくまで聞き給うてければ、まづ今しばしは不用なゝめりと思ひ給ふに、なほ思ふ事かなふまじき身にやと、中々、忽に思し立たざりつる過ぎぬるかたよりも、いみじく口惜しともかなしとも世のつねならねど、たゞ心得ぬさまにもてなし給ひて、狹「女院の御心地、ことにもおはしまさず承りしかば、常磐と申す所に、懇にかたらひ侍るべき尼の、煩ふよし承りし、とぶらひ侍らむとて、今朝まかり出づるを、若いかなる方ざまに聞召したるにか。何事によりてか、忽

類だになく―外に子供といふもの無く

妻にて―北方をいふ

限あらむ―定業の命でさへ母ある間はどうかして取留め置きて母に歎をかけじと思ふべき筈

かくなむ思ふと―出家したしとうつくしく相談し給はゞ無理にとめはせぬ

諸共に―どうするにしても我と一致の行動を取りてくれ

自らはおくれ―自分は汝に付いて行くべければ心配はなし

今一所―母宮

はつかはじを、まいていかばかり、思ひ紛らはすべき類だになく、一日かた時も、聞えぬ程は戀しくかなしきものに思ひ聞えたるを見つゝ、いかなる方に思し立ちて、世をそむき棄てむとはいで立ち給ひけるぞ。いとよし、己をこそ思し棄てめ、妻にて、又なくおぼしまぎるゝ方なくならひ給へる御心に、見給はずなり給ひなば、片時ながらへ給ふべしとや見給ふ。限あらむ命のほどをだに、かの見給はむ程は、かけとゞめむとは思すまじうやはあるべき。佛も孝養をこそ重き事には宣ふめれ。かく不孝の御心にては、おぼし棄てつらむ道の妨にもこそなり給へ。なにごとも、皆さるべき昔の契にこそあらめ。かくなむ思ふと心うつくしう宣はば、あながちに制し聞ゆべきにもあらず。たゞ我が身は、殘なき齢になりたるに、ふり捨てられ聞えたらむも、心ひとつの悲さはさるものにて、人の見聞かむ事も恥かしく、佛のおぼさむ事も、罪さりどころ無く、かなしかるべきを、たゞ諸共にいかにもし給へ。佛のすゝめ給へるにもあらむ、如何なる方樣にも、自らはおくれ聞ゆまじければ、いとよし。今一所の御ありさまこそ、後の世にも、

堀川の院—狹衣の居所

さし出で給へる—狹衣が

如何なること—狹衣の心

數多あらむ—多くある子供の中にても、殊に父母の寵愛を受くる子は其樣な不心得はせぬ筈なるに

させ給ふことどもの料とて、法服あまたまうけさせ給ふと、此日ごろ聞きつるも、さらばいかに思ひおきつることのありけるぞ」と、兩所しておぼし惑ふさま、片時だにいみじげなる。殿は切に思ひつよりたまひて、おき出で給へれど、さらばいかなる野山にか行きまじり給ひぬらむ、とおぼしやるに、立ち動くべき心地もしたまはねど、疾くたづねよと、賀茂の明神の敎へ給ひつるを慰にて、裝束などしたまひて、まづ堀川の院へぞおはしける。かの御かたの御門より入りたまふに、馬どもに鞍おきて、たゞいま人の出づべきにやと見えたり。大將殿もいと夜ぶかくといそぎ給ひて、出で給ふほどなりけり。殿の御車を俄に引き入れたるにおどろき給ひて、さし出で給へるを、うち見つけ給へるに、なか〱今ぞ淚もとりあへずこぼれ給ひて　賀茂御社の御かたをふし拜みたまひて、直衣の袖をおしあて給へる御氣色など、あやしきを、如何なること聞き給ひて、かく夜中にまどひわたりたまへらむ、と思すに、堀川「いでや、いと心憂かりける御心かな。數多あらむにてだに、すこしも取分けたらむ　志　のほどを見むには、いとかゝる心のほど

●賀茂の御託に驚きて堀川大臣狹衣を消留む
ひかり亡する—賀茂明神の夢想の歌
珍しき宿世—帝位に上るべき運命
疾くこそ—早く狹衣の行方を尋ねよ
見給ひて—夢に見て
殿—堀川
上—堀川の北方
とみに—直には話しも出來ず
つねの事と—狹衣が心細げに思ひ入りたるはいつもの事とは言ひながら

狹衣物語　卷第四之上

「ひかり亡する心地こそせめ照る月の雲がくれゆくほどを知らずば

さるは珍しき宿世もありて、思ふことなくもありなむものを、疾くこそたづねめ。昨日の琴の音のあはれなりしかば、かくも告げ知らするなり」と、日の裝束うるはしくしていとやむごとなき氣色したる人の言ふと見給ひて、うちおどろき給へる殿の御心地、夢うつゝともおぼし分かれず。如何なるさまの事ぞと思ひつゞけたまふに、昨日の琴の音とあるは、たゞ大將の御事ぞと心得給ふまゝに、ものもおぼえずおそはれ給へる御けしきのいみじきを、上もいかなる御事ぞと思し騷ぐに、とみにえぞ聞え給はぬ。とばかりありて、辛うじて、堀川「しか〴〵夢ともなく見えつる。いかなる事ぞ」とかたり聞え給ふ。上の御心地、まいて世の常ならむやは。母宮「つねの事と言ひながら、昨日の氣色など猶あやしく目とまりしを、などてよべもとゞめ聞えずなりにけむ。常磐にて、例もせ

大白牛車―佛教にて一乘教の成佛の最極徑たることを大白牛に牽かする車の速力の早きにたとへていふ、之に對して聲聞乘緣覺乘等を羊車鹿車などに喩へたり

おぼろげならず―大分よく世間を思ひ切りたる我心かなと

何心なう恨み給へる面影―若宮の

大白牛車をおぼし返すまじう思ひとり給ひてしかば、よろづに慰めおき給ひて、立ち出で給ふこゝち、おぼろげならず背き果てにける心の程かなと、われながら有難う思し知らるゝに、涙のみぞなほ心弱うこぼれける。

歌　なみだのみ淀まぬ川とながれつゝわかるゝ道ぞ行きもやられぬ

何心なう恨み給へる面影は、この世のほかになるとも、身を離るゝ折あるまじう、引き返さるゝ心地し給ひけりとぞ。

わざとの—格別の
急ぎ出で—若宮が
姫君をのみ思ひて—狹衣が飛鳥井腹の姫君をのみ可愛がりて
宮をこそ—若宮をこそ姫君にも勝りて
斯くなども—出家の志を言ひ聞かす譯にもゆかねば
今少し—狹衣の心
泣き給へば—狹衣が
あやしと思して—若宮が
まめだちて—眞面目になりて

で、今日も參らざりけるよし、かつ〴〵啓し給へ」と宣へば、狹「わざとの心地には侍らぬなゝめり。何か、内裏にも奏するな、とこそ候ふなりつれ」とて、いで給へば、堀「御前は誰々かさぶらふ。それかれも參れ」など、いとうしろめたう思召したるを見給ふにも、いかでかは悲しからざらむ、涙のみ先立ち給へど、立歸り給ひて、狹「若宮は御殿ごもりぬるか」と聞え給へば、ねぶたげなる御氣色ながら、急ぎ出で給ひて、若宮「宮の姫君をのみ思ひて、常にまろをば抱かぬなゝめり」と恨み給へる御顏の美しさなども限なし。狹「あなゆゝしや。宮をこそまさりては思ひ聞ゆれ」とて抱き給へるにも、斯くなども言ひ知らせ奉るべきやうもなければ、いとかひなし。今少し物の心知りたまふまで、え見ずなりぬるよ、斯くとも誰かはいひ聞かせ奉らむとする、顏などもはか〴〵しうえ覺え給はじかし、夢ばかりもおぼし出づとも、世の常のあはればかりをこそはかけ給はめ、と思ふに、いみじう悲しうて、袖も引き放たず泣き給へば、あやしと思して、例のやうにも戲れ給はず、まめだちていたう靜り給へるを、見すてて得出で給ふまじけれど、

法樂莊嚴―佛法の妙味を以て神佛を慰め奉る事

思ひ立ち給ふ―出家を思ひ立てる狹衣の心の中を父母が知りたらば如何に悲むならんと

御いらへも聞え給はず―堀川が

え承らで―御病氣を知らずして

とゞめ給へ。かくのみ心を惑はし給ふは、かへりて不孝の中になり給ふらむ。いといまいましう恐ろし」とて、ゆゝしういみじと思したる御氣色ども、げにいと理なり。堀川「あやしうこの頃夢のさわがしうも靜かならざりつるは、かゝる事のあるべかりければなり、法樂莊嚴のためとさへなり給へるも、いと餘にもあるかな」とて、空を仰ぎ給へる御氣色などを見給ふにも、思ひ立ち給ふ心の中を見給はばいかに、と思すに、涙の落ちぬべければ、かしこまり給ふさまにてさぶらひ給ふ。山へ登り給はむ御供の人々の事など定め聞え給ふにも、はかぐしう御いらへも聞え給はず、心騷のみせられ給ふべし。曉に出立ち給ふべければ、狹「夜更けぬさきにまかり出でて、つとめて參らむ。今朝女院の、風起らせ給ひて例ならずおはしますとさぶらひつるも、訪らひ申さむ」とて立ち給へば、堀川「道の程も遠きに、今宵は何かは參り給ふと思ひつれど、院の然ものし給ふなれば、げに參り給はざらむも便なかりなむ」と、まれぐ急ぎ給へるをめやすく思されて、えとゞめ聞え給はず。堀川「こゝにも、さらばつとめていと疾く參らむ。え承ら

殿上にも―禁中に聞えたるなるべし

御前にはた―齋院は

上―狹衣宮の母宮

對へ―齋院方へ

ろしき事限なし。面白うめでたかりつる物の音皆さめて、聞く限の人々目を見かはして物も言はれずあきれたり。若き女房などは動きだにえせず、死入りたるやうにて、皆うつぶし臥したり。殿上にも、さるべき上達部などあまた侍ひ給ひければ、かゝる物の音に聞きあざみ騷がぬ人なし。「さらば誠に天てる神も世におはするわざにこそありけれ。なべてならず有難き人の御ゆかりには、さまぐ\珍らかなる事を、見る人も多くこそありけれ」と聞きあざむに、御前にはた、然らぬだにわりなき御物怖に、いとゞ御心地もたがふまで思しめしたれば、上も渡らせ給ひて、さまぐ\思しあわてたり。斯くのみはかなき事につけても、際殊におどろぐ\しう、神佛も驚かせ給ふ氣色しるき御有様を、たび每に、殿、上は御心を動し給ふ樣、斜ならずいとはしげなり。わが御心地にも、かゝるまゝに、この世はかりそめに物心細うのみ、思し離るゝなめりかし。大殿も神殿に參り給ひて、度々ふし拜みて、宮司めして、御はらへなどせさせ給うてぞ、對へ渡らせたまひぬる。堀川「すべてぐ\、今よりはこの御手ずさび、あが君ぐ\

御前なる—齋院の御前の琴を狭衣が引きよせて

院何よりも—琴は齋院が何より執心にて常に狭衣に彈奏を迫れども

自らの—狭衣も再び齋院の前にて彈く事もあらじと思へば

ありし文の折—狭衣が禁中にて琴ひきし折の事

流石に—この下脫文あるべし

せまほしき御前の庭の氣色を、いとゞなべてならずながめ入り給へる氣色、いひ知らずあはれげなり。御前なる琴を引きよせ給ひて、黄鐘調に調べて、「仙遊霞」を彈き給へる、空に澄み昇りて、世に知らずあはれにおもしろし。院何よりも御心とゞめさせ給へる事にて、常に聞えさせ給へど、あやにくに御耳ならさせ給はぬを、かく例ならず御心とゞめ給へるさまなるも、嬉しくめでたしとおぼしめす事限なし。自らの御心にも、又しもやはと思せば、二返ばかり彈き給へるは、誠に昔ありけむやうに、現れ出づるものあらむと、聞く限の人々は涙もとゞまらず。母上聞き給ふに、ありし文の折をおぼし出づるに、いとゞゆゝしければ、惑ひ渡らせ給へり。流石になどもえ聞えさせ給はず、いとゆゝしう恐ろしうおぼされて、涙を流しつゝ近う居よらせ給ふ氣色いみじげなるに、げに風俄に荒々しう吹きて、村雨おどろ〳〵しう降りたる空の氣色、いかなるぞとものむづかしきに、神殿の内三度ばかりいと高うなりて、いひしらず芳しき匂、世の常の限にはあらず、さとくゆり出でたるに、誠にかしらの髪逆さまになる心地して、もの恐

言はずとも―はだしとする程に我を思ふ位ならば、假令口には言はずとも我も氣を揉まずには居られぬ譯ならずや
藥師の法―藥師如來を祭り、其眞言を受持して消災除難を祈る法
かゝる心―出家の志
忍ぶもぢ摺―君故にわが思ひ亂れたるが出家の原因となれる事は
御送―齋宮のなげき―歎きに木をかけたり

のおぼし惑はむ有樣、限あらむ御命どももいかゞと、あらましごとにだに、いといみじうゆゝしかるべきに、我も御涙落ちぬべけれど、いかにもいらへ聞えさせ給ふべき樣もなければ、

齋「言はずともわが心にもかゝらずやほだしばかりに思はましかば

わざとなう言ひ消たせ給へる、げに藥師の法行はずとも、四十九日おりても生き返りぬべくぞ思さるゝ。狹「誰によりてかは、かゝる心もつきそめ侍りし。

行きかへりたどひた道にまどひつゝ身は中空になりねとやさば

忍ぶもぢ摺は猶かこち參らすべうこそ」とて、ほろ〳〵とこぼしそめたまへる御涙は、かごとがましういみじきに、御送に參りつる人々歸り參りぬれば、さりげなくもて隱して、ながめいだし給へり。月出でにけれど、なげきの蔭も、外よりはこよなく枝ざし繁ければ、心もとなげに、所々よりもりたる影、心苦しげなるに、はら〳〵と吹き拂ふ木の下風のおとなひなども、例の所には似ず、神さび物心細げにて、心あらむ人々に、見

心よりほかに―けしからずと思召すか
今は限の―彌出家といふ際になりても御心は動くまじ
言の葉に―人の情ある詞一つで助かる命もありといふ事
つらきは―つらく當らるゝは却て佛道に入る手引となりて
事なしびに―何げなげに
あさましき御心ばへ―狹衣の戀情
斯くならせ―齋院になりて後は
もらし出で―狹衣が
さやうにも―出家せば

瀧は、漏り出でそめなば、せきとめむ方あるまじけれど、なほいと胸痛き心地すれば、狹「世を厭ふ心は程經侍りぬれど、誰もかうのみ、戯言をさへ忌々しきものにおぼし宣はすれば、心より外ならむ命だに、かけとゞめまほしく思ひつゝ、憂きを知らぬ樣にてとのみ思ひ過し侍るを、げにこそあまた年も積り侍りぬれ。昨日今日となりてこそ、遂にいかにと心細う思ひ給へらるゝを、心よりほかに思しめされむとすらむ。御前にこそ、今は限の川瀨も尋ねさせ給ふまじう侍れな。言の葉にとまる命も侍るとかや。つらきは道のしるべにて、終の世の爲には惡しうも侍らざりけり」など、事なしびには言ひなし給へど、常よりも如何に、げに思しなりたるぞと見ゆる御氣色を、院も思はずにあさましき御心ばへ御覽ぜし折こそ、いかで見え聞えじと、疎ましうゆゝしうおぼしめされしか、斯くならせ給ひて後は、思ふまゝの心の中をだに、もらし出で給ふ事はあり難うならせ給へれば、昔隔てなう思ひ聞えさせ給ひし名殘も變るべきならねば、大方につけては、おろかにも思ひ聞えさせ給はぬに、いとゞ誠にさやうにも思しならば、殿、上など

護身―僧都に加持させて身を護らせ給へ
今宵ばかりとは―狹衣の心
いつを限に―何時まで生きさせる積で其樣に大事にはせらるゝぞ
世皆云々―隨喜功德品の句
おほゐの物語―
今侍らずば
限の道―死期
對へ―母宮が
聞えおかまほしき―齋院に言ひ置きたき
世やつきぬらむ―「あはざりし淚のもろくなりゆくは世やつきぬらん時や來ぬらん」
音無の瀧は―こらへて言はずに居る思は

かに護身せさせ給へ」など宣はせて、いとゞゆゝしう思したるを見奉り給ふに、今宵ばかりとは知り給はぬぞかし、明日の唯今などは、いかばかりおぼし惑はむ、と思ひ續けられ給ふに、御いらへも聞え給はず、淚こぼれぬべきも、心弱く口惜しき心かなと、つれなくもてなして、狹「いとよき事にこそさぶらふなれ。いつを限にかは惜みとゞめさせ給はむ。世皆不牢固とすゝめ給へるものを」と宣ふを、母宮「まろが侍らずなりなむ後の事は知らず、見奉らむ程ばかり、かゝる事な戲にても宣ひそ。おほゐの物語のやうならば限の道にも、え見すて給はじとこそ覺ゆれ」とて、うち淚ぐみ給へるまみの、親とも覺え給はず若う美しげにて、いとかう思したるを見奉らずなりなむずるぞかしと、今日は常よりも目とまり給ふ。

暮れぬれば、對へ渡らせ給ひぬ。御送にさるべき人々も參りて、近うはことに人もなきに、獨居給ひて、つぶ〳〵と聞えおかまほしき事どももあれど、なか〳〵にいみじうのみ思されて、唯、狹「世やつきぬらむ」とのみ口ずさびて、長押により居給へり。音無の

むのどかに―典なかゆつくりして居て
思ふさまに―出家して仕舞ひたらば
駒のつまづく―家を出れば乘る駒もまづくといふ諺あり
常のことぐさ―狹衣の口癖なる命は風前の木の葉といふ譬は
見果つまじき―お遂げぬ積なれば
願乞に齋院に參りて琴を彈く、神殿鳴動の奇特
挑ませ給ふ―狹衣と技倆を競ふ
うちはへて―引續き

の頃例ならず心のどかに居給ひて、思ふさまになり果てなば、いかに思出なくあさましかりし心の程とおぼし出でむと、流石にかたじけなき御身の程を、心苦しう思されながらも、駒のつまづくばかりはあらねば、唯、狹「數ならぬ身ながらも、長らへてだに御覽ぜられまほしきに、命さへ有り難う思ひ給へるこそ」など心細げにおぼしたるを、常のことぐさになりにたる風の前の木の葉は、見果つまじき心ざまなれば、かやうに耳ならさするにこそは、と心得させ給へば、耳もとゞめさせ給はず。

曉に出で給はむとての暮つ方、齋院に參り給へれば、上もこの御方にて、琴の御琴彈かせ奉りて聞かせ給ふなりけり。御覽じつけて彈きやませ給ふを、狹「久しう承らぬに、なほ」と申し給へど、他事よりも挑ませ給ふ事なれば、聞き給ふには、例も彈かせ給はねば、いとくち惜しうおぼさる。母宮「神のこの頃夢にうちはへて見え給へば、いと恐ろしうて、常よりも祈りどもせさせなどするを、かゝる程は精進にてものし給へ。何がし僧都の今年までは京にも出づまじかゝなるを、山に七日ばかり籠り給ひて、心のど

これ、只こゝに
ますや」—簾内
押し出で—出して
より押し出して
今はる也
㊉狹衣出家の志
を決し、竹生島
詣でと稱して家を
出でんとす
まつはし—馴親
みまさり
殿も上も—父も
母も若宮を我と
等しく愛し養ふ
べければ
忍草—飛鳥井腹
の姫君
宮おぼし隔てた
る—一品宮が親
しまぬ樣に見ゆ
る故
跡絶えなむ後—
出家の後
其處々々に—彼
の子はどこそこ
にて生れたる我
子なりなど大畧
を話して、一通
の養子同樣にせ
ず大事にしてく
れよとぼんやり
話したり
忽に—突然一品
宮に斯く〳〵と
明すべきにもあ
らずと
ゆかしういみじ
と—母宮が

樣なりける。明くるまで遊びてまかで給ふに、取りあへたるに從ひつゝ、細長小袿ども押し出でさせ給へる、皆被け渡させ給ひけり。

かやうなる夜のまぎれどもさへ過ぎぬれば、忍びて竹生島に參り給はむ事を、人知れずおぼし設くるにも、若宮の日を經てまつはしまさり給へるぞ、いといみじきほだしに思されければ、殿も上も、我よりおろかに、思ひ給ふべくもあらざゝめれば、さりともとぞ心やすきを、さすがなる忍草ぞ、なか〳〵尋ねより給ひてしも、宮おぼし隔てたるさまに見奉り給へば、いとゞ跡絶えなむ後はいかなる樣にてか、など心苦しきを、思し餘りて、母宮にぞ、其處々々にありしなど、委しくはあらねど、かゝるよすがの限りにはあらず思召すべき樣を、ほのめかし申し給ひける。上いみじう聞き驚き給ひて、かく隔て過し給ひける事と、恨み宣はすれど、狹「必ずさるやう侍りて、忽にかのわたりにも何かは、と思ひ給へれば」など聞えさせ給へど、取りもあへず涙をさへ落して、ゆかしういみじとおぼしたれば、狹「今さりぬべからむ序に」などぞ申し給ひける。一品の宮には、こ

人長―神樂の拜人陪從等の長

「其駒」―神樂歌其駒ぞや、我に、我に草こふ、草はとりかはん、轡とり、草はとりかはんや、水はとりかはんや―

脱ぎかけたる―舞ふ時に衣を

才の男―餘興に藝をする人々

うるはしうて―眞面目にして

うちすがひて―反對に

にがみ出でたる―苦い顏して出でたる

思立ちたる―出家を

あるまじき事―女を戀するなどは

明星―神樂歌「きくりう、せんざいやうびやくしゆとう、ちやくうせつしんてう、しやうぐげや、あかぼしは明星は、くはやこゝなりや、何しかもこよひの月の、たゞここにますか、こ

篳篥のすぐれて響き出でたるは、なほいとおもしろし。人長、「其駒」舞ひて、脱ぎかけたる火影、いとまばゆげなるを、つれなう才の男ども召しいづれば、若き殿上人などはいとまばゆげに思ひて、いとうるはしうて歸るもあり、又うちすがひて愛敬づきもてなすなどもありつゝ、樣々をかしうもありける。更け行くまゝに雪折々ふりつゝ、木枯荒々しう吹きしきたる、庭火もいたうまよひて吹きかけらるゝを、拂ひ侘びつゝ、煙の中よりにがみ出でたる、主殿司のものの顏ども、いとをかしく見やられ給ふにも、例の

狹　おぼろげに消つとも消ゆる思かは煙のしたにくゆり侘びつゝ

など、思ひ續けられ給ふに、今日明日と思立ちたる心の中には、いとゞあるまじき事と思ひ離れ給へど、それにつけてしもなほ安からず覺え給ふも、我ながら心憂し。

曉になりて、事ども皆はてぬる。さるべき上達部など、うけばりて遊び給ふさまは、さはいへどなまめかしうをかしきに、大將の「明星」謠ひ給へる扇の音なひも、なべてならず面白きを、神も耳とゞめ給ふらむと聞ゆるに、うち添ふる聲々ぞ、心おくれたる

十 卿樂の所狭衣明暮を誦ふ
一方に思ひ立ち—出家の志をかためたれば
もとの雫—「末の露もとの雫や世の中の後れ先だつためしなるらん」
阿私仙人——故飛鳥井姫君の兄の僧
あやえ—未詳、誤あるべし

外ざまにも向かせ給はねば、いとかひなし。

大將殿も、一方に思ひ立ち給ひぬれば、萬いとかりそめにのみ思されて常はさしも目とまらざりし木草につけても、あはれのみまさり給ふ。まして殿、上などのおぼし惑はむ有様などは、おろかに思しおかるべきにもあらねど、「もとの雫」はいつとてもおなじ事なれば、五濁惡世を疾く免れて、かの契り給ひし阿私仙人につかへむ事をのみ、人知れずおぼし立ちながらも、霜月にもなりぬれば、齋院のあやえの程いとゞ見すて難くて、御神樂の夜にもなりぬ。例の上達部殿上人など參り集ひて、御前の庭火おどろ〳〵しうて、晝よりもさやかなり。御几帳のかたびらども、菊の二重織物の色々、うつろひたる枝さしも、誠に咲ける籬と見えたり。女房の袖口どもは、紅葉重の擣ちたるどもにおなじ色の二重織物のうはぎ、りんだうの唐衣の、地は薄きに紋はいと濃く織り浮かされたる、夜目おどろ〳〵しう淸らに見えたり。さま〴〵のものの音ども吹き合せて、笏のおとも、こなたかなた打鳴らしたるなど、外の遊には似ず、そゞろ寒く聞ゆるに、

内々にも言ふなり―狹衣が
ことの外なる心づかひ―内々女二宮との中を再び溫むる樣の事はせじ
人奉り給ふ―狹衣が
見えぬ山路―直に遁世もしたけれども中納言のすけに用事もありし故、「世の憂目見えぬ山路へ入らんには思ふ人こそはだしなりけれ」
命さへ―物思の盡きぬと共に命盡きぬが恨めし
參らすれど―中納言のすけが女二に
いとあさましう―女二の心
疾く迎へ―女二が佛に願ふ趣意

とて、人やりならずうち歎きつゝ涙落し給ふを、上も、母宮「なほいたうな宣ひそ。斯うのみあらば、世にもえあり果つまじと、内々にも言ふなり。ことの外なる心づかひなどは、よも物せじ」など、一所していひ歎かせ給ふ。

つとめては、いと疾く、嵯峨の院に人奉り給ふ。

狹「なか〳〵なりし心惑ののち、やがて出立ち侍りつる。見えぬ山路も、なほいつしかと語らひ侍りし人に、言ひ置くべき事ども侍りければ、心弱くとまり侍りて、今朝は悔しき事いとゞ數添ひ侍りにけり。

などやうに、細にて、

狹 命さへつきせずものを思ふかな別れしほどに絕えも果てなで

とあるを、例の廣げて人間に參らすれど、今更にあまごろものつまばかりも手馴れ給はじ。いとあさましう憂き身の、今まで長らへでける事とおぼしめすに、佛もつらう悲しうおぼされて、唯、疾く迎へ給へ。かゝる目な見せ給うそ、と一つ心におぼし入りて、

思ふ方一つ―好色の方

わが心一つ―自分の心のみには之をせめての慰みに思へど女二には此心は通ぜざるべし、「一つにこそ思ひ慰め」とあるべし

今は思ひ返し―女二が

思ひ入り給ひにけむ人―女二の故母宮

あさんづのはし―催馬楽「あさんづの橋の、とどろとどろと降りし雨の、ふりにし我を、誰ぞこの仲人立てて、みもとの形消息し、とぶらひに来るや、さきんだちや」

手あたりのみ心にかゝり給へり。唯思ふ方一つの口惜しういみじきのみにもあらず、情なきものに思し出でられてやみぬるを、今ははるけやらむ方なきかはりには、又わが身も誰故かばかりそむき難き身を背きすてむとだに、わが心一つ思ひ慰め、かの御心にはいみじう聞え知らすとも、それを誠ともおぼさじ、かゝりける心を、あはれと今は思ひ返し給ふべきにもあらず、唯やつし難き身をたちまちに剃りすてて、佛はあはれとおぼしめして、かの一きは憂しつらしと思ひ入り給ひにけむ人の、惡業の離れ給ふべきしるべとは、必ずなりなむかし、と偏にぞ思立ち給ひぬるにも、いひ知らず物のみかなしければ、慰に、かたはらなる琵琶を引きよせて、わざとならず彈きすさびつゝ、「あさんづのはし」と謠ひ給へる聲など、我ながらも、げにおぼろげならず、やつし難うおぼし知らるべし。殿も御目さまし給ひて、堀川「大將はこゝにこそありけれ。よべは嵯峨の院にとまるべしと聞きしを、などか斯うとも言はざりけるならむ。いとほしき宮の御事をいへば、忍びかくるゝこそあやしけれ。世を心にあかず思ひたるを、思へばあぢきなしや」、

頓にもゆるし―捉へたる手を放さず

さくりもよゝ―はげしくしやくりあげて泣く事の形容

引きすべして―握りたる袖をすべらせ離して

ありか定めたる―動かぬ

待て暫し―山の端を分けて入る日よ、我を伴ひて此世を去らしめよ

年頃は―以下狹衣の心情を說く

誠しう―實際人を恨めしく思ひ悲しく思ひし事はなかりしに

後の世の逢ふせを待たむわたり川わかるゝほどは限なりとも

とて、御袖は頓にもゆるし給はず、さくりもよゝとは、これを言ふにやと見ゆるに、院もいと近くおはしませば、心にもあらず引きすべして、立出で給ふ。魂はやがてあくがれ出でぬるこゝちして、よべ入りし妻戸を押し開け給へれば、入方の月限なくさし入りて、一方にありか定めたる雲のたゞずまひ、言ひ知らず心細げなるに、まことに心は空になり果てぬ。

狹「待て暫し山の端分くる月だにもうき世に暫しとゞめざらなむ

誘はば」などながめ入りて、とみにもえ立退き給はぬ程に、月も入り果てて、霧のまよひたど〳〵しき程にぞ、辛うじて出で給ひぬる。世にあるべき程は、けに心より外にすぐさるゝわざにや、引き返さるゝ心地はしながら、殿にぞ歸り給ひぬる。

年頃は、心づからの物思にこそ安からざりつれ、誠しう人恨めしとも、あながちにあはれ悲しとも、おぼし知らむことは、何事にかはあらむ、今宵は、あはれなりつる御髮の、

心にだに思ひ知らるゝに、悔しう悲しうて聲も立てつべし。

狹「八千返りくひまの水もかひなきによし見よおなじ影や見ゆると

唯今宵ばかりこそは、かうまでも聞えさせめ」とて泣き給ふさま、人の御袖さへしぼるばかりになりぬるに、この御氣色もいといみじげにて、御衣のうへまでとほり出で、汗もこちたきに、狹「何事も皆ことわりに思ひ給へ知りたる身の、あやまちとは言ひながら、又斯うむげに思し捨てらるべき契の程には侍らぬを」と言ひいで給ふも、中々つらきふしくげき心地し給ふに、唯いひやらむ方なく悔しう悲しければ、心やすきまゝには、涙のみこそ蜑も釣するばかりになりゆく。中納言の佐、いとかゝる御氣色を、心苦しう思ひあかすに、院の後夜起の程にもなりにけり。うち行はせ給ひつゝ、例のこなた樣にぞたゞずませ給ふなる。宮あるかなきかなる御心にも、いとゞいみじげに思し惑ひたるげに今更に便なき事と思へば、立出でぬべきにしも、いとゞ今は世にあるべき心地もし給はぬに、これやかぎりと思ひ閉め給ふにぞ、なほ世の常ならぬ御心惑なりける。

八千返り―幾度悔みても效なければ此儘にては世に立ため積故我が仕方を見て居給へ、くひま―杭間、悔

人の御袖―女二の袖

この御氣色―女二の様子

悲しければ―狹衣が心やすきまゝには―涙はいくら流しても憚りなき故

後夜起―後夜の勤の爲に起き出づること

こなた樣にぞ―女二の居る方に來て佇み居たる

げに今更に―狹衣の心

立出でぬべきにしも―立退かねばならぬにつけても

のこりなく―數散泣きを見せられた我を、又繰返して恨まずともよからんに

思ししみたる方―狭衣が源氏宮に思をかけたる事

おぼし憚る―狭衣が

おぼし返して―狭衣が

よろづ盛―狭衣の心

思ひ定めたる樣―一品宮を娶りたる樣子

同じさまにて―出家もせずに

餘所にて―女二に逢はずして

我この御身―自分が女二の身になりて考へれば

　　女二のこりなくうきめかづきし里のあまを今くり返しなに恨むらむ

とぞはつかに思ひ續けられ給へど、唯一言葉もいらへざらむ前に疾く死なばやと思すに、まことに消え入り給ひぬべき御けはひの、あるか無きかなるなど、唯昔ながらにて、いひ知らず心ぐるしげに、らうたげなる御有樣のなのめならず過ぎにし方は、心に深く思ししみたる方のありしかばこそよろづおぼし憚るかた多くてやみにしか、今〳〵なりては逢ふは限なき御心の中を、かくあながちに近づきより給へる、なか〳〵に心惑も世の常ならねど、あながちに心づようおぼし返して、とかうも聞え惱し給はぬに、唯御髮のかぎり所せかりしを、いとふさやかに手にさはりたるぞ、なほいみじき心騒ぎなりける。よろづ盛惜しげなる御身の有樣を、やつしすてさせ奉りて、我は知らず顏に、今はと思ひ定めたる樣をさへ聞かれ奉りたるよなほ同じさまにて世にありと聞え奉るは憂き事かな、とおぼし續くるに、餘所にてこゝら思ひ歎きつるは數にもあらざりけり。我この御身の程にて思はむになほ〳〵いひ知らず憂かるべきわざかな、とわが

これより隔なき―是以上女二に接近せん積もなかりし故

かけられ―かけがねを

聞えさする事ども―申上ぐる事ども

藻刈舟―斯く疎まれては思ひ切り悪くなりて君を恨めしく思ふ様になる、うらみ―恨み、浦見、あま―蜑、尼

今宵ぞいかゞ―今夜こそは歎きに死ぬかも知れぬと危ぶまる

袖ぬらすといふ物語―今傳はらず

ねにさはる―承香殿女御の歌なるべし

を、男君、これより隔なき程などまでは、おぼしも寄らざりつれば、これをこの世の思出にて歇みぬべけれど、うち身じろき給ふ氣色だになきは、あさましう覺束なきに、思ひ侘び給ひて、障子を探り給へば、かけられにけり。いとゞ恨めしう心憂きに、思ひ侘びて、たゝう紙さし入れて、障子のかけがねを探り給ふに、離れぬるやうなれば、狹「唯少しあけて、聞えさする事どもは聞かせ給はぬにや。いかにも〳〵、御けはひを聞き侍らば、少しも慰みぬべきを、あさましうも侍るかな。いと斯くてはなか〳〵過もしつこそうべ。

狹 藻刈舟なほにごり江に漕ぎかへりうらみまほしき里のあまかな

いかにも〳〵宣はせよ」とて、御手を引きよせ給へるに、いかに死にせぬ歎きしたまひつる、今宵ぞいかゞと覺えぬる。袖ぬらすといふ物語の、承香殿の女御も、あはれなる心ばへを、見つけ給ひたりければにや、「ねにさはる」とも言ひ出で給ひけむ。これは唯、

故宮—女二の母
嶺の若松—若宮の生れたる時の祝の歌、前にあり
言ひやり給はぬぞ—「給へぬぞ」の誤なるべし。
かくればとは—「我が思ふ人は草葉の露なれやかくれば袖のまづしぐるらん」
見しにも似たる—反故に女二が書きたる歌、中納言のすけが拾ひて見せたる也
かやうにもや！此様な機會もあらんかと待ち構へ居たる故
千世ふる末も！未來をも此人に任する心持になるべし
又聞かじ—再び狭衣に逢はじ

り物思ふ人の生けるためしには、げにしつべう聞ゆる中にも、故宮の、嶺の若松と人知れずおぼし祝ひけむと、ほの聞きて傳ふる人のありしを、聞きつけたりし心の中を、えも言ひやり給はぬぞ。かくればとはまことにや。恥かしさもおなじ涙に流れ出でぬべし。又思ひ侘びて、かしこう尋ね參りたりし雪の夜の、枕の下の釣舟に思ひこがれて立ち歸りしに、聞きつけたりし鶴の一聲の後は、いかさまにして、雲井の餘所にはなさじと思ひしるしにや、今はうき世のほだしにて、かくかけとゞめられ侍る程に、心より外なる事も侍りて、見しにも似たるとありし反故を見侍りしは、人やりならず生ける心地もし侍らねど、その後にも唯かやうにもやと、待つに心をかけ侍りつれば、今ぞ心のうち少し涼しうなりて、年頃の本意も遂げ侍りぬべかゝめる」など、すべてまねびやるべくもあらぬ事どもを言ひもやらずむせ返り給ふには、過ぎにし方の憂きもつらさも忘られて、千世ふる末もかたぶきぬべし。されど宮は、夢にだにかばかりのけぢかき程にては又聞かじとおぼされしに、いと物おそろしうて、いかにも〳〵、え動かれさせたまはぬ

今宵さへ—女二の宮、今夜もまた其樣ならば　伏籠の少將—此頃はやりし小說中の人物　引入れさせ給ひて—女二が　恨めしう—狹衣が　たてさせ—障子を　かけられ—かけがねをかけられたかと狹衣が　あなたは—女二の入り居る處は三方壁になり居りて外に出處なき故安心して　隔なうとまでも—此以上君に近附かんとは思はず　憂きを知らぬさまにて—今迄出家もせず　思召し疎まる—御嫌ひなさる樣な暴動は決して致しますまい　眞木の戸の心ばへ—思ひかけず開きたる戸により忍び入りたる時の心持

今宵さへ然だにあらば、やがて斯くながら伏籠の少將の樣にもなりなむと、心惑も世の常ならぬに、御衣の裾も殘りなう引入れさせ給ひてける御心の疾さも、限なく恨めしう悲しきに、この障子もひき破りつべう覺ゆれど、胸のみ騷ぎてとみにぞ動かれぬ。宮はかしこう入り果ててたてさせ給へるに、わな〳〵と震はれて、遠くもえ遁れ給はず、やがてうつぶさせ給へり。かけられぬるにやと思ひ給ふに、宿世心憂くいとゞ覺ゆれど、あなたは塗籠と見れば心安くて、隔などもやぶり給はず、唯さながら寄り居給ひて、とばかり物も宣はず、涙のみせきやるかたなければ、押へてためらひ侘び給へり。狹「これより隔なうとまでも思ひ給へかけずなむ。唯かばかりにても今一度聞えさせてこそはと、憂きを知らぬさまにて過し侍りつるを、唯心安くおぼしめせ。身に從はぬ心の悔しさも、こゝらの年頃皆思う給へ知りわたれば、又思召し疎まるばかりの心の程は、よもつかひ侍らじ」とて、かの思ひかけざりし眞木の戸の心ばへよりうちはじめ、今宵まで思ひ歎く心の中を、泣く〳〵しめ〳〵といひ續け給へる、まねび盡すべうもあらず。狹「かばか

ありつる御經の聲―狹衣の經よむ聲
そゝきありき―せはしく歩き
さて例ならず―狹衣に言はれたる故に、いつになく、二宮になつきたるのぢやな
紛れありき―若宮が
心やすき―容易にはづるゝかけがねと見えて
見やり給へれば―女二宮が
佛の障子口に―佛間の襖を、てきりたるなり
ありし寢覺のた―狹衣が女二宮に忍び入りし時の事

るに、ありつる御經の聲にぞ例の胸つぶれて、御格子もまゐらせ給ひてけり。いつも、わざと召さぬかぎりは、近う參る人もなければ、御障子のうしろに、中納言のすけのみぞさぶらふに、若宮おはしてそゝきありき給ふを、（すけ）「まだ御殿ごもらざりけり、大將殿は出でさせ給ひぬるか」と聞ゆれば、（乳母）「慕ひ聞えさせ給ひて、まだえ御殿ごもらぬに侍るめり」といへば、（すけ）「あな心苦しの事や。などかはとまり給はずなりぬらむ」とて、抱き奉れば、（若宮）「今宵は宮の御まへに御殿ごもれ、つとめて迎へに來むといひつるや」と語り給へば、（すけ）「さて例ならずなつきまゐらせ給へるなりけり」とて笑へど、宮は見もおこせ給はず。こゝかしこ紛れありき給ひて、心やすきかけがねにや、はなちおき給ひてけるを、誰かは知らむ。戸のやをら開くおとして、ざと匂ひ入りたる追風も、まぎるべうもあらぬに、唯何とも思ひあへず見やり給へれば、冠の影ふと見ゆるに、物も覺えさせ給はず、佛の障子口に入りて引き立てさせ給ひぬるも、手のみわなゝかれて、頓にぞ立てられぬ。かのありし寢覺の床に、ぬらし添へ給ひし濡衣おぼしいでられて、

宮―女二宮
少しのぞきて―少しはづれて
思召しつるに―女二宮が

かに、知らせでのぞかむと思ふぞ」と宣へば、若宮「格子もおろさでこそありつれ。いざ見せむ」とさゝめき給ふうつくしさぞ、世の常ならぬ。狹「それはなほ不動尊見つけ給ひてむ。西の妻戸を放たせ給へ。さて、人に斯うとな宣ひそ」と、おとなしう語らはれて入り給ひぬるも、いかなる事し給はむとあやふけれど、西おもては月も暗ければ、やをら入りて戸のもとに立ち給へり。宮、この程は、佛の御前にのみさぶらひ給ひて、百萬遍滿て給ふなりけり。御格子もいまだまゐらで、みあかしのほのかなる方に、御几帳おしやりて、障子より少しのぞきて、脇息におしかゝりて、小倉の山も殘りなき月の光をながめやりて、行はせ給ふ御すがた、肩つきなど、人よりは細くちひさやかにて、御髮のゆら／＼とこぼれかゝりたる裾のけぢめ見えぬほどの月影は、いひしらず美しうらうたげに見えさせ給へるに、數珠の、脇息に時々引き鳴らされたるなど、今宵始めたる事ならねど、なほ飽かずくち惜しう見えさせ給へるを、まして明暮ゆかしがり給ふ人に見せ奉らばやと、中納言のすけは見奉る程なりけり。人々も出で給ひぬると思召しつ

大井川—我は昔の戀を忘れずながら事情は變りはてたる世に、堰のみは昔の儘にて年を經たろよ

我所有云々—譬喩品の句

障らせ給はざンめり—暗きをも構はず狹衣の所へ來たがり給ふ

例—いつも我を抱いて下されぬ

わが恐しとゐ—若宮自身が恐ろしく思ひしならんと

み悲しければ、やがて川の上に作りかけたる釣殿に、つくづくとながめ入り給ひて、

狹「大井川ゐせきはさこそ年經ぬれ忘れずながら變りける世に

などひとりごち給ひて、狹「我所有福業今世若過世及見佛功德盡廻向佛道」と、うちあげて讀み給へる、日頃聞き給へるさまざまの尊さにも似ず、身にしむ心地ぞしける。この御聲をきゝて、若宮の出でむと騒ぎ給へば、宰相の乳母いだき奉りて、そなたの渡殿に參りたり。乳母「今は御殿ごもりねと聞ゆれど、御聲を聞かせ給ひて、暗う侍るにも障らせ給はざゝめり」といへば、立ちよりて、狹「今宵はまかで侍るぞ。宮の御前に御殿ごもれよ。明日參らむ」と宣ふを、若宮「宮は佛の御前にて經よみ給ふなり。例もいだき給はぬぞ。唯いざ二人ねむ」と宣ふを、いとかなしう哀れにて、狹「あな心憂の事や」と語らひ給ふついでに、狹「みそかに、宮のおはする御堂の妻戸放ち給へ。佛の御前のゆかしきにのぞかむ」と宣へば、若宮「何のゆかしきぞとよ。不動尊の恐しげなるに食はれむとや」とおどし給ふ氣色、わが恐ろしと思しけると見ゆるぞいとをかしきや。狹「されば、みそ

澄みがたう—是にのみ道心が鈍りそうに女二宮も思はれたり

わたし聞え—女二宮の方へよこしてある故

心のもよほし—狹衣や女二宮の思の種

果の日—八講の最終日

伽陵頻伽—極樂に居る聲よき鳥の名

しう、一心に行はせ給ふに、大將日々に參り給ひて、人よりけに濡らしそへ給ひつゝ忍びあへ給はぬ袖のけしきぞ、澄みがたう思しわびける。若宮もこの頃はわたし聞えさせ給へれば、内外まぎれ歩かせ給ふは、げにいとゞしき心のもよほしなり。この程の有樣、をかしきも尊きも、こまかならば夢のしるべのまねしたるになりぬべければ、皆漏しつ。

果の日は十三日なれば、月の光さへ隈なくて、兜率天までいとやすく澄みのぼり給ひぬべかめり。嵯峨野の花やう〳〵さかり過ぎて、女郎花色變り、尾花の袖も白みわたりつゝ、心細げにうち招きたるに、露は重げにきら〳〵と置きわたりたるは、如意寶珠かと見えわたされたるに、蟲の聲々さま〴〵にて、懺法阿彌陀經にうち添へたるは、伽陵頻伽の聲にも劣らず、たふとくあはれに聞ゆ。事果てて、僧どもも人々も皆まかり出でて殘りなく、人目かれぬるこゝちするに、大將はえまかで給はず。川霧さへ麓をこめて、道妨げに立ち渡りたるに、堰せきに漏りわづらふ水のおとなひも、いとゞむせ返り、物の

扇も―かの御歌書かれたる扇をも見せたれども

⑨嵯峨院の法華八講、狹衣女二宮に心緒を語る

八講―法華經の論議を開く儀式

問者―講師に問をかくる役の僧

懺法―惡事を懺悔して再びせざらん事を誓ふ法

西方念佛―西方淨土に生れんことを願ひて唱ふる念佛

宮―女二宮

させ給へるにや、扇もちらし侍りしかど、

吹きまよふ風のけしきも知らぬかな萩のしたなる蔭の小草は

口惜しげなるさまにこそ。これも一つ方につゝみ侍りて。

とあるを、げに少しいはけなき程にやと思しやる。

九月には、嵯峨の院の入道の宮の作らせ給へる、法華の曼陀羅供養ぜさせ給ひて、やがて八講行はせ給ふ。その程は殿も日々に參らせ給へば、ましてさらぬ上達部殿上人など參らぬなし。朝夕に替る講師どものえりすぐらせ給へる、おの〳〵年頃心を盡しける實の學問の程、見ゆべきたびなれば、心を盡したるしるしありて、尊くめでたきに、問者どもの劣らじと爭ふ口強さどももおもしろく、聞き所あること限なし。宵曉の懺法などにも、聲すぐれたるを擇らせ給へれば、哀れにたふとし。西方念佛の折は、蓮の花の色々散りまがひたるに、名香のくゆりあひたるは、極樂もかくやと推しはからる。宮いとゞまぼろしの世をそむき棄てさせ給へるのみ、嬉しくおぼしめされて、御心のうち涼

心はかれじ草葉ならねば」

頼み聞えたるを―其方の妹に心をかけたるを

竹の中も―かくや姫なりとも求めて、其をはだしに我を此世に引留めんとも思はぬのか

この定にては―君の御浮氣の樣子ではかくや姫を求め出しても無效ならん

竹取の翁―親たちに妹の一條を承知させては呉れぬか

野邊の小萩―妹

さかしうに―成な口を挿かしそて取持て―餘計あり難げまずし立はむつうに

中なるには―妹には

口ずさび給へる愛敬、なほ〱この御あたりの塵ともならまほしげなり。狹「まめやかには、昔より頼み聞えたるを見も知り給はぬこそ心憂けれ。竹のなかも尋ねて世に暫しかけとゞめさせむなども、思さぬなめりかし」と恨み給へば、中將「いで、その翁も、この定にては、いとむとくにこそは侍らめ」などいふ程に、さるべき人々あまた參り給へれば、物むづかしき紛らはしにとて、文作りなどして、夜もすがら遊びあかし給ひけり。

二三日ばかりありて、かの中將の許に、

狹　うちつけなる樣に思すべけれど、かの聞えし竹取の翁を語ひ給ひてむや。野邊の小萩もさていかゞ。頼み聞えてなむ。これもさかしらまぜ給はで。

とて、中にあるには、

狹　一方に思ひみだるゝしのずすき風のたよりにほのめかしきや

とある、返事はなくて、

中將　竹取にはほのめかし侍りしかど、いとあり難げにこそ。中なるには、思ひ落され

少し心得る｜合點のゆく事もあれど、わが妹の恥ど合點したる也

いでや｜中將の心、よい事ではあれど、秋衣に飽きられたらば又心配の種になるべしとかき給へるは｜誤あるべし

わがかたに｜花薄を妹に喩へかり

心には｜妹君は我かねて心をかけしに誰が手に入れて仕舞ひし事やら

いつしか妹が｜「さを鹿の入野の薄初尾花いつしか妹が手枕をせん」

招くとも｜滋多に人に靡くな、惹きられぬ女も無ければ

おしなべて｜狹衣は浮氣なる故わたゞ妹は關係させたくなしとの意

色どる風は｜「秋萩を色どる風は吹きぬとも

誠に少しは命も惜しかりぬべきわざぞかし」など宣ふ氣色も、少し心得る事あれど、いでや　めでたきにつけても、思し數まへられでは、いかなる物おもひのたねとかはならむ、と思へばくち惜しかりけり。中將の扇に、秋の野を畫きて、風いたう吹かせたるに、本あらの小萩の露重げなるを、しがらみ伏するさを鹿の氣色もをかしう畫きなしたるを見給ひて、「聲の秋風は月のみつこと頻りなり」とかき給へるは、樣ことにちひさくて、

狹　わがかたになびけよ秋のはなすゝき心をよする風はなくとも

狹　心にはしめゆひおきし萩のえをしがらみふする鹿やなくらむ

「いつしか妹が」と書きすさび給ひて、さまぐ＼の御才といへど目も及ばぬに、これは、すこし物見知らむ女などの、目とゞめぬはあらじかしと見えたり。

中將　招くとも靡くなよゆめしのずすき秋風吹かぬ野邊も見えぬに

中將　おしなべてしめ結ひ渡す秋の野に小萩の露もかけじとぞ思ふ

など書きて見せ奉れば、狹「あぢきなきさかしらかな」と笑ひ給ひて、狹「色どる風は」と

人のまねびし―「あくがるゝ」の歌は、人に聞きたるをむだ書にしたる也とごまかして

長かるまじき―狹衣が何となく長生もすまじき心地するを

姨捨ならぬ―「わが心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」

いふとも人に―引歌未詳

心得給へる方ざま―戀の方にはあらで

試みまほしう―自ら羈絆をつくりて其味を試みたくもあれど

餘りことゞゝしう―手重なる相手でなく氣をゆるし得る氣に入つた女を手に入れたならば

と書きつけたれば、狹「人のまねびし事を、筆のすさびに」とまぎらはし給ひて、何やかやと世の物語をし給ふついでにも、あやな長かるまじきこゝちのみするを、心より外に知らず顏にて過すさまなど、げに物心細げにおぼしたる氣色などの、すゞろになつかしういみじうのみ覺え給へば、中將「姨捨ならぬ月の光はあり難うこそ侍れ。思召すだに隔てずば、慰め參らせてむかし。いふとも人に」などいふさまも、なべての人よりはをかしきに、かの身によそへられたりけむ妹の姫君も、いかやうにやと思ひやられ給ひてゆかしき御心たえず。狹「いみじう事あり顏にもいひなし給へるかな。この心得給へる方ざまにはあらで、見給ふやうに、事にふれて世のいとはしき癖のつきけるが、我ながらもあはれなるぞや。げに羈絆などのあながちなるなどがあらば、少しもや思ひ慰まれまし。身に添ふ影より外に、ことゝふ人のなければにやと、試みまほしうも侍れど、いさや、長からざらむものゆゑ、なかゝゝならむほだしなどの有らむこそいとほしかるべけれ。餘りことゞゝしう煩はしき事などはなくて、うち賴み心苦しげならむ人などを見ば

ひ―宮中の交
我ながら―迷も
罪を我がつくれ
る罪ぞと思へば
也
つれなう―知ら
ぬ顔で
定まり居て―妻
を定めて
少し聞え知らせ
て―女二宮に
思ふ本意―出家
の望
忍ぶもぢずり―
源氏宮に對する
戀
あくがるゝ―魂
の飛ぶを見る時
衣の下がひの褄
を結べば魂元に
かへるといふ俗
傳ある也
宮の中將―後式
部卿宮の子
紫苑色―狹衣
の衣裳
人知れず―中將
が窃に心配し居
るわが妹の事
この人の妹を
狹衣の人妻てかけ
にもしたく
たましひの―狹
衣の思はぬ妹な
れども差上げた
し

しき御覺えなどはおはしなましものを、と思すにも、なほ我ながら罪さりどころなき心地するに、われはつれなう、世の常の有樣にさへ定まり居て聞き奉るは、いかでなほ口惜しうあるまじきこゝちするを、なほいかで、いみじう胸いたき心のうちを、少し聞え知らせて、思ふ本意とげてやみなむ、と思ひ續くるに、又なほ忍ぶもぢずりは、かこち聞えさせつべく思ひ出でられ給ふもわりなしや。

狹　あくがるゝわがたましひも返りなむ思ふあたりにむすびとゞめば

など手習に書きすさびて、添ひふし給へるに、宮の中將參り給へるに、紫苑色の御衣のなよゝかなるに、草のかうの織物の指貫ばかりを著給ひて、ものあはれとおぼしたる氣色にて、ながめふし給へる樣の、いふ方なうめでたう見え給ふにも、人知れず思ひあつかはるゝ人の御事、まづ思ひ出でられて、この人の御あたりの塵ともなさまほしう、この御手習を見るまゝに、

中將　たましひの通ふあたりにあらずとも結びやせまししたがへの妻

思ひ聞え—弘徽殿が

⑦弘徽殿懷胎

惱み給ふ—弘徽殿がもしさにやと—懷胎にやと—上の御前—堀川北方のさのみもいかゞ—秘密にばかりもして居られぬとて殿にかくなむと—北方が是々と堀川に話したればのちの男女—「のち」は「ちご」の誤なるべし—御覽じ知らぬ事—御子といふものはまだ持たれぬ事故かひ〴〵しき—入內早速懷胎ありしをいふ

⑧宮の中將己が妹を狹衣に媒せんとす

今より樣殊に—御男子ならばやがて春宮にも立ち給ふべしなどいふ也入道の宮を—狹衣の心かやうのまじら

まめやかにねんごろなる御心ばへをのみぞ見え奉り給へば、有り難うあはれなるものにぞ思ひ聞え給ひける。

程なくたゞならぬ樣に惱み給ふを、もしさにやと人々も見奉れど、あまり嬉しき事は、言ひだにこそ出でられざりけれ。殿にも申す人もなきに、上の御前ぞ常にさにやと案內し尋ねさせ給ふを、御後見など、けざやかにも申しやらず、さのみもいかゞとて、殿にかくなむと聞えさすれば、驚き給ひて、三月もやゝ過ぎにければ奏せさせ給ふ。上の御こゝち、嬉しともおろかなり。のちの男女にておはしまさむは知らず、いかにもいかにも、まだ御覽じ知らぬ事なれば、珍しうおぼしめす事限なし。おとゞ、大將など、かひがひしき御有樣を嬉しくおぼしけり。

大方の世にも、今より樣殊にいひ思ひ聞えたるにつけても、大將は、若宮のたゞ人にてまじらひ給はむを心苦しうぞ、人知れずおぼしける。入道の宮を、院のとりわき思ひかしづき聞えさせ給ひしものを、かやうのまじらひにも、さはいふとも、今少しかひ〴〵

徽殿一人々そは親しくはせねどやすらひにこそ—前にある狹衣の歌

おぼし出づる事—女二宮と同居時代の事

飽かざりし—わが戀の不結果に終りし當時に似た跡もありやと其道跡を求て見る

一品の宮の—一品宮と同年位と聞きしに

おぼし隔てられじ—弘徽殿に

あはれに思し出でらるゝに、御前のしつらひも、夢路に惑ひたまひしおまし所も變らで、御几帳ばかり隔てて居給へる、御衣の裾などのほのぐ〜見えたるも、あやしうなべてならず、け高うなまめかしき心地ぞし給へるを見るにも、思ひ出でらるゝ事多くて、狹「このおまし所を見侍るにこそ、實に夢のこゝちし侍る。ましておぼし出づる事も侍らむかし」とて、

狹「飽かざりし跡や通ふといそのかみふる野の道を尋ねてぞ見る

人聞きつくべうもあらず紛らはし給ひて、あはれと思ひ給へる氣色、なほいかなりし事ぞやと思さるれど、

弘徽「いそのかみふるのの道を尋ねても見しにもあらぬ跡ぞ悲しき

とて打泣き給ふにやと聞ゆる御けはひ、ほのかなれど、唯入道の宮と覺え給へり。一品の宮の御おなじ程と聞きしかど、これはこよなく若うたをやかにもやと推量られ給ふにも、悔しき事多かれど、今はかひなきものから、少しもおぼし隔てられじと思ひ給へば、

行くへまで―「行末まで」の誤なるべし
心ゆかざりつる―今迄合點ゆかざりし前齋院の附人達も、狹衣此了簡なればこそ今迄手を出さずに居たりしならんと思ふ也
思はずにならせ―不慮の成行になりしに
よりつき―不審
おなじ枝―女二の姉妹なる前齋院をば娶らじ
自らの心―前齋院自身は年來神に仕へて佛に遠ざかりたれば出家したしと深く思へど
心より外にて―心外ながら入內せり
思ひ放ち給へる親心―前齋院を狹衣が手放したれども內心は如何ならんと
優れ給へれば―弘徽殿が
あつかひ聞え―堀川が
みづから獨―弘

へるを、かうまで思ひ寄り給はむ大將の御心ぞ、行くへまでいと頼もしくおぼしめさる。心ゆかざりつる御後見どもも、かゝる心にてけざやかにて過し給ふにこそ、入道の宮思はずにならせ給ひしに、よりつき喜び顏に、おなじ枝のゆかりに木傳ひては見え奉らじ、と心深うおぼすにこそありけれ、と心ゆきたる人多かり。自らの御心にこそ、年頃罪深きさまなりつるをいかで、と思しつる本意深けれど、よき人の御身はなか〳〵よろづまかせ難かりければ、心より外にてまゐり給ひぬ。

御局はやがて昔の弘徽殿なり。帝もかねては、大將の思ひ放ち給へる親心いかなるにかと、人わろく思しめされしかと、さばいへど、なべてならず心憎き御有樣などは、ことに優れ給へれば、いとやむごとなくあらまほしき御覺なり。嵯峨の院にも、唯大殿に任せ聞え給へれば、まことの御女のやうにあつかひ聞え給へり。大將殿などにも、みづから獨こそよなうけ遠き御もてなしなれ、女房などはえ恥ぢ聞えず、一つなるやうにて、かの「やすらひにこそ」と悔しがり給ひし槇の戸もつゝましからず、出で入りたまふも

帝に居給ふべき—帝位に居る居らぬは人力のよくすべきにあらず
さらで—「されば」の誤か
かゝる人—入内せしむべき娘
前齋院—一條宮
嵯峨の院の御志—我に女二又は女三を賜はらんとせられし嵯峨の御寵遇の厚かりしに、色々の故障にて遂げざりしは遺憾なれば、其代りになる可くは前齋院を世話して入内せしめたし
げに若宮の—堀川の心
齋院のさて—源氏宮の齋院にならずに居ると思ひて世話せん

のもてなしにより給ふべきにもあらず。さらで、なま宮腹にてうしろむる人なからむよりは、大將に任せたらむに、あしうもあらじ」などぞ宣はせける。

男皇子おはしまさぬ事を、世の人ども心もとなき事にいひ思ひて、女ども持ち給へる人などは參らせ集め給ふを、大殿はいとうらやましう、今更に 堀川「かゝる人の少なうおはしける事」と歎き給へば、大將は、前齋院の御事を聞え出で給ひて、狹「昔より嵯峨の院の御志あり難うおぼえ給ひしかど、樣々かひなきやうに御覽ぜられてやみ侍りぬる代に、おなじうはさやうにても、かひなかりける心の程を見え奉らまほしう」など聞えさせ給ふを、げに若宮の御有樣などを見奉り給ふにもありがたき御心ばへぞかしと、かかる御おとな心を、うつくしう思ひ聞え給へば、堀川「我もいとつれ〴〵なるに、齋院のさておはしましょと思ひなして、あつかひ聞えむ」と宣ひて、嵯峨の院にも、堀川「かやうになむ大將のすゝめ侍る」など、聞えさせ給ふを、いかでかおろかにおぼし喜ばむ。御後見なくては、さやうの御交ひあるべきならねば、よろづ心苦しく見置き聞えさせ給

㊅狹衣前齋院を世話して入內せしむ、弘徽殿女御と稱す
嵯峨院の若宮―女二腹の狹衣の實子、以下宣耀殿も御の心
中々の―なまじひの國王よりは優れたる狹衣が、若宮の後見となりたるは結構なれども
自らの―自身も平人として置くは惜きものなるに
おなじ樣にて―若宮も狹衣と同じ中、遇に立つよりは、宣耀殿に養はれて行々は春宮にも立つ方然るべし
齋院の―若宮をば一體齋院の養子にする積なりし
然らで―狹衣に世話させずともよき譯なれど
あり難き心―狹衣が折角親切に世話するを改めてもぎ取るは輕卒なり

かづらに著けさせ給へり。御覽ずるにもなほ口惜しき御心のうち絶えず。なほ古くより女御御息所あまたさぶらひ給へど、いづれもすぐれて時めき給ふもなし。さぶらひ給ひて、宣耀殿ぞ取りわき給へるさまにものし給へど、皇子のいかにも〳〵おはしまさねば、今まで后にも居給はぬなるべし。御年もやう〳〵三十に餘らせ給ふに女宮たちだにおはしまさぬを明暮の御歎にて、嵯峨院の若宮を、などかあづかり聞えざりけむ。さりとも大將の、わが物に思ひ聞えたるも羨ましく、げに中々の國王よりはめでたき人の、よすがとなり給へる、げにいとあらまほしけれど、自らのありさまもただ人にて見るは、いと心苦しうあたらしき心地するに、又おなじ樣にて立ち添ひ給へらむよりは、など宣はせけるを、嵯峨の院にも聞かせ給ひて、嵯峨「齋院の御あつかひにとおぼしてこそ讓り聞えしか。その本意たがひにしかば、今はげに然らでもありぬべかりしかど、いづれの御爲にもあり難き心の程を、今はと改めむも輕々しきやうにぞありぬべき。いでされば、何事も唯然るべきにこそあらめ。まして帝に居給ふべきにては、人

過しがたうて―狭衣が見るたび―葵には逢ふといふ名あれば見れば心を惑はす也、されば其名をさへ今は忘れたし
思しもかけず―不意の事故齋院が少し顧みたる也
隈なき所―この院をいふ
端つ方―端の方に出て居る
物恐ろしければ―狭衣の感じ
いでや―以下狭衣の心
かくぞと―齋院になる事が確になりし時に世を遁れたらば斯る苦勞がなくて
なほ斯くても―此消りに我慢し通す譯にはゆかぬ
よそにやは―今更他人になる事はなし、もとが兄妹同樣の中なるものを

しがたうて、御几帳など引きつくろひ給ふまゝに、

狭「見るたびに心惑はすかざしかな名をだに今はかけじとぞおもふ」

とて御衣の袖を唯すこし引き動かし給へれば、思しもかけず少し見かへらせ給ひつる御顏の、隈なき所にては、いとゞ千歳を經てまもるとも飽く世あるまじう、なのめなる所だに無き心ぞいと悲しかりける。物見るとて、人々もみな端つ方なる程なるべし、け近きもさすがに物恐ろしければ立退き給ふぞ、いとくち惜しきや。いでや、かくぞと見定め奉りし折など、身をあらぬ樣になして消え失せましかば、斯うのみぞ心盡しに侘しからで、今はやう〳〵思ひ忘れもしなましものを、なほ斯くてもあり果つまじかりけり、とぞおぼしなりぬる。事果てぬれば、狭「かのおりし御返り聞えさせ給へ」とそゝのかし聞えさせ給へど、齋院「いみじく苦しければとて、やがて臥させ給へれば、母宮「おぼつかなからむやは」とて、上ぞ聞えさせ給ふ。

母宮よそにやは思ひなるべきもろかづら同じかざしはかけも離れず

萬はさすがに例なからむ事はいかゞと恐しさに、古き跡を尋ねさせたまへば、おはしまし所の、唯かりそめに物はかなき御屏風などばかりを、おはします御あたりにて、あらはなるに、風さへほかにも似ず物さわがしうて、倒れさわぐを起しあつかふを、大將殿はのぞき給ひつゝ、狹「いとあらはなるわざかな。おはしまし所ばかりは、なほ例にも違へばや。齋院こそ、なまよろしうおはしまさむは惡しかりぬべけれ」とて、つくろひありき給へば、大人しき人々、「かやうのさだ過ぎたる樣などにては、さし出でにくゝ侍りけり。萬の人に唯向ひたるやうなれば、この若き人々だに、何しに車おりつらむとわび惑ひけり」と聞ゆれば、狹「そは、車にてもおなじごと隱れなかゝめり　されど、いとうちつけにわび恨みかくる人々もあゝめれば、たゞ心安くおほせ。杜の下草こそからきわざなゝめれ」とほゝ笑みて見おこせ給へる御まみの恥かしけさには、何事かはまさらむとぞ見えたる。例ならず花々しき所にては、いとゞけざ／＼と光るやうに見えさせ給へるに、いとちひさき葵を御髪につけさせ給へる、いひ知らず美しう見えさせたまふに、例の過

○おはします御あたりにて―齋院の身邊には御屏風位があるのみにて
倒れさわぐ―屏風が
萬の人に唯向ひたる―この本院の室内は明けはなしの樣にて常に多くの人に差向ひ居る樣なれば
車にても―車の内にても見通さるゝは此室内にかはらず
うちつけに―此詞心得がたし、誤あらん歟
杜の下草―我如き老人の相手にされぬこそつらしと也、「大荒木の杜の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」
光るやうに―齋院が

達部などは、土のうへに、かたの樣なる御座ばかりにて、よもすがら女房達と物語しつつ、明くるも知らぬさまなるに、京には音もなかりつる郭公も、齋垣のわたりには聲馴れにけり。若き人々の耳とゞめぬはいかでかはあらむ。内にも外にも言ひかはす事どもあるべし。されど、ひとり二人が事ならばこそ書きもとゞめ、皆ながらはうるさければ止めつ。

吹き渡したる川風のおとなひも、今少し物心細く、草の枕は、いとゞ露ばかりもまどろまれぬに、唯こゝもとに寢たる聲して、うちしはぶくなり。大將殿御前近くさぶらひ給ひければ、

狹　思ふ事なるともなしにほとゝぎす賀茂の瑞垣たづね來にけり

と獨ごち給ふを、女別當、

女別當　語らはば神も聞きてむほとゝぎす思はむかぎり聲な惜みそ

明け離るゝ山際なども、外には似ずをかしきを、若き人々は、をかしう思ふ事限なし。

唯こゝもとに――「誰が里に夜がれをしてか時鳥たゞこゝもとに寢たる聲する」
うちしはぶく――「うちはぶく」の誤なるべし、はぶくは羽だたきする事
御前――齋院の御前
思ふ事――自身を郭公に比したる也
語らはば――こゝにて語らば神も納受あるべければ、殘らず打明け給へ

我身にぞー葵のしるしに人は葵をかざせども、君が我に逢ふ日は今は無くなりぬ

置口ーへり取り

身の大事なからむはー棄て置かれぬ用事のなきは歸る者なし

れば、

帝　我身にぞあふひは餘所になりにける神のしるしに人はかざせど

葵がさねの紙の、なべてならぬ色膚など、さらなる事なり。今日は御返あるべきならねば、御使も立ち給ひぬ。出し車ども、けふは春夏秋冬の花のいろ〳〵、霜がれの雪の下草までの數を盡して、十二月まで色を盡させ給へる、表著、裳、唐衣などまで、その色に從ひつゝ、高麗もろこしの錦を盡し、瑠璃をのべ、しろかねこがねの置口をし、蒔繪、螺鈿をし、繪をかきなど、すべてまねび盡すべき樣もなかりけり。この世の人の著るべき物にもあらずぞしなさせ給へりける。御輿の駕輿丁のなり姿まで、世の例にも、まことに書き置かまほしげなり。渡らせ給ふほどは、そこら廣き大路、世にも知らず芳しきに、われはと思ひたる數多の車どもの、榻おろさせて過ぎ給ふは、なほいとけだかし。御社に參り著かせ給ふ有樣など、例の事にて思ひやるべし。殿もやがてとまらせ給ひぬれば、いづれの上達部殿上人かは、おぼろげの身の大事なからむは歸り給ふべき、若上

今—おのれのみ—今より有栖川のみ獨り流れじ、我も幾久しく汝と共に栖まんと也

上—丹宮

見通し—齋院を

およびて—及びごしにて

榊葉に—とても及ばぬ戀とあきらめても矢張思ひ切れぬを如何にすべき

㊄賀茂祭の當日の樣、その夜狹衣齋院を見る

おほき大臣—太政大臣

と、戀しう思し出でらるゝに、御前に流れたるは、有栖川となむいふと聞かせ給ふにも、

齋院　おのれのみ流れやはせむ有栖川岩もるあるじ今は絶えせじ

など契り深く御覽じやりて、東面の母屋の中柱に寄居させ給へるようだい、御髮のかかりなどは、繪に少し畫き似せても、人に見せまほしき。折しも、大將殿、上のおはします北の對の南の戸口より、すみの間の妻戸のみすを引きあげて參らせ給へるに、御障子の開きたるより見通し參らせ給へる、なほいと忍びがたくて、榊をいさゝか折り給ひて、少しおよびて參らせ給ふ。

狹　榊葉にかゝる心をいかにせむおよばぬ枝におもひ絶ゆれど

見だにかへらせ給はぬぞ、いみじう恨めしきや。

祭の日の事どもなど、例の作法なり。近衞づかさの使は、おほき大臣の御孫の少將ぞかし。權大納言の御子よ、いと若う美しき御さまにて參りたまへるに、やがて内裏の文つけさせ給へりければ、南のすみの間の戸口より取り入るゝ袖口思ひやるべし。上御覽ず

出し立て―銘々支度をさせて出したる家内の忙しさは如何なりしかと

㊃禊衣歌を齋院に贈る、齋院省みず

歸らせ給ひて―賀茂の本院に

今は斯うて―齋院の心、今からは斯くの如くにして生活するのぢや

樣、物見車の袖口などまで、げにかねて聞きしにたがはず、目もかゞやく事のみ多かり、まして御供の人々、例の數よりも多かり。おの〳〵出し立て急ぎつらむ家の内、げに如何なりつらむと見えて、めでたき年のみそぎの有樣なり。河原におはしまし著きたる有樣など、例の作法にも事添ひて、長き世のためしにもと、何事もめでたう見所多かり。宮司參りて、御祓仕うまつるは、いと神々しう物恐しう聞ゆれど、大將はひるの御有樣のみ心にかゝりて、

狹　みそぎする八百萬代の神も聞け我こそしたに思ひそめしか

などおほすは、うしろめたき御兄の心ばへなりかし。

歸らせ給ひてはいと苦しきに、誰も皆やすみ過して、又の日疾く起きさせ給ひて、めづらしき院の有樣を御覽じ渡すに、いと狹うて、はるゝ方なきこゝちせさせ給ふも、見ならはぬ樣にいぶせうぞ御覽ぜらるゝ。今は斯うてこそはと、行末遠く覺えさせ給ふにも、廣うおもしろかりつる殿の内の池、山、木立のけしき、又は見るべきやうもなきぞかし

上の—堀川の北方、源氏宮の母
やゝましげに—惱ましげに。
なほかくまで—狹衣の心
いでや—狹衣の心
立ちも離たず—源氏宮の事が始終心にかゝるならば

しう美しき樣こよなし。殿、大將殿、御几帳の左右をおさへて立ちたまへるに、上の萬につくろひつゝ載せ奉り給ふにも、猶やゝましげにおぼしめして、頓にもえ奉りやらぬを、大將殿帳のそばより少しのぞき給へれば、唐撫子の三重の織物に、同じ色の三重の小袿著させ給ひて、釵子さゝせ給へる元結に、御額髮のうち添ひてなよ〳〵と引かれ行きたるは、いとゞもてはやされて、なまめかしうめでたう見えさせ給ふにも、心まどひは先づして、なほかくまで見なし奉りつるよ、あなくち惜し、と覺ゆるを、神もいかに御覽ずらむ、いでや、かうのみ流石に立ちも離たず覺えば、更にはか〴〵しからじとぞ、自らだにことわられ給ふ。

御車引き出づれば、上も物御覽じて、やがて本院へ渡らせ給へば、又御車よせて奉りぬ。かねて聞きしにたがはず、一條の大路つゆ隙なく、河原まで立ち重りたり。車棧敷のおほきなど、すべて徒歩の人かしらさし出づべうもなきに、かしこく身のならむ樣も知らず、おなじ上にかさなりたる樣いと侘しげなり。さるべきところ〴〵の棧敷の有

みそぢ餘り—「みそ餘り」なるべし、三十二相揃ひたる女を撰び集めたるの心なるべし

心やすく—堀川が是たゞ恥かしからずと安心して

さうかん—金銀泥にて畫きたるをいふとぞ

松にとのみも—「夏にこそ咲きかゝりけれ藤の花松にとのみも思ひける哉」

海部—海邊の樣の畫

沈—沈香

これやいみじかりける—何の是が珍らしかつたのかと

御車—齋院の車

からのか—誤あるべし

のかたち有様、げに年頃みそぢ餘り具したらむを尋ねさせ給へるしるしは、こよなく見ゆれば、心ことに世に聞ゆる透車のすきかげ、心やすく御覽じ渡す。衣の色ぞことに珍しからねど、長き世のためしとおぼしめすにや、松の深緑を、いくつともなくうち重ねたる多さはこちたし。おなじ色のさうかんの表著、藤の浮線綾の唐衣に、「松にとのみも」と縫ひものにしたり。裳は青き海部の浮線綾に沈の岩たてて、黄金のいさごに白かねの波よせて、ひたれる松の深緑の心ばへをぞ縫ひものにしたりけり。わらはは、おなじ色にて、うへの袴、汗衫など、女房の裳唐衣などの同じ心にてぞありける。言葉に書き續けたるはいと見所なう、これやいみじかりけるとて、もどき笑はれぬべけれど、その折車引きつゞけられたりしは、なほ常よりは見所こよなしとぞありし。何色も、いひ續けたるよりは、そめがら清げにあるぞかし。おなじき綾織物、擣物などいへど、清らはことの外に、おなじ者のしわざとも見えずとこそはあれば、かく書き續けたるよりは、見るはめでたくこそはありけめと思ひやるべし。御車はからのか、例よりは小くて、珍

絶々にさしむかふ―稀に面をあはする事もせず

隱れなく―扇にて面を隱すことさへ出來ぬ樣にされたれば

たる、げに如何にめでたかりけむ。狹「近衞づかさの使の、年に一度爲出でたるをだにその日の見物にはそれにまさる事やはある。かばかり挑みかはして爲出でたらむ透車に、なまよろしからむ頭つき、さまかたちにて乘りたらむは、まばゆかりぬべきわざかな」と、今より大將殿の明暮言ひはやし給ふに、若き人々はまめやかに侘びまどふぞ、理なるや。さるべき人々の女どもの、心のまゝにかしづき立てて、親兄などにだに、絶々にさしむかふ事もせず、帳の內、母屋にだに、ちひさき帳を身放たずなど習ひたるは、唯簾上げて、晝なかに一條わたらむだに、いと侘しかりぬべきわざなるを、まして扇などさへ隱れなくのみしなされたれば、まめやかに泣きぬばかりなる氣色どもぞ多かりける

御禊の日にもなりぬれば、つとめてより大殿立ち居急がせ給ひて、堀川「人の上にて見るだに、日のいたう暮るゝは心もとなきに、遲し〳〵」との給へば、常より殊に事ども狹く成りて、出し車ども寄せて載せさせ給ふ。わりなしと思ふ〳〵ゐざり出でたる人々

少しも美しくせんとて衣服を洗濯する也

殿の中—堀川邸

絲毛—絲毛車

あたりて—割當てられて

すを役にして、物見む事をいとなみけり。まして都の内の賤の男は、道大路の行きかひにも、明暮の身のいとなみの苦しげさに添へて、いひ歎き思ひまうくるなり姿は、いかならむとすらむと心もとなし。

殿の中にも、いつしかとこの御營をこそは思しまうけしに、限あれば、はえなき御有樣さう〳〵しき事をば、人々もつれ〴〵に思ひたるに、この折にこそは、物の淸らを盡して、神さびにける樣にはあらず、めづらしう人の見思ひつべからむ樣に、と思しおきつれど、何事も限ある事なれば、白銀黄金をうちかさね、高麗もろこしの錦をたち重ねとも、目なれぬやうはあるまじきぞくち惜しかりける。世の人の、いと事々しう言ひ思ふらむしるしには、いだし車の數など例にはまさりたらむを見よかしとて、やがて女房のさぶらふ限を、引き續くべうぞおぼしおきてける。やむごとなき人々十人ばかりは、女別當などのおなじ絲毛にて、今四十人、わらは八人乘るべき車は、所々にすきとほりて、隱れなうめでたうして參らすべきよし、受領どものあたりて、我も〳〵と心を盡し

㊂賀茂祭の用意、齋院賀茂川原の御祓
本院—齋院の御所
大宮わたり—大宮通り邊
うす大くち—未詳
けいし—桂枝歟
苗代水の—苗代に引く水の事も構はず
川上にさらすを—當日の用意に

ひながら、今日さへ音なくて暮し給ふべきならねば、出で給ふにも、眞木柱はいと顧みがちに思されけり。

年返りぬれば、今年は齋院渡らせ給ふべしとて、本院造り磨かせ給ふに、大宮わたりの賤が垣根まで、心ことに思ひまうけて、おなじ板檜垣などいへど、ほど〳〵につけて用意加へたるは、げに情こよなし。今年の賀茂の祭は、今より樣ことに、世の中ゆすりて思ひ營むは、いかなるべきにか。その日は一條の大路、わたり給ふべききはの高き賤しき家々の內、思ひいそぎたる牛車、隨身、小舍人、雜色の姿も、馬鞍、うす大くち、馬添の裝束飾を、いかで世に珍しく人にすぐれてと思し營むをばさるものにて、さるべき宮々、又人數に少しも我はと思ひ給ふ所には、たちあがる人々は、物見給ふべきいだし車の袖口、わらはべの姿、けいし、葵の飾をさへ、めづらしうと心を盡し給ふさまども、中のしなの程だに、一條の大路にさし出づべき所もなくやと聞ゆるに、遠き田舍の民どもも、苗代水の行末を知らず、早苗引き植うる田子の裳裾どもも、みな川上にさら

居たりける—故姫君が

しひしば—前に狭衣が姫に贈りし歌

夢の面影—昨夜夢に見し姫の面影が目先にちらつきて

おぼしすまされ—心を靜めがたし

知らせ給はで—父母が知らずして

あへなむ—丁度よからん

に、よろづ取拂はれたるを見給へば、常に居たりける柱に物ぞ書かれたりける。

故姫君 頼めこしいづら常磐の森やこれ人だのめなる名にこそありけれ

同 言の葉をなほやたのまむはし鷹のとかへる山はもみぢしぬとも

などぞあるは、かの「しひしば」とありしを忘れざりけると見給ふは、いかゞは哀に思さざらむ。こゝちなど苦しう覺えける折の手まさぐりにや、臥しながら書きたると見えて、下の方に、その文字とも、はか〴〵しう見えぬさまにて、

故姫君 なほたのむ常磐の森のまきばしら忘れなはてそ朽ちはしぬとも

とあるにも、夢の面影さへ立添ひて、更にえぞおぼしすまされざりける。

狭 寄り居けむあともかなしきまきばしら涙浮木になりぞしぬべき

とて、とみにもえ立ちも退き給はぬに、殿より尋ねて奉らせ給へる人々參りて、人々「昨日今宵など、おはしまし所知らせ給はで、夜もすがらおぼし騷がせ給へる事」など申せば、狭「あへなむ。さて懲りさせ給へかし、餘りむづかしう宣はするに」とはつぶやき給

見え渡されて—「見わたされて」なるべし

芳野の山本—前に故姫君のよみし歌

枕は浮きぬべければ涙に

皆如金色云々—法華序品の句

佛だに—初瀬にて普賢菩薩のあらはれし事

誦經—布施をやる事

はる〴〵と見え渡されて、月のみぞ仄に、うつりける雲のはたてまで、殘りなくさやかに澄み渡りたる空のけしき、唯の寢覺だに物心細かりぬべき程なるを、ありつる面影は唯うつゝに覺え給ひて、見まはされ給ふを、人々はみな遠く退きつゝ、いとよく寢たり。獨つく〴〵と空をながめ給ひつゝ、泣く〳〵越ゆらむ死出の山路まで思しやらるゝに、かの芳野の山本恨めしげなりし樣などの、何となくなつかしうをかしかりしも、唯その折の心地し給ひて、

狹　おくれじと契りしものを死出の山みつせ川にや待ちわたるらむ

と思しやるにも、枕は浮きぬべければ、起き給ひて經をぞよみ給ふ。「皆如金色從阿鼻獄」といふわたりを心細げによみ流し給へる、いひ知らず悲しきに、寢たりける人も驚きけるにや、こゝかしこに、鼻うちかむものあり。佛だに現はれ給へりし御聲なれば、人はまして忍び難かりけり。

明けぬれば、所々に誦經などしにつかはして、今日は歸りなむとし給ふ。昨日しつらひ

誰ならむ—今日の佛は一體誰ならん

みづから—狹衣

ありしながらの—故姫君が存生中の通りの姿にて

目もあまり心弱くやとつゝみ給へど、唯うち聞く物語、古き歌などだに、わが思ふすぢなるは、こよなく目とまりて哀なるわざなればなるべし。見奉る限の人々、僧なども、誰ならむ、いと斯ばかり思されたりけるは、けにいと口惜しかりける命の程かな、と見驚かぬ人なし。さまゞゝいとたふとき事どもは多かれど、なかゝゝえまねばねば、いとかひなし。事果てて僧どもなども皆まかでぬれど、みづからは留り給ひて、尼君に逢ひ給ひて、姫君の御有樣など語り給ひて、盡きせずあはれと思したり。入相の鐘の音ほのかに聞えたる夕暮の空の氣色も、所のさま言ひ知らず心細げなるを、すだれ捲上げてつくづくと眺め給ひつゝ、行ひすまし給へるけはひ、いみじうあはれなり。曉近くなりぬらへとおほゆるまで居明したまひて、あまり苦しければ、やがて端つ方にうちまどろみ給むるに、唯ありしながらの樣にて、傍に居てかく言ふ。

冥暗きより暗きにまよふ死出のやまとふにぞかゝる光をも見る

といふ樣のらうたげさも珍しうて、もの言はむと思ふ程に、ふとさめて見あげたれば、

に知らせ奉らじ―「知らせ奉りし」の誤なるべし

かつ見れど―源氏に逢ひても我は此世に在る身とも思はぬに、源氏は相變らず我を思はるゝならん

參りて―源氏の傍へ

㊁狹衣飛鳥井姫君の爲に法會を修す、其夜飛鳥井の舊宅に假寢して姫君を夢見又遺題の歌を見る

常磐の事の果―飛鳥井姫君の忌明の法事

七僧―唄散花などを司る七人の役

讀み給へる―講師が……

に見え奉らじと、聞え知らせ奉らじものを、と恥かしういみじとも世の常なり。御前なる人々の、繪など畫きちらしたる筆ども見ゆるを、とり給ひて、紙のはしに、

狹かつ見れどあるはあるにもあらぬ身を人の人とや思ひなすらむ

手すさびのやうに、片假名に書き給ひて、懷なる猫の頸綱に結びつけて、人少し立退きたるに、狹「あな寢ぎたなや。今は起きて參りね」とおしいで給へれば、聞き知りがほに、外樣へもいかず、參りて睦れまゐらするぞいと羨しきや。

年の果になりては、彼常磐の事の果せさせ給ひけり。御志のしるしには今は何事をかは、とおぼせば、經佛の御飾なべてならず。まことに日の中に佛道なりぬべき樣に思しおきてたり。その日は、いみじう忍びてみづからおはしぬ。講師は山の座主なりけり、請僧は六十人、七僧なども、なべてならぬをぞせさせ給ひける。常の法の詞といへども、思しおきてつる人がらにて、一乘の法文勝るゝわざにや、願文の心ばへ泣く〳〵讀み給へるも、涙流さぬ人なきに、いとゞ大將殿は、直衣の袖もえ引き放ち給はず。さるは人

ぶならね―つまくぬ女は堅るまじ この御有様に―源氏に劣る女を娶る位ならば出家―て仕舞はんと なづさふ―寄り添ふ くね〳〵しく―面倒なつらき思をするよりは 尋ねさせ給ふは―誤あるべし おとなしき御扱を―一品宮が所せうこそ―結局御邪魔なるべし 岩間をくゞる―一品宮とは水も漏さぬ中なれば と戯れたる也 知らせ給はねば―源氏宮が思ひ直りて―源氏に對する戀をやめていつの間にか一品宮とよい中になりしと源氏は思ふならん おなじ様ながら―此願叶はずば出家せねば御目にかゝらじと源氏に言ひたりし

ふ事のなかりけむ、いでや、わが心の、萬にいふかひなく、男々しき心のなくて、親にもひとへに任せられ奉りて、心づからいとかう憂き世にも長らふるぞかし、と思ひつゞくる、身より外につらき人なくて、例の脆き涙のみぞ、理知らぬものなりける。紛らはしに扇をうち鳴らして、猫を、狹「こち〳〵」と宣ふに、寄り來て、らうたげなる聲にてうち啼きつゝなづさふ移香も、身に添へまほしくなつかしければ、袖より隔てなく入れ給へるを、喜びてむつるゝ、いと美しうらうたし。くね〳〵しく侘しき目を見るよりは斯くてこそあるべけれ、とおぼされて、狹「この猫は暫しあづけさせ給へかし。人肌につくるよりは」と宣ふを、宣旨といふ人打笑ひて 宣「今さへはなでふ人肌をば尋ねさせ給ふはと、おとなしき御扱をさへこそせさせ給ふなるに、猫は所せうこそはおぼえ侍らめ」と聞ゆれば、狹「更なりや、岩間をくゞる水だにも漏るまじければ」とて、うち笑ひ給ふものから、いとかゝる心のうちも、今は知らせ給はねば、思ひ直りて、いつしかとあるべかしきゆかり睦をさへして、もてあつかふと思召すらむかし、おなじ様ながらだ

斯うしも—狹衣の月に映ずる程の美しさでも無きに

いとゞしき—餘計に美しく見ゆるなるべし

外樣にも—餘所見する氣にもならず

殘なく—隱れる所もなく差向ふ事の出來し時分

見合せ—狹衣と源氏と顏を

御顏—源氏が

心憂の—狹衣の心

かばかりの事こそ—源氏程の女こそ得難からんが、似た女位は得られそうなもの

まで、ゆる〳〵と引かれ出でたるも、さまことに見ゆるに、御衣の裾にもたまりゆきたる裾の削ぎ末など、繪に畫きたるやうなるも、斯うしもなきを、萬に口惜しき目うつりの、いとゞしきなゝめりかし。いとゞ外樣にも見やられ給はず、つく〴〵とまもり聞え給ふ御心のうち、いと口惜しく、憂き身の宿世思し知るべし。殘なくさし向ひ聞えし折何事思ひけむと、過ぎにし方さへ戀しく思ひ出で給ふに、御懷に寢たりける猫の、起き出でて、はしざまに出づる綱に引かれて、御几帳のかたびらの引き上げられたるより見合せ給ふに、御顏いと赤うなりながら、わざとひき入りなどもし給はず、御扇にまぎらはして少しかたぶき給へる御かんざし、御髮のかゝりより始め、久しう見奉らざりつるけにや、猶樣殊にめでたき御ありさまかなと思ふに、心憂の身の有樣や、などか、いとかばかりの事こそかたからめ、少しもなずらふばかりの、よせ見るまじき、もの思ひ知らず、いはけなかりしそのかみより、何事も斜ならむ人をば見じ、唯この御有樣に劣る宿世あらば、世にもあらじ、と安き空なく思ひくだけし心の中は、など露ばかりも叶

> ㊀堀川大臣狹衣の一品宮に疎きを責む、狹衣逃げて齋院の方に隱る
> おぼし慰み―狹衣が
> 殿がち―狹衣が堀川邸にのみ居る
> 內裏に―帝に聞えては濟まぬと
> 齋院―源氏宮
> 忍ぶもぢずりは―源氏宮に對するさまは
> 御前―源氏宮
> 例の事―ありふれたる事

狹衣物語　卷第三之下

あらぬ所とおぼし慰み給ひし一條の宮にも、若宮のおはしまさねば、隱れ所なくて、若宮にことづけ給ひて、殿がちにのみなり給ふを、內裏に聞かせ給はむこと、いみじう便なき事に、大殿の聞えさせ給へば、大方世になありそと思したると、むづかしければ、齋院に參りて隱れ給へり。常の冬よりも、雪霰がちにて晴間なき空のけしきも、いとど所がらはしめやかに物心細くて、參り給ひぬれば、又何事よりも忍ぶもぢずりは、樣異に亂れまさり給ひぬべし。御前の方を見やり給へば、ちひさき几帳を引きよせ給へれば、はか〴〵しくも見えねど、御衣の袖口などは隱れもなし。蘇枋の御衣どものいと濃きより、薄く匂ひたる上に、唐の浮線綾の、白きやうなる籬の菊の枝ざしより始め、うつろひたるにも、色々に織り浮かされたるも、例の事ぞかし。されど人がらには、げになべてならずあなめでたと見え、御髮の、肩の程よりこぼれ出でたる、御額髮の、袖口

よそひ見せつゝ—故姫君に準じて親みつゝ
過ぎにし人—故姫君
何方ざまにつけても—どの方面の關係につけても、我を除所にする狹衣の心はかはらずと
宮—一品宮
見えむも—狹衣に見らるるも
見奉らせ給はず—死後
見入れさせ—狹衣の行爲に干渉せず
山鳥の樣にて—夫婦かけ離れて

觸れつゝよそひ見せつゝ、なつかしう語らひ給ふを、姫君を思ひ聞ゆる方樣には、いかがはおろかに思ひ聞えむ、過ぎにし人の事なども、いとゞ耳とまり給ふばかり、聞えさする折々などのあるを、忍びあへぬ氣色にて、おなじ心に語らひ給ふを、おのづから氣色見る人は、安からず言ひさゝめくを、何方ざまにつけても、おなじ心なりけりと、宮は心づきなく思召さるれど、かゝるかたの物憎みして見えむもいと恥かしく、わが心の中には事違ひたるべし。唯今日明日にても、女院の見奉らせ給はずなりなむ後にこそは、身をも如何にもなしてめ、と思しとりて、いかにも見入れさせ給ふ事なくて、たゞ明暮行よりほかのことなし。夜もわたらせ給ふ事なければ、唯山鳥の樣にてぞ明し暮し給ひける。

隱蓑—女二宮に忍び入りし事
心おくれたりし—不注意に落し置きたる懷紙
御あひずみ—女二と前齋院と同居の間に
空言など—我が一品宮に關する濡衣を干して吳れる人がなぜ無かりしぞ
おなじくば—同じ濡衣を著るならば、女二宮の爲に落たし
院は—前齋院は
⑨狹衣飛鳥井姫君の緣によりて小宰相に親み、一品宮に疎し
おぼし睦ぶる—狹衣が

日まで見奉る人はなくやはありける、遁れ難かりければこそ、思ひかけざりし濡衣さへ乾しわびて、誰も〳〵かくおぼしなりにしか、過ぎにしかたの隱蓑を、見あらはす人のなかりしこそ、さるはかの心おくれたりしふところ紙のついでは、もて騷がれぬべかりけるものを、よしやそは、然るべき長き世の物思となりぬべかりける宿世にてやみぬとも、この御あひずみの程に、などかは空言などいふ人はなかりけるぞ、と過ぎぬるかた悔しき御癖は、さしもあるまじき事さへ取り返しうち歎かれて

狹　おなじくば著せよなあまの濡衣よそふるうらににぐからずやと

何となくいひ消ち給へるは、人聞き知るべうもあらねど、院は少し心得させ給ふらむ。されど聞き知り顏ならむもつゝましければ、いとゞ奥深うならせ給ひぬるも、飽かずおぼさるべし。

誠かの常磐の尼君の女は、長門のにはあらざりければにや、小宰相とて、心ばへ容などなべての若き人よりは目やすかりければ、昔の友とおぼし睦ぶる方もこよなくて、事に

參り給ひて—狹衣が前齋院へ

かく定まり—狹衣の緣も定り

何のわづらはしく—餘計な事に此方ばかり氣をもむ事はなし

樣にあはぬ—時宜に叶はぬ

思しわくには—何と分別しての事ではなく

餘りならむも—餘りに引込み過ぎたるも惡しからん

いとほしき御心ざま—狹衣の美しき心も知り居る故

さにやと—前齋院にやと

さこそは—以下狹衣の心、強ひて懸想もせざりしが、餘り女二も女三も色氣がなさ過ぎたり

かなる、御かたちなどや如何ならむ、大方の御有樣は、いとあてにけ高きものから、筋ことなる御有樣どもを、など今ぞおぼし寄りける。黄昏時のたど〳〵しき程に參り給ひて、狹「若宮さへうつろはし奉りて、いとゞまぎれ難からむ御徒然を、推しはかり奉りながら、御殿居も、心より外にこそ怠り侍れ」など聞え給ふを、女房達「今はまいて、かく定まり給ひぬるを、何のわづらはしく、われしも心ときめきし顏にやは。有り難き御心ばへを、あまり若々しう、おぼし知らぬさまなるも、かへりて樣にあはぬやうにや。嵯峨の院も、さこそいづれをも聞えさせ給ふめれ」と、集りて聞えさすれど、いかにも思しわくにはあらで、唯世に知らず恥かしげなる人にいかでか、といとつゝましう思されて、わざとは宣はせねど、け近き程に參り給ひつる折々は、げに餘りならむもいかゞと、いとほしき御心ざまも御覽じ知らるれば、ほのかなれど、さにやともり聞ゆる御けはひ、唯入道の宮の同じさまにやと覺ゆるに、ものあはれにおぼし出でられ給ふ。さこそはあながちなる心も遣はざらめ、もて離れたりける御宿世どもかな、心ゆかずながらも、今

たちあかし—篝を束ねたる燈火

（四）若君堀川邸にのみ在り、前齋院の徒然

母宮—狹衣の母

前齋院—女二の妹、嵯峨に住む、若宮の預り人

いかでか—斯う若宮を引留め置くは宜しからず

大人びさせ—若宮が

參り仕うまつり—前齋院へ狹衣が

思ひなき仲らひ—親しき中らひ、夫婦の關係

さてこそ—前齋院と夫婦になるのであつた

どは思ひやるべし。たちあかしの晝よりもあかきに、若宮の御直衣などあざやかにしたてられ給へる、おとなしき御樣のゆゝしさを、誰も〳〵淚を流して見奉るに、大將の御心のうちは、いとゞかき昏され給ふもいま〳〵しく、せきわび給ひぬ。その夜の事も書きつゞけまほしけれど、なか〳〵にもやとて漏しつ。

その後は、若宮をば母宮、見奉らでは片時もいかでかはと、樣惡しきまで御目放ちがたう思ひ聞え給うて、更に返し渡し奉り給はず。前齋院の御つれ〴〵も心苦しう、大將は推しはかり聞えさせ給へば、狹「いかでか」などおぼし宣へど、大殿も、「大人びさせ給ふまに、餘所々々にては、おのづから心より外に、疎にもありぬべし。又いとつれ〴〵なる慰にも」など宣ひて、ゆるし給はねば、いとほしさに、かくて後ぞ、いとねんごろに參り仕うまつり給へば、御後見達も、まめやかに有難かりける御心かなと、嬉しう聞ゆるにつけても、などか、今少し思ひなき中らひにても、見あつかひ聞え給ふまじき、と思ひけり。大將の御心にも、同じうき世の有樣ならば、さてこそあるべかりけれ、こま

うつくしさ—姫君の
おしわたして—一樣に
上は—帝は
大將の御兒生—狹衣の幼時
まとはれて—若宮がすがりて

より御暇なけれど、あまり見入れざらむも人目あやしければ、同じ樣にぞ扱ひもてなし給ひける。その程の有樣思ひやるべし。おとなしうしたてられ給へるうつくしさを見給ふにも、人知れず哀なる御心のうちなり。

若宮は、やがてそのつとめてぞ渡し奉り給ひける。御供には乳母たち二人、女房廿人ぞ參りける。紅どもに、りんだうの表著、菊の唐衣おしわたして著たり。御しつらひなど、なべてならずめでたき事更なりや。よろづよりも若宮の御うつくしさを、上は、餘所に聞き給ひしよりもうつくしう、有りがたう見奉り給ふに、類なきものに思ひ聞え給ふ。大將の御兒生にたがふ所なく似させ給へるぞ、げに前の世より契ありける御中にやと、うつくしう辱く、あはれにおぼさる。大將の出入り給ふに、御指貫の裾にまとはれて、抱かれむとのみし給ふを、いと悲しげに思ひ聞え給へる氣色なども、近くて御覽ずれば、猶如何なりし事ぞとまで思されけり。暮れぬれば、みこ達左右の大臣を始め奉りて、世にある人、高きも下れるも、參らぬ人誰かはあらむ。御前の御しつらひ有樣な

聞き給へる—狭衣と大将との関係を
自ら一人こそ—自分丈は御身と一緒になり一世話もすれど、他の人には迷惑をかけたくなし
院の御方にても—女院の方にても内々に式を擧げてもよからん
ことなしびに—何げなく、下の「と」は衍文なるべし
げにおぼし—以下一品宮の心
今は我しも—斯うなりては自分が世話やくは不穩當なり
引き忍び—内々にて式を擧ぐるは不快ならん
思ひ立ちぬ—思ひ立ちたる上は寧ろ公然にしたがよしと
腰結—儀式の節袴の腰紐を結ぶ役。

と辛うじて言續けて宣はするも、聞き給へるなりけりとおぼせば、あまえて、一序ならずとも、年返りて二月ばかりにて侍りなむ。かうしも見聞ゆれば、自ら一人こそおなじ心に聞えさすれ。外へは、たちまちに、さらずとも侍りなむ」と聞え給ふを、又いかに思ひ給ふにかとおぼせば、返す〴〵もえ宣はで、一品「心もとなげに思ひたるものを、院の御方にても、忍びやかにてもありなむ」と獨ごたせ給へば、狭「さもなどか。わざとだにこそ、院の御前にて、女子は手觸れさぶらひ奉らまほしけれ。かしこにては誰かは」とこそ、ことなしびにと言ひなし給ふに、げにおぼし立ちたる事どももかひなかるべきを、うちつけの便ならずとも、難かるべきならねば、今は我しも思ひあつかふべきにあらず。さこそことなしびに言ひなすとも、いかばかりもてなさまほしからむものを、引き忍びたらむも、なほあぢきなからむ、などおぼせば、院に、内々の事は聞えさせ給はねば、狭「かくまで思ひ立ちぬとならば」など宣はせて、御腰結に、みづからの代にとて、大殿に聞えさせ給へば、渡り給ひてぞ著せ奉り給ひける。大將も若宮の御むかへに、晝

念じ過さむも—我慢して永く夫婦の關係をつゞけるも外聞惡きに

這ふ木數多に—狹衣の愛を分つ處多くなりゆかば、我が出家の本意を遂ぐる事も出來て嬉しかるべし

院にも—女院にも此兒の素性をも言はず

おなじ所にても—同じ處にて此兒にも袴著の祝をさせたし

たちまちに—突然

ゆかしがり—狹衣が此兒を

え聞え給はず—袴著の事を一品宮に言はず

こゝに皆—用意は當方にて調ひたれど

序よく—若君と一所にしたらば

ちに念じ過さむも、いと人惡くおほゆるを、這ふ木數多になりぬれば、なか〳〵思ひし本意のまゝになりて、いかに嬉しからむ、年月に添へては罪のみこそ積らめ、かくて見過しても、何ばかりの目やすかるべきぞ、などおぼしなりて、院にも、かうにこそありけれども聞えさせ給はず、唯、一宮「若宮のついでにおなじ所にても」と聞えさせ給へば女院「ついでならずとも、さばかりの事はこゝにても難くやは。たちまちに、知らぬ人に何かは任せ給はむ」と宣へば、一宮「されど、わざとは事々しう思ひ立つべきにあらぬを、何かは。たゞにてだに、いみじうゆかしがり給ふを、かゝるついでにと思ふにこそあらめ」とて、なほ渡さむと思したれば、女院「さる樣こそは」とて、その御心まうけせさせ給ひけり。大將殿は、ありし後は、煩はしければ又もえ聞え給はず、人知れずくち惜しくおぼしけるに、明日になりてぞ、一品「姫君は今宵や渡し給はむ」と聞え給ふに、日頃さも宣はせざりつれば、狹「俄にはいかでか」と宣へば、一品「こゝに皆思ひまうけたれど、こゝにてはわざと思ひ立たむもうるさきに、げに序よく侍りなむとこそ、院も宣はすれ」

思立ちにし有様—出家
㊆若宮姫君袴著の祝
この姫君も—狭衣の心
又知るべき人—我が外に世話する人は無きか
思ふより—君の外に世話すべき人の有無は君の心に問はゞ明なるべし
聞き給へる—狭衣の心、事情を知居るならん
見ま憂く—一品宮が
げにおなじ心にて—一品宮の心、飛鳥井存命ならば心を合せて姫君袴著の支度もしたからん
渡したらむ—手元に引取りたるからは袴著もしてやるべし

霜月ばかりには、若宮の御袴著の事おほし立ちて、大殿にも急がせ給ふに、この姫君も同じ程にこそあるらめ、とおほせば、この序に著せばやとおほして、宮に、狭「この君はいくつぞ。袴著はまだしきか。さらば若宮の御事、殿のおほし立つが羨ましきに、わたくしの急し侍らばやと思ふを、さかしらにや。又知るべき人は侍らぬか」と宣ふ。いと心づきなしと思して、

姫宮 思ふよりまた思ふべき人やあると心に心とはば知りなむ

とて少しほゝ笑み給へるは、聞き給へるにこそはあらめ、常磐の尼君が、聞えてげるなゝめりかし、と思せど、やがてこれに書きつく。

狭「思ふより又は心のあらばこそとひもとはずも知りて惑はめ

心得ぬ事どもかな」とてやみ給ひぬる氣色、残りおほげに恥しげなるも、いと見ま憂くおほさるれば、げにおなじ心にて、かゝるついでに、いかに著せまほしからむ、唯うちまかせて、さやうに渡したらむついでに、然てもあれかし。これがゆかりにて、あなが

常に渡らせ—狹衣の方へ姫君をやりて
忍ぶの露に—この姫君をのみ力にして
見知らぬさま—夫婦關係の面白からぬをも知らぬ顔をして
この御方—狹衣の方
かゝる人の無き—子の無きがさびし
殿—堀川殿がまだ出來ぬかと催促するが迷惑
例の人の—他人の樣に女狂をしたらば我が子也とて引取方を催促して來る女もあるべきに我は其樣な事も無き故せん方なし
姫君をこそ此子を子の代りにせん
つれなく—知らん顔で
あながちに—一品宮の心
限ありげなる—隱す事多き
いつまでと—「と」は「も」の誤か

きけり。その後は、姫君をも制せさせ給はず、常に渡らせ給ひて、わが御身はありしよりもけに、疎々しくなりまさり給ふ。まれ〳〵見え奉り給ふ宵々も、またいと氣遠くもてなして、いとわりなき事のみまさりゆけど、内裏などの聞きおぼしめさむ事を思すにより、宮のおぼし寄るもしろく、唯この忍ぶの露にかゝりて、見知らぬさまにてぞ過し給ひける。姫君は、いみじうなれ睦び聞え給ひて、唯この御方にのみおはすれば、抱きうつくしみ給ふ。狹「年の積るまゝに、かゝる人の無きこそ徒然なるべけれ。心にまかする事などのやうに、殿などの、今まで見せぬ事とさいなみ給ふこそわりなけれ。まことに持たるまじきにや。こゝかしこ、例の人のやうならましかば、自らかこち出づる人もやあらまし。今はいかゞせむ。姫君をこそ頼み聞ゆべかゞめれ」とつれなく宣ふを、あながちに隱すべき事かは、聞かまほしきにはあらねど、萬に限ありげなる心の程かな、ましていかになどおぼしやらるゝ心の中も恥かしう、いつまでと假初にのみおぼされて、如何樣にして、なほ思立ちにし有樣にもなりにしがな、と思しけり。

扇をさし隠して―姫君が
何とか―我を是から何と呼び給ふぞ
引きたてて―障子を
忘れがたみに―前に狭衣の獨言によみし歌
宮の御乳母子―一品宮の乳母の子
宮の御前―一品宮
さらば―一品宮の心
これに因りて―此兒のある故に我と縁をも結べるならん
侮らはしく―此兒は卑しき者の子ではあれど
生し立てて―此子を
つらき人と―狭衣を
これがゆかりばかりにて―此兒があるばかりで心にもなき夫婦の關係をつゞくるはつまらぬ

う、ありつかぬ心地し侍れど、今よりは慰みぬべうこそ」とて、さし出で給へる様の、いとまばゆければ、扇をさし隠してゐたる様などめやすければ、狭「何とか召す」と宣へば、姫宮「母とこそは」といらへ給へるが、いとうつくしうて、狭「今よりは、さらば母をこそ頼み聞えめ。猶あひおほせ」と敎へ奉りて、引きたてて退き給ひぬ。

「忘れがたみに」とありし御ひとりごとを、宮の御乳母子の中將といふ人、御障子のつらにていとよく聞きけり。宮の御前にこま〴〵と語り聞えさすれば、さらばこの兒は、何がしの少將のと聞きしは、あらざりけるにこそはと、これに因りてこのわたりには尋ね寄りけるにや、いみじう物思ひたる様なるも、この事にこそあンなれ、など心得させ給ふにも、いと侮らはしく思しつるゆかりなれど、唯うつくしかりつる人によりてこそ、徒然なるに、をかしきさまに生し立てて持たらむと、思しかしづきつれ、かくばかり見えま憂くつらき人と思ひつるに、いとゞこれがゆかりばかりにて、心は空ながら見え過ぐさむこそ、などおぼすに、人わろくいとくちをしき身の宿世かなと、いとゞおぼし歎

かげのこ草—飛鳥井姫君
宮の御方—一品宮
渡らせ給はぬ—なぜ此方へ來られぬ
心の隈多げなる人—祕密の多さうな人、狹衣
あけたるなど—此下脱文あるべし、以下は狹衣が姫君を抱き居る所也
今は渡らせ給へ—もう此方へ歸り給へ
聞きつけて—姫君が
去なまほしげに—狹衣の所から去りたげに
この心は—此姫君は我と仲よさそうなれば

人しきわたりに、かゝる事なかりけむ、何ばかり勝れたることも見えざりしかげのこ草の、種をしもとゞめけむよ、など數ならず思し出づるにしも、いとゞ昔の秋のみ戀しくなり給ふ。萬に唯、かやうの方に思ふ事叶はざりける宿世かな、とぞくち惜しきや。涙のごひ隱して、宮の御方に狹「などか渡らせ給はぬ。つれ〴〵に侘びて、をさなき人を語らひてなむ、慰め侍る」と聞えさせ給へど、われもかうの恥かしかりしに、いとゞ向ひにくゝおぼされて渡り給はず。ありつるをさなき人々參りて、斯う〳〵と語り申せば、一品「さばかり心の隈多げなる人に、をさなき人をしも見せつらむよ。いかにして誰が率ていきつるぞ」とて、ものしげに宣はすれば、子供「誰か率て奉らむ。この子どもの騒がしうて、御障子をあけたる」など、乳母かやと聞ゆる人ぞ參りて、乳母「今は渡らせ給へ。人に知られぬ御ありきこそ、あやしう」などおとなふなれば、聞きつけて去なまほしげに思ひたれば、抱き給ひて、聲する方の障子のもとに寄り給ひて、狹「いみじう疎々しう誰もてなし給へど、この心はいと美しう相思しつべかゝめれば、はしたな

思はずに―若々しく一品宮杯が思はれても仕方がない
年頃―行方を失ひし飛鳥井を親しく見るに勝る程の事は、此遺児を見るより外なし
もとよりいとなつかしき―以下飛鳥井腹の様子をいふ
うつし取り―母の様子を其儘
人の侮らはしく―素性知れずしては人も侮るべければ、一品宮に打明けようかしら
何かは―狭衣の心
かく物げなき―母方の卑しきが殘念
人も漏り聞かむに―なぜ人に知れても恥しからぬ女に子を生ます事の無かりしならん

む」と宣へば、うちうなづき給へるなども、今より様ことにらうたげなる事などは、唯その人とおぼゆべきなゝめりと、ゆゝしきまで見え給ふを、思はずにおぼさるゝ御あたりも如何はせむ、年頃行方もなく思ひなしつる人を、かばかり見るに勝ることは何事かはあらむ、斯からざらましかば、いかでかは見まし、今は唯この人に慰めて長らふべきにや、とこよなく思ひ慰められ給ひけり。諸共に添ひ臥し給ひて、狭「雛もち給へりや。恥ぢ給はでこなたに遊び給はば、いみじく作りて奉りてむかし。若宮の多く持ち給へる遊びものども取りて奉らむ」など宣ひて、様々をかしき繪など畫きちらし給ひて奉り給へる。もとよりいとなつかしき御心にて、うち笑ひ、ものなど宣へるも、あさましきまでうつし取り給へるは、なか〳〵なる心まどひなり。人の侮らはしく思ふらむに、かくとや宮に聞えてまし、と思せど、物語も打解けては聞えにくげなる御有様なれば、何かは、さらずとも、今は我が斯くてあれば、いとよくもてなしてむ と思す。女なるしも、かく物げなき様なるこそくちをしけれ、などか今少し、人も漏り聞かむに人

今少し—帝よりも賤しき人
宮の御前の—此人は一品宮の夫ぢやから其方の父君ぢや
さし出て—狹衣が
姫君—飛鳥井腹
その人—飛鳥井姫君の樣に思はれて
いとあやしう—姫が
いかにぞや—どういふ譯かと思へる
いとかう似たる—子は親に似るものぢやわいと
放ち給はで—我は其方が親しむべき者ぞ

帝には見え奉らずやありし。ましてこれは今少し下衆にてこそあゝなれ」といへば又、丑「宮の御前の御男ぞ。されば姫君の御父にこそあゝなれ」とさかしく言ひて、「いざ行きてのぞかむ。かたちのめでたくおはするぞ。されば姉は、見え奉るこそ死ぬばかりはづかしけれと言ふや」など言ひて、拔足に寄り來て、障子をはなちていさゝか開くるを、此方より廣く開けてさし出でたまへるに、ある限あきれて立てる氣色どもいとをかし。姫君をかき抱きて此方に入り給ひぬ。ちかくて見給ふに、たゞその人と見給ふに、涙こぼれぬ。

狹　忍ぶ草見るに心はなぐさまで忘れがたみに漏る涙かな

とて、顏に袖をおしあてて、いみじう泣き給ふを、いとあやしう恥かしと思ひたるものから、打泣きなどもし給はず、顏も赤うなり、汗もうちあえて、いかにぞや思ひ給へるけはひなど、かばかりの程ながら、いとかう似たるものなりけりと、あはれなる事限なし。狹「放ち給はでおぼすべき人ぞ。こなたに常に渡り給へ。をかしき遊び物ども奉ら

八重たつ山の—「白雲の八重たつ山の櫻花散りくる時や花と見ゆらん」
例の姫宮—飛鳥井腹
院の御方—女院の方
のぞき給へば—狹衣が
若宮の御程—女二腹の若宮位の年輩
夜なよなの月影—月あかりに見し飛鳥井の姫君の面影
宮の御前—一品宮
あるぞとよ—と」一つ衍
唯おはせませ—憚はずに行き給へ

のかに見おこせ給へる目尻、らうらうしげに煩はし。廿一あなうたてや。いと輕々しき事をも知らせ給へるかな。八重立つ山のなどこそいひ侍るなれ。あな心憂」など、うちなよび給へるかたちけはひなどは、心あらむ女、高きもみじかきも、いかゞは見知り聞え給はざらむ

例の姫宮は院の御方におはします。つれづれなる晝つかた、をさなき人々の音のせし障子のもとに寄り給ひて、ほのかなる穴よりのぞき給へば、八つ九つ十ばかりなる、又それよりもをさなきなど、次々にていと數多がなかに、蘇枋の織物の細長著て、髮は肩の程よりも過ぎて、若宮の御程なるやそれならむと見ゆるに、物言ひてうち笑みなどしたる口つきの愛敬、いとかをり美しけれど、若宮の御けだかさには劣りたるまみの、いとわらゝかにてらうたげなるは、唯かの夜なよなの月影に變らざりけりと見るに、涙もこぼれて、細き穴よりいとゞ見えずなりぬ。飛鳥井姫君「まろは宮の御前に參らばや。なでふ知らぬ人のあるぞとよ」とうちむづかり給へば、十ばかりなる兒の、「唯おはせませかし

余りおとなしく―余り老人じみて居る
あなあぢきなの―一品宮の心
心とげなる―神經質らしき一品宮の様子に
何しに―狹衣の心
然にや―飛鳥井腹の子にや
然までは―それ程にはまだ馴染まぬ
程ある事かは―小供はぢきに馴染むもの
馴れぬるは―「馴れぬるは浮世なればや須磨のあまの鹽燒衣間遠なるらん」

おなじ色とも見えぬは、くちをしき事かな、と心の中におぼし續くるをも、人聞かざりし所にて心に任せたりし獨言さへ、口ふたがりぬるを、なほいと侘しう思ひあまり給ひて、狹「冬深き霜枯の雪のあしたこそ、この色はをかしけれ。この頃は餘りおとなしくこそありけれ」と宣ふを、あなあぢきなの事どもやと耳とまり給ひて、引きかづかせ給ひぬるもいとほしく、心とげなる御氣色に、何しに聞えつらむと、なほ煩はしければいとゞ言少にて、つく〴〵とながめ臥し給へる御心のうち、いと物すさまじ。女院のおはします方に、幼き人々のけはひどもして、走り遊びなどするを、然にやと耳とゞまりて聞き給ふもゆかしければ、宮に、狹「をさなき人のものし給ふと聞き侍りしは、など見え給はぬ。この足音はそれにや。つれ〴〵なるに、こなたに渡し給へ」と宣へば、一品「いつの程にか然までは」と答へ給ふ。狹「幼き人は必ず程ある事かは。御心ならひに疎々しくもてなさせ給ふめり。如何なるもをさなき人のゆかしく侍るを、唯見せ給へ」と聞え給へば、一品「いさや、馴れぬるは悔しきとかや聞けば」とて、扇のそばよりまれ〳〵ほ

㊅狹衣一品宮に行きて飛鳥井腹の姫君を見る、一品宮姫君が狹衣の實子なるを悟る、夫婦の中益疎し
まかで給へる—狹衣が
女宮—一品宮
ひきあらはし—衣を引き除けて顏をあらはさしむる也

晝つ方、内裏よりまかで給へるに、一品の宮に參り給へれば、辛うじて女宮こなたにおはしましけり。うちそばみて臥し給へるを、まづさし寄りて、狹「あなめづらし。己が妻と聞えさせむぞなめげにや」とて、打笑み給へるにほひも愛敬も、あたり苦しければにや、いとゞ顏を隱してそむかせ給へば、狹「おないぶせのわざや。時々は内外はゆるさせ給へ」とて、例ならずひきあらはし聞え給へば、げに御年もさばかりにこそと見えて、痩々にあてやかにて、まみいと恥かしげに、らう〳〵しく淸げにぞおはしける。御髮のかゝりたる程、さばらかに淸らにて、たけ三尺ばかりにや餘り給ひつらむと見ゆる、末など細らせ給へり。香染の御衣どもに、青き濃き薄きわれもかうの織物奉りたるも、いとゞにほひなく、すさまじき心地したるにも、ありし雪のあしたに、齋院の、枯野がさね奉りし御寢くたれ姿ぞ思ひ出でられ給ふ。花やかなる色合よりも珍しうも見えしかなと、まづ思ひ出でられ給ふ。

狹　武藏野の霜枯に見しわれもかう秋しもおとる匂なりけり

見ま憂く—狭衣をつらく思ひて鬱々たる中に

心づくろひ—心を引締め居ること

山のあなたの—「三吉野の山のあなたに宿もがな世の憂き時の隠れがにせん」

家居も出立ち—誤あるべし

寄すれば—「白波の寄すればなびく蘆の根のうき世の中を見るが悲しさ」

殿の一つ心に—堀川と一所になりて狭衣を責むる事はせず

思ひ出で—狭衣がありし様にてや—先の様にして再び天稚御子の下り來るや否やを試みんかと

誦經を人知れず—誤脱あるべし

聞え給はず、唯かしこまり從ひ聞えたる樣にて、つれ〴〵なる折々は、をかしき人々の數多さぶらふを召し出でて、琴琵琶彈きあはせて遊び給ふ。さてやがて夜などあかし給ふを、かたはらいたくわりなしと思ふ人もあるべし。女宮も、限なくあてなる御心といへども、さきの世より結ぶの神のしおき給へる御契なればにや、かる〴〵しき御名を流し給へる始より、見ま憂くつらき人と、おぼし結ぼほるゝ程に、いとゞ中の疎くのみなりまさらせ給へど、見知り顏にも恨み聞え給はず。心づくろひもあまり苦しき折は、今日今日とのみ、山のあなたの家居も出立ち給へど、明暮他事なき御祈のしるしにや心は空ながらも長らへ給ふまゝに、唯、狭「寄すればなびく蘆の根」とのみ言ぐさになり給へるを、母宮は御目にかけて、いとゆゝしくうしろめたく思さるれば、殿の一つ心に、あながちに聞え給はざりけり。ありし天稚御子におくれ給ひけむ悔しさも、この頃ぞ思ひ出で給ふ。ありし樣にてや試みましともおぼえ給ひけり。普賢の御光も忘れ難きを、いかでとくかの誦經を人知れずおぼしけり。

ぬにしても、女二宮をなぜ他人にして仕舞ひしならん
け近き程の―一度近づきたる女には思出も多きものと見えて
年頃の本意―出家の望
殿の御しつらひも―結婚後も自分の室も侍女も總て從來の儘にし置きて
とまりなど―自邸に
心の盡なる―我儘に振舞ふべき年輩に非ず
悔しとおぼす―父が後悔する時あるべし、出家の望あるをいふ
せめてむづかしき―差迫りてむしやくしやする
のどかにおはする―狹衣が一品宮にゆつくりして居る
なほとも―猶來給へと強ひて狹衣が呼びもせず

むる人もやと苦しきに、心安く泣き暮しつる來し方いと戀しく、いつまでいと斯うのみ思ひて過さむとすらむと、さすがに行末とほき心地ぞし給ひける。かへす〳〵も、いと侘しうおぼされける年頃の本意遂げつべきなゝめりと、今朝の間に多くの事を思ひつゞけて、かたはらに臥し給へるも、いとすさまじげなり。

日頃の過ぐる儘には、人目もえつゝみあふまじく、有り經べきこゝちもし給はねば、殿の御しつらひも、なほさながらおかせ給ひて、さぶらふ人々もおなじ樣にて、夜も常にとまりなどし給ふを、殿は、「いとあるまじき事なり。たとひ心にあはずとも、むげにいはけなく、心の儘なるべき心つかふべき程にもおはせず」など むづからせ給へば、狹「いでや さは思ひし事ぞかし。いつまで斯くさいなまれむとすらむ。悔しとおぼす折もありなむかし」と、せめてむづかしき折々はうちむづかり給ひて、いと近き一條の宮に隱れゐて慰め給ひにける。まれ〳〵のどかにおはする折も、殊の外に若くめでたき御樣の恥かしさに思しつゝみて、女宮は更に晝はわたり給はず、恥ぢ聞え給ふを、「なほ」とも

宮は｜一品宮は　いたうもあらはし｜狭衣が強ひて容貌を顔はさんともせず　かねては｜結婚前の狭衣の了簡は　されど｜どうせ仕方がないから此結婚は飛鳥井腹の子を手近に見られるのを取得にして過すばかりと思ひ｜此下脱文あるべし　さばかりあてに｜女二宮の容色をいふ　御色様｜「色」は「有」を草體より誤れるなるべし　室の八島｜源氏宮　理ぞかし｜一品宮の見劣りするも道理　垣ほに生ふる｜「山がつの垣ほに生ふる撫子に思ひよそへぬ時の間ぞなき」　いとさばかりの｜源氏宮を手に入れる事は出来

覚えつるを、あたり苦しきまで光りかゞやくやうに見え給へば、さぶらふ人々はいとわりなく、顔の置かむ方なき心地するに、まいて宮は、こよなき御衰の程をおぼし知れば、唯御衣にまとはれて臥し暮らさせ給ふを、いたうもあらはし聞え給はず、夜な〱の御手あたりには違はずやと、恥かしげなる尻目に、時々見奉り給ひつゝ、かねては、されど如何はせむ、忍草を近くて見むを取所にて、思はずなる世をも過すばかりと思ひその慰もまた見給はぬほどなればにや　かなはざりける世の中をつらう心憂くぞおぼえ給ふ。さばかりあかぬ所なく、らうたげに美しかりし御色様をだに、なほ室の八島には立ち並び給はざらむと、切におとしめ思ひやり聞え給ひし御目のならひに、理ぞかしと、まづうち思ひ出でられさせ給ふも、いとわびしうて、「垣ほに生ふる」とぞ言はれ給ひぬべき。いとさばかりの宿世こそ難からめ、などこの嵯峨野の花は、餘所の物になしはて聞えけむ。何事かは斜にいでやゝと思ふ事のありし、と思ひ出でられ給ふにも、さはいへどけ近き程のあはれは、こよなく忍びどころ多かるにや、涙もこほれぬるを、見咎

しがらみ—「秋萩をしがらみふせて鳴く鹿の目には見えずて音のさやけさ」

御返いかならむ—狹衣の心

げになか〳〵—狹衣の心

宮—狹衣の母宮

忌みもこそ—白紙の返事は忌はしきものに思へる也

ことになきわざ—變つた仕方

三日の夜の事—婚禮後三日目の祝

心のどかにて—狹衣がゆるりと一品宮に居るに

らぬを、御几帳の内にさし入れ給ひて、母「なほ〳〵」と聞えさせ給へば思しわびて、ただ引結びておかせ給へるを包みて出させ給ひぬ。御使には、例の事なれば、世の常ならぬ女の裝束に、細長などにこそはあらめ。しがらみかくるさを鹿の心地して御前に參りたるもいとをかしくて、思ふさまなる御心どもなり。御返いかならむと、これさへ見劣りせむと侘しかりぬべければ、とみにも開け給はぬを、いと心もとなしと、母宮思したれば、ひろげ給へるに、物も書かれざりけり。古代の懸想文の返事は、伊勢がかゝる事をしける、げになか〳〵ならむよりはいとよしかしと、これにてぞ思ひ勝し聞えさせ給ひける。されど、「あなおぼつかな」とて、うち置き給へるを、宮は、「忌みもこそすれ、ことになきわざもし給へるかな」とて、ものしげに思したり。

三日の夜の事、例の事なれば思ひやるべし。さばかりの御中におぼし急がむことの、何事も斜ならむやは。四日のつとめては、心のどかにてものし給ふを、男の御有樣ぞいとまばゆかりける。唯みすの外にて見奉るだに恥かしく、いかなる人、彼に見え奉らむと

まことに—狹衣の心、女二宮と文情の絶えざりし常時に取つてかへしたく
今日の御使—一品宮への後朝の文の使
ことなしび—何げなき素振
院—一條院女院一品宮の母
思ひかけざりし—かく冷淡に狹衣より取扱はるるは
かばかり聞えさせ—狹衣の文が通り一遍の挨拶だけなるに、此方の返事のみが度外に熱心なるも、醜ければ形だけの返事をし給へ
いはけなからぬ—一品宮は年とりたる丈に

狹衣 故里は淺茅が原となりはてて蟲のね繁き秋にやあらまし

今こそ嬉しう。

と、あるを見給ひて、まことにありしながらの御身にはなさまほしう、思ひこがれ給ふ程に、秋の日もはかなう暮れにけり。

殿より、「今日の御使は、いかなれば今までは奉り給はぬぞ」と、聞えさせ給ふも聞きにくければ、渡り給ひぬ。御使は、内裏へも殿上人の數にて候ふ左衞門の權佐といふをぞ奉り給ひける。

狹 まだ知らぬ曉露におきわびて八重たつ霧にまよひぬるかな

などやうにことなしびならむかし。院は、めでたき書樣などを御覽ずるにも、思ひかけざりし事かなと、なほ御胸つぶるべし。母女院「この御返は、かばかり聞えさせ給はむに、さだ過ぎたらむはかたはなるべければなむ、殊更ばかり」と聞え給へば、なか〳〵いはけなからぬ御程に、萬いとつゝましげに、いとほしき御氣色なれど、筆紙などなべてな

思ひきや—葎の門は女二宮、草の枕は一品宮
かやうにも—嵯峨院の御前へも披露する様に豫め狹衣が用意したるにやと
胸落ち居ぬ—すけが
今朝は—嵯峨院の心
なりたる人—生れ出でたる人、狹衣をいふ
耻かしう—女二宮が
見苦しうや—我如きものの書くは見苦しかるべし
御みづから—嵯峨院が

のみ、何事もねび行くこそ、餘りゆゝしけれ」と、めでさせ給ひて、讀ませ給ふを聞けば

狹思ひきや葎のかどを行き過ぎて草の枕にたび寢せむとは

とばかりありけるは、かやうにも取出でよと　おぼしけるにやと聞くも、なほ心ある人の御しわざはかゝるぞかしと、胸落ち居ぬ。今朝は他事思ひ紛はしたりつらむものを如何ばかり疾く急ぎ起きて書きつるならむと見ゆる心の、たゞなるよりはをかしう思されて、嵯峨「はかなき事につけても人に情を見せ、哀をかけられむと、なりたる人なりけりや。かく急ぎものしつらむものを」ともてはやさせ給ひて、嵯峨「この御返事は、珍しげなき内侍が言ひたらむよりは、今少し心を動かすばかり、御手づから宣はせよ。何事も折からになむ侍る」とて　御硯などまかなひ聞えさせ給へど、今朝しも思ひ知り顏に見せむも恥かしうおぼしやらる。院はさも思したどらで　心強きやうに思しめしたれど、女二「かやうにをかしき程の事は、見苦しうや」とて聽かせ給はねば、聞え煩はせ給うて、御みづから書かせ給ふ。

今朝のにやー一品宮へ今朝贈るべき後朝の文をちんかと思へど女二宮への文なるべし

まづ急がれつらむもー一品宮への後朝の文をさしおきて、此方への分を急ぎたるも興あり

こまかなるー若し此文に、院などに見られて恐き委細の事が書いてありては大變と

朝のにやと見れど、嵯峨の院へなるべし。

入道の宮は、御持佛堂の妻戸押開けさせ給ひて、峰の朝霧の晴間なきをながめやらせ給ひて行はせ給ふに、院も後夜の御念佛のついでには、必ず渡らせ給へば、阿彌陀の大咒讀ませ給へるいと尊く聞ゆる。御前の花ども露に亂れ合ひたるなどを、人も疾くおきてつくろひなどするに、中門のかたに人のけはひのするを見やれば、何の尉などにやあらむ、太刀佩きたる人の、こゝかしこさし覗きつゝ人案内すると見ゆれば、御簾など下して問はすれば、使「大將殿の御使、内侍のすけの御局に案内し侍る」といふを、院も聞かせ給ひて、嵯峨「思ひかけずをかしき程の使かな。よべは一品の宮に參ると聞きしを、まづ急がれつらむもをかしうこそ」とて、やがて召入るゝを、すけ今ぞ聞きつけて、こまかなる事もやとわびしければ、惑ひ出でて、局の方より尋ぬれば、「早く御前に召しつれば參らせつ」といふを、胸つぶれて聞き居たるに、院の御手づから引きあけさせ給ひて、嵯峨「見る度ごと、さもめでたうなりゆく手かな。あやしうこの世の人とはおぼえず

如何樣にして—狹衣の心
うきはためしも—女二宮の書きよごしの歌
世はいと—狹衣の心
何事を飽かずと—女二宮の何處が不足で
むかはりぬる—報いられたる
たが玉章を—「秋風に初雁がねぞ聞ゆなる誰が玉章をかけて來つらん」
せいたいの—朗詠、雁「碧玉裝箏斜立柱、靑苔色紙數行書」
聞かせばや—女二宮に我が泣く音を聞かせたしと也

き奉り、思ひやりしに違はず。如何樣にしてあかし暮さむと、獨寢のあかし難かりつるのみ戀しくて、「うきはためしも」とありし御手習の、心にかゝりて思ひ出でられ給うて、枕の濡れぬるぞゆゝしきや。世はいとあり難うこそありけれ、思ふ事一つによりて、何事を飽かずと思ひ聞えて、つらきものに思ひはてられ奉りて、すぎ給ひけむ、その報は必ずわが身にありなむと思ひつゝ、唯今宵の内にむかはりぬる心地し給ふ。

惱ましきにことつけて、いと夜深く出で給ふ。一條の宮におはしぬ。まだ夜深うて起きたる人もなければ、格子を一間手づからあけ給ひて、やがてながめ臥し給へるに、雁の數多列ねて鳴き渡るは、狹「たが玉章を」とひとりごちて、狹「せいたいの紙の色紙」と、誦じ給へる御聲など、げに帝の御妹と言ふとも、世の常ならむは飽かずおほされむも理なる御樣なり。

藤　聞かせばや常世はなれし雁がねの思の外に戀ひてなく音を

など獨ごち給ふを、聞く人だになきぞいとかひなき。硯引きよせて御文書き給ふを、今

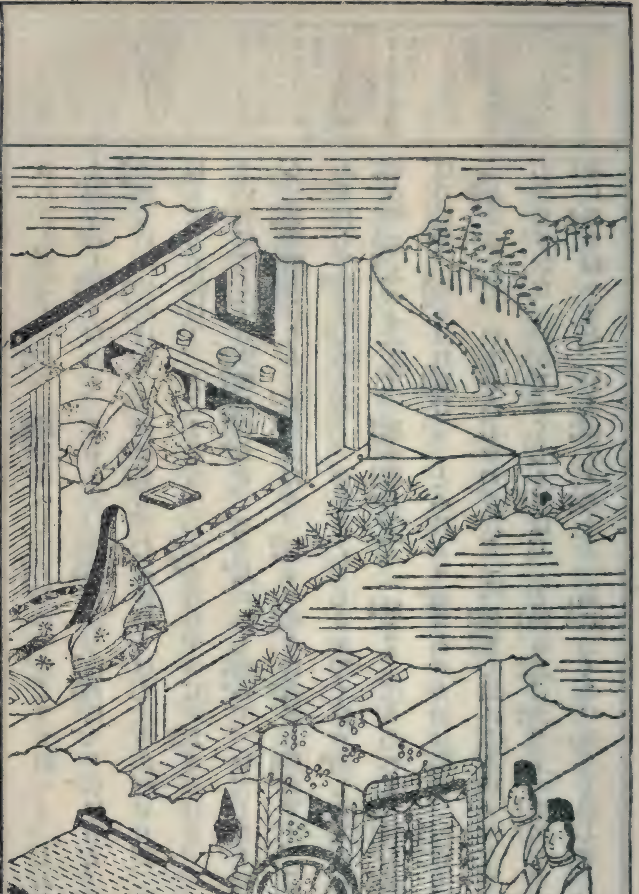
旅所―一品宮方をいふ
斯うまで―母宮の心、斯く泣狹衣のいやがるものを
歎く〲出で―狹衣が
つく〲と眺めて―母宮が
斯うのみ―狹衣の御心が斯樣では一品宮がお可愛そうなり
蘆火たく屋の―蘆火たく屋の物語といふ小說中の事なるべし
少將も―右の物語中の人物
物語にてだに―母宮の心
今はさばかりに―いよ〳〵今夜結婚と差迫りたるに
宮の御有樣―一品宮方の有樣ら

もまことに惱ましきかな。旅所にて斯う苦しくばいかゞせむ」とて、まみなどもいたう泣き給へりと見ゆるを、母宮はいと心苦しう、斯うまで思したる事を、我さへ何しにあながちに聞えつらむ、と胸ふたがりて思さるれど、今宵になりては、實にすべき方もなければ、歎く〳〵出で給ひぬる後に、火をつく〲と眺めて、人やりならずうしろめたう思しやりたり。御前なりつる人々も、女房「いとほしかりつる御氣色かな。男の御身も、え心にまかせ給はぬものなりけり。斯うのみ思したらば、女宮の御爲こそ心苦しけれ。何の物語ぞや。かゝる事のあるよ」といへば、女房「それのみぞ多かる。蘆火たく屋の親の心こそ憎けれ。少將も餘りなれども、男親に從ひたるぞとよ」などいふを、母宮聞き給ひて、物語にてだに、さばかり心づきなき事を、今はさばかりになりぬる御有樣を、いとかく切に思ひ歎かするも、人はいかに思ふらむ、など思しけり。待ち聞え給へる宮の御有樣、世の常ならむやは。三十歳にも餘らせ給ひぬれば、おとなしう、飽かぬところなく、ねびとゝのほらせ給ひて、恥かしげにけだかう心にくき御有樣など、唯ほの見聞

人の御爲も―一品宮の爲にも
㊄狹衣一品宮を娶る、女二宮を戀ひて一品宮に冷淡なり、父母の憂慮
その夜―婚儀の夜
時なりぬ―時刻になれり
心もほれ惑ひて―狹衣が
げにいと―狹衣の心
御前に―父の

るわざもがなと、多くの願をさへぞ、人知れず立てさせ給へど、しるしも無くてその程と聞く日も近うなれど、さりとて、此事により山林に入りにけりと、言ひ流されむ世の音聞もいと物狂ほし、人の御爲も、むげにいとほしかりぬべければ、ひたすら思ふまゝにもえなり給はで、まことにうつし心もなきやうにぞ思されける。

その夜になりて、大殿母宮など、立ち居おぼし營みて、いだし奉らせ給ふ樣思ひやるべし。常の御匂ひも人に似給はぬを、晝より樣々の香ども取出でて、これはかれはと伏籠あまたして焚きしめらるゝ、おどろ〳〵しきまでくゆり滿ちたるを、「いづら、これをや、彼をや奉るべき」とて、數多取出でて、「時なりぬ」とあれど、魂も眞にあくがれ出でにけるにや、心もほれ惑ひて、とみにもえ起きあがり給はねば、殿渡り給ひて、堀川「いかに思さるゝぞ。いといみじきわざかな」と、經營し給ふさまのわりなきに、げにいと淺ましきわざかな、いかでかくしも思はじ、と萬に思ひ念じて、裝束など形のやうにして御前に參り給へるを、いと嬉しと思して、萬につくろひ立てて出し奉らせ給へど、狹「心地



下荻の―我が其昔憂きに身もよもあらざりし當時君は訪はんとじせざりしならずや

うしろめたき―すけの心

いとほしく宣へる―狹衣が

面隱にせむ―此破棄てを狹衣に與へて、あはす顏のない氣の毒さを紛らはさん

殿より―堀川より

遁るゝわざ―一品宮との結婚を逃るゝ手段

「起き臥しわぶる」とある所に、

女二 下荻の露きえ侘し夜な〳〵もとふべきものと待たれやはせし

女二 憂き身には秋も知らるゝ荻原やすゑ越すかぜの音ならねども

など、おなじ上に書きけがし給ひて、細やかに破りて、すけの參りたるに、「捨てよ」とて賜はせたるを、かくれに持て行きて見れば、物書かせ給ひたりけりと見るに、うしろめたき樣にはありとも、いとほしく宣へるに、これを面隱にせむと思ひて、

すけ かゝる物をなむ思ひかけぬ所にて見つけて侍りつるを、奉るもおぼろけならぬ御志に侍る。さば今は思し慰めよ。

など聞えさせたり。一條の宮には、殿より、「今日よき日なり。一品の宮に御文奉り給へ」と宣へど、今朝のまゝに眺め入り給ひて、佐の許より如何いはむと待ち給ふに、辛うじて、かく破反故をゑ給ひて、切に續ぎつゝ見つゞけ給へる心地、げに今少し御心のうち亂れまさりて、引き被きてぞ泣き臥し給ひける。此後はいとゞ如何樣にして遁る

少しづつ聞えさせて—すけが女二に申上げて
院の御前—嵯峨院
この御事—狹衣が末々まで若宮を世話すべき樣の仰もあれば
などかは殊の外に—若宮の事に關しての音信とすれば、狹衣の文を取次ぎても格別不思議もあるまじと思ひての事
宮—女二宮
末越す風—狹衣の一品宮に對する仕方は過去の我に對する仕方に似たりと
夢かとよ—我身の憂さは例無き事と思ふに、又それに似たる例を見る事よ

唯御顔の色いとほしげにて、御覽ずる樣もなけれど、夜もすがら宣ひつる事ども、思したりつる樣など、所々を少しづつ聞えさせて、若宮の御うつくしさに、よろづを思ひ慰め給ふさま、あはれも淺からず聞えさせて、すけ「御返事見ずば世にもあらじ、など侍りつるを、前々も聞えさせ出でて、かやうにも傳へほのめかし申すも、あるまじき樣に、かたはらいたく、返す〳〵も思ひ給へ知りながら、院の御前にも、流石にこの御事をば、行末までさし放ちてはあるまじき樣に思召し宣すめれば、若宮の御方樣にことよせては、などかは殊の外にと思ひ給へ侍りてなむ。今は如何樣にも、それによるべき御事ならねば、心やすく」など申せば、いとど御顔の色移ろひまさりて、寄り臥させ給ひぬれば、「この御かへり、なほ」と聞えさせむもかたはらいたくて立ちぬ。宮つく〳〵と思し續くる事多かる中にも、この「末越す風」のけしきは、過ぎにし其頃もかやうにこそはと、少し御目の止らぬにしもあらで、筆のついでのすさびに、この御文のかたはらに、

女二　夢かとよ見しにも似たるつらさかな憂きは例もあらじと思ふに

げに袖にはたまらぬ—「つゝめども袖にたまらぬ白露は人を見ぬ目の涙なりけり」
細やかなる—細細と多き文言の末文に
折れかへり—今迄歎きくらしたる末終に心にもあらず一品宮を娶る我心を察してくれよかし
これればかりを—此文の返事をのみ御身の我に對する厚意のしると思ふべし
御堂におはしませば—女二宮が
取出でて—狹衣の文を
今更に—女二宮の心

あげ給へるに、御前近き透垣のつらなる荻の葉の露の、いたう亂れて折れかへりたるを吹きこす凩に、はら〳〵と亂れ落つる露の白玉、げに袖にはたまらぬと思されて、とばかりながめ入りて、押拭ひつゝ、えぞ書きもやり給はぬ。細やかなる端つ方に、

狹 此心は聞かせ給ふ事も侍らむものを、などか、

折れかへりおきふしわぶるした荻の末越す風を人のとへかし

などやうにて、狹「この御返、露も見せ給はずば、苦しう思さずとも、又對面せじ。唯これればかりをなむ御志に見るべき」など宣ふを、すけ「いと侘しきわざかな。さらばこれや限に侍るべからむ」と、侘ぶ〳〵車に乘りぬ。

嵯峨にはいと疾く參りたれど、後夜起の御行のまゝに御堂におはしませば、かひなきまでもえ御覽ぜさせぬに、晝つ方になりて、齋宮より奉らせ給へる御返聞えさせ給ふとて、御硯召寄せたるついでに、取出でてひろげて打置きたり。今更にかゝる物の常に見ゆるを、人もあらば如何にと、いみじう思召さるれば、さわやかに物もえ宣はせねば

し方に侍れば、今は何か、返事もかひ侍らじものから」と見るまゝの事を聞ゆれば、狹「あな心憂の御物いひや。方々に、むげに言ふかひなき心の程とこそ思ひ侍れ。それもげに理なりや。げにさこそ思し憚らるゝ御樣なれど、いとさまで收めやらぬ心の程と見給ふらむこそ恥かしけれ。おろかにて見放ち聞ゆべくも思はざりしかども、いとかく生けるわが身といひ顏なりける宿世にてありける事も、自らの罪に、われさへ常になし給ふは心憂きなり」とて、いとつらしと思したれば、すけ「いやで、ことの外に、たど〳〵しげに聞え侍りし關の戸ざしも、しるべなくて、たどらぬ人も侍りければ、いとうしろめたう。まめやかに、過ぎにし方いと斯ばかりなる御心ならましかば、如何にめやすく侍らまし」といへば、いたくまめだちて、狹「斯くな常に言ひむかへなし給うそ。時々はわれだに哀と宣へ。昔も、心には罪ありきとも覺えざりき。唯物を思ふべかりける契のみこそは、自らの過なりけれ」など、夜もすがら打もまどろまず、歎きあかしたまひて、やがて嵯峨の院へ贈り給ふとて、御文書き給ふに、まだいと暗ければ、御簾を少し捲き

言ふかひなき心—中納言のすけの心
げにさこそ—左樣に遠慮せらるゝも尤の次第なれど
收めやらぬ心の程—あきらめのつかぬ我心と
おろかにて—大抵では思切らぬ積なりしかど
生けるわが身と—「逢ひ見んと思ふばかりを命にて生ける我身ぞ賴もしげなき」
自らの罪に—我ばかり惡き樣に御身迄が言ふがつらし
言ひむかへ—反對
われだに—せめて汝でも
嵯峨の院へ—女二宮へ

あさましく—女二は方外に心深くおはしますあきらめ侍りしかば—「ば」は衍文なるべし
琴の音より—狹衣の心
斯くても—獨身にても
あるまじき事—今一度の御對面もけしからぬ事と否定すべき御仲とは思はねどはらふべき—誤あるべし
ゆくりなくは—不意に御案内は決して出來ぬ
有難く—よく思ひ切り給ひし事よと思ひし過去の關係なれば

事も侍らばこそあらめ。よき人と申すなかにも、あさましくおはしますなり。されどはかなき御手習にこそは、御心の中をも見奉りあきらめ侍りしかば、今はたゞ佛に向ひ奉らせ給うてのみ暮させ給へば、世の中のよしなし物語も、御前にて申す人も侍らず」—など語るも、げにかの見奉りそめし夜の事どもなど思ひ出でられ給ひて、琴の音より外のさしいらへ無かりしぞかし。あるべきかぎり美しうめでたかりし御有樣けはひなど唯今の心地して、いふかひなく悲しく思さる。いと斯くのみ物のおぼゆれば、狹「よし見給へ。つひには斯くてもえ侍るまじきを、唯今一度みづから聞えまほしき事のあるを、その明暮向ひ居させ給ふらむ佛の御前にしるべし給へ。それをだに此世の思出にし侍らむ」—と語らひ給ふを、すけ「げにあるまじき事と、切にはらふべき御なかの契とは見奉らねど、昔物語の姫君のやうに、媒の人のいふに從ひて澁々にゐざり出でさせ給ふべきにもあらず。その佛の御前にも、ゆくりなくはいかでかと、恐しうぞ侍るや。中々見奉り參らせ給はば、御心こそ亂れ増らせ給はめ。有難く見はなたせ聞えたると覺え侍りし過ぎに

明暮の御有樣―若宮のものむづかしき事―一品宮と婚嫁の事　この御有樣―若宮がある故にあるまじき御事―御出家などとは　思ふ樣なる事と―一品宮との御婚嫁は丁度よき御中と　心苦しき事―女二宮との關係の斷えたるも、畢竟此度の事のあるべき故なりしならん　同じ心にや―汝は我と同じ心ならんと思ひて話したるに　藻にすむ蟲―「蜑の刈る藻にすむ蟲の我からと音をこそなかめ世をば恨みじ」　聞かせ給ふらむな―女二宮がしるき事・―聞き知り給へりと思はるゝ事。

を抱き奉りて、明暮の御有樣、物いひの美しさなどを、泣きみ笑ひみ語り給ふ。狹「かかる人おはせざらましかば、何事によりて今まで侍らまし。長らへても、げに心より外に、ものむづかしき事もありぬべければ、今ぞまことに世にあらじと思ひ果てぬるを、唯この御有樣にこそ思ひわづらひぬれ」とて泣き給ふさまいと心苦しげなり。すけ「過ぎぬる方こそ侍らめ、今は萬この御有樣には、憂きも憂からずこそ思し慰まめ。いとゆゝしくあるまじき御事かな。又此頃は、思ふ樣なる事と、世の人も聞えさせ侍るは、いと嬉しうこそ侍れ。げに又かゝる事の侍るべかりければ、過ぎにし方は、怪しう心苦しき事も侍りしにこそ」と聞ゆるを、狹「他人よりは、さりとも同じ心にやとてこそ聞えつれ。心憂くも宣ふかな。いでや、今は聞えじ、藻にすむ蟲なれば」とて、思ひ亂れ給へるけしき、今少しいとほしげになり增り給ふと見るも、例の御癖ぞかしと、なま憎かりけり狹「さてもかやうの事ども聞かせ給ふらむな。いつか嵯峨へ參り給へりし」と宣へば、すけ「先つ頃參りて侍りき。何事も〳〵、すべて聞きやせさせ給ふらめど、更にしるき

(四)狹衣中納言のすけに托して文を女二宮に贈る、すけ女二宮の書を狹衣に贈る
一品宮の御事―狹衣に嫁する事
かゝる御事に―一品宮の關係あればこそ狹衣が今迄獨身にてありしなりなど
變らぬ樣にて―女二宮が
かゝることを―一品宮の事を
かゝる事を聞き給ひて―女二宮が
あくがれ増りて―女二宮が戀しく
參りたり―中納言のすけが

一品の宮の御事は八月十日のほどと定まりぬ。さばかりの御程に思し急がせ給へば、世の中ゆすりて、いとめでたくあらまほしき御事に、世の人さへ思ひたり。かゝる御事によりて今まで怪しかりつる御獨ずみなりなど、疎きも親しきも思ひあはせ、つき〴〵しうぞ言ひなしける。自らの御心には、いといみじうのみ思し歎かれて、一條の宮にのみ籠り居給ひて、若宮と起臥し語らひ聞え給ひて、叶はざりける世の中を、恨めしく思すまゝに、唯今しばし變らぬ樣にておはせましかば、かゝることを人も思し寄らましや、などおぼすに、わが過とも思されず、辛さの數も多く、況てかゝる事を聞き給ひて、如何樣にか思したるらむ、唯今もさしむかひ聞えさせて、言ひなやましつゝ見奉るわざもがなと、あくがれ増りてわりなければ、言合せてだに慰まむとにや、中納言のすけ尋ねさせ給へば、齋宮にぞ侍らひける。車遣して、狹「かならず聞えさすべき事ある」と宣ひたりければ、若宮も久しく見奉らぬにと思ひて參りたり。待ち給ふとて、はしつ方にぞ寄り臥し給ひたりける。狹「やよやいかにと、思ひわびて聞えつるなり」と宣ひて、若宮

㊂狹衣一條宮にて納涼
涼み給ふ—狹衣が
さておはし—女二宮が元の如くならば
御覽ぜさすれど—女二宮に

渡りかき絶え、あながちなりし夜な〱の立聞も、例の癖なれば悔しくわりなし。

六月十日、宵のいと暑き晝つかた、一條の宮にて、若宮具し奉りて、はしつ方に涼み給ふに、俄にかき曇りて、村雨のおどろ〱しきに、柏木の下風涼しく吹入れたれば、御簾少し上げて見出し給へるに、楢柏はげにいたくもり煩ふも目止りて、

狹　柏木の葉守の神になどてわが雨もらさじとちぎらざりけむ

雨風につけても悔しき事がちなる慰めに、若宮を見奉る度ごとに、さておはしまさましかばと思されぬ折はなかりつるを、いとゞこの頃は、御心にかけぬひまなく、哀に悔しき御心のうちなり、いとあつかはしげなりつる前栽どもの、雨に心地よげに思へる中に、大和撫子のしをれたる氣色中にもらうたげなるを、一枝折らせ給うて、嵯峨の院に參らせ給ふ。

狹　戀ひわびて涙にぬるゝ古里の草葉にまじるやまとなでしこ

とあるを御覽ぜさすれど、例のかひあらむや。

その心―獨住の覺悟
來む世の―女二宮が尼になりて堅固に過さるゝにつけても不十分なる女を妻にする氣にもなられねば
あるまじかりける事と―とても無き縁と源氏宮の方を思ひ切りて以來は
然てこそ―此儘に過したし
思ひ立つ事―出家の望
辛きものと―我を辛く思ひて出家したる女二宮にも
この人々に―源氏宮、女二宮等に
もとの雫の程―暫く生き殘り居る間、「末の露元の雫や世の中の後れ先だつためしなるらん」
芹つみ―「芹つみし昔の人もわが如く心に物の叶はざりけん」

にてもあり果てぬやうもありなむを、されど、かく心より外に、なげの哀もかくる人のあらむ折にや　その心もたがはむ、來む世のあまとなりても、更にかづかではやむまじき御有様に、少しもよからざらむ人をば、夢にも見まうければ、然ばかりはかなき世に、自ら歎く〳〵も、過ぎなまほしく、あるまじかりける事と、片つ方の御契を見果てて後は、かく心よりほかに、世に長らふるにては、然てこそあらましか、されど今は、かたがた世にな在りそと、佛などの示し給ふなゝめりと見えつれば、ひとへに思ひ立つ事―つより外の心なきものを、かの辛きものと思し果てて背き棄て給ひにし御心にも、いかなる心にて、かく世づかぬ獨ずみにて過ぎたるぞ、とだに聞かれ奉らむと、すべて何事も露ばかり心に飽かぬ所ありて、この人々に少しも劣り聞えたらむは、見ず聞かじ、かく歎く〳〵も　はかなき世のもとの雫の程は、自ら過ぎなむ、とのみ思ひ取り給へるに、かく芹つみし世の人にも問はまほしき御心のうち、いふかたなかりけり。心にかゝりて、ゆかしく哀に思されし忍ぶ草も、露知らまほしからず恨めしくなり給ひて、その

く衰なしゝ

さゝかり若く—狹衣の若盛なるに一品宮のふけ過ぎたるは恥かしかるべし

心ゆかず—不足に

齋院には—「見定めてこそ」迄狹衣の意を推測していふ詞

然はいかゞは—帝の心、どう言つた物であらう

かの心に—狹衣の心に

聞えあはせ—帝が相談して

嵯峨の院の—狹衣の心

この方樣には—女の事に關しては、女二宮女三宮を辭したるをいふ

その折は—其時辭したるは源氏宮に執心なりし故なり

ゆかず思はれて、うちまもられ給はむこそ、いとい[illegible]かりぬべけれ、嵯峨の入道の宮又なくめでたく聞えしをだに、齋院にはおとり給ひておらむかし、この御有樣に劣らざらむを、わが妻に見定めてこそ、とて今まで斯くはあるとこそは、あなかたはらいた、と思召されながら、然はいかゞは宣はむ。又さき〴〵の事を聞かせ給へば、かの心に少しも物憂からむ事をば、更にすゝみ言はざなるものを、大臣のかく方々に懇にいふは、かの自らの氣色にしたがふにこそあらめ、と推しはかられ給ふぞたのもしう思召されける。女院にもかくなむと聞えあはせ給ひて、免れぬ御宿世やありけむ、誰もいとつゝましう思されながら、人のかく懇にいふ折に、思ひよわりぬる樣にもてなしてむと思しなりぬる。大殿は限りなく嬉しと、年頃の本意は叶ひにたりとおぼし悅びたるを、大將の思し歎く樣ぞいみじかりける。嵯峨の院の、昔より殿の御志に劣らず、あはれに辱かりしをだに、この方樣には、見知らぬ樣にてやみにしものを。げにその折は、思ふ心一つによりてぞかし、今は然りとても、心より外に世に長らへてむ限り、かゝる獨ずみ

しと知せらるゝ咎なし
あづかり—一品宮を
されば乙そ—女院の心
かやうの筋には—人に嫁せしめんとは
みづからの御本意—一品宮出家の望ふかくの意歟
うちまかせ—堀川の言分に任するも憚まり
斯く人の—人の爲のやみて後も
さはかりこそは—あの位の事ではすみて什様ひたりなどと
釣する—、伊勢の海に釣する伯のうけたれや心一つを定めかねつる
ほのめかし—一品宮降嫁の事を
人の物言は—帝の心
遠山鳥にては—帝の心、相思の中でありながら離れ居るはいまらぬ事故許して

然るべき人して、いと忍びて、「唯あづかり聞えむ」と度々啓し給へば、されぱこそ、自らは人目を切につゝみ給うて、大臣してかく申させ給ふなりけり、と心得果てさせ給ひぬれど、「如何はせむ、さらば」などは、いかでかは宣はせむ。もとよりかやうの筋には思ひ聞えざりしを、今はいとゞ盛も過ぎさせ給ひにたり、みづからの御本意深きさまに、今日明日にてもと思したゝめるを、かゝる御名の隠れなくなりぬるを、いみじくおぼし歎かる。さりとても又確ならぬ事によりて、我さへうちまかせ聞えむも、なほつゝましく心苦し。又斯く人のあながちにいふ程を過ぐしても、さばかりこそは歇み給ひにしかなど、世の例にいひ流され給はむさまなどを、さま〴〵に、釣するあまにも劣らず、しほたれ過し給ひにけり。

内裏にも大臣、序つくり出でて、ほのめかし奏し給ひければ、人の物言はまことなりけりと思して、遠山鳥にては取所なきを、げに然もなどかは、と思しめすに、さばかり若くめでたき有樣を、おとなしき程の衰も恥かしうやあらむ、限なき御事といふとも、心

思召すとも―帝が
さやうに――一品宮を狹衣に嫁す思召は無かりし事故
おとなしき―一品宮も年長じたる事故
宿世などいふもの緣のある女もあるべし
かくても―上もや何時迄も獨身でも居ふまじ
けざやかに―はつきりと
聞えさせ給ひて―「給ひて」は「給はで」の誤なるべし
御文だに―文の便もむつかしき故、人知れぬ中に・一品宮との緣を切りて仕舞ふ積ならんと
細々と申す―堀川に
されば こそ―堀川の心
わが進み―此方から申上げぬ内に女院の方から斯く〳〵の次第故降嫁せしめた

思召すとも、わが申さむ事更に否びさせ給はじ」と宣ふを、狹「故院も、すべてさやうに思ひ聞えさせ給はざりければ、女院も今更によき事とも思召さじ。いとおとなしき程にもならせ給ひにたれば、何事にか、さやうに強なる心などつかひ侍らむ。すべてあるまじき事に侍る。今自ら宿世などいふものある人も侍らむ。かくてもよに侍らじ」など、いと侘しきまゝに、けざやかに聞えさせ給ひてやみぬるを、かくても、「いみじう忍びて、御文だにおぼろげならでは難ければ、唯人知れぬ樣にてやみなむと思したるなゝめりと、女院はいみじく思し歎かせ給ふ」と細々と申す人のありければ、さればこそ、この御事をさへ、唯かやうに紛らはして歇みなむと思う給へる、いとあさましき御心の程なゝめり、といとほしがり歎き給ふ事限なし。堀川「わが進み申さゞらむに、彼よりいかでか、かゝりけり然は、とも宣はせむ。無き事にても、かばかり人に名を立て奉りて、音なくてやまむは、いとゞ不便なる事なり。うけひき給はぬまでも、我この事を女院に申さむ。さのみ心に任せて見るべき事ならず」など、まことしうむづかり給ひて、參り給ひて、

大殿—堀川
年頃も—年來狹衣が一品宮を思ひ込み居る故に偏屈に思はるゝ此他の縁談を斷りたるなりと思ふと
宮の御爲—狹衣の心
まことしくも—堀川に事實の樣に思はれては面倒故
言ひなす—自分が一品宮に通ふといひなす
よるべなくて—獨身にて
さやうにも—一品宮と關係あるならば

大殿にも細々と聞えさする人ありければ、年頃もこの御事を深う思ひて、いとひが〳〵しきまで、思し離るゝ事もあるなりけり、と思すに、いとゞらうたう美しとおもひ聞えさせ給ひて、大將に、狹「かく世の中には殘なく聞ゆるまで、知らせ給はざりける事」と、打笑みて宣ふ御かほの氣色、いと嬉しと思したるを見給ふに、宮の御爲いといとほしう、みづからの爲には、まことしくも取りなされば、いと煩はしく便なかるべき事なれば、いたうまめだちて、狹「少將の命婦といふ人は。早うより知りて侍りつるを、內裏わたりにて、時々立ちより侍るを、言ひなす人の侍るにや。かけてもあるまじき事を、內裏などにも聞かせ給はば、便なうかたはらいたき事にこそ」とて、いとまめやかに苦しと思いたれば、堀川「何かは、さまで便なかるべき事かは。帝の御むすめ、今も昔も得奉る事世の常の事なり。われらより劣りたる人だに、當代の帝の御聟になりたるためしいと多かり。まいて、更によも便なき事とも思召さじ。斯くのみよるべなくて過し給ふ、いと心苦しきに、誠にさやうにもものし給はば、內裏にも院にも奏してむ。あるまじき事と

情無し

さればよ―狹衣の心

御前わたり―女院

この度―今度だけはまあ許さるべきかと思ひて

此手紙を奉る

わが許なる―自分にあてたる狹衣の手紙をも取り揃へて

如何なるとても―事實の如何は兎に角

ふのみぞわりなきや。

大將は、斯くなむと聞き給ふに、さればよ、すべて良からぬわが心の、何事にも後悔しきぞかし、といといとほしう思されて、少將の命婦の許へ、こまやかに書き給ひて、「御前わたりには、いとゞ如何にはしたなう侍らむと、つゝましう思ひ給へど、この度ばかりはあへなむとて」とあるを、わが許なるも取り具して、内侍の乳母に忍びて見せて泣く〳〵誓ひ聞かすれば、女院の御前にもて參りて、少將のいふ事啓すれど、如何なるとても、かく輕々しうよろしからぬ御名の流れぬるを思召し亂れて、ものも宣はず。文はさすがにゆかしうや思さるらむ、取りて御覽ずれば、

狹　思ひやるわがたましひや通ふらむ身は餘所ながら著たる濡衣

とある、書きざま手などはしも、げに親王たちなどの御あたりならでは、散らさむは口惜しかりぬべかめり、と御覽ずるにも、如何なる心にてかく濡衣にしもなしたらむとさへ、なほ涙のみこぼれさせ給ふ程いといとほしう、聞えさせやらむかたなし。

いでさればこそ—院の心

いちじるき御氣色—狹衣が格別一品宮に執心なる樣子も示さぬは無禮千萬なる了簡

はかなき—かりそめの手紙なれど、取次をするは年來の事なれば

御前—女院の

その人—少將の命婦が此一件を知らぬ筈はない

宮も—一品宮も

糺の神—加茂の糺の神は糺といふ名によりて[illegible]眞僞を糺す神として歌に用ひられたり

さだ〳〵と—確に辨明する譯にもゆかぬ故

唯ひとへに—院の方では只狹衣との不埒故とばかり思ひ居るが

を、女院も聞かせ給ひて、内侍の乳母を召して、女院「かく、いとあさましき事を、世の中にいふなるは、いかなる事ぞ。むげに無き事をば、人のいふ事にもあらぬを」と宣はするに、いとあさましくなりて、この權大納言の宣ひける事をぞ語り聞ゆるに、いで、さればこそ、少將の命婦のしわざにや、と思しよせ給ふに、いと心憂く胸ふたがりて思し歎くに、その後とても、いちじるき御氣色もなきは、如何ばかりなめげなる心の程ぞなどさへ、さま〴〵安からぬ御心のうちなり。少將の命婦、かゝる事を聞くに、あやまちは無けれど、はかなき御文の傳も、さすがに年經ぬれば、いと苦しうて、をさ〳〵御前わたりにもさし出でぬに、内裏にもきかせ給ひて、なま煩はしきに、帝「その人知らぬやうはあらじ」など、仰せられければ、いとあさましく思ひ歎きて籠りゐたり。宮もいと若き御程にもおはしまさねば、かゝる事を聞かせ給ふに いかゞ疎に思し歎かせ給はざらむ。糺の神も引きかけて、さだ〳〵とあきらめさせ給ふべきならねば、院にもさやかに見合せ奉り給はず、おぼし亂れたるをも、唯ひとへに思はずに、心憂くのみ見奉らせ給

言ひなす―狹衣が一品宮に通ふと
高きも短きも―身分の高下を論ぜず
まねびをだに―噂をもするな
出でおはせし―狹衣の
心やましき―自分の不快までが手傳ひて
物まねび―口眞似
年經にける樣―一品宮と狹衣との中が久しき以前よりの事なる由を

な恥かし、おぼろげの人見え給ひぬべくやは、とてやみにしを、少將の命婦の局になむ、時々立ち寄り給ふと聞きしを、人の言ひなすらむ。すべて高きも短きも、侍ふ人々につけて、斯る事も出來るなり。又まねびをだにしなし給うそ」と、むづかられて歇みぬるに、大將の思しやりしもしるく、大納言は、いとけざやかに、出でおはせしを見てしかば、ことに憚もなく、心やましき方さへ添ひていふを、聞き繼ぐ人はあまたになりつゝ内裏わたりにも聞え、院の邊にもやう〳〵言ひ出でければ、近う侍ふ人々は、「あさましきことかな。かゝる物まねびなせそ」と、互にいひ諫めけれど、まことならぬ事も、唯片端出でくれば、まことしうのみ言ひなす人多かる世のさがにて、「その夜の曉に、さていで給ひし事、御車そこ〳〵にこそ立てたりしか。夜深う其の間の御格子つま戸の開きたりしは、然にこそありけれ」など、折々の立聞き、垣間見の程をほの見ける人々も、その折は何と目も止め給はざりしを、かゝる事出來て後は、忍びつゝ各言出しなどしてさゝめくもあるべし。ましてなべての世には、年經にける樣を、つき〴〵しう言ひなす

かたちけはひに—狹衣の器量に目がくらみて

聞え放たせ—一品宮がきつぱり斷りしかば

我は—御身は

にぶ〳〵しき—胡亂な事を見て我が言ふならば疑はれても仕方が無いが

げに人も—中納言君の心

立ち返り—度々狹衣一品君に文を贈る事ありと

嵯峨院の—女一女二女三を取りかへ引きかへ與へんといひしをさへ斷りたる狹衣なれば

盛過ぎ—一品宮

むものを、御後見たちの、かたちけはひにはかられ給ひて、かゝるわざはし給ふにこそあゝめれ」など宣ふに、いとあさましくなりぬ。中納「早うこそ、さやうの御氣色見えしかど、あるべき事にもあらずとて、聞え放たせ給ひしかば、さて歇み給ひし事を、まして內裏の御氣色に從ひて、今日明日にても世を背きなむとこそおぼしめしたれ。いとゆゆしき事かな。かけてもかゝる事な宣ひそ。實事しう言ひなす人もこそあれ」などけざやかに言ふを、權大「さらば、我は知り給はぬなゝり。今自ら聞き給ひてむ。世にある事は暫しこそ隱はあれ。少しにぶ〳〵しき事を見たらばこそあらめ、口淸くも宣ふものかな」などいふ樣の、戲事の氣色にはあらねば、げに人も、なからむ事を斯くのみ宣はむやは、唯一夜迄はかくは言はざりしを、如何なりける事ならむ、と怪しう思ひて、母の內侍の乳母に、かくこそ宣ひしかと、忍びて言へば、內侍「少將の命婦の、いつぞや、如何なるにか、この頃立ち返り宣ふ事どもこそあれ、と言ひしかど、あなくるし、嵯峨院の宮達をうちかはり預けさせ給へど、聞入れ給はぬに、まいて盛過ぎさせ給ひぬ。あ

責め渡る—中納言君を
淺ましき心地—中納言君が參上らず—一品宮の御前に出ず
近きわたり—一品宮の近き處につれて行け
責めあかし—中納言君を權大納言が
世の中思ふまゝに—權大納言の人柄をいふ、狹衣の心
㊁權大納言狹衣と一品宮との浮名を言觸らす、堀川大臣二人の婚を結ばんことを乞ふ、狹衣の迷惑
かしも殊の外にも—我が一品宮への御をだ外らものゝ樣に言ふのも此故でありしよ
何とも思ひ聞えぬ人—狹衣は
まめやかに—此兩人の中無事には行くまじ

つゝ通ひけるに、今となりては仄めかし出でつゝ責め渡るを、いと珍らかに淺ましき心地して、今はをさ〱對面する事も物憂くのみ思ふに、よべ院も内裏に入らせ給ひて、宮はとまらせ給ひて、母の内侍の乳母も風に煩ひて、參上らずなりにしかば、内侍「代には御かたはらにとて參り給へ」といひしを、權大「かく人少なる程にて、近きわたりにしるべせよ」と、よき折と伺ひて、生憎に取籠めて責めあかしつれば、御側にもえ參らずなりにしなりけり。世の中思ふまゝに誇りかにもてなして、ものいひなども少し憚なき人樣なるを、見や知られぬらむ、さらば、あぢきなくいとほしかるべきわざかな、と大將は苦しう思したり。

その後、中納言の君に、大納言あひて、しか〲確に見し事と、ありし曉の有樣を語りて、權大「いでや、かゝれば、さしも殊の外にも宣ふなりけり。然はありとも、親王達をも何とも思ひ聞えぬ人にこそあゝめれ。あなをこがましや。見むかし。内裏や院など聞かせ給ひてば、更によもまめやかに御覽ぜられじ。いかに口清くあらがひ逃れむとすら

弘徽殿の―女二宮に忍び入りし時の事
ありつる車―前に立てゝありし車の主なるべし
さしあひたるに―出合ひたるに
斯うにこそ―狹衣なりと見極めて
思ふ心ありて―一品宮に心ありて
御乳母子―一品宮の乳母内侍乳母の子

押しも閉てずなりにけるにや、いと廣うあきたるを、人起きにけりと見給ふに煩はしけれど、宮などおはせぬ程にて、人少ならば、かき抱きてや出でぬべき、と思して入り給ひぬ。御前の方を見入れ給へれば、御殿油消えがてにまだたきて、奥は暗うて物も見えず。こゝかしこに人々あまた寢たりと見ゆれど、幼き人はいづれとも見えず、臥したらむ所も知らねば、たどり寄らむ方もなくて、唯つく〴〵と見入れらるゝにも、弘徽殿の南の戸口は、まづぞ思ひ出でられ給ふ。思ふまゝなるは、わが爲にも人の御爲にも、あぢきなういとほしく悔しくもあるわざぞかし、と幾許の年の積りならねど、思ひ知られ給ふ事多かれば、煩はしく、やをら出で給ふに、ありつる車の人にや、烏帽子直衣なる人の、ふとさしあひたるに、出でどころの便なければ、袖して顏を隱して、馬道の口に隱れ給ひぬれど、闇はあやなき御匂より始めて、なべての人にまがふべき御有樣ならねば、斯うにこそありけれと見はてて、見ぬ顏にて過ぎぬるも、太政大臣の御子の權大納言なりけり。早うより思ふ心ありて、御乳母子の中納言の君といふに、志あり顏に見せ

自ら—狹衣自身
さる人や—養女ありやなど
見つくる人も—狹衣の立聞覗見が人に見付けられたらば浮名が立ちて、一品宮が迷惑する事もあるべしと
院は—狹衣の心、女院、一品宮の母
宮—一品宮

自らも、さるべき宵々は渡り給ひつゝ、命婦と語らひ給ふ折もありけり。その序にも、狹「さる人や」など、たゞ大方なる樣にて問ひ給ふに、誰とたしかには言はねど、世に知らず美しき由を語り聞ゆるに、いとゆかしうあはれにて、この御あたりの立聞きかいま見も心に入りたり。もし見つくる人もあらば、宮の御爲、あぢきなき事や出來むと、煩はしき方も無きにしもあらず。常磐の尼君のむすめ小宰相とて候ふを、思ふ事も語らはまほしけれど、さすがに何となくて言ひ寄らむも、さやうの懸想など、おしなべては習ひ給はぬ心地に、人も怪しと思はむとつゝましくて、え言ひ寄り給はざりけり。

忍びたる所より夜深く歸り給ふついでに、やがて一條の宮へおはするに、この宮の御門いととく開きて、いづれの殿上人の車にか、夜もすがら立ちあかしけると見ゆるは、如何なる人の局より出づる人ならむ、と見入れ給ふ。院はよべ内裏に入らせ給ひにしを、宮もや參り給ひにけむ、さらば忍草も人少にてや、と思しやるに、いと過ぎ難くて、例のやをら入り給ひぬ。常に立聞き給ふ戸口に入り給へれば、局に急ぎ下りける女房の、

㊀狹衣飛鳥井姫君の遺腹の子を見んとて一品宮の方に忍び入る、堀川大納言に見咎めらる

飽かず思召さるれば─帝が

女院の姫宮─一品宮、帝の妹

忍ぐさは─飛鳥井姫君の遺子を內裏に召連れて居られるかしらと

そのわたり─藤壺近邊

御文を─一品宮へ

賀茂の川波に─一品宮が賀茂の齋院になりし故

その御心─一品宮へ懸想する心

里におはします─一品宮が

一條の宮─卽ち一品宮の里也

御文も聞え給ふ─狹衣が

狹衣物語　卷第三之中

月日過ぐれど、故院に、淺ましく覺束なながら別れ聞えさせ給ひにし事を、飽かず思召さるれば、帝「その御代には、女院の姫宮などを目がれず見奉らむ」と宣はせて、藤壺に御しつらひせさせ給ひて、常におはしまさせ給ひけり。姫宮をも一品になし奉らせ給ふ。大將、かく御內裏ずみにも、かの忍草は具してやおはすらむとゆかしければ、人知れず、然るべき折々は、そのわたりをイみ寄り給ひつゝ氣色を見給ひけり。早うも、少將の命婦とてしたしう候ふを、語らひ給ひて、御文を時々奉らせ給ふ。御けはひもほのかに聞き給ひしを、賀茂の川波に立ち別れ給ひにし程に、わざと聞え給ふ事は絕えにしぞかし。今はおなじ百敷になり給ひて、覺束なからぬ程に、こととひ寄り給ひつゝ、猶その御心絕えぬさまにぞほのめかし給ひける。里におはします折も、若宮のおはする一條の宮は、たゞ這ひ渡る程なれば、つれ〴〵に思さるゝ折々は、御文も聞え給ふなるべし

品定まりたる―母代に受領と身分をきめてしまはれたる宰相中将こそ
憎からざりし―今姫君の憎からぬ器量をば狭衣も萬更にも思はぬ

し給ふものから、あまりいと品定まりたる聟の君ぞ、いと名だたしく思さるゝ。憎からざりし顔つきは、さすがに哀にも思されけり。内裏には更に御心もゆかざりし事なれば、何とも御耳にも止らせ給はざりけり。

かい越して―後より前に掻き下して
然こそは―尼になつたものぢや
せために―責めさいなみに
かき臥し―姫自ら
―
よからぬ人と―今姫君のよからぬ人なるを承知しながら
たゞならむよりは―入内を思ひ立たぬよりは

はあらで、尼になりなむと思ひ給ひて、櫛の筐なる鋏を取り出でて、髪かい越して見給ふに、常よりも此頃つくろはれてをかしげなるが、さすがに惜しう悲しけれど、昔物語にも憂き事あるには然こそはしたりけれなどほの聞きしも思ひ出でらるれば、泣く泣く、こゝかしこしどけなく削ぎおとして、泣き居給へるに、母代又せために寄來たるに、見附けて、跡まくらも知らずかき臥し、「いかにせむ、いかにせむ」とまどひ、死入りて泣き入りて臥せり。上聞き給ひて、洞院「尼になれ尼になれと責むればこそはあらめ。とてもかくても、よからぬ人と見る〳〵、かゝる事を思ひ始めけるまろこそ、かへす〴〵恥かしけれ」と宣ふを、大臣聞き給ひて、「いで、さればこそ、はか〴〵しき事はあらじと思ひ侍りし。世の音聞も、たゞならむよりは誰が爲も恥かしうもあるかな。内裏にいかに聞かせ給はむとすらむ。よくぞ此事に一言もわが口入れそめざりける。母代が足ずり、「理なゝり」とて笑ひ給ふを、上は、げにねたう、腹立たしうも恥かしうも、方々におぼし歎く事限なし。大將殿は、いで、さればこそと、辛うじて思ふ事かなひぬる心地

いかでかは見合せ―誰にも合せる顏がない筈

その受領の―受領の北方なぞになる人の世話は出來ぬ

同じ樣にて―今迄同樣に此御殿に居る事も出來まじ

額髮を―今姫君の

切に心地の―せきのぼせて居ると見えて

誰ぞとよ―手引をしたるは誰なるぞ

心より外の―娘の心、宰相中將に犯されたるさへ心外なるに

人の思ふらむ―他人の手前が恥かしと思ふからでは無く、只母代の呵責を畏れて

かる人とはいかでかは知り給はむ、まことに斯くゆゝしく思さるれば、ことにものも宣はで歸り給ひぬる御氣色を見るに、いとゞ腹立ち勝りて、母代「早う〳〵尼法師になり給ひね。誰々にも、いかでかは見合せ奉り給はむ。その受領の北の方にて居給ふらむ後見、更に〳〵えし侍らじ。同じ樣にて又殿の內にもえおはせじ。さても〳〵、などか、入り來りづらむ折に、聲高らかに打泣き給はざりし。心やすくひれ臥し給ひたりつらむ事よ」とて、額髮をひきあげて、母代「いで〳〵」とにがみかゝる顏氣色、やゝもせば食ひかきぬべし。切に心地のおぼゆべかゝめれば、又立走り、北面に行きて、母代「誰も〳〵、むげに知る人なくて入り來る人あらじ。いみじき盜人といへども、たよりを尋ねてこそ入るなれ。誰ぞとよ」と、ある限の人々を言ひ責むれば、各えも言はぬ誓言立てつゝいひ誓ひ、泣き腹立つ樣どもも、聞きにくゝゆゝし。かく言ひ合へるを、姫君聞き給ふに、生ける心地もせずいみじきに、心より外の事だにあるに、尼になれといふをだに聽かずば、遂にいかゞしなされむ、と思せばおそろしきに、人の思ふらむ事の恥かしさなどに

あなかま給へ｜喧し靜かに　世の音聞の｜世間の評判の甚しからぬ樣にでもせめてしてくれよかし　今いくばくの｜もうどれ程の日數が待てしとて受領風情を密夫には持ちたるぞや　上｜洞院上　かゝる方樣の宿世｜今姫君が宮仕すべき運はもたぬに、強ひて入内させんとしたる故物笑の種になりたるがつらし　いかに聞き給はむ｜此始末を堀川が聞きて何と思ふならん　受領とさへ｜母代が男の受領なる由を見顯はしてはつきりと言ひたる以上は、其を宰相中將なりとは洞院上の知るべくもなく

したる。洞院「あなかま、給へ。如何なるにても、かゝる事は忍びやかにもてなしてこそあらめ、世の音聞のいみじきをだに、もて隱し給へかし」と、いみじう制し給へば、走り來て、又君の臥し給へる所に寄り來て、床より荒かに引きおとしつゝ、母代「こゝらの寶をつくして、上の思し急ぐ幸を、心として燒き失ひほろぼし給ふにこそあンめれな、今いくばくの日數の心もとなさに、受領男は急ぎし給ふぞや。下﨟の身の物の用なきだに、名の惜しければ、若うよりひたすら、ものしたゝかなる男はまうけ侍らぬものを。いづちもへも早亡せ給へ。恥知り給はぬかな」と、顏にあてて爪彈をしかくる樣、いとおどろへしげなるに、髮をふりかけて泣き給へる灯影、いと心苦しければ、上、「いでや、さばれ然るべきにこそおはすらめ。唯まろが、切に、かゝる方樣の宿世のなかりけるを、あながちに思ひ立ちて人笑へになりぬるのみこそは心憂けれ。殿のうけひき給はざりつる事を、いかに聞き給はむと思ふこそ、萬よりはねたう恥かしけれ」とて、いとものしと思したるも理なり。受領とさへ見顯はして、さわやかに言ひ續けたるを、か

浦通ふ—常見なれたる我なれば名のらずともよく知り居るならんに。
受領宿世—受領の妻になるべき悲しき運命。

ば、急ぎ起き給ひて、洞院「あなかま、あなかま」と言ふ〳〵、如何なる事ぞとわたりて見給へば、消えたる火どもまだ燈しつけぬなるべし、帳のかたびらを褰げつゝ、紙燭手毎にさして、まづ〳〵此頃參り集りたる女房の限、二十餘人ばかり重りて居て、見あざみたり。洞院「あな物ぐるほし。忍びやかにてこそ出し遣りてめ。などかく見苦しう集りたるぞ」と宣ふも、聞き入るゝ人もなければ、御供に參りたる宰相の君といふ人して、人々除け、紙燭ども消たせなどし給ふまぎれにぞ、男君帳の内よりいと忍びて出づるを、母代おひつきて、袖を控へて、母代「誰ぞ、名のりせよ。さらずば、天が下に出しやらで、辛き目を見せむ」と、叱りかゝる氣色いとほしければ、

中将 浦通ふみるめは常に變らじを蜑の刈るてふなのりせずとも

といふ聲をも、心まどひて聞知らず。「浦通ふ」とあるがほの〴〵聞ゆるにぞ、西の國の受領にやと心得て、いと悲しう心憂ければ、つい居て、母代「あな悲しの受領宿世や」と、足摺といふ事をして泣く聲いみじければ、上いと淺ましう思されて、今ぞ近う寄りおは

見知れば—宰相中將が

明後日ばかり—明後日は入内といふ夜になりて宰相中將が今姫君の寢所に忍び入りたり

兒などの樣にて—今姫君の樣子

忍び隱さむ程も—早く晴れて我が物にしたしと迄執心に思へる也

ものけたまはる—物承る、もしもし

近う寄り來て—洞院上の心

帝も大殿も、いとしもうけひき給はぬ氣色などを見知れば、後の罪もあへらじとや思ふらむ、明後日ばかりになりて寢給へる所に、入り臥し給ひにけり。唯兒などの樣にておはする、さまかはりて中々美しう覺え給ふに、かねて思ひしよりも忍び隱さむ程も苦しかりぬべきを、如何にせまし、と思ひなりぬるけはひなどや著かりけむ、近う臥したる母代驚きあひて、ふと聞きつけて、母代「いなや、こゝに男のけはひこそすれ。空耳か。いで〳〵、今日明日帝の君のうつくしみ愛し給ふべきあが佛を、いかなる盜人の如何にしつるぞや」といひて、火も消えにければ探り寄りたるに、烏帽子も手に當りぬ。さればこそと心地も惑ひて、母代「人々紙燭さして參り給へ。こゝにいと怪しきしれものあり」と高やかにいふに、寢たる人驚き騷ぎぬ。母代「さて〳〵。先上の御前に申さむ」とて立走りて、足音いとおどろ〳〵し。近うだに寄らず、道中より、母代「ものけたまはる。姫君の御前に、男入り臥して侍り。如何仕うまつらむとする」といふ。夜聲のいと高きに、うち聞き給へるぞ、げに淺ましきや。近う寄り來て忍びやかにだに言へかしといみじけれ

聞ゆべき隙も忽にはあり難く、もてかしづかれ給へば、すべき方なきなるべし。

二月には、今姫君の内裏參あるべければ、おほき大殿、腰いたきまで出入り急ぎ給ふを、殿の内の人も、「幸おはしける君かな。今こそその人の御むすめなども言はれ給へ。いと物げなき母の局より生ひ立ちしさま」など、めでたきにつけても、世の人の物言は聞きにくきものにて、この頃のあつかひぐさにこそいひ罵りけれ。大殿のみぞ、更にいと見苦しき事に思して、殊に口入れ給はで、夜晝言ひくねられ給ふ。大將殿もかの「吉野川」の後は淺ましく帝の渡らせ給はむ度毎に、よみかけ奉り給はむずらむと、かたはらいたう侘しき事限なし。琵琶の音も、母代が唱歌してはやし聞えさせむさま思ひやられ給ひて、獨笑せられ給ひて、いみじき物思にぞなりにける。如何なるわざをして、この事思ひ止めさせ奉らむと、まめやかにわりなく思し歎くしるしにや、母上の御兄宰相の中將、はなれぬ中にて、自ら見給ひて、なつかしき御容貌に思ふ心つきて、ほのめかし給ひけるを、上も聞き給ひながら、かく思し立ちぬるも、いとねたう心やましきを

（八）宰相中將今姫君の事に消ふ事隱れ入内の沙汰やむ、今姫君出家

おほき大殿―太政大臣、洞院上の父

大殿―堀川

見苦しき事に―今姫君の入内を

言ひくねられ―洞院上に

吉野川―吉野川の歌を聞きし後は

帝の―狹衣の心、入内の後帝にあふ度毎に例の吉野川の歌を出すならんと

上も―洞院上も

宰相中將の今姫君に心あるを聞きて居ながら入内を思ひ立つが氣にくはぬ上

さるべくこそ—「さるべくてこそ」歟

打添ひぬべう—連立ちても行きたく

短かりける命—飛鳥井姫君の

姫君を—飛鳥井の遺子を一品宮へ讓りて仕舞ひし事をも

いかでか御心に違ふことは侍らむ。さるべくこそ、釋迦佛も三途をも出で給ひにけれ。前の世の契おはしますらむ」とて、明けゆく光に、目もあやにめでたき御容をうちまほりつゝ、僧「げにこの五濁悪世には餘らせ給ひけり。いかにして假にも宿らせ給ひにけむと、うち歎くめり」とぞ聞えさする。狭「さて此後は、何處にかおはすべき」と宣へば、僧「この尼君の最期に逢ひ侍らむずれば、遠き修行などえ仕うまつるまじければ、和泉の嶽、竹生島などにぞ、今年明年は侍ふべき」などいふも羨しく、打添ひぬべうぞ思さるる。されど、明うなりぬべしと急がし立てられ給ひて歸り給ひぬ。かの、人知れずおきて給ひし七日〳〵の果にもなりぬれば、忍びたれど又々添へさせ給ふ事ども疎ならず、常磐へも、さるべき人々に宣はせて、僧どもの布施、かづけ物、誦經の料など、なべてならぬ様にてぞ數多遣しける。その後は、尼君に、まめやかなる様に思しやりつゝ、絶えず訪はせ給へば、かたじけなき御志を見るまゝに、短かりける命をいとゞ悲しう、姫君をかく思はぬ方にしなし聞えたるも、いと悔しう思へど、今は引きかくし紛らはし

まろはかくて—自分も此姫君の樣にして死にたし
常磐の森に—姫君出家の少し前によみし歌
木綿著鳥も—これも姫君の歌と共に一卷下にあり。「も」は「よ」の誤
云何云々—提婆品の句
明けぬる由申せば—從者が
思ひ立つ方—出家の志
佛の導き給ふにや—汝に逢ひしは

こそめでたけれ。まろはかくて死なばや」などもいふなり。いと若き聲にて、「今こそ思ひ合せられれ。明日下り給はむとて、夜さりまかりたりしかば、乳母のおとゞがさゞめきがちにて言ひしを」など語る。かの「常磐の森に」と宣ひし曉に、車にもえ乘りやり給はで、「木綿著鳥も」とありし樣など見ける事どもを語るに、いとゞ哀のみ勝り給へど、よろづいとかひなし。

狹 秋の色はさもこそあらめ頼めしを待たぬ命のつらくもあるかな

などおぼし續くるに、念佛の回向果つ方は、唯打聞く人だに哀なるを、まいて御袖もえひき放ち給はざるべし。「云何女身卽得成佛」などいふわたりを、いと密に口ずさび給へるが、はな聲なりしも今少し哀にめでたきを、聲しつる人々、「いまだ出で給はざりけるものを。聞きやし給ひつらむ」といふ。明けぬる由申せば、出で給ふとても、山伏にあひ給ひて、狹「人知れず思ひ立つ方の心深きを、佛の導き給ふにやと、頼み聞えてなむ」など語らひ給ふさま、いと悲しければ、われも打泣かれて、僧「さのみ思し取りてけるを、

心の中―飛鳥井姫君の

いかで〳〵と―如何かして狹衣に思はれたしと思ふに

心止め給はで―狹衣が

み渡りて、四方の山邊心細げに見渡されたるに、近き寺々の鐘の聲々も聞えつゝ、いづくに誦むにか、經の聲もほのかに聞ゆなり。所の樣もをかしう心細くなりけるを、物思はしくて眺め過しける心の中おぼしやるに、いといみじう哀なれば、とばかり眺め入りて、とみにも出でやられ給はぬに、唯この佛の御後の障子のつらに、若き人々物語するを聞き給へば、出で給ひぬと思ふなるべし。人々「あな口惜し。今少しとく尋ねておはせで」「をかしの御匂や。猶とまりて枕にもうつりにたり。かゝる人を、この邊に時々にても待ちつけ侍りておはせば、如何にめでたからまし。いみじかりける御心惑は、げに身を投げ給ひけむも理ぞかし。やむごとなき人々だに、いかで〳〵と思はれ給ふに、露ばかり心止め給はで、心盡し給ふ人々多かりとか」「姫君の美しさに なべての兒とも覺え給はざりしは、斯くにこそおはしけれ。年經にける名殘をだに、さばかり忍び難げなりつる御けはひを、この曉までの命だにおはせざりつらむ。いみじかりける幸を、口惜しき事なりや」といへば、今一人出で來て、「三河守の妻にておはせましよりは、これ

列までこそ―宰相の君位の身分になるならん
斯うこそ―實は我が隱し子なりと言出さんも
人のまどふなる道―「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬる哉」
遠山鳥にて―隔てたる儘にて
わが過の心地―尼自身の仕損じ
參らで―一品宮へ
誰かはと―公より外には誰かあるべきと
かくなむと―實は狹衣の子なりなどと
見せ給へ―其兒を

幼き程こそさ言ふ〳〵もあらめ、物の心知りおとなび行かむまゝに、その數多侍ふめる中納言、宰相の君などの列までこそあらめ、さりとて今は、斯うこそありけれなど聞えいでむも、人のまどふなる道といひながら、なほ如何にぞやおぼゆれば、遠山鳥にてやみぬべき事にこそは、と思しつゞくるに、亡きものにおぼしつる年頃より、今少し御心の中いとあはれなり。狹「いさや、さま〴〵聞えむ方こそなけれ」とて打泣き給ふに、まことにわが過の心地して、いとくち惜しう歎かしければ、尼「今自ら、さるべき御中には、覺束なからぬさまにもならせ給はなむ。なべての樣にもてなさせ給はざむなれば、行末頼もしう侍る。自らも、今は參らで久しうなり侍りぬれど、この御有樣によりてぞ、時々も立出でぬべく侍る」などいふ程に、後夜の念佛も始めつなり。尼君には、狹「かひなき世のかたみにも誰かはと、今よりは頼み聞えてなむ。宮の邊に、かくなむとゆめ〳〵な聞え給うそ。かまへてなほ見せ給へ」などぞ語らひおき給ひける。明けぬさきにといそぎ出で給ふとて、遣戸を押し開け給へれば、曉かけて出づる月影ほのかに霞

かけて―一すも
兵衛督のしるべきゆかり―右兵衛督の子と狹衣が稱し居たれば也
自らは―姫君自身は非常に其子を大事にして
斯うにこそ―狹衣の御子なりしよ
御美しさ―其兒の
一品の宮―一條院皇女
知る人など―此兒の素性を知る人
言はむも―「言はむと」なるべし
忍ぶの露―遺兒
御前―一品宮こそは、狹衣の心

りし心おきてをも問ひ侍りしかど、かけてかやうなる事とは仄めかし侍らざりしよ。もと心はかなく、いふかひなかりける心の程かなと、今宵こそ承りあきらめ侍りぬれ兵衛督のしるべきゆかりとばかりぞ、ほの聞き侍りしかど、かの自らは更に殊の外に思ひて、數ならぬ身の程にたぐひ給はむも、いと辱なきものになむ思ひたまへりしかば、然らば斯うにこそ侍りけれ。世に知らぬ御美しさを聞かせ給ひて、一品の宮のいみじうゆかしがらせ給ひしかば、百日の折に參らせ奉りたりしを、やがて止め給ひて、乳母たちなど數多しておぼしかしづく樣などは、今自ら聞かせ給ひてむ。いと哀に戀しきものに思ひ聞え給ひながらも、かゝる山がつの垣根に生ひいで給はむもいとくち惜しきを　如何はせむなどぞ思いたりし。宮にも、中々なる知る人などやいで來て、知り顏にいはむも忍ばせ給ふなゝめり」などいふを聞くにも、さらに思ひ慰む方なく、よろづいとかひなき中にも、なほこの忍ぶの露は、斯うてやむべき心地もし給はず。御前わたりにこそ、美しさに罪ゆるしても思すらめ、侍ふ人々などは、いかに侮らはしく思ふらむ、

魂の在處は—尋ね行くまぼろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく
さらば—尼公の心
短かりける命—御壽の
幼かりける人—幼兒
樣々にかひなく—何につけても埒あかぬ樣な事申上ぐるもお氣の毒なれど
斯かりける御事—狹衣との關係
宣はする御事—遺兒
畧しかりし心おきて—懷胎の身ながら身を投げんとせし了簡

て立ちぬ。佛すゑ奉りたる方に、御座などひきつくろひてぞ對面したる。げに年經にけるけはひしるけれど、故なき樣にはあらで、尼「思ひ給へかけぬまほろしにやと、いとゞ亂心地にも靜め難う」とうちわなゝく。狹「魂の在處はこゝにこそ尋ね參り來つれ。こまかならむ御物語に少しもや慰むと、試みまほしう」などうち始め、この年頃さまざまに思ひ慰む世なう、歎き過しつる有樣などを、夥しからぬものから、少しづつ洩しいで給へる氣色など、いと忍び難げにせきやり給はぬを、さらばこの御心に、いとかうこそ思され給へりけれ、げに海の底に思ひ入りても、なほあまりあるわざかな、と聞くままに、短かりける命の程、今しもぞいとゞ悲しくくち惜しかりける。まして聞く人は絞るばかりになりにけり。狹「さても、その幼かりけむ人は侍るや」と宣ふに、尼「樣々にかひなく聞えむもいとほしければ、あが君や、すべて聞えさせむ方こそ侍らね。斯かりける御事を露ばかり知り侍らましかば、限ある命をこそえ止め侍らざらめ、この宣はする御事をさへ、かく跡はかなくはしなし侍らざらまし。如何なる事ぞなど、常に夥しか

さる樣こそは—何か仔細のある事ならんと僧が思ふに

この人—飛鳥井姫君

取り申すも—申上ぐるも

すく〳〵しうて—無愛想にて

戀ひ歎きて—故飛鳥井姫君を

見奉るに、思ひかけぬ心地する、さる樣こそはあらめと思ふに、斯うまで尋ねられ奉るべかりけるにては、げに口惜しうもありける命の程かなと、然る山伏の心地にも、今ぞいと口惜しく悲しかりける。僧「都の内は、またかへり見るべきものとも思ひ給へざりしに、この人の終に逢ふべき契や侍りけむ。故なにがしの朝臣の女房のまかり上りしに、切にいざなひ侍りてしかば、かゝる序に比叡の山拜み奉らむの志にて、まかり登りし道に、思ひかけず見つけて侍りし有樣など、取り申すもいと氣疎き心ばへの程と、聞かせ給ひぬべけれど、ひたすら身をなきものになし侍らむと思ひ入り侍りし海の底をも妨げて、この山里に尼になりて過させ侍りつるを、こゝかしこ修行の程に委しき有樣もえ承らざりしに、いみじう物をのみ思ひ侍りつれば、病のつきて遂にかくなりぬ」といふさま、いとすく〳〵しうて、委しき有樣など問ふべき樣にもあらねば、狹「さてその筑前の尼君はこゝにか」と問ひ給へば、僧「しか侍る。明暮戀ひ歎きて、いとゞほれぼれしき樣になりて侍れど、彼に何事も仰せ給へ」とて、僧「かくと案内傳へ侍らむ」と

端山のしげり—「筑波山端山繁山繁けれど思ひ入るには障らざりけり」
喜びながらなむ—喜びて尋ね來れり
取り申さでなむ—申上げずして歸れり
おしあてゝ—顔に

給ひしよりは少し例の人に似たり。狹「夢のやうなりし對面の後、よろづに尋ね聞えしかば、行方なうまどはし給ひてしかど、おぼろげならぬ志の程には、げにこそ端山のしげりもさはる所なきわざに侍りけれ。今朝、思ひかけず、このわたりにや通ひ給ふらむといふ人の侍りつれば、喜びながらなむ。この世とのみは契り聞えざりしを、心憂く」など怨み給へば、僧「聞えさせし妹のわづらひ侍りける、限になりて侍りける、今一度逢ひ見むと消息せさせてさぶらひしを、必ずあひ訪はむと思ひ給ひてまかり出でし程に、案内も取り申さでなむ。終に亡くなり侍りしかば、念佛も眞心に仕う奉りて、後の世の弔をだにと思ひ給うて、かく籠り侍るも、明日なむ四十九日になり侍る」といふを聞き給ふに、涙とりあへずこぼれ給ひぬ。狹「粉川にて思ひかけざりし御物語の殘を、こまかに承らまほしかりしかど、よからぬ事どもを、なべての人にも聞かせじ、と思う給へし程に、淺ましうなか〳〵なりつる心の中を、又今宵遂にかひなく聞きなし侍るも、唯さばかりにてこそやみ侍りぬべかりけれ」とて、おしあて給ひつる袖の雫、疎ならず

跡の白波をだに—姫君入水の曙ありし當時は、其入水の跡をさへ見たく思ひしかば
眞木柱の—「吾妹子が來ては寄りそふ眞木柱そも睦まじみかたみと思へば」
いかでかはととし「ど」は衍文
釘ぬき—木柵
ありし山伏—初瀨にて逢ひし僧なり
騷ぐ姿—かの山伏の僧の姿
見給ひしよりは—初瀨にて逢ひし時よりは人間らしし

たゞずまひだにはか〴〵しうも見えず、道の空もたど〳〵しう、習はぬ御心地にいとゞ心細くわりなし。

狹　なき人のけぶりはそれと見えねどもなべて雲井の睦まじきかな

霞まむ空を見るべきものとは思はず、程なくあり〳〵て立昇りけむむなしき空は、恨めしさも悲しさも樣々に、中々なる心地しぬべけれど、跡の白波をだにゆかしがり給ひしかば、まして眞木柱のよすがもいかでかはとと思すなるべし。近うなるまゝに、風につきて念佛の聲々仄かに聞ゆるは、その人の名殘にこそはと聞きつけ給へる、かの「底のみくづ」と書きつけたりし扇見つけ給へりしに盡きはてぬと思されし涙も、殘りある心地ぞし給ふや。おはし著きたれば、門などもなくて、唯釘ぬきといふものをぞしたりける。道季を入れて、若しありし山伏やあると尋ねさせ給へば、しばしありて、「とく唯入らせ給へ」とあれば、しるべするまゝに入り給へり。少し離れたる所の、紙障子などばかりにて、あら〳〵しき假初の居どころと見えたり。おまし敷きなど經營し騷ぐ姿、見

さばかりなるは——あの位な器量は無い事もあるまい

濃かに語らふべき——仲代の人となりが

㊆狹衣常磐尼を尋ねて飛鳥井姫君と其子との消息を聞く

其人を——今更飛鳥井姫君を尋ぬるも異なものなるに

しのぶ草——飛鳥井姫君の遺兒

かばかりの程ながら——是位の近處に居ながら

先つ頃つひに亡くこそはなり侍りにけれ。かたちなどは御覽じけむな。さばかりなるは自らもや侍らむ。唯人樣などこそ、怪しきまで有り難うをかしきまで見え給ひしか」などいふは、如何なる夢語ぞと、心もことに騷げど、其「今更にこそおぼえね。聞き違へ給ひつる事ならむ」とて、濃かに語らふべき人樣にもあらねば、唯かの常磐といふ所を尋ねむと思して立ち給ひぬ。

世にありと聞くとも、今は其人をとかく思ひ尋ねむも、いとねぢけがましきを、ひたすら亡くなりにけむは、中々心安くめやすきに、唯かのしのぶ草の行方のいみじう聞かまほしきにより、いとゞ御心地も靜かならで、道季を呼び給ひて、よろづにぞ語らひ給ふ。所の程などはいとしるかりければ、黃昏時の程に、いと忍びて京を出で給うて、雙の岡のわたりにてぞ馬に乘り給ひて、かばかりの程ながら許多の年頃おぼつかなくて過しけるも、淺ましくいみじきに、あり〳〵てなき跡をしも、誰に逢ひ見るべきにかとおぼすは、くち惜しう悲しとも、世の常なり。月もおそく出でて、空も霞み渡りたれば、雲の

御秣かくれ―これも狹衣の歌の句

さらばこそ―「さればこそ」歟

この御前―今姫君

中納言の女―飛鳥井姫君也

召しゝかど―帝か

御覽ずる樣も―御氣附の仔細もありしとかいふ

尼になりて―飛鳥井姫君が

の道にかは。猶たしかに宣へ」とあるにぞ、母代「大宮のわたりにて御秣がくれせさせ給はざりきや。萬おしはからるゝ御口淸さかな。いとよう知りて侍るものを」といふにぞ、耳とゞまりて、何となう胸騷ぎて、狹「更に覺えぬぞとよ。たしかに唯宣へ。何のたよりぞ」と今少し近づき給へば、母代「いで、さらばこそ。殊の外に宣はせつれども」とて、母代「この御前の御母、故平中納言の妹にはおはせずや。その御姉は女院に中納言とて候ひ給ひしを、長門の前司何がしの朝臣に盜まれ給へりしぞかし。守うせ侍りにしのち、尼になりて常磐といふ所にぞ侍る。中納言の女は乳母のもとに心細げにてなむと聞かせ給ひて、召しゝかど、乳母、心かしこき樣にもてなさむとて、參らせざりし程に、御覽ずる樣も侍りけるとかや。前の別當左兵衞督の少將となむ名告せ給ひけるを、さやうの生公達の陰妻にて益なしとて、三河の守何がしにつけて筑紫へ出し立てて侍りける。女は本意なきものに思ひ歎きて、海の底にも入りなむとて逃げて侍りけるを、かの長門の尼君の、不意に尋ね取りて常磐に置きたり。明暮物を思ひ歎きて、尼になりて侍りけれど、

きらきらしく—今の樣の手は立派になるべし

わが御心の程—母代の氣風の知らるゝ樣に今姫君を仕立てられたれば、琵琶も洞院上より直せとの御詞はありたれど直さば却て惡くする樣な事になるべし

人の御文—狹衣が人にやりたる文

と思はせて—誤あるべし

けふの—狹衣が飛鳥井姫君に賜りし歌の下句

ざりつるを、様變りてうちおき難うぞおぼされける。母代うち見おこせて、母代「きらきらしく遊ばしつべう侍るめり。今樣の手は、草がちに濃く薄き墨つき紛はして、うちよろぼひて侍りつる。これは、强き文字づかひ昔やうに侍る。さは見知らせ給へりや」といふにぞ、え堪へで打笑はせ給ひぬる。狹「さやうの事もはかぐ\しう見知り侍らねど、げにかくこそはと、わが御心の程見えて、習はし聞えさせ給ひければ、琵琶もなほせなど上の宣はせつるを、中々ゆがみぬべうぞ侍りける」と宣へば、母代「いでや、然まで事事しうはいかでか」とてうち笑ふ氣色、いとしたり顏に心づきなしとも世の常なりと思ふに、母代「まことや、思ひかけぬ人の御文をもちて侍りしかな」と言へば、狹「朧氣にては散らさぬものを、世に侍らじ」と宣へば、母代「げに世の常の御事とは見え侍らざりき」と思はせて、心だつが憎ければ、狹「空言しける人なゝなり。さやうの事はまだならはず」など殊の外に宣ふを、いと高らかにうち笑ひて、母代「けふの晝間はなほぞ戀しき」など、やさしだちたる心づきなさぞ堪へ難けれど、狹「まいて然まではいつ習ひにける戀

手づからの—今姫君自身

さばわが—狹衣の心、或は今姫君自身のよめるならん

ゐり深う—彫り入れたる如く一字一字にしつかりと書きたる

いと荒々しう責めおどし聞ゆれば、いみじう怖ぢ勝りて、うつし心もなき樣に、月日に添へてなり給ふなゝめり。持ち給へりける扇の、うち置かれたるが、手習せられたるは手づからのしわざにやとゆかしうて、取り見給へば、まだはか〴〵しうも續かぬ文字どもの、いと幼くあさましき樣なるは、何と見解くべうもあらぬを、切にまもれば、「天地を袋に縫ひて」とあるは、母代が習はし聞えたる祝ひごとなゝめりと見ゆるに、繪に苗代し、荒田うちなどしたる所に、「母もなく乳母もなくて、春のあら田をうち返しうち返し、返す〴〵も物をこそ思へ」とあゝめり。又、「柳櫻をより合せ、うせざゝめれば、亂れぬめり」とあるは、歌にやとて切に讀み續くれど、一つにはあまり二つには足らぬを、怪しく〳〵と思せば、さすがに繪の心どもなゝめりと見ゆるにぞ、さばわが詠み出で給へるなりけり、三十一字とだに知り給はで、何しにかは扇の繪の歌よまむとは思し寄るらむ、とをかしきに、書樣さへうらうへ上下等しうて、一つに足らぬ歌を、やがて扇のひまもなく書きなされたる文字樣、ゐり深うわけ置かれたるなど、すべて斯かるはまだ見

子宗規に此人を以て堀川一家を瑕價もし給ふまじけれど

うへ―洞院上

かたはなる事―今姫君の缺點に氣がつかぬなるべし

うちわたり―洞院上が今姫君方へ來て

かうしも―斯く入内せしめん抔と洞院上が思ひ立つ事もなからんに

ありつかず―落付かず

らねど、大臣などの見る〳〵、出し立てけむよと思召され給はむ、いと名だたしう憂き事にこそはあらめ、など思すに、いかさまにてか、この事今日明日の程に止むるわざもがな、とあぢきなきもの歎さへ添ひぬる心地し給ひてけり。まことにうへの御心、もとより、こまやかに人のありさまなど知り給ふ事もなく、唯ひとへに人に劣らじの御心華かにおはして、女院の御方ざまも頼もしきを、中宮の御有樣に、やゝ立ち勝りてもてなしかしづきて、われも出入り見おつかはむと思し立ちてしかば、少々のかたはなる事も、見とがめられ給はぬなるべし。時々うちわたり見奉り給ふには、唯いとおれ〳〵しう、物つゝましげなる樣にて、居給へるかたちなどは美しけれど、内々のかたくなしき御有樣など、見咎め給はぬなるべし。けしからず聲高になどやうに見え給はば、かうしもえおほし立たじを、もとよりいと言ふかひなきやうにおはせしを、いとゞ母上におくれ給ひて、程もなく、知らぬ人の御あたりに、ありつかず引き別れて、はな〴〵ともてかしづかれ給ふに、われがの心地もせずほれ惑ひ給へるに、此御後見さへ、心にまかせで、

御後見の―狹衣の心、從來は今姫君の不肖なるは世話する人の惡きにて、當人は只田舍びたる迄の事ならんと思ひしに、今見れば案外なり
かど過ぎて―才はじけすぎて
あな恥かしや―以下狹衣の心
唯國王とて―今の帝は國王と申せども、只花々しくいかめしきのみならず
このわたりより―堀川の由緣とて斯る人物を奉らむは恥辱なり
給へむよ―「給はむよ」なるべし
ひとへには―杓

ず。念ずるぞいと侘しかりける。ふたかへりばかり彈き給ふに、いとわりなき聲をおとしあげ、唱歌するに囃されて、かき返しかき返し、同じ「いなごまろ」にて、時もやゝかはるは、いとすべなきまでおぼえ給ふ。御後見のいとさかしく、かたはらいたき樣したるもてなしに、よからずあやしき若きものどもの集りて、人にうちはやりありつかぬなゝめり。自らの御有樣も、唯おびれて、うちさとび給へるにこそは、など世の常におもひつるを、いとことの外におはしけるかな、又これを内裏に參らせむなどまで、思し寄りつらむ上の御心ぞ、今少しあさましきや、年頃もいかにぞやある御心とは見つれど、あまりかど過ぎて、何事ももて出でて、好ましき所などはすゝみ給へる、と見つるは、そらごとにこそありけれ、かうまで心おくれ、思ひやりなきわざし出で給ふべしとは、思はざりける我心さへ、口惜しきまでぞ思ひ知られ給ひぬる。あな恥かしや、見るに唯國王とて、あざやかにそば〳〵しうもおはしまさず、さばかりなまめかしう恥かしげなる御有樣に、このわたりよりとて御覽ぜられ給へむよ、げにひとへには思召すべきにもあ

入立つも—何程立入りても構はぬらしき樣子は氣がおけずしてよけれど
上—洞院上
筋ことに—今姫君の琵琶は特別なりと也
猿—轉柱の事かといふ
いたち—此頃の俗謠なるべし
心もすみ立ちて—母代がうかれて
いなごまろは—上の歌のつゞきなるべし

入立つもことに咎め顏ならざんめるは心やすけれど　ひとわたりも心劣ぞし給ひぬる。母代局なるに、かくなむと人の告げければ、急ぎのぼりて、姫君の居給へるうしろの方の几帳おろしたる所に居たり。さなめりと見給ひて、狭「いづら、琵琶承れと上の宣はせつるは」と宣へば、母代「いでや、人のなべて聞き知らせ給ふべくも侍らぬ、筋ことにこそ侍るめれ」と、いみじうしたり顏なる氣色ことにて、琵琶をとりよせて姫君に奉るまゝに、母代「まづ猿をつなげ」とさゝめくしも、例のあらはにぞ聞ゆる。教へられていとしどけなう、ゆる〳〵とぞつなぎ給ふ。又さし寄りて、母代「その次には、かなでをかなでを」と、肘して突くめれば、今姫「いたち笛吹く、さるかなづ」と、彈き給ふを、母代いと面白うめでたう思ふに、え堪へず心もすみ立ちて、末に待ち取りて、扇うちならして、母代「いなごまろは拍子打つ、きり〴〵すは」など、細目開けて首筋引立ててをれかへり〳〵彈く側顏の、御簾に透きて見ゆるは、をかしなども世の常の事をこそいへ、明暮ものむづかしき心の中、けふぞ皆忘れぬるに、思ふ儘にも、伏しまろびえ笑は

言ふべき事も覺えず―今姫君がおはしそめたりし日―狹衣が始めて訪ひ來し日
かの母―母代
母上―洞院上
おびれ―幼稚に
吉野川―母代のよみたる歌巻一にあり
これより後―吉野川の歌をきゝて以來、よき歌もあしき歌も多く聞きたれども

今少し目止らぬにしもあらず。狹「疎々しくのみ思したるがつゝましさに、常にもえ參らぬを、又疎なるにやおぼしなすらむと、心ときめくばかりは絶え侍らず」など聞え給ふを、言ふべき事も覺えず恥かしげに、汗のみ流れて侘しきに、始めおはしそめたりし日、人々いらへ遲く聞えたりとて、母代が腹立ちて罵りて、人々をはしたなく言ひしを思し出づるに、又如何に言はれむとおぼすに、身もわなゝかれて、いとゞ更に物も言ひ出づべうもなければ、かの母詠みかけたりし歌をこそは、母上聞きてほめ給ひしかと、まれまれ思ひ出でて、いたうおびれしどけなき聲にて、今姫「吉野川何かは渡る」と一文字も違へず言ひ出で給へるを、げに人の忘れぬふしやよみ出でたりけむと聞き給ふも、これより後、よきもあしきも數多見聞くを、さしも御心にも耳にも止らぬを、いつぞやかゝることの聞えしと、おぼし出でたるはをかしきに、その折のいらへは、又いかゞありけむと、忘れにけるぞいと口惜しきや。ほゝ笑み給へる氣色は、いひ知らず恥かしげにて、

狹　吉野川かへす〴〵も渡れとや渡るより又渡れとや瀨に

㊅狹衣今姫君を見て其の痴呆なるに驚く、母代より飛鳥井姫君の消息を聞く

上の御おきて―狹衣の心、洞院上のしつけならん
すぎ〳〵―次々
色にて―色髪とて髪の美しきをいふとぞ
こちたうは―多過ぎはせず
頓にも居ず―直に坐りもせず
さはいへど―狹衣の心
この身の程―今姫君の身分にては

例の御簾の許にて、狹「人や侍ひ給ふ」とおとなひ給へば、蚊の聲ばかりにて、「内にこそ」といふまゝに、走りて隠るゝ音す。上の御おきてなゝめりと聞き給へば、御簾を引きあげてのぞき給へるに、人々あまたありけるが走り重りて、衣の裾を各踏まへつゝ、すぎすぎに倒れ臥したるは、牧の馬の心地ぞしたる。几帳なども倒れなどして、いとゞ物騒がしければ、つく〴〵と見入れて頓にも入り給はぬに、姫君も、端つ方におはしけるなるべし、今ぞ立ちて入り給ふ。色々の衣どもに、濃き擣ちたる櫻の小袿著給へるうしろで、いとをかしげなり。髪は少し色にて、こちたうはあらず、さばらかなるさがりばなど、あてやかになまめかしき様にて、小袿とひとしうぞ見ゆる。うち見かへりて、顔いと赤うなりながら、頓にも居ず、あきれたる顔、さるかたに美しげなる様ぞし給へる。さはいへど、重りかならぬならひの立ち走りやすなるこそはと、この身の程にては、それを罪とも見なされ給はざりけり。辛うじて母屋の柱のつらに居給ひぬれど、扇などの行方も知り給はず、唯うち伏し給へる髪のかゝり、つらつきなど、少しけぢかくては、

まことしく―本物らしく。
ひがごとども―今姫君の琵琶の悪しき所
かやうの人を―狭衣の如き人を一人子に持たぬが残念
こぼれて匂ふ―「浅緑野べの霞はつゝめどもこぼれて匂ふ花櫻哉」
渡り給ひて―今姫君の方へ行きて
かばかりまで―狭衣の心、洞院上が斯迄思ひ立ちたるは
憎からざりし―狭衣がはじめて今姫君を見し時の事巻一にあり

かせ給ふばかりも、とこそ思ひ侍れ。此頃ばかり、御暇のひま〳〵に、このひがごとどもも直させ給ひてむや」と聞え給へば、狭「人の師などすばかりにては、直さるばかりの僻ごとには、よも侍らじものを」とてうち笑ひ給へる愛敬、こぼるなどは、是をいふにやと見えたるを、うちまもり給ひて、洞院「何事も、御有様ばかりはいとありがたうこそ。などて唯世の常のさまにても、かやうの人を一人まうけ侍らずなりにけむ。若かりし程は、斯うしも覺え侍らざりしに、今こそいと心憂く侍れば、かくあながちなる事をも思ひ立ち侍るぞや」など宣ふ。浅緑なる空の景色いといみじう霞みわたりたるに、こぼれて匂ふ御前の花櫻、常よりもおもしろう見わたさるゝに、いとゞ催されて、洞院「物の音も榮えぬべき程なゝめるを、渡り給ひて少しも聞きならし給へかしと聞えよ」と宣ふに、かばかりまで思し立ちにけるはげにめやすきほどの御有様にこそはなり給ひけれ、げにさま〴〵の物思に、心も盡き果てて、憎からざりし風の迷の後も、え氣色見ぬぞかしと、なまゆかしければ、狭「やがてかの御方に参り侍らむ」とて立ち給ひぬ。

内裏の度々―帝より今姫君入内の事を女院に催促ありし故斷りかねて承諾せんと思ふと詐りていふ也
ほけ〳〵しう―耄碌したる女ばかりを力にも出來ぬと思へば、自分の外には頼になる人もなき故
内裏わたりの―帝はよもや嫌ひ給ふ事もあらじと力強く思ふ
いづれの御事をも―誰をも疎略に思ふ譯ならねども
かゝりける御いそぎ―今姫君入内の準備
幼うより―幼時より巧者なるには
これは―今姫君
この御後見―今姫君の世話する母代

侍りしかど、同じ心に思ひあつかふ人なき事は叶ふまじげに侍りしを、女院に、内裏の度々聞えさせ給ひければ、いかにもかの御ことを否び聞えさせむが辱さに、いかにせましと思ひ侍るめれど、いさや、今はいとほけ〳〵しうなり給ひにける人ばかり頼みてはいかゞなど、心ひとつなるやうに侍るを、聞えさせむとてなむ。内裏わたりの御有様などは、さりともえ御覧じ放たじとなむ、頼みきこえて」など宣へば、狹「いづれの御事をも思ひわき聞えさせ侍らねど、何となう身のいそがしう侍る程に、怠り侍るにこそ。中宮の御方などには、おなじ百敷にて、自ら覺束なからぬ心地し侍るを、げにさやうにておはしまさば、同じ事にこそは。かゝりける御いそぎをも承らざりけること」など聞えたまふ。洞院「今様の人は、幼うよりあるべかしうこそあれ。これはいかなるにか、あまり心もとなき御有様なゝめるぞ、さやうの御交らひには、かひなき様にやと見え侍るを、さるべき事など敎へ聞えむ人もがな、と言ひしを聞きて、この御後見の、琵琶ををかしう彈く人ありとて、此頃習はし聞ゆるを、同じくは、いかでまことしく、人の聞

いたうも―堀川によく相談もせず

大將殿―洞院上が狹衣を招きし故

をさなくより―狹衣が

この御方―洞院上

みづから―洞院上自身

わらゝかに―がらがらして

かた紋―地紋、浮紋に對していふ

聞えさせつる―御招き申したるなり

はなたぬゆかりにもおり、我もてなしかしづきて候はせば、えおろかにも思さじを、大臣もさ宣ふとも、いづれの御事にも、え思しおとさじ、と思ひ立ち給ひて、殿にもいたうも聞え合せ給はず、御心一つに急ぎ立ちて、二月ばかりにと思しけり。

つれ〴〵なる晝つ方、大將殿わたり給ふべく聞え給へれば、參り給へり。をさなくより、いづれの御方にも隔なう、殿のならはし聞え給ひつれば、女房なども見え奉らぬはなき中にも、この御方はみづからもわらゝかに愛敬づき給へる御心ざまにて、わざと隔て奉り給ふこともなかりけり。紅のきぬどもあまたが上に、櫻のかた紋なるを著給へる御容、はなや〴〵と淸げにて、見るかひある御もてなし有樣なり。洞院上年のつもり侍るまゝには、世の中もいと心細くのみ侍るにも、後の世の爲までも賴み聞えさせてこそ、中宮の御方には、明暮へだてなくものし給ふなれど、此方にはいと戀しき程にのみなさせ給へば、思ひ侘びて聞えさせつるなり。この世は實に、斯うても過ぎ侍りぬべし。後の世のためを思ひ侍るにも、いとくち惜しうのみ侍れば、この姫君の御有樣をも、いかでなど思ふ事

奏せさせ―后の宮が
齋院の―源氏宮が終に入内せずなりしが殘念なるに
かの大臣―堀川
ねぢけがましき生出―今姫君の素性のよからぬ
御覽じ知るも―后の宮が
御事―崩御の事
御心にこそ―后宮の御了簡にある事
わたらせ給ふるに―帝の后の方へ來給ふ折に、此下に脱文あるべし
思ふかた異に―堀川が別に了簡があるかも知れぬに
御覽ずれど―后宮が
怨み聞え―洞院上が
御心―洞院上の氣象
少しは―洞院上の心

き慰に」など聞えさせ給ひければ、内裏の渡らせ給へるついでに、しかぐ\なむと奏せさせたまひける。帝「齋院の御事のいと口惜しうなりにしを、かごとばかりも、そのゆかりは嬉しかるべけれど、かの大臣のさも思ひ寄らざらむは、如何なるにか」などばかりぞ聞えさせ給ひける。御心の中には、おとゞの思しやりしもしるく、ねぢけがましき生出などを、いとめやすき事とも急ぎ思しめされざりけり。かやうの御氣色と御覽じ知るもいとほしければ、后「故院の御事の後は、よろづ物をのみ思召して、かやうの事を、唯今は物憂げになむ。猶大臣の奏し給はむぞよかるべき」などぞ宣はせけるを、洞院「殊更に大臣の方ざまならでもと、思ひ侍るなる。御心にこそ侍らめ」など、度々聞えさせ給ひけれど、いと苦しう覺えさせ給ひて、例のわたらせ給ふるに、帝「今おとゞの氣色見てこそは。思ふかた異にもあらむを、進み出でてはしたなうや」など宣はせて、御心にも入らぬ事と御覽ずれど、かく怨み聞え給へば、唯思し立つべきさまにぞ聞えさせ給ひける。いたうおし立ち物花やかなる御心にて、少しは御心ゆかぬ事なりとも、女院もかく思し

この御爲―洞院上の爲め、以下堀川の心
母は内裏にも―今姫君の母は一條院に仕へし事あるに又其縁を擧るは
さやうの御交らひまでは―今姫君の孫子が女御などになる器量でない
中々なる事―入内後此様な事ならぬ入内せしめぬがよかりしと後悔する事あらば
大將―狹衣
一人の御ゆかり―坊門上の子供ばかりを世話する御了簡ならんと
御はらから―洞院上と姉妹
この人―今姫君
大臣のゆかりには―堀川の一族では
たちまちの―誤あらん歟

子ども覺されねど、げにこの御爲には、さあらずとも同じ事なれば、などかは、然もありぬべうは、惡しかるべき事ならねど、母は内裏にも御覽ぜしものを、いでや、御心の中もいとほしうやあらむ、あながちなる事とや、世の人も言ひもどかむ、など思すをばさるものにて、時々見給ふに、いかにぞや、さやうの御交らひまでは、思しかくべうこそあらざゝめれ。堀川「中々なる事などもあらば、たゞなるよりは、かたはら痛うこそは侍らめ。唯大將だに平にて侍らば、自ら誰が御行末にも仕うまつりてむ。同じ御心に思し賴みてを、ものし給へ」と聞え給へば、唯一人の御ゆかりよりほかに、思しあつかはじとにこそはあらめなど、怨しうおぼされて、后の宮と聞えさせしは、尼にならせ給ひて女院とこそ聞えさすれ、御はらからといふ中にも、いと懇なる御中なれば、いかなる事なりとも、御心に任せぬやうはあるまじければ、洞院「この人の事をかくなむ思ひ侍る大臣のゆかりには、中々かうしも思ひ扱ふまじけれども、年の積るまゝには、世の中も心細きを、おなじうはとなむ思ひ給ふる。たちまちの徒然のまぎれにも、さまざま羨し

つらきをあらぬには—かの夜の契を今更取消す譯にはゆかぬ
今はなほ—女二の心、狹衣との文の遣取なども見苦しき故、かゝる文の來ぬ樣にしたしと
御氣色を—女二の樣子を見れば中納言も返事を催促する譯にゆかぬ
憂きものに—狹衣の心、女二宮につらき者に思はれて仕舞つた
㊄今姫君を入内せしむべき洞院上の計畫、狹衣に後見を頼む
大殿の御方—堀川邸
母上—養母洞院上
行末—我身の行末
聞き給へば—「聞え給へば」の誤なるべし

など思しつゞくれば、今はいみじき事をつくし給ふとも、つらきをあらぬには、なし難げなり。今はなほかやうの事も、いとゞかたはなるを、見ぬわざもがなと、あらぬ所のなきも、われしうおほし亂れながらも、言に出でてこそ宣はせねど、いと苦しき御氣色を見れば、いかゞは聞えむ。中納言「常よりは御覽じつ」とばかりなる返事を、憂きものに思ししめられにける、わが心の恨めしさを、今はいかゞはせむと思ししづめず、若宮の御うつくしさの斜ならずおよずけ給ふ事、くやしう悲しう思さるべし。

まことかの、大殿の御方にかしづかれ給ふ今姫君は、廿歳にもやゝあまり給ふまゝに、いとをかしげにねびまさり給ふを、母上いとはなやかに物好し給ふ御本性にて、齋宮の御有樣を見奉り給ふもうらやましう、行末の心ぼそさも、年月に添へておほし知られば、この君をかうまで取り寄せつとならば、同じくば人なみ〳〵にもてなして、かく樣樣にもてかしづき給ふ御方々の、くさはひにもせむかし、など、切に人に劣らじの御心おきてにて、内裏參の事など思し寄りにけり。殿にも斯くなど聞き給へば、まことの御

ゆかしがり聞えさせ給ふめる人―狭衣
いでや…―中納言の心、狭衣が最初女二宮を懐ふ様なりしは不審なり
御覧じ―女二宮が
床の上の―女二の心、「見るも悲しき床の上」謂ふ歌によれば、若宮が女二の子たる事も狭衣が承知したりと見ゆ
なべての―女二の心
御心構―故母宮の若宮誕生前後の苦心
この世も―現世の父帝もあの世の母宮も
御心の深さ―母宮の
亡き影―母宮の
憂き事も―母宮は憂きに堪へずして亡せたるに我は何とて今迄死なぬならん

るさまなど、明暮ゆかしがり聞えさせ給ふめる人に見せ奉らまほしきに、いでや、過ぎぬる方の怪しく思はずなりしぞかし、何事のさはあるべきぞ、と思ひ續くる。斯うのみつもる御文の數も、さだかに御覽じ續けねば、なか〳〵何とも知らせ給はぬに、床の上のかたみなどは、殘りなう聞きあらはし給ひてけりと思すに、なべての人も皆斯くのみこそはあらめ、されど餘所の人は、何しにかは斯うもいひ聞かせむ、中納言などをも、其折は知らぬとこそは思ひしか、などおほすに、其折の御心惑におとらず恥かしういみじきにも、身ひとつにだにあらず。強ちなりし御心構の程を、院も聞かせ給ふ樣もあらむかしと、他人よりも御心の中はいといとほしう　この世もかの世も、唯憂き身ひとつのゆかりに寠れ給ひぬるぞかし、と思しやらるゝ御心のうちなどは、長らふるもあさましくのみぞおほし知られながら、げにかう死にせぬ例もありけるを、こよなかりける御心の深さかな、と羨しう、亡き影の見給ふらむも、つきせず恥かしうぞ思されける。

女二　憂き事も堪へぬ命もありし世にまだ長ふる身をいかにせむ

手習など—狹衣が

おもふ處—「おもふ」は「たがふ」の誤寫歟

御ひとりごと—「うき節も」の歌

奉り給ふ—此畫を

内侍—中納言也

㈣女二宮狹衣の畫を見て悲む

若宮の—狹衣が若宮を預り居る故其方の用向の爲に誰ともよく音信すれども女二宮は狹衣に音信せぬを見て

この人—狹衣

宮—女二宮

ひろげて—狹衣より贈り來れる畫を

やりつゝ、遊びむつれ給ふにぞ、憂き涙はこぼれながら、うち笑はれなどし給ふ。硯引きよせて手習などし給ふに、御殿油まゐるまで、懐よりも出で給はで、火近く取りよせ奉り給ふに、やがて晝の空の景色より始めて、しつらひ有様なども違はで、わが日一日眺め暮したる樣などを、おもふ處なく繪に畫き給ひて、若宮の笛吹き給へる傍に、ありつる御ひとりごとも書きつけ給ひて、

狹　塵つもり古き枕をかたみにて見るもかなしき床のうへかな

とて、泣き給へる所もあり。嵯峨の院へ奉り給ふ。内侍侍ふ頃なればなるべし。

若宮の御方ざまにつけて、今は何方にも、疎々しからず聞えかはし給へど、中々入道の宮には猶え聞え給はぬを、院は、「御返など、時々は人傳ならで宣はせよ。かゝる方樣につけても、この人をなむ誰が御爲にも頼む」など、常に聞えさせ給ひけり。宮は念誦堂におはしますに、例のもて參りて、ひろげて參らせたるを、誰がぞとて目止めさせ給へるに、御心得させ給へるにや、御顏の色移ひまさらせ給ひて、御經に紛らかさせ給へ

幼き—狹衣の心
宮の—若宮が早く成人なさればよい
起き出で—若宮が
おのが—汝が
思ひ捨てて—賢は我子なるを女二宮が構はずして
うき節は—狹衣をつらく思ふは尤なれど、若宮をいとしくは思はぬかと也
この—此、子の
御心の中—女二宮の
かやうにこそ—女二宮も此通り
目ざしたる—目の上の處にて前髮を切り揃へたる髮を自ら氣にして拂ひのけつつ

りて、若宮「いな、然れどそれは善きぞ」と宣ふ。幼き御目にも然ぞ見え給ふらむかし、中々さま變りて、いとゞいかに美しげにおはすらむかし、とおしはからるゝも、罪深うおぼえながら、なほゆかしきにぞ、胸うち騷ぎて物哀なれば、枕がみなる笛を取りて吹きすさびつゝ、狹「宮の、とくおよずけさせ給へかし。をしへ奉らむ。いかに美しう吹き給はむ」と宣へば、ふと起き出で給ひて、さかさまに取りて、美しき御口にあてて、笛の音のやうに聲を細く出して、さて、若宮「おのが吹くに似たるは」と宣へば、いひ知らず美しうおぼえ給ふにも、つれなく思ひ捨てて知らぬ顔に見はなち給へる御心の中は、なほ我があやまちと言ひながら、涙こぼれぬ。

狹 うき節はさもこそあらめねに立つるこの笛竹は悲しからずや

さても如何樣にか思したらむと、御心の中もゆかしく悲しき慰には、懷に引き入れ奉りたるも、いとつめたき御身形の美しさなどの、唯かやうにこそと思ひ出でられて、いみじう悲しきにも、げに疎なるべきかたみにはあらざりけり。目ざしなる御髮を切にかき

白き唐の―狹衣の服裝

かいつき―若宮が狹衣にかぢり付きたるを

大殿など具して―父も同居せる公の邸に來給へ

おとしめ―惡く言ひ

姫君―女二宮

髮は短くて―尼なれば也

う戀ひ聞え給へるこそ、心苦しう。院のさばかり疎ならず思ひ聞えさせ給ふをば、怖ち奉らせ給ひて」など聞ゆれば、狹「院の御志に劣るべくも侍らぬものを。なほ幼き人は、中々おとなびさせ給ふまゝに、思し召し知るにこそ」など宣ひて、はしつ方なる御座にうち臥し給へれば、若宮も御懷に入り給ひて、何とはか〴〵しうも聞えぬ事を、聞え戲れ給ふ御あはひ、いとかゝらぬ兒ならば、かたはらいたくやあらまし、と見えさせ給へり。白き唐の御衣どものなべてならぬに、同じ樣なる紅のかさなりたる、常の事ぞかし。されど夕映にや、なべてならずめでたく見ゆ。霰のいとおどろ〳〵しう降りたるに怖ぢ給ひて、衣を引き被きて、身にかいつき給へる、いみじうらうたくおぼえ給へば、狹「參らざらましかば誰がふところにか入らせ給はまし。かく怖しき雨も降らぬ、大殿など具して常に諸共に侍る所に出で給ひね」と宣へば、うちうなづきて、若宮「大臣はよしな。嵯峨の院こそ頭はきら〳〵として恐しげなれ」と、まづおとしめ聞えさせ給ふぞをかしきや。狹「姫君も、髮は短くて、憎げにぞおはしますらむな」と宣へば、頭うちふ

◎雪の夕狹衣繪をかきて若宮を慰む、女二宮の感傷

をさなき人—若宮

其方樣に—若宮の方へ行きたるに

ひき返されたる—不用なる故座席を疊みておくなり

かゝる人—狹衣をいふ、乳母の心

見えさせ給はぬほど—狹衣の來ぬ間

宮にさぶらひし人々、かたへは嵯峨の院の齋宮などに別れにしのこりは、さながら寂しからぬ樣にして候せ給ふ。

雪降りて物心細げなる夕つ方、大將殿內裏より出で給ふまゝに、いかに物心細げなる故鄕に、をさなき人、何心なくまぎれ給ふらむと、思ひやらせ給へば、其方樣にものし給へるに、思しやりつるも著く、山里の心地して人目も稀なるに、若宮の御乳母たちばかり、はしつ方にうち眺めける程なり。今ぞひき返されたる御座どもなほしなどして、打解けたる姿どもを、かたはらいたげに思ひたるもをかし。若宮は寢起きてむづかり給ひけるに、かく渡り給ひければ、喜びてむつれ聞え給ふ。いみじう哀にて、狹「參らざらましかば、いかに口惜しからまし」とて打淚ぐみ給へる氣色など、なほざりの志とは見えず、いみじう哀と思ひ給へるを、見奉る乳母たちなどは、かゝる人ものし給はざらましかば、限なき宮仕といふとも、此頃はいかに心細く、よるかたなき心地せまし、と殿の御志をうれしと思ひけり。乳母「見えさせ給はぬほどは、つれ〴〵げに思して、いみじ

萬に―源氏をも手に入れ難くなりし今日は、一日に二三度も女二宮へ文をやる故

あま―蜑、尼

限なき―女二宮は勿論貴き御身分なれど

淺からぬ御契―子まである中なるをいふ

をがみわたす―誤あるべし、不詳

ありのまゝに―狹衣の實子なる由を聞かせたらばどれ程堀川が歡喜するならんと思ふ「とや」は「とぞ」の誤なるべし

古宮―皇太后宮

のもとに枝さし添へじと、切に思ひ離れし折こそ、これを強ひて怨めしかるべきものとも思はざりしか、萬にとり所なく、悔しき事のみ盡きせぬまゝに、今更に日に二たび三たび、藻鹽草かきつめつゝ怨み聞え給ふさま、あまの濱屋に餘りぬべし。されど見るべきものとも思したらずとのみ聞くは、過ぎぬる方の報にやと、つらく心憂し。限なき御身の程といひながらも、わが身はなどて、さばかりの哀をもかけられ奉るまじきぞ、と淺からぬ御契の程も思し知るまじくやはと心憂ければ、をがみわたすにても止みぬべけれど、月日の過ぐるまゝに、珍しき樣におよずけ給ふ若宮の御樣を、さすがに餘所のものと見なし給はず、かく契深くてわがものにあづかり聞え給へるなどは、いかでかは世の常に思しなさむ。是より外のうき世の慰めはあるまじかりける身にこそ、と思ひ知られ給ふ、哀も悔しさも世の常ならず。大殿も常に渡り給ひつゝ、見奉りうつくしみ聞え給ふ樣は、疎ならぬにつけても、ありのまゝに聞え給はば、如何にとや思さるゝ。宮の荒れたる所々つくろはせなどせさせ給ひて、さるべき家司など別ちなさせ給ひつゝ、古

僧を尋ねにやりし曉

誰ともなけれど—誰の爲の法事とも言はずに

忍草—飛鳥井の腹の子

㊁狹衣前齋院と若宮とを預る

齋宮—女三宮

若宮—女二腹の狹衣の實子

前齋院—女一宮

見つき—狹衣になつき

住吉の里—若宮の處を狹衣が居心よく思ふ樣になれり

入道の宮—女二宮

夢のやうなりし—以下狹衣の心

一くだりの—女二宮が一行の返事をもくれざりしも、源氏宮をのみ強ちに戀し居たる時分は別に恨めしくも感ぜざりしも

まこと齋宮は寮へ渡り給ひしかば、若宮はいとゞ人少にもの寂しうてものし給ふを、大將は心苦しく思ひ聞え給へど、前齋院の一人住の心細きにより、嵯峨の院の、なほさながら思ひうしろみ給へと宣はすれば、大殿へもえわたし聞え給はで、常に自ら渡り給ふ。夜などもとまり給ふ夜な〳〵おほかり。若宮も見つき聞えさせ給ひて、いみじうまとはし聞え給ふを、いかでかは疎には思ひ聞えさせ給はむ、やう〳〵住吉の里にもなりぬべかゝめり。いづれも、この女宮達をば妹のやうにあつかひ聞えさせ給ふにも、入道の宮の厭ひすて給ひしつらさも、飽かずくち惜しう思しけり。ありし雪の夜の枕の雫は、忘れがたう悲しう思ひいで給へる。今はいかやうにか思しめしなりたるとも、如何樣にしてか、今一度け近きほどの御けはひを聞くわざもがな、と思ひ侘びては、中納言のすけをのみぞ怨み給へど、かひなき由のみ聞ゆれば、いと心憂し。夢のやうなりし夜な夜な、泣き給ふよりほかの御けはひは聞かで歇みき、一くだりの御返しなど、はた見すべきものとも思ひたらざりしも、わが心のあながちに盡しそめてし方より外には、なげき

あなこゝろうや―狹衣の心

阿私仙―かの僧を[illegible]の[illegible]にて[illegible]迦の際たりし阿私仙人に比せるなり

まどはしてし―行方を失ひし

稻淵の―「年を經し[illegible]かいかに[illegible]ふ事はなほは稻淵の瀧まされとや」

ありなしの―方士が楊貴妃の魂のゝりかをねたる長恨歌の故事を思ひてよめり

池の玉藻と―奈良の帝御寵愛ありし采女が身を投げし猿澤池に御幸ありし時の御歌「わぎもこが寢くたれ髮を猿澤の池の玉藻と見るぞ悲しき」

忘草も―漸々忘るゝ樣にもなりしならんに

されば―「これは」の誤なるべし

ありし曉―かの

狹 思ひ侘びつひにこの世は捨てつとも逢はぬ歎は身をも離れじ

あな心うや、この心ながらは、後の世もいかゞとうしろめたし。さても哀なりし阿私仙をさへまどはしてし口惜しさも、思ひやる方なきまゝに、かへり來てやあると、粉川に人度々つかはせど、無しとのみ言ひつゝ歸り參れば、妹のはかなくなりにけるにやと思すも、なか／＼なる稻淵の瀧なり。

狹 ありなしの魂の行方に惑はさで夢にも告げよありしまぼろし

池の玉藻と見なし給ひけむ帝の思も、中々目の前にいふかひなくて、忘草もやう／＼しげさまさりけむを、されば、さま／＼夢うつゝとも定めがたう、心をのみ動かし給ふ。げにいかなる昔の契にかとぞ思し知らるゝ。さらばありし曉、その夕べにや消え果てにけむ、とおほせば、誰ともなけれど、その程よりむつまじう思す僧どもにいひつけ給ひて、七日／＼まで、とぶらひをぞいみじう忍びてせさせ給ひける。いかなるにても、この忍草のありなしをだに、聞くわざもがな、と御心に離るゝ折もなし。

よぐ方の―避くる途なく往復共に妹背山の邊を通らねばならぬ運命をつらく思ひて、妹背といふ名が心にかゝりて也
安の河原の―「物思はぬやすの河原に住む千鳥何を憂しとて音をば鳴くらん」
殿には―堀川邸では父母が
嬉しさ―父母の
戯にも―狭衣の心
思ひよる筋―出家の望
ゆでつくろひなど―湯にて暖め治療して
けざやかなりし―普賢菩薩の出現せし時の佛
齋院―源氏宮
隔なく見奉る―齋院を

よぐ方のなかりけるも、契心憂くながめ入りて、舟のはたに寄りかゝりつゝ眠り給へる御まみの氣色なまめかしう見え給ふを、もの好ましき若君達などは、めでたうのみ見奉り給ひて、物心細げなる御氣色を、なほ如何なる御心の中にかと、安の河原の千鳥にも問はまほしかりける。

殿には、ゆゝしきまで戀ひ聞えさせ給ひければ、うち見つけ奉らせ給へる嬉しさの限なきにも、止めがたげなる涙の氣色も見奉らせ給ふに、戲にも、わが思ひよる筋はあるまじきかなと思し知るべし。雪やけに足も腫れてなやましう思さるれば、ゆでつくろひなどして、あるきなどもし給はず。けざやかなりし佛の御契の面影戀しく思ひ出でられ給ふにも、なほいかで此世を、樣あしからぬやうにて厭ひはなれなむ、と心の中ばかりは、ありしよりけにあくがれ勝りて、行に心を入れ給へれど、齋院ばかりには、え覺束なき程にもなし給はず。さるは隔なく見奉る事さへあり難くなりにたれば、この世の厭しさも催され給ふなるべし。

よべなど―以下狭衣の心

行も―御の勤の妨にもなる

都の方のものうき―都へ歸ることの煩さ

御覽じ入れず―食ひ給はず

棚無小舟に―「堀江こぐ棚無小舟行きかへり同じ人にや戀ひわたるべき」

胸の關路は―常に胸のふさがれるをいふ

しほどけさ―濡れ加減

あれ妹背の―俗謠なるべし

我ばかり―我程憂を懷ける人は無きならんと

と申して、夜中にまかり出でにける。その往き所などは、知りたりと申す人さぶらはずと申すに、くち惜しなども世の常なりや。よべ、など今少し問はずなりにけむ、曉に召せといひしかば、心安くて、行もまぎれがまし。人目もいかゞ、など心長閑に思ひしも悔しく、いみじとも世の常の事をこそいへ、いとゞ都の方のものうさもわりなけれど、人々「出でさせ給ひしのち、殿は物などすべて御覽じいれず、夜など、露ばかりも御殿籠らで、覺束ながりあかさせ給ひける」と口々語り申しつゝ、疾く〳〵と急がし聞えさすれば、心にもあらず棚無小舟に漕ぎ歸り給ふ程、胸の關路は隙なし。笛など持たせたる若き人々ありて、折に合ひたる音ふきならしたる、水の上にては、いとゞ面白くをかし、又櫂の雫のしほどけさも知らず顏に、手づから漕ぎ歸りつゝ、聲をかしうて、「あれ妹背の山か、さばれ」と謠ひたる樣どもは、各誇かに思ふ事無げなるは、なほ我ばかり物思はしきは無きなゝめりと、羨しく思ひわたされ給ふ。

狹　行き歸りこゝろまどはす妹背山おもひはなるゝ道を知らばや

おしあけ方の—「天の戶をおしあけ方の月見れば憂き人しもぞ戀しかりける」
かきくらさせ—涙にくれ給ふ
ことごとなき—父母源氏のことなどを思ふ外には他事もなき
奉らせ給へる—父母より差向けたる
辛うじて問ひ給ふに—辛うじて歸り來れる道季に問ひ給ふにの意なるべけれど詞足らず脫文あるべし
妹—飛鳥井姬君
夜の間—今夜中彼處へ行きて居らん
後のあつかひ—葬式など

おしあけ方の月ならねど、よろづにすぐれて戀しく思ひいでられ給ふに、いとゞ道も見えぬまでかきくらさせ給ふ。

狹 戀しさもつらさも同じほだしにて泣く〳〵もなほ歸る山かな

と、ことごとなき御心のうちながら、辛うじて、下山に歩み盡き給へるにぞ、いつしかと奉らせ給へる御迎の人々、參り集りたるさるべき若上達部殿上人など、おくらかさせ給ひてける怨めしさのかはりに、われも〳〵と競ひ出でて吉野の川の所もなきまで、心慌たゞしくなりぬれど、ありし山伏今朝尋ねさせ給へば、もの騷がしくて、え逢ひ給はずなりぬれば、必ず尋ねて參りあへとて、道季を止め給へる、待ち給ふとてやすらひ給ふに、辛うじて問ひ給ふに、道季「此頃候ひける所も取拂ひて、紙障子に、よべの御衣をなむ掛けて候ひつる。こもりて侍る僧どもに問ひ候ひつれば、妹の月ごろわづらひ侍りけるが、限になりたるよし、告げにおこせて侍れば、夜の間候はむ、もし死なば後のあつかひも見讓るべき人もなきを、如何すべからむ よろしげならばやがて歸りなむ、

㊀狹衣再び彼の僧に逢はんとして得ず、出家の望、飛鳥井姫君の爲に法會を營む

み山の里の—高野粉川をめぐる途中の景色也

をだまき—枝なき木なるべしといふ

おもふ心—源氏宮に對する戀

御氣色ども—父母の樣子

いつしかと—狹衣の心、父母が歸を待ち居るならんに我が行方知れずと聞きたらば

思はずに憂しと—源氏宮が

狹衣物語　卷第三之上

み山の里の寂しさは、げに男鹿の跡よりほかの通路も稀なりけるを、夜の程にいとゞ閉ぢ重ねてける氷の楔は、足もいみじく堪へ難くて、歩みもやられ給はず。そこひも知らずふかき谷より生ひ出でたる木どもの根の、苔がちにうちものふりたる氣色、枝さしなど疎ましげなるに、苦しうて寄り居させ給へる御顔の色合氣色など、山の中にも目とゞめ奉るものやあらむと、ゆゝしきまで見え奉り給ふ。

狹谷ふかみたつをだまきはわれなれやおもふ心の朽ちてやみぬる

例の事に觸れて、まづ思し出でらるゝに、これより山深くも入りなまほしきに、うしろめたくわりなしと思したりし御氣色どもの、思ひ出でられて、いつしかと思すらむに、あ行方なく聞きなし給ひて、いかばかり思し歎かむ、と思ひやらるゝあらましごとに、あぢきなく涙も落ちぬべきに、又うち添へて、思はずに憂しと思したりし折々の御氣色は

う、残りゆかしとも世の常なれば、佛にも、「この行方たしかに聞かせ給へ」と、數珠おしすり給ふ。しるし如何とぞ。

さりぬべき所―遁世するに適當なる場所なき故よく〳〵考へ居る内に日ばかりたつて居た處が
然るべきにや―これも然あるべき因縁ならん
うちつけに―今直に弟子入りするは輕卒らしき故
殘りの日數―百日籠りの日數の殘り
惑はしてむは―行方知れずにして仕舞ふのは
年頃よりも―九で手がかりなかりし今までよりも
それに―其時話をすべし
なほ〳〵しき―賤しき

侍らねば、かゝるものは苔の衣に重ね候はむもいと辱く侍るべし」とて、更に手も觸れぬを、猶、狹「あが君〳〵、又對面するまでの紀念にもし給へ。世を背きなむの本意いと深くて、いと年頃になりぬるを、ほだしなどの強ちなるも無きものから、さりぬべき所などなきを、朧氣ならず思ひ定むる程に、月日のみ過ぎ行くを、然るべきにや、弟子にもし給へと聞えまほしくなむ。されどこの度は、うちつけに物騷しきやうなれば、よろづ心にこめてなむ。京にはものし給ひなむや。いつまで斯くてはおはすべきぞ」など宣へば、僧「都の方は、今は見給ふべしと思ひ給へでなむ。殘りの日數今いくばくも候はず。此程過してば、竹生島になむ又暫し候ふべき」といふも、いと行方なきやうにて、惑はしてむは中々年頃よりもいみじかるべければ、狹「さらばたゞ今しばしそのわたりにものし給へ。後夜の程過してぞ出で侍るべき。それに聞えさせむ」と語らひ給ふ樣のなつかしさは、げに然ばかりなほ〳〵しき心にもえ立ちやらず。僧「出でさせ給はむに、かの御堂の方に尋ねさせ給へ」とて去ぬる名殘も、胸ひしげたるやうにて、いとおぼつかな

その人と—妹たる事はわかりたれども

如何にも〳〵—狹衣の心、事情の如何はさておき

懈怠に—御勤を怠りました

透影—衣薄くて肌のとほりて見ゆる也

事々しき—用意の法服をやるは仰山らしき故

し人の事なれば、耳とゞまりて」など宣ふ御容の、いひ知らず淸らに見え給ふを、さる山伏の眼にもめでたくて、うち畏まりて、僧「その人とばかりは見給ひしかど、身を厭ふ心深くて、見給ひしかば、髮なども削ぎやつし侍りてなむ」とて、人々の聞くに殘りなくば言はじと流石に思ひたる氣色を、我もゆかしういみじといひながら、中將の向ひ居たれば、唯、如何にも〳〵、海には落ち入らずなりにけるなンめり、と聞き給ふに、あさましう嬉しく心安くて、狹「あり所は知り給ふらむな。幼き人や具したりし」と、せめてゆかしう思されて、忍びて問ひ給へど、その事は聞えはてず、僧「中々覺束なくて別れ候ひにし。年頃よりも哀なる事多くてなむ」とばかり言ひ消ちて、僧「懈怠になり候ひぬ」とて立つ。透影隱もなくて、風止るべき樣にもあらぬを、いと哀と御覽じて、あまた持たせ給へる法服ども、事々しきやうなれば、わが著給ひたる白き御衣の、なつかしう著なし給へる移香所せきまで薰みちたるをぬぎ給ひて、狹「山おろしもいと荒けなげなンめるを、防ぎ給へ」とて賜はすれば、僧「もの覺えて後、木の葉より外に身にも寄せならひ

いきよる―「行き寄る」歟
安樂寺―太宰府に在り
北の方―これ常磐尼也
妹などの事―これ飛鳥井姫君也
さらば―狹衣の心
その人―その妹
こゝにも―我さ

昔は候ひしかど、死に侍りし後、唯かやうにいきよる山の末、鳥の聲も聞えぬ木の空洞などにて、苔の筵を敷き松の葉を食べて、虎狼といふものを、友と見ならひて過し候ふ」と聞ゆれば、人々いみじう哀がりて、「さても親は何人とか聞えし。いつまでか斯くては」とせめて問はれて、僧「帥の平中納言といふ人侍りけり。幼くてかたはものになり侍りにければ、法師になして、比叡の山に行ひしてあらせむ、など申しゝ程に、うち續き筑紫にて親達かくれ侍りて後は、安樂寺といふ所になむまかりて侍りし。妹一人、乳母などいふ者候ひしかど、行方も知らずなり侍りにしを、比叡の山拜み奉らむの心深くて、一年なむ、長門守の北の方は離れぬゆかりと聞き侍りて　それにつきて都の方にまうで來しなり。さてなむ、妹などの事ほの〴〵承りしに、中々夢のやうに哀なる事どもの侍りしかば、夜をだに明かさで、土佐の室戸といふ所に、「この二三年侍りつる」といふに、さらばこの底の藻屑のゆかりなりけりと、いみじう哀にて、大將殿さし出で給ひて、近う召し寄せて、狹「さてその人はいかゞ聞きない給ひし。こゝにも仄かに聞き

功いりたる—修行の積みたる
菩提の—千手經の文句
奧の方に—經文の末になると共に
ひさう—以下狹衣の心、佛教にいふ三十三天の中の最高の天を非想天又は非想非々想天といひ又其垢を離れて清淨なる點を讃して非想摩尼天といふとぞ
御誓—未詳

ちやすみ給ふと思ふにや、三昧堂の方に、千手經をぞ、いみじく功いりたる聲の尊きにて讀むなる。「菩提の因とならむ」といふ所、中にも耳止り給ふに、中將いみじく哀がりて、いかやうなる僧ぞと、見せにやり給へば、狹「片眼あしき僧の、いみじく哀げなるに候ふ」と申せば、呼びにやらせ給へり。曉月夜のさやかなるに、紙衣のいと薄きに、麻袈裟といふものを著て、うちさらぼひたる程、さすがにいと疎ましげなる程とは見えで、わりなく寒げに哀げなり。中將、「いみじく哀なりつる御聲を、聞き過されでなむ。今少し讀み給へ」といへど、僧「かやうの御前などにて聞かせ給ふべくも候はぬものを」といへども、忍びやかに讀みたる、奧の方になるまゝに尊く哀なり。大將殿は、すこし奧のかたに入りて聞き給ふ。ひさうまにの天は、如何にしてさしもかたはになりにけむ、何事も前の世の宿世などいふらむ事は誠にや、わが身には、隨身自在陀羅尼といふ御誓違ひぬかし、など、かう淺ましきかたはにさへ、我御身を思しよそへらる。狹「この御寺に住み給ふか」など問はせ給へば、僧「かくて百日ばかりと思ひて候ふなり。親などいふもの、

其庭にだに—釋迦靈鷲山にて說法し給ひし時五百人の外道等之を嘲笑して其座を退きし事

普賢—普賢菩薩の形を現したる也

恒順衆生—普賢菩薩の十願の第三願

上大—誤あるべし「正路」などの誤寫か

かいせん—「かいし(開示)」などの誤歟

人にはことなりける—狹衣が人に勝れながら

作禮—經文の終也

光明身」など、心にまかせてよみ流し給へるに、聞く限の人々、何事も聞き知らぬ怪しき修行者まで淚を流したり。釋迦佛の說き給ひけむ其庭にだに、笑ひまぎらはしけむ提婆達多、外道などいふらむ者だに、今宵の御聲には、皆圍繞すらむと覺ゆるに、まいて身をつゞめてとある御誓は、違ふべきならねば、御燈のいと仄かなるに、御前の暗がりたるに、普賢の御光いとけざやかに見え給ひて、程なく失せ給ひぬる、尊く悲しとも愚なりや。恒順衆生の御願もいとゞ頼もしく、人天涅槃の上大をかいせむ事も疑なく、この世も後の世も人にはことなりける身ながら、心の中の物思はしさは、人よりけに口惜しかりける契と思ひ知らる。さらば、これや實に、何事も人より少しまさりたりけるものに、思はれたりけるかはりならむと、我ながら思ひ知られ給ふ。いとゞ心も澄み渡りて、うち休まむとも思されねば、やがて、「作禮而去」までとほし果て給ふに、御堂の内しづ〳〵として長閑なるに、行ひの聲もやめ、各所作どもうち忘れつゝ、聞き入りたるに、曉がたにもなりぬ。千手陀羅尼忍びやかに讀み給ひて、時々眠り給へる程を、う

そこと敎へよ—飛鳥井姫君の沈みし處を

是人命終—法華經普賢品の句、是人とは法華經を書寫したる人をいふ

石山とぞ—近江の石山寺の樣に思はる

まどろまれ給はず—狹衣が

藥王汝—法華經法師品の偈の句此次の句は「不聞法華經、去佛智甚遠」

我爾時—同上

くまなき水の上に、いとゞ光ことに見え給ふ。

狹「うき船のたよりに行かむわたつ海のそこと敎へよ跡のしらなみ

あはれ」とひとりごち給ひて、狹「是人命終當生忉利天上」とうちあげ給へるは、四方の山の鳥獸も耳たつらむかしと尊くいみじきに、三位中將物めでする人にて、涙をほろほろとぞ溢しける。

まうで著き給へれば、御前の松山の氣色、谷の下水の流など、唯石山とぞ覺ゆる。寺の堂僧修行者どもの、よろしきもいやしき程のなども、あまた籠りたり。心細げにうち行ひつとめたるけはひども、何事を思ふらむと羨ましげなり。うちもまどろまれ給はず、夜もすがら行ひあかし給ふも、一方にもあらず、心の中はみだれぬべくて、いとかう思ふ事かなふまじくば、ひたすら此世を思ひ離るゝしるべし給へ、など思し入りつゝ 狹「藥王汝當知如是諸人等」といふわたりを、心細くうちあげつゝ讀みたまふに、太山颪さへ荒々しく吹き迷ひつゝ わが御心の中にも心細く悲しき事限なし。狹「我爾時爲現淸淨

よし野川―源氏、宮に遂に逢はずなりしを喩ちたる也

うへはつれなく―「難波女のすくも焼く火の下燃れ上はつれなき我身なりけり」

底の水屑―飛鳥井姫君

らはせければ、乗り給ひて漕ぎ行くに、岩波高く寄せかくれど、汀は氷いたくとぢこめて、浅瀬は船もえ行きやらず棹さしわぶるを見給うて、

狭 よし野川あさ瀬しら波たどりわびわたらぬ中となりにしものを

思しよそふる事やあるらむ。妹背山の近きは、なほ過ぎがたき御心を酌むにや、御船も出で行きやらず。

「わきかへり氷のしたにむせびつゝさもわびさするよし野川かな

うへはつれなく」など口ずさびつゝ、辛うじて漲り渡るに、かの底の水屑も思し出でられて、唯かばかりの深きにだに思ひ入りがたけなるに、いかばかり思ひてなど、さし對ひたりしありさまの物深くなどは無う哀れげなりしを、さしも思ひ沈みけむよなど、疎ましき方にはおぼされず、唯今見るこゝちし給ひて涙のこぼるゝを、まぎらはして、頬杖をつきて、つくづくと底深くながめ入り給へるまみより始め、御數珠にもてはやされたる腕つきなどの、世に人のなべてもたらぬものにもあらねど、めづらしく美しげなり。

みな宣はせて―既に狹衣より命じ置きたれば

これだに―既定の人數丈にても

知られたる―是まで中務の宮の少將の説明

御ゆかり―式部卿の宮の北方は中務宮の妹

べき人々のうしろめたかるまじきをぞ、數多まゐるべきよし仰せられける。紀伊守には、船のまうけ、心ことに設くべきさまなど仰せらるれど、かねてさやうの事もみな宣はせてければ、心もとなき事なし。今日になりてぞ、斯くとあまた人々きゝて、我も〳〵と出立ち參らむとさわげど、狹「俄にはいかでか。殊更に忍びてなむ。精進などせざらむ人は便なく」など宣ふを、「かねて仰せごとなかりける事」とくちをしがり歎けど、これだに、いと思はずに人がちにむづかしとおほせど、殿のあながちに添へさせ給ふ人々は、えとゞめ給はざるべし。中務の宮の少將といひしは、今は三位中將、この頃の殿上人の中には、何事にもすぐれて世の人にも知られたる、中宮の御叔父の式部卿の宮の御ゆかりに、この御方々にも、人よりはむつまじう馴れ聞え給ひて、大將の御有樣をも、なづさはまほしう思ひ聞えたるなどばかりぞ、擇り捨て給はざりける。

霜月の十餘日なれば、紅葉も散りはてて、山も見所なく、雪かきくらし降りつゝ、物心細くて、いとゞ思ふ事つもりぬべし。吉野川のわたり、船いとをかしき樣にて數多さぶ

明日ばかりと—明日頃出發と

きてもや—高野へ參りたらば

狹も—堀川も狹衣の樣子を病氣と思ひ居るに

心苦しうて—狹衣か

かねてより—前前から催して事仰山にならば

所に—「心に」の誤か

一夜ばかり—此前後誤脱あるべし

御心より外に—狹衣の機嫌を損ねんも惡しと斟酌する也

の親しき、御供に候ふべきよしなど、忍びて宣はす。寺の僧どもに賜はすべき法服ども、あまた設けさせ給ひける。明日ばかりと思す日、殿の御前にて、狹「亂れ心地の、例ならず思う給へらるゝを、もしさてもや直り侍ると、高野粉川などに詣でむとなむ思ひ給ふ。俄なるやうに候へど、明日など日よろしく侍るなれば、忍びてとなむ思ひ侍る」と申し給へば、我もさのみ例ならぬ御氣色と御覽ずるに、俄なる御出立は、如何におほすにかと、御胸騷がせ給ひて、まづ唯御淚のこぼれ落ちぬるは、いかに思召すにかと心苦しうて、狹「かねてより事々しくなり侍らば、殿上人なども我も〳〵と出でたち侍らむに、世のいそぎになりて、物騷がしくなり侍らむも、所にたがひてむづかしう候ひぬべければ、唯某などしたしき人々十人ばかりをぞ聞えさせ給ふ。一夜ばかりさぶらふべき」と聞えさせ給へば、堀川「同じ都の内にもあらず。大事にこそあむなれ。はか〴〵しき人も具せで、忽にはいかに思立ち給ふぞ」とて、いとうしろめたげには思したれど、又御心より外にとまり給はむをも如何思ひ給はむ、と心苦しければ、えとゞめ聞え給はで、然る

有りがたく―住み難く覺えまさり―狹衣が
西の山もとに―狹衣が嵯峨の方へ、女二宮のある故なり
いとしも―女一宮の事
御後見―女一宮の
さもあらせ―狹衣へ嫁せしめたしと
申させ給ふ―狹衣が
かゝる御氣色―狹衣の若宮を愛する樣子を
御祈のしるし―狹衣の遁世もせぬは父母の佛神に祈る驗なるべし
㊅狹衣高野山に上りて飛鳥井姫君の所縁の僧に逢ふ
思し立ちて―狹衣が

めやすかりなむかしとなむ思したる」と聞え給へど、世はいと有りがたくのみ覺えまさり給ひて、いかならむ隙にもと、心ばかりは西の山もとにあくがれはてにたれば、まいていとしも勝れてと聞かざりし御有樣の、やう〳〵盛過ぎたまへらむは更にゆかしからぬに、御後見たちは、げにさもあらせ奉らばやと思ひよりて、參り給ふ度毎には、もしさやうなる事や申させ給ふと、心づかひして待ち渡るに、唯いとすくよかにて、若宮のやう〳〵ありき給ふ美しさの、見る度ごとに、この世のものとも見えたまはず美しきを、これやさば、此世のほだしにと佛などのしおき給へる事にや、と思し知られて、悲しういみじう覺え給ふ。見奉る人々も、かゝる御氣色を嬉しく賴もしきものに思ひ聞えたり。かくのみ世の中をかりそめに思しながらも、げに朧げならぬ御祈のしるしなるべし。

かくのみ物むづかしきを慰めがてら、弘法大師の御すみか見奉りて、なほこの世脫れなば、彌勒の御世にだに、少し思ふ事なき身とならばや。など思し立ちて、さるべき人々

若宮―女二宮腹の兒
聞かせ―彼兒が我兒なる由を母宮に聞かせたらば
見つき給ひて―狹衣に馴れてなつかしき樣に
語らひ―狹衣が
かの院―嵯峨院も狹衣がかの若宮を愛する由を聞きて
睦じう―狹衣に親むべき由を言ひ聞かせたり
外へ渡らせ―齋宮になりて
迎へ奉りて―若宮を堀川邸へ
院―一條院
前齋院―女一宮
殘り―一條宮に
さてもやがて―其儘に狹衣に嫁する樣になりたらばよからんと

給はざりけれ、「目やすく」など宣はするにも、若宮の御美しき有樣は、まづ思ひ出でられ給ひて、聞かせ奉りたらば如何ばかりおぼさむと、わが御心にも是ばかりはくやしう哀におぼされて、戀しく覺えさせ給ふ折々は、常に參り給ひつゝ見奉り給ふに、日に添へては光るやうにのみなりまさり給ふ。若宮はこよなく見つき給ひてなれ睦び給ふに、いとゞ哀にて、見奉り給ふ度ごとに涙もこぼれぬべきを、あまりなりと人や見むと、紛らはし給ふもわりなし。乳母達などは、なつかしき樣に語らひ給へば、皆たのみ聞えたる樣にぞほのめかし聞えける。かの院にもかくと聞かせ給ひて、いと嬉しうおぼしめしけり。女宮達にも、睦じう思し宣はすべきさまにぞ、聞え知らせ給ひける。入道宮は嵯峨にのみおはしまして、この若宮の御事も更に知り聞えさせ給はねば、唯三の宮のみぞ、あはれには思ひ聞えさせ給へるを、秋は外へ渡らせ給ひぬべければ、いと心苦しう、「斯くてはいかでかおはしまさむ。迎へ奉りて殿にあづけ奉りてむ」と宣ふを、院はなほ、「前齋院のひとり心ぼそくて殘り給へるに、同じくはさてもやがてものし給はむは、

思ひ定め給へ｜妻を定め給へ｜　目やすかりつる事ども｜相應なりし縁談も　昔の世にも｜前世に定まれる縁が無いのであらう　この院の｜齋院の心細き樣子なるも打捨置かれぬ故我は彼所と此所とかけ持の體裁なれば別して其方の獨身を氣遣ふぞ　前齋院は｜女一宮を貰ひては如何　樣のものと｜餘りいつも／＼同じ姉妹の中からばかり撰擇すると言はれるのも外聞恥し、あまり高貴でない女はあるまいか　みな心にくき｜女一の姉妹はいづれもよき御器量にて、美人の噂高かりし母御に似たり

この頃となりて物思はしげなる御氣色にていたく瘦せ給へる、如何なるにかと見驚かせ給ひて、常よりも御祈どもこちたくせさせ給ふ。母宮「かくのみあくがれ給へれば、物心細くおぼさるらむ。なほ然るべからむ樣におとなしう思ひ定め給へ。かくのみ物憂がり給ふ程に、いと目やすかりつる事どもも違ひはてぬれば、あやしきわざかな」と母宮も聞えてなげかせ給へば、うちほゝ笑みて、狹「昔の世にも契りける人の侍らざりけるにこそ。今さりとも、蓬萊の山も尋ねこゝろみ侍らむ」と宣へば、母宮「いで、常にたはぶれにのみ言ひない給ふこそ見苦しけれ。かばかりになりぬる人の、かう物はかなく漂ひたるやはあるとよ。今はいとゞ　この院の御ありさまの心細さに、一所にもあらねば、いとうしろめたうおぼえ給ふや。三の宮の御事のくち惜しきかはりに、前齋院はいかゞおぼすらむ」と宣へば、狹「さのみ樣のものといとはれ奉らむこそ、世のおとぎきも恥かしう侍るべけれ。餘にやむごとなからぬ人は侍りなむや」と申し給へば、母宮「げにこそ、みな心にくき御宿世どもなりけれ。母宮の御物言の　などさしもと聞きしにこそたがひ

㊂母宮の物思はしげなる獨棲を悲む、子の愛にひかれて狹衣遁世の志を遂げず
今日や明日や—今日出家せんか明日せんかと
山のあなた—「人知れぬ山のあなたに宿もがな世のうき時の隱家にせん」
居させ給ひし—源氏の
院に—齋院に
こよなく—狹衣の心
その儘に—源氏に付添ひ行きし儘にて
院がちに—母宮が齋院方にのみ居らるゝ故

べき御有樣にか

其後は、今日や明日やとのみ、人知れず山のあなたに御心はあくがれて、いづくも心のどかにはおはせず、殿にても、常に居させ給ひし御かたを見給ふに、ゆかしきまで戀しう悲しくのみおぼさるれば、內裏にも更に參り寄り給はず、院に參り給ひても、こよなくけ遠くて、わざとさしいで見えさせ給はむとしも思召したらず御几帳引寄せなどしておはしませば、こよなく思し疎みたるなゝめりとつらくくち惜しき心の中をば、神もいかに御覽ずらむ、斯うのみおぼえば、わが身はかぐ〴〵しからじ、と自らだに理におぼされて、いと心細し。大宮は、その儘におはしまして、とみにもえ歸らせ給はぬを、殿は、さのみもいかゞはと、いざなひ聞えさせ給ふを、院はいと心ぼそげにおぼしめして、更にゆるし聞えさせ給はぬ程に、唯つねに院がちにおはしませば、上達部殿上人など、唯あけくれ大宮一條わたりを行き返りつゝ、そのわたり物騷がしきまでなりにけり。かゝる御いそぎなどに添へても、母宮などは、大將の御ひとり住を思しなげかぬ折なし。

かゝる心も―是からは此樣な目にあふ事もあるまじと思へば

心をやめて―狹衣の無情を除き去りて

殿―堀川大臣

かゝる心の中は―狹衣の心、父は我此心を知らで此儘此世に留るものと思ひ居るこそ氣の毒なれ、若し我遁世せば如何に仰天するならん

やつしがたし―俄に遁世する譯にもゆかず

心こそ野にも―「いづくにか世をば厭はん心こそ野にも山にも惑ふべらなれ」

りは、かゝる心も見じとするぞかしとおぼすは、前々のやうなる御心騷にはあらねど、いとかう氣近きほどにては、いとゞ言ひ出でさせ給ふべき言の葉も覺え給はねば、唯、いかでか、斯う疎ましき心をやめて、いにしへの樣に、隔なく思ひかはして見聞えばや、と例の神の御しるしを念ぜさせ給ふに、殿の御聲にて、「いづら、遲しや。大將はなど見え給はぬ」と宣はすれば、立退き給ふこゝち誠にわれにもあらず、死に果てぬるをとおぼされながら、なほさすがに心づよく御供に參り給ひぬ。例の作法の事ども思ひやるべし。宮司參りて御祓仕うまつりて、榊青やかにさしつるに、いと神々しげなるを見るにも、心惑して、うち休まむとも覺えず。やがて見えぬ山路へもあくがれなまほしきに、堀川「いづくにか。大將の宿直所に、常にさぶらはれむこそよからめ」など殿の宣はするを聞くにも、かゝる心の中は知り給はであるべきものとおぼしたるこそ、哀いかばかり思し惑はむとすらむ、限あらむ御命などもいかゞ、と思ひつゞけ給ふには、又引き返しやつしがたし。一方ならず悲しくて、狹「心こそ野にも山にも」と言はれ給ふは、いかなる

一乘の門―法華經の法門をいふ賢不肖を擇まず皆共に同一極高の佛果を得しめんとする敎法の義
院―齋院
みたらし川に―「禊せじとみたらし川にせし禊袖は受けずもなりにける哉」
限の心地し―狹衣が
今日やさば―猶今日がも別れか此樣な事なら前に別れて仕舞へばよかりしに
もたげ給へる―「もたせ給へる」の誤なるべし
とかう見奉り―御身分の定まるを見屆くる迄と思ひて
又御覽ぜられぬ樣も―再び御目にはかゝらぬかも知れぬが
げにいみじき―源氏の心

すてて思し騷がむもむづかしければ、われにもあらず落つる涙を、のごひ隱しつゝありきたまふ氣色、一乘の門をだに見捨てては行きはなれがたき御樣なれど、院は唯、いかでもかゝる事見ざらむ所もがなと急がれさせ給へば、みたらし川に禊せさせ給はむ事をのみ、心もとなく思さる。時なりて御車寄せつれば、又も見奉るまじき人のやうに、限の心地し給ひて、あまた立ち重なりたる御几帳に紛れ寄りて、御衣の裾を引きとめ給へり。いとゞ重くて、とみにもえ動かれさせ給はぬに、あやしと見かへらせ給へれば、やがて引かれて、心にもあらず近う引き寄せられ給へるに、

狹　今日やさばかけはなれぬるゆふだすきなどそのかみに別れざりけむ

とて、扇をもたげ給へるに、御手をとらへて泣き給ふ樣、いみじげなり。「よし御覽ぜよ。この同じさまにてや世に過し侍りける。とかう見奉りはつるまでと、あながちに念じ過し侍りつるを、又御覽ぜられぬやうも侍らむを、この世の思出にもし侍るばかり哀とだに宣はせよ」とむせ返り給ふを、げにいみじき心惑と見ゆるを、さりとも今よ

行くへも知らず—「我戀は行方も知らず果もなし逢ふを限と思ふばかりぞ」

㊅齋院移居の日狹衣再び齋院に情を訴ふ、狹衣遁世の志

御わたり—移居

内裏わたりの—源氏が入内したらば此人々の交際振は如何に美しき事ならんと

なほ世の常の—此上に脫字あるべし

ゆかしき—「ゆゆしき」の誤なるべし

心地も—狹衣の

「行くへも知らず」と詠みけむさへ、羨しう思されけり。

齋院の御わたりの日になりぬれば、つとめてより上達部親王達より始め、世にある限の人參りあつまりて、いとゞ物騷がし。女房などもある限り參り集ひたるかたち有樣、きぬの色摛目かさなりも、なべてならずめでたく群れ居たるは、いづれとなくあなめでたと見えて、內裏わたりの御まじらひの程、いかにめでたからましと見えて、くち惜しう見渡さるゝに、御前に櫻の織物の御衣どもの、表少し匂ひて、裏は色々にうち重ねたるうへに、紅の摛ちたる櫻萠黃の細長、山吹の二重織物の小袿などの、所せうもの硬々しげなるを、如何なるにか、たを〳〵とあてになまめかしく著なさせ給ひて、人々の參り集りたるを、御几帳のほころびよりのぞかせたまひなどする御有樣かたちなど、なほ世の常の事をこそいへ、誠にゆかしきまで見えさせ給ふを、神もいかゞは見はなち聞えさせ給はむと見れば、まいて大將の御心の中はことわりなり。心地もいとゞあやしう、現心もなき樣なれば、起きあがるべくも思されねど、さて臥したらば、誰もさすがに萬を

おもの―食事
つれなくもてなして―狹衣が何氣なく裝ひて
心に籠めて―從來胸にのみ思ひて過せしせつなさは、今のつらさに比ぶれば何でもなし
大津の王子―此頃の小說中の人物なるべし
御命の―源氏の存生中にてさへ
いけるわが身―引歌未詳
片つ方―女二宮
思し離れにし―女二があれ迄につれなかりしも
道芝の露―飛鳥井姫君
見るめなぎさには―再び逢ふ事を得ざる樣にならんとは思はざりし
げにぞ千年の―筆跡は千年の形見
もよほし―哀を催す種

さりのおもの參らせに人々參れば、流石につれなくもてなして、泣く／＼立退き給ふ心地、心に籠めて過ぎしはものにもあらざりけり。いとかばかりの心地ながらは、過ぐすべき樣もなきに、我ながら慰め兼ね給ひて、大津の王子の心の中をさへぞおぼしやるに、秋の月は程なくこそ慰め給へれ、これは御命の限にさへ、「いけるわが身」と、いひ顏なる行末は、なほためしなくぞ思ひこがれ給ふ。今片つ方の、侘しき床に惑はし給ひし夜のつらさも戀しさも、思へば心づからのわざとはいひながら、いとさしも思し離れにしも、唯かゝる方につけて物を思ふべかりける、前の世の契にこそはと、かの道芝の露も、この列に思ひ出づべきにはあらねど、見るめなぎさには思ひやはかけしなど、物思の序にはなほおぼし出でらるゝにや、その扇を取り出でて見給ふも、げにぞ千年のかたみなりけるも、中々のもよほしなり。いづれも限だになき御物思は、いとゞ口惜しく慰め所だになし。

狹　我が戀の一かたならず悲しきは逢ふをかぎりのたのみだになし

神山の—君を思ふ下心ある故、齋院にならるゝにつけても兎や角と世話をもやくぞと也
恐しう—源氏が
たどり—思案
諸共にや—世の憂き目見えぬ山路に君と共に入らんかと迄思ふと也
おぼし惑はれて—源氏が

に、思召したるにか・むげにさばかりの事、思し知るまじき程にもおはしまさぬを」と、過ぎにし方くやしきさまを、忍びやり給はで、

歌「神山の椎柴がくれ忍べばぞゆふをもかくる賀茂のみづがき

さりともおぼし知らむとこそ思ひ侍りつるを、あさましかりける御心ばへにこそ、身も徒になりぬべけれ」とて、せきもやらぬ涙に、いと恐しうわりなしとおぼして、うち泣き給へるけはひなどの近勝には、いとゞ來し方行末のたどりも失せて、歌「今は斯うだに聞えじと、いく返り思ひ念じ侍りつれど、物思ふに魂もあくがるゝとは誠にこそ。今は現し心もなき心地して、今更にいとゞおぼしめし疎まれにけるにこそ。いでや、今はとてもかくても、同じ様にて世に侍るべきにもあらねば、見えぬ山路にも諸共にや、とこそ思ひなりにて侍れ」とさへ宣ふに、いとゞゆゝしうおぼし惑はれて、御汗も涙も一つに流れまさりて、たけき事とは、源氏「いとかく侘しき目な見せ給ひそ」とおぼし入りたる御氣色の心苦しさは、神もいかでかおろかに御覽ぜられむと見ゆるしるしにや、夜

樣異に—源氏が齋院といふ特別な身分に定まりたれば

けぢかき程にて—源氏に近づきて

ありがたき御有樣—源氏の

この御方—源氏の方にのみ狹衣が入りびたりて

御覽ずる—源氏が

齋垣にのみ—早く齋院になりて仕舞ひたく思ふ

露ばかりも—狹衣の心、狹衣の戀を源氏が丸で知らぬ振するをつらく思ふ餘りに

思ひ返して—氣をかへて

たう、今よりおぼされけり。大將は、御内裏參りの今日明日になりたりしに、思しとまりし一節こそ、神の御方樣うれしう思されしかど、樣異に定まりはて給ひぬれば、なほむげに、注連の外にかけはなれ果てぬるぞかしと思ひとぢむる、いとやらむ方なかりけり。思ひあまる折々は、けぢかき程にて、心の中をもうちかすめ、忍ばぬ涙をもらし出づるに、慰むとはなかりつれど、萬にありがたき御有樣に目なるゝに、多くの物思ひのまぎれともなりつるを、時々など參りて、いと神々しく餘所々々しからむ御もてなしにては、いかでかは限あらむ命も長らへやるべからむ、といみじう心細くて、この頃は唯この御方に居暮し給ひつゝ、人間にはいひ知らぬ御氣色などの漏り出づるを御覽ずるままに、いと疎ましく心憂きにも、神の齋垣にのみいそがれ給ふ。露ばかりも知らぬさまに、もてなさせ給へる、あまりいとつらう思ひあまり給ひて、狹「こゝらの年頃思ひくだくる心のうちをも、つれなく思ひ返して、いかでけざやかに思ふさまに見奉り過さむと、わが身にもかへてこそ念じ過し侍りつるを、などかむげに見ず知らざらむ人のやう

大將の御心の｜以｜狹衣の心、我心が〃常の人の如くにて此二人を二人ながら疾に手に入れたらは
鈴鹿川の｜女三が齋宮になりたれは
さばかりの御心｜女三の心では
聞き給ふ｜狹衣の心では
終に｜狹衣の心
唐國の中將｜此頃の小說中の人物なるべし
◉源氏宮元の大貳の家に移らんとす、狹衣源氏を訪ふ
院は｜齋院は
尼にならざらむ｜尼になれば神社への出入出來ねば也
今はとならむ｜源氏を齋院にして仕舞ひては對面むつかしき故死別の際も逢ふ事は出來にくからんと也

しかば、齋宮、齋院、世に絶え給ひてやあらまし　とぞ人知れず思しける。鈴鹿川の浪のよそになり給ひぬれば、さばかりの御心には何とおぼさるまじけれど、かうと聞き給ふはたゞならず、終にいかなる宿世のあるにか、斯うまでも、目やすかるべき事どもは、様々もてはなれ行くよ、もし唐國の中將のやうに、子持聖やまうけんとすらむと、我ながら、まれ〳〵獨笑みせられ給ひけり。

三月になりぬれば、くだりにし大貳の家に、齋院のわたらせ給ふべき事など、今ひきかへて急がせ給ふ。母宮はいにしへの御有様などおぼし出づるに、今さへ神の齋垣に立ち添はせ給はむことは、いとくちをしく思されて、かつ見るだにあかぬ御有様を、いかに覺束なき月日、おのづから隔らむと思し歎きたまへるを、院は、いかでか然はとのみ、恨めしげに恨み聞えさせたまへるを、理に心苦しくて、母宮「尼にならざらむかぎりは、いかでか覺束なき程にはなし侍らむ。行末の事を思ふこそくち惜しうは」など、聞え慰めさせ給ひながらも、今はとならむ命の程も見奉るまじきぞかしと思すは、いと忍びが

さらばさてもあれ|出來たものなら仕方が無いのと親たちの許してくれぬ事はない筈なれども思はずにも|飛でもない事になつて仕舞つたものかなと

筋殊なりける|齋院になるべく定りたる運命たる以上は

いかに定めて|狭衣の心あらばあふ世の|「如何にしてしばし忘れん命だにあらば逢ふ世のありもこそすれ」

遙なるに|とても叶はぬ事とさだかに御覽ずる|源氏宮の事に關して

御占など|源氏宮を齋院に立つることの可否につきて

定り|源氏が齋院に立つべく

嵯峨野の宮|女三宮

の思しよらぬ有樣にて、ほのかに見奉りそめても、中々なる心惑は、彌増りにこそはあらめ、さらばさてもあれとは、必ず思しゆるさぬやうは、世にあらじ、さりとも御心の中どもには、思はずにもあるかなと、事に觸れつゝ明暮おぼし亂れむが、いといとほしう心苦しきぞかし、など思ひ歎かれ給へるを、げに神代より筋殊なりける御宿世なりければ、今は中々心やすくて、明暮妬う心やましき心の中はあらじ、と胸あきぬる心地し給ひながら、いかに定めていかに歎くにか、あらばあふ世の限だになく、こゝらの年頃わが思ひくだけつる筋は、遙なるにこそは、とうち思ふは、又樣異にいみじき心の中なり。內裏の御夢などにも、さだかに御覽ずる事ありておぼし驚くに、大殿に語り合せ聞え給ひて、御心の中どもはいとくちをしけれど、御占などあるに、公を始め奉り、殿の御ためにも、行末遠くめでたかるべき樣にのみ占ひ申しければ、とかう誰もおぼし定むべき事ならで、定りたまひぬるを、世の中には、思ひかけずあさましき事にぞいひける。齋宮には、嵯峨野の宮ぞゐさせ給ひにけるも、大將の御心の、よのつねの樣ならま

斯うこそなど—斯様々々の夢あり等と
もののさとし—天變
ものとはせ—占はせ

神代より—源氏宮は前々より齋院になるべく定まれりと也
試み給へ—源氏宮を試みに入内させて見給へ
なか〳〵心やすく—狹衣が
年頃も—以下狹衣の心
わが物に—源氏宮を盗み隱して

りぬべきにかと、人知れず心細くおぼしめさるれど、斯うこそなど、母宮にも聞えさせ給はで過させ給ふに、殿のうちに夥しきもののさとしのあるを、ものとはせ給へば、源氏の宮の御年あたらせ給ひて重くつゝませ給ふべき由を、あまた申したるを、いとおそろしう思しめし驚きて、さま〴〵の御祈ども、心ことにはじめなどせさせ給ふに、殿の御夢にも、賀茂よりとて、禰宜とおぼしき人參りて、榊にさしたる文を、源氏の宮の御方に參らするを、あけて御覽ずれば、

神代よりしめ引きそめしさかき葉を我よりほかにたれか折るべき

よし、試み給へ。さてはいと便なかりなむ。

と確に書かれたりと見給ひて、打驚き給へる心地、いと物恐しく思されて、母宮大將などに語り聞えさせ給ふを、聞き給ふ心地、なか〳〵心やすく、嬉しくぞなり給ひぬる年頃も、とやかくやと、身一つを思ひ碎けながら、流石にわが物にひき忍び取隱し聞えて、ひたすら深き山里などに、もてさすらはむも、あるかひなかるべし、さりとて親たち

御いそぎ—色々の準備
黒み渡りぬる—喪中故すべての物が黒色になる也
⊕源氏宮神託により賀茂の齋院になる、女三宮伊勢の齋宮になる
大膳に渡らせ—不審
如何なるべき—入内せずして齋院にならるゝが至當なり杯いふ也
今更に—今更齋院になる筈はなしと也。齋宮齋院は内親王に非ざればなる事なければ也
宮—源氏宮
心もとながる—入内を待遠しがる

さへ、あかず悲しともよのつねなり。更になべての世の別れともおぼしめされざりけり世の中の御いそぎもみな打歎みて、なべて黒み渡りぬるもいとほしげなり。

皇太后宮の齋院の御代には、一條院の后宮の姫宮ぞ居させ給ひにしか。大膳に渡らせ給ひにしを、歸らせ給ひて齋宮もおりさせ給ひぬるかはりに、居させ給ふべき女宮達、此頃おはしまさゞりけり。源氏宮の御内裏參りや如何なるべき事にかと、世の人人やう〳〵いひ出づるを、殿にも聞かせ給ひて、堀川「あなあぢきなや。まだ二葉よりたゞ人にならせ給ひにしかば、今更に神も公も知り聞えさせ給ふべきにあらず」とて思しもかけたらず。侍ふ人々も、内裏わたりの今めかしさを、いつしかと心もとながり思ふべし。宮の御かたち、この頃はいとゞさかりに整ほりまさらせ給ひて、誠にひかるとは之をいふべきにやと見えさせ給ふを、帝と申すとも、かゝる人世にはおはしましけりと、さはいふとも御目は驚かせ給ひなむかしと、見奉る限は言合せつゝ心もとながるに、宮の御夢に、あやしう心えず物恐しきさまに、うち頻り見えさせ給ふを、如何にな

隱簑の中納言―隱簑の物語といふ小說の主人公、此物語今傳はらず
つい插し―彈きやめて撥を琵琶に插む也
宮漏―朗詠「三秋而宮漏正長、空階雨滴、萬里而鄕園何在、落葉窓深」
㊁一條院崩御
便なければ―御讓位等色々の議ある故也
物のはじめに―御即位早々
思召す―帝が

響きのぼる心地するを、隱簑の中納言の二の舞にやならむと、むづかしければ、撥つい插し給へるを、人々も宮も飽かず思しめしたり。夕霧絶間なきに、時雨だちて折々うちくらがりたる空のけしき、ものむづかしければ、「入らせ給ひて御格子まゐれ」などあれど、つくづくと眺め給ひて、秋「宮漏正に長し、空階に雨したゝる」と、忍びやかに誦し給へる御聲、つねの事なれど、なほ聞く毎にめづらしくめでたければ、若き人々などは奥へもえ入りはてず、めで入りて、群れ居つゝ、「この頃こそ、いみじう物おぼしたる氣色なれ。何事ならむ」などもいひ合すべし。

かくいふ程に、一條院の、日頃例ならぬ樣におぼしめされけれど、折ふし便なければ風にやなど忍び過させ給へるを、折々御胸をさへ惱せ給ひて、俄に限のさまに見えさせ給ふに、內裏のおぼしめし歎く樣世の常ならず。されど、物のはじめに、かゝる折行幸はいかゞ、など誰も制し聞えさせ給へば、おぼつかなき事をさへに思召すに、程もなく亡せさせ給ひぬれば、あへなしとも世の常なり。內裏には、見奉らせ給はざりつる事を

人もこそ—狹衣の心

なぞや—狹衣の心、何故かの時天童と共に天上帝ざりし事ぞ

又やと—又天童の來る事もあらんかと

麓より—「死出の山麓を見てぞ歸りにしつらき人より先づ越えじとて」

本意のまゝに—思の如く源氏宮を手に入れずして昇天せんも

彈かせ給ふばかり—源氏の彈く樣に趣ある彈き樣は出來ず、やはり其方に差上げむ

「衣がへ」—催馬樂「衣がへせんやさ公達やわが衣は野原篠原萩が花すりやさ公達や」

一わたりおとして—一段調子低くして

て琴をさしやらせ給へれば、常よりも心やすく引きよせ給ふまゝに、

狹忍ぶるを音に立てよとや今宵さは秋のしらべの聲のかぎりに

と言はるゝを、人もこそ耳とゞむれ、げにうつし心もなくなりぬるにやと、我ながらもどかしくて、言ひまぎらはして、琴を手まさぐりにし給ひつゝ、空をつくづくと眺め入り給へるに、霧りふたがりて月もさやかならぬしも、いとゞもの哀なるに、かの天くだり給ひし御子の御かたちけはひ、ふと思ひ出でられて、いみじう戀しきに、なぞやうき世にとまりけむ事ぞ、いとゞくやしきや、又やと、試みまほしけれど、麓よりだにこそ歸るなれ、本意の儘に見置き聞えさせで、雲路にまじらむもなほ心やましければ、御簾を引きあげ給ひて、長押におしかゝりて、狹「この御琴は、彈かせ給ふばかり、なつかしうはいかでか、なほ參らせむ」とて、切に奉り給ひて、琵琶をひき寄せて、「衣がへ」を一わたりおとして、「萩が花ずり」と、うたひすさびて、少し心に入れて彈き給へる、例のいひしらず心細く哀なるに、かきかへさるゝ撥の音、面白う愛敬づきて、雲井遙に

急ぎ立たせ給へり—女三宮降嫁の用意を
年頃おぼし掟てつる—狹衣に妻を娶る事は父母年來の望なれば
㊀狹衣源氏宮を訪ひて琵琶を彈く
今日明日ばかり—源氏宮の入內期が
宮—源氏宮
吹き合せつゝ—狹衣が
この御方—源氏宮の方
我も—狹衣自身も
そゝのかし—源氏宮の箏を
同じ筋—狹衣と同じ流
さらばこれを—此箏を彈き給へと狹衣に勸む

居におぼし侘びけり。されどかけても知る人なき御心のうちなれば、誰も急ぎ立たせ給へり。年頃おぼし掟てつる事なれば、何事も斜ならむやは、常の事に事を添へて、今行末のためしにもなるばかりと、御心とゞめておぼし掟てたるは、げにいとめでたき御心急ぎなり。

九月も晦日になりぬれば、唯今日明日ばかりこそは、といとゞ吹き添ふ木枯も、身にしみまさりて物心ぼそく詠め臥し給へるに、寢殿の方に宮の琴の聲の忍びやかに聞ゆるに、いと忍びがたくて、笛を同じ聲に吹き合せつゝ、參らせ給へれば、大方はいと物騒がしくいそがしげなる頃なれど、この御方にはのど〳〵として、なべてならぬ人々五六人ばかり御前に近くて、廂の御座におはしまして、若き人々童べなど、池の舟に乘りて漕ぎ歸り遊ぶを御覽ずるなりけり。我も勾欄におしかゝりて、笛を吹きつゝそゝのかし聞えさせ給へど、源氏「同じ筋を習ひしかど、ことの外に劣りたらむ」となか〳〵耳ならさせ給はじとにや。彈きすさびさせ給ひて、源氏「さらばこれを同じくば」とて、大納言の君し

引きつゞきたらむも—引續き女宮たちの詰かけて居るのも、出家を思ひ立ちし志には不似合と帝が思ふ故
同じ心に—女二が
語らひ—女二と
㊆源氏宮入内の噂、狭衣の悲
やがて參り給ふべし—引續き入内すべし
今はかう—狭衣の心
人の御身—源氏宮
敷島の—「敷島大和にはあらぬ唐衣ころも經ずして逢ふよしもがな」

づれも、「今はかくて見奉らむをだに慰に」と思し宣はすも理に心苦しけれど、さのみ引きつゞきたらむも、思ひ入りし樣には違ひてや、とおぼしめせば、あるべき樣など聞えさせ給ひて、入道の宮ばかりぞ、とまらせ給ふ。嵯峨野をやがて御前の庭にて、大井川も程なく見やらるゝに、小倉の山の篠薄もほのかに見えて、鹿の音と同じ心に泣きつくし給ひつゝ、行ひ給へるさま、げに後の世はたのもしげなり。院もやう〳〵御心地よろしくならせ給ひて、宵曉の念佛、懈怠なく行ひつとめさせ給ひつゝ、後の世もかならず同じ所にと、語らひ聞えさせ給へる、哀にたのもしげなり。

京には、大嘗會など近うなりぬれば、源氏の宮は女御代し給ひて、やがて參り給ふべしとあるを、今始めて聞ゆる事にはあらねど、大將の御心のうち思ひやるべし。今はかうにこそはと數へられて、我身もうき世を思ひはなれぬる日數も、殘なきやうに思さるゝには、流石なる事多くて、年頃よろづに有りがたく思ひ忍びまぎらはしつる心の中も、ややもせば我身も人の御身もいかならむと亂れまさりて、「敷島のやまとにはあらぬ」と立

そよめく風の音を近くは聞けど逢ひも見ぬ哉」我も人も―我も女二も
見えぬ山路―「世の憂目見えぬ山路へ入らんには思ふ人こそほだしなりけれ」
かはらぬ樣ながら―出家遁世もせずして
さてこそ―それでもよけれど
さやうにて―帝の仰通りにして
十帝讓位出家、嵯峨の閑居、女二宮の同居、今上即位
おろさせ―帝退位と共に出家あり
居させ給ふ―即位
みづからの―中宮自身の
かはりたる御すみか！先帝の嵯峨の御住居
御わたり―御嫁入
入道の宮―女二

地し給ひける。心より外に、この世にかはらぬ樣ながらもし長らふとも、さてこそあなれとも、ありか定めては聞かれ奉らじ。若宮をば、げにさやうに得奉らばや、など、この御事にのみぞ樣々に、うき世も偏にえおぼし捨つまじかりける。

八月十餘日になれば、嵯峨の院の御堂いそぎ造り出でさせ給ひて、おりさせ給ふまゝに御髮おろさせ給ふ。悲しなど今始めたらぬ事なれど、あやしき人の上にてだに、なほ見るも聞くも心騷がぬやうはなきを、まいて中宮などの思したる樣の心苦しきを、大殿は聞え慰めさせ給ふ。春宮の居させ給ふなどは、限なくめでたき御有樣なれど、みづからの御心の中には、かはりたる御すみかのみ、あはれに思ひやり聞えさせ給ひけり。かやうの事どもさしあひつゝ、三の宮の御わたりも延びぬるを、大將は人知れずいと嬉しとおぼしけり。嵯峨の院には、御心地もよろしくならせ給ひて、宮達迎へ奉らせ給ひて見奉らせ給ふに、かたみに、いと悲しくおぼしめされけり。中にも入道の宮は、樣々おぼしつゞくる事さへ多かる御身の有樣なれば、御袖もえ引きはなたぬ御氣色哀なり。い

うちかはり—堀川の心、手をかへて今度は女三宮をと帝の御仰せらるゝに
我さへ—狹衣の承知不承知は兎に角自分狹衣が
大將の—狹衣の不承知は知らぬ顏にて
劣り給へりし—女三は女二より非常に劣りたりしに
さばかり—以下「事もなかりし」迄女二宮をいふ
心深く—深く思ひ込みたる源氏を見た目で見ると、矢張不足にて、自分ながら不實な仕向方をして
哀なりける人—女二腹の兒
世の常の—人並の夫婦になりて
さし離れたる—全くかけ離れたるならばまだしも、女二の妹たる女三に緣を結びて
袖にそよめく—一立寄れば袖に

聞えさせ給ふ。うちかはりかくのみ宣はするを、我さへ聞き忍びつゝさのみ過し給はむも、あるまじき事なれば、大將の御氣色も知らず顏にて、嵯峨野の御わたりの此方に、三の宮迎へ聞えさせてむとおぼし立ちて 齋院のおはしましつる方を、いとゞ磨き添へさせ給ふを、大將、かのありし夜目にもしるく、こよなく劣り給へりしものを、さばかり飽かぬ事なく、何事もこれこそは、道理のまゝの限なる人の御有樣なゝめれど、心のうちにもおろかに思ひ聞ゆべき事もなかりしをだに、心深く染みにし方のなのめならぬ目うつしには、我ながらもあさましく、情なき心ばへを見え奉りて、さばかり契りことに哀なりける人をも、雲のよそに見なして、くやしく悲しと明暮思ひこがるゝこゝろのうちをだに、夢ばかりいひ知らせ奉らでやみぬべきこの世の悲しさは、何れの折にか胸少しひまありて、さやうに世の常のありさまをして聞え奉らむ、さし離れたるあたりにだにあらで、袖にそよめくばかりにて、心より外に我も人も、さぞかしと見聞かれ奉らむよなど、思しつゞくるに、凡て今ぞ世に見えぬ山路も、求め出づべき月日來にける心

誰にも―齋院故夫は持たずに過ぎ來りたれば
世の中かはる―帝のかはる
さ思ひ初めし―狹衣を聟にとは最初よりの望なれば
あづけむと―女三宮を妻に與へんと
生ひさき―若宮の
寄なからむ―外戚の重きをなすものの無からむよりは
わがものに―狹衣が
思ふ心ことなる―狹衣の獨身生活には趣意あるべしと遠慮には思へど
いづれの御事を―どの女宮たちをも
大將―狹衣
うち〳〵にも―私どもゝ
哀なる事も―「事ども」とあるべし

頃誰にも目ならし給はぬならひに、さしも世の中かはるけぢめも知られ給はじかし。三の宮などこそいと心苦しきを、さ思ひ初めし志も侍り、なほ大將に、若宮をもろともに思ひうしろむべき樣になむ、あづけむと思ひ侍る。今より樣殊なる生ひさきは、いとゆかしげなるを、何となき生孫王にていと寄なからむよりは、唯わがものに思ひてものせよかし。思ふ心ことなゝめる一人住なゝめりと煩はしけれど、そのうち〳〵の志をば知らずかゝる遺言を、さりともことの外にはたがへ給はじと、ひとへに頼むなり」など宣はせてうち泣かせ給ふを、大臣はいみじう哀に見奉り給ひて、堀川「一日にても、世の中に立ちとまり候はむ限は、いづれの御事をも、いかでかは見はなち聞えさせむ。女子も持ち侍らず、あやしき窓の内のかしづきものにも、命の限は仕うまつり侍りなむ。大將の朝臣はいかに侍るべきにか明暮おもひあくがれたる樣にて、いとひが〳〵しく怪しき心ざまにのみ侍れば、うち〳〵にも思ひ給へ歎くを役にてなむ。さりとも、かかる仰せごと承りなば、いかでかおろかには」など、互に哀なる事も、たのもしげに

かはらで―御在位の儘にて
まことしう―實際に
心苦しくて―帝が
御別れ―死別の際にも
うつし心通はむ日までは―目の黑い内は
公わたくし―以下帝の心
御行末―中宮の
さてこそは―出家して中宮とも別居してこそは
宮―中宮
哀にうしろめたう―帝が
大殿―堀川大臣
聞えさせおかせ―頼み置き
二の宮―女二宮
齋院―女一宮

といひながら、いと有りがたうなつかしき御心ばへ有樣なれば、千年もかはらで見奉らまほしきも理なりかし。されども七月よりは、まことしう惱しげにて、物心細げなる御氣色を、中宮はいと忍びがたげにおぼし歎きたるも、いと心苦しくて、限りあらむ御別れの程も、引きとゞめられさせ給ひぬべう思召さるれば、まいて少しもうつし心通はせ給はむ日までは、片時も立退き聞えさせ給ひぬべくもあらねど、公わたくしにつけても、よろづにたのもしき御行末に、かう今日とも知らぬ有樣にて　さのみ思ひはなれ聞えじとても、いかゞは、さてこそは、限りのわかれの程も少し面馴れ給はめ、などせめて思しすてて、御出家の本意遂げさせ給ひぬべき御心まうけなどせさせ給ふを、宮は年頃の御ならひの名殘なう、悲しういみじくおぼしめされて、嵯峨の宮にも諸共に渡らせ給ふべき樣にぞ思しめし急ぎける。萬よりも女宮たちの御事をぞ、哀にうしろめたう思ひ聞えさせ給ひて、大殿にもかへすぐ聞えさせおかせ給ひける。帝「二の宮の、今はひとへに此世の事思し捨ててげるも、思へば中々いとよかりけり。齋院もおとなびて、年

一方—女二宮腹の兒、以下狹衣の心
底の藻屑—飛鳥井姫君
抱きうつくしみて—其腹に生れたる子を
忍草ひとり—姫の忘れがたみの子
物ねぢけたりとも—假令育ちが惡くて人柄惡くとも我慢して
さしも—身を投ぐる迄に
思ひとる方—思慮分別
疎ましかりける—飛鳥井の心立が厭はしくは思はれず
㊀帝氣の爲に出家せんとす、女三宮を堀川大臣に托して狹衣に妻はせんとす、狹衣の迷惑
さるべき御中—帝と堀川とは兄弟

とぞ語らひ給ひける。一方こそかく思ひの外になり給はめ、この底の藻屑だにあらましかば、侮らはしきわたくし物にて、常に抱きうつくしみてましものを、いふかひなきわざなりや、いかなる樣にてもありと聞かましかば、忍草ひとりをば、物ねぢけたりともいかゞはせむ、尋ねとるやうもありなましを、ひたすらさしも思ひなりけむよ、時々もほの見しに、思ひとる方は少く、ものはかなげに若びたる人ざまなりしかば、世にながらへて聞えむ事の、いみじう覺えけるにこそは、と思しつゞくるにも、疎ましかりける心の程とは覺えず、わが爲の哀はいとゞ深うのみおぼされつゝ、此方彼方この頃はいとゞかわく世なき、御袖の隙無さなゝめり。

その夏頃より帝御心地例ならず思されて、いかで靜なるさまになりて、行をのどかにせばやと思召して、嵯峨野のわたりに、嚴しき御堂など作らせ給へり。世を知らせ給ひて二十年にもならせ給ひぬ。一の御子おはしませば、あかぬ事なき御身なれど、世をおぼしめし捨ててむ事を、大殿などはいとくち惜しく惜み聞えさせ給ひけり。さるべき御中

袖のなかにや—「飽かざりし袖の中にや入りにけん我魂のなき心地する」

㊇狹衣猶女二宮を思ひ切らず、女二宮の迷惑

見奉り給はむ—女二宮を狹衣が

參らせ給へど—女二宮へ

かゝる事—女二宮の心

此人—狹衣

物しう—女二宮が

苦しくて—すけが

聞えさすれど—狹衣に

思ひ知られ—狹衣が

近き程にて—女二に近づきて

ば、立退きたまひぬれど、まことに、「袖のなかにや」と、飽かず美しき御顔つきを、我がものにて明暮見ましものを、とおぼすに、くち惜しういみじとも世のつねなり。事ども果てて人々皆まかでたまへど、例の御癖なれば、ありつる御面影のみこひしくて、立ちも出でられ給はず、よろづに、何につけても袖に涙のかゝりける御身の物思はしさを、契恨めしく思しつゞけられて、やがてあかし給ひてける。

此後は常にゆかしく思ひ聞えさせ給へど、いかでかは思ふまゝにも見奉り給はむ。人知れずいとゞ物哀に思し餘りては、言知らぬ事どもを、こま〴〵と書き續けつゝ、中納言の佐していみじう忍びつゝ參らせ給へど、まいて今更に御返など書き交させ給ふべきならねば、そのしるし露ばかりもなし。かゝる事見ず知らざらむ所もがなと、此人のゆかりと思召せば、すけをさへ物しう思したれば、いと苦しくて、斯くなむと聞えさすれど、理ぞかしとは思ひ知られ給へど、知らぬ涙は人悪くこぼれ給ひつゝ、いかにしても近き程にて、ひたすらにつらきものに思ししみけむ罪の重さも、聞え知らするわざもがな、

この御方樣と—女二宮腹の若宮の保護せと頼むべき人もなく
二の宮—女二宮が自分の計畫通り狹衣の妻となりたらば此兒を托すべきものをと
三の宮—女三宮を狹衣に嫁せしめんかと
うち笑はせ—兒が
ことの外なるべき—あかの他人ならば似ぬ譯なれど、親族故似たるも不思議はなしと
違はぬ樣なる—御身とかはらぬ美しき人
武藏野の—血族とても是程に似て居ぬもあるに「紫の一本故に武藏野の草は皆がらあはれとぞ見る」
聞かせ給ひたる—我が女二宮との關係を

具してものし給はましかば、やがて讓らせ給ひてましなど、かへす〴〵くち惜しき事を歎かせ給ひて、三の宮の御事をや尙さやうにも言はまし、などぞ懲りずまにおぼしよりける。時なりて餅參らせ給ふに、目覺しく御殿油のあかきに見合せ聞えさせ給ひて、物語高やかにしつゝ、うち笑はせ給へる御顏の匂ひ愛敬の、ゆかしきまで美しうて、左大將の御顏にたがふ所なく似させ給へるに、ことの外なるべき御中ならねばこそはと御覽じなすも、飽かず美しうおぼされて、帝「大將の聲しつるは」と、召寄せて、帝「この御顏つきはいかゞ見給ふ。大臣の、そこをのみ類なき光と思ひ給へるに、かく違はぬ樣なる人もいで來けるものを」とて、さし寄せ聞え給へるに、ふと見合せて笑み給へるは、誠に似奉りたらむわが顏、常の御心おごりよりも增りて、いみじうおぼし知らるゝものから、何となく淚こぼるれば、かしこまりたるさまに紛らはして侍ひ給ふ。うち御覽じくらべて、帝「武藏野のもとの根ざしは、かくしも尋ねぬもあるものを、あやしきまで、違ふ所なくもおはするかな」と宣ふに、いとゞ、聞かせ給ひたる事もやといとわりなけれ

など書きつけて、この扇は返し給はず。式部大輔は、この度のぼりては、ありし樣にも思したらず、ものしげなる御氣色なれば、あやしう心得ずもと思ひ歎きける。

誠かの若宮の御五十日にもなりぬるを、斯かる程とてもいかでかはとて、內裏よりぞよろづ思し扱ひける。類なき御美しさと聞かせ給へば、かゝる序にいつしか見奉らせ給はむとて、その夜、內裏にも、女三の宮ぞ具し奉らせ給ひて入り給ひけるを、御覽ずるにつけても、あまた引具し奉らせ給はましものをとおぼしめすに、「なきが多くも」とはげにこれにやと、言忌もしあへさせ給はず。若宮を見奉らせ給ふに、いと斯うまでは思召されざりつるに、いとあまりなる御顏つきの、行末おしはかられて、かゝる兒もありけりと、ゆかしきまで御覽ぜらる。中宮の若宮の御美しさを、類なきものに思ひ聞えさせ給へるに、かく樣殊にめづらしき御有樣なれば、いと哀なる私物に思しめすも、わが御世も今日明日とのみうしろめたく覺えさせ給ふには、この御方樣と見おかせ給ふべきよすがもなく、心細き御有樣なるを、二の宮思しおきてしありさまにて、大將に打

ありし樣にも―前の樣に狹衣が寵遇せず
㊆女二宮腹の若宮の五十日の祝に帝若宮を見る
斯かる程とても―母宮の忌服中なれども祝はぬ譯にはゆかぬとて
聞かせ給へば―せが
具し奉らせ―女三宮が赤兒を連れて參內す
御覽ずる―帝が
あまた引具し―本來ならば母宮女二宮が賑はしく打連れて參內すべきをと
なきが多くも―「世の中にあらましかばと思ふ人なきが多くもなりにける哉」
餘りなる―餘り美しき
中宮の若宮―後に春宮
私物に―此女二宮腹の兒を

思しかくべき―、周泊まで行く事などは

なげの哀―あるかなきかの假初の情

限なき―源氏、宮に關する煩悶が強き故、他の左程にもなき女の事は總て閑却してありし也

歎の森―只歎といふべきを、繁きといふ縁にて名所の名にかけたる也

いとすなはち―其當時差當りての様に周章することはなかりしに

見給ふに―扇を

かひなくとも、かのあとの白波をだに見るわざもがなと思せど、都のうちの御ありきをだにも、御心に任せ給はず、所せくわりなき御もてなしなれば、まいて思しかくべき事にもあらねば、いとくち惜しく思しつゞけらるゝに、かの光源氏の、須磨の浦にしほたれ侘び給ひけむ住居さへぞ、羨しく思されける。

決 あさりする蜑ともがなやわたつ海の底の玉藻もかづき見るべく

なげの哀をかけむ人にてだに、この御扇を見給はむは、淺かるべくも思さぬに、限なき御歎の森のしげさに、何事も思ひ消ち給へれば、やごとなからぬ程の事は、まいて思し消ちしにこそはありしか、忘るゝとなけれど、いとすなはちのやうなる心惑ひは、おぼしのどめてありつるを、今宵はよもすがら泣きあかし給ひて、つとめても、いつしかと見給ふに、顔にあてて泣き入りし涙の跡はいとしるく、繪ども洗はれ落ちたるを、又われもいとゞ流し添へ給ふ。

狹 涙川ながるゝあとはそれながらしがらみとむるおもかげぞ無き

せめて―實は親しき關係あるを強ひて疎き樣に言ひ做すのか

生けて―女が我を生かして置かんと思はゞ我に手を出すなと

たどる所なき―疑ふ所なき飛鳥井姫君の手迹は

さそふ水だに―姫君が嘗て扇に書きたる文句、一巻にあり

ば、かたみなど強に偲ばでもありなむかし。せめてあらぬ樣にいひなさるゝ程の、そらごとか」など宣へば、いみじき誓言どもを立てて、道成「生けて見むと思はばと泣き侘び候ひしかば、すべて唯まろねにてこそ、夜晝あつかひてさぶらひしか」と、せめてあらがふも怪しけれど、いたうもあひしらひ給はで、他事にいひ紛らはしてやみ給ひぬ

人々まかでなどして、日も暮れぬるに、この扇の疾くゆかしければ、はしつ方に出でて、いそぎ見給ふに、空いたうかすみ渡りて、はか〲しくも見えず。げに洗ひける涙の氣色しるく、あるかなきかなるを、たどり見給へば、たどる所なき水莖の跡は、やがてさしむかひたる心地して、今はとて陷りけむ程の有樣など、唯今見る心地して、悲しなども世の常なり。姫「さそふ水だに」と涙ぐみたりし氣色も面影に思し出でらるゝに、かゝるあとを傳に見てやむべき事とは、契り思はざりきかし、と思しつゞくるに、いとゞ忍びがたくいみじくて、やがてその同じ水脈にも、流れ出でぬべく思さる。

狹からどまり底のみくづとながれしを瀬々の岩波たづねてしがな

氣色も―我が樣子が變りて見ゆるならんと
折しも―狹衣の心、暗に分れし當時を回想せるなり、物忌の爲に姫を訪はざりし間に行方なくなりし也
夢物語の―あの時行つたならば我が見たる夢を語りて序に懷胎の事をも尋ぬべかりしに
これと知りて―道成は我に關係ある飛鳥井姫君と知りて盜みたるにはあらねど
隔なくは―道成を
㊅狹衣道成の持てる扇を取寄せて見る
傳へよと―「扇の風に吹きも傳へよ」とありし歌をいふ
聞く樣なる―汝の咄の通りの女との關係ならば

と、語るを聞き給ふに、さは誠なりけりと思すに、氣色も變るらむかしと覺ゆるまで、いみじく覺ゆれど、つれなくもてなし給ひて、狹「げに、おほけなく心深かりける人かな。かへりては疎ましきまでこそ覺ゆれ」など言少にて入り給ひぬ。折しも心づきなかりし物忌よ、夢物語の序には、おのづから問ひ合せてましを、若宮の御樣にて、美しうてあらましかば、人知れぬ樣にてはあらせず、大殿には預け奉りてまし、とおぼすに、くち惜しう悲しき事限なし。樣々につけつゝ、斯かりける人々を徒になしてけるも、昔の世の契、心憂くおぼしつゞけられて、いとゞ袖のひまなし。露ばかり、それと知りてしたる事にはあらねど、人しもこそあれ、かゝる過をして、わが心をかうまで惑はすも、罪重き心地して、過ぎにし方のやうにも、隔なくはえ思すまじかりけり。

又の日、道季して、「そのありけむ扇おこせよ。傳へよとありけむもいとゆかしくなむ」と宣はせたれば、すなはち持て參りて、道成「これは長き世のかたみと思う給ふれば、返して賜はらむ」と申すを、例のつれなくもてなし給ひて、狹「聞くやうなる疎々しさなら

大貳の―父が是非にといふ故心ならず共に下りたり
いとゞゆかぬ―「いとゞ心ゆかぬ」などあるべし
如何あらむ―八橋は蜘手に物を思ふなどいふ縁あればいふ也
きら〳〵しげ―きらびやか
さもや―飛鳥井姫君を作ひたるならんと
それと知らざりける―我に關係ある女と知らずに盜みしにもせよ
限のさま―死の近づきたる樣
汚して―書き汚して
たゞにも侍らで―懷胎して
何がしの少將―相手は

しかば、萬かひなく候ひて、やがてまかりのぼりなむと、思う給へしかども、大貳の切にいざなひ侍りてなむ。今日だに慰む方なく思う給ふれば、つかさ賜はらむ事も、物憂くなりにて候ふ」など、涙ぐみて聞えさすれば、狹「さては、いとゞゆかぬ三河の八橋は、如何あらむ。さても、如何なる心にて、俄に然はありけるにか」と宣へば、道成「さらでだに、くもでに覺えさぶらふに、都離れても何しにかは」と物思ひ入りたる氣色も、げに生公達よりは、きら〳〵しげに目やすきを見給ふにも、誠にさもやありけむと思すに、それと知らざりけるにても、なま心づきなく思されて、いたくもあひしらひ給はねど見そめし有樣より始め、道成「乳母の、心あはせて盜ませし程、道すがら泣きこがれ、心強く近うも寄せず、限のさまになりにしかば、心のどかに思ひ給へて、寄りもつかず、うちたゆみて侍りし程に、唐泊と申す所にて、消え失せにし有樣、海におち入りたるとなむ見給へし。扇を取らせてなむ候ひしに、しかゞ〳〵なむ汚して候ひし。いかに思ひけるにか、たゞにも侍らで、七月八月ばかりに侍りけるは、何がしの少將にや侍りけむ」

寢覺の床—女二宮へ忍び入りし事
片つ方の物思—女二宮に對する煩悶
爲こそ人の—「死なん後は何せん生ける身の爲こそ人は見まくほしけれ」
⑤道成上京して狹衣に飛鳥井姫君の事を語る
式部大輔—道成
三河に—三河守に
聞きし人—飛鳥井姫君ならんかと思はるゝ人
聞かまほしく思す—狹衣が
悲しき目を見—姫君が身を投げし事をいふ

なき心地のみして、思ふまゝにも亂れ給はぬまゝに、唯心一つにのみ碎けつゝ、つれなく過し給ふなるべし。ありし寢覺の床のうき枕の後は、片つ方の物思もまさりて、あはれにいみじくのみ思ひやられ給ひつゝ、いかでかはり給へらむ樣をだに、け近き程にて、今一たび見奉らむ、あさましういぶせき心のうちも、人傳ならで聞え知らせむ、などぞ心にかゝり給へれば、中納言のすけにもこまやかに語らひありき給ふさま、過ぎにし方かゝらましかばと、恨めしく覺え給へば、すけ「いでや、爲こそ人の」と、心憂がるを狹「例の心憂く餘所人のやうに宣ふにこそ。大貳が心ならましかば」と恨めしげに宣ふも、げにと思ひ知らる。

筑紫へくだりにし式部大輔は、ことし三河になるべきぞかし。正月にのぼりたり。かのおぼつかなく聞きし人の事、誠にやと、聞かまほしく思すに、參りて、道の程のありさま、國の事など聞えさす。國々の野山、浦々磯々の、をかしかりしところどころなど、海の底まで殘りなく語り聞えさせて、道成「あさましき道の空にて、俄に悲しき目を見給へ

書きかはし―春宮が源氏宮と手紙を遣取し給には扨物として居る樣子が羨し　理と―春宮と我と比較にならぬは其年ながら、書状の事でも是程にも違ふものかな　參らせ給ふ―源氏宮へ　誠にも―眞に其通りなりや否や　見るともなくて―源氏が　すげなげ―源氏が見奉り―狹衣が源氏を　一所の―源氏の　其の氣色を―源氏は一向知らぬ振をする也　あながちなる―無理をすれば源氏に逢ふも出來ぬには非ず　は山のしげり―「筑波山は山繁山繁けれど思ひ入るにはさはらざりけり」

行の程、くち惜しき中にも、心にまかせて書きかはし、終にはとおぼしたる氣色の羨ましさは、妬かりけり。狹「理といひながら、斯ばかりの事さへも、こよなく候ふものかな。いかゞ御覽ずる」とて參らせ給ふを、近くさぶらふ人々、「いとしたり顔なる御氣色かな」と笑へば、我もうちほゝ笑みつゝ、狹「誠にもえ候ふまじや。いかに〳〵」と切に申し給へば、見るともなくてうちそばみて置かせ給へるは、狹「あなおぼつかなのわざや」とて、引き破り給ふを、大納言の君といふ人、「賜はせよ。見くらべ侍らむ」と聞ゆれば、狹「いでや、すげなげなめれば、まいてはか〴〵しう見ない給はじ」とて、こま〴〵と破り給ひつ。

斯うのみ、ひとへに明けくれ見奉り給ふまゝに、心肝をのみくだきつゝ、言ひ知らぬ言の葉けしきをも、一所の御目にも耳にも見知らせ聞え給へど、その氣色を夢にも思ひ寄るべくもあらずもてなし給へり。流石に、あながちなる樣にて見奉らむとおぼさば、は山のしげり難かるべきにもあらず。されど殿などのおぼさむ事も、いとうたて思ひやり

筆のながれ—筆勢　いとほしく—春宮の御心が　まいて—自分が聞違ひしたらば猶言ひ損ふべし　末の世も—これから先とても段々果して挙りも待るや否やは常にならずと也　うちそばみて—横を向きて　心の中—狭衣の　筆を取りて—狭衣が　そよさらに—そよさらに自分迄も及ばぬ自分にもくちもせず今に焦れ死もせずして　「短き…」の—「難波江の短き蘆のふしの間も逢はで此世を過してよとや」　見所ある—自分の手が　何事にも—何事につけても—春宮には及ばぬ身なれども前世の行くは一層劣りて斯く身の相違あるが口惜しき中にも

しげならねど、筆のながれなどは、いとあてにをかしき御手なりかしと見給ふ。狭「げにいとほしく候ふめるを、聞えそこなひてはくち惜しくや」とて、うちおき給へば、源「まいて損はぬやうはあらじ」と宣はすれど、狭「さりとては」とて、

狭　末の世もなにたのむらむ竹の葉にかゝれる雪の消えもはてなで

と書かせ奉らせ給へば、いと苦しとおぼしながらも、「いかゞ」などもえ聞えさせ給はで、うちそばみて書かせ給ふ手つきなどの美しげさ類なし。雪の光に朝日さへさし添ひて、御かたち有様けざやかに見え給へば、例の心の中はしづめがたうわりなし。御使のかづけ物どもあまた取出で、「これは、かれは」など、おとなしき人々して定めさせ給ふまぎれに、御硯の筆を取りて、ありつる御文のはしに、手習し給ふやうにて、

狭　そよさらに頼むにもあらぬ小笹さへ末葉の雪の消えも果てぬよ

「短き蘆のふしの間も」など、書きすさみて見給ふにも、我ながらこよなく見所あるを何事にもおよぶまではなかりける身ながら、今一きはおとり聞えさせけむ、さきの世の

宮―狹衣の宮の亮―東宮亮氷襲―薄玉子色
御みづからも―御返事をいとつゝましくて―源氏宮が恥かしげに思ひて自ら文を書かんともせざる故珍らしげなき―何時も同じ我が代筆け春宮もつまらなく思はるるならん
しやう〳〵の人―生々の人、源氏宮の手はなまじひなる人は恥かしき位の能き手なりと也
あるまじき事に―源氏宮が只さへ返事を書かぬに其樣に言うては猶書かなくなる
賜はせ―狹衣に
たのめつゝ―源氏宮の東宮妃たるべき儲しのみありて今に實「されぬを待ち遠しがりたる也
筆がれ―かすれ
筆

給へば、母宮もこの御方にて御文御覽ず、御使はやがて宮の亮なりけり。女房の袖口なべてならず、出居つゝ物いふめり。御文は氷襲の唐の薄葉にて、雪いたう積り、えもいはずしみ氷りたる吳竹の枝につけさせ給へり。大宮、「いとをかしき御文かな。かやうの折は御みづからも聞えさせたまへかし」と宣はするを、大將は、などかく切に聞えさせ給ふらむと、ふさはしからず聞き給ひて、うち見やり奉り給へば、いとつゝましくて思しもかけねば、母宮、「珍らしげなき古めかしさは、いかに見所なうおぼさるらむ」など、もてなやませ給へば、大將の君、「しやう〳〵の人恥かしげなる御手ぞかし。今日はまいて見所侍らむかし」と、ゆかしげに思したれば、母宮「いとあるまじき事におぼしたるに、いとどかう申し給ふ」と、笑はせ給ひて、やがて母宮「この御かへりは敎へ聞えさせ給へ」とて、御文も賜はせたれば見給ふ。

春　たのめつゝいく世へぬらむ竹の葉にふる白雪の消えかへりつゝ

硯の水もいたう氷りけると見えて、筆がれに書きなされたる文字樣などこそ、細にをか

作りおき—「今更に結ぶの神ぞ恨めしきつれなき人を何つくりけん」

烟も今は—引歌未詳

春宮の御つかひ—源氏宮への心やましくて—狭衣が氣がかりに思ひて

御前—源氏宮の

捗々しき事もあるまじきぞかし、と思へば、涙は例のこぼれ給ひぬ。富士の山いと大きに作り立てて烟立てたるは、げにいとをかしう見やられ給ふ。宮、

源氏　いつまでか消えずもあらむあわ雪の烟は富士の山と見ゆとも

と宣はすれば、御前なる人々心々に言ふ事もあるべし。つく〴〵と見奉るにも、なかなか心のみ騒ぎまさりて、いとかくしも作りおき聞えさせけむ結の神さへ恨めしければ。やをら立退き給ひて、

狭　燃えわたるわが身ぞ富士の山よたゞゆきつもれども烟立ちつゝ

など思ひつゞくる程は、行も懈怠するは、思へばいと心憂くて、狭「南無平等大會一乘妙法」と忍びやかに宣へる、なべてならず尊く聞ゆるに、人々、「この渡殿の御障子より御覽じけるにこそあゝめれ。あさましげなる朝顔を」と侘び合ひたり。おとなしき人々は「烟も今はといふべくもあらず、をかしき御けはひかな」とめで聞えて、御心のうちは知る人なし。春宮の御つかひ参りぬと聞き給へれば、例の心やましくて、御前に参りて見

柱のつらー柱の前
御かたみの色にー喪服を著て居られる時分で
すき〲なるにー人々好き〲に弱き又は薄き鼠色の喪服を著たるに
同じ色のー以下源氏宮の服裝をいふ
われもかうの織物ーわれもかうを織出ー模様にしたるもの
なほいみじとーー狹衣の心
一方の心惑ー源氏宮に對する胸さわぎ
あまたの人をもー女二宮母子など

御簾の内なる人、「同じくば富士の山にこそ作らめ」など言へば、「越の白山にこそあゝめれ」といふなり。御前には起きさせ給うてにやとゆかしければ、隅の間の御障子の細目に開きたるより、やをら見奉り給へば、母屋の軒端なる御几帳どももおしやられて、常よりも晴々しくて、そばの柱のつらに脇息におしかゝりて見出させ給へり。皇太后宮の御かたみの色にやつれさせ給へる頃にて、この頃の枯野の色したる御衣どもの、濃く薄くすき〲なるに、同じ色の擣ちたるわれもかうの織物のかさなりたるなど、他人の著たらば物すさまじかりぬべきを、春の花、秋の紅葉よりも、なか〲なまめかしう見ゆるは　人がらなゝめりかし。わざと引きもつくろはせ給はぬ寢くたれの御髪のこぼれかかりたる肩の邊など、様殊に見えさせ給ふ。人々の遊びそぼるゝを御覧じて、笑ひなどせさせ給へる愛敬など、曇なき雪の光にもてはやされ給ひて、俄にあたりまで光るやうに見えさせ給ふ。なほいみじと言へど斯ばかりなる人はあらじかしと、見奉る度每には、一方の心惑のみせらるれば、あまたの人をも徒になしつるぞかし、終にはわが身も

總角もいかゞならましと、流石に美しかりし御火影は思しいでらるれど、今はかやうのかた誠に懲りはてぬる心地し給ひて、風の音にまぎらはして出で給ひぬるに、若宮の御聲のなほ聞えて、とみにもえ立退き給はず。

狹　知らざりしあしのまよひの鶴のねを雲の上にや聞きわたるべき

とて誠に過ぎ難けれど、咎むべき人目もなき所といひながら、あまり長居せば、さばかり有りがたうめでたかりける御心の深さも、今更にあさはかにや見なされ給はむ、とあぢきなければ、明けぐれの程に出で給ひぬれど、かの御枕の雫のみ心にかゝりて寢られ給はねば、御手水召して行しつゝまぎらはし給ふ。

源氏の宮の御方にも常よりは疾く人々起きたる聲して、終夜積りたる雪見るなるべし。イみ給ふまゝに、渡殿の外より見通し給へば、若きさぶらひどもの汚げなき。色々の狩衣指貫など淸げにて、五六人雪まろばしするを見るとて、宿直姿なる童、若き人々など、出で居たる姿ども、いづれとなくをかしげにて、「踏まゝく惜しきものを」などいへば、

總角も―花をも見け留かざりしならんと思ひて、催馬樂總角總角やとう〳〵尋ばかりやさかりて寢たれども轉びあひにけりやかよりあひにけりや。知らざりし―我が心得違より生ませたる子を天子の御子として聞くべしとは思の外なりと也　めでたかりける御心―母宮の用心深き御心遣を無效にする事になるかも知れぬと　明けぐれ―明方のくらさ　㊂源氏宮雪の山作らせて見居るを狹衣隙見す　見通し給へば―狹衣が

絲も對する―狹衣の心、涙のたまりたる形容
わが身の上に―只我身を思ひて涙を流したるならん
遠くも―女二が遠くへ逃げ退きもせず
探りやつけられむ―探り當てられるかも知れぬ
心地もし給はねど―狹衣が
斯うにて―此儘にて
伏籠の少將―伏籠の少將の物語といふ小説の主人公、此物語今傳はらず
いみじと思すらむ―女二宮が
人知れぬ志―女二に對する内々の志

など思されて、この留めおき給へる御衣を引きかづきて、よゝとぞ泣かれ給ふ。

狹 かたしきにいく夜な〳〵を明すらむ寢ざめの床の枕うくまで

といとゞ流し添へ給ふけはひのいみじきを、遠くもえのき給はず、轉びいで給へれど、唯御帳のかたびらに紛はれて、探りやつけられむと思すに恐ろしくて、わだ〳〵と震はれながら、近き程の御けはひに、いとゞ催さるゝつらさにや、薄き御衣ひとへは、やがて絞るばかりに濡れにけり。夜もやう〳〵明けやしぬらむと思ふまで、起き出づべき心地もし給はねど、若宮の寢おびれ給ひて、俄に泣き給ふに、人々も起くるけはひして、「風の荒きに御殿油も消えにけり。紙燭持て參れ」などいふなるにも、唯斯うにて、伏籠の少將の樣になりなまほしけれど、かひなきものから、隱れ居ていかに侘しいみじと思すらむとおしはかるも、今は更に、唯居るにも御心に違はぬをだに、人知れぬ志には、と切に思ひおこして立出で給ふに、奥のかたには三の宮臥し給へるなるべし。御髮の手あたりつやゝかに長う探られて、今ぞうち身じろき給ふ氣色なるを、昔の心ならましかば、

思しやりつるも—狹衣の想像通り
思ひかけざりし夜な〳〵—前々狹衣が忍び來りし時の樣子に同じき故
わだ〳〵と—わなわなと
さなゝめりと—女二が逃ぐるらしき樣子を悟りて
引きとゞむと思へど—衣を握みて引留むる積なれど
見ま憂きものに—女二宮に嫌はれたと思へば我身を恨むばかりで
探りつけられたる—探り當てられたる
いと斯ばかり—これ程つらく思はるゝ事は今迄無かりしに

りは殊に、さと匂ひたるを、思しやりつるも著く、姫宮は、いつもとけて寢させ給ふ事なかりければ、あやしと思して少し見やり給へるに、あさましく思ひかけざりし夜な夜なにかはらねば、その折よりも今少し心騷せられて、萎えたる御ひとへを奉りて、御帳の後にすべりおり給ふも、わだ〳〵と戰かれて、頓にも動かれ給はざりけり。男君もさなゝめりと覺ゆる御けはひに、われもえ忍びあへず引きとゞむと思へど、あまたある御衣どもの上重ばかりぞ殘りたる。くち惜し心憂しとも、よのつねの事をこそ言へ、いとかばかりまで、見ま憂きものにおぼし置かれにけると思へば、身より外につらき人なう、悔しくいみじきに、御衾も衣もさながらおしやられて、ありしながらの匂ばかりとまりたるに、終宵泣き明したまひける涙に浮きたる枕の探りつけられたるなど、いと斯ばかり覺え給ふ事はなかりつるを、悲しなども世のつねなり。蜑も釣するばかりになりにけるも、唯わが身の上にこそはあらめ、こよらの月頃を、知らず顔にて、心解けて明す夜な夜なもありけるは、我ながらだに恨めしくいみじきが、唯斯うながら死ぬるわざもが

わが身を憂しと―一身の不幸を忘れる折はあらじ
さまで―何程我晴き居るかは女二宮は知らじ
我ばかり―つがひ離れたる鴛鴦も我程物思には沈むまじ
御けはひ―女二宮の
いかゞ思したる―女二宮が何と思ひ居るかしらと
いづれともなからむ―誰が誰とも分らぬ中へ入り込みて
玉藻苅るあま―裾に尼をかけたり、玉藻刈るは只漠の形容也
斯うながらは！此儘には
離るゝ―戸締りの
然にやと―女二宮の室らしき方へ

憂しとおぼし怠る事はあらじかし、あはれ唯今も寢覺めてや思し出づらむ、又いとかばかり思ひ歎くも夢にや見給ふらむ、さまで思ふらむなど知り給はじかし、など思ひつゞけ給ふに、袖も絞るばかりになりぬ。池に立ちゐる鴛の音なひも同じ心に思されて、

狹　我ばかり思ひしもせじ冬の夜につがはぬ鴛鴦のうき寢なりとも

といふも、聞く人なければ、くち惜しさに、もし寢覺したる人やあると、試に近う寄りて聞き給へど、音する人もなくて、格子どもの風に吹き鳴らさるゝぞ、心ときめきせらるゝ。かひなくとも、近き御けはひをだに聞かまほしく、若宮の御事もいかゞ思したると、御氣色もゆかしきを、今宵過ぐさむ事の心もとなければ、しるべする人もなくてむげに覺束なきを、いづれともなからむ御中に入り立ちて、玉藻苅るあま尋ねむも今更にいかゞ、とつゝましけれど、唯斯うながらは立歸るべき心地もし給はねば、とかう探り給ふに、離るゝ所もありけり。風のまよひに、やをらおしあげて見給ふに、御殿油はのかにて、もの見分くべうもなけれど、然にやと見ゆる方樣に傳ひより給ふ匂の、人よ

すさまじきものに—枕草紙の一本「すさまじき物」の條に冬の月を擧げたり

妹がり—「思ひかね妹がり行けば冬の夜の川風寒み千鳥なくなり」

かの宮—女二宮

したゝむる—取締る

見奉りそめし—狹衣の心、女二宮に逢ひ初めし

今とても—出家後の今でも丸で思切つて居る譯ではあるまじ

いはけなからむ人—赤兒

しさも戀しさも類なかりけり。

げにすさまじきものにいひおきたる師走の月も、見る人からにや、宵過ぎて出づる影さやかに澄み渡りて、雪少し降りたる空の景色の冴え渡りたるも、いひ知らず心細げなるに、小夜千鳥さへ妻呼び渡るに、貫之が「妹がり行けば」とよみけむも羨しく、ながめ侘び給ふに、心もあくがれ惑ひて、例の御乳母子の道季ばかり御供にて、かの宮におはしたれば、御門なども、わざとしたゝむる人もなきにや、入りて見渡し給ふに、時わかぬみ山木どもの、木ぐらく物深きを尋ね寄るにや、四方の嵐も外よりは物恐ろしげに吹きまよひて、雪もかきくらし降り積る庭の面は、人のけはひもせねば、わざともえ驚かし給はで、中門につゞきたる廊の前に、つくぐ〵とながめ居給へり。見奉りそめし夜の有樣よりうち始め、あさましうはかなかりける契の程は、わが御心にだに思ひ過し難きを、まいて世をおぼし離れぬるも理ぞかし、あはれ如何ばかり物をおぼしつらむ、今とても、ひとへに世をえ思し離れじかし、などいはけなからむ人の御有樣につけても、わが身を

是はまして嫌な仲ではなし、我が氣まぐれから多くの人に身を誤らせたるを內內非常に悲まれる筈
人知れず思ふこと—源氏宮の事
見奉りてむ—女二に通はん
人は—女二の心を想像していふ
過ぎにし方—以前に是程女二を執心なりしならば、すべての人の爲に好都合なりしに
何事を—女二の何處が不足で尼になどならせて

ほされむ。まいて然までおろかに、いでやと思ひ聞え宣ふにもあらず、あながちなる心のすさびに、あまたの人を徒になし聞えつるは、人にこそ宣はね、一方ならず、いかでかは世の常におぼされむ。人知れず思ふこと叶ひなばなど、世のけしき見はつる程は、忍び〳〵にも見奉りてむなど、あまり心のどかに思ひつる程に、げに人はいかにおろかにつらきものと思しつらむ、夜目にもしるく、さばかりをかしげなりし御有樣、髮の手あたりなども今も思ひ出でられて、惜しう悲しきに、今一度かはらぬ御有樣を、などてあながちにても見奉らずなりにけむ、とくち惜しきに、臥しまろび泣きこがれ給へどかひなし。過ぎにし方いとかばかり覺えましかば、誰が爲にも目やすからましと思ふには、さしも忍び所なき人だにも、哀なるべきわざなるを、まいてつく〴〵と思ひいで聞え給ふに、何事を飽かず思ひて、かくしなし奉りて、さばかり美しかりし人を、餘所のものになしつるぞ、と思ひつゞけ給ふに、苦しう悲しとは之を言ふにや、と思ひつゞけられて、袖の氷解けずあかし給ふ夜な〳〵は、今始めて別れ奉りたらむ床の心地して、寂

たし奉りても―尼にしても女二宮が御丈夫でさへあればよしと利口らしく言ひたれども
空しきさまにて―女二の宮を見るよりも一層
勞なき―清廉な僧都
空しく聞きなさせ―死せりと聞くにも劣らず
忌む事―尼となりて受戒せし事
わが御心地―女二自身の心
行―佛の勤め
強にして―無理に召上りなどすれば
㊂狹衣月夜文二宮の方に忍び入る
大將―狹衣
心づきなう―頭から女二が氣に入らぬのでさへ此度の事を聞きては相當に哀を感ずる筈なるに

御髪かき出でて削ぐを見るは、唯の人だに目も昏れまどふを、まして明けくれ撫でつくろひ奉りたるかひありて、かばかりの類あらじと見えさせ給ふを、かくしなし奉るは、なか〱空しきさまにて見奉りたらむにも勝りて、心もをさめられあへず臥しまろぶ樣なるを、何の勞なき僧都の御心地にも、ことわりに悲しく思されて、涙おし拭ひつゝ、頓にもえ削ぎやり給はざりけり。内裏にも、斯くなむときかせ給ふに、ひとへに空しく聞きなさせたまはむにも劣らず、飽かずくち惜しくぞ思されける。されど、げに忌む事のしるしにや、かくて後はやう〱消え入り給ふ事など、よろしくならせ給へば、わが御心地にも、今はいかでしばし長らへて行もせばやと、こよなく思し強りつゝ、御湯などばかり　強にして召しなどすれば、あるか無きかなる御樣ながらも、過させ給ひけり

大將かゝる事を聞き給ふに、くち惜しく悲しとも世のつねなり。ことの外に心づきなうなどおほえ給はむだに、人の御程、事のありさまなどを聞きおほさむに、いかでか疎におも

限りに見なし—いよ〳〵直らぬと見ゆるにした處が

げに—女二宮の心

斯うながらは—此儘で見殺しにはすまじ、出家の望位は叶へてくれる筈

きろ〳〵と—くりくりと、さつぱりと尼にし奉りても

げに限あらむ—帝の心

かの本意—女二宮の望を叶へぬも

くなむと奏すれば、とばかり物もえ宣はせず。帝「限りに見なし聞えさすとも、さばかり惜しげなる御髪を、いかでかいふかひなくなし奉らむ」とて、あるまじき事に思しめされて、帝「かはらぬ樣にて見えむとこそ思さめ。いと心憂き事」とのみ聞えさせ給へれば、げに然ぞおぼしめさるらむかし、さらば如何は、などくち惜しうおぼし入るに、又の日などは、誠に消えはてさせ給ふさまながらも、女二「少し哀と思ふ人あらば、斯うながらは、然りとも見ましや」と稀々は息の下に宣はするを、乳母達などは、「きろ〳〵となし奉りても、時の間の御命をたすけ奉りて見奉らむ」と、臥しまろび泣きこがれて、度々斯くなむと内裏へ奏してければ、げに限あらむ御命の程を、切にやつし難う思ひ聞えて、かの本意をたがへむも、後の世のため如何、とおぼしなりて、この宮の御叔父の横川の僧都に仰せごとあれば、承り給ひて、その作法どもして、鉦うちならし給へるを、聞く人々泣き合ひたる樣、大宮の失せ給へりしよりも、中々心あわたゞしういみじげなり。乳母達の、「なし奉りても、平かにだにおはしまさば」と賢しういひつれど、

消え給ひにし―死せし后宮の死後の苦を知らぬ顔は出來ぬ

唯今は―目下の虎離も賛成すまじければ

迎へさせ給へ―あの世に御引取り下され

さかしき樣にや―こんな事を言ひたらば猪子才に見えんかと

如何なりとも―どうなりてもよし、暫時我を生かして置きたしと帝が思召すならば、今夜中にでも死になる樣にして下され

つゝ消え給ひにし御身の苦しさなどを、知らず顔にてはいかで過ぐさむ。身の上より外に、この世に思しむすぼほるゝ事はなかりしものを、などつく〴〵と過ぐる日數ごとに思しつゞくれど、流石にわが御心一つにては、すべきやうもなく、人に宣はせむも、唯今はよき事といふべきならねば、唯たけき事とは、御湯などをだに見いれ給はで、さばかり思し入りたりし身を、今までおくらかし給へるが心憂き事と、哀ともおぼしいでて、今日明日迎へさせ給へとのみ思しこがるればにや、げに日に添へて賴もしげなき樣にぞなり給ひける。内裏よりは、帝「今一度見むとは思されぬか」と、かつ恨み慰め聞え給ふ事、日に幾度といふ事なく、御使立ちかはりつゝ參れど、何のかひもなくて、限とおぼさるる夕つかた、内裏より參りたる少將の内侍を召し寄せて、さかしき樣にやと、恥かしく思さるれど、闇きに紛らはして、女三「日頃はよろしくもやと待ちつるに、今日などは留るべき心地もせぬを、佛の御しるしもやと試みまほしくなむ。如何なりともしばし見むとおぼしめさば、今宵の程にもと奏して、案内言へ」と宣はすれば、泣く〳〵參りて、斯

㊂女二宮の病重る、出家、病やや快し

とく參らせ―女二に早く內裏へ歸り給へと催促する也

同じ樣に―女二の心、退出の時と同じく母宮と打連れて歸るならば

大將の御事―狹衣に降嫁の事

年かへらむ儘に―來年早々

おぼつかなき事―母宮をして、女二宮の密夫のわからぬ事を心配して氣をもみ死にに死なせたるを恨めしと女二宮が思ふ故

心より外ならむ―嫌々ながら狹衣に靡く樣の事は再びせじと

さるべき事―婚禮

あらぬ樣になして―出家して

え慰むれど、狹「いでや、それにつけてもくち惜しう、中々にこそあるべけれ」とて、いみじう思し入りたり。

はかなく月日も過ぎて、御四十九日なども果てぬれば、內裏よりは、「とく參らせ給へ」とのみ、うしろめたがり聞え給へど、同じ樣に打具し聞え給ひて參り給はましかば、何事も心より外なる樣にて心憂く恥かしき有樣も、もて隱され奉らましを、何事に思ひ慰めてかは、憂きを知らぬさまにて、恥に死にせぬ身を長らへむ、など思し沈めば、起きだにあがらせ給はぬに、大將の御事も、年かへらむ儘にといそがせ給ひて、乳母達のもとに用意すべき事どもなど仰せられたるを、嬉しき事に誰も思ひいそぐを聞かせ給ふにも、おぼつかなき事をさへおぼしこがれて絕えはて給ひにし、蜑の刈るてふ心づきなさは、世に知らずつらう心憂しと、人知れずおぼし知るに、心よりほかならむ藻鹽の煙は、あさましかりし幻のしるべならでは、又夢にだにいかで見じ、とおぼさるゝを、いかにしてさるべき事のなからむ前に命絕えずば、身をあらぬ樣になして、さばかり思ひ

身の程知らぬ—猥りに女二宮に近づきたるをいふ
ことの外に—分外の非禮なりと母宮等が咎めずと聞きたらば
人をば—母宮女二宮をいふ
心いられの—せきて早まり過ぎたる我仕方の不調處なるは自らもよく承知して居る位なれば
聞ゆるにしたがひ—我が頼み通りに汝が姫宮との文通を取持ちてくれたらば
おのれつらくて—引歌未詳。
なほいと—すけの心
同じ心に—帝も此兒を憐み給ふならん

更に留らせ給ふべうもおはしまさゞめり。まめやかに心憂き心にぞおはします」とてうち泣けば、狹「他人のいはむ樣にも宣ふかな」とて、狹「げに身の程知らぬ心の程の、おほけなさこそ罪には侍れ。それも、ことの外に人も宣はずときかましかば、身をも無くなすとも、人をばいたづらにない奉るべき事かは。思ひぐまなき樣なる心いられの心づきなさは、みづからだに思ひ知られたれば、まいて内裏などの聞しめさむ所の無禮げなれば、御ゆるしなからむ程はと思ひ侍りつるぞかし。その程も、時々聞ゆるにしたがひ給はましかば、見知る事もありなまし。餘所の人のやうに情なくぞおはする」と、唯恨みに恨み給へば、すけ「おのれつらくてとは誠にこそ侍りけれ。過ぎにし方かやうに恨みさせ給はましかば」とて、うち笑ひぬれば、いみじうもの哀とおぼしたる氣色にて、ことに物も宣はず、涙ぐみ給へれば、なほいと疎なる御心にはあらぬなるべしと心苦しくて、すけ「大宮さへ斯くならせ給ひぬれば、いとゞ何事にかは、内裏にはおほしかはらせ給はむ。御心地だに少しよろしくならせ給ひなば、同じ心に若宮をも見奉らせ給はむ」と聞

留らせ給ふべうも—生きそうにも無きを
一人の—母宮のみを慕ふといふ許は無い
今いくばくも—我餘命もいくらも無きに
我故—女二宮の心
斯くなり—母宮が逝去し給ひしに
煙の雲と—母宮の火葬をいふ
立ち後れ—死殘り
大將—狹衣
告げ給はざりけむ—女二懷胎の一部始終を
餘所の物には—我子を
いとけしからず—斯くなるも畢竟狹衣の不了簡からぞと也
この御有樣—母宮の此度の御樣子

き。今いくばくも侍るまじきを、今一度見むとも思さぬにや。幼き人々のとまりて侍らむも、なほ諸共にこそ御覧じあつかはめ」と返す〴〵恨み聞えさせ給ひて、慰め申せとて、さるべき人々など奉らせ給へれど、我故つひに斯くなり給ひぬるに、片時にても長らへて、獨惑ひ給ふらむ道の行くへも知らざらむは、いみじう悲しかるべきを思しこがるれど、げに憂きに堪へたる御身にや、煙の雲となり給ふにも、つひに立ち後れ給ひて、七日々々のはて方にも、やう〳〵なりぬ。

御とぶらひに大將の參り給へるに、中納言の佐對面して、かの「嶺の若松」とありし獨言を語り出でたるに、御顏いみじう赤くなりて、あさましういみじと思したり。狹「など今まで心憂く告げ給はざりつらむ、おのづから何事につけても氣色は見給へらむものを。かくなむと聞かましかば、いとかく餘所の物にはなし奉らざらまし」といと哀げにくち惜しと思したれば、いでや、いとけしからず心憂き御心から、誰が御ためもいとほしう侍るにこそ。誠に物おもひに死するものとは、この御有樣にてぞ見侍りぬる。姫宮も

●一母宮薨去、狹衣甲に行きて中納言のすけと語る
斯うにこそは—快癒するにきまりたり
げに見奉らむと—今に至りて薨去せらるゝは、女二の產を見屆けん爲に暫時生きて居られしならんと
事なりければ—誤脫あるべし
人より先に—帝の心、母宮は御后妃たちの中にて第一番に入内したる也
何ばかりの—それ程の年齢でもないに
よろしくも—大抵には

狹衣物語　卷第二之下

七日も過ぎぬれば、姫宮は、心より外に生き留りぬるをくち惜しう恥かしと思せど、げに限あるわざにや、やう〳〵さわやかになりて、今は斯うにこそはと、流れての名のうしろめたさをのみ思すに、大宮の、この御產屋の程は、こよなうよろしき樣にならせ給へりつれば、日頃よろづに思ひ屈したりつる人々も、うち休みて心ゆるびしたる夕暮の程に、たゞはかなう消え入らせ給ひぬるを、げに見奉らむとおぼし念じけるにこそは、と悲しういみじきに、姫宮は更におくれ奉らじと思しまどへる、げに心にかなはぬ事なりければ。内裏にもきかせ給ひて、人より先に參り給ひて、あまたの宮達おはしませば、睦まじうやむごとなき方には思ひ聞えさせ給へるを、何ばかりの程の御齢にもあらでかく別れさせたまひぬるを、いかでかはよろしくもおぼしめされむ、姫宮さへ留らせ給ふべうもおはしまさゞなるを、いと心苦しくて、帝「一人の御事をのみやは思召さるべ

も不似合にはあらず
月頃は—今迄よく思ひ居しに打て變りて狭衣をつらく思ふと也
あやし〳〵と—中納言佐は懷胎の事情を知らざりし也
哀なりける—以下すけの心
おほやけものに—宮達にして仕舞ふのかしら
この御子—狭衣へ子
御顔—赤兒の
かの御子の程—狭衣の赤兒の時分
大貳の乳母—狭衣の乳母
その御顔に—狭衣の顔に
知らぬ様は—狭衣が
よしなきだに—縁もゆかりもなき人同士でも
王氣づかせ給へる—帝王の氣象あり

と思ひ合せて、哀なりける御宿世を、いかなる事におぼし定めて、かく忍び過させ給ふらむ、かばかり美しき人の御有樣を、おほやけものになし奉り給はむずるよ。大殿の、言ひしらぬ賤の男のもとにも、この御子と名のらむは、いかばかり嬉しからむ、と明暮のたまはすなるものを、まいていかにおぼし喜ばまし、大殿もかくと知り給ひなましかば、さりともえ忍びあへ給はざらましものを、くち惜しき事なりや、とかへす〴〵歎かれけり。御湯よりのぼりて臥し給へる御顏、唯かの御子の程と覺え給へるを見るにも、大貳の乳母にこれを見せたらば、いかに言知らずかなしがりうつくしみ奉らむ、と見るに、我だにいみじうらうたく覺え給ひて、いかでとく見せ奉らむと思ひあまりて、出雲の乳母にぞ、母宮「空目かとよ。唯その御顏とこそ見えさせ給へれ」といふを、いでや知らぬ樣はあらじとつらければ、出雲「さしも見えさせ給はず。よき人どちはよしなきだに似るものなれば、まいて同じ御ゆかりなればにこそは。されどこれは、今より樣ことに、王氣づかせ給へる御氣色にぞ」と答ふるもをかしかりけり。

御口ずさみ―狹衣の御吟の人知れずの歌
たがふ所なき―狹衣の顏に
中納言の―母宮の心
さらば―密夫が狹衣ならば、他人であるよりは見苦しからぬ譯なれど
つれなき―狹衣がそ知らぬ顏して居るは餘り女二に執心では無いと見える
上の―帝よりの縁談を不承諾なる樣に聞きたるは
この御事―懷胎の事
かゝる心構―母宮懷胎と言ひ觸したる事
むげにことの外―狹衣の胤なれば宮といはんに

ず知らず顔にて過すらむ人よと、つらう心憂く思されけり。

母宮 雲井まで生ひのぼらなむたねまきし人もたづねぬ嶺の若松

と宣はする氣色も、いと哀げなり。出雲の乳母、かのありし日の御口ずさみを語り聞えさせて、出雲「この御顔のたがふ所なきに、いとゞこそ思ひ給へ合すれ」と啓すれば、中納言の佐がしわざにや、さらば、他人よりも目やすかりぬべきものを、つれなき氣色ならむは、頼むべき程にはあらぬにこそはあらめ、上の御氣色などをも、ことにうけひかぬにやなど聞きつるは、斯うにこそはありけれと、この御事をも知りたらむを、かゝる心構などを、いかに聞くらむ、とおぼすに、心いと恥かしう思しながら、行末に宮たちにておはせむも、むげにことの外にならざりけりと思しつゞくるに、月頃は嬉しと思ひつる御あたりとも覺えず、たがふ所なきかほつきに、つらく心憂くぞ思しなりぬる。中納言の佐の、あやしく／＼と月頃目とまる事、耳に立つ事多かりつれど、わが心のくせにやと思ひ消ちつるを、この嶺の若松の御獨言をほの聞きけるに、いとゞされば よく／＼

大宮のせさせ給へると—母宮の出產ありたる由に思はせたり
後の御事—後產

御佩刀—御守刀

めづらしき人—赤兒

奉りたるに、乳兒のうち啼き給へるは、今少し心まどひして、うとき人々は寄らず、ただ大宮のせさせ給へると知らせたり。後の御事など、こゝら立て重ねつる大願のしるしにや、いと疾うなりはてぬれば、心地少し靜めて、あるにもあらで臥させ給へる大宮を、子持のやうによろづにし臥せ奉りて、姫宮をば、苦しうせさせ給ふとて、いと奧深うおはしまさせて、御乳母達ばかりぞ參り寄りける。兒の御ありさま更にもいはず、世に珍しきさまなる男にてぞおはしける。內裏の御使などかへり參りて、かくと奏すれば、平らかにせさせ給ひてけるを、嬉しく聞かせ給ひて、御佩刀など、例の作法どもありけり。後は知らず、唯今は先、月頃思ひくづほれつる胸どもあきて嬉しくいみじきに、大宮も、こよなく力出できたる心地せさせ給へば、めづらしき人まづ見奉らせ給ふに、唯大將の御おなじ顏にて、誠に美しき御さまなるを、こは何處なりし人ぞ、あなあさましと思さるゝに、淚のほろ〳〵とこぼれかゝり給ふも、かばかり憂くゆゝしく、月頃思はせ給へる人ともおぼされず、いま〳〵しく切に笑ひかゝらせ給ふにも、かゝる人の有樣を見

忌々しうや—餘り美し過ぎて災をも招くべきかと危ぶまるゝ也

女二宮男子を産む、母宮密夭の狹衣なりしを悟る

これや—母宮の心

この事—女二宮懷胎の事を隱しおほせざりしが殘念

先だち聞えずや—母宮より先に死ぬ事は出來ぬかしらと

立歸り—何度も

知らねども、人近なるけはひなれば、言少にて、泣く〳〵立ち給ひぬるを、あかずのみ思ひきこゆるに、名殘の匂は、なほくゆり滿ちたる心地するを、若き人々はせちにぞ聞ゆるを、さし歩み給へる腰つき、指貫の裾など、たを〳〵となまめかしきに、風に吹き赤められ給へるつらつきぞ、紅葉の錦にもやゝ立ちまさりたるにほひにて、冠の纓の風にしたがひて吹きかけられ給へるなど、あまり人の心をみだるつまとなり給へるも、忌忌しうやと見え給ひけり。

日の暮るゝまゝに、大宮もいと苦しうせさせ給ひて思されければ、これや限ならむ、つひにこの事をもて隱さでやみぬること、限あらむ命の程もくち惜しう、消えかへりつゝ、あるかなきかの御有樣にて、夜中にもなりぬ。姫宮は、片時の程も先だち聞えずやなりなむと、泣焦れさせ給ふさま、誠に限なンめりと見え給へば、見奉る人々の心地、ゆゝしういみじ。内裏より御使參りちがひ、大殿よりも立歸り、あはれに聞えさせ給ふ。騷がしきまぎれに、姫宮まづ消え入らせ給ふにやと見ゆるに、御乳母たち泣き惑ひて抱へ

承る—すけの
傳へ聞き給ふ—狹衣
かたみに—狹衣の心
あえか—きやしや
小野のしの原—「淺茅生の小野の篠原しのぶれど餘りてなどか人の戀しき」
みだれたる扇—未詳
耳くせに—佐は聞きなれ居る故聞きとりて返歌したる也
心から—御心中に物思のある故の事なれど、餘り怨まれると人に祕密をけどられる恐ありと也

嬉しく立ちよらせ給へる」なども、はかぐ〜しくつゞけやらせ給はぬを、承る心地もいとゞ堪へ難きに、傳へ聞き給ふは袖にもあまり給ひぬべし。かたみに苦しき御心地どもに、げにいかに思さるらむ、さばかり心苦しくあえかなりし御有樣に、心地の日頃わづらひ給ひて、打臥し給へらむ有樣など思ひやらるゝに、やがてこの御簾の内にも這ひ入りぬべく、ゆかしう哀に覺え給へば、心にもあらず、狹「小野のしの原」と、口ずさびて、涙ぐみ給へるけしき、言ひ知らずなつかしう哀なるを、げに大空も思ふ心を見知るにや、俄に曇りてしぐるゝに、木枯のあらく〜しく吹きまよふにつけても、色々の紅葉散りかゝりつゝ、いたく濡れ給へば、みだれたる扇のかくれなきをさしかくして、

狹　人知れずおさふる袖もしぼるまで時雨とともにふる涙かな

聞きわくべうもなくひとりごち給ふを、中納言の佐の耳くせに、

すけ　心からいつも時雨のもる山に濡るゝは人のさもとこそ見れ

といふを、出雲の乳母少し近く居て聞くに、耳とまりけり。語らはまほしき事ども、數

聞ゆれば—中納言の佐が申上ぐれば
大臣—父堀川
心地例ならず—堀川が不加減にて
驚きながらなむ—驚きて今日御見舞申したり
私にのみは—自分丈で御返事は申上げにくしとて
先さきに—女二より自分が先へ死行く心持のみすれど
とまる草葉—生き殘る者もあらば我が由緣に御世話なし下されよ、生るゝ子の事をほのめかし言へる也

はなぐヽと、あたりまで匂ひみち給へるなど、所かへて見奉るは、又光ことにめでたく見え給ふに、かばかり思ふ事しげき宮の内の人、名殘なくうち笑まれける。中納言の佐召して、御心地どもの有樣などこまかに聞ゆれば、狹「大臣は、常に參るべきやうに宣はすれど、いかなるにか、心地例ならず思ひ給へられて、志の程よりも怠り侍りけるを、内裏にて承りつれば、頼もしげなき樣になむとて、いみじうおぼしめし歎かせ給へるに、驚きながらなむ。大宮の御心地はことわりなる御事におはしますなれば、慰め所も侍るを、姫宮の御心地こそ、聞えさせやる方なく侍れ。上もいみじう歎き聞えさせ給ふめる」など宣へば、すけ「私にのみはいかでかは」とて、參りて大宮に啓すれば、いと苦しくて物もいはれ給はねど、かく參り給へるもおろかならず思しめされて母宮「先さきにとは急がれ侍れど、いかなるにか、かくのみ露に爭ふさまにて、今まで長らへ侍るにも、有りがたき御心ばへを、知らず顏にて過ぎ侍りぬべきをなむ、思ひ殘し侍りぬるには、もしとまる草葉も侍らば、よすがとは必ず尋ねさせ給へ、と聞えさせまほしかりつるに、

左大將殿—狹衣

大殿—堀川大臣

擣ちたる—砧にて擣ちてつやを出したる也

龍膽の織物—龍膽を織出し模樣にしたる也

立田姫の—織物の神が依怙ひいきして特に狹衣の爲によき品を造りたる譯にはあらじ

遣も、帝のあたりことゞしきを、人々はし近くて、「誰ならむ、珍しくもあるかな」など、言ひて見るに、東の對につゞきたる渡殿より、歩み出で給へるを見れば、左大將殿におはしけり。宮のさぶらひして、「中納言の内侍やさぶらひ給ふ」と尋ねたまへるを、大宮聞かせ給ひて、いと心ぼそくかすかなる御里居の程にも、大殿の御心の哀にまめやかなるを、おろかならず思し知らるれば、近き御簾の前に茵さし出でて、こなたにと聞えさせ給へり。參りて居給ふ有樣、うちふるまひ給ふ用意などより始め、例のあなめでたとのみ見えさせ給ふに、うち匂ひたる御薫も、あやしきまで人には似ずぞ見え給ふ。いろ〳〵の紅葉がさねのうへに、紅の擣ちたるが色もつやもなべてならず、澄るばかりなるに、龍膽の織物の御指貫の、枝ざし花の匂、唯今折りて見るやうに織り浮されたる、目もかゞやくばかり見ゆるは、かつは著なし給へる人がらなるべし。立田姫の人わきなどしたるにはあらじと見ゆる。もてなしけはひは、飽くまで氣高う恥かしげになまめかしくて、御顏はこまかに美しげにらう〳〵じく、愛敬づき給へるにほひは、誠に

あはれ―以下母宮の心

夢にも―相手の男の

身は徒に―相手の男の

前の聲―前驅の人拂の聲

と悩ましく暮れゆくを、羊の歩みのこゝちして、さすがに物心細く思さるゝを、木のした拂ふ風の音、いとゞ身にしむやうなるに、頭もたげて、見出し給へれば、色々に散りまがひて、梢あらはになりにけり。

女二 吹きはらふ四方の木がらし心あらばうき名をかくすくまもあらせよ

とて、いと弱げに泣入り給へるを、大宮は少し寢入らせ給へれど、心とけてまどろむともなければ、聞かせ給ふに、我もいとゞ消え入る心地して、あはれいかなる人、いとかばかりものを思はせ奉りて、知らず顏にて過すらむ、昔の世に何の契にて、かゝる事のありそめけむ、いとかく思へば、夢にも見ゆらむかし、かゝる御事をも知らぬにや、身は徒になるとも、いかなる武夫なりとも、少し哀とだに問ひ聞えば、さりとも忍びあへぬ氣色もりいでぬ樣あらじやは、とてあさましくつらく思さるゝ折しも、前の聲いとおどろおどろしくて參り給ふ人あり。かゝる御心地の程とても、さるべき大夫宮づかさなどより外には、殊に參りとぶらふ人もなく心細きに、侍ふ人も立騷ぎて、御隨身の聲

内裏などに—母宮の心
かくと—母宮が懷胎の樣に
けにや—故にや
たしかなる事—母宮が女二の懷胎の何時よりといふ事を確には知らねど
さやうに—最早出產間近なるべしと
ものとひ—占卜の類
いづれの御前にも—女二へも母宮へも
いみじからむ程—出產の時
あぢきなき—我が不謹愼が世の噂に上りて帝の御耳に入る事もあらんか

に何事かは思はむ。内裏などに、かくと聞かせ給ひてけるを、同じくば、けにいかで著からぬ様にもてなして、この御うき名をかくすわざもがな、と大宮はおほし念ずるけにや、唯同じさまにて夏秋も過ぎつゝ、冬の初にもなりぬれば、たしかなる事は知らねど、ありし懐紙の程をおぼしめし出でて、乳母達にもさやうに言ひ知らせ給ひければ、ものとひ何やかやと、心知るどちはやすき空なく、胸心をつぶしつゝ、疎き人々をば、いづれの御前にも近うは參らせず、唯この事助け給へと佛神を念じ奉る。姫宮は、大方の御心地などは、中々この程となりては、いと苦しくも覺えさせ給はねど、御身の、ありしにもあらず所せくなり行くまゝに、恥かしういみじからむ程の有様を、つひに如何にもてなさむと思すに、いといみじきに、人々の、やすげなく兎や角やといひ構ふる有様どもの、心づくしに思ひあつかふも、何時いかなる事を取り出でて、あぢきなき心がまへのあさましさなどをさへ、世の言草にいひ傳へ、うへ聞かせ給はむ、など人知れずおほさるゝに、唯斯くながら今のまに消え入りなばや、とおぼし入るけにや、つねよりもい

一所—女二宮

かくさへ—母宮迄が重體に陥りたる事

今はと—もう懷胎する氣遣はなしと思ひ切りて氣にも留めざりし懷胎の徵候が女二宮に付添ひて退出したる後よく分る樣になれりと

げに—帝の心ある事—母宮が前々より月經のとまりてありし故帝も不思議にも思はれず

老子—年よりての產は重きものと聞き居る故

あり〳〵て—長く間をおいて

さしも—懷胎せぬ筈はなし

㊃狹衣女二宮母子の里居を訪ふ

我先さきにと—女二宮と母宮と何れが先に死ぬかと思はれる樣子で

からむ有樣を見え奉らぬわざもがな、とおぼせば、いとゞ沈み入らせ給ひて、げにいと賴もしげなき御有樣どもなれば、さぶらふ人々も、一所の御事をだに思ひ歎くに、又かくさへおはします事と、歎かしきものから、出雲の乳母など心かしこき人にて、出「姬宮の御爲、聞きにくき事世に漏り出でむよりは」など言合せて、「大宮の、今はとおぼし絕えて、とがめさせ給はざりけるなむ、出でさせ給ひて、いちじるき御有樣に見なし參らせつる」など內裏にも奏してければ、げに思ひかけずもありける御事かな、とばかりぞ聞かせ給ひける。なべての人の事も、とゞまりて程經させ給ひにければ、何事にかおぼしも咎めむ。老子は人の大事なる事と聞かせ給へば、さてげに苦しうせさせ給ふ、とぞ聞かせ給ひける。世の中の人も、あやしう、あり〳〵て中々珍しき御事かなとぞ聞き驚きける。今年ぞ四十五六になり給へば、などかはさしもし給はざらむ。まいて御みめなどは三十ばかりにて、いと淸げにぞおはしましける。

我先さきにと、いづれも同じさまにて、賴もしげなき御有樣なれば、明暮見奉る人々だ

誰がならむと—誰か入來りて落したるならんと母宮が思ひ居られるならんに、事實を聞かれたら一層不快に思はるゝならん
岩にも—「種しあれば岩にも松は生ひにけり戀をし戀ひば逢はざらめやは」
いかにあやしく—すけの心
㊀母宮病氣、乳母等母宮懷胎を言ひなす
宮—母宮
見入れさせ給はず—めしあがらず
姫宮—女二宮
今日明日—女二宮の心
さき立ち聞えて—先へ死にて

誰がならむと、覺束なくおぼすらむよりも、かくと聞かせ給はば、今少し心づきなしとこそおぼしめさめ。行末の頼あぢきなき事にや。さらずとも、岩にも松は生ふなるものを」とて、なほ我とは知られ奉らじと思したれば、いかにあやしく心得ぬ御心かなと覺えけり。

宮は、久しく御覽ぜざりつる故鄕に、立出でさせ給へるに、いとゞ荒れまさりて、物古りにける山の景色ももの恐しげにて、池の水も水草ゐて昔のかげもとまらぬに、蛙の聲ばかり賴もしきしるべにて、言訪ひまゐる人もなきまゝに、起き臥しつく〴〵とおぼし歎く事限りなし。月日の過ぐるまゝには、いかさまにして憂き名をもてかくして、明暮さぶらふ人々にも、この氣色を見せ知らせぬわざもがな、と思すに、わが御心地もいと惱しくなりて、橘などをだに見入れさせ給はず、唯同じさまにて臥し沈ませ給へるを、姫宮も見奉らせ給ふに、憂き身一つの故に、かくさへならせ給ひぬると思すに、いかでかは世のつねの心地せさせ給はむ、今日明日にても先さき立ち聞えて、恥かしくいみじ

明かにもあらず―はつきり其様にせんとも言はず
見思ひ―すけが
明日はありとも―狹衣の心
今一度―もう一度逢はずに女二宮と永訣するのかと思ふと
心えねば―すけが合點がゆかぬ故
この御心地―女二宮の病
人知れぬ御事―狹衣との關係
御覽ずるに―女二宮が
けしからぬ御心遣―狹衣が自分の密夫たる事を顯はすを懼るは譯の分らぬ遠慮なりと思ふ故
我さへ―すけ自身迄が
しるし―疊紙
なほざりの―一寸の隙見位はよからんと思ひて

明日はありとも思ふべうもあらぬ世に、今一度見奉らでや、と思すはいと忍び難きに、涙はせきもあへずこぼれながら、言にいでていみじや悲しやとも泣きこがれ給はずながら、いと心深げに思し亂れたる氣色など、おろかにはあらぬ御心にこそはと見るも、心えねば、すけ「この御心地も、物思ひに斯くまでもならせ給ひぬるにこそ侍るめれ。唯人知れぬ御事にてだに、さばかり心深き御心ばへに、おろかに思さるべきにもあらぬを、まいて大宮のおぼし歎くめる御心を御覽ずるに、いかでかはおろかに思召されむ。いでや、いとけしからぬ御心遣ぞと思ひ侍れば、いと心憂くぞ侍るや。唯御文などをや散してましと思ひ給ふるを」と言へば、狹「我さへかくのたまふこそ心憂けれ。誰が上をも知らぬやうに、ひとへにな憎み給ひそ。いとわりなし」とて、ありのまゝには知らせじと思すなるべし。狹「あが君、なほこの文ちらさむ事な好み給ひそとよ。何事を知らせ奉るべきぞ。おやしかりけむしるしを思し疑ふにこそあらめ。其がいとほしきぞ。なほざりの垣間見は、あながちに便ながるべしとも思はで、近き程に參り寄りたりしに落ちけむよ。

さのみやは—そう言うてばかりも居られぬ
出でさせ給ふ—女二宮宮中を出づべきに決定せり
思召し—帝が
殿—堀川大臣

(九)狭衣女二宮の事を憂ひて中納言のすけを語らふ

覺束なき—女二宮の相手が分らぬを母宮が心配せらるゝ故、其が自分なる由を知らせ給へ

むがいといぶせきに、賴もしき人さへなく、心細かりぬべき事」など宣はすれど、母宮「げに、さりとても、かう賴もしげなうなり行く御有樣を、さのみやは」など聞えさせ給へば、さるべき宮づかさなど召して、御祈の事など細に掟てさせて、出でさせ給ふべきにもなりぬ。かへす〳〵も覺束なかるべき事を、思召し宣はせて、殿にも聞えさせ給ひければ、さらぬ折だに、はかなき事の折〳〵、まづとぶらひ申し給へば、いと心苦しき御事と驚き給ひて、さま〳〵の御祈始めさせ、萬にぞあつかひ聞え給ひける。

斯くいとおもくなりて出でさせ給ひぬるを、大將殿聞き給ふに、人知れずおぼし歎く事おろかならず。内侍のすけにも、常にあひ給ひつゝ、さるべき隙あらば少し氣近くて見奉らむと、なほざりの氣色にはあらず責め渡り給へば、すけ「今はあるにもあらぬ樣にならせ給へれば、夜晝大宮添ひおはしますには、いかでかは。さらば覺束なき事をさへおほいたゝめるに、さやうにほのめかさせ給へかし」と聞えさするを、さすがに明かにもあらず言ひなしつゝ、思ひ歎き給へる氣色はおろかならぬを、いとあやしと見思ひけり。

すそのをかしさ―髮の末の美しさ
さがりば―髮の垂れたる容態
かなしと―愛らしと思ひて帝が見るを母宮が傍觀して
かゝる事―懷胎の事
よろしき人―大抵の人
唯この―帝は只女二宮の病氣を心配しての歎と思ふ故
心やすき―氣樂な
かくてだに―宮中に置いてさへ

しう落ち給ひなむ事」とて、搔き出でてうちやらせ給へるに、まよふ筋なくて、袿のすそばかりにやと見ゆるすそのをかしさなど、げに類なしなどは之をいふべきにやと見えさせ給へり。帝「長さなどは、これこそ竝ての事なれ。筋のをかしさ、つや、さがりばなどは、類あらじかし」とて、いとめでたうかなしと見奉らせ給へるを御覽ずるにも、大宮は心さわぎのみせさせ給ひて、あはれ、かばかり思したる御心にも、何時かゝる事を聞かせ給ひて、おぼし疎まれ給はむとすらむと、唯よろしき人の上にてだに、かばかり憂き事やはあるべき、と思さるゝに、涙も包みあへずこぼれさせ給へば、例の袖をおしあてて物宣はぬを、唯この御心地の事とのみ心得させ給へれば、帝「さりとも、何でふ事かおはせむ。こゝらの祈のしるし、ものし給はざらむやは」とて、我もうち泣かせたまひぬ。母宮「かうのみ、日に添へて賴もしげなくなり給へるを、心やすき所にて、御祈などもせばやと思ひ給へる。かばかりまでものし給へるを、もどかしなど思ふ人も侍らむかし」と聞え給へば、帝「いさや、かくてだに夜の間の覺束なさを、まいて見奉らざら

筵道參れ―帝皇后など渡御の時には路に當る處は總て筵にて敷きつむる也、之を筵道といふ
渡らせ給ふべし―帝が
渡らせ給ひて―母宮が女二宮の方へ
いみじき事―自分が懷胎せりとは女二宮が氣付かぬにや
あつき御單衣―乳の黑きをかくす爲に
あさましき御事―懷胎
たけき事とは―精一杯の仕ぐさとしては

かく言ひさゝめく程に、「筵道參れ」などいふは、渡らせ給ふべしと聞き給ふに、今少し心地もまどふに、渡らせ給ひて見聞えさせ給へば、いとかういみじき事までは、おぼしよらぬにや、いと心苦しげにて、暑さをもてあつかひ給へる氣色なるも、いとうしろめたければ、「少しあつき御單衣などに引きかへて、又、母宮「いとあさましき御事もありけるを、思しもよらぬにや。心して上にも見え奉り給へ」と聞え給ふに、宮又いかなる事ぞと、やがて消えはつる心地して、たけき事とは引きかづきて泣き給へるに、上渡らせ給ひて、帝「今の程はいかにぞ。暑さへあやにくなる年かな。いとゞいかに苦しくおぼさるらむ」とて寄らせ給へるに、かくいみじげなる御氣色なるに、母宮もいみじう泣き給へる樣なれば、いとゞおどろかせ給ひて、帝「今朝の程に、苦しげさこそ增らせ給ひにけれ。など斯くとも宣はざりつらむ。祈りなどをも、思ひよらぬ事なくすれども、しるしもなくて、かく增るさまにのみなり給ふは、いかなるべき御事にか」といみじくおぼし歎きて、帝「をかしかりつる御髮などを、人に見せまほしかりつるものを、いとくち惜

うちかはり—乳母等交替して御側に居るのに
その人とだに—男の誰といふ事さへ分らぬ
ゆきずり—通りがかり、かりそめの契に身重になる
さばかりの夢—假初の契だけならまだしもなれど
出し奉りてむ—宮中から
御有様を—女二宮の恥をさらすを見ぬ前に自分が死んで仕舞ひたしと

昔物語にも、心をさなき侍び人につけてこそ、かゝる事も侍りけれ。うちかはり、誰も見奉らぬ折も侍らぬを、なほ何時の隙にか　さる事のおはしまさむ　御僻目にやさぶらふらむ」といへば、母宮「いでや、何か、誰もむげに知らぬやうはあらじ。とてもかくても同じ憂さとは言ひながら、その人とだに知らぬよ。かばかりの御身の程に、かゝる事の類あらじかし。さぶらふ人々の程にてだに、いと斯う淡々しく、飛びかふ蟲鳥のやうに、ゆきずりの宿世ある人やはありけむ、唯さばかりの夢にてだにあらで、こは如何にすべき忘れがたみぞ」と押當てさせ給へる袖の雫、ことわりに、いみじとも世の常なり。乳母等「今はいかで、上の見つけさせ給はぬさきに出し奉りてむ。神事などもしげう侍るめるに、いとゞおそろしく侍り」と聞ゆれば、母宮「さても終には如何すべからむ」と、世の例になり給ひぬべき御有様を見奉りはてぬさきに、わが身いかで世になくなりなむと、片時の程に思ひくだけさせ給へる樣、げに誰も〳〵はか〴〵しき事あらじかしと見え給へり。

㊇母宮計りて女二宮を宮外に移す
かゝる事の―以下母宮の心
この人々―乳母等の中には事情を知れる者あるべし
斯くおはするまで―懷胎するまで
例せさせ給ふ事―月經のなき事も

御有樣かな、如何樣にしない奉るべきぞと、おほし碎くること限なし。月頃は、乳母たちにも、かゝる事のあるは如何なる事ぞなど宣はず、御心一つにおほし歎きつるを、かゝる事のありけるを、今は我一人しては、もて隱すべきにもあらざりけり、又この人々の中に知りたるもあらむ、さりとも、斯くおはするまでその氣色知る人なきやうはあらじ、など思しなりて、出雲、大和などいふ御乳母達を、忍びたる方に召しよせて、とみにもえ宣ひ出でず、咽せかへらせ給へるを、如何なる事ぞと皆思ひ騷ぐ。辛うじて、母宮「かゝる事のおはしけるを、誰も知らぬ樣はあらじ。などか今まで知らせざりける。いかなりし事ぞなどだに知りてしがな」と宣はせやらぬを、うち聞く心地いかゞはありけむ。ある限あきれ惑ひて、ものもえ申さず、頭を集へて泣くより外の事なし。乳母等「月頃も、あやしう心得ぬ御有樣を、御もののけにやなど見奉り泣くより外に、又いかにもいかにも見奉り知る事も候はず。例せさせ給ふ事も、常にさのみおはしませば、あやしと見驚くべきにも侍らでこそ。さりとも、事のありさまは知る人侍らむかし。

日の御座—晝間の座

かくれなき御單衣—女二宮の衣はかくるゝ處なき單衣故、懷姙の樣よくわかれり

如何なる—母宮の心

うやう暑き程にさへなるまゝに、消え入りぬべき御有様を、誰も〳〵歎かせ給ふこと限なし。

常よりもあつき晝つ方、御帳のかたびら少し結ひあげて、床の上にて、日の御座ばかりを敷きて紅の羅のひとへ、すゞしの御袴ばかりを奉りて、腕を枕にて寢入らせ給へるに、御髪の久しく梳りなどもせさせ給はねど、露ばかりまよふ筋なく つや〳〵としてうちやられたるに、こぼれかゝらせ給へる色合つらつきなどの、かく久しき御惱に、露ばかりも衰へず、いとゞなまめかしく見えさせ給ふ。大宮もつく〴〵と見奉らせ給ふに、腕たゆきも知らせ給はぬにこそと、心苦しう悲しくて、涙のみほろ〳〵とこぼれさせ給ふ。うち身じろきて、いと苦しと思されたるを、近う寄りてうち煽がせ給ふに、ひとへの御衣の胸少しあきたるより、御乳の例ならず黑う見ゆるに、心騒ぎしながら目とゞめさせ給へば、かくれなき御單衣にて、いと著るかりけり。如何なる事ならむと、なほ覺束なかりつるを、こは如何なる事ぞと、目もくれ惑ひて物も思されず。誠に憂かりける

如何樣にして―母宮の心
この事―狹衣に降嫁の事
誰とだに―女二宮の相手を
如何はせむとて―いくら仕方がないとて
かばかりの人―女二宮位の立派な人
例ならぬ御有樣―女二宮の不例
見入れ奉らざりける―女二宮の病氣を構はざりし事
目をつけ―母宮が女二宮の擧動に
いみじき御思―女二宮を非常に愛し給ふ故
人知れぬ御心の中―狹衣の胸中

げなる人に、心おかれ給ふやうにや、とおぼすに、如何樣にして、この事免るゝわざもがな、誰とだに知らばや、斯かりとても、如何はせむとて、世のつねのなま上達部殿上人などを、思ひゆるすべきには非ずかし、いでや、かばかりの人の、かく行方なくあさましき宿世ある樣やある、あな心憂、とおぼすに、涙ぞほろ〳〵とこぼれ給ふを、かく例ならぬ御有樣を、おぼし歎きたると、上は御覽じて、かく月頃になるまで、見入れ奉らざりける事、などおぼし騷ぎたり。この事の後は、おのづから氣色見ゆる事もやと、目をつけさせ給へれど、かごとばかりも、そのしるしと見ゆる反故の端だにおち散らぬは、なほいかなりし事ぞと、おぼつかなくゆかしきに、三月ばかりよりは、まことしく苦しげにし給ひて、日にそへて、賴もしげなき樣にならせ給へば、よろづも忘れて、いかなるべき御有樣にかと思し歎くに、帝まいていみじき御思におはしませば、唯この御方にのみおはしまし暮して、おぼしめし歎かせ給ふ事限なしと聞き給へば、いとゞかの人知れぬ御心の中は言ふ方なけれど、いづれのひまかは、御消息をだに聞え給はむ。や

人知らば—「枕よりあとより戀のせめ來ればせん方なみぞ床中に居る」
㊆女二宮降嫁の準備、母宮密夫の狹衣なるを知らずして歎く、女二宮懷胎、母宮の憂悶
女宮—女二宮
見入れぬ樣—かまはぬ風
御急ぎ—婚儀の準備
あないみじや—母宮の心

にてだに疎に思ふべきこゝちもし給はず。まいて何事にてかは、少もなのめには思ひ聞ゆべきぞ、と思しながら、御文なども、おのづから落ち散らむ事つゝましくて、おぼろけならでは參らせ給はず。音をだに高く泣かぬ歎を、夜もまどろむ事なく、この頃はおほしあかし給ひて、

狹 人知らばけちもしつべき思ひさへあと枕ともせむる頃かな

と人やりならぬなげきを添へ給ひける。

女宮も、ありしのち、起上りて母宮にも明に見あはせ奉り給はず、物をのみ思しくづほれて臥し沈み給へるを、大宮もことわりにいみじく思しながら、思はずにくち惜しかりける御宿世も心憂く　など思されて、いたうも慰め給はず、見入れぬ樣にて過ぐさせ給ふを、さぶらふ人々などもあやしと見奉るに、上の御前ぞ、如何なれば斯くのみはと、怪しがらせ給ひける。帝「御急ぎもいと近くなりぬるを、思しいそがぬ事」など、大宮をもいとものしげに聞えさせ給ふも、御胸騷ぎまさりて、あないみじや、さばかり恥かし

安積の沼の―飛鳥井姫君の事、安積の沼に水や絶えなん」と姫のよみし歌前にあり
思ひよそへむ―比較すべき物なき源氏宮などの有樣を見るにつけても
道芝の露―これも前に見えたる飛鳥井姫君の歌の句
逢坂山の―女二宮をいふ、「名にし負はゞ逢坂山のさねかづら人に知られで來るよしもがな」
心おくれて―氣がきかずして、狹衣の心
氣色とり―母宮にけどられては女二宮との婚姻は逃れ難からん
責め給はず―すけを思しわびたる―女二宮が
世のつねの人―女二宮が斯る美人ならでも疎には思はれぬに

さてもかの安積の沼の水絶えなむ事を、忍びあへざりし哀は、更に忘れ給はず、思ひよそへむ事あらぬ人の御有樣などにつけても、すこし下れる際など、自ら見つくし給ふ度ごとには、まづ思し出でられぬ折なし。道季が思ひよりし事ののちは、底の藻屑まで尋ねまほしき御心絶えざるべし。

狹　おもひやる心ぞいとゞ迷ひぬる海山とだに知らぬわかれに

思ひ出づるは、中々こよなう目ざましかりける道芝の露の名殘なンめりかし。逢坂山のさねかづらは、人知れぬ御心ばかりにはおぼし絶えず、ありしやうにひたすら、如何樣にして免るゝわざもがなとはおぼされず、いかにせましと歎かれ給ふに、中納言のすけ、かの落しおき給ひし懷紙の事を聞えいでたるに、胸つぶれ給ひて、心おくれていとほしかりける事かな、さばかり氣色とり給ひては、脱れ難き事にや、などなほ煩はしくて、思ふまゝにもえ責め給はず、唯ありし樣にて、わりなき隙などに見る夢のたどちに惑ひ給ふ折々、ほのかなる度毎には、いとゞ心苦しう思しわびたる樣など、唯世のつねの人

如何なる事の―狹衣の心
なほなども―押かへしてあの文の返事を取つてくれとも言ひ遣られず
雲のはたてに―「夕されば雲の旗手に物ぞ思ふ天つ空なる人を戀ふとて」
如何にせまし―狹衣の心
思ひそめにし事―源氏宮を手に入れる事
如何はせむと―思ひ切る了簡にもなれず
この御事―女二宮
なべてなる樣に―一通りの事に思ひ流して仕舞ふ了簡にもなられねど
定まり居給はむ事―女二宮にきめて仕舞ふ事

ても、

戀の道知らずといひし人やさはあふさかまでも尋ね入りけむ

とあるを、獨笑せられ給ふものから、狹「いと罪えがましき事の樣かな」と、ひとりごち返して、狹「當來せどの轉ぼうりんのえん」と、うち誦じ給ふ御聲のいとおもしろう。如何なる事のありけるにかと思ふもわづらはしくて、なほなどもえ言ひやり給はぬものから、日の暮るゝまゝに心は空にて、雲のはたてに物思はしさも、まめやかに理なければ、如何にせまし、一方に思ひそめにし事は、月日に添へていと有り難げになりゆくめれど、さりとては如何はせむと、思ひなるべき心地もせず、この御事は萬にめやすかるべき事と、月頃思はざりつるにはあらねど、今はいとゞ、斯ばかりにてやみなば、忝き方も心苦しさも、なべてなる樣に思ひ過して、やみぬべき心地もせねど、さりとても今ゆくりなく定まり居給はむ事の、くち惜しうおぼさるゝは、かへす〴〵わが心づきなかるべき心のすさみ、いとゞ物懲しはて給ふべし。

定めむことは―女二宮との縁を定めん事は

荻の上の露―はかなき一度の契

信太の杜の―「和泉なる信太の杜の楠の木の千枝にわかれて物をこそ思へ」

御氣色―女二宮の歎き一方ならざりし樣子は人の目にもつきしならんと

今朝のもの―託したる文

その光も―御骨折の御陰のなき事はあらじと

つれなの―すけの心

心え侍らぬ事―私に合點のゆかぬ事ありし故

うしろめたき御心―女二宮に竊に逢ひながら知らぬ顏して居る狹衣の心

從ひて定めむことは、なほいとくち惜しかりぬべし、さりとて又荻の上の露ばかりにては、いかでかは、などおぼしつゞくるに、人やりならず涙もこぼれて心苦しきに、いとゞ物思はしさぞ、信太の杜の千枝は物にもあらずなり給ひにけり。日ひと日なげき暮し給ふにも、わが心はかへす〴〵もどかしう、心づきなきものから、いといみじかりつる御氣色は、いかゞ人も見奉りつらむと、覺束なさもゆかしさもやる方なければ、中納言のすけの許に、文かき給ふ。

狹　今朝のものはいかゞしなし給へる。今日は誠に一つ心にかけて暮し侍りつれば、などてかは、その光もかたうは、など頼もしきを、いかゞ。しるし見せ給はずばかひなくこそ侍るべけれ。

と宣へるを、つれなの御心構やと思ふも、憎くはあらでうち笑まれけり。御返には、

すけ　今朝のは、參らせ侍りけれど、いさや心え侍らぬ事どもに思ひ亂れてなむ。うしろめたき御心の程こそ、懈怠なからむ御行のしるしも、かひなくやと見え侍れ。さ

残りなく―狭衣が残らず一部始終をすけに打明けたるならんと思へば恥かしくて
理かな―すけの心
いちじるきしるし―懸紙
この御文を―すけの心
誰ならむと―女二宮の密夫は誰ならんと常もなく焦心する事はあらじ
同じくば―女二宮を狭衣に娶すにも、同じ事なら鄭重な手續を經て娶したしと思ひて此一件を口惜がらるゝ事はあるべし
宣はせつる―狭衣が
つく〴〵と―女二宮を
(六)源氏宮と女二宮とに對する狭衣の煩悶

にはつる心地せさせ給へば、引き隱してよと言はまほしけれど、殘りなく言ひ知らせつらむも恥かしくて、え然も宣はず、いとゞせきやる方もなげなる御氣色なるを、理かな、よき人と申す中にも、心ふかげなる御有樣に、いちじるきしるしをさへ落しおき給ひて大宮の、いかなりつる事ぞと思しあわて給へる御氣色は、いかばかりかはおぼさるらむ、と心苦しき事限りなし。この御文を大宮に御覧ぜさせたらばしも、誰ならむと行方なくおぼしこがるゝ事はあらじかし、同じくば淡々しからぬ樣にてこそは、など思さむ事はくち惜しからめ、と思へど、あなかしこあなかしこと宣はせつる御氣色も、猶思すやうある事にこそあゝめれ、など一かたにしも寄る心ならねば、わが過のやうにいと歎かしくて、つく〴〵と見奉る。

大將は、出で給ひて起臥おぼしつゞくるに、かけても思ひよらず、かごとばかりを聞くだにも、むづかしう煩はしかりつる御あたりに、いかに尋ねよりつる夢の浮橋ぞと、現の事とだに思されず、心ながら、かう遁れがたかりけりとても、ひとへにさらばと世に

苦しうすらむ―すけが苦しむならん
御方に―大宮が自ゝの住居に
然なりや―狹衣が來たに違なし
むげに―以下すけの心
知る人―手引する人
さるにては―外に手引する人あるならば我に此の文を賴む筈なし
この御方人に―大宮が日頃我を女二宮の方人と思ひ居らるゝ故、此度の事も我が手引せりと疑ひ給ふならんと
御中―狹衣と女二宮との中
心づかひにて―誤あるべし
ことの外には―狹衣より手紙の來るをばけしからぬ事とは仰しやるまじと思へば

か夜々苦しうすらむ。よろしくば上れ」など宣ひて、今ぞ御かたに渡らせ給ひぬる。中納言の佐近う參りて、「如何におぼしめさるゝぞ」など聞えさすれど物も宣はず、唯御枕のしたは、蜑も釣するばかりにぞ流れ出でて臥させ給へる。唯然なりやと心得はてぬるに、むげに知る人なくては、いかでかさる事あらむ、又さるにては、この御文を賜ふべき事かは、いかなりつる事にか、と我も胸ふたがりて、覺束なくあさましければ、とばかり物も言はれで、つく〴〵と見奉るに、大宮の御心のうちぞいとほしき。この御方人におぼし宣ふは、かならずおぼし疑ふらむかし、とあぢきなく苦しけれど、とてもかくても、今はいとゞ免れがたき御中にこそは、つひには聞かせ給ひてむ、と思ふぞ賴もしかりける。此御文、いかにも引籠めてやむべきならねば、すけ「今朝大將殿の參らせよとて、これを心づかひにてものし給へれば、えこそ否び侍らざりつれ。又大宮なども、ことの外にはよも見なしなどは仰せられじ、と思ひたまふれば」とてうちおくを、宮はあるかなきかの御心地にも、これをさへ散らして、大宮の見給はむ事、とおぼすに、いとゞ死

宮―母宮

あないみじ―すけの心

關の戸ざし―前の「關の戸ざしはかたからなくに」の狹衣の歌

いかでかは―開封するわけにはゆかぬ

げにこれをば―すけの心

然る事もあらば―狹衣が密通したる事もあらば自分が手引をしたるになるべし

よべまでは―すけに對する詞、昨夜迄は女二宮が病氣の樣子も無かりし故

と口ずさびて立ち給ひぬるを、あやしと心も得ねば、御返も聞えあへずなりぬ。

この御文を引きかくして御前に參りたれば、宮は起きさせ給ひにけり。二の宮は、御帳の内にていまだ御殿ごもりわたりける、御帳のかたびら少し結ひあげて、大宮床におしかゝりておはしますを、御帳のほころびより見參らすれば、男の疊紙をうち返しうち返し御覽じて、御袖を顏におしあてて、いみじう泣かせ給ふ。あないみじ、如何なる事ぞと思ひつゞくるに、などこの御文の、今朝しも急ぎておぼし立ちつらむ、と思ふに、ありつる關の戸ざし今思ひ合するに、心一つにいとおぼつかなく、この御文いみじうゆかしけれど、いかでかは開けむとする、げにこれをば大方に取出でてはいと便なかりけり、もし然る事もあらば、我がしたるとこそ、誰もおぼしめさめ、など思ふに、いと煩はしくなりて、取も出でず、なほ隱しもちて、大宮もよろづに紛らはさせ給ひて、大宮「よべまではさる氣色も、ものせさせ給はざりしかば、上にも上りにしを、俄にいかなる御心地にか」と、なほ歎き給ひて、まづわが方に渡らせ給ひぬる。大宮「いつも〳〵何事にて

あやしく―狹衣が今迄女二へ手紙もやらぬは嫌ふのかしらん
散らして―人に見られても仔細あるまじ
一所に―女二宮一人に
宣ふありさま―君が常に噂して褒める女二宮の有様
まだしきに―早くから見馴れさせてはつまらぬ
さやかなるけしき―事の眞相を知らせて
あふ坂を―用心は堅固でもなきに、逢ふことをのみ嚴しく取締らんとするはつまらぬ事ぞ

も、あやしく今まで音なきは、物憂きにや、などこそ仰せらるなれば、少し散らして侍らむもなどか」など聞ゆれば、狹「あなわびし。あが君あが君、さる事し給ふな。唯一所に御覽ぜさせ給ひて、やがて破り給へ」とまめやかにわび給ふも、あまりあやしと思ふに、狹「誠にかく常に宣ふありさま、少し氣近くて見せ給へ。さてや、げにこの世にとまる心もいできけると、今宵なども、便なかるまじくば」など、例ならず心に入れて宣ふを、辛うじてめやすき御心かなと嬉しけれど、すけ「いであなうたて。まだしきに目ならし聞え給はむこそあぢきなう侍らめ。おぼろげにては、さやうの御かいまみなど侍るべき御有樣かは」と、事の外にいふもをこがましけれど、この人にもさやかなるけしき忽に見せて、かくあながちなる關守を破らむも、わづらはしく覺え給へば、こまかにも語らはぬものから、美しかりつる御けはひありさまは、面影に覺えぬにしもあらで、狹「あなわりなの事や。なほ然りぬべきひまあらば」など宣ひても、歎かしきものから、

狹あふ坂をなほ行き返りまどへとや關の戸ざしもかたからなくに

宮と結婚の事　世の人の―我が尋常人の志をもちたらば

人の御上―女二の行末も考へず

かゝる心―我が如き了簡をもつ事は

若無比丘―安樂行品「入里乞食、將一比丘、若無比丘、一心念佛」

げに如何ならむ―すけの心、此御器量ではどんな不品行もあるべき筈なるに

さしも―餘りそうばかりでもない樣な噂

事々しき樣に―仰々しく噂さるる我が手跡を

かの御目―女二宮丈には

鳰といふ鳥の跡―はかなき文などの意なるべし

便なげにはよも―不都合な事とは思はるまじ

上の御前―帝

ひ合せらるれ」とて笑み給へる御顏の、近くてはいとゞわかく美しげにて、あやしげなるわが顏にもうつりやすらむと覺ゆる御匂、げに如何ならむあやまちをだにし給ふべきに、かうおぼしつゞみ、行末の短からむ事をさへ宣ふも、げに世の人の聞ゆらむやうに、變化のものにやとぞ覺え給ふ。すけ「いとあまりなる聖詞な宣はせそ。さしも聞え侍らぬ事どもも侍るなり。宮の御有樣はしも、ほのかに見奉らせ給ひてば、えさしも心清からずや、とこそ思ひ給ふれ」とてわらへば、狹「切にかくいひ威し給へば、心がはりこそし侍りぬべけれ。外道のむすめにも、佛ははかられ給はざりけるものを」とて、ありつる文、懷より取り出でてとらせ給ふ。狹「あなかしこ、宮などの御覽ぜむに、取り出で給ふなよ。事々しきさまにいひなすなる手も、見おとさせ給はむいと恥かしかりぬべし、かの御目ひとつには、鳰といふ鳥の跡もむげに御覽ぜざらむは、餘りおぼつかなかりぬべければ」と宣ふを、すけ「それは中々、參らすともかひある事は侍らじかし。大宮の御前などに取り出でて侍らむも、便なげにはよも、とこそ思ひ給へらるれ。上の御前など

萬思ふさまに―女二宮は缺點なき美人と聞えたるに　竝々ならざらむ―結婚後中途にして死になどしたらば　あやし〳〵―身不肖なれども帝は行末永く女二宮に添遂げよと思召すならん　かすまむ空の―「はかなくて雲となりぬる物ならば霞まん空を哀とは見よ」　物憂がる―狹衣が女二との結婚をうるさがる　げに如何なれば―中納言のすけの心　唯わが御心に―畢竟は御自分の心次第になる筈　木の丸殿―源氏宮を思ひかけながら獨り苦悩し居るをいふなるべし。「ひとりのみ木の丸殿にあらませば名のらで闇にまよはましやは」　この御事―女二

はぬ。萬思ふさまに侍るべき事とこそ」と聞ゆれば、狹「いさや、世の中にありはつまじき夢を見しかば、物のみ心細くて、さやうの事も思ひ絶えて侍るに、竝々ならざらむ事は、人の御爲いとほしかりぬべき事を思ふなり。あやしく〳〵ながらも、長らへて仕うまつり果てよとこそおぼしめすらめ。かすまむ空の名殘ばかりにては心苦しくやと、人知れぬ心のうちには思へど、とかく申す事もなきを、殿などはいかに心得させ給へるにか、物憂がるなゝめりとて、さいなむこそわりなけれ」とて涙ぐみ給へるを、げに如何なれば、かくのみ思し宣はすらむ、と心苦しくて、われも涙落ちぬ。すけ「いでや、いみじき事といふとも、唯わが御心にこそ侍らめ。さらば殿にもさやうに聞え給へかし。大宮は、あだなる御心ありとて、いみじくうしろめたげに聞えさせ給ふ」と聞ゆれば、狹「あやしのあだ名や。木の丸殿を聞きたがへさせ給へるにや。この御事もいかにぞや。世の人の心ならば、行末までの人の御上もたどらで、時の間にも見奉らむを嬉しくこそ思はめ。法師などだにかゝる心はかたきにや。若無比丘と佛の切に戒め給へるよ。げにとこそ思

御氣色—女二宮の
垣ほに生ふる—「あな戀し今も見てしが山がつの垣ほに咲ける大和撫子」
これさへ—逢ひての後に文をやるは定例なるに其さへ遣らずしては女が心配すべければ
あらぬさまに—いつもと違つた手風に書きかへて
あはする—夢判斷を夢合せといふ、其に逢はするをかけたり
遠き人—遠國へ行きたる乳母、すけの姉
その後—乳母が遠國へ行きし後
お前に—中宮に
かの御事—女二宮を狹衣に降嫁する事

かしと見え給へり。御帳の側に引きかくして書き給ふも、心ぐるしかりつる御氣色は、おもかげに立ちて、垣ほに生ふるにもおとらねど、もし見る人あらむにと、つゝましさのわりなくて、書きもやられ給はねど、さりとて、これさへおぼつかなくて苦しかりぬべければ、人やりならず歎く〳〵、よろづにあらぬ樣に書きなして、

狹 うたゝねを中々夢と思はゞやさめてあはする人もありやと

などやうにて引きかくして、やがて弘徽殿におはしぬ。中納言のすけの局に立ちより給ひて、おとなひ給へば、すけ「けさの御供にさぶらひて、風の起り侍りにけるにや、みだりごこち例ならで、え起きあがり侍らで」とて、げにうちとけたる寢くたれ姿にて出で來たり。狹「よべも尋ね聞えさせしかども、本意なくてこそは歸り侍りにしか。遠き人のかはりには、たのみ聞えたれど、その後しもなか〳〵に見放ち給へれ」と宣へば、すけ「ひと日上の御前に宣はする事の侍りしを、告げまゐらせむとて、御消息聞えさせて侍りしなり。かの御事はいと近うなりにて侍るを、などかくおぼしめし立ちげも見えさせたま

案内―相談
きはたけき―きつぱりしたる
すくよか―氣が強く
宮―女二宮
㊄狹衣中納言内侍に女二宮への文を托す
大將―狹衣
御前―中宮の
上の今より―狹衣が女への文書かんとする樣を見てひやかしたる也
かばかりなる事の―狹衣の心
ゆたの―「いで我を人な咎めそ大船のゆたのたゆたに物思ふころぞ」

ありつらむ、などあさましくいみじけれど、人に問ひ案内し給ふべきにしあらねば、唯心ひとつにおぼし碎くさま、唯かた時の程だにいみじげなり。物にすこしきはたけきまで、すくよかにけだかく重りかなる御心にて、わが御宿世いとくち惜しう思しつゞけらるゝに、人目もえつゝみあへず涙こぼれて、せきかねさせ給へるけはひを、宮御殿籠りたるやうなれど聞かせ給ふに、やがてきえ入るやうにぞ思さるゝ。

大將は中宮の御方にて、夜あかし給ひて、つとめて御前に參り給へれば、御硯あけさせ給ひて文書かせ給ふなるべし。狹「よろしき紙やさぶらふ。筆のおろし賜はらむ」と申し給へば、御厨子あけさせ給ひて、唐の淺緣世の常ならぬを硯に具して賜はすとて、中宮「上の、今よりさばかりうしろめたかるべき御心と、宣はするやうあゝめるを」とて、うち笑はせ給へる匂も、かばかりなる事のかたきぞかしと見奉り給ふ。ほゝゑみて、狹「大方今より硯にも向ひ候ふまじきにや。わりなき仰せごとかな。ゆたのたゆたに」と口ずさびて、見まゐらせ給へるまみの恥かしげさは、げにおぼろげならぬ御すさびもことわりぞ

◉翌朝母宮來り女二宮の有樣を見て昨夜の始末をさとる
この御傍―女二宮の側
しほどけげ―濡れくさりて居る樣子
さればよ―母宮の心
かばかりの―斯る高貴の姫君に斯樣の事あるは例なき事也
左大將―狹衣を女二宮の夫にと帝の宣ふをさへ我は不同意にて内親王杯は夫などは定めぬ方がよしと思ひし位なるに
しるべする人―手引をする人

とまで思されけり。
そのすなはち母宮上より下りさせ給ひて、やがてこの御傍にうち臥させ給ひて、御格子どもまゐりなどして、起きさせ給へるに、姫宮の御跡の方に、ふところ紙のやうなる物の落ちたるを、あやしう何ぞと取りて御覽ずれば、白き色紙などいへど、なべて見ゆる樣にはあらぬが、すこししぼみてしみ深う、うつりがなども、世の常の人とは覺えぬを、誰かはこゝに落すべきとおぼしまはすに、御胸ふたがりて、心騷も世の常ならず。姫君の御殿籠りたる樣なるを、見奉り給へば、夜もすがら泣きあかし給ひける御衣の氣色、いとしほどけげにて、引きかづかせ給ひける御髮もいたう濡れたるを、さればよ、人の入り來りけるにこそ、あな心憂や、誰なりつらむ、かばかりの御身の程にかゝる例あらむや、左大將のなべてならぬ有樣を、上の行末の御後見にと宣はするだに、いでや宮達は何となくて過し給へるこそよけれ、かろ〴〵しき御有樣におもひよそへられ給はむ事、あるまじき事とこそ思ひつれ、こは如何なる事ならむ、さりとも、しるべする人

時申す―警衛の武官の時刻を奏する也
いとゞ煩はしさも―狹衣の心
かづら木の―葛城の一言主神は役行者に架橋の工事を課せられし時、其貌の醜きを恥ぢて夜のみ出來れりといふ傳說あり
一方にあらはれぬべき―此關係を人にも知られんとする心持もせぬにや
僧―夜居の僧とて夜中詰め居て祈禱をつとむる僧
なぞや―狹衣の後悔する心
やすらひにこそ―猶豫して明けて入らねばよかりしに

心うさを思し入るに、いとゞ唯今亡くなりぬる身ともがなとおぼされて、やすき事とは、身も浮きぬばかりにながれたる御涙、いと心ぐるしくわりなきに、左近の陣の時申すも、明けぬなりと聞ゆれば、いとゞ煩はしさも斜ならず、かた〳〵の心のみ亂れて、いかなるべき身の有樣にかと、かへす〳〵物なげかしさ、いとゞやる方なくて、起きもあがられ給はず。さりとてかづら木の神の、一方にあらはれぬべき心地もせぬにや。

（狹）「岩橋をよる〳〵だにもわたらばや絕えまやおかむかづら木の神

いとあまりこちたき御氣色は、人もこそとがめ聞ゆれ」と、よろづになぐさめ聞えさせ給ふ程に、よべの戸の鳴るは、僧の出づるにやと聞ゆれば、やをら立ち出づるもうしろめたく心ぐるしきに、なぞや斯く思ひやりなくあやしき身なりけむ、槇の戸の思ひかけずやすかりしも、よべは嬉しかりしに、物思添へて立ち出づるは恨めしきまでおぼされて、押閉て給ふ。

（狹）悔しくもあけてけるかな槇の戸をやすらひにこそあるべかりけれ

—帝が狹衣を
心苦しき御有樣に—女二宮をいふ

おぼしまどひたる—女二宮が

思ふまゝに—狹衣が女二宮を

この御氣色—女二宮の樣子が甚だ悲しげなるを

中納言にさへ—女二宮の心

れぬ物思を添へ奉らむも、いと心苦しうあるまじき事と、かへすぐ〜思ひ取りながらいとかばかりにては、後行末のたどりも、さすがに心強うえおぼしたどるまじう、亂れたるやうにて、消え入りぬべうおぼしまどひたる御有樣の心苦しさも、いかゞなりにけむ。これやさは免れがたき契の程ならむと思ふも、樣々におろかなるべき志とは覺えぬにしも胸さわぎて、思ふまゝにえ見奉らざらむ事のなつかしう、さりとて今も、ひとかたに上の御氣色にしたがふべきこゝちもせずなど、いとゞ亂れまさりぬる心の中、なほ〜我ながらもどかしう悔しきに、この御氣色さへいといみじきを、とかくなぐさめ奉りて、我も涙をながし添へ給ひつゝ、狹「思ひぐまなきやうに上の聞かせ給はむにより、御ゆるしなからむ程は、おぼろけならで見奉り、御文などだにありがたくぞ侍るべき。中納言のすけしてぞ、思ひあまる折々聞えさすべき。なほあが君、おぼつかなき樣にもてなさせ給ふなよ。さりとて今いく日もへだたり侍らじなど、思ひなぐさめてなむ」と、いみじき事どもを聞えさせ給へど、中納言にさへいひ知らせむ程の、恥かしさ

はぶき給ふ—此處に訪れ寄るを厭ひし今迄の心に似合はず
身のしろ衣—女二宮
思しかへさむやは—此處錯簡あるべし
げに是こそ—狹衣の心
室の八島—狹衣が始めて戀情を打明けし時の源氏宮の腕
かばかりも—以下狹衣の心、此樣な事にどうしてなつたのであらう
召寄せたらむ時

とゞ近まさりして、そこらはぶき給ふ年頃の心の程よりは、斯ばかりにて立ち退かむとも思されねば、かの夜半の身のしろ衣も、さりとも思しかへさむやはと、いと頼もしきに、こけも心の亂れまさりつゝ、狹「大宮の御氣色もつゝましく承れば、御文などをだにえ聞えさせねば、人づてならで聞え知らせむとてなむ、心のどかにおぼしめせ。御けしきとらでは、さりともなめげなる心のおほけなさは、よもつかひ侍らじ。よし御覽ぜよ」など聞え給ふ。げにうとましかるべき樣にもあらねど、かばかりも知らぬ人にけぢかく見えさせ給ふは、あさましく恥かしうおぼしめされて、唯ひとへの御衣にまとはれ給へど、いたく綻びてあえかにをかしげなる御身なり。肌つきなど、げに是こそあるべき程なれと、限なき御有樣もことわりに、美しう覺えたまふにも、まづかの室の八島の煙立ちそめし日の御腕は、樣ことに思ひ出でられ給うて、かばかりもいかにしつるぞ、もし氣色見る人もあらば、いとゞのがれ所なく、召寄せたらむ時、いかなる心地して、命待つまの程は、なほさやうなる事なくてこそあらめ、又かう心苦しき御有樣に、人知

な。今宵はよもおこらじとこそ思ひつれ。あやしきわざかな。夜ごとにさへなりぬるにや、大宮のおはしまさぬ程にだにさぶらはで。いさとく、御傍にさぶらはせ給へ」など、いひおきて下るゝは、御乳母なるべし。物言ひつる人も、「いたく更けさぶらひぬ。御帳に入らせ給ひね」と聞えさすれど、うたゝねに皆臥し給ひぬ。琴ひき給へるは、やがて枕にて顔引きふし給へる容體など、心苦しげにらうたき御氣色なれば、見奉りおきて出でむは口惜しく覺えなりぬるも、さばかり、御簾の外をだにわづらはしき御あたりと思しつるには、違ひたる御心のにくさなりかし。斯うなむけぢかき程にて見奉りつる、とばかりは、かの御耳に聞え知らせざらむも、あまりうもれいたき心地して、やをら入りて、奥の御座にすこし引入れ奉り給ふに、思しもあへず、女二「こは誰ぞ」と言はれ給ふに、

狹　死にかへりまつに命ぞ絶えぬべき中々何にたのめそめけむ

と宣ふけはひ、なべてならぬを、いみじき御心惑の中にも、聞きや知らせ給ふらむ、いとゞ恥かしくいみじきに、物も覺えさせ給はず、唯引きかづきて泣き給ふけはひも、い

大宮の―母皇太后の御留守中でもせめて姫宮達の御側に居りたけれど其さへ出來ず不本意也

いさとく―御身達直に目のさめる樣に注意して御側に睡れと侍女等に注意する也

枕にて―琴を

見奉りおきて―此儘に手を空しくして

さばかり―簾外迄見舞ふをさへうるさがりし今迄とは雲泥の相違にて憎らし

かの御耳―女二宮の耳

うもれいたき―遠慮過ぎる

おぼしもあへず―分別する暇もなく

三の宮にやと—女三の宮ならんと見ゆる女起上りて
散らさじ—人に見せじ
かの姫君—中務の姫君こそ狭衣の妻としても恥しからぬ人
蓬が門—飛鳥井姫君の門を狭衣が通りし時の歌
みだり心地—自分の病氣が又起りたりと也

とて、果は破り給ひにき」など語れば、この三の宮にやと見え給ふ、少し起きあがりて、三宮「その繪はなど見せぬ。心憂かりけり」など怨み給ふ氣色、幼びて美しげに見え給ふ。或女「繪は、御覧ぜさせむとせしかど、散らさじとてかくし給ひしかば、くち惜しくてこそ。かの姫君こそ、大將の御具にもしつべけれ。心ばへもりやう〳〵じくこそおはすれ」など、口々に物語などすれど、今一所、御物も宣はず、琴を手まさぐりにして、人々もの言ひ笑ふを見給へり。口つき、まみなどより始め、ほのかなる火のかげなればにや、げにこれこそ類なき御かたちなゝめれと、餘所に聞き奉りつるよりは、こよなく心とどまりて、とみにも立ち出でられぬ程に、出でたりけるよゐの僧參りて、妻戸あらゝかにかけつる音すれば、いとわりなくて、出でずなりぬべきにやと、なほ見立ち給へば、この宮の物語しつる人、この「蓬が門」とありし歌かたり出でて、或女「姫君の御乳母子の小宰相といふが、しか〴〵聞えたりし」など語るにも、誰ならむと思ひしを、さればよ、など聞き給ふもをかし。少しおとなしかりつる人、「例のみだり心地あしうなりにたるか

なほもあらで—只其儘に居る譯にもゆかず
壁代—几帳に似たるもの
宮達—内親王たち
わかれ給はず—見分けがつかず
見え給ふなり—「なり」は「ぞ」の誤歟
わが御上—狹衣の身の上の噂
うるはしく—天稚御子の容貌を褒めていふ

り給へど、宮も上に昇り給ひて、夜も更けにければにや、人の音もせずしめ〴〵として、琴の音ばかりぞ時々聞ゆる。もし見えぬべしやと、なほもあらで、障子より通りて、あまた立て重ねられたる御几帳どもにつたひつゝ、壁代の中に入り立ちて見給へば、こなたは宮達の御方なるべし、帳の前に二所臥し給へり。ほのかなる火の影に、いづれがいづれともとみにわかれ給はず。奥の方に琴をまさぐりつゝ、かたはら臥し給へる御髪のかゝり、なべてならず見え給ふなり、二の宮におはすらむと、目とまり給ふ。前近く人二三人ばかり候ひて物いふを、聞き給ふに、わが御上なりけり。或女「さても珍かなりし世の事どもかな。音にきゝし天稚御子とかや、見てしがな」或女「うるはしくよかりしかたちかな。この世の人とも覺えざりき」などいへば、又或る人、「されど大將の、笛もてなやみて、いかにせましと思ひやすらひ給へりし火影の匂愛敬に、似たるものなかりき。中務の宮の姫君に語り聞えさせしかば、そのまゝに畫い給へりし、御子の御かたちは、繪にもうるはしく淸らなれば、似たりき。大將の御有樣ぞ、筆及ぶべくもあらず

㊂狹衣中納言内侍を訪ひて不慮に女二宮に逢ふ

かゝる御氣色―女二宮降嫁の沙汰ありて後は

同じ心に―我も大貳乳母と同じ心に狹衣を大切に思ふと也

聞えさすべき―申上ぐべき用事あり

宮の―皇太后の御供に行きて留守なり

夜居の僧―夜中護身の爲め宿直する僧

あからさまに―一寸

内裏にさぶらふ中納言の内侍は、大貳のめのとの同胞ぞかし。皇太后にも睦じきゆかりにて、幼くよりさぶらへば、宮達の御有樣なども見奉りて、物語のついでにも時々聞えさせしを、大將も耳とゞめ給ひしかど、かゝる御氣色と見給ひて後は、中々わづらはしくなりて、同じ百しきの内ながら、弘徽殿にはことに參りなどもし給はぬを、大貳の乳母くだりて後は、同じ心にこそなど、常に聞えさすれば、局のあたりに立寄りなどし給ふ折もありけり。「聞えさすべき事」など度々申せば、局に立ちより給ひて、案内し給ふに、「宮ののぼらせ給へる御供に」といへば、本意なくて、そのわたりを佇み給ふに、箏の御琴の緒いたうゆるびけるを、盤渉調にしらべて、わざとならず忍びやかにて、絕え絕えに聞えたる御爪音、なべてのには似ずなつかしくをかしきは、宮達のなるべしと、過ぎがたくて、南の戸口のかたに寄りて聞き給へば、妻戸細めにあきて、火の光ほのかに見ゆ。寄りてやをら開くれど、とがむる人なし。火桶に火などおこしおきて、夜居の僧のあからさまに出でたる跡と見ゆ。やをら入りて、火をあふぎ消ちて、障子口まで寄

其許の―汝の代になりて始めて帝の女と婚するに非ず
身のくち惜しく―堀川が臣下の列に下りたる故に人が兎角言ふならん
めやすき御行末―此結婚は女二宮の爲に行末の仕合なるべし
さし並べ―不似合の夫婦ならば言ひ出すのも遠慮なれど
この宮―女二宮
美しと―女二宮を
思す様にて―父の望通りにしたけれど
われも人も―自身も源氏宮もそれぞれ相手がきまりて
人の―源氏宮の
さばかり―其程すぐれたる女二宮をなまじ妻にしては

其許の御世よりみかどの御女え奉りそめたるかは。有りがたくめでたき身の幸と思ふべきならず。身のくち惜しくなりにけるばかりこそ、めざましきものに人の宣はむよ。何事につけても、中々めやすき御行末にこそあらめ。上はかしこう思しおきつるにこそあンめれ。さし並べたらむにかたはらいたげならむは、いとうち出でにくかりぬべきに、この宮は、さてもなどてかはと見ゆればこそ、宣はせけれ」とて、いとめでたく美しと思したる氣色の、あはれげなるを見給ふにも、思す様にて見え奉らまほしけれど、われも人もさま〴〵に定りゐて、今はと思ひはなれて世にありなむや、とかへす〴〵思ふにも、わが心の中はあるまじき事なれば、人の御心ありさま見定むる程は、かやうにて浮きたる様にてながらへむ程に、え忍び過すまじう覺えば、身を捨てむさまにいとやすし、さばかり心苦しからむ御有樣を見奉りそめて、如何にいみじきほだしと覺えむ、母宮の、さればよと思ひなげき給はむ心のうち思ひつゞけらるゝに、なほ〳〵如何樣にしてこの事おぼしとまるわざもがなと、人知れず歎かれ給ふ。

思ひおきてつる—女二宮を貰ふ事は我が年來の希望でもあり

僻心など—女二宮を嫌ふ事を帝に聞かれては

いかにぞや—狹衣の嫌ふ事を強ふるは帝の仰でも氣がすまず

それより勝りて—狹衣の方では女二宮の事以上に嫌な事でも嫌といふ譯にゆかぬ

苦しき—帝の聟にならば窮屈な事もあらんと思ふ故、暫時延したく思ひのみ

大宮—女二の母嵯峨院皇太后

あるまじき事—女二の降嫁を

たてたる—我を張る

后腹に—女二は后腹なれども臣下の妻になるは不當の事に非ず

制しいふべきにもあらず。まづ如何にも〳〵、思ひおきてつる年頃の本意なる、かく思し宣はする御心もかたじけなし。僻心など聞かせ參らせ給はむ、いとかたはらいたかるべし。はや〳〵、よき日して、御文などこそものし給はめ。心に入らぬ事とても、聞きすぐして歇むべきならず」など宣ふものから、少しもいかにぞや思ひ給はむ事をば、帝の御事なりとも、なま心やましく、わが御心にもおぼされて、うち歎かれ給ひぬる御氣色の、例の人の親げなく哀に見え給へば、それより勝りておぼえ給はむ事をも、えぞいなび給ふまじきや。狹「何事にか物憂く思ひ給はむ。唯かく心に任せてならひ給ひて、苦しき事どもやなど思ひ給へれば、今しばしはさらでもと思ひ給へるにこそ。さてかの大宮の、あるまじき事にかけはなれて宣ふと聞き侍るぞ、いとむづかしく覺え侍りぬべき」など申し給へば、堀川「そは高きも卑しきも、女はさぞ心も口もたてたるやうなれど、上の御心にこそあらめ。大宮も、中宮の御方樣を、便なきことに宣へるにこそあらめ。さらでは后腹におはすれども、さしもあるまじき事とおぼすべきにもあらず。今始めて、

れど
誰にかは—狹衣の外に適當の人なき故
ものうげなる—狹衣の進まぬ樣子を知り居る故

かの御心—狹衣の心がはき〳〵せぬを

いかでか然は—不承知とは申上げ難き事故、承知の由申上げたれば是非なし
程もやう〳〵—婚期も段々近づく
わたくしの—狹衣の女二宮に對する心持などは干渉は出來ぬが

と覺ゆれば、唯知らず顏にてあづけてむとなむ思ひなりぬる」と宣はするを、内々の御氣色ものうげなるを見給へば、如何なるべき事にかと、心苦しうおぼさるれど、かく宣はするはおもだたしう嬉しくて、かしこまり給ひて、堀川「ものうくなどは、いかでか思ふやうは侍らむ。喜びかしこまりてこそ侍れ。これに過ぎたる面目さぶらふべき樣なし。たゞ疾く仰言に從ふべきなり」と奏し給ひける。帝「さらば卯月ばかりに」などぞ宣はするを、かへす〴〵喜びかしこまり申し給ひながら、かの御心のかひ〴〵しげならぬを、いかゞ思ひ給はむと、心苦しきまで覺え給ひけり。

まかで給ひて、大將に、堀川「しか〴〵上の宣はせつるを、前々もうけひかぬ氣色とは見えながらも、いかでか然は奏せむとすると思ひつれば、さるべき樣に申しつるを、如何はせむ。少々心に入らぬ事なりとも、泣々の人にもあらばこそは聞き入れでも過さめ、いかにもかう召し寄せらるゝ面目の程もおろかならず、程もやう〳〵近くなりぬなり。聞かせ給ふ所など憚りてこそ、今より申し給はめ。わたくしの御心のとかくあらむを、

五月の夜の事―天人來迎の事
母宮の―女二宮の母方の親族にも
まつはし―親しみ
あたり苦しく―近處迷惑な程に
狩場の小野に―女二宮が堀川家に疎遠になりたるを「御狩する狩場の小野のならしばの馴れはまさらで戀ぞまされる」
かの宮の―女二宮の夫たるべく狹衣に約束せしかば
內々にも―狹衣が內々で女二宮へ文でも遣るかと
ものうき事や―何ぞ不足があるならんと
笛の祿は―女二宮降嫁の事は狹衣が進まぬ樣な

いて母宮大殿などは、五月の夜の事などを、おぼし忘るゝ世なく、胸をつぶし給ひける。内裏には女二宮の盛にとゝのはせ給へるを見奉らせ給ひて、中々見奉る人なからむもくちをしう見えさせ給ふ。母宮の御方ざまとても、露ばかりたのもしき人ものし給はず、故御息所の御はらからにこそおはすれば、源氏の宮の御あたりをこそはまつはし給へるに、中宮參らせ給ひて後は、かくあたり苦しく時めき華やぎ給ふに、あるにもあらずおしけたれて、心細げなる有樣を、きしろはしくくせ〴〵しき御心にはあらねど、あまり打解けむつび給はむもつゝましう思されて、狩場の小野になり行き給ふを、殿の御心いとひろう有りがたうものし給ひて、さるべき折々などは、こまやかにあつかひ聞え給ひけり。帝はなほほかの宮の御後見に、大將を宣はせ契りてしかば、内々にも、もしさやうにや仄かすとおぼしめせど音なきは、ものうき事や、とおぼしめせば、その後は御氣色もなけれど、殿に御對面のついでに、帝「かの笛の祿はすげなげなむめりと見れど、世もいとはかなくのみ覺ゆるに、たのもしき人なかむめる有樣の心苦しきを、又誰にかは

―狹衣の通ふ女とは夢にも知らざりしならん知りながらも―知つて居たにしても
いとほしく―道季の心
誠にしも―或は實事では無いかも知れぬに早まりて君に申上げたる輕卒さよ
御心の―狹衣の
知らず聞かぬ―道成が我と姫との關係を知らぬ筈はなきに
流石に―道成に對する狹衣の評
ねたく―家來に横取されしと思へば
㊂狹衣大納言に昇進、帝女二宮降嫁の事を急ぐ

ば」など申すを、狹「實に然もやありけむ。知りながらも、さやうの者は然のみこそあれ」―とて、物しげに言少なる御氣色を、いとほしく、誠にしも無からむものゆゑ、急ぎ聞えさせつらむ、といとほしかりけり。御心の中には、實さもあらば、中々行方なく思ひつるよりも、心憂くもあるべきかな、一夜二夜にもあらず さはいへど、程經にしを、さりとも知らず聞かぬやうはあらじを、太秦にて見そめなどして、乳母と内々語らひおきて取りたるならむかし。流石にあざれて、さやうのわざも爲つべき者ぞかし、かの祈の師にとりかへされたると思ひしは、中々よかりしものを、ねたく目ざましくもかへすがへすあるべきかな、いかでこの事疾く聞き定めむ、と今すこし覺束なさも目ざましさも增りて、おほし歎かるれど、この道季が前にても、この事とかくも絶えて宣はせざりけり。

年返りて、中納言、大納言にて大將かけ給ひつ。かくつかさくらゐ年の數添ひ給ふまゝに、何事も際ことなる光を添へ給へば、世の人もあまりゆゝしう見奉りあつかへば、ま

衣の腰巾著てしか〳〵こそ―狹衣が斯樣々々の女を拵へたりなどと話す譯もなし

彼も―兄も飛鳥井姫君と自分との關係を話さゞりしならん

俄になくなりて―飛鳥井姫君身投の事

行方なくなり給ひにし人―飛鳥井姫君の樣に思はる

太秦にて―兄式部大輔の話の趣かくおはしまし

こそなど、忍び給ふ事なれば、何にかは言ひ聞かせむ。又彼も、其處々々なる人こそ懸想すれ、筑紫へもゐて行かむずる、なども言はざりけるなるべし。君のかくのみ歎き給ふ氣色を見て、賢しき道季は、人知れずこの人を尋ねけり。物詣をして、神佛にも、この人の行方聞きつけさせ給へ、と申しありきけり。大貳道よりまゐらせたる文に、「某が妻の俄になくなりて侍れば、その事どもにより、肥前になむ留りてさぶらふ。ものの始めにかく忌々しき事を、歎き思う給ふる」など申したるを、堀川「誰ともなくて、俄にいみじう忍びてゐて行くと聞きしなり。哀なりける事かな」と大殿も宣はするに、中納言殿ひとり例の詠めゐ給へる所に、道季參りて、道「あやしき事をこそ承りつれ。道成が妻は海に身をなげて候ふなりけり。乳母なるものの泣く〳〵言ひつゞけて申しける事ども承れば、唯この行方なくなり給ひにし人とこそ覺えさぶらへ。今思ひ給へ合すれば、太秦にて見し人をなむ尋ね出でたるなどこそ語りさぶらひしは、もしさる事や侍りけむ。かくおはしまし通ふ所とは、かけても知り侍らざりけるなゝめり。誠にそれなら

狹衣物語　卷第二之上

物おもひの花のみ咲きまさりて、汀がくれの冬草は、何れともなく、あるにもあらぬ中にも、尾花がもとの思草は、なほよすがと思さるゝを、むげに霜にうづもれ果てぬるは、いと心ぼそくおぼし侘びて、

狹　たづぬべき草の原さへ霜がれてたれに問はまし道しばの露

あさましう行方なく、誰とだに知らで歇みにしは、なほ思ふにも餘る心地ぞし給ふや。ありとも、事々しうまことしき樣に思ふべき程にはあらざりしかど、飽かぬ別は何にも勝ればにや、木草につけても忘れがたうのみ思さる。

かのくだりし式部大輔は、肥前守の弟ぞかし。三郎は藏人にもいまだならず、雜色にてぞある。兄の藏人になりて、暇なくなりにし後は、御身に添ふかげにて、忍の御ありきには離れねば、飛鳥井にも唯ひとりのみぞ、御供には參りありきける。兄にもしかぐ〳〵

㊀道季飛鳥井姫君投身の噂を狹衣に語る、狹衣の悲嘆

物おもひの―狹衣の飛鳥井姫君に關する悲嘆をいふ、「草々も咲き拂ひぬる木枯に咲きこそ増れ物思ひの花」躬恒

尾花が―「野べ見れば尾花が本の思草枯れ行く冬になりぞしにける」和泉式部

あさましう―狹衣の心

まことしき―妻とすべき程の乙女は無かりしかど

三郎―道季、式部大輔の弟

御身に添ふ―狹

かいこし—後の髮を前にふりかけて顔をかくし
御扇—狹衣に大輔が貰ひし扇
面影—狹衣の
この世にて—姫の心
せがい—椎、舟ばたにつきたる棚の如き板

とて、袖を顔におしあてて、とみにも動かれぬ程に、人や見つけむとしづ心なければ、泣く泣く單袴ばかりを著て、髮かいこしなどするに、ありし御扇の、枕がみにありけるが手に障りたるも、心騷せられて、まづ取りて見れば、涙に曇りてはかぐ〵しうも見えず、墨ばかりぞつや〳〵として、唯今書き給へる樣なるに、さしむかひたる面影さへふと思ひ出でらるゝに、この世にて又見奉るまじきぞかし、唯今斯くなりぬるとも知り給はで、何處にいかにしてかおはすらむ、寢やし給ひぬらむ、さりとも寢覺には思しいづらむかし、などより外は、又なき心まどひなり。硯をせがいに取り出でて、この御扇にもの書かむとするに、目も霧りふたがりて、手もわなゝきて頓にも書かれず。

(姫)はやき瀬の底のもくづとなりにきと扇の風よ吹きも傳へよ

えも書きはてず、人のけはひすれば、疾う陷りなむとて海をのぞく　いみじう恐しとぞ。

ふにつけても、是ト暮姫が歎てばかり居るからの事と
心幼く—乳母の心に姫がつらきものに思はれるので
せため給ふよ—苦めなさるよ
かゝる人—身持女
平にて—安産して
思すらむ人—狭衣
いかなる人かある—其樣な人は何處にもない
思ふ事—身投の目的
いであな—姫の心
なるに任せて—乳母が成行次第にしては置かず

まかうざまにもせため給ふよ。かゝる人の、ものいたく思ふは忌み侍るなり。平にて命あらば、忘れがたう思すらむ人にも逢ひ見させ給ひてむ。いと心幼くいふかひなき人の御心は、いかなる人かある」など、いみじき事をいひ聞かすれど、この大輔が見えぬ折折の出で來たるを、わが思ふ事はなりぬべきなめりと、思ふより外の事もなければ、いであな哀、なるに任せては見で、あながちに身をもてなして、かく憂目をば見するぞかし、身を投げたる跡に、乳母いかなる有樣にて長らへむとすらむ、と流石に哀にはかなく覺え給へば、いとゞ音のみ泣き、答もし給はねば、うちむづかりて立ちぬる間に、頭をもたげてつく〴〵と沖の方を見やれば、空はいさゝかなる浮雲もなくて、月のさやかに澄み渡りたるに、海の面は來し方行く末も見えず、遙々と見渡されたるに、寄せかへる波ばかり見えて、舟の遙に漕がれ行くが、心細き聲して、「蟲明の瀬戸へ今宵」と歌ふもいと哀に聞ゆ。

姫 流れても逢ふ瀬ありやと身をなげてむしあけの瀬戸に待ち試みむ

又これ—朗詠「不レ堪紅葉靑苔地、又是涼風暮雨天」
常磐の森に—前に見えたる飛鳥井姫君の歌
㊀飛鳥井姫君蟲明の瀬戸に入水
かの舟—姫君の乘れる舟
心地も—姫がかくて死なば—姫の心
衣の關—姫が肌を許さぬを
同じ樣—前同樣の斷を物和らかに言ふ故
情だつ—情ありげに體裁つくる
心かけて—式部大輔が惚れて
見えぬ—大輔が來ぬを姫が嬉しく思ふに
かゝる事—大輔が外に女を拵へたるを不滿に思

深く見えたる空の景色は、誠にもの見知らむ人に見せまほしげなり。狹「又これ涼風暮雨の天」と口ずさみ給へるなどを、かの常磐の森に秋待たむといひし人に見せたらば、ましていかに、はやき瀬に沈み果てむと、理なりかし。

かの舟には、日數の積るまゝに、心地も誠にあるかなきかになり行くを、かくて死なば、空しき骸をこれかれ見扱はむも、いみじうくち惜しくねたうて、なほいかで海に入らむと思ひて、さるべき隙を見るに、さすがに人目しげくて日頃にのみなり行くに、この大輔萬に恨みつゝ、衣の關を恨み侘ぶれど、同じ樣をのみなごやかに言へば、さすがに情だつ心にて、いと弱げなる樣を心苦しう思ひつゝ、近くもえ寄らざりけり。かゝる程に、大貳の舟に、やむごとなき人の、なべての女房には似ぬがまじりたるに、心かけて語らひありきけり。宵過ぐるまで見えぬ程を嬉しと思ふ程に、かゝる事を乳母いとやすからず腹立しきにも、君のかく臥し入り給へればぞかし、例の樣にておはせましかば、かゝる事無からまし、と思ふにも、いとゞ心憂くつらう覺え給へば、乳母「己が身をとざ

御ことぐさ—愚痴の材料

心のつま—愁の種。「いつとても戀しからずはあらねども秋の夕はあやしかりけり」などの意

ありか定めたる—著雲の動かぬ貌

西の山もと—落日の景

涙の露—「啼き渡る雁の涙や落ちつらん物思ふ宿の萩の上の露」

荻の上に—荻は萩の誤なるべし

かばかりを—斯く狹衣に慕はれる丈にて一生の思出とするに足れりと思はる

常よりも、心地よげならぬ御ことぐさに目馴れにたる中にも、この秋は蟲の音しげき淺茅が原にことならず、泣き暮し給ひても、晝はおのづからまぎれ給ふ。心のつまとか言ひふるしたる夕暮の空霧りわたりて、ありか定めたる雲のたゞずまひ、うらやましう眺めやり給へり。西の山もとは、げに思ふ事なき人だに、もの哀なりぬべきに、雁さへ雲井遙に鳴き渡りつゝ、涙の露も、さかり過ぎたる荻の上に、玉とおき渡しつゝ、鳴弱りたる蟲の聲々さへ、常よりも哀なるに、御前近き透垣のつらなる吳竹を、吹き靡かしたるこがらしの音さへ、身にしみて心細く聞ゆれば、すだれを少し卷き揚げ給へるに、木木の梢も色づき渡りて、ざと吹き入れたり。

狹　せく袖にもりて涙やそめつらむこずゑ色ます秋の夕ぐれ

狹　夕暮の露吹き結ぶこがらしや身にしむ秋の戀のつまなる

など、さまぐ〵戀ひわび給ひて、涙をおしのごひ給へる手つきの美しさは、唯かばかりを幸にて、この世の思ひいでにしつべしとぞ見えける。雨さへ少し降りて、いとゞ霧

かの夢—懐胎の事
聞きあきらめで—聞き定めずして
はか〴〵しき人にはあらじ—姫は
さる事—懐胎の事
なれ顔に—姫がわが子を狎れ狎れしく安く取扱ふのが
かはらぬ樣にて—其子が我に似た容貌にて
思ひ數まふべき—あんな女を人がましく慕ふ事は無い
さる事も—よもや懐胎にもあるまじ
覺束なき方の事—懐胎の疑
東のかたへ—東國へ—狹衣の心、東國へ行く樣な憚もありし故
その原—信濃の園原と其頭、園原の伏屋のある處は箒木
はゝき木—箒木、母

ざま思しやるに、戀しく思ひ出でられ給ひて、終夜まどろまれ給はず。

狹 しきたへの枕もうきてながれぬる君なき床のあきの寢ざめに

何事よりもかの夢の覺束なさを、いかなる事ぞと聞きあきらめで歎みぬるは、いといぶせく覺束なさなども世の常なり。いづれにても、はか〴〵しき人にはあらじを、誠にさる事もあらば、なれ顔にもてなさむこそ心苦しうかたじけなけれ、まして年月經て鏡の影もかはらぬ樣にて、言ひしらぬものの中に生ひ出でたらむよ、いでや、斯かればこそよからぬ振舞はすまじきものなれ、少し人數なる者の、かく跡はかなき樣やある、何しにか、あながちに思ひ數まふべき、さる事もあらじ、と强ひて淺きかたざまに思ひなせど、萬よりもこの覺束なき方の事は胸ふたがりて、東のかたへなど聞きし、もし然もあらば、伏屋にや生ひいでむ、などなほ心にかゝりて、わが御宿世の程くち惜しうおぼさる。

狹 その原と人もこそ聞けはゝき木のなどか伏屋に生ひ始めけむ

如何にも—狹衣の心
みづからの—姫自身の
わが心と—如何につらくとも姫自身逃亡する樣な性質ではなかりしに、斯る事の出來しは今迄我が放擲し置きし故也
ねたしと—僧が
もて騷がむも—大げさに騷ぎ立てるも嫌に思ひて
たい〳〵しさ—怠慢
あすは淵瀬に—姫の返歌
たちまちに—忽然失ふべしとは思はざりき
まことしく—狹衣の心、本妻にすべき譯にもゆかぬが、源氏宮が手に入らぬ不足を慰むる材料にはなりたるに
恐しげならむ者—威儀師
思ひ惑ふらむ—姫が

しかに言ふ人もなければ、參りてしか〴〵なむと申せば、いとあさましく、あへなしとも世の常なり。如何にも、乳母がしつる事にこそあらめ、みづからの心には、何事のつらさにかは、忽に行きかくれむとも思はむ、いみじくとも、わが心とさやうにはあらじと見えし心ざまを、今まで斯くて置きたりつるけぞかし、唯ありし法師の取りかへしつるならむ、如何ばかりねたしと思ふらむと、知らぬにはあらざりつれど、もて騷がむも流石にいかにぞや覺えて、斯くなしつるも、あまりなる我が心のたい〴〵しさぞかし、「あすは淵瀬に」とありしも、かゝるけしき見てや言ひたりけむ、など思ひつゞけらるるに、いみじうくち惜し。何ごとも類あり難くめでたかりしにはあらで、唯なつかしうあはれと覺えつれば、たちまちに見じとまでは思はざりつ。我がかく行方なくなしつるよ、と思すに、胸ふたがりて、つく〴〵と詠めくらし給ふ。まことしくやむごとなき際にこそあらざらめ、さる方の下草の露のかごとも慰めつべかりけるを、まことに恐しげならむ者の馴れ寄らむありさま、いかばかり思ひ惑ふらむ、と妬うもゆかしうも、さま

たゞならぬ―式部の心、身持女は氣色の惡いものとか
かやうの事―安産の爲にも
生憎だたず―強ひて付纒ひもせず
くだる僧―共に筑紫へ下る僧

⊕姫を失ひたる狹衣の悲嘆
思ひ明し―狹衣が
やどり―私は昨夜より此處に止宿して居る者
たちぬる月―先月
わたり―引越して來られる筈
それや―其人が姫の居所も承知して居るならん
今さて〳〵―今に見ろ其儘には置かぬ

いと頼み少げに消え入りぬべき樣なれば、たゞならぬ人は、心地など常に惡しうするとかや。さやうにて斯かるにや。いとゞかく物など食はでは、かやうの事もあしかむなるものをと、いと恐しきわざかなと、流石にいとほしくて、いたくも生憎だたず。くだる僧どもに祈せさせなど、萬にもてあつかひつゝ、這寄りては、とざまかうざまに言ひ恨むるを聞くたび毎に、いかにせまし、かく憂きを知らぬ命ながさにて、つひに如何ならむと思ふに、すべき方なければ、この海にや陷りなましと思ひなりぬ。

京には、終夜おぼつかなく思ひ明し給ひて、又の日いつしか御文遣したるに、門鎖して人の音もせねば、怪しうて、なほ叩けば、いみじげなる下司の出で來たるに問へば、下「知らず。昨夕この殿にはやどり侍りしなり。筑紫の豐後といふ人の、このたちぬる月に、この殿を買ひ給ひてしなり。今日明日ぞわたりゐ給はむずる。それや、おはし所は知り給ふらむ。おのれはたゞ人なり。今宵居よとありしかば、まうで來しなり」といへば、使「隱すめりな。今さて〳〵やまむやは」など威しおきて、隣の人々に問へど、た

故、將來我身の上の事が狹衣に聞えて斯く〳〵で居ると知れたらば、一層つらき事ならん
さし離れたる―狹衣と緣のなき男でなくて
親の―親同樣に思ひて
びなしと―便なしと
さのみも―何時迄も此樣にはあるまじ
あやにく心も―叶はぬだけに却てつのる執心
いとかく―彼是趣意を立つべき程の身分でもなければ
今は―斯うなれば御意次第に致します
かく覺ゆる程―苦しむ間だけ許し給へ

るあたりにだにあらで、かく親くよろづ聞き合せぬべき緣にしもありけむ、遠き程まで行き著きて、この有樣を見あつかはれぬ前に、如何にしても死ぬるわざもがな、と思へば、かく五六日にもなれど、水をだに取り寄せず。乳母來つゝよろづに言へど、いとかく憂かりける心を知らで、年頃親の同じ心に賴み過しけるさへ心憂く覺ゆれば、頭もたげ見合せむもつらう悲しくて、聞きも入れず、唯引きかづきて臥したり。男も暫は、いかでか、心ならぬ事なれば、びなしと思さゞらむ、さのみもあらじ、と思ふ程に、斯くいとあさましうて、命絶えぬべき樣なれば、かくまで思ふべき事かと、いと怪しく心づきなくさへ覺えて、あやにく心もつきまさりて、とかく引き動かし恨むれば、思ひ侘びて、姫「おしはかり給ふるやうに、いとかく思ふべき身の程ありさまならねば、びなしなどにはあらず。心地の例ならずのみ元よりありしが、いとゞまさりて、昨日今日は長らふべき心もせぬなり。今はいかなりとも御心にこそあらめ。いとかく覺ゆる程を過し給へ。人の近きもいと苦しう覺ゆるは、如何なるべきにか」と泣くけはひなど、げに

ことしも―書くべき事もあらんに、恰も我が今の境遇をわざと書きたる如く思はれて

物覺ゆるにや―是程悲しくても矢張知覺は失はぬにやと

今朝又―姫の想像

心えぬ夢と―狹衣の手紙に

たゞならぬ事―懷胎の事

さりとも―知らせたらば狹衣の情も一層切なるものあるべし

行末に―式部大輔は狹衣の家來

ことしもこそあれと、いかでか悲しと覺えざらむ、顏にあてて泣かるゝ樣、袷も皆おちぬべし。

姫 かぢを絶え命も絶ゆと知らせばやなみだの海にしづむ舟人

姫 添へてける扇の風をしるべにて返る浪にや身をたぐへまし

など思ひ續けらるゝも、物覺ゆるにやと我ながら心憂し、今朝又御文ありつらむかし いかにいひてか返しつらむ、又いかに待ち聞きて思しつらむ、飛鳥川とありし折、かゝらむものと思ひかけざりきかし。

姫 海までは思ひや入りし飛鳥川ひるまをまてと頼めしものを

心えぬ夢とありしはいかなりけるにかと、聞きだに合せで歇みぬるいぶせさよ、たゞならぬ事を、いかで知らせ奉らじと、などて思ひけむ、さりとも今少し哀とおぼし出でましと思へど、又うち返し、思ふにかなはで命長らへば、行末に聞き合せ給ふやうもありて、さてこそあれと聞かれ奉らむも、今少し心うかりなむかし、などて、さし離れた

わが君を―自身こそ其方を戀ひ慕ひて居れの意歟
青びれ男―狹衣
あだへて―戲れて
立ちぬる―式部大輔が
持給りへし―狹衣が
渡る舟人―由良の門を渡る舟人楫をたえ行方も知らぬ戀の道かな」

で、あな心憂の有樣やと思ふに、悲しければ泣き入りたるに、この御扇をさしよせて、式部「これ御覽ぜよや。いかにして一文字も見ばや見ばやと、高きも短きも心をつくして騷ぐ御手よ。これ見給はば、まろがにくさも慰み給ひなむ」といふは、誠にわが見し同じものにやとゆかしきに、人目も知らず起きあがりて見つべき心地すれど、顏などの明らかに見えぬべければ、なほ泣き臥したるを、式部「わが君をこそかやうに戀ひ悲しめ。その青びれ男によりて、命絶えぬべくも見え給ふこそ、かへりては心づきなけれ。何事をいとさまでは思ひ給ふぞ。まろが顏はこよなくよきぞ。見給へ〳〵」とあだへて、衣をせちに引きあけむとするに、姫「神佛、かゝる目見せ給はで、疾く失ひ給ひてよ」と泣きこがるゝ樣の、餘にうたてあれば、むづかりて立ちぬるまに、この扇を取りて見れば、たゞ一夜持給へりしなりけり。移香のなつかしさは、打ちかはし給へりし匂もかはらで、眞名假名など書きまぜ給へるを見れば、「渡る舟人かぢをたえ」など、かへす〴〵書かれたるは、その折はわれと知りて書き給へるにはあらじなれど、唯今わが見つけたるは、

本意なき―我に嫁するを不本意に思はるゝは尤なれども、斯く泣に嫌はるゝは變なり
えさせたりつる―餞別にくれたる
ものし給へ―與へられよ
かゝる人―其方を連れ行く事は隱し置きしに
まろが―わが主人の狹衣が
奉り給へ―著給へ
持給へりつる―狹衣が持つて居たるを使ひなれたるが却てよしと所望して戴きたり
これは―姫の心
他人にだに―狹衣の家來でなければまだしもなるに

給へや。かくまで心憂き御心ならむと思はざりしが、本意なきやうにはいかでか思さざらむ。「さりともいと怪しや」とて、ものうげなる氣色なり。皮籠やうのもの開けさせて、人々のえさせたりつる扇、薫物などやうのもの、取り出でて、式部「はか〴〵しからねど、ある人々にものし給へ。かゝる人おはすべしとも知らせざりしに、いかでか聞きけむ、忍びて人率て行くなりとて、それがし、かれがし」などいひて、取りちらす中に、女の裝束の心ことなるがあるを、式部「これは、まろが中納言殿の、誰と知らねど、率て行くなる人に必ず著せよ、とて賜はせたりつる。御志のまゝに奉り給へ。御涙にいたうしをれぬるなゝめり」などいふを、乳母「げになべてならぬ色あひにこそ侍るめれ」など愛でゐたり。式部「又この御扇持給へりつるを、新しきよりはとて申し取りたる、目恥かしき人にもこそあれ、いたう馴れたりと惜ませ給ひつ。されど紀念に見よとて賜はせたるぞ。はかなくうち持たせ給へる、かやうの物どもさへぞ、なべての人には似させ給はぬや」といふを聞くにも、これはさば、この太秦にて聞きしものにこそあれ、他人にだにあら

おいらかに－おとなしく
しなぐ／＼しからぬ－品格わるき
わろき者－卑しき者
人たち－女等
おとゞこそ－乳母を呼びかけていふ詞
申し直し給へ－姫に取りなしてくれ
あだへつゝ－戲れつゝ
うたてげに－「らうたげに」の誤なるべし
おとゞ－乳母
あきたく－厭はしく
さばかり－式部大輔が多くありし縁組の相談を斷りて姫に熱心なるは姫の仕合なるに、嫌ふといふは魔のさしたるならん
あらみさき－人の中を惡くする神
はなたぬ－付纒ひ居る
おとゞ－乳母

いらかにもてなして、いとしなぐ／＼しからぬ様にても、御心に飽かぬ事なく、安らかにて過ぐさせ給へ。公達ならずとて、おのれをばわろき者と人にも思はれたらねば、まだこそ女に憎みならはされね。御前よりは勝りてやむごとなき人たち、我も／＼と宣ひつれど、太秦にて見奉りそめてしより、思ひしみし心直りがたくて、かく面目なき目を見侍るにこそ。おとゞこそ、なほこれ申し直し給へ」など言ひあだへつゝ、かづきたる衣を、切に引き除けて顔を見るに、ほのかなりしよりも近勝して、いとゞうたてげにをかしげなれば、思ふ様に嬉しくて、いかでとく思ひ慰めて、あかぬ事なくかしづきて見む、と思ひけり。おとゞ、つれ／＼なりし名殘なく、そのあたりのものども、もて扱ひたる心地嬉しう思ふ様なるに、「女君の御有様の、いとあきたく生憎げなるを、いかに見奉らむ。さばかり我も／＼と婿にほしがりし人を捨てて、かゝる御氣色は幸とこそ覺ゆれ。物のさまたげのし奉るなゝめり。あらみさきといふものはなたぬ人は、斯くよかるべき事は、惡しうなむ覺ゆる」と、人々言ひ合せて歎くを聞きて、式部「おとゞだにさし出で

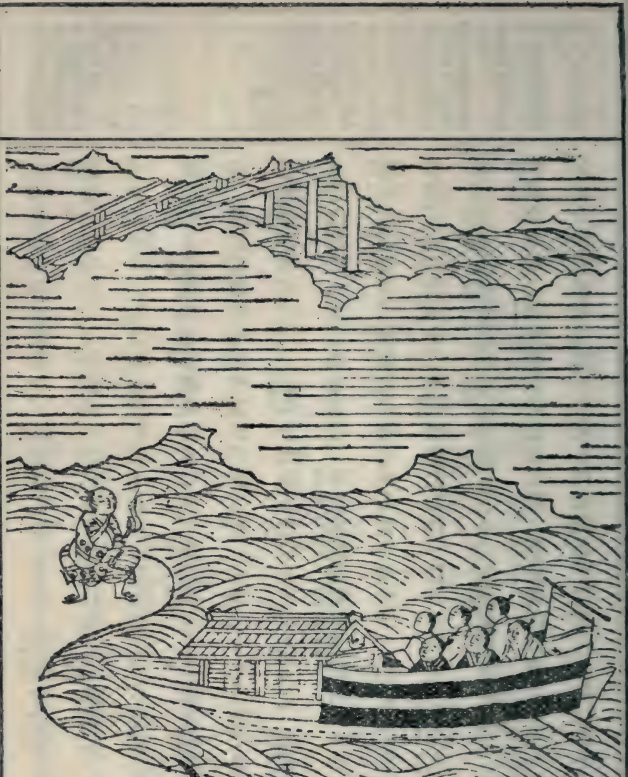
心ゆきて—滿足して
ねたう悲し—嫉の心
㊈姬君式部大輔の心に顧はず、大輔姬君をもてあます
落し入れて—飛び込ませて見て居る人もあるまじき故
男—式部大輔
たけき事—其方が強情張りても碌な事はあるまじと
道行き人ごとには—往來の人のかげを見ても氣をもみ、隱し妻の憫
あやしくとも—我身分は低くとも
殿—狹衣が我について居らるゝ以上は
何がしら—我をば
さばかりの—彼の少將位にはおれでも成れる
その主—少將(狹衣)

き抱きて乘せ移す程の心地、いかばかりかはありけむ。乳母の心ゆきて、ものいひ笑わらひなどするを聞くに、ねたう悲しとも世の常なり。

いかなる者の何處の世界に率て行くにかあらむと、すべて言ひやるべき方ぞなきに、ただやがて起き走りて河に陷りなばやと思へど、唯今落し入れて見る人もあるまじければ、唯頭をだにさし出でず、引きかづきて臥したり。男添ひ臥して、えも言はぬ事どもを慰むれば、いとゞ泣きまさりて、生憎なる氣色なれば、式部「さ宣ふともたけき事おはせじと思へば、をこがましや。何がしの少將の蔭妻にて、道行き人ごとには心をつくし、胸をこがし給はむやは。あやしくとも、またなく册き奉らむを取所におぼせかし。なま公達は、中々いと心地あしきものぞ。殿のおはしまさむ限は、何がしらをば、えこそ其公達は侮り給はざらめ。さばかりの少將には、ならむと思はばなりぬべし。よし見たまへよ。來年ばかり、かへり殿上して五位の藏人になりて、その主といづれか勝りけるとなりいでて見せ奉らむ。口惜しう本意なしとおぼすとも、今はいふかひなければ、唯お

行き方知らぬ―姫がはじめて狹衣に逢ひし時の狹衣の歌
なりつる―「なりはつる」の誤歟
きたなげなしとや―汚くはなしとでも評すべき容貌の男
そゞろかなる―ひよろ高き
鳥飼―攝津
中納言殿―狹衣
江口の逍遙―江口に遊女あればこゝにて往來の旅客の遊山したるなり
何者ならむ―姫の心
別當―檢非違使別當
恐ろしげなる物―弓矢

方知らぬ」とありしを、聞きはじめしより、月頃いひ契り給ひつる言葉、けはひ、有樣思ひ出でられて、わが身いかになりつるにかと思ふだにいみじきに、淀といふ所に行きつきぬれば、舟に載せむとのゝしり合ひたるに、さればこそ常磐にあらざりけりと思ふに、物も覺えねど目は見ゆるにや、岸に舟ども寄せて乘せ移さむとて、二十ばかりの男の、きたなげなしとや言ふべからむ、つきぐ〳〵しうそゞろかなる容貌など、いとゞいみじう思ふ事なげに、心ゆきたる氣色にもてなして、男「大貳殿は、今鳥飼といふ所わたりまではおはしましぬらむな。中納言殿の御物忌かたかりつれば、とみにえ出でて、後れ奉りぬるなり。御氣色よろしからざりつれば、暇もえ申し出づまじきなゝめりと思ひつるに、高名の馬をこそ賜はせたなれ」など言ひて、送の人々なるべし、同じ程のものども、「江口の逍遙この度は不用なめり。大貳殿いそぎ給ふ」などほこりかに打笑ひたるを、何者ならむ、行幸賀茂の祭などに、別當の後にや、恐ろしげなる物さげつゝ在る者こそ、かゝる容貌はしたれ、と見るだに疎しげなるに、車に寄り來て、「御舟に奉りね」とて、か



覺束なくて―狹衣にろくに知らせもせずして筑紫へ行つて仕舞ふとは、心外なる身の成行よと
人の―迎の人は急いで居るならんに
唯今などは―今引越して行くと丈は狹衣に知らせたさに
後に―車に陪乘したる也
門引入るゝより―式部大輔の家に著したる也
明けはてぬ―明けきらぬ中に出發せん
臥したる―姬君が

ながら、覺束なくてものし給はむは、心より外なる身のあやしさを、まづ思ひつゞけられて動かれぬを、妻戸おし明けて、乳母「さらば疾う渡らせ給ひね。人の急ぎ歸らむに、久しうならむもいとほし」といひて、鮮なる衣もて來て打著せ、櫛の筥やうのもの車に取入れなどして、唯急ぎに急ぎて、乳母「遲し〳〵」と押出づるやうにすれば、我にもあらでゐざり出づるに、何と思ひわく事はなけれど、心さわぎして胸つとふたがりたる心地す。鷄も今ぞ鳴くなる。

姫 天の戸をやすらひにこそ出でしかとゆふつけどりよ問はば答へよ

なほ唯今などは聞えまほしきに、とみにも乘りやらず、涙せきあへぬ氣色を、況て如何にと道の程の有樣思ひやらる。乳母又人一人ばかりぞ、後に乘りぬる。

門引入るゝより、胡籙など負ひたるもの、見も知らぬ姿どもしたるもの數知らず多く、火は晝のやうにともして、「明けはてぬさきに」などいふ氣色も、あやしく物恐ろしきに、こはいかなる事ぞと唯かきくらす心地すれば、衣を引きかづきて臥したるに、かの「行き

留守居には誰それを置く故

かくと―引越すを狹衣に告げんと思ふに

常磐のもり―常磐殿をきかせたり

とかへる山の―前の狹衣の歌

なしつるぞよと―「なしづる世ぞと」歟

心も知らぬ―乳母の心、式部大輔に任せて田舍へやるは惜しいもの

飛鳥川を―狹衣が安否を案じて飛鳥川の歌をよこしたる位なれば、曉には多分來るならんに

よく案内申せよといひおき侍りぬ」などぞ、留むる下司ども呼びたてていふも、かたはらいたければ、姫「さまで尋ぬる人もあらじ」といとゞ覺束なきものに宣ふ。げに行方なくば、昔物語などのやうに、殊更びてや思さむ、誠にかくと聞えばや、と思ふに、

姫 かはらじといひし椎柴待ち見ばや常磐のもりに秋や見ゆると

とかへる山のとありし月影は、この世の外になりぬとも、忘れ給ふべくもなきを、いかになしつるぞよと、あやしくもの心細く、火をつく〴〵とながめて涙ぐみ給へるまみの氣色、いとゞらうたげなるを、乳母さすがに打見おこせつゝ、心も知らぬ人にうちまかせ聞えて、遙なる程に出で立ち給ふは、くちをしき樣かな、と涙ぐまれけり。

曉に車の音して門叩くなれば、乳母「いであはれ、人の爲に誠心なりける駿河殿の聲かな。あまり疾うさへ車を賜へるよ」とて、引き入れさするを、聞くにも胸うち騒ぎて、飛鳥川を心もとなげに宣はせたりつるは、夜さりなどは例のものし給はむに、如何樣にいひてか歸り給はむなど、なほ懶きも、うたてある心かなと、乳母のものいひも心恥かし

あやしの女ー乳母自身をいふ
御忌の方にー方角まで悪い
頼もしき人ー狭衣
さやうの程ー御産の時よく世話をして呉れそうもない
親などのー狭衣如き人は女の親がちやほやして呉れる處へさへ少し世話が疎かになれば通はなくなるが常也
何の數とかはー姫君を
戀こそ路のー引歌未詳
かく外へー姫が乳母の心を察したる也、我が引越を否むは狭衣を思ひて也と思ふならん
かゝる御幸ー狭衣の通ひ來る事
何がしーこゝの

御有樣も、流石にそれまで生きて侍らば、あやしの女の身こそは見奉らめと思う給ふに、忌々しきぞや。然らぬだにこそ、子生むには土用といふものは必ず出で來れ。御忌の方にさへあるよ。この頼もしき人の御心ばへ、さやうの程とても、かひ〴〵しうもてなしあつかひ給ふべきにこそ見え給はね。いひ思へば、苦にてぞ侍らむ。かやうの君だちは、親などの居立ち頼もしきあたりをだに、少しもうしろみやめばうち捨て給うつ。いでやまして何の數とかは思ひ給はむ。あなをこがましや。又御志あらば所かはるとも、おはせざるべき事かは。戀こそ路の」とさすがに打笑ひていふ。かく外へ往きにくゝするも、この人によりてと思ふぞかしと思へば、姫「その事にはあらず、あやしき有樣なれば、ありきも物憂く覺ゆるを、いさや、いとゞ物懲して」と宣へば、乳母「さてそれも惡しうや侍りける。それによりてこそかゝる御幸も御覽ずれ。かしこは中々、若き人のおはし通はむにをかしき所なれば、打忍びて、二三日も居給ふやうもありなむ。何がしそれがしとゞめて侍れば、御使にもそこ〳〵と數へ侍りなむ。おはしましたらむにも、よく

此事―懐胎が事
宣ふは
思ひ歎きへ―狭衣が我を人がましく思ひ給はん
空言にはあらず
ヤ―うそでもあるまい
頼もし人―乳母
御方へと―源氏。宮に奉公せんと思ひしも、狭衣などの如き貴人に接近するが恥かしくて氣強く斷りて仕舞ひしに
見え奉り―狭衣に逢ひたり
さやうの筋―奉公
・夜はかりと―・夜泊りの假ごしと思ふべからず
筒―井戸がは
故中納言―帥中納言
久しう―直に歸り來りたくば御心任せにし給へ
とかう―御産の時の世話も

などと思ふに、わが身少し痛はしうなりにたるを、此頼もし人や如何もてなし果てむとすらむ、源氏の宮の御方へと思ひしも、かやうの人に見え奉らむが恥かしさに、心強きやうにてやみにしを、げにかく思はずなる樣にても見え奉りけり、今はまいて、何處にも何處にも、さやうの筋など思立つべきにもあらずかし、など言ひ〳〵のはて〳〵は、うしろめたうぞ思ひ續けらるゝに、枕も浮きぬばかりになりぬ。乳母又來て、萬のもの取りしたゝめ、然るべきものは塗籠に置きなどしつゝ、乳母「京の内には一夜ばかりと思ふまじきものぞ。況てこの井は五六日にもなりぬべかめり。筒など立てむ程までこそはおはしまさめ。車も有りがたきに、たま〳〵歩かせ給ふも、かくうるさがらせ給ふめるに」などいふめれば、君、「此宣ひつる所か。さらばなほ往くまじとこそ思へ。知らぬ所にいかでか然てはあらむ」と宣へば、乳母「さ思しめさば、常磐殿に渡らせ給へ」といふは、故中納言の領ぜし西山のあたりなりけり。乳母「いさ又、それも久しう土を忌まじと思しめさば、御心なり。己が申さむ事ははかぐ〳〵しからじ。とかうおはしまさむ折の

知る人―我と少將の乳母とは年來の知人なり
この御事―狹衣が通ふ樣になりて後は
ありきも―出歩きには懲りたれば
土忌までも―引移るは井を浚るに土を動かすを忌みての事なれば也
かくおはします人―姙娠中の人
よろづよりは―以下姫の心、何より先に
少將殿と思ひて―狹衣を
紛れ給ふべくも―狹衣に紛れなきものを
よき事と―頭からよくも思つて居ぬ乳母には言ひ惱ゝれば
ひが事どもを―
乳母が斯くまでも―此何でもとにかく狹衣の御情に預かるだけ淺き緣にはあらずと

の御乳母の家借りて、しばし渡し奉らむ、なんでふ事か侍らむな。年頃いみじき知る人なり。この御事の後、中々いとつゝましうて音づれぬを、かくとや聞き給ふらむ。さるにても惡しかるべき事かは」と言ひ散して立ちぬるを、姫「あな見苦し。ありきも懲りにしかば、土忌までもありなむ。まいて、その知らぬ人の許には、いかでか」と宣へば、乳母「あなまが〳〵しや。たゞなる人だに土忌まぬや侍る。まいて斯くおはします人は、あな恐ろしあな恐ろし」といふ。よろづよりは、かの少將殿と思ひて、いかなる僻事言はむとすらむ、夜な〳〵の月影も常に前わたりし給ふ光に見合すれば、紛れ給ふべくもあらぬものを、と思へど、とやかうやとこの事をいはむにも、よき事と思ひたらぬ氣色なるには、いとつゝましければ、如何なるひが事どもをし出でむずらむ、と思ひつゞくるにも、もとより、ものはかなく怪しかりける身の有樣思ひ知られて、斯くまでもさすがに見え奉る契は淺からず、我ながら、思ひ知らるゝを、此事誠にさもあらば、さりとも思ひ數まへ給ふやうにありなむかし、宣ひ契るありさまも、さりとも空言にはあらずや、

などこまかなれど、返事には唯、

姫 わたらなむ水まさりなば飛鳥川あすは淵瀬となりもこそすれ

筆づかひ文字樣など、わざとよしとなけれど、なつかしうをかしき樣に見ゆるは、思ひなしにや。

彼處には、筑紫の人、「曉になむ。夢々たがへ給ふな」といひければ、乳母「唯曉に、然りげなくて車をふと寄せ給へ。たがふといふ事はあなゆゝし」と言ひにやりて、女君のひとり眺め臥し給へる所に來て、乳母「明日のまたつとめて、この西に井はるとて、家あるじ外へ渡りけり。いかゞせさせ給はむずる。車の事を誰にいはまし。君、かやうの折にこそ、威儀師は思ひ出でらるれ。斯くのみ世の中に便なきにこそ、思はぬ山なくわりなけれ。いみじう思ふとも、やもめは思ふ事のかなはぬにぞ口惜しきや。かゝれば、えせ宮仕人は、忍び語らひ人はまうくるぞかし。まこと〳〵、この隣の駿河の妻君こそ、物のなさけありて、言はむ事聞かむと言ひしか。言ひにやらむ。さてこの藏人の少將殿

わざと—實に良き手といふては無けれど
㈧飛鳥井姫君歎かれて筑紫行の船に乗る
彼處—姫君の邸
筑紫の人—式部大輔
曉になむ—今曉出發の答
車の事を—車を誰の處へ借りにやつた物か
思はぬ山—隱れんと思はぬ山もなく
忍び語らひ人—情夫
言ひに—隣家へ車を借りにやらん
少將殿—狹衣をいふ

この女―姫君

殿―父

まことに―眞に姫が懷胎せるらしく

夜さりも―今夜も行く事はならぬ故

今も―「あな戀し今も見てしが山がつの垣ほに咲ける大和撫子」

えものすまじき―行かれぬならん

けるを、など今まで知らせ給はざりける。かゝる契もありければ、何か行末をも疑ひ給ふ」とて、夢のうちにも哀と思ふに、この女、

姫　行くへなく身こそなりなめこの世をば跡なき水を尋ねても見よ

といふと思すに、殿の御方より、「今日明日はかたき御物忌なりけるを、忘れさせ給ひにけり。あなかしこ、外よりの御文など取り入れさせ給ふな」など宣はせたるに、ふと覺めて胸さわげば、抑へて、「承りぬ」とは聞え給へど、心騷ぎせられて、あやし、いかに見つるぞ、まことに例ならぬ事やあらむと、今ぞ思ひおはする事もおりける。心細げなりつるは如何なるにか、など常よりも覺束なくゆかしきに、夜さりもえおはすまじきなれば、こまかに御文をぞ書き給ふ。

狹　常よりも今も見てしがとなむ、夜さりも、物忌なれば、えものすまじきにや。

飛鳥川あす渡らむとおもふにも今日のひるまはなほぞ戀しき

誠、疾く語りあはすべき夢をこそ見つれ。心もとなく。

わりなき―遣る瀬の無いじれつたさ

世のはかなさ―死別は何とも知れねど、心變りする樣の事は我は決して無し

さしもあらじ―そうでもあるまい抔ときつぱり言ふ事は姫には出來ず

同じ心なる―狹衣に同意する樣に見せて

強ちにも―強ひて狹衣の素性を尋ねもせず

見つくまゝに―馴染むにつけて

限りなき―狹衣の姫に對する情

狹「あひ見ては袖ぬれまさるさよ衣一夜ばかりもへだてずもがな

わりなき心いられなどは、いつ習ひけるぞとよ」と宣へば、

姬「隔つれば袖ほしわぶるさよ衣つひには身さへ朽ちやはてなむ

と言ふも物はかなげなり。狹「よし見給へよ。世のはかなさなどこそうしろめたけれ、名殘なき心などは、如何なる人のつかふわざにか」など宣ふを、さしもあらじなど、かどかどしき樣にもあらず、心のうちには如何ならむ。目のまへはたゞ同じ心なる樣にもてなして、かく確にいひ知らせ給はぬをも、とやかうやと強ちにも尋ね知らず、また我が身の行方も、さりとて言はぬものから、なよ〳〵とらうたげにて靡き聞えたる樣、あやしう誠にらうたげなるを、見つくまゝに、限りなき人々の御有樣にも劣るまじくて、忘るべきものとも思されけり。

例の夜深く歸り給ひて、わが御方に臥し給ひて少しまどろみ給へる夢に、この女のわが傍にあると思ふに、腹の例ならずふくらかなるを、狹「こは如何なるぞ。かゝる事のあり

言放ちて―ぴつたり斷りて
とかく―御産の結果を見て御暇を取るべし
うちはへ―引續き不快なりしに
斯くなりに―彌懷胎と聞き定めて
いたはしう―我身を勞はる氣になるも
㊌狹衣夢見の惡しきを氣遣ひて姬の許に手紙を遣る
まぎれ入り―狹衣が
人やりならぬ―浮も心柄
ひまなく―繁々通ひても
さは思ひ―其方もそう思ふか

さへおはしますに、いと心苦しうて、此度は言放ちてやりつるなり。今はとかくおはしまさむを見てぞ、何方へもまかるべきなめり」と、心ゆきたる樣にて言へば、女君、まこと思ふにと、心少しおち居ぬ。うちはへ心地さへあしかりつるも、惜しからぬ身は、疾う如何にもなりなばやと急がれつるを、斯くなりにけりと聞きあらはして、哀なりける契かなと思ひ知られて、憂き身とのみ思ひ入られつるを、少しいたはしう思ひなるも哀なり。

野分だちて風の音あらゝかに、窓うつ雨も物恐しう聞ゆる宵のまぎれに、例のいと忍びてまぎれ入り給へり。いつもなえ〳〵とやつれなし給へるに、雨にさへいたうそほぢて、匂ばかりはいと處せきまでくゆり滿ちたるを、隣の山賤どももあやしがりけり。狹「かやうの有樣はまだ習はざりつるを、人やりならぬわざかな」とて、濡れたる御衣解きちらして、狹「ひまなくうち重ねても、心より外に隔つる夜な〳〵のわりなきを、さは思ひ給ふや。かばかり人に心とむるものとこそ、習はざりつれ」など盡きせず語らひ給ひて、

もさもや—仰の通りにしてもよろし
生公達—狭衣をいふ
ふさはしからねば—不相應な縁と乳母が思ふ故
思ふ様ならむ人—姫君が
喜びて—式部大輔が
寺にては—太秦籠りの際には威儀師の關係から了承知の返事せしか
あづま—陸奥行
君—姫君
細公達—見る影もなき貴公子の隱し妻で居るより
よげに—立派にしてよこす故彌滿足して
出立はとまりぬ—陸奥行はやめたり

するを、いとふさはしからねば、東男につきてや去なましと、威すなりけり。されど、この式部大輔、「親のともに筑紫へ下るに、思ふ様ならむ人をなむ率て行かむとする」と言ひ遣せたるに、いと思ふ様なる心地して、「別當の御子少將の通ひてあるなれど、乳母うけひかずなむむづかる」と言ふ人のありけるを喜びて消息したりけるに、寺にてはあるまじきさまを聞えしを、乳母思ふやうにめでたく覺えて、あづまも思ひとまりて、乳母「實にさも思さば、しばし君には聞かせ奉らで、くだり給はむ程に迎へ奉り給へ」といひければ、いみじう喜びて、さやうの細公達にかけめにておはせむよりは、唯試み給へ。おとゞの御幸にてこそおはせめ」など、ことよく語らふ。出立のものなど、げによげにおこすれば、心ゆきはてて、上下の人求めなどしけるに、式部大輔のもとよりは、式部「下も近うなりにけるを、さば違へ給ふな」と、日に千度言ひおこすれば、乳母「あなまがくし。世にたがへ侍らじ。その曉に御車を給へ。然りげなうて、ふとわたし奉らむ」といひやりて、心のうちには皆いでたちたり。君には、乳母「出立はとまりぬ。たゞならず

北嫗の北傍君に、傍々に相談して其意見に從ふがよい　あだ〳〵しく—浮氣一遍に　見えぬ山路—「世のうきめ見えぬ山路へ入らんには思ふ人こそほだしなりけれ」

(大)式部大輔飛鳥井姫を奪ひて筑紫へ下らんとす　この殿—狭衣　人などの中には—此の人等の中では心も容貌も人なみにて　見む—妻にせん　思ふ儀—氣に入りたる故　自らは—姫は不承知　耳つきに—耳よりな話と思ひしかど　僧の—威儀師との約束を背く譯にゆかぬ故直に承諾はせざれど

がせさせ給はむずる。君になほ聞え合せ奉り給ひて、御氣色にこそ從ひ給はめ。斯くなり給へると聞き給ひてば、よもあだ〳〵しくも思ひ給はじ」といへど、姫「いかなりとも頼むべき有樣ならばこそあらめ。見えぬ山路のみこそよからめ」といふものから、げに斯くさへなりにけるを、露知らせでやみなむ事、などいみじう覺ゆれど、かけても況て言ひ出づべきにあらねば、日を數へつゝ泣き歎くより外の事なし。

この殿の御乳母、大貳の北の方にてあるなりけり。子ども數多ある中に、式部の大輔にて、來年官得べきが、かやうの人などの中には、心ばへかたちめやすくて、すき〴〵しう色好むありけり。如何なりともかたち勝れたらむ人を見むとて、妻もなくて過すに、此女君太秦にこもりけるを覗きて見て、思ふ樣なりければ、消息などしけれど、自らは聞き入れぬに、この乳母は、いと耳つきに覺えけれど、唯今かく頼む僧のいひ契りたれば、え否むまじうて、忽のうけはせねど、「官など得て下り給はむ程には、さもや」など契りけるに、かく事ども違ひて、身は便なし、生公達のいたう隱ろへて、夜々時々おは

煩はしき人―我には面倒な關係者ある故
何事にてかは―何も強ひて素性を包むに非ず
さそふ水―姫の心、「わびぬれば身を浮草の根をたえて誘ふ水あらば往なんとぞ思ふ」
別當の―姫の心、訓すべき人ありと狹衣が言ふは、と別當の子の少將と思はせる積ならん
宣はば―「宣ふは」の誤なるべし
うち賴みて―狹衣を力にして田舍行をやめるは
行く方の―別れて行く先が相當であるにもせよ離愁はある筈
空蟬とて―空蟬なりとも
たゞにもあらず―懷姙
うちはへて―引續き
しるき事ども―

らば、いざ給へよ。煩はしき人のさすがあれば、しばし人に知らせじと思ふ程に、かく覺束なくあだなるものに思したるもことわりなり。我は、何事にてかは、あながちに知られじとは思ひ給ふべき。いひ知らぬ賤の女なりとも、これより變る心あるまじきを、なほ賴む心のあるまじきなめり」と恨み給へば、さそふ水だにあらましかばと、物哀に思ひて、この別當の少將と思はせ給へるなゝめり、せいすべき人ありなど宣はば、と思ふにも、假初にうち賴みて、行くべきかたを思ひとまらむ事はあるまじう覺えながら、いとかくめでたき御有樣にて、なつかしう哀に語らひ給ふを、行く方の目安からむにてだに、いかでかは哀ならざらむ。森の空蟬とて涙こぼれぬべきを、紛らはしたる氣色、いとらうたげなり。

かくいふ程に、この女君たゞにもあらずなりにけり。うちはへて物をのみ思ひて、ありし樣にもあらぬ氣色なるを、誰も唯この御出立を思ひなげき給へると見るに、しるき事どもありて、乳母も見知りて、乳母「あないとほしや。斯くさへなり給へるものを、いか

この人—狹衣が來さへすれば乳母が門の關閉をも快くはせず
誰と—君を誰と思つてか斯く斯く失敬な取扱をする
女の氣色の—狹衣の心
さらばとて—其なら其でよしと縁を切つて仕舞ふ譯にもゆかぬ故
人々のつら—女中並にして邸へ引取らうかしらと
思ふあたり—源氏宮
さもえあるまじ—さうも出來ぬ
こゝかしこと—彼方此方に圍ひ置くも妙ならずと
我と知りなば—狹衣たる事を知らば
老人—乳母
おとなしの里—靜なる住居

ふる事かあらむ、この人のおはする宵曉の門も心安からず、鍵失ひがちにもてなしつぶやくけはひ、御供の人々聞きて、目ざましうあさましきに、踏み毀ちて入りなまほしき折々ありけり 殿にも忍びて、從者「誰と思ふにか 斯くなむ」と申せば、女の氣色の怪しうのみあるは、この見し火影の女の、ありし法師に取らせむとてするなゝめり、さやうの事に思ひむすぼほれたるなゝめりと心得給ふ。いと心づきなくゆゝしけれど、女君のありさまの怪しくのみ見ゆるは、いでやさらばとて歇むべくも思されねば、いかにせまし、殿にさぶらふ人々のつらにてやあらせましと思へど、人知れず思ふあたりの聞き給はむに、戲にても心とゞむる人ありと、いかで聞かれ奉らじ、と思ふ心し深ければ、さもえあるまじ、さらでは流石に、こゝかしことあつかひ給はむもいかにぞや、と思されつゝ、今おのづから我と知りなばえ厭はじ、隱ろへぬべき所もありぬべくば、有樣に從ひて、と思すなるべし。女君にも、狹「老人の憎むなるべしな。理なりや。たのもしげなりし法の師を引きたがへて、かく物はかなき身の程なれば。おとなしの里尋ね出でた

宮の中將―式部卿宮の息子の中將、少將の兄
㊄飛鳥井姫君の乳母狹衣を厭ふ、姫君懷胎
君をさへ―姫君を伴ひ行くも氣扱ひなり
留むべき―姫が乳母を引留め置く譯にもゆかぬ故
誰を頼み―以下姫の心、誰を使りに獨り都に留るべき
思ひ侍るも―誤あるべし
わが心と―自分から狹衣に遠ざかることは出來にくし
我も―姫御自身も御心配ならんが
千人の―親や乳母は千人有ても女には益にたゝぬ、益に立ゝはぬ夫のなき間の事
物たのもしき人にもおはす―狹衣が

や、かく言ひそめけむも覺えなくぞあるや。夜目に見しかば、宮の中將にこそいとよく似たりしか。兄の痴者あンなり。それもかの宮の御子とぞいふなる。これもさなるべし」など宣ふ。

まことかの飛鳥井には　乳母皆出立ちて、君をさへ引き具せむもいと心苦しう、さりとて留むべきならねば、さすがに思ひ歎くに、人知れぬ音のみなかれて、誰を頼みてかは立ちもとまらむ、山より深き谷に入らむもさてこそはなど思ひ侍るも、わが心と思ひはなれ聞えむ事は忍びがたくあはれに覺ゆるも、且はことをこがましき心と思ひたる氣色の、いといとほしきを見るに、乳母「さらば何かは下らせ給はむ。京にもたよりなくて獨留らせ給はむこそ、うしろめたなうも侍らめ。また我もいかにとも思しめさめ。女は千人の親乳母益なし。御夫のおはせぬ程なり。まいて斯くやむごとなく物たのもしき人にもおはすなり。御志いとねんごろなるを、引き離れて、かゝる東路に立添ひ給はむ、いとあるまじうかたじけなし」など、流石にあるべき事をばいひながら、いかに思ひ構

様のものと―源氏宮と似たるものと今姫君を思ふと、我ながら不埒な了簡になる
物したりきや―汝等聞せしか
住むなる人―今姫君
よしなき―洞院上が餘計な世話をする故、雜の爲にもならぬつまらぬ事が起らねばよいかと
斯くいふもの―今姫君をさす
顔―今姫君の
つれ〴〵に―洞院上が子もなくて無聊なるべければ
たしかなる―確に堀川の子と名乘りて參謁して居るも

思ひ給ふらむ。様のものと、怪しの心ばへやと、我ながら心づきなし。母代からうじて几帳おこしつれば、立退き給ひぬ。

又の日、殿の御前にて、昨日の事どもなど申し給ふついでに、堀「かの東院には物したりきや。西の對に住むなる人をこそまだとぶらはね。いかやうなる氣色か見ゆる」と宣ふ。内々の有様のいとあやしきを、子ながらもいかゞ見給ふらむと恥かしう思すなるべし。几帳の綻びあらそひし透影ども、思ひ出でられていとをかしきを、念ずる氣色やしるく見給ふらむ、うち笑ひて、堀「よしなきものあつかひ好み給ふ程に、誰が爲にも中々なる事やとこそ見ゆれ。年頃も斯くいふものありとは聞きしかど、覺えぬ事なれば、かやうの人少きくさはひにも取出でぬものを、何の便にかくまでもありそめにけるにかと、ありつかずや」と呻き給ふも、げにとは聞けど、あさましと、あきれたりし顔は、流石憎むべうもあらざりつれば、狹「つれ〴〵に思されむに、他人よりはなどてかあしうも侍らむ。たしかなる名ざしにて、とかくさすらへむも、いとほしう侍るべし」とぞ宣ふ。堀「いさ

まめやかには—賤は私如き者の來るは外聞惡しと思はれんかと遠慮して來ざりしが
かはるしるし—官位昇進のしるし
格勤の—今迄無沙汰の報と思ひて怖へしが
香染の—以下今姫君の樣子
あうなく—無分別に
見合せて—狹衣と顏を
うちそむき—面をそむけ
兄—今姫君の異父兄
殿の御子—堀川の子とはとても見えぬと

と高やかに言ふ。いとあやしきたとひなり。「まめやかには、面伏にや思さるゝとて、今まで參らざりつるを、けふはかはるしるしも御覽ぜられむとてなむ。御前にかくと聞えさせ給へ。此御簾の前はならひ侍らねば、はしたなく思ひ侍れど、格勤の薄さに、今日ばかりはなぐさめ侍るを、今より後ぞうらみ聞ゆべき」とて立ち給ふに、荻のうは風のあらゝかに吹きこしたるに、俄に御簾を高く吹上げて、几帳も倒れぬれど、とみに引きなほす人も無し。女共「あなわびし。あれを見給へ、あれを見給へ」と言ひつゝ、我も衣を引きかづきつゝ、一つにまろがれ合ひたる程に、のど〳〵と見入れ給へば、香染に鈍色のひとへ、紅のはかまの黃ばみたるを著て晝寢したる、人々のさわぐに驚きて、あうなく起きあがりたるに、いとよく見合せて、あさましきにや、頓にうちそむきなどもせず、あきれたるけはひ、顏はいとをかしげなり。心なの樣やと見えながら、女房の有樣どもよりは、こよなく見つべかりけりと思ひまし給ひつ。かの兄のかこちける故にや、少將にぞいとよく似たりける。殿の御子とは言ふべくもあらざりけりと見るに、たゞならずや

死ぬべければ—堪へ難き故
したりがはなる—母代
さぶらふ人々—主たる娘の評判は許嫁共に侍女等の人物次第
憎みわたし—叱りちらして
さし寄りて—狹衣の方へ
吉野川—兄妹といふ名のみにて、其實なきは何ぞ
なみの—「なのみ」の誤歟
母と—母らしく
のど乾きたる—聲のかちびたる
げざん—「見參」歟
犬もときて—諺なるべし

「あしうしてけり。いたし〳〵。そこははなて〳〵」と忍びあへぬ聲、いづくならむとをかしきに、死ぬべければ、立ち退きなむとする程に、おとなしき聲の高やかにしたりがはなる出で來て、母代「いでやさぶらふ人々がらこそ、よき人はをかしき名も取らせ給ふわざなれ。かばかりにては若人達さぶらひ給はでありぬべし」と、さすがに忍びて、憎みわたしてさし寄りて聞ゆ。母代「めづらしき御聲こそ。思し違へたるにや」とて、

母代　吉野川なにかは渡る妹脊山人だのめなるなみのながれて

とけに母と詠みかくるけはひ、舌疾にのど乾きたるを、若びやさしだちて言ひなす。これぞこの母代なるべきと聞き給ふ。

狹「恨むるに淺さぞまさる吉野川ふかき心は汲みて知らなむ

覺束なきことちし侍りつるに、嬉しき御けはひと思ひ給へるに、物をこそあしざまに申しない給ひぬべかりけれ」と宣へば、さわやかにうち笑ひて、母代「さらば、今よりのけざんを、まめやかに勤めさせ給へかし。若き人々の思ひ咽ぶめれば、犬もときてとかや」

はし＼とーはきはきとの意歟、日頃ははきはきと物言ふ女どもが
まづはー「まろは」の誤なるべし
そゝばしるーあわて走る
ぎふ＼とーげはげはと
あなかまやー喧しい
なべての程とー尋常一樣の人と
狹衣を思ふか
あはずー似合はず
琉球のー「覺束なうるまの島の人なれや我が言の葉を知らず顏なる」
前なる人ー狹衣
はゝとー丹らしき態度で
ながめ聲ー吟聲
たうしはー誰なるべし「たうし」の義未詳
つむーつめる

そこらはしく＼と聞ゆる人、御いらへ聞ゆるは無くて、女共「そゞや　まづは不用なり。君のたまへ＼」とつきしろひさゞめき、立ちて逃ぐるあるべし。女の一人「あなわりな。ものに狂ふ君かな。まろはまして不用なり」とてそゝばしるなれば、衣の裾を引きとゞむるにや、倒れぬ。ぎふ＼と殊更めき笑ひ入りつゝ、しはぶきし入るもあり。あるはまた、「あなかまや、あなかまや。さばかり恥かしき御有樣に、なべての程と思ひ給ふか」など、制するなり。樣々あやしきこゝちし給ひて、尻目恥かしげに見入れつゝ、長押におしかゝりて居給へる氣色、この御簾の前にはあはずぞありける。なほ唯消入り＼扇などうちならしつゝ笑ひそぼるゝけはひども、物狂ほしければ、狹「こは如何にとよ。琉球の島の人とも覺え侍るかな」とて、少しほゝ笑み給ふ氣色など、御簾のうち恥しげなり。奥より人寄り來て、「几帳の前なる人に、唯恨歌をはゝとよみかけよ」とさゞめくなれば、女「わ君ぞながめ聲はよき。まろは更に＼」と笑ひ入れば、「あなまばゆの色好や」とて、肩のわたりを扇していたく打つなれば、「たうしは君なし」とてつむなるべし。

がは〳〵そよそよ—物音
よらはれたる—疊まり寄りたる
見つかぬ—見馴れぬ
そゝぎやむ—靜まる
おし出で渡して—女共が簾の内に外に向ひて坐りて、褄袖口などを簾外に出したる也、威儀を正して列座したる貌
のどまる—靜まる
我見む—狭衣を我見む
土なりけり—狭衣にくらぶれば

つけて入り騒ぐけはひども、いともの騒がしきを、あやしと見給ふに、几帳ども奥より取り出でて、がは〳〵そよ〳〵と立て渡し、裾うち廣げ、紐どものよらはれたるを、と引きかく引き、廿人ばかり立ちさまよひ、つくろひ騒ぐ衣の音、几帳などの音に、ものも聞えず、あわたゞしく見つかぬ心地し給へど、今やそゝぎやむと、物言はでつく〴〵とゐ給へば、辛うじて几帳立てて後、各衣の裾、袖口、わらはべの汗衫の裾などの、みだりがはしくなりたるを繕ひ居て、こゝかしこよりおし出で渡して、やう〳〵のどまるにやと覺ゆる程に、几帳のほころびをはら〳〵と解き騒ぐ音もしるくて、一つ綻びより五六人顔をならべて、まづ我見むまづ我見むと爭ひたるけはひどもの、忍ぶるからにいとかしがまし。辛うじて見えたるにやあらむ、女共「誠にめでたかりけり。あな物狂はしや。日頃見つる殿上人などは、唯土なりけり」とさゝめき合へる、いとをかしう覺えて、狭「この御簾の前は今迄うひ〳〵しう侍りけるも、咎めさせ給ふべくやと恨みまゐらする」など宣ふ御けはひ、げにおぼろけの人は、ふと答へにくげに恥かしげなれば、にや、

㊃狹衣中納言に任ぜらる、今姫君を見る
なほしもの—秋の任官式に決せざりし任免を定むる評
中納言の君—狹衣
大殿—父堀川
よろこび申—御禮
立ち居　父が氣をもみて狹衣の世話をやく
后宮の人々—中宮（今姫君の姉分）付の女中達も多く此處に來り居れりと

られて、心に思ふ事も言はまほしき事もつゝましく恥かしうて、闇にむかひたるやうに覺ゆる事と思ひつゞけては、忍びてうち泣き給ひけり。されど唯見るには、現し心もなき樣にてぞおはしましける。

九月朔日の頃なほしもののあるに、中將の君中納言になり給ひにけり。大殿これをも忌々しげに思したれど、さのみやとて、次第のまゝにあがり給ふなるべし。よろこび申に內裏、春宮などに參り給ふとて、つくろひ立てて、まづ殿の御方に參り給へるに、かたち有樣など、官位に添へてゆゝしきにのみ光りまさり給ふを、こといみもしあへ給はぬ氣色にて、立ち居つくろひ給ふ氣色ぞ、理にも過ぎてかたじけなく哀なりける。太政大臣の御方に參り給へるついでに、この今姫君の住み給ふ西の對の前を過ぎ給ふまゝに、如何樣にかと氣色もゆかしければ、渡殿より少しのぞき給へば、御簾所々おし張りて、人數多けはひしてこぼれ出でたり。かの后宮の人々も數多なむわたり參りける、と人の語りしも心恥かしう、まだ見給はぬあたりなれば、用意して歩み出で給へれば、人々見

ありつかず—落着かず
ほれ惑ひ—途方にくれ
亡せにし母—今姫君の母
生親族—親しくもなき親族
伯母の尼公—常盤井尼公
母代—今姫君の母分
上—洞院上
ものしく—氣障な奴と洞院上が母代を思へど
細なる—洞院上の性質
心に任せたる—勝手な假親をして奉公に上りたる若き女ども
出し合せて—集めて
君—今姫君

く知らぬ所に迎へられて、ありつかず、晴々しうもてなされ給ふに、いと我にもあらぬ心地して、ほれ惑ひ給へり。亡せにし母の生親族の、高きまじらひして、人數ならで世にあり侘ぶる、さすがに故づき物見知り顔にて、かたはらいたき物好去らずと覺ゆるありけり。伯母の尼君、かゝる人よび取りて添へたる、げに故々しげにて母代にしたり。上時々見給ふに、いでやとものしく見給へど、細なる御心ざまにはあらで、流石におほどかにて、人の有樣などはいたうも見知り給はず、心をやりて上ばかりはかしづき給ふに、此の御母代ぞ、惡しくせばかたはらいたき事もありぬべかりける。心に任せたるつくり親どもしたてたる若人の、思ひやりすくなき限、數も知らず集め侍はせて、夜となれば、殿上人、諸大夫まで出し合せてさわぐ氣色ども、いと今めかし。君は唯赤兒の襁褓につゝまれたる心地して、あるにもあらず任せられ給へる、しつらひ有樣などのめでたく、同じ我身とも覺えぬを、人知れぬ心のうちには、母や乳母などにこれを見せたらましかば、いかで人なみ〳〵になさむと明暮いひ思ひたりしものを、よしなき人に任せ

堀川大臣の娘へ迎有洞院に養はれて榮華の身となる
太政大臣の御方―洞院上
此姫君―今姫君
世づかぬ―世に類稀なる
おほどき過ぎて―大樣すぎて
おぼろげに―細かに世話するしつかりした人無くば
うもれ給へる―引込思案なるは
はるけ所―氣のばしのし所
かなしくせし―可愛がりし
まめやかに―本氣に世話する付添人もなくて

誠やかの太政大臣の御方には、此姫君迎へ取り給ひて、西の對の玉を磨けるにしつらひする給ひて見給ふに、あてやかに然てもありぬべき樣なれば、年頃の本意かなひて、晴々ともてかしづき給ふ樣、世づかぬまで見ゆ。殿の内にも世の人も、いみじかりける幸かなとめでけり。年は二十にぞなり給ひけれど、いたくおほどき過ぎて、餘りいはけなくげ物はかなき樣にて、げにおぼろげに思ひうしろむ人のはかぐしき無くばうしろめたげにぞおはしける。心に思ひ餘る事ありとも、色に出し給ふべうもあらず、ことの外にあさましき事なりとも　人だにもてなさば、おのづから忍び過ぐすべくおはするを、よき女のかしづかれ給ひたるは斯くこそおはすべけれと見ゆるものから、あまりうもれ給へる氣色などは、かく華々ともてなされ給へる御有樣にはたがひて、行末やいかゞ見なされたまはむと心苦しかりける。又無きものに思ひかしづかれたりし親の御もとにてだに、かくはるけ所なかりし御心ばへの、まいて俄に母にもおくれ、かなしくせし乳母も、打續き失せにしかば、心の中にはいと悲しかりけるに、まめやかに思ふ人だに添はで、斯

處へか行つて仕舞ふ方が
花がつみ—現在逢うて居てさへ戀しきに中絶えたらば如何につらからん

長らへては—長い間たつうちには
なほざり言などは—よい加減の間に合せ抔は我は言ひし事なし
戀しく—姫が
思立つ方の事—奥州行も立派な事でも無ければ

行方なきもてなし—我が素性をあかさぬ仕方
とかへる山の—「はし鷹のとかへる山の椎柴の葉がへはすとも君は忘れじ」

飛　花がつみかつ見るだにもあるものをあさかの沼に水や絶えなむ

物はかなげに言ひなしたるけはひなど、若びたるものから、いとらうたし。

狹「年經ともおもふこゝろしふかければあさかの沼に水は絶えせじ

かくいと浮きたる事と思ひ給ふとも、長らへてば心の程も今見給ひてむ。ならはぬなほざり言などは、人にいふものとも知らざりけり。心より外の事おのづからあるとも、私の志はかはらじとなむ思ふ」など、心深げに語らひ給ふまゝに、いと悲しくなりまさりて、なほ斯くなむとやほのめかして御氣色を見まし、と思ふも、思立つ方の事とても、少し人々しき樣にだにあらず、中々思しやらむにもあさましう恥かしければ、唯行方なくてやみなむと思ひとる方は強きものから、あさましかりける心の程かなと、暫しはいかに思し出でむずらむ、と思ふに、せきやる方なき袖のしがらみを、君は唯ひとへに、若びたる樣に、我行方なきもてなしなどを、つらき方に思ひたると心得給ひて、「とかへる山の椎柴」とのみ契り給ひけり。

わざとーちやんと格式を備へて品高き源氏宮よりも
思ふ事ー源氏宮への思が叶はずば世を遁れんと
いかゞ心得ー姫が何と思ふならんと
物歎かしげなる姫の
世の人などのー常人の樣に女狂もせざりしに
然らばー我遁世の後は其方は何と思ふぞ
そをだに…「飽かでこそ思はん中は離れなめそをだに後の忘れがたみに」
逢ふにはー「命やは何ぞは露のあだものを逢ふにしかへば惜しからなくに」
これは、なほー姫の心此人は矢張噂高き狹衣ぢやわい
遁むべきー我如き者の力にして居られる身分の人では無い
雁の羽風にー何

は、なにの慰むべきぞと思ひ出でられながら、わざとけだかく誠しきよりは、中々樣かはりたる打解などより始め、物はかなげにらう〳〵じからぬもてなしなどの、怪しきまでらうたく、見ではえ有るまじく思せば、思ふ事かなふまじくば有りはてじと思ふ世に、絆とまでやならむと思ひつゞけらるゝにも、例のもろき涙はまづ知るを、いかゞ心得らむと、常よりも物歎かしげなる氣色の哀なれば、狹「久しう世に在るまじき心地のすれば、世の人などのやうなる心ばへなども、ことに無くて過しつるを、如何なりける契にか、はかなく見そめ聞えて後は、見捨てむ事の哀に覺え給ふを、然らばいかゞは思すべき。そをだに後のと誰言ひけむな。逢ふには替へまほしかりけるものを」とて押拭ひ給へる袖の少し濡れたるなど、さやかなる月影に、これはなほ音に聞き渡る人にこそおはすめれ、我が身の程を思ふにも、なほ憑むべき御有樣かは、かやうに思し捨てざらむ程に、雁の羽風にまよひなむこそ心にくからめ、と思へば、げに涙とりあへず溢れぬるもはしたなくて、顏をふところに入るゝまゝに、

靜、蟬鳴二黄葉一漢宮秋」

野もせの心地―「かしかまし野もせにすだく虫の音よ我だに物は言はでこそ思へ」

四 狹衣源氏宮よりの歸途飛鳥井姫君を訪ふ

程なき軒に―陋屋に月を眺むる飛鳥井姫君の有樣

おはして―飛鳥井方へ狹衣が

晝の御有樣―晝見たる源氏宮の有樣

こよなき―非常に優劣のある

給ふ御聲、珍しげなき事なれど、若き人々は死にかへりめでたしと思ひたる、ことわりなり。さばかりあたりまで匂ひみちて、向ひ奉る人は物思も忘るゝ樣なる愛敬などを、ひとへに誇かにもてなし給はで、いたく靜まりて、心地よげならず、思ふ事ありげに、殘り多かる御氣色にて、折々はもの思はしげに心細げなる口ずさびなどのみし給へば、荒き夷も泣きぬべき御樣なり。日の暮れ行くまゝに、ひもとき渡す花の色々をかしう見わたさるゝに、袖より外におきわたす露もげにたまらぬにやと眺め出して、とみにも立ち給はず。蟲の聲々野もせの心地して、かしがましきまでみだれ合ひたるを、我だにと、もどかしう思されけり。

月出でて更け行く氣色に、かの程なき軒にながむらむ有樣も、ふと思ひ出でられ給ふ。おぼろげならぬ覺なるべし。おはして見給へば、おぼし遣りつるもしるく、蔀などもいまだおろさで、はしつ方にぞ眺め臥しける。來ざらましかばと哀にて、袖うちかはし細やかに語らひ給ふに、晝の御有樣思ひ出でらるゝに、よろづにこよなき目うつしなどに

宮の少將―式部卿宮の子なる少將、之に似たりといふは實は式部卿宮の胤なる由を仄めかしいふ也

某―私

かばかりの―狭衣の心、此位の事にさへあの位心配するのか

蟬黄葉に―朗詠「鳥下緑蕪秦苑」

男子のいとあやしきもあゝなれど、宮の少將に似たりとて、かの宮の子にしたまふとなむ聞きし。其もさるべき樣やありけむ」など宣はすれば、狭「それも殿の御子にてあれな。某には似ぬにやあらむ、同胞あまた持たる人こそうらやましけれ。偲ぶべき人だになきに」とて、もの哀とおぼしたる氣色の、げにたゞ見る人だに心苦しげなる御樣なれば、大宮、「例のゆゝしき事に口慣れ給へるこそ心憂けれ」とて、いと忌々しくとおぼしたるを、かばかりの事をだに、かく思したるよ。行末はかぐ〳〵しかるまじき心のうちを御覽ぜさせたらば、ましていかに、など思ひつゞけらるゝに、涙もこぼれぬべし。ちひさき几帳に宮はまぎれ入り給ひぬれば、すさまじくて、端つ方に人々と物語し給ふに、御前の木立木暗くあつかはしげなる中に、蟬のあやにくに鳴き出でたるを見いだし給ひて、

狭 聲立てて鳴かぬばかりぞもの思ふ身はうつせみにおとりやはする

など口ずさびに言紛らはして、狭「蟬黄葉に鳴いて漢宮秋なり」と、忍びやかにうち誦し

を心ゆく迄」
參り給へればー狹衣が源氏宮へ
大宮ー狹衣の母
見證ー立合人の役
誰がなされるぞ
先をばー先手は
見つけー大宮が狹衣を
こと事ー狹衣を愛する外に心なけれは
なほともー誤あらん歟
侍從の內侍ー女二宮の侍女
むづかりー父が
こゝにはー我は
勘當ー御叱り
洞院のー洞院上が西對を手入なるけ何故ぞ
母君ー飛鳥井姫君の父なる帥中納言の妹
むすめー今姫君といふ、堀川大臣の胤
かの上ー洞院上

たる事にはあらねど、うち見奉るごとに、なほ類あらじと見え給ふ、御有様の美しさは、千夜を一夜にまもり聞ゆとも、厭くよ有るまじく覺ゆるにも、飛鳥井のやどりは、戲にてもあさましく覺え給ふに、いとゞしき涙こぼれ給ひぬべければ、紛らはしに、狹「さて誰か先をば」など聞え給へど、見つけ奉り給ひて、例のまづこと事おぼしたらねば、大宮もなほとも聞え給はで、大宮「昨夜内裏より度々尋ねさせ給ひしは、いづくにものし給ひしぞ。なほかの侍從の内侍のもとに、消息ものし給はぬは、ひがく／＼しき事とむづかり給ふめりき。こゝには、唯何事も御心にまかせてと思ふに、いさやいかなるべき事にか」と打歎かせ給へるも、人の親げなく若うをかしき御有樣なり。其の御いらへは如何にとも聞え給はで、狹「殿の例ならぬ御氣色なりつるは、この勘當にこそ侍りけれ。東院の西の對の御しつらひは、何事にか」と聞え給へば、大宮「故后宮にありける母君のむすめは、かこつべきゆゑやありけむ、母うせて後いと哀にてなど聞き給ひけるを、かの上、迎へ取りてつれ／＼の慰にせむとなむ宣ふとぞありし。さやうの料にやあらむ、

〔一〕狹衣源氏宮と母宮と碁打つ處へ行きて母宮と語る

古き跡—狹衣が伊勢物語の故事に託して源氏宮を口說きて後

見合せ給はず—狹衣と顏も見合せず

さればよ—狹衣の心

今はた—「侘びぬれば今はた同じ難波なる身を盡しても逢はんとぞ思ふ」(後撰)

人目こそ—人目には前と變る樣子も見せねど

うとましう思されて—源氏宮が

岩間の水の—「わき出づる岩間の水のつぶつぶと言はばや物

狹衣物語　卷第一之下

源氏の宮は、古き跡尋ね給へりしのち、さやかにも見合せ給はず、ことの外なる御氣色を、さればよとつらく心憂きに、「今はた同じ難波なる」と、ひたぶる心も出で來て、然るべき隙を見給へど、人目こそかはる事なけれ、あさましく憂かりける御心ばへのうとましう思されて、またいかでかさる耳だに聞かじと、用意し給へば、岩間の水のつぶ〳〵と聞え給ふべき人間の程だにぞ、更にありがたかりける。晝つ方參り給へれば、大宮もこなたにおはしまして、諸共に碁うたせ給ふなりけり。狹「とく參りて、見證仕うまつるべかりけり」とて、近やかにゐ給へるに、ちひさき御几帳なども押し遣られて、常よりもはれ〴〵しければ、宮はいとはしたなしと思せど、母宮の見給へば、例のやうにもえ背き給はず、御顏はいとあかくなりて、碁も打ちさして、碁盤に少し傾きかゝりて、御扇をわざとならず紛らはし給へる御かたはらめ、御額つき、御髮のかゝりなど、今始め

なほかく—狹衣の心、自分を當にならぬと思ひて恨むのかと
蜑の子—「白浪の寄する渚に世を過すあまの子なれば宿も定めず」
名のらねば—姫が

らねばつゝましくて、唯何となく思ひ亂れたる氣色なるを、なほかく覺束なき有樣の憑みがたくつらきにやと、心苦しけれど、またわが行くへをも蜑の子とだに名のらねば、心くらべにて、唯哀に覺え給ふまゝに、いひ慰めつゝ この世のみならぬ契をぞかはし給ひける。かゝる程に、夏も過ぎ秋にもなりぬ。

物げなき—相手は心つまらぬ女らしきに
出立いと—奥州下りの用意をさっぱりとして
見置き—姫を置いて行く譯にも行かず
かゝる人—狹衣
いかでかは—連れて行く譯にも行かぬ
おはせざらむは—汝が居なくてれ生きても居ら—ぬ心地するに
とゞめ置かむ—置いて行かうなぞとなぜ思ふのか
失ひてこそ—我を殺して置いて何處へでも行くがよい
唯出立ちに—出發の用意を急ぐ
さらば—娘の心
誰とだに—名も知らせぬ狹衣が力になりそうにもなきに、斯々とも知らせるも遠慮なり

人々は、「まだかゝる事はなかりつるものを、いかばかりなる吉祥天女ならむ。さるはいと物げなき氣色なるを」と、各言ひ合すべし。かく言ふ程に、このめのと、出立いとすがやかなる氣色にて、乳母「見おき奉るべきにもあらず。さりとてまた、かゝる人さへおはしますめれば、いかでかは具し奉らむ。いかにして過し給はむとすらむ」と、言ひ續けてうちひそみ泣くを、姫「暫しの程だに、おはせざらむ世にはあるべき心地もせぬを、まして、いつを限にかとゞめ置かむとは思ひ給ふらむ。かく萬に所狹き身を、いかにも失ひてこそ、いづくへも」など言ひもやらず、心苦しげなる氣色なれば、乳母「さらば、出立ち給ふべきにこそあンなれ。御志ありげなる人を見捨て奉り給ひて、あさましき有樣に引き具せられ給はむも、いとあるまじき事と思ひ給ふれど、かく宣はすれば」など流石にことわりを返す〴〵言ひ知らせつゝ、唯出立ちに出立つを見るに、さらば今幾日にこそなど、人知れずかぞへらるゝに、いと心細けれど、誰とだに知らせ給はぬ氣色も、さすがに賴みかくべくもあらぬに、かくこそなどほのめかし聞えむも、御心のうちを知

れる也
看督長ー検非違使の屬官
自身は
年老いてー乳母
誰にー姫を誰に預けて行かんかと心配になる
おはせむ所へー汝の行く所へ付いて行く外なし
思ひ侘びてー乳母が
君はー狹衣が姫を見馴るゝにつれて
これに劣るべきー今迄關係したる女が此姫に劣れりといふ譯でもなく
これやー狹衣の心

稀ある女どもも、この頃はおぢてまうで來ず、いたうわりなきや。あてにやむごとなくめでたしとても、この君にはいかゞはせむ。年老いて侍れば、行末の事も思ひ侍らず、東の方へ人のさそひ侍るにや罷りなまし、と思ひ侍るを、誰に見譲りてかと思ふも絆にてぞおはしますや」と言へば、うち泣きて、姫「誰を頼みてかは。いづくなりともおはせむ所へこそは」と宣ふも、哀に心苦しければ、まことに知る人もなくて便なきに思ひ侘びて、陸奥國の奥の將軍といふものの妻になりてやいなまし と思ふなりけり。

君は見なれ給ふまゝに、哀さまさりつゝ、なほざりごとにはあらず契り語らひ給ひぬべし。さるはこれに劣るべき人も見給はず、我心も 勝れてこの事のめでたしなど、わざと御心とまりぬべき故もなけれど、唯そゞろに見ではえあるまじういとほしく、心にかからぬ隙なく、我ながら物狂ほしきまでに覺ゆるを、これや實に宿世といふものならむ、かくのみ覺えば、宿世口惜しくもあるべきかな、と日に添へてえさり難う、淺からずのみ覺え給へば、待たるゝ夜な〳〵もなく紛れおりき給ふこと、月頃にもなりぬ。御供の

ー[illegible]の事を語りたる也　そこにー乳母の家　若君ー姫をいふ　かくてー狹衣が通ふ樣になりたり　昔は鳥井姫君乳母と薄命をなげく、陸奥に下らんとして果さず　人遣りたれどー乳母が僧の許に　この人ー威儀師が世話をせぬ樣になりたらば姫の世話が屆かぬ　參り給ひねー源氏宮へ御奉公にお上りなされ　おはする人ー通ひ來る人　何地もー乳母も　わざにーいつまでも　おはしますをー狹衣の來るを厭ふのか、以下狹衣の從者の詞　別當殿のー狹衣が[illegible]非違使別當の子と自分を僞

びて、盗みもて行くなりけり。ありつる牛飼、そこに來ても語りければ、乳母「いとあさましかりける事かな。誰といふ人、さるわざをし給ひつらむ。若君いかになり給ひつらむ。いきて見よ」などいひ騒ぎける程に、かくておはしたるなりけり。

その後威儀師は音もせねば、理にいとほしくて、人遣りたれど、返事をだにもせねば、思ひ歎く事限なし。乳母「この人かくてやみ侍りなば、御前の御あつかひも、いかでかはし侍らむ。ゆゝしきわざかな。早く、源氏の宮の内裏參とて、やむごとなき人々の參り集ひ給ふなるに、參り給ひね。己は何地も〱罷りなむ。此のおはする人は誰ぞとよ。怪しくいたう忍び給ふは、御前には知らせ給へりや」といへば、姫「知らず。よろづ唯心より外にあさましき有様なれば」とて、うち泣き給ふを、さすがに哀と見て我もうち泣きぬ。又或る人々、「一日も、御門をむごに叩かせ給ひしに、開くる人もなかりしかば、おはしますを厭ひまゐらするか。別當殿の御子とは知らぬか。いたう侮り奉らば、看督長などゐて來て、この門開けさせむ」などいひければ、少將殿こそおはすなれ」といへば、乳母「稀

御車ゐて—狹衣の邸より迎の車が來た樣なれど此儘立去る心持になれぬ故
祈の師—逃げたる僧
疑はしかりつる—かの僧が此女を辱めしならんと疑はしかりしに、案外さもなかりし事が知れて見ると
さる心—僧が女をかどわかす心
この女—飛鳥井姫君と名づく
なま德—可成有福なりしが
思ひかしづきて—姫を
男—主計頭
わりなき有樣—父母が生活不如意になりしかば
おほけなき心—けしからん心
思ふ心—姫を
又借る人なくて

ぎたり。御車ゐて參りたるにやと聞き給へど、かばかりにて立ち出づべき心地もし給はねば、ありつる祈の師や入りこむ、ともの恐しながら、とかく語らひ給ふ。女、誰とだに知らぬをわりなしと思ひたり。君は思はずなりける契の程も、淺からず哀に思さるること限なし。ものぎたなく疑はしかりつる祈の師の心淸さも、見あらはしては、我が宿世のありてさる心もつきけるにや、とまで淺からず思さる。かねていみじう心を盡し、やむごとなきあたりよりは、習はぬ草の枕めづらしくて、其後は、よひ曉の露けさも知らず顏に、紛れありき給ふ夜な〳〵多く積りにけり。

この女は師の中納言といひける人の女なりけり。親達皆亡せにければ、めのと、主計頭などいふものの妻にて、なま德ありけるが、又なきものに思ひかしづきて、年頃ありけるを、男亡せて後は、わりなき有樣にて過しければ、この仁和寺の祈の師を語らひて、これに君の事をも知り扱はせければ、おほけなき心ありけるものにて、人知れず思ふ心つきて、かゝるわざはしたるなりけり。車なども又借る人なくて、太秦に往來の便を喜

思へば、なほ心づきなけれど、狹「かゝる道行く人を、おろかにはえ思し捨てじな。ありつる人に思ひおとし給ふよ」と宣ふに、いと恥かしくて下りなむとすれば、ひかへて、狹「など答をだにし給はぬ。道のしるべを嬉しと思さましかば、留れとは宣ひなまし。あな心憂」とゆるし給はねば、

女 とまれともえこそ言はれね飛鳥井に宿りはつべき蔭しなければ

といふさまぞ、なほその水影見ではえ止むまじう思されける。

狹 飛鳥井にかげ見まほしき宿りしてみまくさがくれ人やとがめむ

狹「車まつほど、人に見せで置き給へよ」とており給ひぬるを、女「あな苦し。びんなきものを」と苦しげに思ひたれど、誠に御車の後れたりける、待ち給ふとて、やがてその端つ方に引きとゞめ給へるに、月は華やかにさし出でたり。女いとはしたなしと思ひたるものから、いたく消え入りたるもの恥にもあらず、唯いとなつかしうをかしき樣のもてなしなど、あやしきまでらうたげなり。家の人々、如何なる事ぞとおやしがり立ち騷

道行く人—狹衣自身をいふ
ありつる人—僧
ひかへて—ひき留めて
陰しなければ—催馬樂「飛鳥井に宿りはすべしかげもよし」云云」
水影見では—泊りて見なければ
飛鳥井に—かげ見まほしさに泊りたらば御秣のかげから出來て咎むる人あるべし、怖い事かな
置き給へよ—我を暫時こゝに置いてくれ

ありつるものに―どうかして彼の僧に出逢はじと計り思ひ居に

押開けて―内の人が門を

しな〳〵しからぬ―品格卑しき

太輔の君―迎へに行きたる侍女の名なるべし

覺なき人―此女の様子では、我突然に下りたらば知らぬ奴とて我を打つべし

おろし―女を

あやしう―狹衣の心

さるべきにや―狹衣の心、縁があるのかしら、今迄出逢頭に惚れる様な事はなかりしに

さましき有様を見給ふも、誰にかあらむ、いかにしても、ありつるものに見えじと思ひつるまゝに、かゝるふせやの下をさへ、教へ奉りつるも、いかに思すらむ、と今ぞあさましく恥しきつまとなるべし。押開けて、「こゝに」といへば、車さしよせたるに、五十ばかりなる御許の、しな〳〵しからぬ様したる、火をいと明く燈して、老女「などいと遅くおはしましつる。御車の遅かりつるか。太輔の君や參り給へる」とて、寄り來たる火影すがたの見知らず怪しきも、疎ましく覺え給ひて、狹「覺なき人來たりとて打ちもこそすれ。疾くおり給へ」とて、おろし給へど、火さへあかくて、かたはらいたくわりなきに、とみに動かれぬを、引起したまへれば、衣などいとあざやかならぬ薄色のなよゝかなるに、髮はつや〳〵とかゝりて、いとわりなく恥かしと思ひたる氣色など、なべての様にはあらず、唯いとをかしき人様にぞありける。あやしう思の外なるわざかな、誰ならむ、見でやみなましかば、いかに口惜しからまし、と思ふものから、さるべきにや、かゝるうちつけ心などはなかりつるものを、いでや、疎ましかりつる頭つきに馴れつらむかし、と

が隠れ居るならん

いと佗しき—女の心

堀川と—誤あるべし

やがて—女の車に同乘したる儘

もの覺え—女が人心地つき行く儘に

めでたく—狭衣の樣子が

ましていとわりなけれど、女「堀川といづくとかや、大納言と聞ゆる人のむかひに、竹多かる所とぞ覺ゆるを、さていかに」と言ふけはひいとらうたげに、見まさりしぬべき人にやと、こよなく心とまりて、いき所を問ひ聞きて送らむと思しつれど、心やすげなる里のわたりと聞き給ふも、樣かはりてなか〳〵ゆかしければ、見おかまほしくや思すらむ、下り給はで、やがておしあてにおはしぬ。

堀川のおもてに、半蔀長々として、入る門いぶせゝ、暑げなる所なりけり。戸を忍びやかに叩けば、人出で來て問ふなりけり。狭「さていかゞ言ふべき」と問ひ給へど、泣くより外の事なくて、ものも言はねば、おしあてに「太秦より出でさせ給へる」と、いはせ給へれば、「今まで出でさせ給はずとて、覺束ながらせ給へる」とて開けたれば、蚊遣火さへ煙りてわりなげなり。

狭　我が心かねてや空にみちぬらむ行方知らぬ宿のかやり火

と宣ふけはひ、やう〳〵もの覺え行くまゝに、めでたく恥かしげなるにぞ、覺えなくあ

吉野の山に—「更に吉野の山に籠るとも思ふ我くれんと思ふ我ならなくに」
ありつる—逃げたる僧も、私が立去れりと悟りて再び來る
本意もあり—御身も望みでかの僧と共に行く積ならば、我は此儘立去るべし
然ばかりにや—大方狹衣ならん歟と思はるゝを
誰にかと—女の心
ゆゝしきもの—いやな奴、僧
ほの〴〵—夢中ながら思出した通り御咄し申さんと思へど
餘所にて思ひつる—狹衣の心
まかりぬべき—私は立去る方がよいのですな
いとほしさに—御氣の毒に思ひて前の樣に申上げたる泣なり
ものすらむ—僧

憂く逃げぬる人は、つらくは思さずや。吉野の山にとは思はざりけるにこそ。見捨てて罷りなば、今宵今少しおそろしき事もありなむ。又ありつる頭つきも、まろ去ぬと見分きもこそすれ。實に御心ならでかゝる事ものし給ふならば、おはし所教へ給へ。送り聞えむ。なほ本意もあり、あの人とわたらむと思さば、退りなむ」と宣ふ聲けはひの、聞きならはずあてにめでたきは、然ばかりにやと見え給ふを、誰にかと、覺えなく恥かしけれど、かく宣ふに聞えずば、げに捨ててこそおはせめ、さらば有りつるゆゝしきものの來て將て行かむ事、と思ふに悲しければ、ほの〴〵覺ゆるまゝに聞えむと思へど、唯わなゝかれて、とみに物も言出でられず、唯泣きにのみ泣きまさるけはひなど、餘所にて思ひつるよりはあてにらうたければ、苦しうなり給ひて、狹「さらばまかりぬべきなめりな。御心ならぬ事と聞きつれば、然もやといとほしさになむ。何か泣き給ふ。この邊にぞものすらむ。よも見捨て聞えじ」と氣色を見むとて宣へば、おはしぬべきなめりといと侘しきに、言ひ出でむ所の樣の恥かしさ、またははか〴〵しうも覺えぬに、泣聲は

ありつる法師—逃げたる僧
御車つかまつれ—車を進めよと牛飼にいふ也
盜まれたらむは—狹衣の心
殿へや—我が邸へ伴ふべきか
走りつる—僧の
手や觸れつらむ—僧が同車中女に手を出したかも知れぬ
飛鳥井に—我家にとめてやらんとも言ひにくけれど、催馬樂「飛鳥井に宿りはすべし蔭もよし御もひも寒し御秣もよし」
あの車—女の車
たど〳〵しき程—黃昏にて物のよく見えぬ時分

かあらむ。いかでか然ては捨てむ。その童に問ひて送れ」と宣へば、隨身「童の罷りつらむ方も知り侍らず。今、さりとも、車取りに、ありつる法師まうで來なむ。このわたりに隱れてぞさぶらふらむ。御松明まゐらで暗うなり侍りぬ」とて、隨身「御車つかまつれ」といへど、盜まれたらむは如何樣なる人ならむ、心ならぬ事ならば、いかばかり侘しかるらむ。暗き道の空にさへさすらふよ。かくて捨てては、ありつる法師本意のまゝにや將て行かむ。さらぬにても、今宵かくてあらば、いかなる心地せむ、など思すに、いといとほしければ、送るべき所も知らず、今宵ばかりは殿へや率て行かましと思すも、袈裟うち被きて走りつる足もと思し出づるもをかしく、道の程手や觸れつらむと、心づきなくゆゝしきに、飛鳥井に宿取らせむとも、語らひにくゝ思さるれど、猶いかなる人のかゝる目は見るぞとゆかしければ、引き返し、あの車に乘り移りて見給へば、いとたどたどしき程なれど、衣引きかづきて泣き伏したる人ありけり。狹「あないとほし。いかなる人の、かゝる道の空にたゞよひ給ふぞ。いかなる事ありとも、ひとりうち捨てて、心

威儀師—儀式の事を司る僧職
懸想じ給へる人—飛鳥井の姫君
法師だてら—僧のくせに
何しに—隨身が無用の咎めだてしたるを叱る也

童のあれば、隨身「いでさは尼君か見む」とてすだれ引上ぐるに、法師走りおりて顏を隱して逃ぐるを、隨身「この尼君はなど逃ぐるぞ」と、追ひて走りのゝしるを、御車をとゞめて、狹「斯くなせそ」と制せさせ給へば、牛飼童を捕へて、隨身「何者ぞ、何者ぞ」と問へば、童「仁和寺に何がし威儀師と申す人なり。年頃懸想じ給へる人の、太秦に日頃籠り給へるが出で給ふを、盗み給ふなり。法師だてら、かく強ちなるわざをし給へば、佛の惡み給ひて、かゝる目を見せさせ給ふなりかし。押留めてしめやかにも遣らせ給はで、年頃の思ひかなひて急ぎ給ふ程に、女車とぞ御覽ずらむ、唯疾くやれ、とせめ給へば、師には從へといふ法文を、僧のあたりに年經侍りぬるしるしに聞き習ひて、走らせ侍りつるなり。今よりは更に〳〵この師には從ひ使はれじ」と、おどろ〳〵しう悲しと思ひたる、をかしうなりて許してけり。君に、隨身「しか〳〵なむ申しつる。車には誠に女のおはするなめり。人は皆逃げ侍りぬ。かくて打捨てては、いとほしうこそ侍るべけれ」と申せば、狹「何しにかゝるわざをしつる。常に制する事を聞かで、往くらむ所は何處に

—仔細あるべし
御心習—自分に其樣な癖がついて居る故
然もやあらむ——わざと反對をいへる也
宣耀殿に—春宮か
㊤狹衣途に飛鳥井姫君の拘引され行くを救ひ其家に宿す
牽きかへ—代りの牛を用意に引連れて
物見—車の窓
此御車—狹衣の車
僻目か—僧の女車に乘れるは不審なれば見誤かと疑ふ也
持たる物—僧具
暫しおしとゞめで—暫時車を留めて禮を爲す事をせずに
物に籠りて—寺社などに參籠する爲に

て笑ひ給ふ。

我が心しどろもどろになりにけり袖よりほかに淚もるまで

とぞ思ひつゞけらる。春「心習はげに然もやあらむ。まことならぬ妹を持たらねば」など、言ひ戯れさせ給ひて、宣耀殿に渡らせ給ひぬれば、今宵はかひもあるまじきなゝめり、とすさまじく退で給ひぬ。

黄昏時の程に、二條大宮の程に遇ひたる女車、牛の牽きかへなどして、遠き所に歸ると見ゆるに、物見少しあきたるより、圓頭のふと見ゆるは、此御車を見るなるべし。はやく遣り過ぎぬるを、あやし、僻目かと覺す程に、供なる童の持たる物やしるからむ、此御ともの人見つけて、がや〳〵と追ひとゞむるに、え逃げて引止められぬ。御隨身のいたく咎めかゝりて、隨身「下簾懸け給へるは、やむごとなき僧にこそはおはすらめ。さはありとも、暫しおしとゞめで、あやにくに遣りちがふるは誰そ〳〵」と荒らかに問へば「仁和寺の何がし阿闍梨の御車にて、母上の物に籠りて出で給ふなり」とわなゝきいふ

入りぬる磯―「潮満てば入りぬる磯の草なれや見らく少く戀ふらくの多き」狭衣の無沙汰を怨む也
源氏の宮は―春宮の推量
ひこじろひ―ひきしろひ
仲澄の侍從―宇都保物語中の人物、異母妹のあて宮に懸想せる事あり、狭衣が源氏宮を戀せるを比していふ
大臣も―堀川も其事情を知れる故我が申込を聽かぬならん
人の問ふまで―「忍ぶれど色に出にけり我戀は物や思ふと人の問ふまで」
戀の山―「如何ばかり戀の山路の繁ければ入りと入りぬる人惑ふらん」ある樣あるべし

恨みさせ給へば、狭「亂りごこちの例ならずのみ侍りて、暑き程は、いとゞ宮仕怠り侍るなり」と啓し給へば、春「何心地にか常に惡しかるべきぞ。思ひ給ふ事ぞあらむ。わが心には隔てず宣へ」と、近うむつれかゝらせ給へば、狭「心地の惡しかるばかりは、何事をか思ひ侍らむ。これ御覽ぜよ。かく痩せ侍るは、死ぬべきなめり」とて、さし出で給へる腕などの白く美しげなるさま、女もえかゝらじかしと見え給ふ。源氏の宮は斯くやおはすらむ、とあぢきなくよそへられ給ひて、切に引寄せさせ給ふを、狭「あなむづかし。暑く侍るに」とひこじろひ給へる御あはひ、いとをかし。春「斯く痩せそこなはるばかり思ふらむ事こそ心なりたれ。仲澄の侍從が眞似し給へるなゝめりな。人も然ぞ語りし。大臣も斯かればつれなきなゝめりと。今こそ思ひ合せらるれ」と、まめやかに宣はするを、人の問ふまでになりぬるよと、いとゞ苦しけれど、つれなき樣にて、然らぬすきぐ〵さをだに好み侍らぬに、などありがたき戀の山にしも惑ひ侍らむ」と、なほ言少なる氣色やしるからむ。春「あなうたて、ある樣あるべし」と宣はするも、狭「御心習なめり」と

皇子—皇長子
此方がち—坊門上の方に居がち
宮—皇子
太政大臣の御方—堀川第二の妻
中の兄—三人の妻の中での年長者
もとがしは—三人の中の故妻、「いその上古から小野の元柏元の心は忘られなくに」
あつかひぐさ—世話やくべき子
おし立ちたる—我を張りたる
人よりは—他人より是非勝らざる可らずとはでな物好をして
わらゝかに—にこやかに
⊕狹衣東宮に參る
室の八島の後—室の八島の歌にて思を打明けて後は
姨捨山に—「我心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」

中宮出でさせ給ひぬれば、皇子さへうち具し奉らせ給ひて、いと公しく、きら〳〵しき御有樣なり。内裏の御つかひ日毎に參りなどして、殿も、かゝる程は此方がちにぞおはします。宮の御有樣かたちなど、あらまほしうけ高う、恥かしげにてものし給ふ。太政大臣の御方は、中の兄にて、もとがしはにおはすれど、かゝるあつかひぐさも持ち給はねばにや、我が御有樣ひとつを華やかに、今めかしうもてない給ひて、我はと誇りかにおし立ちたる御心おきてにぞおはしける。人よりはいかで、と持て出でたる御物好などして、いとわらゝかに、憎からぬ御心おきてなるべし。かく樣々にもてかしづき給ふ御さまどもをぞ、明暮羨しく思したる。

中將の君は、ありし室の八島の後は、宮のこよなく伏し目になり給へるも、いとつらう心憂きに、いかにせましとのみ歎きまさるを、我が心にも慰め侘び給ひて、自らもや紛るゝと、忍びありきどもに心入れたまへど、ほのかなりし御手あたりに似るものなきにや、姨捨山にのみぞ思さるゝ。春宮に參り給へれば、「晝入りぬる磯なるが心憂き事」と

あながちにも—強ひる事はない
三位—堀川第三の妻、坊門上の兄弟
いかゞ思ふらむ—狹衣が
さかりに—女二宮が
たのもし人に—狹衣を女二宮の力になる人として
聞き過して—聞き流しにして居るのは勿體なし
蓬がもと—「蓬が門を過ぎずもあらなん」の歌を贈りたる女の家
おろしこめて—戸じめにして
さやうの者の—狹衣の心
しわざにや…かの歌を贈りたるは

かは。まいて母宮の然宣はむには、あるまじき事にこそは。一日三位の物語せし序に、笛の音のめでたかりしにめでて、二の宮の事をほのめかしゝは、いかゞ思ふらむ、この頃さかりにをかしげにおはするを、行末のたのもし人に譲らむ、など上の宣はせける、と語りしは、かたじけなく、聞き過してやとこそありしか」と宣ふ。斯くだに宣はば、いかゞはせむと、うち歎かれて立ち給ひぬ。

暮れぬれば内裏へ參り給ふついでに、狹「まこと彼の蓬がもとは、いづれぞ」と問はせ給へば、見おきし隨身、「こゝもとに侍る。そこと申しさぶらひしかば、又の日見給へしかば、おろしこめて人も侍はざりしあやしさに、側の人に問ひ候ひしかば、筑紫へまかりにける長門守といふ人の家にさぶらひける、妻の同胞どもなむ、宮仕人にて數多侍ふなる。中務の宮の姫君の乳母にても侍るなり」と申せば、さやうの者の來集りたる折のしわざにや、少將の乳母とかやいひて、大納言の五節に、出でたりしざれものにや、など思しやらるゝ。

かたへ涼しき―「夏と秋と行きかふ空の通ひ路はかたへ涼しき風や吹くらん」
渡守にや―此故事未詳
道のはてなる―「東路の道の果なる常陸帶のかごとばかりも逢はんとぞ思ふ」
如何にとかや―何といふぞ
大宮―皇大后宮、女二宮の母
唯なるよりは―手紙をやらぬよりは
さばかりの―只女二宮を下さるといふ御沙汰ばかりで
よすがとも―妻にもすべし
絆なからむかし―足手纏のない方がよし
いみじき―どんな大事も其方の心次第

とこほるゝ心地し給へるを、めづらしからむ人のやうに若き人々見奉る。中務といふ人「道のはてなると歎きし人の有りしこそ、理に憎からぬ」と獨こつを、しり目に見おこせ給ひて、狹「如何にとかや。殘りゆかしき獨言かな」と宣ふを、「あな侘し。聞えけるにや」と侘ぶるさまも憎からず見渡し給ふ。狹「殿の女二の宮に、御文奉れと宣へるこそ。唯さばかりのなほざりごとだに、大宮聞き給ひて、目ざましくあるまじき事と、むづかり給ひけるものを、さやうにほのめかし出でて、はしたなめられ奉らむこそ、唯なるよりは心やましかりぬべけれ。唯さばかりの御氣色にて、其夜の面目は限なかりきかし。中々なる事いひ出でて、上もあざれたりとぞ思されむ。數ならぬ者は、すきずきしき事好まで、然りぬべからむ陰の小草の、露より外に知る人もなきなどを尋ね出でて、よすがともなれかし。さらずば又、幾世もあるまじからむ世に、絆なからむかし」とて涙ぐみ給へるを、母宮御覽じて、御顔の色も違ひて、母「たはぶれにも、ゆゝしき事な宣ひそ。いみじき事なりとも、わが御心にこそあらめ。ものうく覺え給はむを、あながちにも何

―狹衣より女二宮へ文をやらぬは宜しからず
侍從の內侍―女二宮の侍女なるべし
あなむづかしや―狹衣の心
侘しからむも―「からむと」歟
さばかりの―其位の御あればとて此方から文はやられぬ
心に入らぬ―狹衣が氣に入らぬならんと父が思ふにつけても
忽にこそ―今急に文をやらずともよけれど
ほかざまに―境遇に迫られても我は源氏宮以外の女は持たぬ
いなぶちに―「年をふる涙かいかに逢ふ事はないはいなぶちの離まされとや」
殿の―以下狹衣の心、父があの樣に廣く撰り好みしたる事なれば

宣へば、あなむづかしや、あり果つべくも覺えぬ世に、さやうに定まりゐて、いかに侘しからむも、聞くにさへぞあつかはしき夜の衣なりける。狹「御氣色忝かりきといひながら、さばかりの御事を承りて、聞えさせ出でむや。なか〳〵無禮げに侍らむ」とて、すさまじげなる御氣色なれば、心に入らぬ事なめりと思すも、上の思さむ事いとほしくて、堀「忽にこそ言はれざらめ。さ宣はせてむを知らず顏ならむは、ひが〳〵しかるべきわざかな」と、例ならずものしげなる御氣色なれば、煩はしくて立ち給ひぬ。

狹 ほかざまに藻鹽のけぶりなびかめや浦風荒く波はよるとも

などいなぶちに口吟び給ひて、母宮の御前に參り給へれば、母「暑けにや、この頃こそ痛う瘦せて見え給へ」とて、心苦しげに思したるけしき、飽くまでらうたげに見え給ふを、殿のさばかり隈なく見集め給ひけむに、親と聞えながらも、すぐれたる御覺はことわりぞかしと見奉り給ふ。狹「夏瘦はえせものの事にとかや。かたへ涼しき風に從はむも惡かるべき事かは。などかうしも言ひそめけむ。渡守にや問はまし」とて笑み給へる、匂さ

みづから悔ゆる宮腹の女―「みづから悔ゆる物語」といふ小説中の人物なるべし
かの思ひ―以下狹衣の心、前に狹衣がふと右大臣の娘を見し事ある也
人は―よき女は
故院―堀川の父
他事は―他事につきては我を鍾愛せられしかど女狂を堅く禁じて
えさらぬ人數多―三人の妻の爲に他の女は壓倒されて
若くより―早く立派なる妻を定むるは
然もあらぬ―けしからぬ浮氣心になりて
笛の祿―女二宮を賜はる事
案内聞えさせぬ

り外にあたりにも寄せず、際もなくこそかしづくなれ。みづから悔ゆる宮腹の女の樣にやあらむ」とて笑ひ給へば、たゞかの思ひかけざりし宵の火影は、いとしも玉の疵は見えざりしかど、鼻高はよく言ひあて給へりと思ふに、少し微笑まれぬる氣色を、しるく見給ひて、堀「若かりし時垣間見を常にせしかば、さも樣々なる人をあまた見しかな。人はいと有り難きものぞかし。思ふやうなる人にあふ事は難きわざなりや。故院の、他事はいみじう思しめしながら、此方は生憎に制しさいなみて、たやすくもありかせ給はざりしかど、賢う盜みまぎれ出でて、至らぬ隈こそなかりしか。かく樣々えさらぬ人數多ものし給ふに壓消たれて、哀と思ひしわたりもありしかど、かひなくこそ歇みにしか」など、昔の事ども思し出でたり。堀「若くよりなほやむごとなき方に定まりぬるは、重りかによき事なり。獨あるは、おのづから然もあらぬ心もあくがれて、輕々しく惡き事ぞ」など宣ひて、堀「かの御氣色ありし笛の祿は、いと忝き事にこそ。その後、内々にも案内聞えさせぬはいと便なき事なり。吉き日して侍從の内侍の許などに、ほのめかし給へかし」など、

餘り取籠めたり―狹衣を閉籠め置くも程がある
さもや―源氏宮を春宮に差上げんかと思へど
十にだに―十歳にもならば春宮へ差上げんと待遠がるのを
きしろひ―競爭し
冬つ方―此冬頃か來年源氏を差上げんと
つひの事―どうせそうなるに極つて居る事
此御事―源氏宮の方はゆつくりにて宜しかるべし
身に添ふ影にて―かの傾に付纏ふが煩くて
權中納言―太政大臣の子
此御方―源氏宮
孫王だち―王孫らしき風采で

も、ひと日餘り取籠めたりと仰せられき」と宣ひて、堀「源氏の宮の御事を、春宮、かく心もとながらせ給ふにいたく侘びさせ奉る、と恨みさせ給ふに、涼しうなりてさもやと思ひ立つを、右の大殿の、唯獨かしづかるらむ女の、十にだにならばと心もとながる、辛うじてこの八月に參らせむと氣色とらるゝを、制すべきにもあらず、きしろひ給はむも便なければ、冬つ方、さらずば年返りて、など思ふは如何あるべからむ。春宮も急がせ給ひ、内裏にもさこそあらめと御氣色あれど、何かは、人のいつしかと思ひ急がれむを、とゞめむもいとほしかるべし」など聞え合せ給ふを、つひの事ぞかし、さこそはあらめ、と思ひながらも、胸は塞がりまさりて、氣色もかはるらむと思へど、つれなくもてなして、狹「人の事を延べさせ給はむいとほしうや侍らむ。此御事は、いつも心のどかにあえ侍りなむ。權中納言の身に添ふ影にて騷ぐなれば、煩はしさに斯く急がるゝとぞ聞き侍る」と申し給へば、堀「こゝにもさ思ふなり。右の大臣の祕すらむ女、此御方にえこそ竝ばざらめ。孫王だち、鼻高にきら〳〵しき様にやあらむとぞ推し量らるゝや。母乳母よ

かゝる心―以下源氏宮の心
さるべき人々の―自身が親の側にてそだたぬ事を
誰も―源氏宮の心、誰も狹衣の我に懸想するに氣付かぬよ
ありてうき―古今集、「殘なく散るぞめでたき櫻花ありて世の中果の憂ければ」此歌を引ける歟
㊈父母狹衣を訓誡す
言出でそめて―源氏宮に戀をあかしてからは
殿の御方―父の許
麗しき―端正なる
うち笑まれて―父が
中宮―狹衣の異母妹
參り給へ―御迎に

今ぞよろづに思しつゞくる。かゝる心おはしける人を、露知らで、誰よりもなつかしく思ひて、明暮さしむかひて過しけるよ、と疎ましう恐しきにも、然るべき人々の御あたりならでおひいでけるを、哀に思し知られて、やがて臥し暮し給へるを、御乳母たちなど、例ならぬ御氣色はいかなる事ぞ、と怪しがるにも、誰もかゝる御心をも知らぬよ。かやうに常にあらば恥かしうもあるべきかな、と思すに、ありてうき世はと今日ぞ思し知られける。

中將の君も、言出でそめて後は、いとゞ忍び難き心の亂れまさりて、つくづくと詠め臥し給へるに、殿の御方より、「參り給へ」とあれば、何となくこゝちの惱ましきに、もの憂ければ、然聞き給はばまた驚き騷ぎ給はむも聞きにくければ、裝束しどけなげにて參り給へり。鬢のわたりもいたううち解けて、ないがしろなる御うちとけ姿の、麗しきよりも、中々また、かくてこそ見奉るべかりけれと見えて、見まほしうなつかしき樣のし給へるを、例のうち笑まれて見奉り給ふ。「夜さり、中宮のいで給はむに參り給へ。上

恐しき—源氏宮が御覽じ—見て知らぬ人に口說かれてもする樣に
岩切り—「吉野川岩切り通し行く水の音にはたてじ戀ひは死ぬとも」
おとぎき—てごたへ
通はぬ里—人の來ぬ處
さぞかしと—君故に世を棄てたりと
事も—事ども戱
いつもけぢかき—二人はいつも親しく語る中なれば
君—狹衣

かくばかり思ひこがれて年經やと室の八島のけぶりにも問へ」

片端だに洩しそめつれば、年を經て思ひこがれて、過し給へる心のうちを、聞え知らせ奉り給ふに、恐しき夢を見る心地し給ひて、戰かれ給ふを、狹「むげに御覽じ知らざらむ人のやうに、斯ばかりをだに恐しと思したる事」と泣く〳〵恨み聞え給ふほどに、人近く參る氣色なれば、少し退きて、狹「今よりはいかに憎ませ給はむずらむな。俄ならむ御心がはりは、なか〳〵人目おやしく侍らむ。思し疎むなよ。岩切り通し侍るとも、おとぎきもあるまじき事と、思ひ知りたれば、よも見苦しき心の程は御覽ぜられじ。餘りに思ひ侘び侍りなば、通はぬ里にぞ行き隱れ侍らむかし。さやうならむ折は、さぞかしと思召し出でさせ給へかしとてなむ」など、聞え知らせ給ふ事も思ひやるべし。されどいと近くしも侍ばぬ人は、いつもけぢかき御中らひに、目も立たぬならむかし。「繪見侍らむ」とて人々近く參れば、宮は御こゝち例ならずと紛らはして、小さき御几帳引き直して臥させ給ひぬれば、君も、顏の氣色や著からむと思せば、立ちたまひぬるに、宮は

あやしと—源氏宮が
御手を—源の手を狹衣がとらへて
袖の柵—涙とゞめかねたる
御かひな—狹衣の
俯し臥し—源氏宮が
誰も後の世の—我爲にも君の爲にも後世の障ともなるべき惧ある故

て、目とゞまる所々多かるに、え忍び給はで、狹「こはいかゞ御覧ずる」とてさし寄せ給ふまゝに、

狹「さらば昔の跡をたづね見よわれのみまよふ戀の道かは

ともいひやらず、涙のほろ〳〵と溢るゝをだに、あやしと思すに、御手をさへとらへて、袖の柵せきやらぬ氣色なるに、宮いとあさましう恐しうなり給ひて、やがてとらへ給へる御かひなに、俯し臥し給ひぬる氣色の、言ひ知らぬものにとらへられたらむやうに思したるも、いとゞ心騷ぎして、こゝら思ひ詰むる心のうちを、かたはしだにも打出づべうもなく、涙にのみおぼほれ給へり。狹「いはけなく侍りしより、志ことに思ひそめ奉りて、こゝらの年頃積りぬる心のうちは、あまり知らせ奉らでやみなむも、誰も後の世の爲まで、うしろめたう侍るべきにより、漏し侍りぬるこそあさましけれ。又いと斯うあるまじう見苦しきもの思ふ人のたぐひ、昔も侍りけるにやと見ゆるに、あまり疎ましげに思しめしたるも心憂くこそ。

かはせみならんといふ說あり、「夏の日のもゆる我身のわびしさに水こひ鳥の音をのみぞなく」

たゝなはりたる―たぐまりたる

そぎすゑ―細くなりたる髮先

所狹げ―うるさげ

たを〳〵と―たをやかに

隱なき―羅なれば身體のとほりて見ゆる也

餘り思ひ―惚れた慾目でそう見えるのかしらと

つれなく―平氣を裝ひ居れり

淚さへ―狹衣が

在五中將の日記―伊勢物語

ひとつ心なる―業平と我と

方源氏の宮の御方に參り給へれば、白き羅のひとへ著給ひて、いと赤き紙なる文を見給ふ。御色はひとへよりも白う透き給へるに、額の髮のゆら〳〵とかゝりこぼれ給へる、裾はやがて後とひとしう引かれ行きて、こちたうたゝなはりたる裾のそぎすゑ、幾年を限に生ひ行かむとすらむと、所狹げなるものから、たを〳〵とあてになまめかしう見え給ふ。隱なき御ひとへに、御ぐしのひま〳〵より見えたる御腰つき、かひななどの美しさは、人にも似給はねば、餘り思ひしみにけむ我が目からにや、とまもられて、例の胸はつぶ〳〵となり騷げど、よく忍び返して　つれなくもてなし給へり。狹「いと暑き程に、いかなる御文御覽ずるぞ」と聞え給へば、源「齋院より繪ども給はせたる」とて、隱なき日のけしきに、華々と匂ひみち給へる御顏つきを、まばゆげに思して、少しうち赤みて、この御文に紛らはし給へる用意、氣色、眉など、言ひ盡すべうもあらずめでたう見え給ふに、涙さへ落ちぬべう覺え給ふまぎらはしに、この繪どもを見給へば、在五中將の日記をいとめでたう書きたるなりけり、と見るに、あいなうひとつ心なることゝちし

身色云々—法華序品、釋尊の身相を形容せる句

五月の空には—五月雨の頃は魔物の空を翔るなどいふ俗説のありしなるべし

鼻聲に—涙聲に

何方か—どこへ參りますものか

ことぐさ—噂の種

㊅狹衣源氏宮を訪ひて戀を訴ふ

水こひ鳥—未詳

など獨ごちてたゞずみ給ふまゝに、「身色如金山端嚴甚微妙」とゆるらかに打上げて讀み給へる、いみじう心細う尊きを、母宮、大臣など聞き給ひて、なほ樣々に餘なる有樣かな、など斯うしも思ひ出でけむ、又天人の迎もこそ得給へ、とゆゝしく思されて、宮膝行出で給ひて、母「など斯く夜深く起き給へる。五月の空には、恐ろしきもののあなるを」と宣ふまゝに、鼻聲になり給ひぬなり。殿も起き給ひて、堀「なほこの頃ばかり、内裏にもな參り給うそ。けふより七日ばかりと、始めさする祈どもの程は、同じ心に佛をも念じ給ひてものし給へ」と聞え給ふに、戲の口ずさびも、こちたうむづかしうさへ思さるれば、「何方かまかり出でむ」と、申し給ひて對へわたり給ひぬ。その頃のことぐさには、唯此事を天の下に言ひのゝしりけり。朝廷にも日記の御唐櫃あけさせ給ひて、天稚御子と作りかはし給へる文ども、書き置かせ給ひけり。その夜さぶらはざりける道の博士ども高きも卑しきも、この御文を見て涙を流しつゝめで惑ふを、此ごろの事にはしたり。

暑さのわりなき程は、水こひ鳥にも劣らず、心ひとつに焦れ給ふを知る人もなし。晝つ

[illegible]

す顔に、あながきなく、さるまじき事により身はいかにしなさむ、と覺ゆるに、人やゆならず枕も浮きぬべし。あるまじき事と返す〴〵思ひ返せど、關路遙閣に聞えたればにや、わき返る心のうちは、更に思ひやむべき心地もせず。たのいみじき御志と思しめして、賜せつる御身のしろは、いと傍く痛だたしけれど、かひ〴〵しくきかまほしくも思されず、紫のならましかばと覺えて、

狹 色々にかさねては着じ人知れずおもひそめてし夜半の狹衣

とぞかへすがへす言はれ給ふ。寢ぬに明けぬといひ置きけむ人も羨しきに、かろうじて明けぬる心地すれば、東の渡殿の妻戸おし明け給へれば、雨すこし降りける名殘、霞軒の雫所狹けれど、空はあま雲はれ渡りてほの〴〵と明け行く山際、春の曙ならねどをかしきに、花橘に宿かりけるにや、郭公はほのかに鳴き渡るも、音にあらはれにけりと聞き給ふ。

狹 夜もすがら歎きあかして郭公鳴く音をだにも聞く人もなし

―女二にしても―狹衣に縁つゞきなれば、「武藏野の向の岡の草ならば根を尋ねても逢はんとぞ思ふ」

常よりも―狹衣の樣子

鳴く一聲に―「夏の夜は臥すかとすれば時鳥鳴く一聲にあくるしのゝめ」

御手づから―母が自ら給仕して食を勸むれど

ふように―食べられませぬ

浮びて―うかれて

げに殿の―狹衣の心

木幡―山城の地名、發に三井寺の末寺ありし也

この御傍―狹衣の傍

驗あるべき人々―祈禱の驗ある僧等

母宮待受け給へる氣色思ひやるべし。母「いかに困じ給ひぬらむ」とて、御手づからまかなひ据ゑて、そゝのかし給へど、誠に苦しく惱ましく思されて、狹「今宵はいかにもいかにも、ふようにさぶらふ」とて、狹「やすみ候はむ」とて、我御方へ渡り給ふを、いとゞ今宵よりは、片時立離れ給はむもうしろめたうわりなしと思したる氣色にて、母「今宵は此方にものし給へ」と、切に聞え給へば、御座など敷かせて寢給ひぬるやうなれど、めづらかなりつる事どものみ思ひつゞけられて、まどろまれ給はず。何となく心も眞に浮びて、ありつる御子の御かたちも面影に戀しう　口惜しう覺え給ふ。げに殿の宣へる樣に、この世にはあり果つまじき始にやと、我ながら心細し。木幡の僧都召し寄せて、この御傍に侍はせ給ひて、殿もいも寢給はず。今宵の事ども語り給ひつゝ、いと物忌々しく思して、明日より始むべき御祈どもの事など宣はす。さるべき家司職事ども召し集めて、やむごとなく驗あるべき人々して、始め行はせ給ふべき御祈のさま、いとこゝちたけに思し置きて、宣はするさま聞き給ひても、など斯うしも思すらむ、かゝる御心どもを知ら

身のしろも—昇天を拒みし代りに女二宮を與へんの意

いでや—狭衣の心

武藏野の—源氏宮を賜はるならば、武藏野はゆかりの意、「紫の一本故に武藏野の草は皆がら哀とぞ見る」

思ひぐまなき—ゆかしげなき

紫の身のしろ衣—源氏宮をさす

何とかは—帝には意味が分らぬ

向の岡は離れぬ

の絆どもも見給へざらましを、變らぬ樣を見せさせ給へる事」と喜び申し給ひつゝ、いと危くうしろめたしと見やり給へる氣色の、理にいとゞ今宵よりは見え給へば、人々も皆泣き給ひぬ。中將の君は、斯ういとこちたき御遊の名殘ものむづかしう、過さへしたる心地して候ひ給ふを、上召し寄せて御杯賜はするとて、

帝　身のしろも我ぬぎ著せむ返しつと思ひな侘びそ天の羽衣

と仰せらるゝ氣色、然にやと心得る事あれど、いでや武藏野の夜の衣ならましかば、實に代へまさりにもや覺えましと、思ひぐまなき心地すれど、いたう畏まりて、

紫の身のしろ衣それならば少女のそでにまさりこそせめ

といはれぬるも、何とかは聞きわかせ給はむ。いづれも、向の岡は離れぬ御事どもなれば、常よりもの哀なるけしきにて、靜まり給へる用意かたちなど、おぼろげの女は、帝の御女なりとも竝べにくきを、二の宮は怪しうはおはせじ、と思しめす。鳴く一聲に明くる心地すれば、人々まかで給ふ。殿も中將の君ひとつ御車にて出で給ひぬ。

に居て先嬉しやと父の思ふ也
おぼほれ―堀川大臣が茫然たるを
實に―狭衣の心
參り給へば―堀川が帝の御前へ
かたの樣に―一通りは學び心得よ
驚く事なくて―狭衣の身に不慮の事なくて
身の才―狭衣の才藝の秀でたる事抔は
如何なる―餘り勝れたるは却て如何なる心配の種ともならんかと迷惑也

る事ぞ、己を捨てて何處へおはせむとし給へるぞとも、え言ひやらずおぼほれ給ふを、實に留らずなりなましかば、限ある御命もいかゞなり給はまし、と哀に見奉り給ふ。ためらひて御前に參り給へば、ありつる事ども語らせ給ふに、すべて現とも思されず。堀「何事も言ひ知らせ教ふる事も侍らず。公に仕うまつり、私の身のため、男のむげに無才に侍るはいと口惜しきことに侍れば、その方ばかりはかたの樣に見あかせ、とや言ひ知らせ侍りけむ。まいてこの琴笛の方は、戯にてもまねび候ふらむとこそ、思ひ給へ侍らざりつれ。如何にして斯う世の例になりぬべき音をさへ、吹き傳へ侍りけるにかと、珍らかにも思う給へらるゝかな。如何にもまた類も候はねば、たゞ心に驚く事なくて、生きて侍らむ限、見給へらむのみこそ、この世のよろこびには侍れ。いと餘りなる身の才などは、更に嬉しくも侍らず。遂に如何なるみだりごこちを、まどはさせ侍るべきにか、とかへりては、いとつらくなむ思う給へらるゝと、今宵はすべてうつし心も侍らず。空しき跡を見給へつけたらましかば、明日まで長らへて、朝廷にも仕うまつり、私のあまた

大殿—堀川大臣邸
藏人所—堀川邸內の
跡をだに—狹衣已に昇天せりと思ひたる也
道の程—堀川大臣邸參內の途中
陣—皇居四方の正門
火たき屋—夜警の爲に衞士の篝を焚きて詰め居る番所
おはしましけり—狹衣昇天せず

人々聲高くもの言ふを、何事ならむと聞かせ給ふに、伊豫守何がしの朝臣參りて、內裏に斯々の事なむ候ふなると申すを聞き給ふ御心地ども、如何ばかりかはありけむ、更に現の事とも思されねば、堀「居給へりつらむ跡をだに、今一度見む」と宣ふ事より外に、物も覺え給はぬを見給ふに、母宮は唯御衣引き被きてぞ臥し給へる。世は如何になりぬるぞと見ゆるまで、殿の內騷ぎたり。道の程思し續くるもいみじうゆゝしきに、御車の內より流れ出づる御涙、千曲の川渡り給ひけるにやと見えたり。道の程例よりも遠う思されて、陣の程人に引かれ入り給ふに、九重の內は物騷がしげもなし。火たき屋の火ども常よりは明くて、こゝかしこのはざま、塀の面々などにいふ聲々、唯この事なるべしと聞き給ふに、さてまことに空に昇り給ひぬるにや、如何にいふぞ、と思すに心地もいとゞ惑ひて、倒れ給ひぬべし。殿參らせ給ふと人々立騷ぐを、中將、この事に因りてならむかし、いかばかり御心地まどはし給ひつらむと思すもいとほしうて、殿上の口にさし出で給へるを、おはしましけりと、打見つけ給へるぞ中々いみじきや。如何なりつ

危くうしろめたく―帝が
心を―狹衣の
大臣―狹衣の父
かなしきもの―可愛きもの
この宮―女二宮
世の常の御有樣―臣下の列なる者に嫁する事
思しめし―帝が
㊆堀川大臣夫妻狹衣の身の上を憂慮す

づらかなりと、見る限は夢の心地し給ひけり。中將の君は、御子の御ありさまの面影に戀しく、いみじくもの哀と思ひたる樣にて、空をつく〴〵と眺め入りたる氣色、いとゞこの世に心とゞめずやなりなむと、危くうしろめたく思しめされて、何事に心を少しまぎらはさむとおぼし廻すに、大臣になすと嬉しと思はじ、大臣も更にうけひかじ、とかひなく思しめさる。皇太后宮の女二の宮の御かたち心ばせ、ことわりも過ぎておはしますを、いみじうかなしきものにし奉らせ給ひけり。一の宮は此頃齋院にておはします后もこの宮をば、たぐひなく思ひかしづき聞えさせ給ひて、世の常の御有樣など思しかくべくも無きを、中將の笛の音に、天人だに聞き過ぐし給はで、下りおはして誘ひ給へるに、たゞにてやませ給はむも、あるまじき事なるに添へて、斯ういと心細げに思ひあくがれぬべき氣色なるに、二の宮の此頃盛にとゝのひ給へる御有樣見奉らば、この世はえあくがれじと思しめしなりぬ。

大殿には、中將の君は今宵は出で給ふまじきにやと、尋ねさせ給ふ程に、藏人所の力に

帝の心
ことぐさ—言ひぐさ
この世のものにはあらず—狭衣は
大臣—狭衣の父
悲しく見奉り—狭衣が
かゝる御迎の—以下狭衣の即吟したる詩の意味
思ひ立てど—昇天を
かつ見る—眼前に見て居る
文—詩
かう何事にも—以下天人の答詩の意味

るものを、この人を、かく目に見す〳〵雲のはたてに迷はしては、我が御身も、この世に過ぐさせ給ふべき御心地せさせ給はねば、涙もえとゞめさせ給はず、いといみじき御氣色にて引きとゞめさせ給ふを、悲しく見奉り給ふにも、まいて大臣母宮など聞き給はむ事を思し出づるに、厭はしく思さるゝこの世なれど、ふり捨て難きにや、かゝる御迎のかたじけなさに、ひとへに思ひ立てど、帝の袖をひかへて惜み悲みたまふ、親達のかつ見るをだに、飽かずうしろめたう思したるを、行方なく聞きなし給ひて、むなしき空を形見と眺め給はむ樣の悲しさに、この度の御供に參るまじき由を、言ひ知らず悲しくおもしろく文に作りて、笛を持ちながら少し涙ぐみ給へる御顏は、天人の竝び給へるにも、匂ひ愛敬こよなくまさりて、めでたき御聲して誦じ給へるに、天稚御子涙を流し給ひて、かう何事にもこの世に勝れたるにより誘ひつれど、理にめでたう悲しき文の心ばへによりて、とゞめつる口惜しさを作りかはして、雲の輿寄せて乗り給ひぬる名殘の、匂ばかりとまりて、空の氣色も變りぬるを、あさましなども世の常の事をこそ言へ、め

あさみ―不思議がり

うるはしく―端麗に

いとゆふ―糸遊かげろふ

われも―狹衣自身も

立ちとまるべき―此娑婆世界に

めでたき御有樣―天人の

誘はれぬべき―天童と共に天上すべき

世の人の―以下

星の光月に異らず輝き渡りつゝ、この御笛の音の同じ聲に、さま〳〵のものの音ども空に聞えて、樂の音いとおもしろし。帝、春宮を始め奉りて、如何なる事ぞとあさみ騷がせ給ふに、中將の君もの心細くなり給ひて、いとゞ音の限吹き澄し給へり。

狹　いなづまの光に行かむ天の原はるかに渡せ雲のかけはし

と音の限吹き給へるは、實に月の都の人もいかでかは驚かざらむと覺ゆるに、樂の聲々いとゞ近うなりて、紫の雲たなびき渡ると見ゆるに、角髮結ひていひ知らずをかしげなる童の、裝束うるはしくしたる薫しきもの、ふと降り來るまゝに、いとゆふが何ぞと見ゆる薄き衣を、中將の君にうち懸けて袖を引き給ふに、われもいみじくもの心細くて、立ちとまるべき心地もせず。かくめでたき御有樣の引きはなれ難くて、笛を吹き〳〵誘はれぬべき氣色なるに、帝の御心騷がせ給ひて、世の人のことぐさに、この世のものにはあらず、天人の天降れるならむ、とのみ言ひ思ひたるは、實にこそありけれ、大臣のかやうの事をたまさかにもせさせず、月日の光にもあてじと、危く忌々しきものに思ひた

を聞かぬなら、聞かぬ方がよいといふ位

心にくき御邊―皇太后宮の姫宮等をいふ

わぶ〳〵―迷惑がりつゝ

ものや見入れ奉らむ―魔物が魅入りて如何なる變異を生ぜんも知れず

大臣―狹衣の父

我が心地―狹衣自身の心

御袖―帝の

宣はすれど、狹「唯斯ばかりなむ、大臣の戯に教へ侍りて、これより外にはすべて覺えさぶらはず」と奏し給ふを、帝「いとうたて、空言をさへつき〴〵しくもいふかな。大臣の笛の音に似るべくもあらざゝめり。すべてかく苦しと思はれば、更に言はじ」と仰せらるれば、いと侘しうて、皇太后宮の姫宮達などの、上の御局におはします頃にて、心にくき御邊には何事も殘りなく聞かれ奉らじと、思ふ方さへいとゞしきなるべし。月も疾う入りて御前の燈籠の火ども晝のやうなる火影に、かたちはいとゞ光りまさりて、柱に寄り居て、まめやかにわぶ〳〵吹き出で給へる笛の音、雲井を響かし給へるに、帝を始め奉りて、九重の內の賤の男まで、聞き驚き涙を落さぬはなし。五月雨の空のものむづかしげなるに、ものや見入れ奉らむとまで、ゆゝしくあはれに誰も御覽ずるに、大臣まいて見給はば、いかばかり忌々しきまで思さむと、我が心地にも驚かせ給ふ。御袖も絞るばかりにならせ給ひぬ。宵過ぐるまゝに、雲のはたてまで響きのぼる心地するに、電度度して、雲のたゞずまひ例ならぬを、雷の鳴るべきにやと見る程に、空いたく霽れて、

恨み果てさせ―怒つてばかりも居られぬ心持
四五の才―我々の第一の藝は狹衣の第四第五の藝にすら及ばざるに
事をかへつゝ―引かへ狹衣一人に奏せさせたし
一つをだに―只一の笛をふく事さへ狹衣は容易に承諾せざる位故
中々なる程―此ばかり聞いて跡

せ給ふべくもあらず御覽じける。こと人々も、中々心ことなるべき夜の御遊と、心づくろひしつゝ、とみに手も觸れ給はで、權中「中將の四五の才ばかりにだに候はぬ物の音を、紛なく彈きあらはし侍らむ面恥かしさよ。萬の人のかはりに、事をかへつゝ仕うまつらせばや」と、權中納言奏し給へば、帝「一つをだにさばかり心ごはからむに、まいて人の代はすべくもあらざゝめり」とて責めさせ給へば、各心づくろひいたくして、ひき出でたる物の音ども、いと面白し。中將の御笛になりて、帝「さて如何に。仕うまつるまじきか」と度々まめやかなる御氣色にて責めさせ給へば、いと侘しう、斯うと知らましかば參らざらましものを、と悔しけれど、遁るべき方なくて、笛も初々しげに取なして、ことに人の聞き知らぬ調子一つばかり吹き鳴らし給へるを、上は、音には聞きつれど、いと斯くまでは思召さゞりつるを、今まで耳ならさゞりける恨めしさをさへ、引きかへし仰せられて、めで驚かせ給ふ樣いとこちたし。聞く限の人々も、更にこの世の物の音とも聞えぬに、涙もとゞめ難けれど、中々なる程にて歇みぬるを、帝「いとあるまじき事」と責め

まねび侍らぬ―横笛を習ひたる事はなきに
斯ばかりの心ばへとは―汝が其樣な了簡ならんとは思はざりき
おとゞの思ひたるに―我は汝の父にも劣らず汝を愛せり
まめだたせ給ふ―眞面目にならるゝ
取り寄せ―横笛を
物にまぜつゝ―他の樂器の音に我が笛の音をまぜて
獨は―獨奏は

は琵琶、兵衛督に箏の琴、宰相中將和琴、中務宮少將笙の笛、源中將に横笛賜はす。唯今のいみじき物の上手どもなるべし。帝「おの〳〵今宵、この音ども手をつくして聞せよ」と宣はするを、誰も、「一つにかきまぜてこそ、怪しさも紛らはして仕うまつらめ。いとわりなきわざかな」と、仕うまつりにくゝわび給ふ。中にも中將は、狹「萬の事よりも、更に戯にもまねび侍らぬものを」と奏し給ふを、帝「唯その知らざらむ事を、今宵始むべきなり」と宣はすれば、狹「敎ふる人だに侍らば、たどる〳〵も仕うまつるべきにこそ。各手をつくし給はむ中に、たど〳〵しう始め侍らむは、げに類なき世の例にやなり侍らむ」とて、ことの外に手も觸れ給はねば、帝「いと斯ばかりの心ばへとは思はずこそありつれ。殊の外にこそありけれ。年頃おとゞの思ひたるにも劣らずこそ思へ。斯ばかりの事をだに言ふ儘ならざりければ、まいて萬推量られぬ。よし〳〵言はじ」とまめだたせ給ふに、いと侘しくて畏りて取り寄せ給ひて、狹「物にまぜつゝ、自ら形のやうにまねび候ひなむ。獨はいとわりなきわざかな」と惱める氣色のをかしさにぞ、恨み果てさ

團扇など云々―人に煽がせて此處にて涼みて居よ
唐撫子―浮線綾の模樣
さうかん―金銀の泥にて模樣を畫きたる也とぞ
ゆゝしう思ひなり―「ゆゝしうも生ひなり」の誤なるべし
㊅狹衣御前にて笛を吹く、天童天降る、帝女二宮を狹衣に賜ふことを約す
太政大臣の―太政大臣の子息なる
源中將―狹衣
一の才―其人にとりて第一の長技

き給ひて、「苦しく覺え給はば、何かは參り給ふ。團扇などせさせてものし給へかし」と心苦しげに見やり聞え給ふ。さうかんの紅のひとへ、同じ御直衣のいと濃きに、唐撫子の浮線綾の指貫著給へるやうだい腰つき、指貫の裾までたを〳〵と、あてになまめかしう著ない給へり。ものの色合など、なべての同じものとも見えぬを、母「など斯う餘りゆゆしう思ひなり給ふらむ」とて、涙を一目浮けて切に見送らせ給へるを、御前なる人々ことわりなりと哀に見奉る。

内裏には、わざと節會なども無き世の徒然におぼさるゝには、雨雲さへ立ちわたりてものむづかしき慰に、春宮渡らせ給ひて御物語などあるなりけり。御前の廣廂に太政大臣の權中納言、左兵衛督、左大將の御子の宰相中將などやうの若上達部あまた侍ひ給ふに、源中將の參り給はぬは、いとゞしき五月雨の空の光なき心地せさせ給ひて、召すなりけり。帝「今宵の宴には、さぶらふ限の人、一の才を手の限惜まで、ひとつ〳〵試みむ」と宣はするを、春宮も、「興ある事」と宣はせて、さま〴〵の御琴ども奉り渡す。權中納言に

聲は、なほ類なし。有りつる御返いづれもをかしき中に、宣耀殿のは御手も心ことにをかしげにて、

宣　うきにのみ沈む水屑となり果てて今日はあやめのねだになかれず

とある氣色など、むかひ聞えたる心地して、らうたげにあはれ淺からねば、少し涙ぐまれ給ひぬ。その夕さりは、若さりぬべき隙もやと內裏わたりに出で立ち給ふに、いとゞ召さへあれば、參り給ふとて、まづ殿の御前に參り給へれば、今日はまだ見奉り給はざりつればにや、めづらしきにほひ添ひ給へる心地して、うち笑みて、つく〴〵とまぼられさせ給ふ。狹「內裏より召し候へば參り侍るを、中宮の御方に御消息や」と申し給へば、堀「例ならぬ樣に聞き奉りつれば參らむとしつるを、風にや、こゝにも惱ましうて暮し侍りぬるを、つとめての程にためらひて參らむ。暑き程は暫し出でさせ給ひても休ませ給へかしと思ふを、例の御暇や有りがたからむ」などぞ聞えさせ給へば、御いらへして立ち給ひぬ。狹「未しきに暑さ所せき年かな。何しに常に召すらむ」と呟き給ふを、母宮聞

うき—憂き、泥土
さりぬべき—宣耀殿女御に逢ふべき隙もあらん歟とて
殿の御前—父堀川大臣の居間
中宮—狹衣の異母姉妹
例ならぬ樣—病氣
つとめて—明朝
出でさせ給ひて—中宮が實家に下りて

ほのかに―狭衣が忍びて逢ひたる也
ねさへ―根さへ流れて、音さへ泣かれて
ほのかなりし―ちらりと見た計故か美しと思ひしに
いはがき―岩垣、言はぬ
水籠りながら―空しく焦れてのみ居よといふ事か
何時までかと―何時まで生きて居る此世ぞと
そゝぎたる―「そめたる」の誤歟
音羽の山には―古歌なるべし、「には」誤あるべし

めき給ふを、いかなる風のたよりにか、ほのかに見聞えさせ給ひけり。されど、いかでか思ふ樣にしもあらむ、御消息などだに、おぼろげならでは通ふ事難くぞありける。餘り待遠なるも戀しく思ひいでられ給ひて、

狭　戀ひわたる袂はいつもかわかぬに今日はあやめのねさへなかれて

一條院の姫宮の御けはひも、ほのかなりしかばにや、なべてならぬ心地せしを、いかで御かたちなどよう見奉らむなど、心に懸り給ひて、少將の命婦のもとに例のこまやかにて、中に、

狭　おもひつゝいはがき沼のあやめぐさ水籠りながら朽ちはてねとや

などやうにて數多あゝめれど、同じ筋なればとゞめつ。かやうに折につけたる言の葉などは散し給へど、心の中は、何時までかとのみ、この世はかりそめにものすさまじく思さるべき。丁子に黒むまでそゝぎたる御ひとへに、紅の御袴著給ひて、面杖つきて、池の菖蒲の心地よげに茂りたるを眺め遣り給ひて、狭「音羽の山には」など口ずさび給へる御

知らぬま―知らぬ間、沼
あやめ―菖蒲、様子

あるまじき事―無理な戀

五 狹衣所々の女の許へ文を贈る

などてか―譯の分る人は此美事な手紙に對して返事をせぬはあるまじ

なべての人の―凡人の作としても良くは思はれぬ

春宮に―春宮女御として羽振よきに

女 知らぬまのあやめはそれと見えずとも蓬が門を過ぎずもあらなむ

とぞ書きたる。いかなる好色者ならむと微笑みて、問はせ給へと、言はむやは。心疾き御隨身、そのわたりに硯もとめて奉りたるして、疊紙に片假名にて

狹 見も分かで過ぎにけるかなおしなべて軒の菖蒲のひましなければ

狹「今わざと參らせむ」と言はせ給ひて、狹「童の入らむ所たしかに見よ」と宣へば、隨身「半蔀高くあげ渡して人々あまた見え侍りつ」と申せば、何人ならむ、見知りたりつるにや、とばかりは思せど、かやうのうちつけ懸想などは、わざと御心にも入らず　あるまじき事をぞ、いかなる折にも御心に止め給ふべかゝめる。

又の日は所々に御文書き給ふ、色々の紙の、色はだへなどえならぬ、數多取り散して、墨こまやかに押し磨りつゝ書き給ふ。御手は、げになどてか、少しものの心知らむ人の徒にかへさむと見ゆるに、御歌どもぞ、なべての人の口つきにてだにをかしとも見えぬは、惡しう人のまねびたゝめるにや。左大將の御女、宣耀殿と聞えて、春宮にいみじう時

さばかりの者は—あの如き賤者は

戀路をば—狹衣自身戀路にうき身をやつしなれたれば

大きなる—大家にも小家にも軒のつまに菖蒲を插む也

なに事を—狹衣の從者としてさぞ滿足なるべし

若き人々—半蔀よりのぞける人人也

急ぎ書きて—歌を

とらへつ—はした者を

にとぶめられて、身のならむ樣も知らず屈まりゐるを見給ひて、狹「さばかり苦しげなるものを、かく言ふ」と制せさせ給へば、隨身「習にて候へば、さばかりの者は、なじかは苦しと思ひ候はむ」と申すを、戀路をば我御身にならひ給へれば、心憂くもいふ哉、と聞き給ふ。大きなるも小きも、つまごとに葺き騷ぐを、車より少しのぞきつゝ見過ぎ給ふに、言ひ知らず小くあやしき家どもにも、唯一すぢづつ置き渡すを、何の人眞似すらむと哀に見給ひつゝ、扇を笛に吹き給へる夕映の御貌、實に光る樣なるを、半蔀に集りて見奉り、めづる人々ありけり。御車など今はおとなしくなり給へれど、御供の御隨身などは、いと若うをかしげになべてならず見ゆるを、「あはれ、あれが身にてだに在らばや。なに事を思ふらむ」と、若き人々めで惑ひて、過ぎ給ふもなほ飽かねば、軒の菖蒲を一すぢ引きおとして、急ぎ書きて、はしたもののをかしげなるして追ひて奉る。後れて走る御隨身に取らせて歸るを、隨身「いづこよりとか申さむ。やがて御車に參り給へ」とてとらへつ。御覽ずれば、

が悟らぬなるべし
忍振摺―「陸奥の忍振摺誰故に亂れそめにし我ならなくに」
太政大臣の御方―堀川大臣第二の妻
つひの事ならめ―終には春宮のものになるならん
◎狹衣途中にて路傍の家なる女と歌を贈答す
いみじげなる―甚しく泥にまみれたるをいふ
いと多く持ちたる―菖蒲を
ねのみながるゝ―根のみ流るゝ、音のみ泣かるゝ
こひぢ―小泥、戀路

へる御名高くて、春宮のいとゆかしう思ひ聞えさせ給へるに、さこそはつひの事ならめと思したり。内裏の上も昔の御遺言思し忘れず哀に聞えかはさせ給ひながら、おぼつかなくて過させ給ふもくち惜しきを、さやうにて内裏住もせさせ給へかしと大臣にも聞え驚かさせ給ひけり。されどいとゞしき御有様を、なほ今少し盛にねび整ひ給ひてこそなど、おぼろげならず思しおきつる御有様なるべし。

かくいふ程に卯月も過ぎて、五月四日にもなりにけり。夕つ方中將の君、内裏より退で給ふ道すがら見給へば　菖蒲引きぬる賤の男が　ひまなく行きちがひ、もてあつかふ様ども、げにいかばかり深かりける十市の里の小泥ならむと見ゆる、足もとどものいみじげなるも知らず顔に、いと多く持ちたるも、いかに苦しからむと目とまり給ひて、

狹　浮き沈みねのみながるゝあやめ草かゝるこひぢと人も知らぬに

とぞいはれ給ふ。玉の臺の軒端にかけて見給へば、をかしうのみこそ思さるゝを、御車のさきに、顔なども見えぬまでうち群れて行きやらぬを、おどろ〱しき御隨身の聲々

中將の―狹衣が源氏宮を思ふも無理ならず

なずらへなる―源氏に劣らぬ女も他にあるべし

よしかたが―「隱蓑隱笠をも得てしがなきたりと人に知られざるべく」此歌拾遺集に平公誠とあり

板田の橋―「小墾田の板田の橋のくづれなば桁より行かむな戀ひそわぎも」萬葉集

この御かたち―源氏の容貌

音無の―「音無の川とぞつひに流出づる言はで物思ふ人の涙は」古今集

人の御癖―狹衣なるは狹衣の癖ぞと看過して狹衣の胸中を源氏

やむごとなき方添ひて、思ひかしづき聞えさせ給へり。十に四つ五つあまらせ給へる御かたち有様、見奉らむ人は、いかなる武士なりとも、和ぐ心はかならずつきぬべきを、中將の御心の中は理ぞかし。暫しは、さりともなずらへなる人ありなむと、頼もしく思されしを、かのよしかたが隱蓑を得給はねども、おのづからたかきも賤しきも尋ね寄りつゝ、板田の橋は朽つれど、いとけぢかき程にこそあらね、立ち聞きかいま見など、かしこく御心に入りたるまゝに、おぼつかなきは少けれど、この御かたち有様になずらふばかりのはあり難きわざにこそ、と思さるゝまゝに、いとゞ人知れぬ心の中に思ひこがれ給ふ樣、いといとほしう、音無の瀧とやつひになり給はむと見ゆるを、さすがにかう忍び紛はし給ふ程に、はれ〴〵しからず結ぼほれ給へる御氣色を、おとなび給ふまゝに、人の御癖にこそと、忍捩摺をえ知り給はぬなるべし。太政大臣の御方には、如何にも如何にもかやうの人おはせで、徒然に思さるゝまゝに、さるべからむ人の御女もがな、あづかりてかしづき立てむとぞ、明暮羨み給ふめる。源氏の宮の御かたち、かくすぐれ給

我も—狭衣自身り

天稚御子—狭衣は天人の假に天降り居るにやあらん、然らば何時天上より迎が來るかも知れぬと

㈢源氏宮の人柄

中將と同じ心に—實子の狭衣同樣に愛し養ふ

殿—狭衣の父

も、雲井をひゞかし、この世のほかまで澄み昇り、天地をも動し給ひつべきを、ゆゝしう親達も思しさわぎて、何事をも強に好みせさせ奉り給はねば、我もことに心をとゞめて、人に耳ならさせ給はずなどあれば、よろづに無心にものすさまじき人樣にやとぞ推測られ給へど、はかなき御言の葉、氣色など、うち見奉るより我身の憂も忘れ、物思はるゝこゝちして、うち笑まれ愛敬づき給へる御樣ぞたぐひなかりける。すべて何事も言ひつゞくればなか〳〵なり。よろづ珍しく例なき御有樣と、世の人のことぐさに聞えさすめれば、大殿などは、あまりゆゝしく、天稚御子の天降り給へるにや、今日や天の羽衣むかへ聞え給はむと、怪しう靜心なき御心のうちどもなり。

源氏の宮と聞ゆるは、故先帝の御末の世に、中納言の御息所の御腹に、類なく美しき女宮生れ給へりしを、今更の絆と心苦しう思し育みし程に、宮の三つばかりになり給ひし程に、院も御息所もうちつゞき隱れさせ給ひにしかば、いと心苦しくて、齋宮やがて迎へ取り聞えさせ給ひて、中將と同じ心に思ひ聞えさせ給ふ。殿もまことの御女よりも

いな淵の―「年をふる涙かいかに逢ふ事はなほいな淵のたぎまされとや」
心を盡し―相手の女の
山賤の―「あな戀し今も見てしが山がつの垣ほにさける大和撫子」
野をなつかしみ―「春の野に菫つみにと來し我ぞ野をなつかしみ一夜寢にける」
梵網經―「一見於女人、能失眼功德」
あやしきだに―つまらぬ奴さへ
書きまし―狹衣が古人に勝れり

の荒きまぎれ、もしは哀まさりぬべき夕暮、曉の鴫の羽搔につけなど、思ひかけず、おとづれたまふ折々もあるは、なか〳〵なるいな淵のたぎまさりつゝ、心を盡し給ふなめりかし。さこそまめだち給へど、唯引き過ぎ給ふ路のたよりにも、少し故づきたる山賤の垣ほの撫子には、おのづから目とまらぬにしもあらぬほどに、野をなつかしみ旅寢し給ふわたりもあるにや、いかなる折にか、梵網經にや一見於女人とのたまへると思し出づれば、車の簾うち下しつれど、側のひろう明きたるは、えたて給はぬなゝめりかし。さだかにはいかでかはおはせざらむ。男といふものは、あやしきだに、身の程も知らず、人に心をつくるわざなゝめりかし。光りかゞやき給ふ御かたちをばさるものにて、御心ばへ、まことしき御才などは、唐土にや類あらむ、この世には、今も昔も類なくぞものし給ひける。手などかき給ふさまも、古の名高かりける人々の跡は千歳ふれどもかはらぬに、見合せ給ふに、人々、なほ時にしたがふ業にや、今めかしうたをやかに、なまめかしう美しきさまは、書きまし給へりとぞさたせられ給ふめる。また琴笛の音につけて

この御心―狹衣の心

靜まりて―狹衣が

千夜を一夜―「秋の夜の千夜を一夜になせりとも詞殘りて雞や鳴きなむ」

入りぬる磯―「潮滿てば入りぬる磯の草なれや見らく少く戀ふらくの多き」

この御心に少にても苦しく思しめしぬべからむ事は、たがへ制し聞え給ふべきにもあらず。夢ばかりも哀をかけ給はむ人をば、いひ知らぬ賤の女なりとも、玉の臺に育まむ事を思しおきつれど、如何なるにか、御身の程よりはいたく靜まりて、この世はかりそめにあぢきなきものと思して、ありてふ人は知らまほしげにも思したらず、おぼろげならざらむ事に、御目をも耳をもとゞめ給ふべうもあらねば、少し物すさまじう心やましき御氣色なるを、口惜しく心もとなきものに、思ひ聞ゆる人々もあるべし。まれ〳〵一行も書きながしたまふ水莖のながれをば、珍しう措きがたき物に、かごとばかりの行くての一言葉をも、身にしみてをかしくいみじと心を盡し、まいて近き程の御けはひなどをば、千夜を一夜になさまほしう、鳥の音つらき曉の別に消え返り、入りぬる磯のなかなかなるに、心をつくす人々、高きもおくれたるも樣々に、おのづから爭でかはなからむ。それにつけても、いとゞ恨み所なくすさまじさのみまさり給ふべかゞめれど、いとなべてならぬあたりには、なだらかに情を見せ給ひて、をりにつけたる花紅葉、霜雪、雨風

かばかりにては—此年輩にては

思し怖ぢたる—狹衣を昇進させぬは

これをだに—二位中將の微官をさへ

あえかに云々—狹衣のひ弱きを心配して厭はしく思ふ樣なれど

第十六—狹衣を釋迦に比せる也釋迦は大通智勝佛在俗の時の第十六子也といふ

おほふばかり—「大空を掩ふ計の袖もがな春ちる花を風にまかせじ」

おとなび—狹衣が

二所—狹衣の父母

二十に今二つばかりや足り給はざらむ、二位中將とぞ聞ゆめる。なべての人だに、かばかりにては、納言にもなり給ふべきぞかし。されど、この御有樣の、あまりこの世のものとも見え給はぬに、よろづを思し怖ぢたるなるべし。これをだに母宮は、兒のやうなるものをと、あえかにいま〳〵しきまで思いたゝめれど、おしなべての殿上人にてまじらひ給はむが心苦しさに、內裏の上などの、切になさせ給へるなりけり。第十六我釋迦牟尼佛と、この世の光の爲と、げに顯はれ給へると、かたじけなく危きものに思ひ聞えさせ給ひて、雨風の荒きにも月日の光のさやかなるにもあたり給ふをば、痛はしくゆゝしきものに思ひ聞え給ひつゝ、おほふばかりの袖の暇なげに、あまりこちたき御志どもを、おとなび給ふまゝに、有り苦しくおぼす折々もあるべし。夜などおのづから紛れ給ふ夜な〳〵は、二所ながらうちも臥させ給はず、うしろめたき事を歎き明かさせ給へど、向ひ聞えさせ給ひぬれば、思ふまゝにも諫め聞えさせ給はで、唯うち笑みつゝ見奉り給へる御氣色ども、いひ知らず哀げなり。見苦しくあるまじき事をし出で給ふとも、

この御心—堀川大臣の心

前の齋宮—狹衣の母

御おとゝ—御妹

親ざまに—親分として

男君—狹衣

千人の—以下狹衣の勝れたるをいふ

たき御有様どもなり。二條堀川の邊に四町つきこめて、三つに隔てて造りみがきたまへる玉の臺に、北の方三人をぞ住ませ奉り給へる。堀川二町には、やがて御ゆかり離れず、故先帝の御妹 前の齋宮おはします。洞院には只今のおほき大殿と聞えさする御女、一條院の后の宮の御おとゝ、春宮の御伯母よ、世の覺うち〳〵の御有様も華やかに頼もしげなり。坊門には式部卿の宮と聞えし御女ぞ、中に心細げなる御有様なるべけれど、女君の世に知らずめでたき一人生み奉り給へりけるを、内裏に參らせ奉らせ給ひて、このごろ中宮と聞えさす。今上一宮さへ出でおはしましける御いきほひ、中々すぐれてめでたく、行末頼もしき御有様なり。かゝる御中にも、齋宮は親ざまにあづかり聞えさせ給ひにしかば、やむごとなくかたじけなき方も、御顔かたち心様、なべてならず思ひ聞えさせ給へる御方にしも、かくすぐれてこの世のものとも見え給はぬ男君さへ唯一人ものし給ふを、いかでかは世の常には思ひ聞えさせ給はむ。千人の中にだにいと斯からむは、親の御心地にも、いかでかはすぐれて思しかしづかざらむと見えたり。この頃御年

—胸中の苦悶
一ついもせ—同胞の兄妹
思し疎まれ—源氏の宮に
大殿宮—狹衣の父母
あるまじき事—源氏の宮と夫婦になるは然る可らざる事
㊂狹衣の一家、狹衣の人に
堀川の大臣—狹衣の父
うち代り—當帝が故院になり代りて

思ひ侘びほのめかしてもかひなきものから、哀に思ひかはし給へるに、思はずなる心のありけると思し疎まれこそせめと、大殿、宮なども類なき御志といひながら、この御事はさらばさてもあれとも世に任せ給はじ、世の人の聞き思はむ事も、ゆかしげなく、けしからずもあるべきかなと、とざまかうざまに世のもどきになりぬべき事なれば、あるまじき事に深く思し取るにしもぞ、あやにくに心は碎け勝りつゝ、つひに如何なる樣にか身をなし果てむと心細き折がちなり。今始めたる事にはあらねど、なほ世の中にさらでもありぬべかりける事は、餘りよろづすぐれ給へらむ女の御あたりには、實の御兄ならざらむ男は、いみじうとも、睦じうこそ生したて給ふまじきわざなりけれ。

この頃堀川の大臣と聞えて關白し給ふは、一條院當帝などの一つ后腹の二の御子ぞかし。母后もうちつゞき帝の御筋にて、いづ方につけても、おしなべて同じ大臣と聞えさするもいと忝き御身の程なれど、何の罪にか凡人になり給ひにければ、故院の御遺言のまゝに、うち代り、帝たゞこの御心に世を任せ聞えさせ給ひて、いとあらまほしうめで

例の—狹衣が前前より源氏の宮に懸想せる也
花こそ—「句ふより春の暮れ行く山吹の花こそ花の中につちけれ」定家の歌
くちなし—「山吹の花色衣主や誰とへど答へずくちなしにして」古今の歌
言の葉は—詞を山吹の葉にかけたる洒落
たつ苧環—「谷深みたつ苧環は我なれや思ふ心のくちてやみぬる」
よしなしごと—源氏の宮に懸想の事
室の八島—「いかでかは思ありとも知らすべき室の八島の烟ならでは」
烟のたゞずまひ

くまさりて見え給ふを、例の胸塞りまさりて、熟〻とまぼられ給ふに、源「花こそ花の」と取分き給ひて、山吹を手まさぐりし給へる御手つきの、いとゞ持囃されて、世に知らず美しげなるを、人目も知らず我身に引き添へまほしく思さるゝぞいみじきや。狹「くちなしにしも咲きそめけむ契こそくちをしけれ。心の中いかに苦しかるらむ」と宣へば、中納言の君、「さるは言の葉は多く侍るものを」といふ。

狹いかにせむ言はぬ色なる花なれば心のうちを知る人ぞなき

と思ひつゞけられ給へど、げに人も知らざりけり。狹「たつ苧環の」と、うち歎かれて、母屋の柱に寄りゐ給へる御貌ぞ、なほたぐひなく見え給ふに、よしなしごとにより然ばかりめでたき御身を、室の八島の烟ならではと思しこがるゝ様ぞ、いと心苦しきや。さるはこの烟のたゞずまひ、知らせ奉らむ事も及なく、いかならむ便にてなど思し煩ふにはあらず、唯二葉より露ばかりへだつる事なく生ひ立ち給ひて、親達を始め奉り、よその人々、帝春宮も一つ思しめしおきたるに、我は我とかゝる心のつき初めて、

㊀狹衣中將源氏宮を訪ふ、狹衣の煩悶
少年の春―「背ㇾ燭共憐深夜月、踏ㇾ花同惜少年春」白居易の句
松にとのみ―「夏にこそ咲きかゝりけれ藤の花松にとのみも思ひける哉」定家の歌
獨見給ふ―狹衣が
源氏の宮―狹衣の姉妹分

狹衣物語

巻第一之上

少年の春は惜めども留まらぬものなりければ、彌生の二十日餘にもなりぬ。御前の木立なにとなく青み渡りて木暗きなかに、中島の藤は松にとのみ思はず咲きかゝりて、山郭公待ち顔なるに、池の汀の八重山吹は、井手のわたりに異ならず見渡さるゝ、夕映のをかしさを、獨見給ふも飽かねば、侍童のをかしげなるして、一枝折らせ給ひて、源氏の宮の御方に持て參り給へれば、御前には中納言中將などやうの人々計侍ひて、宮は御手習し繪などかきすさびて添ひ臥させ給へるに、狹「この花の夕映こそ常よりもをかしう見え侍れ。春宮の、盛には必ず見せよと宣はするものを」とて、うち置き給ふを、宮少起上りて見おこせ給へる御まみ、つらつきなどの美しさ、花の匂藤のしなひにも、こよな

一　帝禪位の志、堀川大臣の諫言。女二宮腹の若宮春宮に立てられんとす。……四八四
二　天照大神の御告により、狹衣受禪の事決す。……四八六
三　世間の驚き。狹衣齋院を訪ひて告別す。……四八九
四　狹衣受禪。……四九四
五　一品宮入内せず、養へる飛鳥井腹の姫君を參らす。……四九五
六　宰相中將の妹君、懷胎によりて入内延引。……四九七
七　月夜狹衣齋院と歌贈答。……四九八
八　一品宮出家の心構。……五〇〇
九　宮の女御(宰相中將の妹)入内、藤壷に居る。……五〇〇
十　人々爭ひて娘を入内せしめんとす。……五〇二
十一　賀茂祭の前、狹衣人々に扇を贈る。……五〇四
十二　宮の女御皇子を生む。狹衣堀川院に皇子を見る。……五〇六
十三　一品宮出家。宮の女御殊寵を受く。……五一二
十四　處々の祭の行幸。……五一三
十五　女二宮腹の一宮元服。飛鳥井腹の姫君裳著。藤壷腹の二宮袴著。……五一七
十六　一宮嵯峨に行く。狹衣竊に女二宮に消息す。……五一九
十七　大納言長女を一宮に奉らんとして聽かれず。……五二五
十八　一品宮を春宮など戀望すれども許されず。……五二七
十九　道成太宰大貳になりて筑紫に下る。上京して故姫君に對する過を後悔す。……五二九
二十　狹衣、故飛鳥井姫君の日記の畫卷を得て悲む。……五三〇
二十一　狹衣かの畫卷を經紙にすかせて經文を書寫し、常磐の家を寺にして人々の菩提を弔ふ。……五三七
二十二　嵯峨院御病、狹衣の御見舞。狹衣女二宮に對面。……五三八

九 狭衣、致仕の大納言の娘を覗き見、興さめて歸る。……四〇五
十 狭衣、宰相中將の妹を挑む。中將、狭衣と閑談。……四〇六
十一 院の女御、女宮を產む。ついで中宮となる。……四一一
十二 春宮、狭衣、宰相中將の妹を挑む。……四一三
十三 狭衣、宰相中將を介して其母を挑む。中將母に妹を狭衣に嫁せしめん事を勸む。……四一九
十四 宰相中將の母、病の爲に尼になる。妹を狭衣に嫁せしむるに決す。……四二三

卷第四之中

一 宰相中將の母、龜山の麓の寺に移る。狭衣、見舞に行きて姫君の臥せる廊に宿る。……四二六
二 母君逝去。姫君を案じて、狭衣僧に祈禱を命ず。……四四〇
三 狭衣、喪中の宰相中將を訪ふ。……四四四
四 新築中なる三條邸。狭衣の熱心なる經營。姫の悲歎。……四四五
五 女院の甍御によりて姫君引取の事延引。姫君舊邸に還り住む。……四四八
六 狭衣、雪夜姫君を訪ひ、遂に竊に伴ひ出づ。……四四九
七 狭衣姫君を伴ひ歸る。辨の乳母殿中の華麗なるに驚く。……四五八
八 堀川夫妻姫君を歡待す。狭衣益、一品宮に疎し。……四六七
九 正月粥杖の祝。狭衣、宰相の妹と語る。……四七二
十 狭衣なほ齋院を思ひ切り得ずして懊惱す。……四七七
十一 一品宮やうやく飛鳥井腹の姫君を愛せず。……四七八
十二 狭衣、齋院に參る、胸中の煩悶。……四八〇

卷第四之下

一　堀川大臣狹衣の一品宮に疎きを責む。狹衣逃げて齋院の方に隱る。……三一八
二　狹衣飛鳥井姬君の爲に法會を修す。其夜飛鳥井の舊宅に假寢して姬君を夢見、又遺題の歌を見る。……三二三
三　賀茂祭の用意。齋院賀茂川原の御祓。……三二六
四　狹衣歌を齋院に贈る、齋院省みず。……三三二
五　賀茂祭の當日の樣。其夜狹衣齋院を見る。……三三三
六　狹衣前齋院を世話して入內せしむ、弘徽殿女御と稱す。……三三八
七　弘徽殿女御懷胎。……三四二
八　宮の中將、己が妹を狹衣に媒せんとす。……三四二
九　嵯峨院の法華八講、狹衣女二宮に心緒を語る。……三四七
十　神樂の夜狹衣明星を謠ふ。……三五一
十一　狹衣出家の志を決し、竹生島詣と稱して家を出でんとす。……三六四
十二　暇乞に齋院に參りて琴を彈く。神前鳴動の奇特。……三六五

卷第四之上

一　賀茂の神託に驚きて堀川大臣狹衣を追留む。……三七五
二　狹衣警固の嚴しきに苦む。女二宮と歌の贈答。益々一品宮に疎し。……三八〇
三　堀川大臣賀茂詣。……三八三
四　狹衣、若宮を伴ひて嵯峨院に參る。女二宮方にて扇に歌を書く。……三八六
五　院の女御、もとの源氏宮の邸に棲む。……三八九
六　齋院院の女御と歌の贈答。……三九〇
七　狹衣櫻を折りて齋院を訪ふ。蹴鞠管絃の催。……三九五
八　狹衣、歸路に宰相中將の家を過ぎて琴の音を立聞し、故式部卿宮の北方を覗き見る。……四〇二

三　雪の夕、狹衣繪をかきて若宮を慰む。女二宮の感傷。…………二二八
四　女二宮狹衣の繪を見て悲む。…………二三三
五　今姫君を入内せしむべき洞院の計畫、狹衣に後見を賴む。…………二三四
六　狹衣、今姫君を見て其痴呆なるに驚く。母代より飛鳥井姫君の消息を聞く。…………二四〇
七　狹衣、常磐尼を尋ねて、飛鳥井姫君と其子との消息を聞く。…………二四九
八　宰相中將、今姫君の許に通ふ事露れ、入内の沙汰やむ。今姫君出家。…………二五九

卷第三之中

一　狹衣飛鳥井姫君の遺腹の子を見んとて、一品宮の方に忍び入る。權大納言に見咎めらる。…………二六七
二　權大納言狹衣と一品宮との浮名を言觸らす。堀川大臣二人の婚を結ばん事を乞ふ。狹衣の迷惑。…………二七〇
三　狹衣、一條宮にて納涼。…………二八〇
四　狹衣、中納言のすけに托して文を女二宮に贈る。すけ女二宮の書棄を狹衣に贈る。…………二八二
五　狹衣、一品宮を娶る。女二宮を戀ひて一品宮に冷淡なり。父母の憂慮。…………二九〇
六　狹衣、一品宮に行きて飛鳥井腹の姫君を見る。一品宮、姫君が狹衣の實子なるを悟る。夫婦の中益疎し。…………三〇〇
七　若宮女二宮腹姫君(飛鳥井腹)袴著の祝。…………三〇九
八　若宮堀川邸にのみ在り、前齋院の徒然。…………三一四
九　狹衣飛鳥井姫君の緣によりて小宰相に親み、一品宮に疎し。…………三一六

卷第三之下

二　女二宮の病重る。出家。病やゝ快し。……一五八
三　狹衣月夜二宮の方に忍び入る……一六一
四　源氏宮、雪の山つくらせて見居るを狹衣隙見す。……一六八
五　道成上京して、狹衣に飛鳥井姫君の事を語る。……一七五
六　狹衣、道成の持てる扇を取寄せて見る。……一七七
七　女二宮腹の若宮の五十日の祝に帝若宮を見る。……一八〇
八　狹衣猶女二宮を思ひ切らず。女二宮の迷惑。……一八三
九　帝病の爲に出家せんとす。女三宮を堀川大臣に托して狹衣に妻はせんとす。狹衣の迷惑。……一八四
十　帝讓位出家。嵯峨の閑居。女二宮の同居。今上卽位。……一八八
十一　源氏宮入内の噂。狹衣の悲。……一八九
十二　狹衣源氏宮を訪ひて琵琶を彈く。……一九〇
十三　一條院崩御。……一九三
十四　源氏宮神託によりて賀茂の齋院になる。女三宮伊勢の齋宮になる。……一九四
十五　狹衣源氏宮元の大貳の家に移らんとす。……一九七
十六　齋院移居の日、狹衣再び齋院に情を訴ふ。狹衣遁世の志。……二〇一
十七　母宮狹衣の物思はしげなる獨棲を悲む。狹衣子の愛にひかれて遁世の志を遂げず。……二〇五
十八　狹衣高野山に上りて、飛鳥井姫君の所緣の僧に逢ふ。……二〇八

卷第三之上

一　狹衣再び彼の僧に逢はんとして得ず。出家の望。飛鳥井姫君の爲に法會を營む。……二一一
二　狹衣、前齋院（女一宮）と若宮（女二腹、實は狹衣の子）とを預る。……二一六

七　狹衣夢見の惡しきを氣遣ひて飛鳥井姫君に手紙を遣る。……八〇
八　飛鳥井姫君欺かれて筑紫行の船に乘る。……八三
九　姫君式部大輔の心に順はず、大輔姫君をもてあます。……九一
十　姫君を失ひたる狹衣の悲嘆。……九七
十一　飛鳥井姫君蟲明の瀬戸にて入水す。……一〇三

卷第二之上

一　道季飛鳥井姫君投身の噂を狹衣に語る、狹衣の悲嘆。……一〇五
二　狹衣大納言に昇進。帝女二宮降嫁の事を急ぐ。……一〇七
三　狹衣、中納言の內侍を訪ひて不に女二宮に逢ふ。……一一三
四　翌朝母宮來り、女二宮の有樣を見て昨夜の始末を悟る。……一二〇
五　狹衣、中納言內侍に女二宮への文を托す。……一二三
六　源氏宮と女二宮とに對する狹衣の煩悶。……一二九
七　女二宮降嫁の準備。母宮密夫の狹衣なるを知らずして嘆く。女二宮懷胎。母宮の憂愁。……一三三
八　母宮計りて女二宮を宮外に移す。……一三六
九　狹衣、女二宮の事を憂ひて中納言のすけを語らふ。……一四一
十　母宮病氣。乳母等母宮懷胎を言ひなす。……一四三
十一　狹衣、女二宮母子の里居を訪ふ。……一四四
十二　女二宮男子を生む。母宮密夫の狹衣なりしを悟る。……一五一

卷第二之下

一　母宮薨去。狹衣弔に行きて中納言のすけと語る。……一五五

狹衣物語 内容細目

卷第一之上

一 狹衣中將、源氏宮を訪ふ、狹衣の煩悶。……一
二 狹衣の一家、狹衣の人柄。……四
三 源氏宮の人柄。……九
四 狹衣、途中にて路傍の家なる女と歌を贈答す。……一二
五 狹衣、所々の女の許へ文を贈る。……一四
六 狹衣御前にて笛を吹く、天童天降る。帝女二宮を狹衣に賜ふ事を約す。……一七
七 堀川大臣夫妻、狹衣の身の上を憂慮す。……二五
八 狹衣、源氏宮を訪ひて戀を訴ふ。……三一
九 堀川大臣夫妻狹衣を訓戒す。源氏宮を春宮に奉るべき豫定。狹衣の煩悶。……三六
十 狹衣春宮に參る。……四三
十一 狹衣、途に飛鳥井姫君の拘引されて行くを救ひ、其家に宿す。……四五
十二 飛鳥井姫君乳母と薄命を歎く。陸奥に下らんとして果さず。……五五

卷第一之下

一 狹衣源氏宮と母宮と碁打つ處へ行きて母宮と語る。……五九
二 狹衣源氏宮よりの歸途飛鳥井姫君を訪ふ。……六二
三 堀川大臣の娘今姫君洞院に養はれて榮華の身となる。……六五
四 狹衣中納言に任ぜらる。今姫君を見る。……六七
五 飛鳥井姫君の乳母狹衣を厭ふ。姫君懷胎。……七四
六 式部大輔飛鳥井姫君を奪ひて筑紫へ下らんとす。……七七

狹衣物語目錄

卷第一之上……一
卷第一之下……五九
卷第二之上……一〇五
卷第二之下……一五五
卷第三之上……二三一
卷第三之中……二六七
卷第三之下……三一八
卷第四之上……三七五
卷第四之中……四三六
卷第四之下……四八四

らしむるものあらん。而も其の變化に富みて錯綜の中統一の用意を缺かざる結構の妙に至りては、當時幾多の物語中に傑出せるものと謂ふも、蓋し溢美に非ざるべし。

今本篇を飜刻するに方りては、流布の十册本を以て底本とし、參照するに古活字八册本（刊年未詳）を以てし、畫は十册本に插めるものの全部を縮寫して之を載せたり。

本書の註釋は、紹巴法橋の「下紐」以外未だ見る所あらず。而も「下紐」の簡疎なる、到底讀者をして朶頤せしむるに足らず。よりて今之を擴めて本書の頭注を成せり。而も素匆忙の餘業に出でたるもの、蓋し批謬を免れざるべきは、深く讀者に謝する所なり。

大正二年十一月　　　　校訂者　武　笠　三

緒　言

「狹衣物語」四卷は、平安朝の半期以後、源氏物語を粉本としてあらはれたる群小說中の一にして、狹衣大將といへる優美限りなき貴公子の、源氏宮といへる佳人に對する戀の煩悶を以て骨子とし、此の一波他の萬波を捲き起して、以て一篇の脚色をなせり。作者につきては古來諸說あり。或は紫式部の女大貳三位なりとし、或は其の妹辨の局なりとし、或は後朱雀天皇の皇女禖子内親王に仕へたる宣旨といへる女なりと傳ふ。其の大貳三位とする說の非なることは、故友藤岡博士、「國文學全史平安朝篇」に於て明に之を辯ぜり。辨の局說と宣旨說と其の孰れが眞なるべきかは、未だ之を確むるに由なし。

此物語が一意「源氏」を模刻せるものなる事は、苟くも之を一讀過する者の直に發見する所にして、今試みにその一二を拾へば、狹衣の源氏の後身たるは更にも言はず、飛鳥井姫君は「源氏」に於ける夕顏なり、女二宮腹の若宮は「源氏」の冷泉院なり、又此の今姫君は卽ち彼の近江君なり。其の他踏襲の痕の隨處に著しき、或は本篇をして依樣葫蘆を畫くの謗を免れざ

LIBRARY
MAR 12 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

PL
790
S3
1930

狹衣物語

全

PL
790
S3
1930

Sagoromo monogatari
Sagoromo monogatari

G
PL
790
S3
1930
'R' CARD
FEB 19 1969